KING

キング



十一月號

農學博士 横山桐郎先生著



蟲の世界を探ねて

四六判四百余頁美装函入
實物寫眞及挿圖八十餘面
定價二圓二拾錢（送料十二錢）

ファブル昆蟲記にも比すべきトテモ面白い近來の名著！

著者は、本邦昆蟲學界の最高權威で、その流麗の文亦優に一家を成す。本書はかゝる著者の驚異に滿ちた探檢旅行記であつて、しかも蟲についての觀察から生物界に共通の眞理を誰にも解り易く、とても面白く書いた素晴しい名著である。

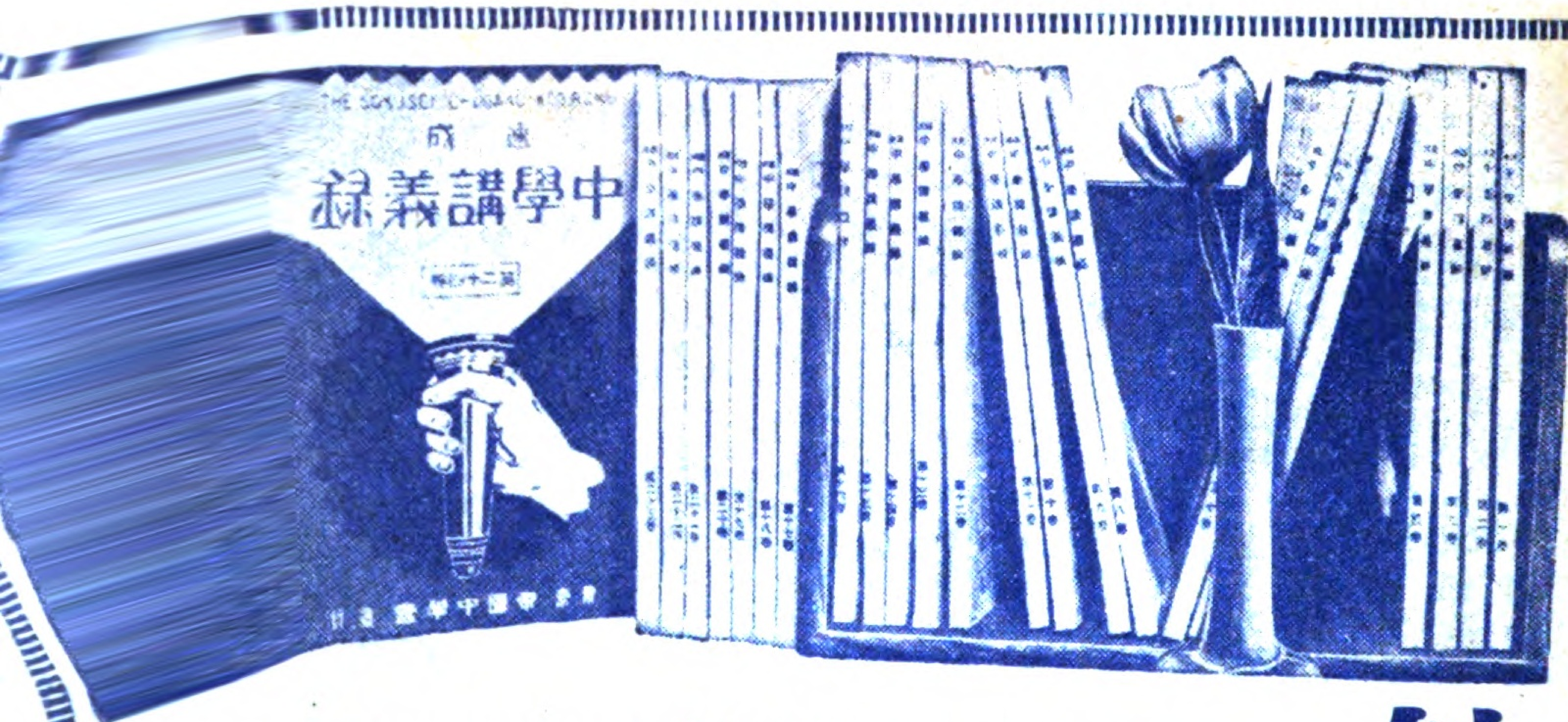


最近の著者

（目次の一部）▼昆蟲の感覺▼ジガ蜂の求婚▼湖畔の昆蟲景觀▼夜間活動する惡食家▼クワガタ蟲の濡れ場▼西湖から河口湖へ▼科學者の淋しみ▼河口湖のゲンゴロウ採り▼雌だけで子を産むあぶらむし▼蟲の世界の兩性問題▼蚕の夫婦の研究▼人間は蟲の反對▼蟷螂の戀▼閻魔こほろぎの戀▼ある蛾の戀▼蝶の戀▼蟲界樂壇の代表者▼名手揃ひのコホロギ科▼南洋渡來の青松蟲▼秋のいろいろの蟲の研究▼蟲屋となるの記▼寄生蟲小觀▼大蛇や猛獸を食ひ殺す軍隊蟻▼小猫のやうに人間を砕く印度産の大蛇＝外多數

發賣前より註文殺到!!

發行所 東京本郷 大日本雄辯會講談社（振替口座東京三九三〇番）



勉學の絶好期は來る!!

最も優れた「中學講義」と定評のある!!

▼この講義錄に依つて獨學せよ!!

燃ゆるやうな希望を抱きながら、いろ／＼な事情で中學へ行けず、希望を達する事の出來ない諸君の英才を惜しみ、遠藤博士はいろ／＼研究の結果、僅か一ケ年！職業の餘暇に勉强しながら完全に中學の全科を修得する道を拓かれました。

▼即ち「速成中學講義錄」がそれです!!

講義は最も平易にして覺え易く學費が僅少ですむこの講義錄の見本は今スグ「キング」見た見本送れとハガキで申込次第詳しい内容見本無代送呈す

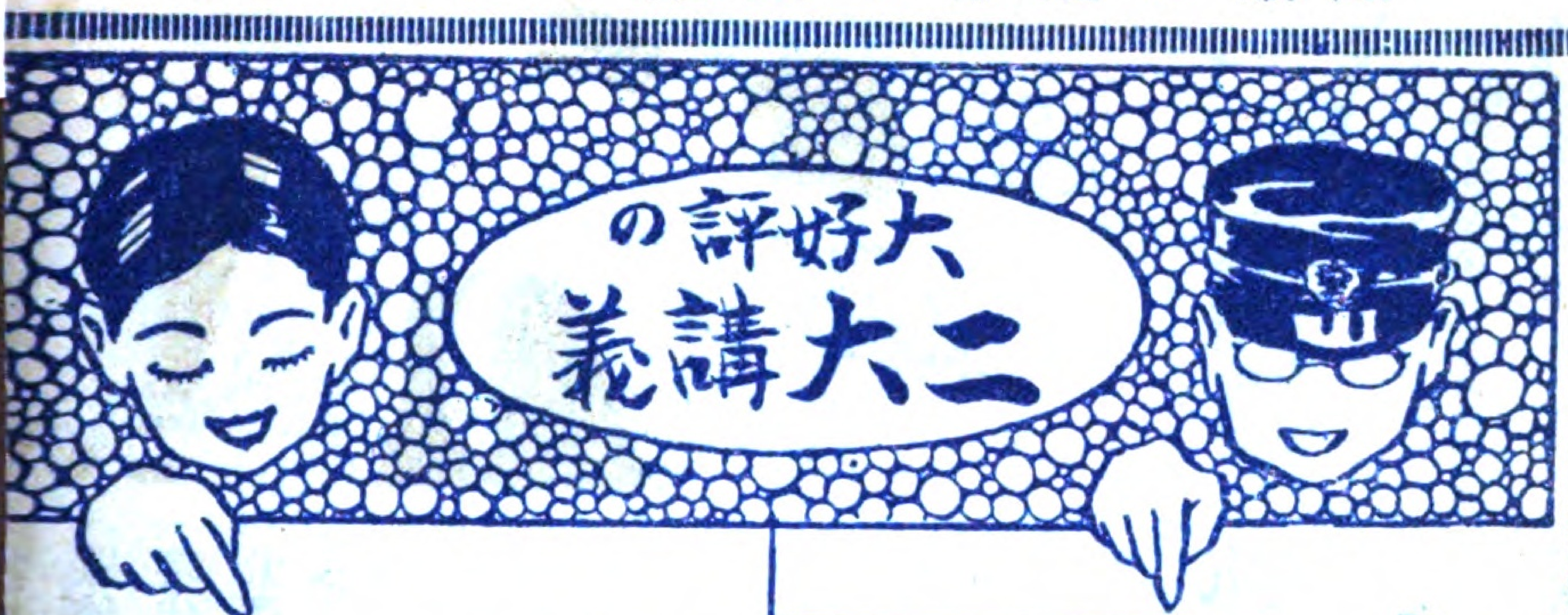
會長 巣鴨中學校々長 文學博士 遠藤隆吉先生

東京市神田區三崎町
帝國中學會
（電話九段一五六七番）

合理的で 興味の深い
ペン字速成上達法!!

近頃では事實あらゆる方面でペンを使ふ方が多いのでペン字の練習はいよ／＼急務となつてきたが、今評判の透寫式練習法とは他に類のない新式奇拔な新法にして短日月で日本字、英字、數字等すべてのペン字に熟達し得る珍しい通信教授である。詳細は今スグ「キング」で見た。説明書送れと葉書に書いて東京市神田區三崎町・ペン習字研究會へ申込めば説明見本無代にて送呈す。

知識は運命を支配す　（ジウベナル）



立身成功の基を築く！

立派な實力が短日月で得られる!!

速成
實業
講義

小學校を出て銀行、會社、商店等各方面の實務に從事せんとする諸君よ！諸君が立身の基を築く立派なる實力を短日月の勉强で容易に習得できる最新の實業講義！講義は極めて平易にして親切！詳細は今スグ「キング」で見たと東京市神田三崎町＝帝國實業學會へハガキで申込次第内容見本無代送呈す

我國唯一の

手紙文通信學校!!

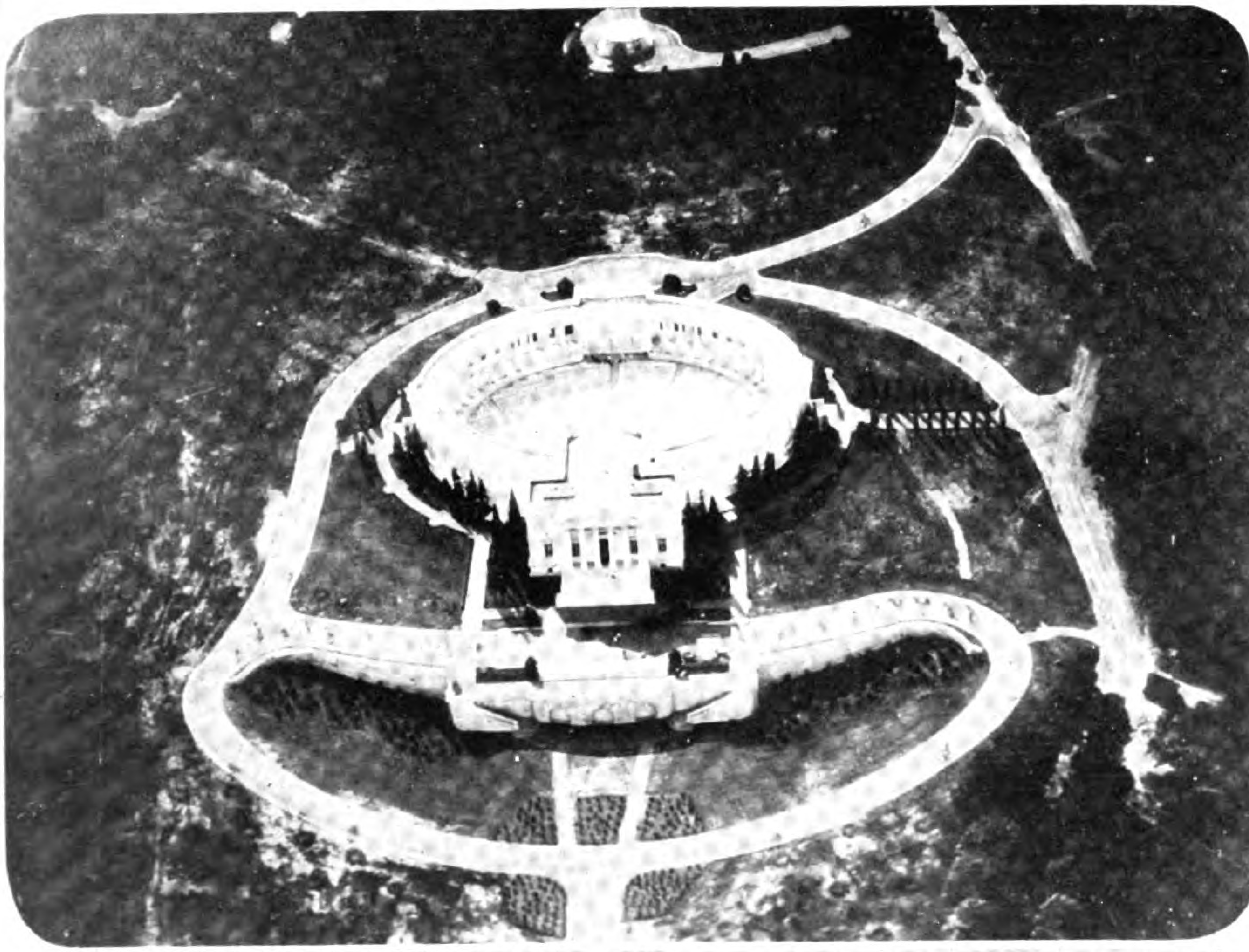
實際手紙が下手では啞も同樣でかきたい事も充分かけず遂々義理を缺いたり亦先方の感情を害したりしてとんだ失策をする事が數多い。本會は創立以來十五ヶ年の深甚なる經驗により短日月で手紙上手となる（速成通信教授）を開始した。今スグ……「キング」で見たとハガキで東京市神田區三崎町＝手紙研究會へ申込み次第說明見本無代送呈す

創立十五週年記念!!
大特典提供



モルトケ將軍　（世界英傑畫譜　其の十一）　本文參照

素晴らしい演技場



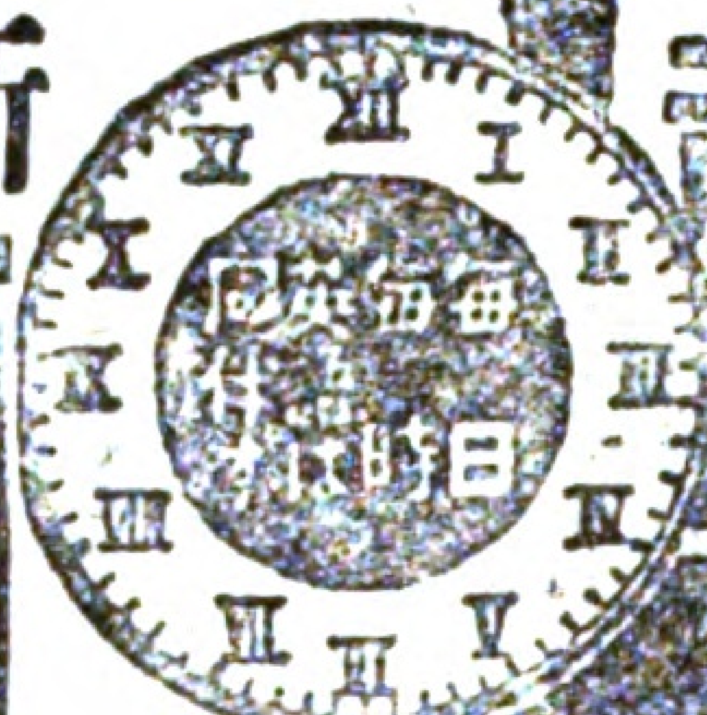


（上）見るからに壯麗を極めた此の白亞の建物は米國ワシントン市外に在るアーリントン演技場である。（下）同じく加州ヘリツクス山上の演技場で海拔千四百尺の高所に在る。兩者共に飛行機から撮影したもの。永久的の設備が施してあつて毎年觀衆の血を湧かせてゐる。

キング讀者の
新入會歡迎

研究社

英語通信講座



○キングといふも英語モダンといふも英語然しどう書くか？
○英語を知る人は世界が廣い人生が明るい、希望は無限だ！
○況んや現代到る處の門扉は先づ英語を知る人に開かれる！

これなら——！
必ず解る

▽ラヂオの岡倉先生初め諸大家の明快な講義
▽十五ケ月で必ず中學卒業專檢合格の實力に！
▽試みに即刻獨學案内附内容見本を請求あれ

○英語ばかりは混合講義錄では獨學不可能、專門本講座に信賴せよ
○十萬を超える學友と整然たる日課表で毎晩二時間十五ケ月勉强せよ
○否！一ケ月で身邊の英語が分る愉快さは知る人のみぞ知るである！

東京市麴町區富士見町六丁目
研究社通信學部
振替口座東京三〇八五番

前衆議院書記官長
前代議士　林田龜太郎先生遺著

明治大正政界側面史

新日本建設の偉人傑士大活躍！

歷史の裏面には、世に知られない重大な事實が隱れてゐる。この事實を究めねば歷史の眞相は解らない。明治維新後の政界は藩閥、軍閥、黨閥、財閥の葛藤で終始してゐる。立憲政治の裏面は閥族の魔手で操られ、閥族は元老策士の政策に盲從した。この因習は今日普選になつて取去られたか。——曾て元老功臣の間に介在して政界の機密に參し、政界通の第一人者たる雲梯氏が過去政界の表裏を大膽赤裸々に描いたのが本書である。此の如く痛快なる著書又となし。氏畢生の大著たるのみならず永遠不朽に傳ふべき我が憲政史上の大文獻である。

忽十七版



〔附錄〕雲梯挿話

伊藤公と名妓鹿の子、新喜樂の出來等十七篇、何れも天機洩らすべからざる元勳大人物のエピソード、この偉人にこの風流。この名士にこの逸事、何人も一讀驚嘆の祕話祕聞！

四六判布裝函入（口繪寫眞入）
定價參圓（送料十四錢）
東京本郷駒込坂下町
大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

申込次第圖書目錄進呈

君よ知るや南の國
樹々はみどり――



加藤武雄先生著

四六判 布裝美本 定價壹圓八拾錢 送料十錢

小說 君よ知るや南の國

あゝ歌は悲し、君よ知るや南の國、亡き母の美聲と情熱と天分をそのまゝ惠まれたまり子は、亡き父の遺してくれた紹介狀を頼みに、我が樂壇に時めく內山邦夫を遙々訪ねていつた。――然し期待は裏切られ、すげなく突放されて了つた。亡き母と內山との間に祕められた謎の糸は、まり子に解くべくもない。天涯頼る所もないまり子は、あらゆる苦悶の後、遂に樂壇の明星と謳はるゝに至つたが、哀れ見よ！ 君よ知るや南の國！ 歌は悲し名曲の祕密

東京本郷 振替東京三九三〇

大日本雄辯會講談社

△活殺自在（見本御請求は必らず雜誌名御記入の上御申込みを希ふ）

心身鍛練 交靈感應 氣合術 通信講習

見本進呈

附、古往今來百般靈術悉く詳解

◎心身鍛錬活殺自在、判斷記憶斷行力養成法、無病長壽術、靈動法、大本教、神降しの眞法、一喝萬病救治法、金剛力不死身術、刺針術、鐵火術、不動金縛り法、刀の刄渡り、火渡り法、護身白刄取り法を始めあらゆる百般の靈術を會得せしむ希望者には御申越次第見本送呈す。

東京市京橋區京橋電車交叉點前（日活前）

天玄洞本院

◎最後に來れ!!

無代進呈 ワキガ藥

●斷じて從來アリフレたるが如き一時押への誇大廣告の賣藥類に非ず今回始めて創見せられたる的確藥なり如何なる頑固のワキガも救治せしむ論より證據、手術、藥塗、服藥等にても根治せぬ人は雜誌名記入の上御申越次第右の發見藥無代にて祕密に送呈す（業務擴張の爲左記へ移轉）

東京市京橋區常盤町一番地

グランド社

谷脇素文畫伯著

川柳漫畫

うき世さま〴〵

天下一品の快著

集めも集めたり、名漫畫名川柳人事百般、浮世の表裏、人情の機微……悉く漫畫化して餘すところなし。



畜生といはれる程のうつくしさ（劍花坊）





もう一度出來ない顔で兒をあやし（一著）

四六判・三色木版刷十數頁入
名漫畫千五百餘枚挿入
定價 貳圓參拾錢 送料十錢

見て面白い、讀んで面白い、到る處大評判！

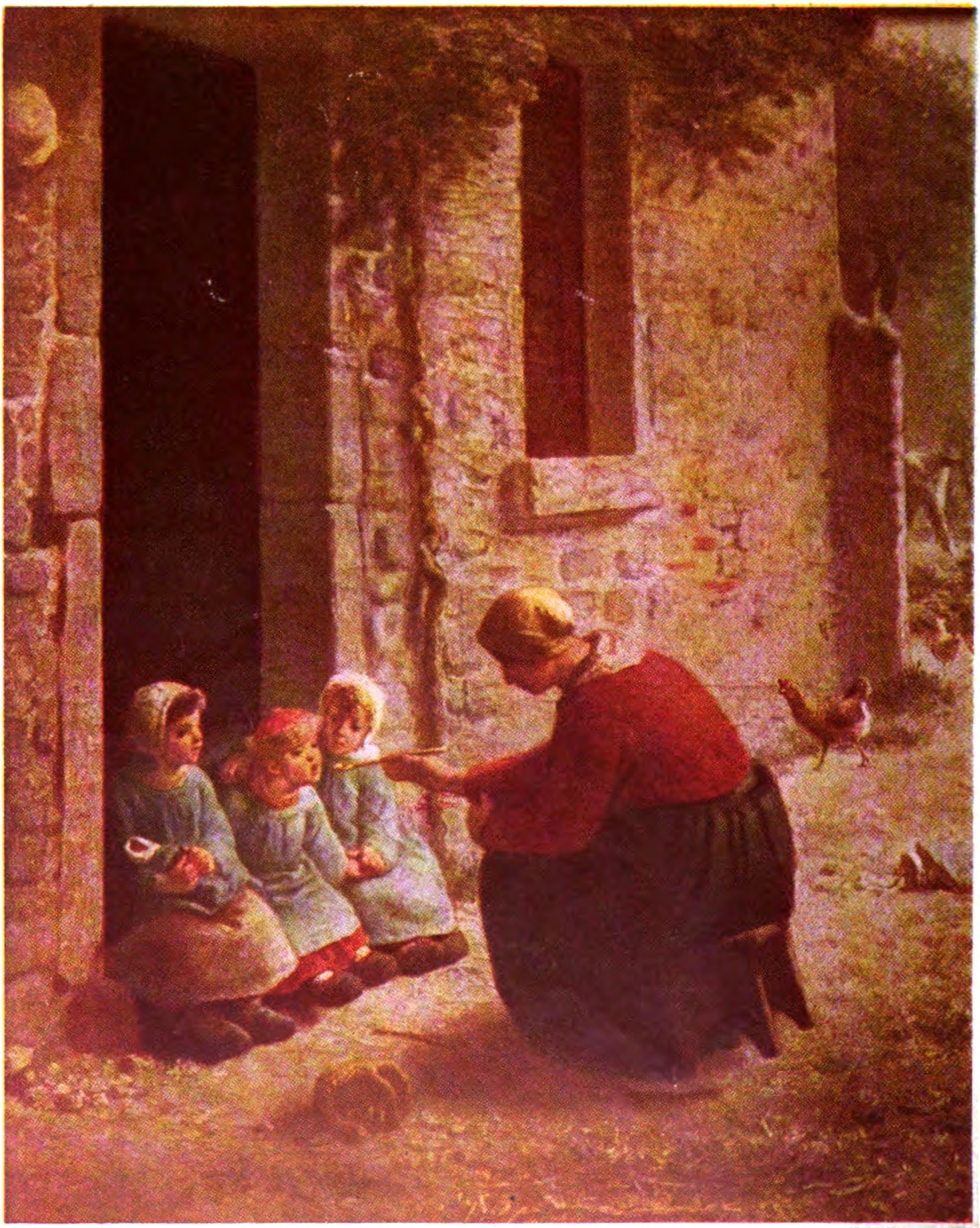
重版又重版素敵な賣行

69版

◇發行所◇ 東京本郷駒込坂下町 振替東京三九三〇 大日本雄辯會講談社◇

御申込次第圖書目錄進呈

母の慈愛



麗かな小春日和――。いとし子は雛鳥の様に並んで母の哺みを待つてゐる。母も無心、子も無心。そこには唯一脈の愛の連鎖があるばかりである。父はと見れば裏の畑に餘念がない。此の家は何時頃建つたのであらう。壁も古びた。だがそこには永劫に爭ひもなければ惱しみもない常春の殿堂である。おゝ愛の力強さ！これは世界的巨匠ミレーが一八六二年の傑作である。

――泰西名畫――

フランソア・ミレー筆（佛）

名士の漫畫と漫彫

世界の政治家中で天晴れ英雄の相貌を備へてゐるのは、何と云つても南歐の獅子と呼ばれる伊太利の首相ムツソリーニ氏と、仙人掌の花咲く墨西古の大統領カイエス氏に指を屈せねばなるまい。それが又物好きな美術家の人氣を呼んで出來上つたのがこの寫眞の樣な作品である。上はムツソリーニ氏(右)と同氏の漫畫。下はカイエス氏(左)と同氏の漫彫。兩方とも過般ニューヨークの展覽會に出品され、兩氏の豪快な性格が如何にもよく現れて居るといふので大評判になつた。









本月御入會になれば
三月に卒業證書贈呈

御大典に付會費割引

今御入會が一番お徳です

商賣の實地に一番役に立つ

商業實務講義錄

清水正己先生編輯及御講義◇

『君の學歴は』と問はれて『小學校キリです』と答へるのは殘念だと云ふので實業界に立身出世を望む青少年諸君は爭つて本會に入會されます◇講義は『キング』を讀むやうに面白く平易で、甲種商業の科目の中、商賣の實際に必要なもののみを六ケ月に學ぶ事が出來ます。

立派な見本

ハガキ御申込下さい進呈

東京大森馬込町東區
日本商業實務講習會



あゝ玉杯に花うけて

胸は高鳴り血潮は躍る熱涙の小説！

親一人子一人、千三は小學校を出るとスグに叔父の家に引とられて小さな肩に天秤をかつがねばならぬ程貧乏であつた。そして毎日ラッパを吹きながら豆腐を賣り歩いた。千三と優等を爭つた柳光一は勿論、多くの友達は皆中學へ入學してゐた。千三は村中からチビ公の名で通つてゐる、それほど彼は小さかつた。「やいチビ」「豆腐をくれ」彼は泣きたい程口惜しかつた。

「えらくなろう」「勉强しよう」彼は豆腐をうりながら、あらゆる困難と闘つた。叔父は監獄へ入れられる、母は病氣になる、健氣な千三は親友光一の援助も斷つて奮闘した。中學生の大喧嘩、生蕃と綽名のある中學生の退校騒ぎ、血のニジムやうな千三の奮闘物語は、涙なしには讀めない。少年小説で有名な佐藤紅綠先生が自慢の大傑作である。

▲中學生も讀め！
▲女學生も讀め！
▲小學生も讀め！
◎血と熱に燃ゆる青少年諸君は皆一讀せよ！

◆四六判函入（送料拾錢）定價壹圓五拾錢◆

發行所 東京本郷駒込坂下 振替東京三九三〇 大日本雄辯會講談社

御申込次第圖書目錄進呈

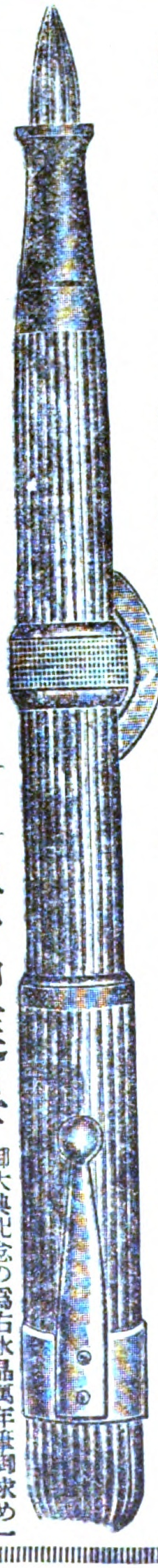
御大典記念

優良純國產品『金ペン以上長く書ける水晶萬年筆』大特價提供

◈水晶萬年筆　絶對安全硬竹製自動吸入式クリップ及び替ペン二本付優美箱入(實物大)定價八十錢

大特價金五拾錢也

前金送料無料
代金引換廿錢



◇本品現れ萬年筆界に一大革命起る！

本品の軸部は我國特產　硬竹を用ひペン先はガラスに高貴なる藥品を配合し水晶の如き硬質となし其の耐久力は高價なる金ペン以上にして絶對永久的の御使用が出來ます、使用法は最も簡便なる自動吸入式にして唯一回の吸入に一萬二千字を書得るインキを吸入致します。右の如き大特長を有し安價にして且つ實用に適し最も理想的なる純國產水晶萬年筆の出現に及んでは高價なる金ペン萬年筆を買ふの必用は有りません。

◈本品は一本で青赤黒の三色を同時に使用出來ます

カタログ進呈

景品進呈（本圖は實物の二分の一縮尺なり）

御大典記念の爲右水晶萬年筆御求め一本各にニッケル金屬製の高級シャープ鉛筆を一本宛無代進呈致します。



御注文は爲替か振替口座に御拂込下さい切手代用は一割增御註文書には太書用細書用等の御希望御書添下さい

弊店は着金後廿四時間以內に發送主義

東京市京橋區新榮町三丁目
振替口座東京六五壹壹〇番
今春堂（コンパルドウ）

專門美容術

自宅療法を教授す
返信郵券要參錢

アルラ白色飲劑

副作用なく只一日一回の服藥にて體內毒素の治療劑として專ら賞用されて居ります

逆上症、ニキビ、ソバカス、吹出物、便秘症、脂肪症等

顏面晒白術

等を美化する外部療法なり

短日にて難症ニキビ、ソバカス、色黑シミ、シワ、赤顏、油顏、日燒

根本毛生止

毛根毛母の發育營養素を障害し永久に

急速毛生法

禿頭、薄毛、脫毛症、フケ症等急速に毛生し赤白毛を黑化す

白ナマヅ、アザ、ホクロ、入黑、魚の目、イボ

東京本鄉東片町七八白山坂上
電話小石川四九七六
振替東京三六八〇九
自午前八時
至午後九時
（分院代理店募集）

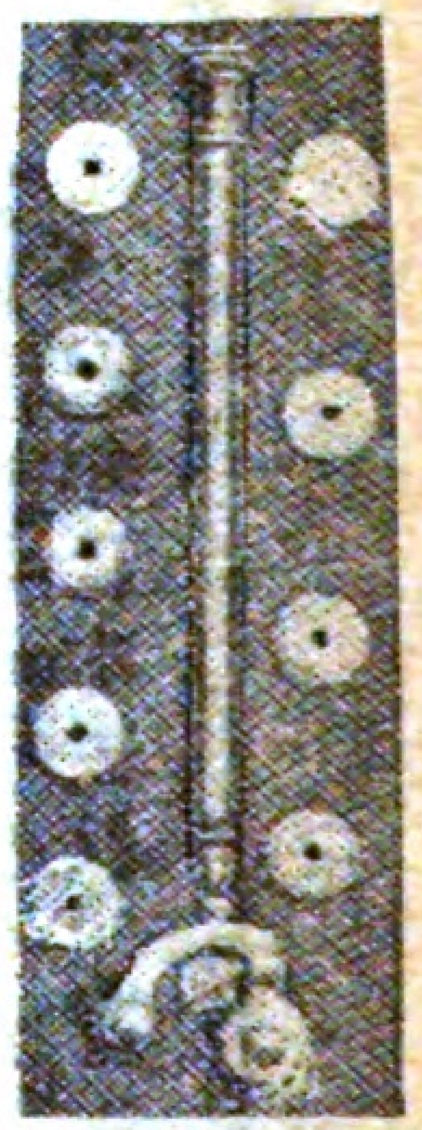
美容大學院

大阪天王寺堀越町三二ノ一
美容大學院大阪分院

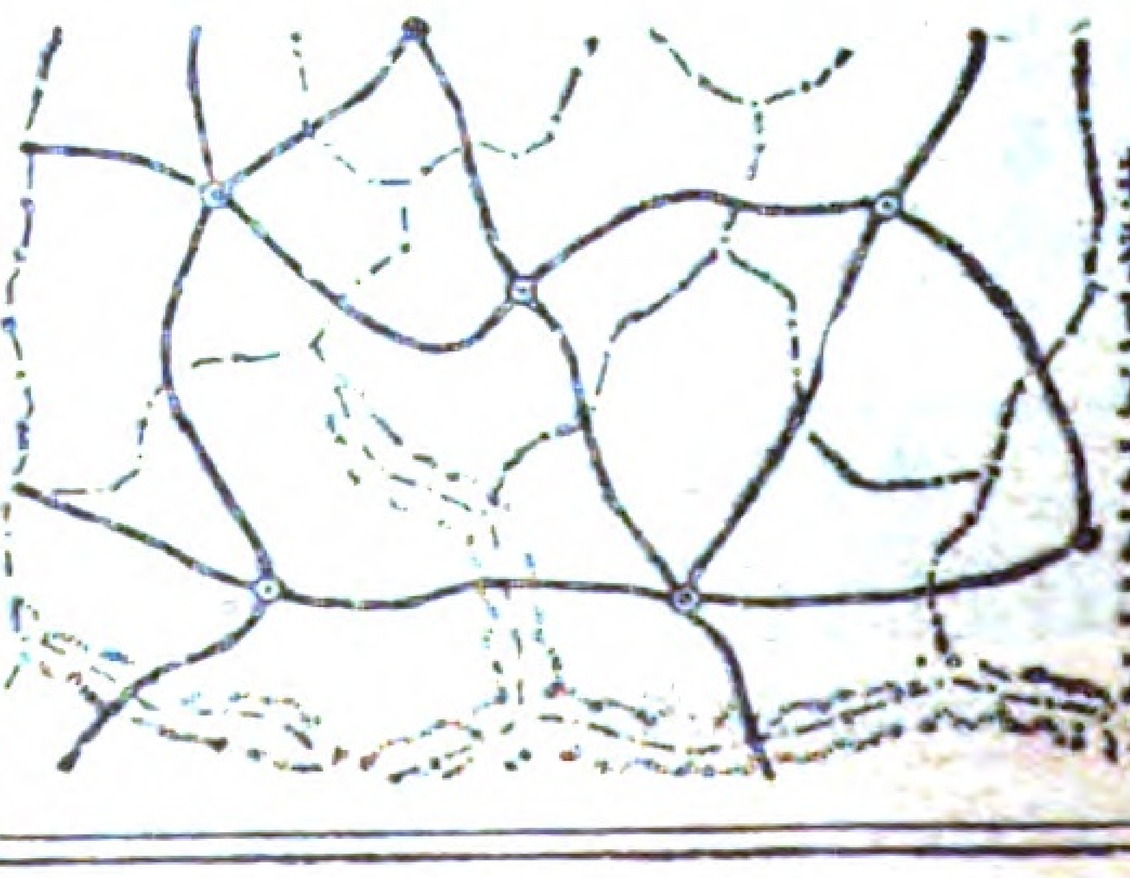
輪轉式直線描器

(一名定規要ラズ率線器)

＝諸官衙御用品＝



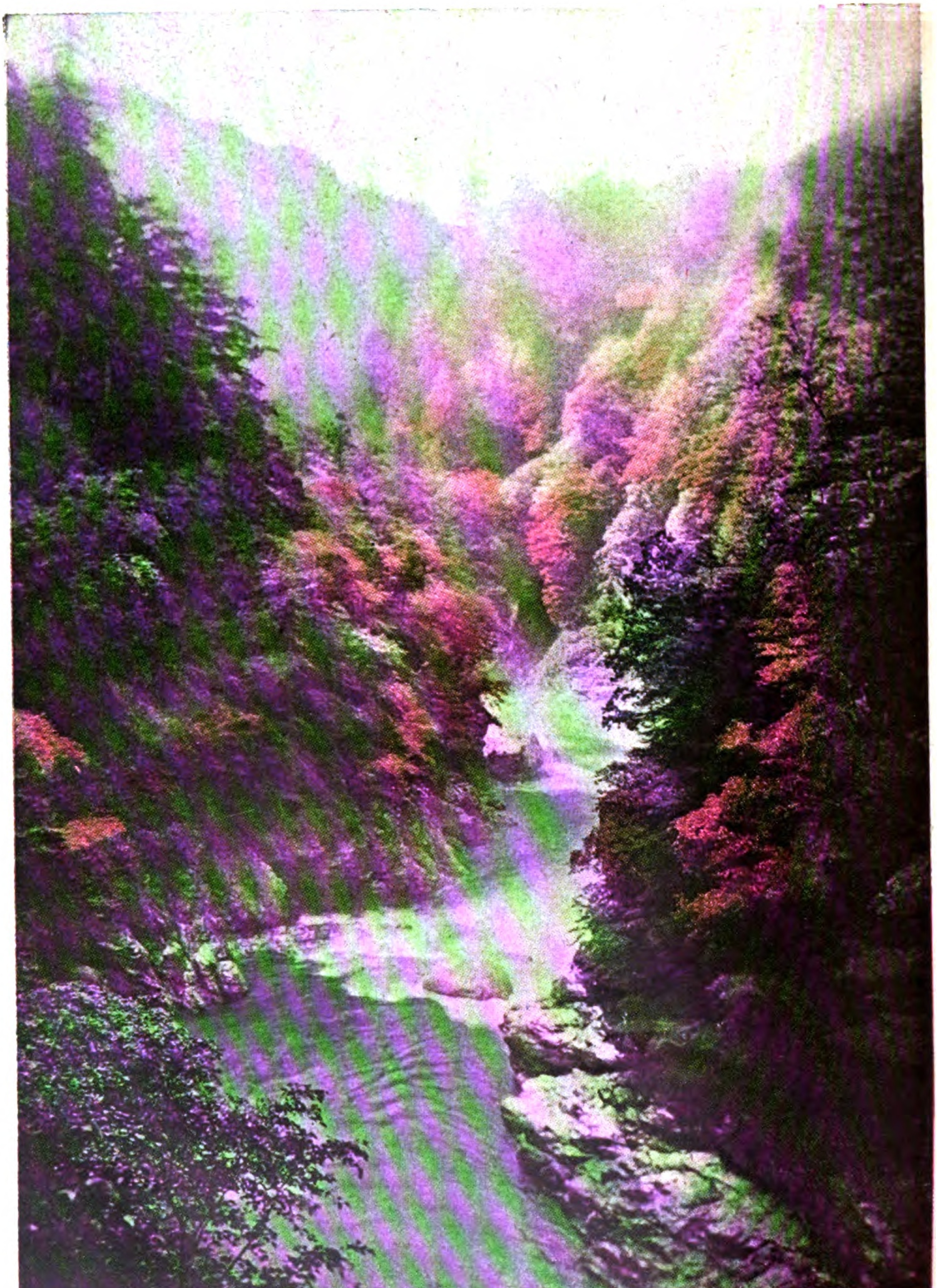
軸の先に各種樣々な齒車を取付ければ、直線、曲線、點線、リーダー線、その他思ふまゝの線が描ける最新發明品。特に製圖家學生諸氏の時間經濟の爲め是非机上にお備へ遊ばさねばならぬ必然の武器であります。至急御用命を。



定軸式（描轉盤九種）一圓
旋軸式（描轉盤十一種）三圓
送料內地一二
領土四五

東京市本鄉區駒込坂下町四八
大日本雄辯會講談社代理部
振替東京六六二九番

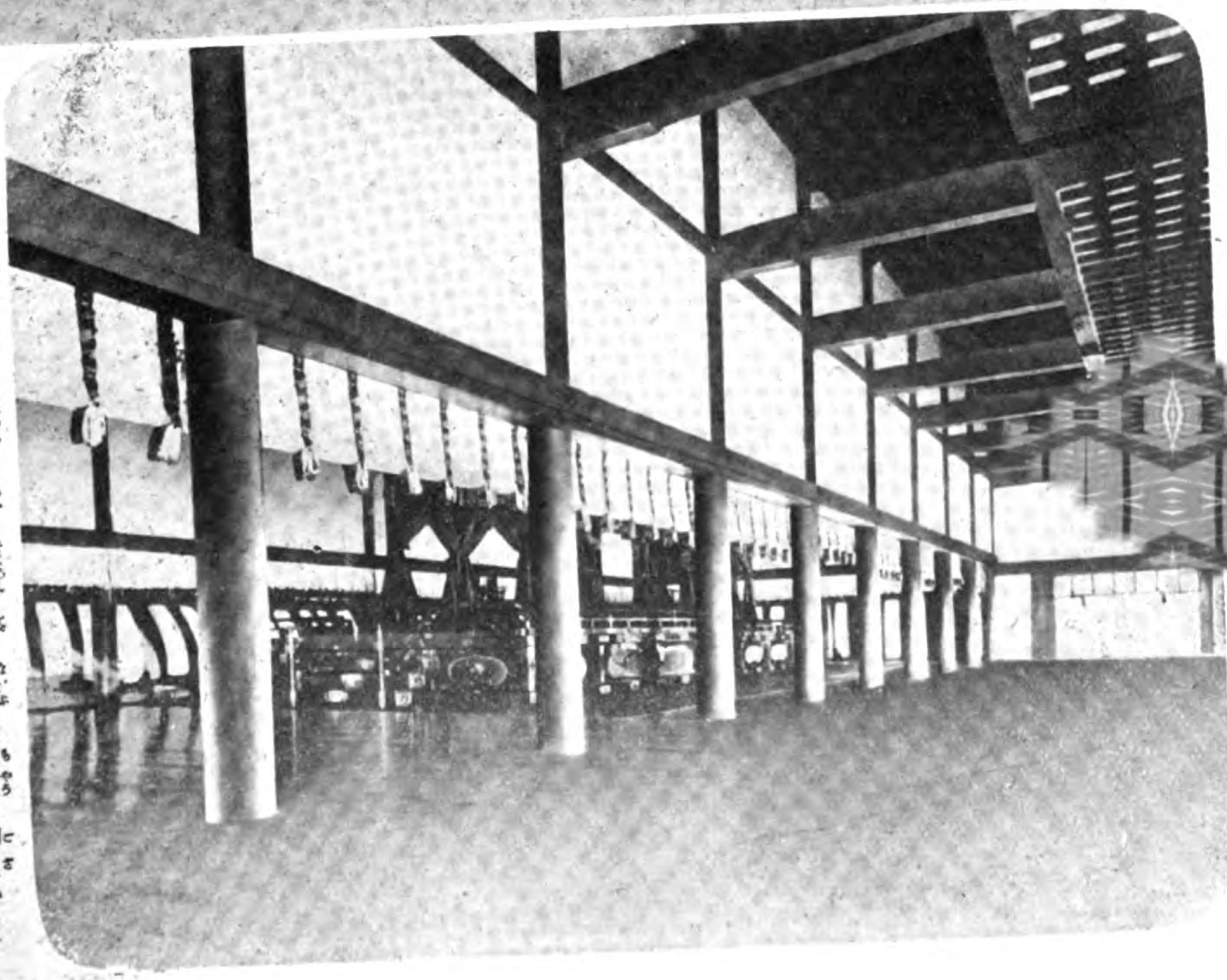
紅葉の黒部峡谷



京都紫宸殿



老いも若きも七千萬國民の待ちに待つた御大典の御儀は十一月十日京都に於て盛大に取行はされる事になりました。寫眞は此の御盛典の式場に×



×當てらせらるゝ京都の紫宸殿で、上は側面、下は内部の模樣で御座います見るからに莊嚴の氣が漂ふてゐる樣に拜されます。

現

躍進又

大奮發！大増



（頭山滿翁）



（フーバー氏）

見よ！生氣躍動、千金の大文字!!

十一月號を飾る大名篇の一部

◎御大典を壽ぎ奉る……田中總理大臣

◎高橋是清翁至誠奉公の大場面…大藏秘書官 上塚司

▼三舟傳（見よ！巨人が語る三巨人 海舟、泥舟、鐵舟の大面目 誌上に躍如！大評判の讀物）頭山滿

▼予が今日を成せる所以…（現代大實業家の大成功物語、萬人必讀の名記事）

▼英雄物語ガリバルヂー……澤田謙

◎海底を狂ふ怪魔（獨逸潜航艇の活躍）大瀧鞍馬

◎文壇出世物語……多賀伯史

◎世界各國魂物語…（前公使）堀口九萬一

◎現代放語……下村海南

▼世界五大思想家（澤田謙）

▼古人に學ぶ 文學博士 藤村作

▼世界の優良人種としての日本人 榮養研究所長 醫學博士 佐伯矩



—よろこび—

大禮使長官近衛文麿公と
御令息通隆君（七歳）

モウ スグ ニ
ゴタイテンガ
マヰリマス。ボ
クノ オ父(トウ)サマ
ハ キヤウトヘ
オタチニ ナリ
マス。ボクハ
ゴタイテンノヒ
ニ コノ ハタ
ヲフツテ テン
マデ トドクコ
エデ バンザイ
ヲイタシマス。

光榮の





御大典の大饗は十一月十六、七の兩日兩陛下御親臨、朝野の名士數千人を召されて盛大に取行はせられますが、その式場には悠紀、主基を描いた美事な屏風が飾られます。寫眞右上は此の屏風を揮毫する一代の榮譽を荷つた川合玉堂畫伯（悠紀執筆）と、右下は同じく山元春擧畫伯（主基執筆）

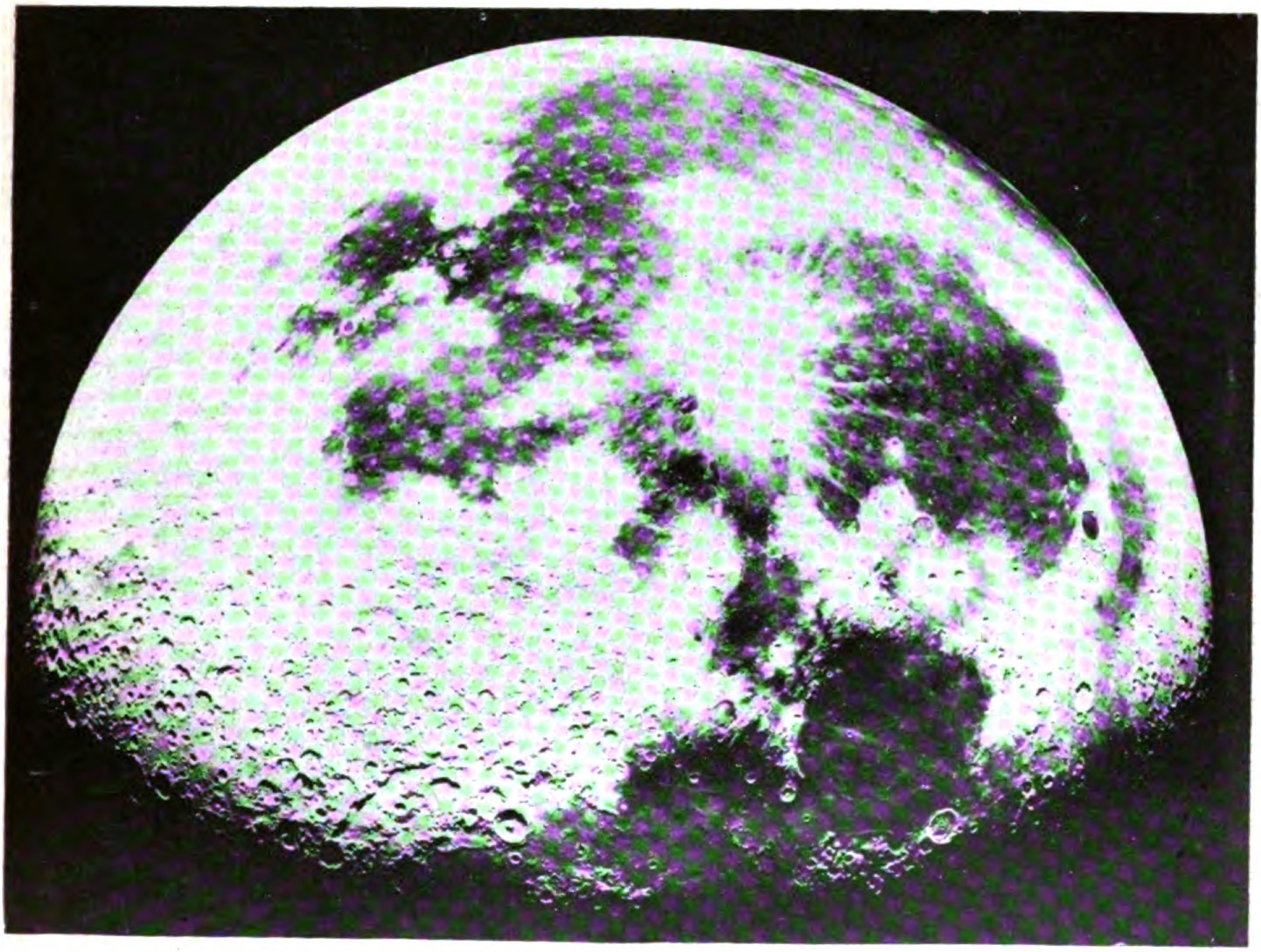
諸畫伯





今回御大典に際し一般からも夫々御祝品を献上致します。上は静岡縣の有志から献上する日本畫で、松岡映丘畫伯が謹寫された同縣牧野原風景です。下は聖上陛下より御大典記念に各宮家へ賜はる美術品製作者の一人である池上秀畝畫伯が、日本畫の下絵に精進せらるゝ處です。

月の宮殿



ほウそい　ほウそい
二日月
姉さんの小指に
よう似てる

三日月さまは
母さんの
かみにかざした
つげのくし

今夜は父さんの
眼鏡より
まアるい　大きな
お月さま

ほんとにふしぎな
お月さま
ほんとにうさぎも
ゐるかしら

サトウ・ハチロウ

上圖は世界一の米國ウイルソン山天文臺から百インチの反射望遠鏡で撮つた月の寫眞です。幾百となく見える穴は舊噴火口で、中には直徑一二三十里に及ぶものがあるそうです。



醜容と＝健康上の障害

男　女

ふとり過ぎ

僅に十日か二十日間の實驗！
身體に害なく　程よくやせて　スラリとした　美容姿となる

◎男でも女でも肥り過ぎは、デブだのおかめだの豚だのと惡口を云はれる位下品で醜くいから、立派な令孃も知らぬ所へ行くと下女と間違へられる、又歳をふけて見らるゝ損もあり、水氣太りや血太りで血色が惡いと癩病の筋ではないかと疑はるゝこともあり、それが爲めに、教育もあり心掛もよい良家の令孃でも、可惜嫁入盛りの妙齢を徒らに過ごし容色は益々惡るくなるばかりで一生涯の不仕合せの原因となる例が澤山あります、又太つた人は歩行にも骨が折れる位で自然擧動がノロクなり敏捷を欠きますから、鈍なノロマな人間の様に見られます。

◎身體の肥り過ぎを強壯だなどと思つて居たら大間違です、醫學上肥胖症と稱し、血肉組織中に過剩の脂肪や水氣や其他有毒有害なる不純物質が蓄積されたる一種の病的状態であります、それで肥り過ぎた人に限りニキビ其他の吹出物や又は癰疔の如き命にかゝる腫物も發し易くいろいろの病氣にも罹り易い、運動不如意の爲め胃弱になつたり、心臟が壓迫されて少しの運動にも息切れし恐るべき心臟痲痺となる危險が伴ひ、又夏などは人一倍暑さに苦しみ、見る人にさへ暑苦るしい感じを與へます。



井上醫學博士曰く……肥滿ノ人ハ心臟ガ障害セラレテ脈搏ノ不正並ニ結節ヲ發シ熱病ニ對スル抵抗力弱クナリ肺臟ヒ運動ヲ障害セラレ氣管支加答兒ニ罹リ易ク肝臟ハ擴大シ又動脈硬變、萎縮腎、糖尿病ヲ併發ス……（井上内科全書）

筒井醫學博士曰く……オベシタス即チ肥エ過ギタル人ハ歩行困難、心臟衰弱、脈搏不整、心臟肥大、呼吸困難、其他種々ノ障害アリ心臟衰弱、腦出血、肺出血ヲ發シ頓死スル事アリ……（臨床醫典）

當藥品、に於て專門大家の熱心なる研究により理想的一大創製に成功せる中容丸は、ありふれの他の無責任なる得體の知れぬやせ藥と全く異なり、最新醫界に於て其の驚嘆すべき特効を推賞されつゝある貴重藥甲狀腺純製劑を主藥とし之れに幾多の補佐藥を合理的に配合完成せる最良藥なれば、服用するに隨ひ血肉中に蓄積せる惡脂肪、惡血、酒毒、水氣其他のあらゆる有害なる不純物質と毒素を血肉細胞より分離せしめ胃腸の機能をよくしてそれらを體外に排泄するから思ふ通にスラリと程よくやせて中肉の健康的堅體となり氣分まで輕快になり升、身體がやせ過ぎて骨と皮になる、一度やせても再び太るなどの憂は絶對に有りませんから安心して服用せられよ。

- □年若き婦人にて肥滿せる人
- □血ぶとり酒ぶとり脂肪肥りの人
- □ニキビ出で脂肪過で肥滿の人
- □月經不順で肥滿し歩行困難の人
- □惡血又は水氣で肥滿せる人

◎中容丸定價は十日分金三圓、廿日分金五圓五十錢、卅日分金七圓五十錢、四十日金九圓です、大抵の方は十日乃至二十日分を試みよ。肥滿甚だしき方は三十日乃至四十日分を求められよ。目下注文に追はれ直接御申込の方にのみ送藥して居ますから必ず直接御注文下さい、前金申込送料不要で早速送藥しハガキ注文は代金引替で廿錢増にて送藥します、尚ほ平素の養生法飲食物の注意等を述べた說明書も添付して御送します。

發賣元　**鶴岡藥品部**
東京市小石川區表町六十七番
振替東京一六六八〇番
電話小石川四七九〇番

◎くわしい說明書はハガキで御申越下さい＝無料送呈



出た！萬人大熱狂！面白い〳〵

御大典記念十一月特大號！

特別讀物附錄

『大和魂物語』

（1）あゝ乃木將軍

軍神乃木大將の未だ世に知られざる物語、トテモ面白い中に思はず大感激する大讀物！

（2）古今無双 譽の先陣（鈴木彦次郎）

關東隨一の勇將佐々木、梶原が宇治川の急流を突いて勇壯極まりなき先陣爭ひ！眞に痛快壯烈！一讀血湧き肉躍る大傑作！



（3）不敵の膽ツ玉 決死の美丈夫

勝誇れる家康を驚嘆させた不敵の大勇士木村長門守重成の活躍‥前田曙山

（4）忠勇義烈 悲壯吉野の落日‥楠都香

南朝の大忠臣村上義光が大塔宮の御身代となつて悲壯な戰死を遂る壯烈無比の物語！



（５）感恩美談 **軍神廣瀬中佐**……山川鐵眼

軍神廣瀬中佐が眞心を以て兇惡極りなき强盗を改心させた涙ぐましきものがたり！

目も覺める程美しい大名畫ぞろひ！

古今東西 逸話美談大繪巻

尾竹國觀、小山榮達、田中良、上原古年、米内北斗、渡部審也等一流大畫伯が苦心された大名畫と名文章、トテモ面白く爲になる！

大勇士リンドバーグが不敵の放れ業（中正夫）

快傑粂の平内痛快無比の大活躍（寶井馬琴）

江戸ツ子右門が一世一代の大捕物（佐々木味津三）



感動！感激！

トテモ面白くて爲になる

立志成功傳

一介の前垂小僧から身を起して刻苦大奮闘！遂に時めく大實業家となつた富澤半四郎氏の大成功傳！一讀！何人も感奮興起の大讀物！




▲**落花劍光録**（美男劍士を狙ふ不敵の美少女）三上於菟吉

▲**奇物變物**（鬼も吹き出す大滑稽小說！）佐々木邦

▲**女來也**（怪劍士を飜弄する謎の美少年）吉川英治

定價五十錢（送料三錢）

東京 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

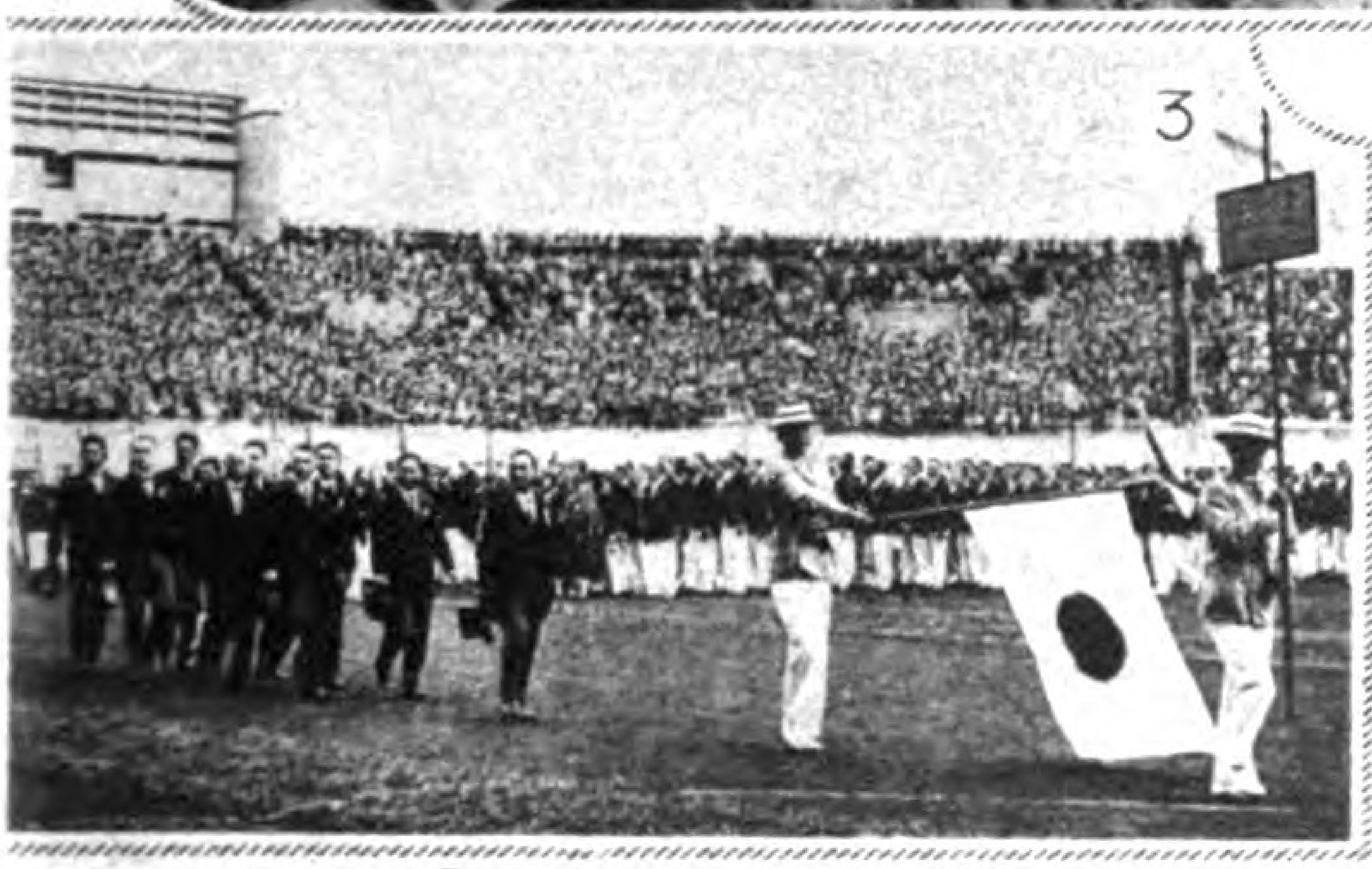


キングラフ

本栖の松籟

甲州本栖湖畔より眺めし富士の勇姿







懸軍萬里！　遠くアムステルグムの國際オリムピックへ赴いた吾が選手は四十餘ケ國の選手に伍して善戰健鬪、よく日本男兒の名を辱めず、赫々たる戰績を殘して歸つて來た。(1)飛行機より見下したアムステルダムの新設競技場の全景。開場式當日の有樣、左方の高い塔はマラソン塔。(2)アムステルダムに着いた吾が選手の一部。左より相澤、永谷、津田、山田、中澤、竹內(マネージャー)、齋、三木、岡本、根津(マネージャー)、渡邊、臼田の諸君。(3)閉場式に參列せる吾が選手。先頭は高石君。日章旗を持てるは織田君。(4)女子八百米に二着となつた人見絹枝孃、接戰又接戰の有樣。右は一着のラートケ孃(獨)。(5)三段跳に美事一等となり日本の爲に萬丈の氣を吐いた織田選手優勝の刹那。(6)二百米平泳に於て堂々と世界最高記錄を作り各國を驚歎せしめた殊勳の鶴田選手。(7)オリムピック毎に期待され乍らいつも不結果に終つたマラソンも山田、津田兩選











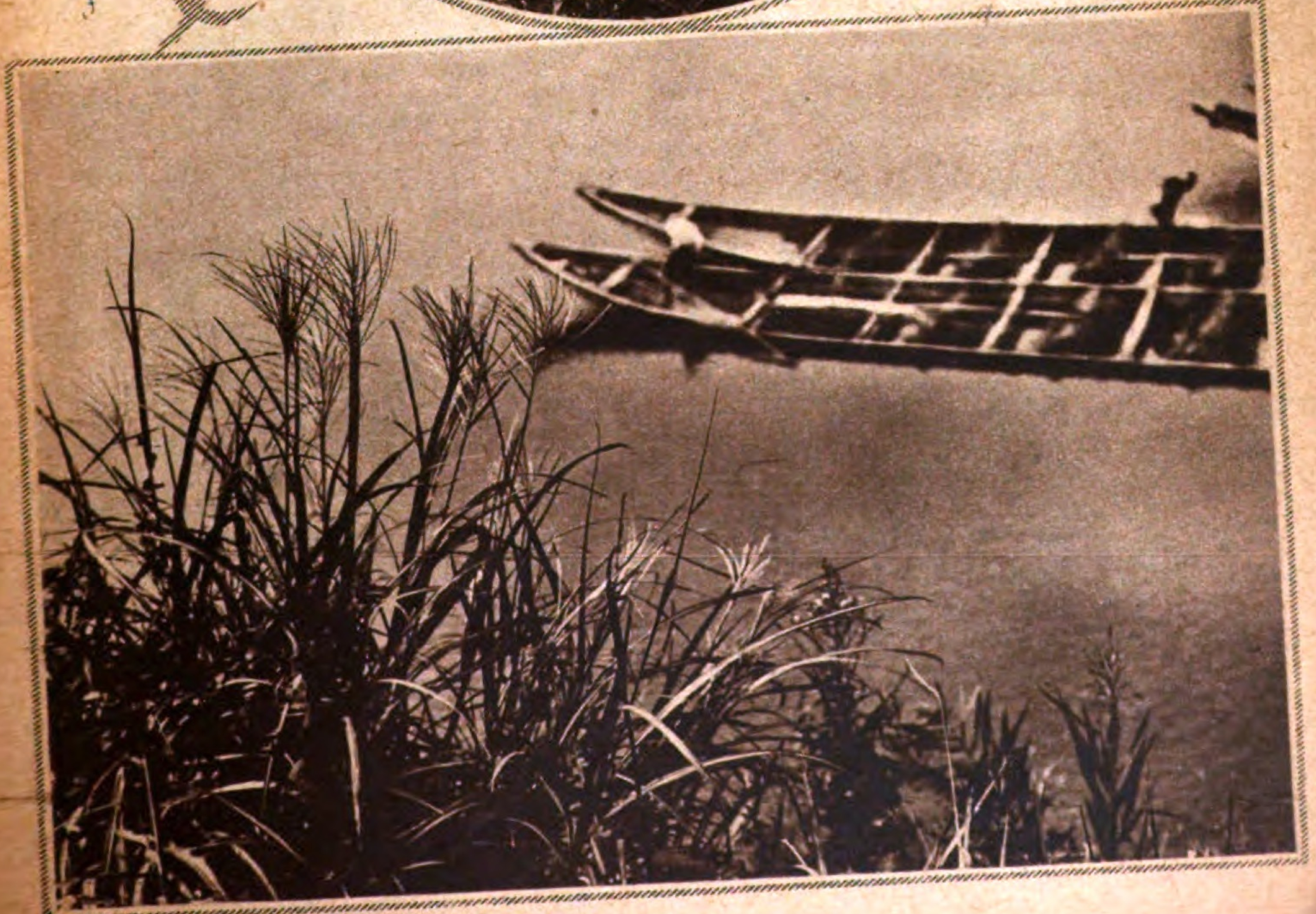
手の奮闘で美事入賞した。寫眞は韋駄天中の山田選手（左）と津田選手。尚此の外入賞した日本選手は織田、中澤、木村、南部（以上陸上）、高石、入江、佐田、米山、竹林、新井（以上水泳）の諸君である。

秋（あき）

『さあ帰らう。木の實も籠にみちた』老婦は家に待つてゐる子を思ふてか足どりを早めた。このあたりではもう虫の聲も聞えない。秋も更けた。風もないのにスーとしてもわくら葉が散つた。白絹のやうな流れが疎林を縫ふてわくら葉を運んで行く……。

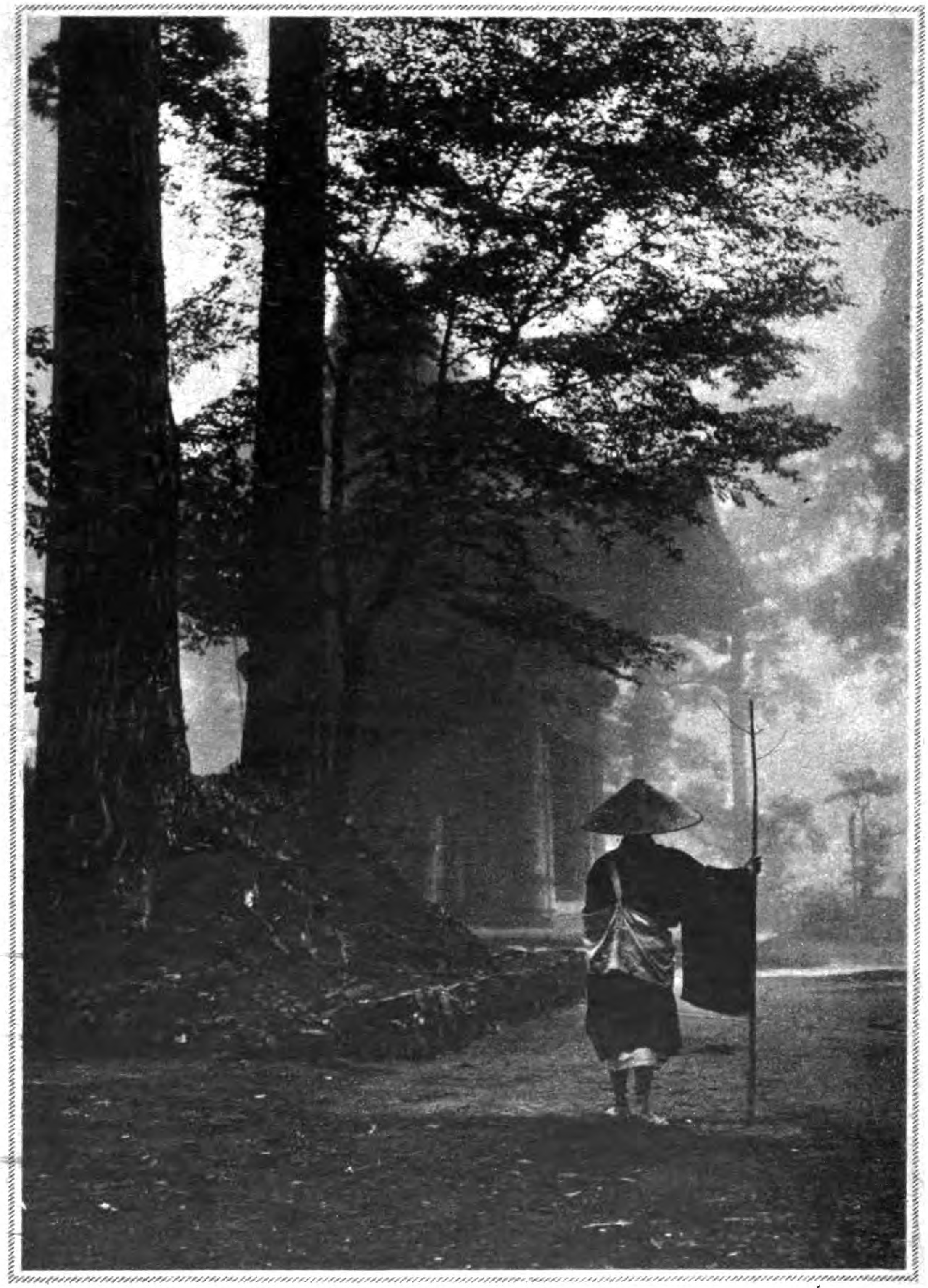


風は颯々と水面を渡つて行く。金色の尾花は岸にはためき、ほろれ空には訪れて来た雁の羽音がかすかに聞える。



深し

藻を刈る舟人は時々手を休めては大空を仰いで見る。



山門も鐘楼もまだ晴れやらぬ朝霧の中に夢の様に浮んでゐる。いつから来ていつ去へ行くのであらう。今一人の旅僧は古都の秋を尋ねてしとゞまれ朝路を踏分けてゐる。天も寂。地も寂。人も寂。唯そこには一幅の水墨画があるばかりである。

松香書

悍馬を



1

(1)米國西部の部落民カウ・ボーイは馬乘りと投げ繩を小さい時から練習してゐるから素晴しい名人が多い。これは手におへない悍馬を乘馴らしてゐる所。振り落す、蹴る、咬む、跳上る、猛獸のやうに暴れ廻るが、ドッコイ、決して落ちない。かうして馴せば遂に馬は溫順しくなつて了ふ。

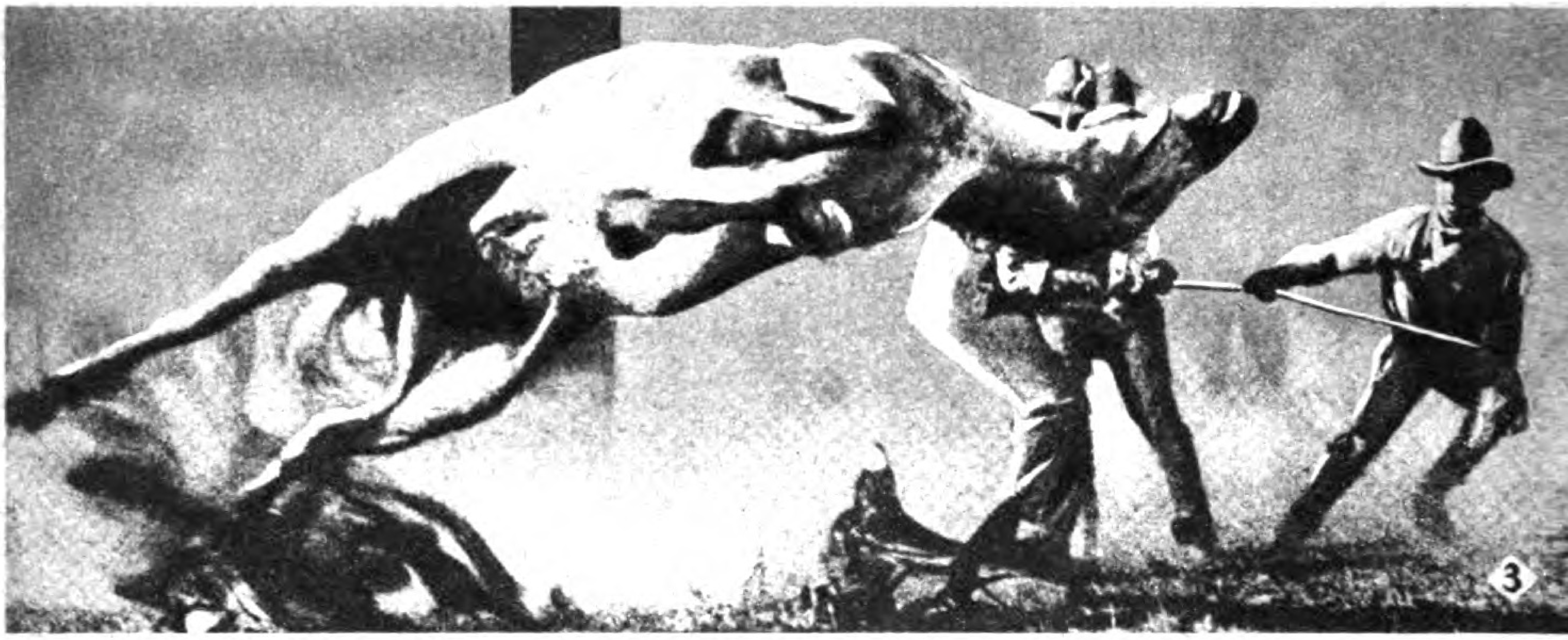


2

(2)英國騎兵學校の大冒險馬術。疾走する馬の右側に眞逆樣に身體を振り下げる。これは疾走しながら地上の物を拾ふ爲なのだ。



(3)これは又手にも足にもおへない荒馬である。天空に飛上ると思へば地に狂ひ、どうにもをさまりのつかないのを巧みに操つる放れ業は中々並大抵の苦勞でない。これもカウ・ボーイ得意の舞臺である。







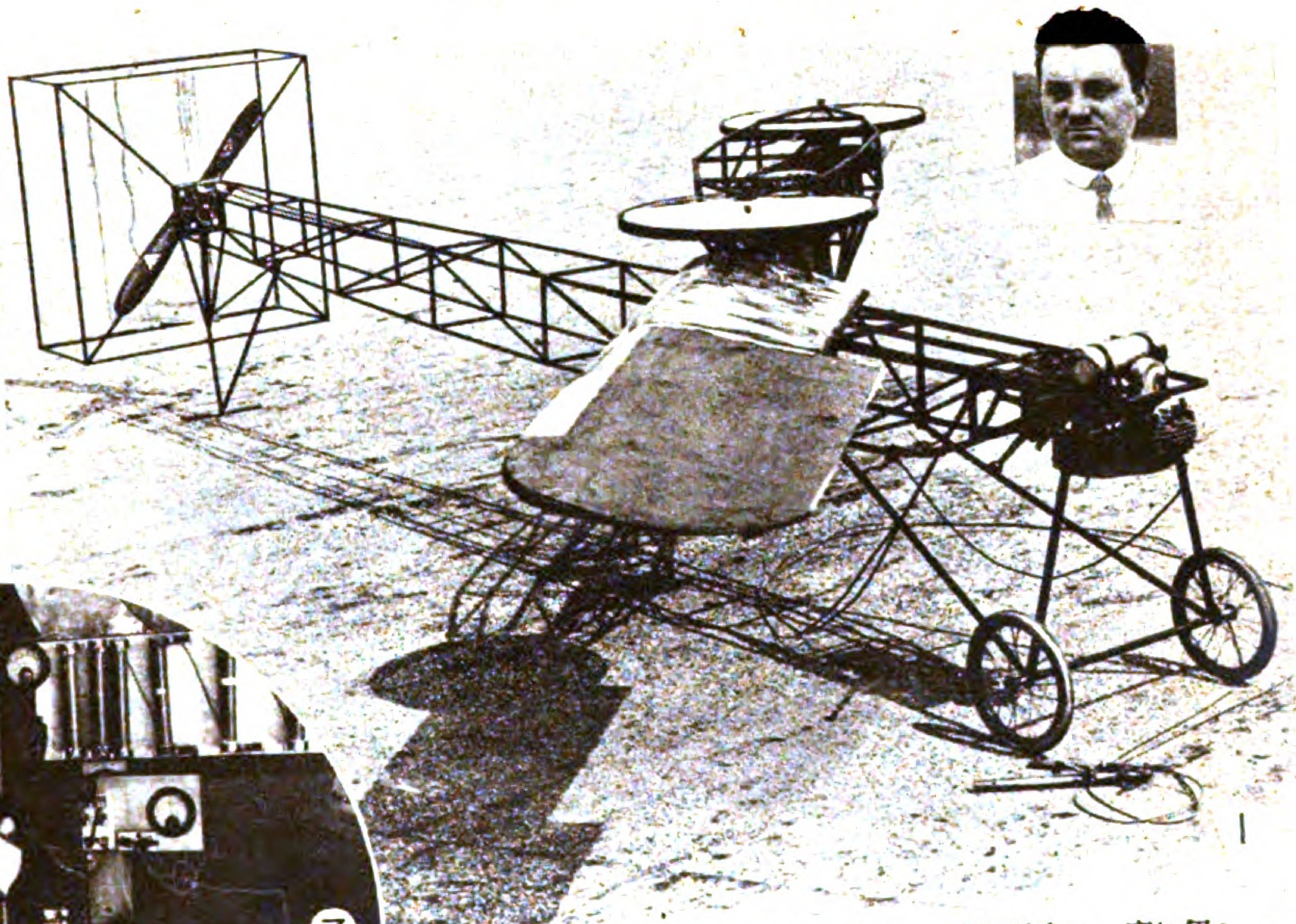
(5)アメリカン土人も亦馬に乗る事は巧い。これも悍馬馴しの大冒険。棒立になつて振落さうとする危機一髪、巧みに馬を御す錬磨の極致。

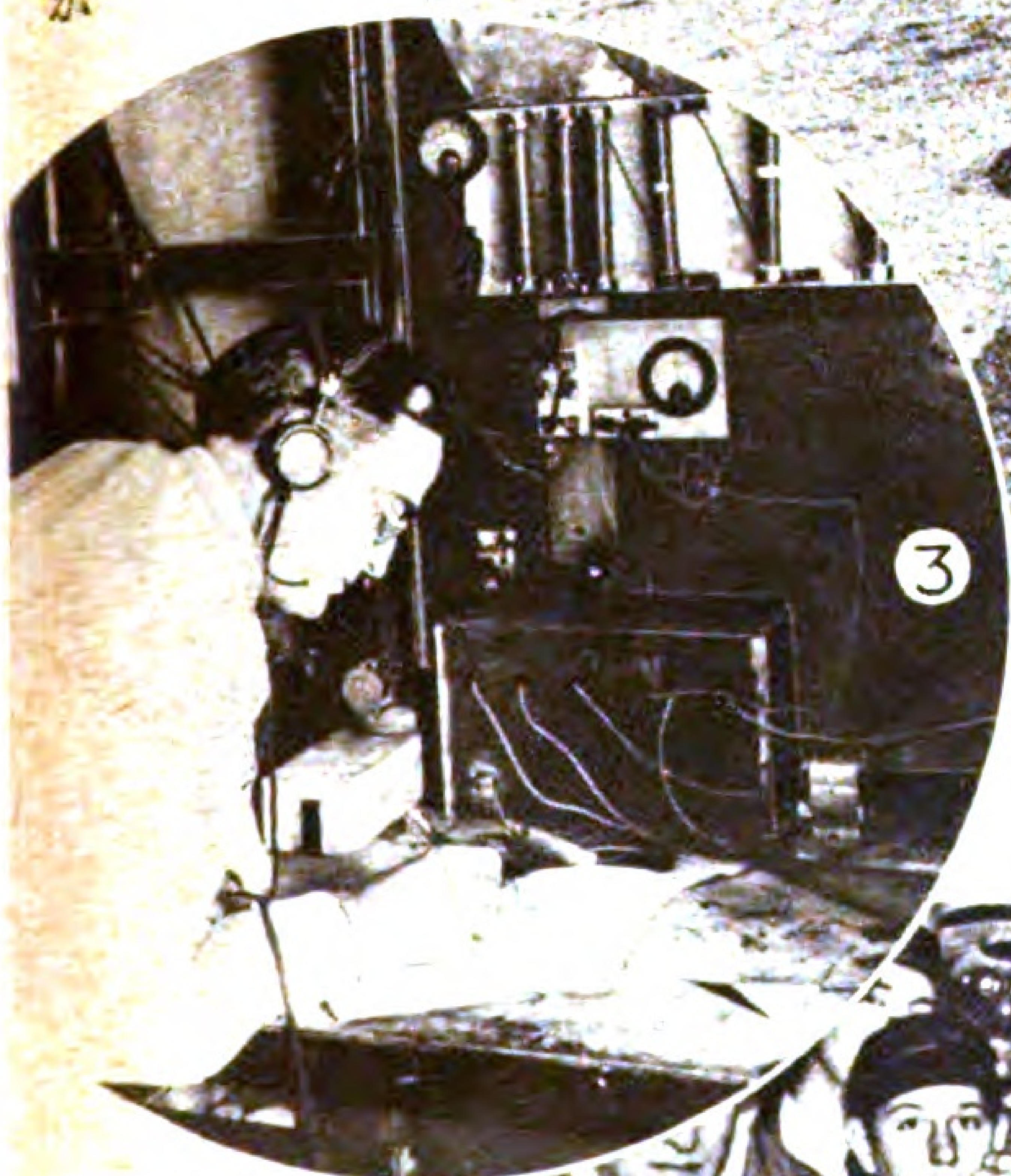
(4)米國騎兵隊の輕妙なる曲馬。人の輪の中を馬で跳び抜ける——隨分危險な離れ業だが、皆んな笑ひながらやつてゐる大膽不敵さ！それだけ技術の巧さが察せられる。

驚異の

(1) 眞直に飛上る新型飛行機

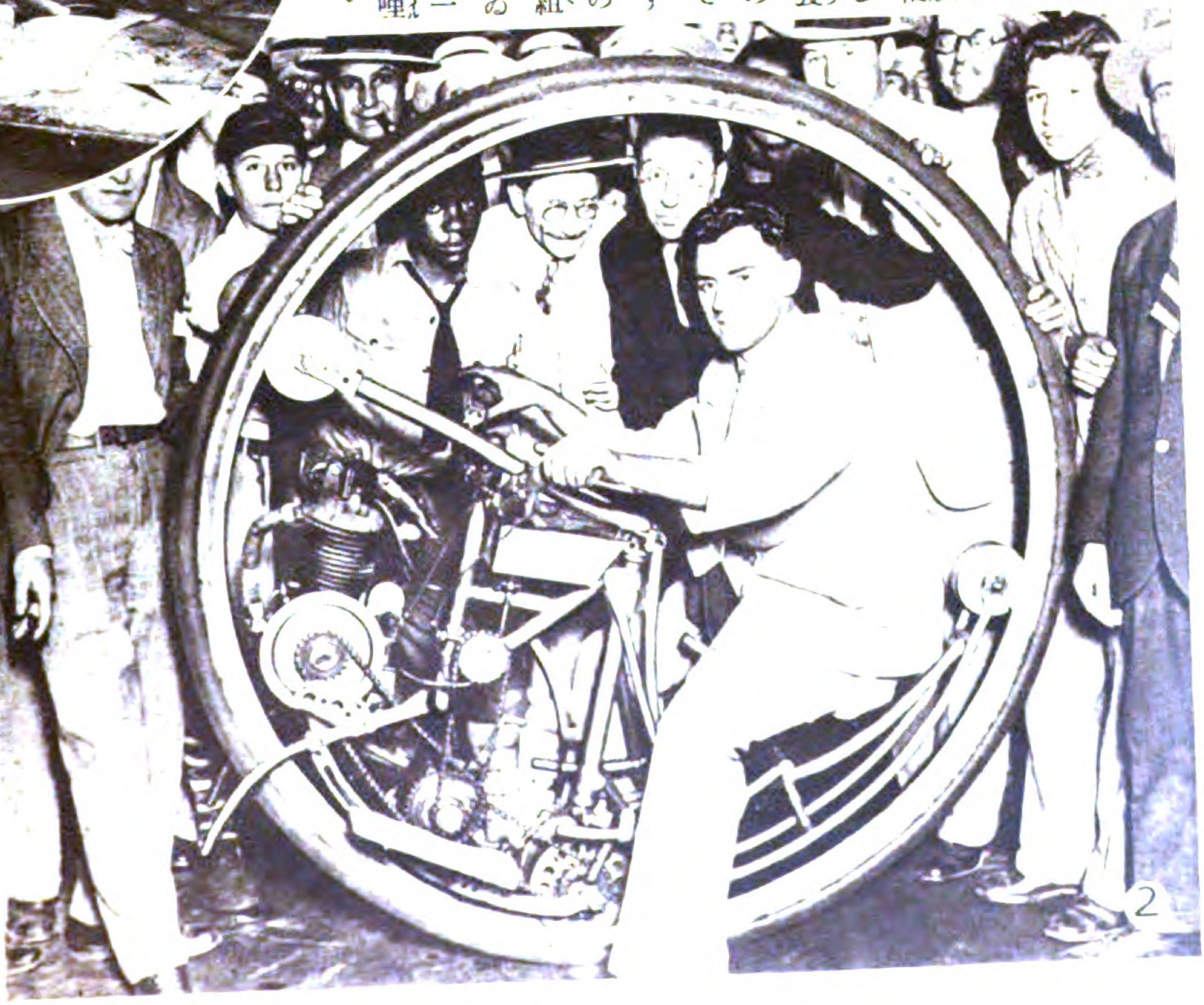
地面からイキナリ眞直に天に向つて飛上がる不思議な飛行機が發明された。發動機は機體の前部に在り、プロペラは後部に在る。中央に螺旋推進機が





(2) 單輪車

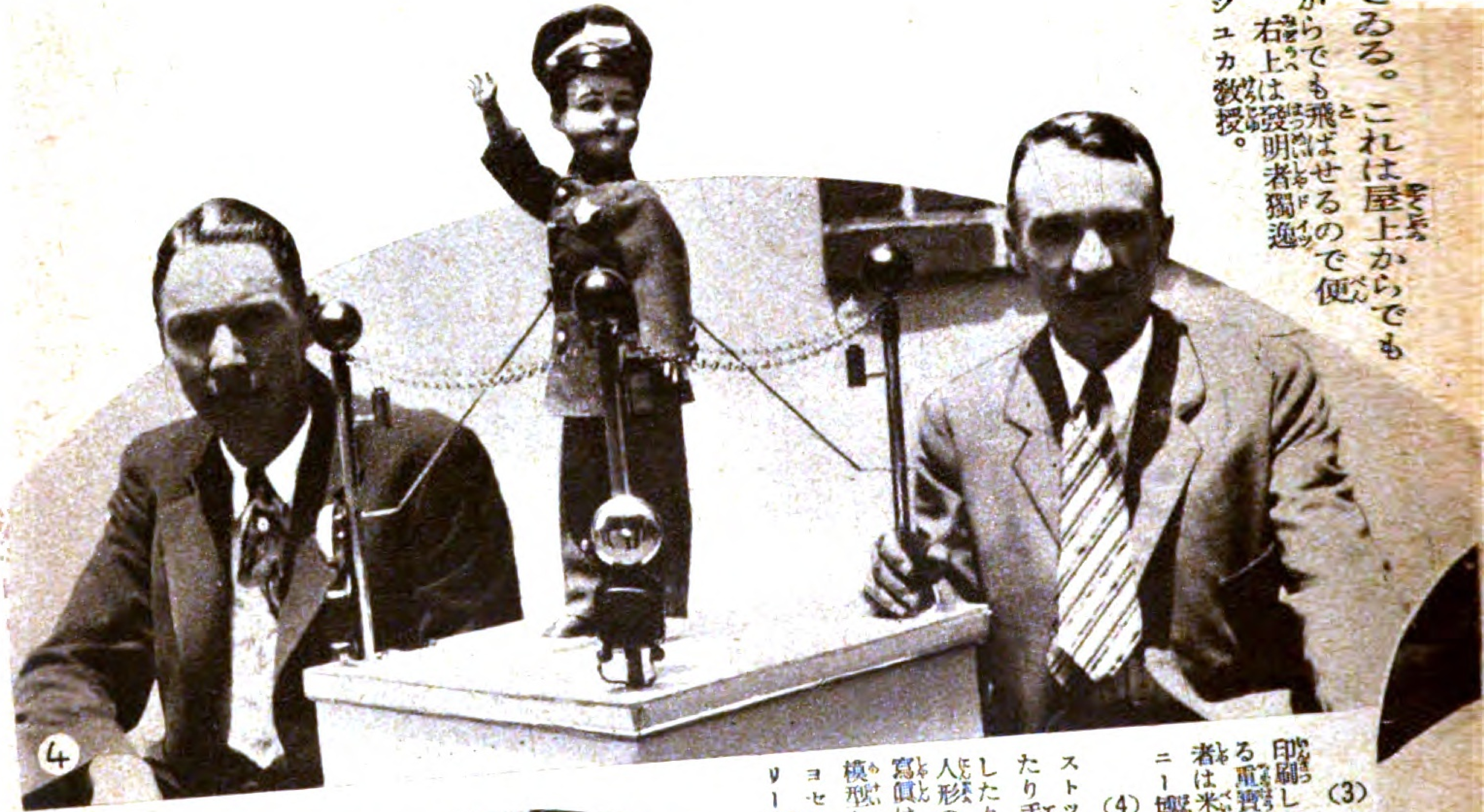
伊太利の發明家ロブシー・セカリネ氏は快速力の單輪車を發明した。座席や發動機は車輪の内側に在つて車輪の廻轉するにつれ車の溝を滑る仕組みになつてゐる。これは一時間に八十哩以上を走る。





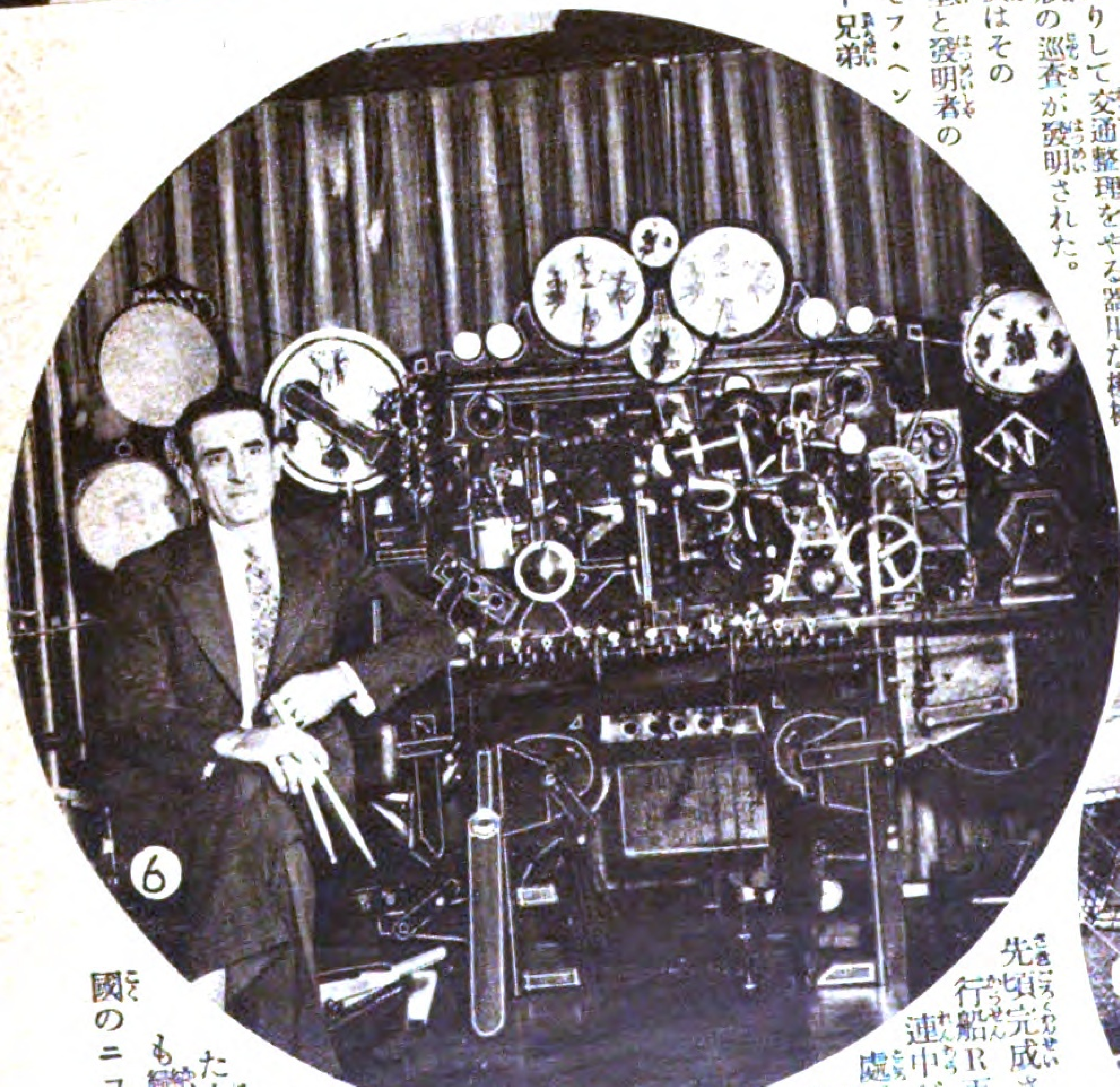
發明界

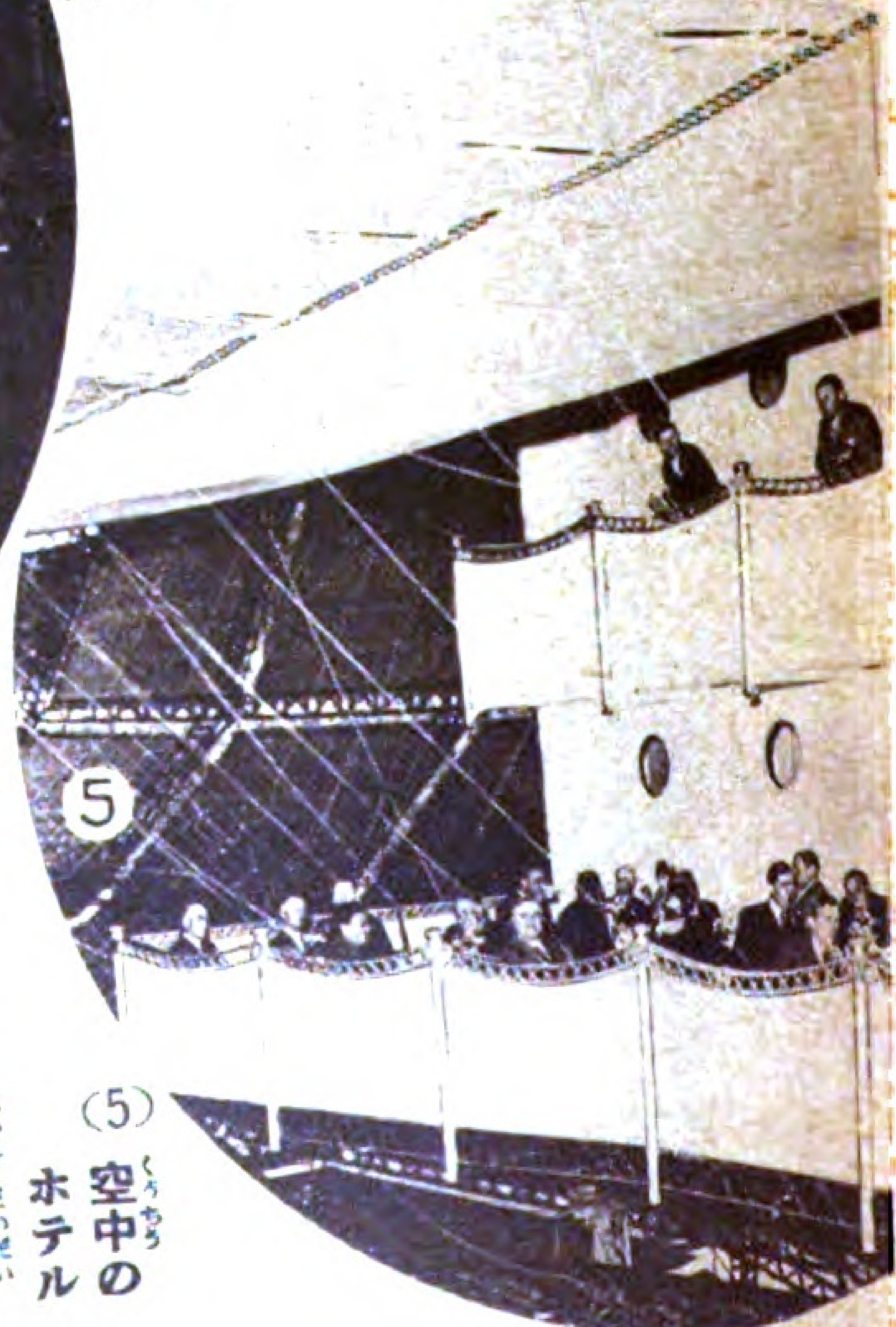
ついてゐる。これは屋上からでも船上からでも飛ばせるので便利だ。右上は發明者獨逸のザシュカ教授。



(3) **本を讀む機械**　印刷した文字をそのまゝ讀んで聞かせる重寶至極な機械が發明された。發明者は米國ゼネラル電氣會社のホイットニー博士。

(4) **人形の交通整理**　ストップ！　オーライ！　と顔を動かしたり手を擧げたりそれからベルを鳴らしたりして交通整理をやる器用な機械人形の巡査が發明された。寫眞はその模型と發明者のヨセフ・ヘンリー兄弟。



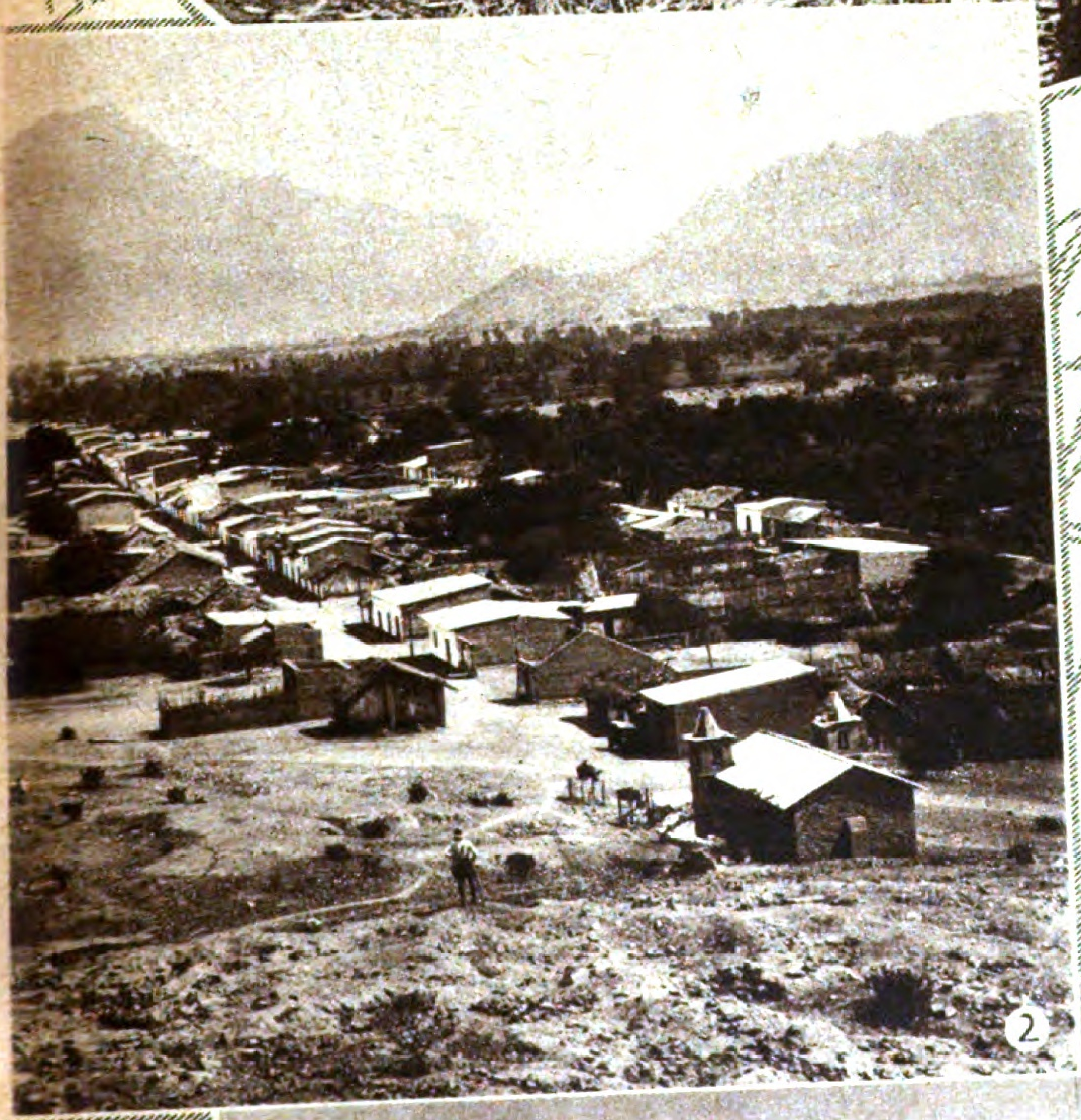


(5) **空中のホテル**　先頃完成された英國最大の飛行船R百號の食堂で代議士連中が宴會を開いてゐる處。此の飛行船は料理場、倉庫、寢室等頗る行屆いてゐて恰もホテルの様だとは大したもの。

(6) **物云ふ活動**　これは活動寫眞の場面につれてどんな音響でも發するといふ不思議な機械。様々の樂器が装置され、生きた人間が物云ふのと少しも變りがない。發明者は米國のニコラス氏。

南米に活躍

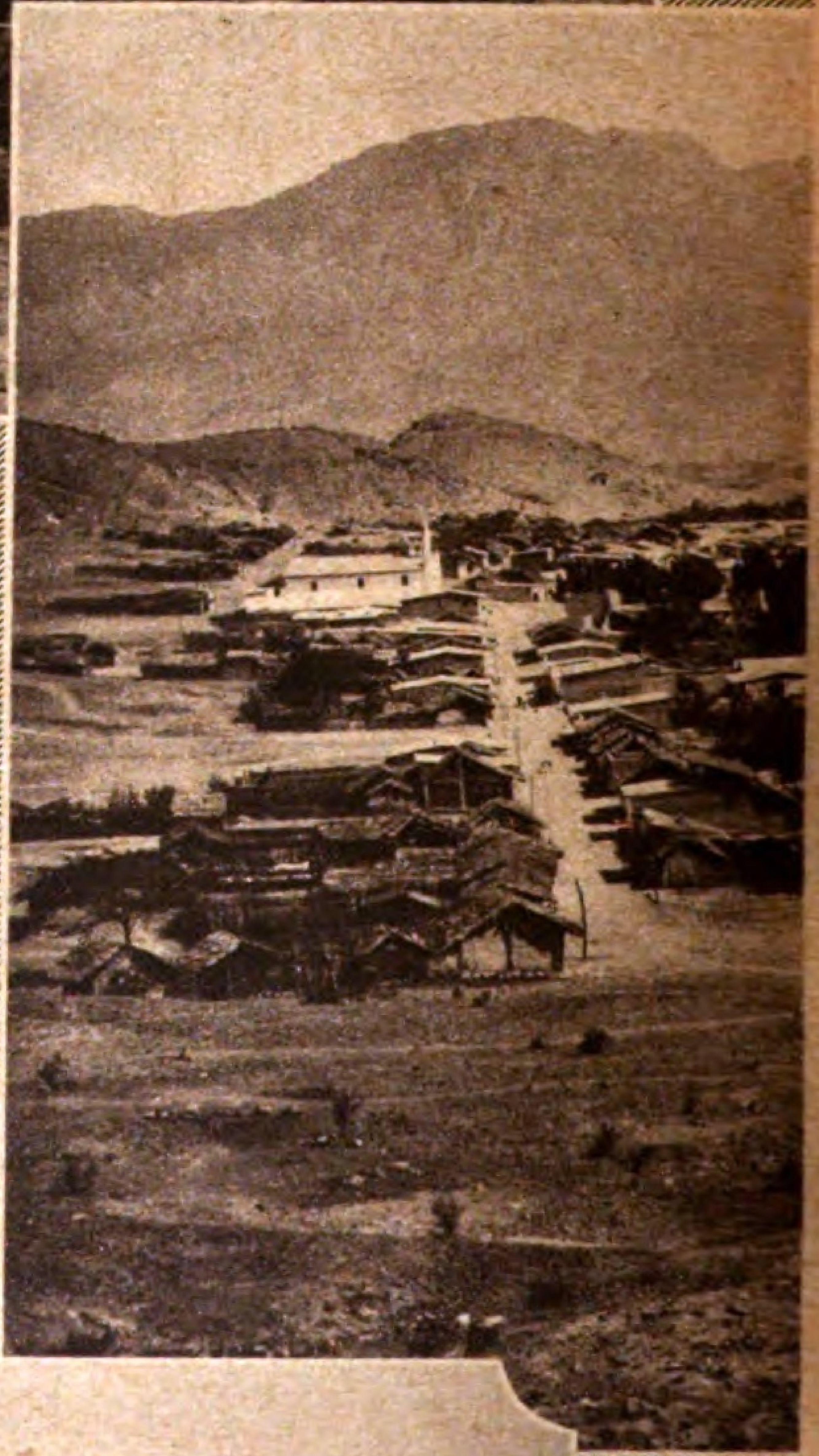






裸一貫、血と汗を資本として萬里の異郷南米に雄々しく奮闘する我が同胞は七萬餘人に及んでゐる。或時は苦熱と闘ひ或る時は悪疫に悩まされつゝ孜々營々たる活躍振りは涙ぐましいものがある。(1)ペルー國サンニコラス砂糖耕地に於ける日本人農夫の甘蔗採集の實況、馬上右は同地日本人總監督坂入武雄氏。(2)邦人が多數居住して恰も日本人町の觀あるペルー國チョンゴヤツペ町の全景。此の附近は米の主産地である。(3)ブラジル國コチア殖民地に於ける日









本人會長武部繁氏一家が馬鈴薯を栽培して居る處。(4)ブラジル奥地に於ける我が同胞の最新式大農法による耕地整理。かうして山も野も見る〳〵うちに沃野と化してゆく。(5)南國産の果物中美味の王と云はれ珍重さるゝドリアン。右は日本婦人、左はシャム婦人。(6)ブラジル、ペルー等に於ける日本農民創業當時の住居は恁う云ふものが多い。祖國より何等の後援なき此等の人々は簡素な住宅、粗末な食物に甘んじて最後の榮冠を得るまで健闘するのである。







白菊かダリアか。妍を競うて咲き出でた名花五輪。今歐米で評判の美人である。
(1)墺太利の代表的美人コリン・ウオード嬢。
(2)米國一と折紙をつけられた美人デランダー嬢。

(3)伊太利を飾る名花ヴエルガ公夫人。政治的にはムツソリーニの片腕として活躍してゐる。
(4)巴里切つての典型的美人と謳はるゝミスタンゲツト嬢。

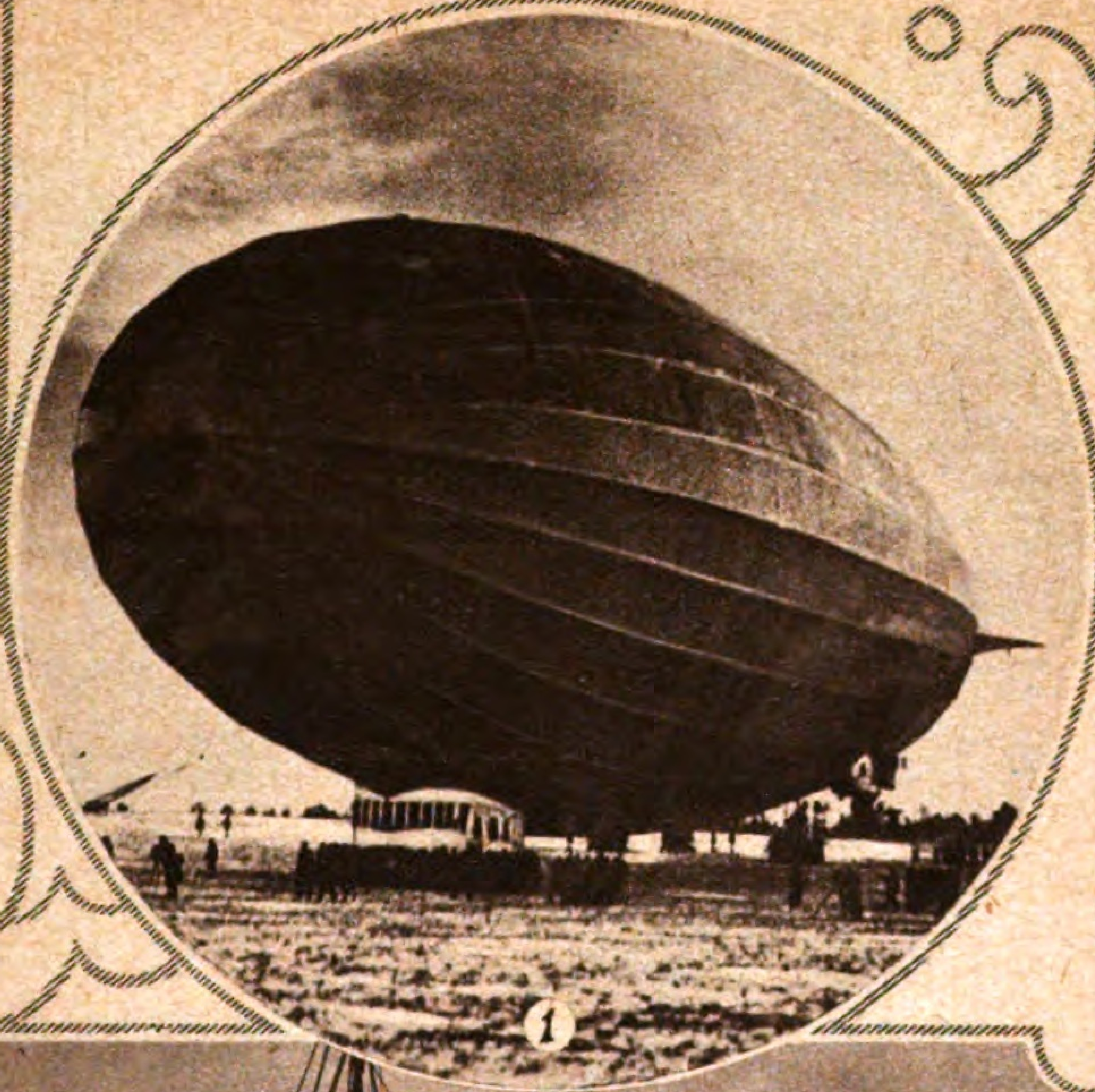






(5)西部の野に香ふアメリカインデアンの美女ハルグラットの容姿。おゝその瞳は無限の憧れに輝いてゐる。

謎の北極！魔の北極！その神秘を究めんとして約四百年前英國の冒險家セバスチアン・カボットが北極探險を敢行して以來、幾多の探險家を送り、そして幾多の犠牲者を出した。併し人の力は強い。遂に一九二六年アムンゼン翁、ノビレ少將等により極地横斷は成功された。更に今年五月ノビレ少將一行は飛行船イタリア號に依り再度の極地征服に成功した。が併し不幸にも同月下旬濃霧と逆風に襲はれたイタリヤ號は氷山に衝突して機體を大破し、更に火





②



セバスチアン カボット（英）



③







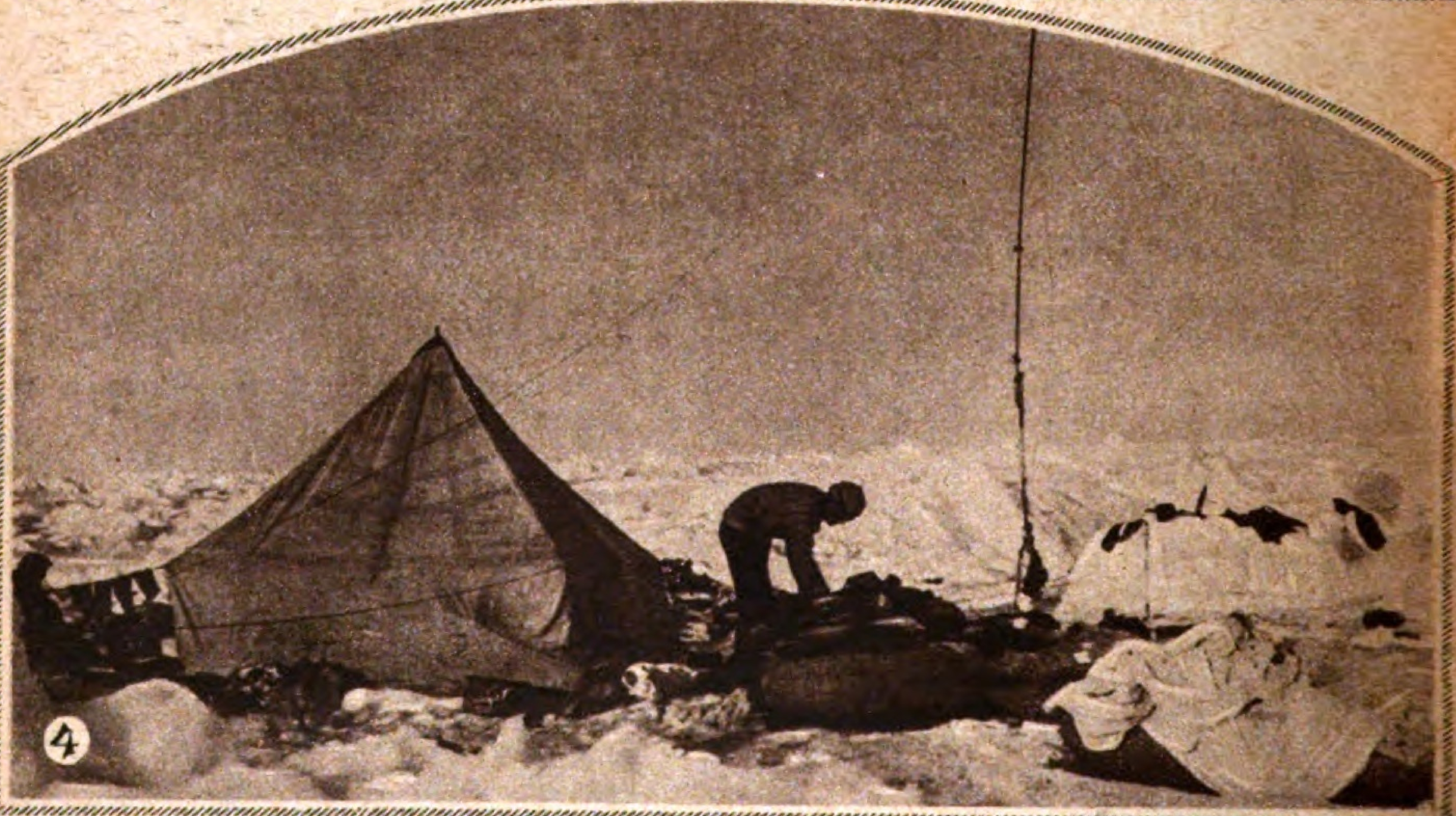






アムンゼン（諾）　サー・ゼームス・ロス（英）　サー・ジョン・フランクリン（英）　ロバート・ペアリー（米）　フリートヨフ・ナンセン（諾）　キャプテン・クック（英）









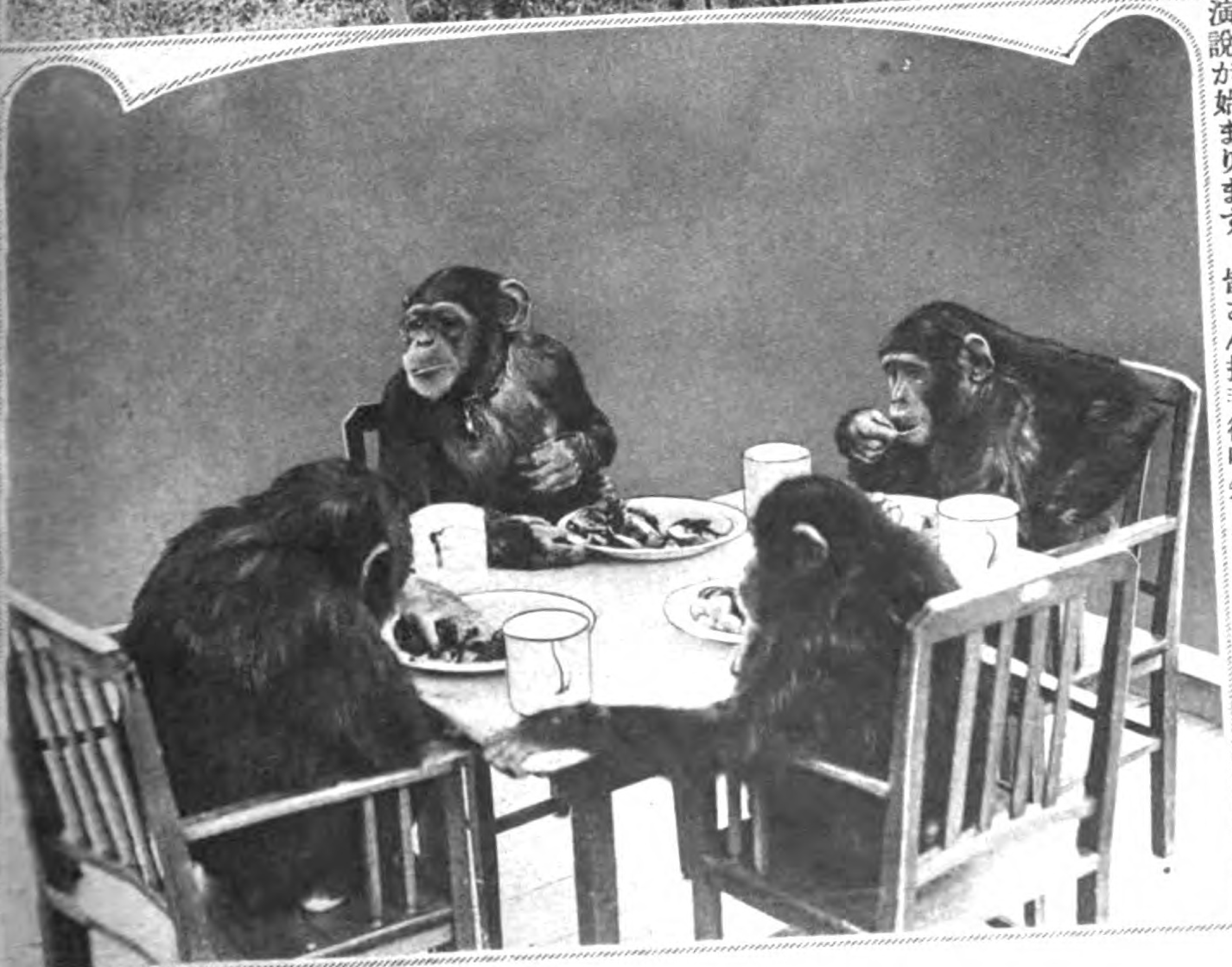
ウムベルト・ノビレ(伊)

災を起して根據地歸還が不可能となつたのである。(1)遭難した飛行船イタリア號。(2)探險隊の根據地スピツツベルゲン群島の北端。(3)危險を冒してノビレ少將救助に向ひつゝある瑞典の汽船クエスト號。(4)氷上に赤テントを張つて救助を待つて居る一行。立てる竿は悲報を全世界に傳へし無線電信の柱。(5)救助された刹那のノビレ少將(右)と愛犬。左は救助の殊勳者ルンデボルグ大尉。尚其他の人物は從來北極探險に活躍したる主なる人々。

人まねこまね

たつた今結婚式から歸つて來たお猿さんの新郎新婦が、記念の撮影を致しました。新郎はタキシードにシルクハット、花嫁は白絹の婚禮着。立派な衣裳だが邪魔つけで仕様がないと云つて居ます。折角お祝ひに頂いた花束もウツカリすると千切つて了ひさうです。下の寫眞はお猿さんの宴會です。最も文化的モダンボーイの集り。もう直き食卓演説が始まります。皆さん拍手御喝采の程を！





英雄待望論

田園に、學園に、海濱に、
第二の南洲、第二の龍馬、第二の松陰出でよ！

鶴見祐

素晴しい時代が我々を待つてゐる！

大英雄出でよ！大思想生れよ!!

明治維新を成し遂げたのは皆、貧しき青年たちであつた
昭和維新を大成すべき大人物は今何處に居るのだ？

『他人は鏡のごとしこれによりて我はわれ自らの姿を見る』……エマーソン

御申込次第圖書目録進呈

輔氏の大快著出づ



見よ！『英雄待望論』——全世界の大偉人
大思想家が、熱誠熱血の筆に描き出され
讀者の心胸躍らざらんとするも能はず！
眞に大識見！大感激！之を讀んで奮起せざる者なし

犠牲的大廉價！！ 四百頁の大冊 **五十錢**（送料八錢）

内容

實行界の英雄（人物篇）

◇カヴール（伊太利統一）
◇ビスマーク（獨逸統一）
◇豊太閤（日本統一）
◇シーザー（羅馬統一）
◇ナポレオン（佛蘭西統一）
◇リンカーン（米國統一）
◇西郷南洲
◇ディスレリー（大英帝國の完成）

思想界の英雄（思想篇）

◇アリストートル
◇マキアヴェリー
◇ジョン・ロック
◇ジェームス・マディソン
◇ルソー
◇カール・マルクス
◇プレートー
◇バーク
◇ジョン・スチュアート・ミル
◇マヂニー
◇トーマス・ヒル・グリーン

日本の大國策（國策篇）

◇新東方策の提唱◇世界の現勢日本の事情◇支那◇比律賓◇南洋其他◇英雄的事想
◇大社會の完成と天才の出現

東京本郷 大日本雄辯會講談社 振替東京三九二〇

御申込次第圖書目錄進呈

仰げば彌々尊し！大聖帝の御面影！

家寶として子々孫々に傳ふべき大聖典！

全卷悉く感動感激！此際毎戸一册はお備へ下さい。



實物縮寫

極上製

明治大帝

附 明治美談

装幀＝白羽二重に模様押出し、背は鹿革に金文字入、天金堅牢美本。

函＝新工夫の折疊み式、表は唐草模様の最上緞子張り。

用紙＝口繪百二十斤、本文百斤といふ今迄見られなかつた最上等紙。中味だけで厚さ二寸一分、重さ三百五十匁といふ大册です。

◇高尚典雅、書齋客間等の装飾として此上なく、身を修め、家を興し、處世に成功に無二の良書。

定價 五圓 送料廿四錢

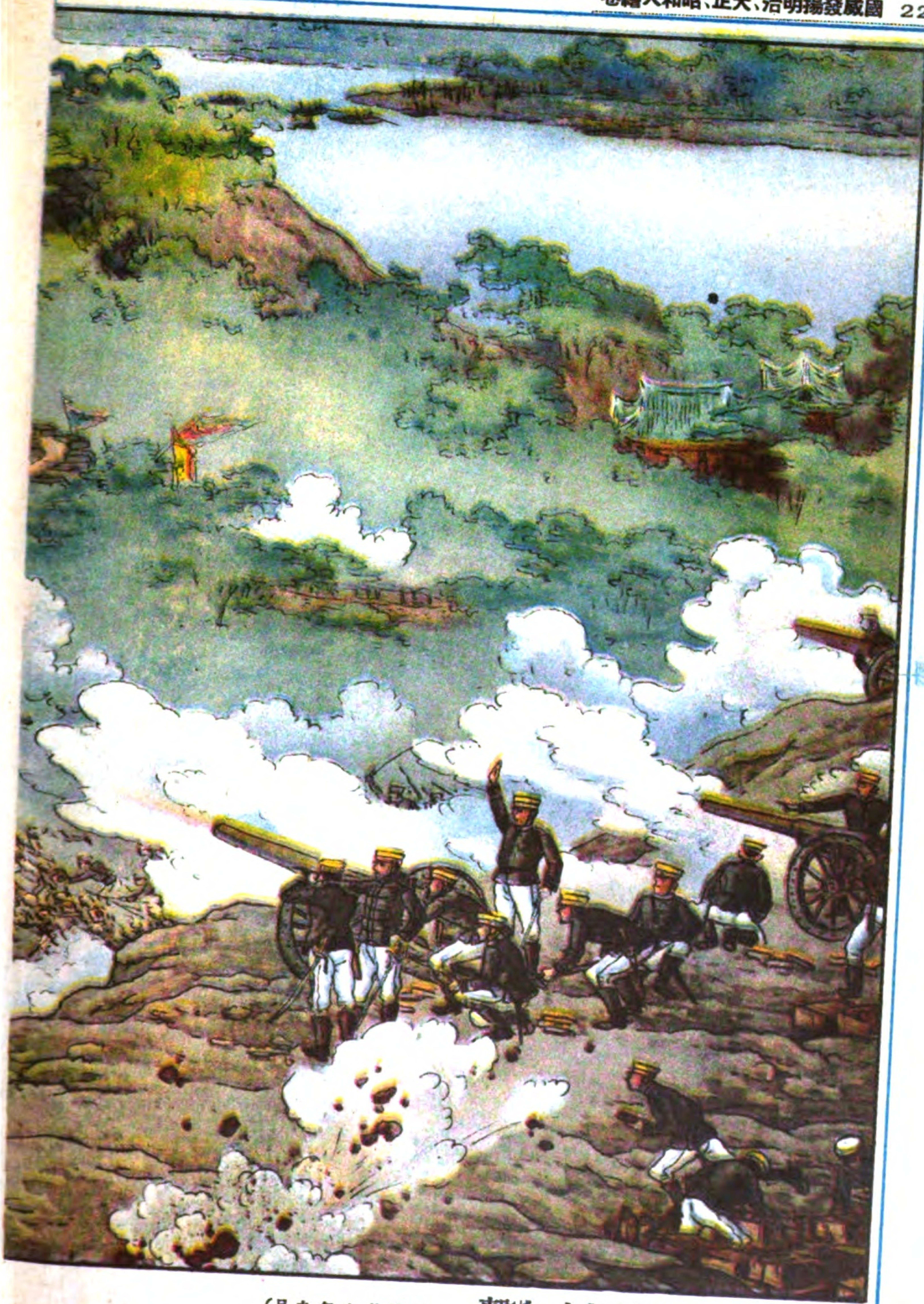
部數に限りあり、再びお手に入りません。

火急、御求めを乞ふ！

東京本郷 大日本雄辯會講談社 振替東京三九三〇



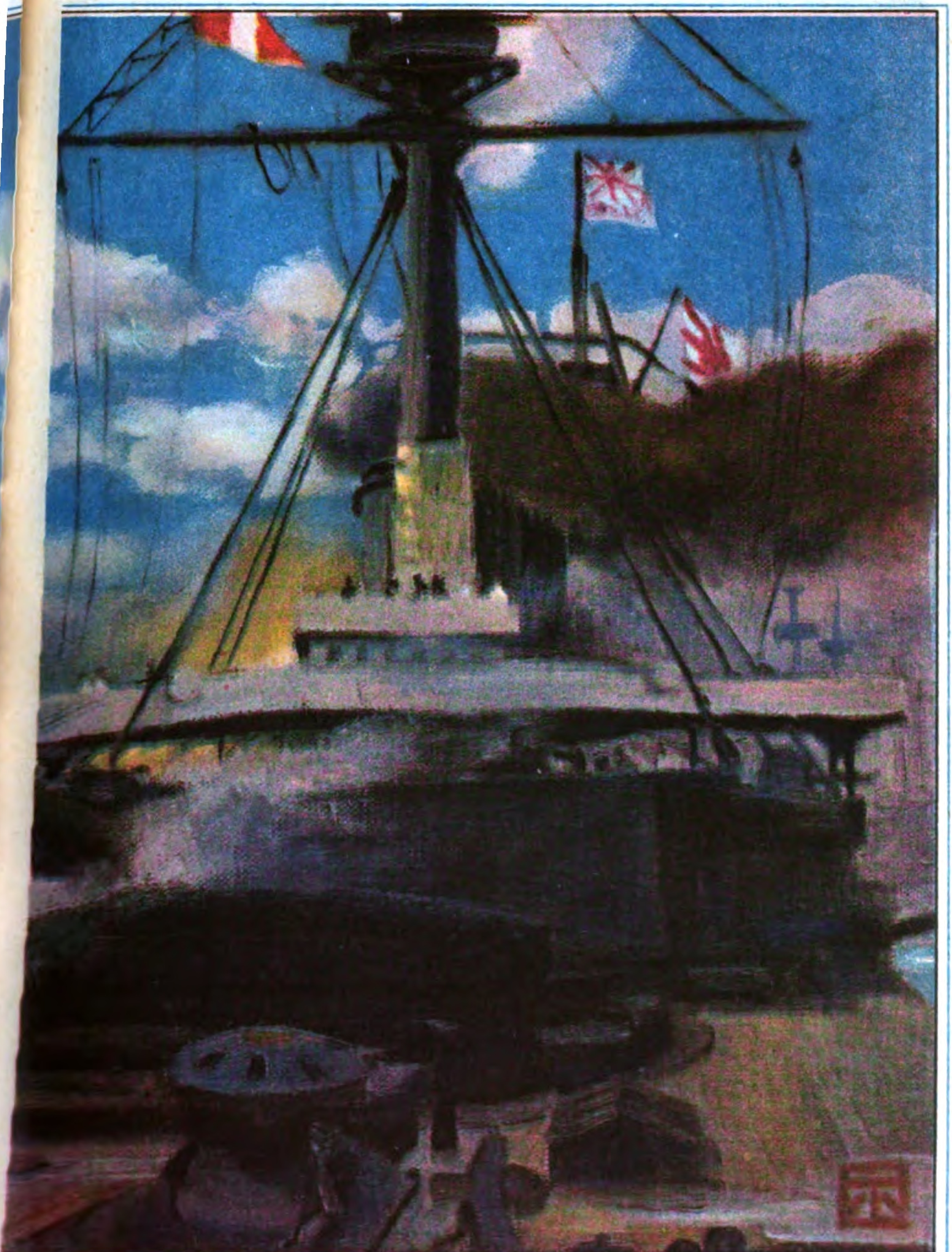
五姓田芳柳



平壤攻撃 (明治廿七年九月)



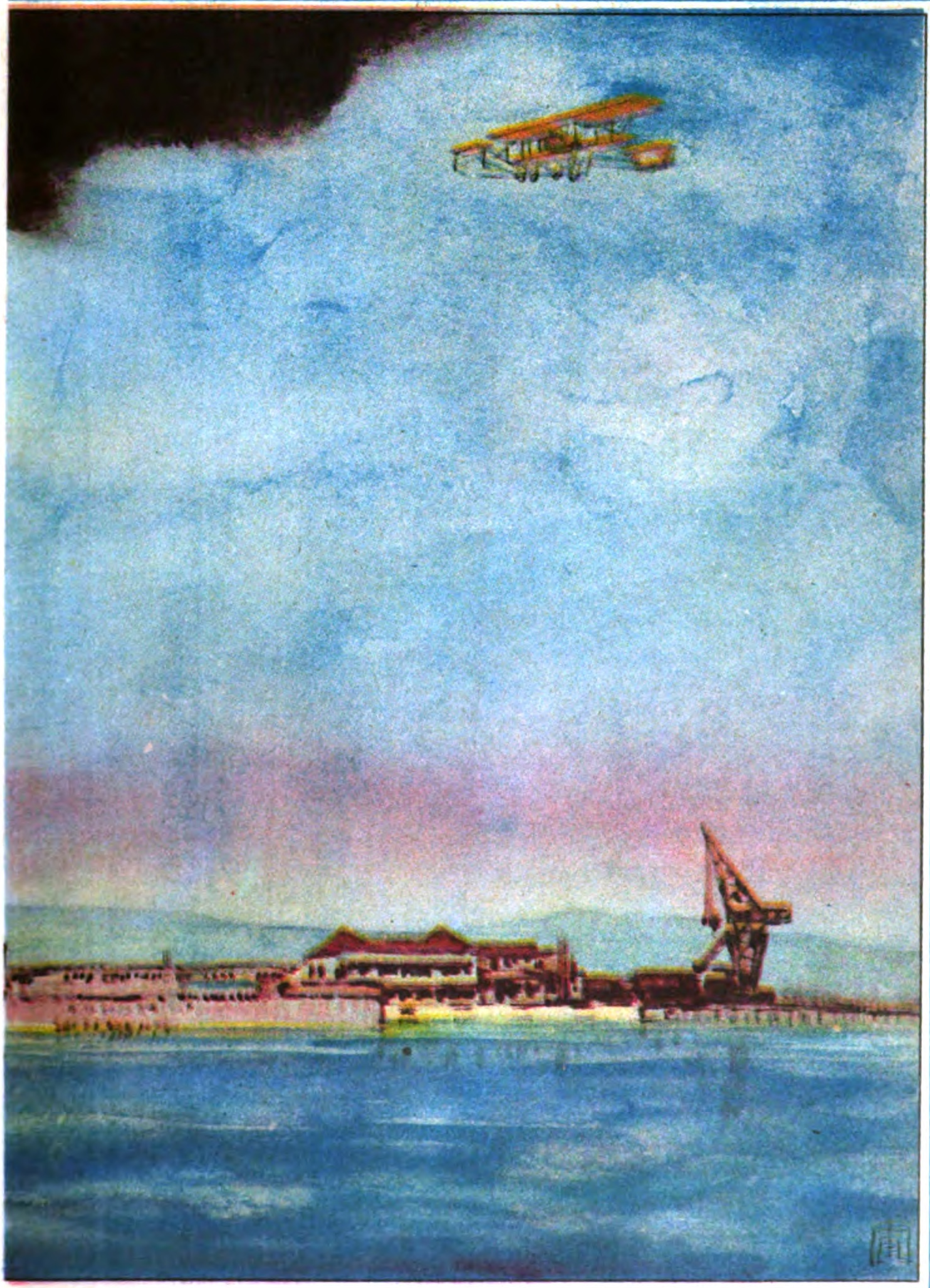
尾竹國觀



日本海大海戰　（明治三十八年五月）



中村不折



青島空中戰（大正三年八月）



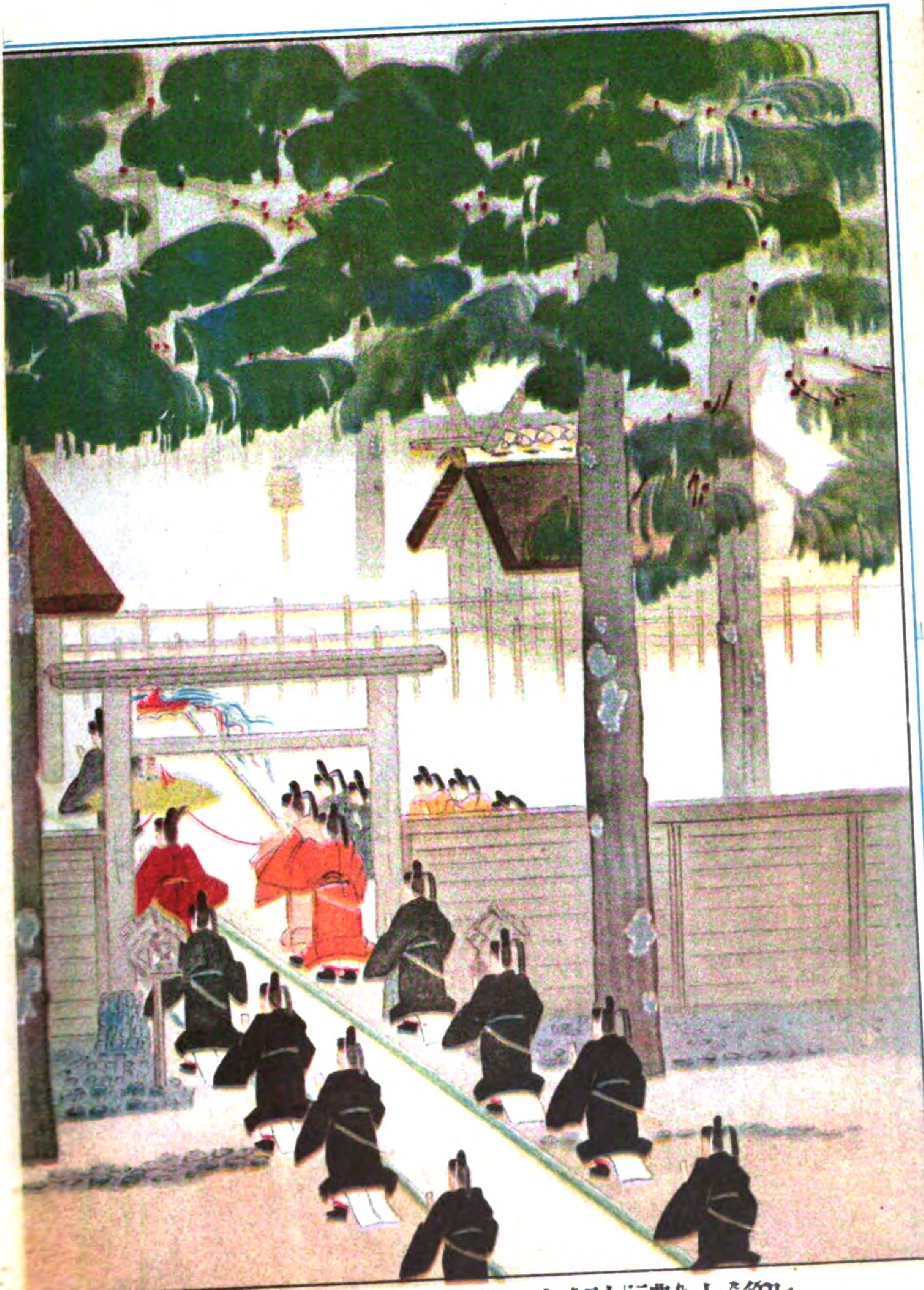
石川寅治



御外遊（大正十年三月）



小寺健吉



御大禮神宮御親謁　（昭和三年十一月）



山口蓬春



國民歡呼！

辻永

佐々木邦先生大傑作集

◎文學青年の話＝文名を衒すには先づ作品を發表せよとある。然るに作品を發表するには文名を衒してゐないと書店や雜誌社が相手になつてくれない。何うすればよいのだらう？

◎首席と末席＝首席卒業生と末席卒業生を主題とし、活社會の道理ある矛盾を躍如たらしめた大傑作！ 笑ふにはあまりに眞摯であり、悲劇といふにはあまりに滑稽である。

◎ゴンドラ村＝東京丸の内へ二時間といふ遠郊、そこの大根畑へ有りつたけの身上を注ぎ込んで文化村を經營しようといふ度胸のいゝ文學士と新夫人をめぐつて滑稽百出！

◎百圓級の人々＝知識階級で一番多數を占めてゐるのは月給百圓臺の人達である。上は全く詰つてゐるし、下へ落ちれば役に立たない、ラムネの玉だ。その苦しい生活の内輪話。

◎大女の話＝二十貫あるが故に小さくなつてゐた女房が、又その一周り大きな女房と肝膽相照らして以來、良人に對する態度をダン／＼變へてゆく話。

◎大問題小問題＝隣りの娘の死からガツカリした男が、平社員生活十五年の不平不滿を捨てゝ一躍重役となり、人生の煩悶は小問題を大問題と思ひ込むから起ると大悟一番した話。

◎美人論の夕＝婦人は皆自分を或程度の美人と信じてゐる。化粧品屋が立ち行くのもその爲だ。この故に婦人の前で特に或美人の話をするものでないといふ話。

◎昭和派出男會＝派出婦に對する派出男。女房に頭の上らない亭主の爲には小言部もあるといふ新職業、知識階級の失業者を利用しようといふ珍計畫、奇抜で眞劍な物語。

◎駄辯無任所＝自分で理窟をつけて、何でもないことに感心してゐる男、相手になつてゐたら果しのないといふ話。現代人氣質を痛快に諷した一讀失笑、苦笑の力作！

◎正月決心＝誰しも來年こそはと思ふ。一年の切替へは人間を人間以上にする。年末大いに發奮する所あつて五つ六つ素晴しい大決心をした會社員の話。

右十大傑作を集錄せる

『世間相人間相』

●大好評十二版！ 〔四六判布裝函入美本 定價貳圓參拾錢＝送料拾四錢〕

人情の機微に通じ、活眼を開かんとする者必讀！

●發行所 東京本郷 大日本雄辯會講談社 振替東京三九三〇

申込次第圖書目錄進呈



御大典に因める新洋髪いろ〳〵



現代評判男物語



姿を美しく見せる

幸福な結婚、美しい容姿、樂しい家庭を望まるゝ方は

『婦人倶樂部』を御覽下さい！

十一月號には各地婦人間で大評判の特輯記事滿載！

▲皇室及び皇族御寫眞集

▲お互に云ひにくい妻への註文、夫への註文

▲婚期にある娘の心得かう云ふ娘なら緣談が降るほどある

◎結婚披露式及び其の前後に於ける新郞新婦の心得

◎外から疲れて歸つた良人はどうすれば滿足するか？

◎夫婦喧嘩のあと、仲直りの持ちかけ方

▲驚くべき特效ある心臟病の奇藥

衣裝着方の秘訣



赤ちやん十二ケ月
標準發育早見鑑報



左右の寫眞は本號結婚
披露式より



▲姙娠中の不注意から思はぬ大失敗

▲名醫も見はなした愛兒の百日咳を全快させた大妙藥

◈素人にも出來る高級化粧品の作り方

◈太り過ぎた人背のひくい人の姿を美しく見せる衣類の仕立法

◈少い毛を豐に見せる髮の結び方

▲今秋大流行實用向き手藝案内

▲ほめられる人、きらはれる人

▲あの頃の思ひ出話（名流婦人執筆）

此の外素敵に面白い小說、講談十數篇滿載

▲定價八拾錢（送料四錢）東京本郷 大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

御大典記念 大懸賞當選者發表

事實美談

〔一　等〕（賞金壹百圓）

法俗愛敬　東京市外下目黑三五三　挾間祐行

〔二　等〕（賞金五拾圓）

行路の心　姬路市南畝町四三五　上野重

誠　心　大阪市西成區西皿池町　尾崎新太郎

〔三　等〕（賞金貳拾圓）

淚の花輪　宮城縣宮城郡利府菅谷　伊藤庄右エ門

皇后宮の御德に　東京市外瀧之川町二一　鹿島彌吉

兄弟賴むよ　大阪市東區東雲町　本田正直

兄弟工場　大阪市天王寺第七小學校　龜井虛無郎

坑夫より　佐賀縣小城郡牛津町工場　瀨戶多美

決死の飛行傳令　新潟青山病院　丸山嵐潮

村中魂の發露　新潟縣岩船郡村上本町　山縣隆

事實美談　橫濱市中區久保町　保坂雋次

鐵腸の人　名古屋市南區中田町　小野愛山

莊內鄕土の誇　山形縣飽海郡高瀨村　石垣樂山

〔四　等〕（賞金拾圓）

○小さんの人間味　長岡定敏（東京）○九州男兒の意氣　井上秀雄（千葉）○嗚呼軍神石上中尉　山口忠敏（北海道）○美しき爭議　千野潤次郎（山梨）○貧しき家庭の美談　加藤駒太郎（福岡）○事實美談　岡部惠三（住所御一報を乞ふ）○無題　小池光子（新潟）（艱難は人を玉にす　周藤快立（島根）○吾が鄕土の美花　高松政吉（栃木）○孝子河野寅態　小橋藤義（鹿兒島）

〔五　等〕（賞金五圓）

○君村克（茨城）○野田繁喜（大分）○橋祐敬（愛知）○水上辰夫（千葉）○小島春水（靜岡）○岡本寅雄（佐賀）○元川賴雄（新潟）○松浦悠一（島根）○村井昌雄（青森）○小島春水（靜岡）○竹內四郎（兵庫）○西田保人（山口）○加藤ますを（福島）○村野哲然（山口）○大橋小一郎（滋賀）○佐々木十三穗（宮城）○松橋源吉（長野）○三森幸作（兵庫）○吉田昌興（神奈川）○西谷喜代治（神奈川）○岸幹雄（大阪）○越智鶴逸（愛媛）○萩村北辰（北海道）○福田平八（島根）○竹村明世（高知）○茂木聽（東京）○篠原寅市（兵庫）○大塚千太郎（兵庫）○渡邊正直（島根）○淺井繁三（大阪）○國本成治（山口）○唐木健（靜岡）○佐藤文雄（山梨）○柏原政雄（東京）○佐藤元亭（岩手）○大竹倜造（新潟）○野明爲義（長野）○村上長人（大阪）○瀨幡貞（新潟）○保田要（岡山）○山田健二（滿州）○大谷正志（神奈川）○高橋勝永（新潟）○寺田幸馬（高知）○眞木要（東京）○川崎枯念（住所御一報を乞ふ）○松下ふじ繪（靜岡）○今林弘行（和歌山）○鴨下眞佐次　東京　○渡邊藤四郎（靜岡）○山本澄子（愛媛）○鹽見正雄（京都）○三谷勇喜（高知）○竹內源太郎（千葉）○朴鉉珏（朝鮮）○森晴夫（長野）○柴田甚太郎（福井）○山科隆吉（大阪）○勝木文次（福岡）○堀內雄三（群馬）○許斐寅義（福岡）○杉本與一（大分）○飯塚良輔（靜岡）○坂入香（茨城）○久野正明（名古屋）○清原恭壽（兵庫）○井上義郎（滋賀）○內田照治（愛知）○新田清（茨城）○鈴木剛胄（靜岡）

○小川廣吉（東京）○大橋辰治郎（宮城）○乾よ

し子（大阪）○宮田利七（熊本）○高橋水村（新潟）○愛木納子（靜岡）○淺野義勝（大分）○赤松一男（群馬）○鈴木淸男（神奈川）○明石保（岡山）○遠藤正雄（岐阜）○桑原忠吉（福島）○中村金次（京都）○山田健二（滿州）○藤木貫地造（神奈川）○齋藤英造（青森）○瀧田淸（新潟）○奧田直恭（北海道）○杉浦綠雨（靜岡）○梅山賢一（三重）○大坂壽一（大阪）○山下源造（愛媛）○原田義雄（山口）○松原花子（石川）○唐橋恒子（靜岡）○城戸千代子（福岡）○鈴木千代子（茨城）○松尾紫（福岡）○山崎文治（福島）○小川荒太郎（愛知）

理想小説

〔一　等〕（賞金五百圓）

銃に籠る忠烈　鹿兒島縣揖宿郡喜入村　鶴島讓介

〔二　等〕（賞金貳百圓）

金曜會　群馬縣多野郡藤岡町一一六　井上卯吉

軍歌　福岡縣若松市山手　井上强一

正しき心　千葉縣安房郡館山町　飯島虎二

〔三　等〕（賞金壹百圓）

精勤章返上　門司市花山道一丁目　林潤

チウチュク先生　愛知縣海部郡甚目寺村　山田時治

親友　東京府下西巣鴨宮仲　古川文穂

白雲山　東京市外千駄ヶ谷五〇一　青木彌太吉

不二の國　福岡縣田川郡添田町　大森重隆

〔四　等〕（賞金拾圓）

○試練に微笑む　武本璋一郎（大阪）○遠足　長澤才助　橋口靜香（廣島）○地に一つのもの　石坂八重子（新潟）○（東京）○空は晴れたり　柳沼七郎（東京）○お姫様の首飾　祖國愛護へ！　小原英雄　柳沼まさみ（東京）○悅びの朝　中澤萍遊（北海道）○（高知）○小さな革命家　柳沼まさ　無題　大河內純（東京）○故鄕の春　み（東京）○なみだ　柴田珪二（東京）○更生　香取久賀男（東京）○凍原舞曲　寺部造尋（福岡）○美しい心　山口忠敏（北海道）○正義は勝つ　高橋兵吉（山口）○憤激の夜　神谷泰任（山梨）○熱情時代　大西等（東京）○若人は往く　松岡雅（廣島）○釋淨藏の法力　馬鳥逸子（三重）○民衆のために　池田保（廣島）○愛の雄飛　赤澤世紀（東京）○立花宗茂　本田國輔（北海道）○淋しい慈母　前原みよ子（廣島）○輝く鑛山　手島照一（愛媛）○橋本先生と二人の生徒　佐野浩洋（栃木）○幻に見た母　切山春夫（岡山）○皇帝の民　富岡弘（東京）○小勇士　市東五良（千葉）○梅雨晴れ　齋藤たつ子（東京）○愛の合唱　津田晃（宮城）○興國の大雄辯　藤原謚一（岡山）○嘘十年　石本二路（新潟）○小さな紙片　富岡弘（東京）○輸血　米澤美丸（和歌山）○美しき人々　村上洋（東京）○永遠の道　高木靜哉（東京）○輝く日　中田千壽代（山梨）○野に咲く花　富田繁太郎（滋賀）○主無き便り　玉井靜子（鹿兒島）○赤心　横川春野（香川）

愛國歌

〔一　等〕（賞金壹百圓）

大阪市北區絹笠町大江ビル、國民教育映畫協會內　佳充一路

〔二　等〕（賞金五拾圓）

大阪市東區內淡路町二ノ五西岡方　雪野驍

東京市淺草區柳橋通下平右工門町九　岡村喜水

〔三　等〕（賞金拾圓）

福岡縣企救郡東谷第二小學校　寺部造尋

岡山市島田町　松本一太

大阪府中河內郡南高安村　杉本龜次郎

高知市外一宮村米元　山崎芳

神奈川縣藤澤町九九五　梶鉎之助

大阪市住吉區阿倍野一一二　久納伊三郎

千葉縣東葛飾郡松戶町三ノ一七七四　高橋一二

東京市外王子町字下十條一二〇九　栗原玲郎

京都市上京區新町頭　松尾南洲

大分市大道町五丁目　後藤栖根

を練るに此の名著

◇新井石禪師大講演集　定價貳圓　送料金十錢

◇高田早苗博士大講演集　定價貳圓　送料金十錢

◇道重信教師大講演集　定價壹圓八拾錢　送料金十錢

◇下村宏博士大講演集　定價貳圓　送料金十錢

◇模範的式辭挨拶五分間演説集　定價壹圓八拾錢　送料金八錢

◇青年雄辯集　定價貳圓　送料金八錢

◇第二青年雄辯集　定價貳圓　送料金八錢

◇加藤咄堂先生著　雄辯の新研究　定價壹圓八拾錢　送料金八錢

◇泰西雄辯集　定價貳圓　送料金八錢

會講談社　振替東京三九三〇　（もし書店に賣切の節は本社へ御註文下さい）

讀め!!

俸給生活者諸君
青年學生諸君
商工業家諸君
思想家諸君
教育家諸君
政治家諸君

巨人フォードの言行は、その儘修養の要諦である。事業經營の大教訓である。而して又社會改善の實行案である。

即刻一本を備へよ!

自動車王フォード大自敍傳

今日及び明日

大好評九版＝加藤三郎氏譯



目次の一部

◎早大總長高田早苗博士曰く……

私は本書を讀んだ際、人類が長い間望んでゐたユートピアが遂にフォード氏に依り實現されたと思つた。眞に敬服すべきものである。若しあらゆる事業がフォード氏に學ぶならば、人類社會の幸福蓋し計り知るべからざるものがあらう。多數の共鳴者あるべきを期待する。……この外各方面名士悉く推奬!

四六判函入・定價金貳圓廿錢・送料拾貳錢

東京本郷駒込坂下町
大日本雄辯會講談社發行
(振替東京五九三〇番)

御申込次第圖書目錄進呈

大自然

小村欣一

今日の日常生活は、あまりに繁煩に、深刻になりつゝある。この生活の苦惱から眞の人間味に立ち返るには、大自然の呼吸に觸れ、自然に學ぶ他に途はない。

大自然、それは限りなく偉大なる心の棲家であり、靈魂の搖籃である。昔から、大哲學者、大詩人、大英雄は、この大自然の偉大なる教なくしては生れなかつたのである。





杉浦先生と山縣公

佐藤紅緑

大正十二年の正月、私は歐米漫遊を思ひ立つて其の御暇乞に杉浦重剛先生の病床を訪ねた、先生は奥の二階の居室に打臥されて居たがにこやかに私を迎へて下すつた。枕頭には奥様や令息が侍して居た。先生は私を見て床の上に起上り非常に愉快さうに御話された。其の時は丁度日本政府が羅馬法王へ答禮使を派遣しようといふので右費用十一萬圓の豫算を議會に諮らうとしたのである、攝政宮殿下が伊太利へ御旅行になつた時、羅馬聽は熱狂的に歡迎した。其の答禮として特使を派遣するといふ事は國としての禮義である、だが此に一難關がある、羅馬加特力教に日本が好意を持つといふ事は日本教徒の大打擊である、果して佛教徒は隱然として暗潮の如く反對運動を起さうとした。

又一面に於てある政黨は反對した、その政黨は北陸地方其他佛教の盛んな地方に根據を有つて居る、佛教徒の機嫌を損じては地盤が危ふくなる。

此案の成行に就ては全然門外漢の私も頗る緊張した氣持を以て一喜一憂して居た。私は羅馬法王が殆んど前例にない歡待を以て殿下を奉迎した事を聞き、羅馬加特力教徒が世界の津々浦浦に勢力を占め、特に米國には多大の力がある事に照合せて見ると答禮の意義以外に其處に大なる意義がある樣な氣がした。

杉浦先生は私に訊ねた。

『答禮使の一件はどうだらうな』

私は時下の形勢を申上げた。

『不都合な事だ』と先生は怫然として言つた。

『殿下が外國でいろ〳〵御世話になつた、其の御禮として使者を遣はさうといふに反對する奴があるもんか、禮を知らんか、

禮を……日本を非禮の國にするつもりか、國家よりも佛教や政黨が大切だといふのか』

先生の瘠せ衰へた顏はさつと赤くなつた、私は先生の病氣に障る事を恐れた、奧樣は心配さうに先生を見上げて居た。先生も一時の昂奮に疲れたと見えて直ぐ口を噤んだ、さうして暫くあつて、

『困つたものだ』と獨語の樣に呟いた。奧樣が御茶を出すと先生は白湯をくれと言つた、白湯を飲んでから急に靜かになつた。其の顏は次第に敬虔になり、平和になると私に低う言つた。

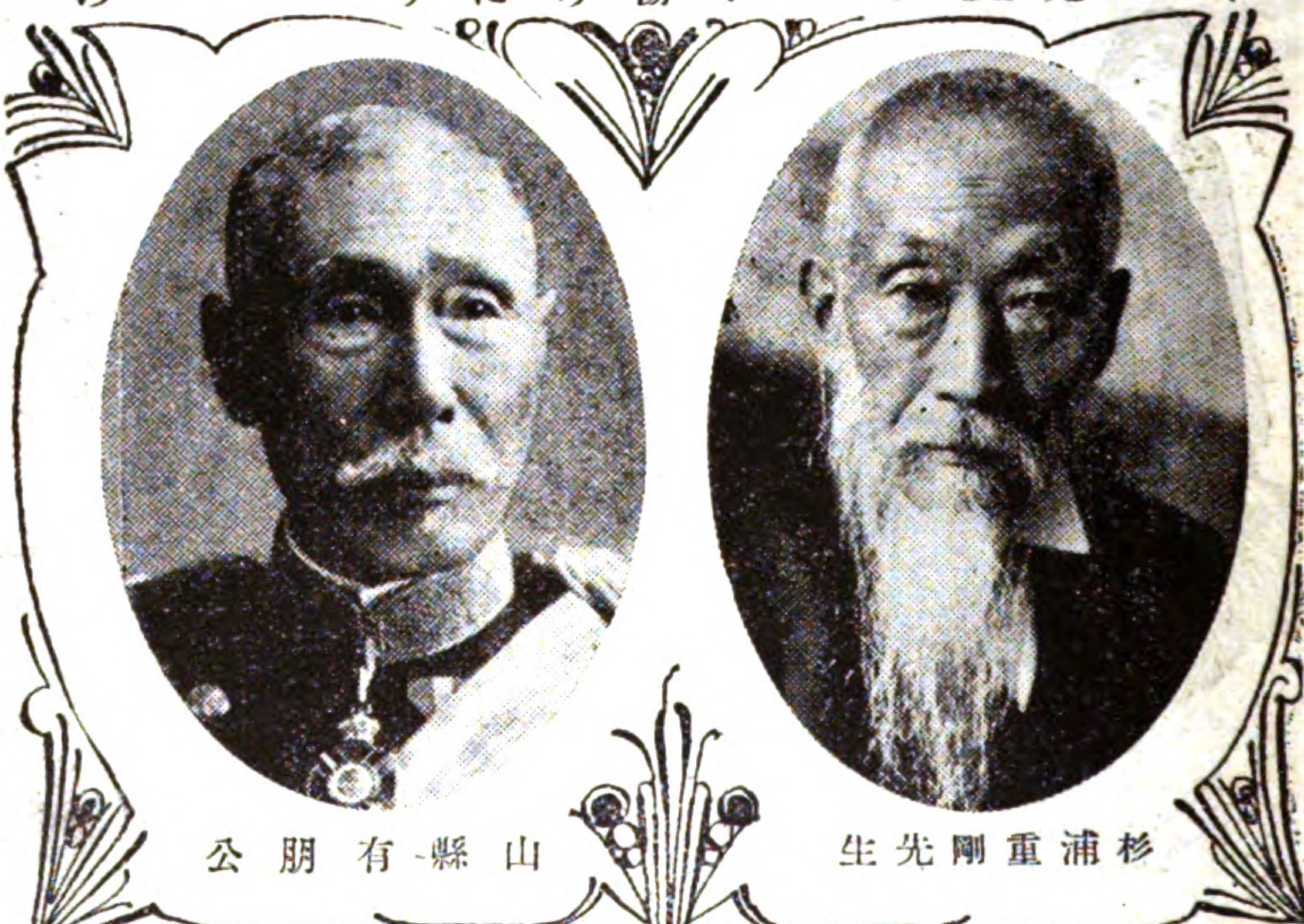
『併し幸福だね』

私は何の事だか解らなかつた。

『私も幸福だが君等も幸福だ、今の若い人は皆んな幸福だ』

『なぜですか』

『攝政宮殿下は御聰明でいらつしやる』



杉浦重剛先生　山縣有朋公

私は靜かに頭を低れた。

『日本の前途は益々幸福だよ、さうぢやないか、あんなに御聰明な殿下を奉戴する國民は……如何なる事よりも幸福ぢやないか、如何なる事よりも……』

先生は默つた、私も默つた。實際私も先生の膝下で此の御話を聞いた時ほど幸福を感じた事はない。と先生は何か憶ひ出した樣に言ふ。

『さうだ、君に見せたいものがある、おい羽織を出してくれ』

奧樣は黑紋付の羽織を先生に着せた、先生は床の上に立たれた、倒れはしまいかと奧樣は先生の背後に兩手を出したまま從いた。先生の足取はしつかりとして居た。床の間に古びた鞄——二十年ばかり前に醫者が能く用ひた樣な巾着形の小形の鞄——がある、先生は其れを開いて日本の罫紙——二枚綴ぢ合せたもの——を取出した。さうして再び床に復つて私に見せた。

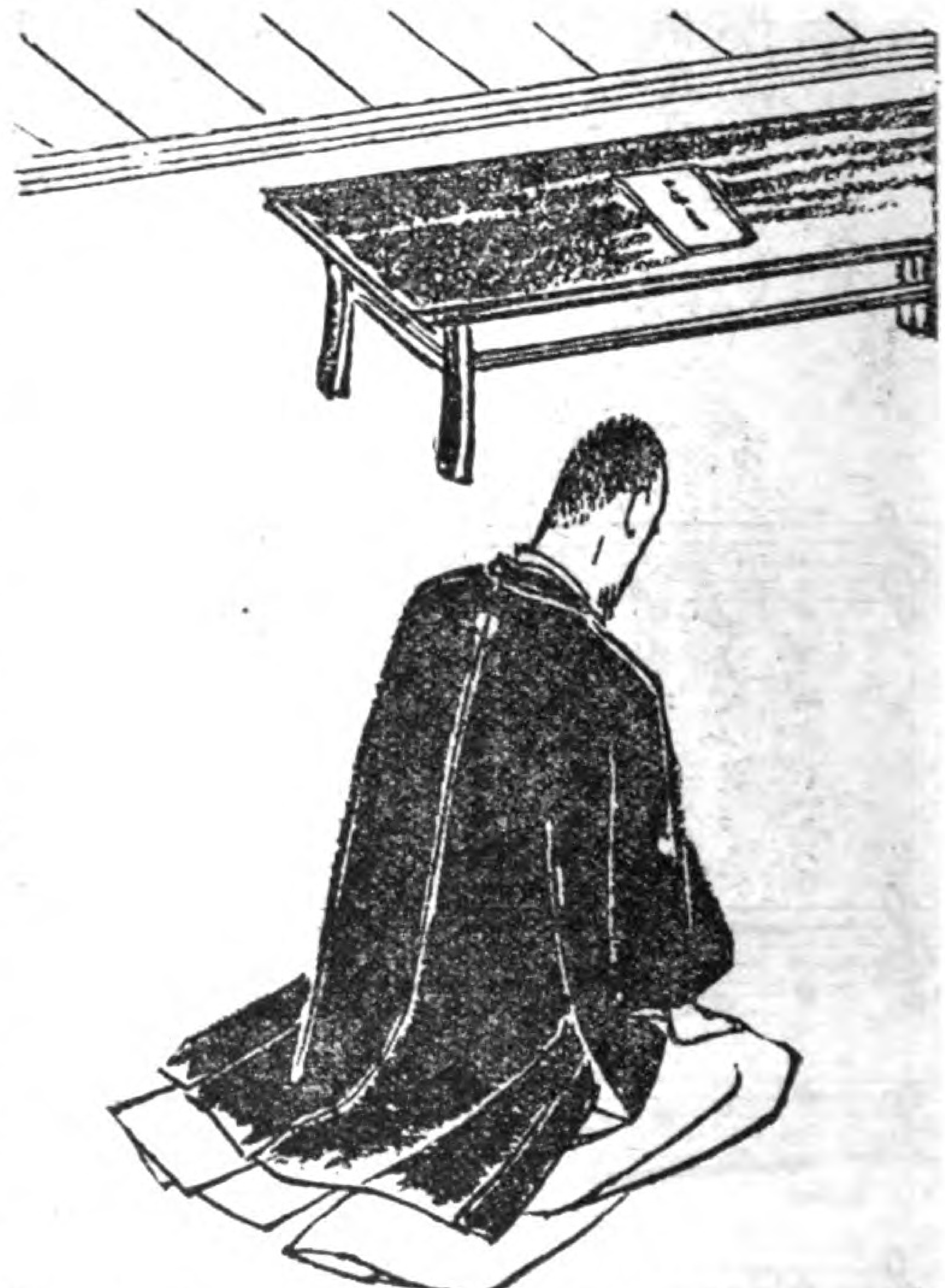
『これはな、攝政宮殿下の二十歳の時の御文章だ』
私は膝を改めて其れを戴いた、さうして拜讀した。
『どうだ、實に御立派なものだらう』
私が五六行しきや拜讀しない中に先生は私に答辯を催促する
『どうだ』
『はあ』
幾度も恁う返事しながら私は拜讀を續けた。終りには、『小村欣一拜寫』と記してあつたので小村侯爵の手蹟だと解つた。
申すも畏こき事ながら御文章の御趣意の雄大、措辭の精勁は無論の事、東西に亘つての該博な知識や御鑑識の正確な事、私が殆ど案外に思ふほど下情に通じられ、新舊思想の潮流を明晰と御見定めある〻事など、而も其間に何とも言ひ知れぬ隆々たる王徳の莊嚴にして寛宏な氣が磅礴として漲つて居る。



私は、『文章は筆にあらずして人にあり』と言つた古人の言を痛切に感じた。若し私をして御趣意の内容の一端を記する事を許さしめば私は恁ういふ事だけは申述べたい。
御文章の御趣旨は民を以て國の本となすといふにあり、其の中にデモクラシーといふ片假名の御文字もあつた。
これだけで讀者は全鱗を奉察する事が出來るであらう。民を以て國の本となすは神武天皇以來の御聖旨である、二十歳の皇太子殿下が祖宗列聖の御旨を體せられた仁慈の御胸中を發せられたのは此の御文章である。

『どうだ、其が二十歳の時の御文章だよ』
先生は茫然自失の私を見やつて恁う繰返した。
『實に御立派と申しませうか、何と申しませうか』
私は胸の鼓動を制へきれずに恁う言つた
『私が此の御文章を拜見した時にな』
先生の穩かな聲は一段と穩かになつた。
『私は嬉しくて〱堪らなかつた、自分の氣持の遣り場がなかつた、そこで私は小村侯に寫して貰つて其れを取るや否や

車に乘つて山縣の處へ行つた』
『山縣公?』
私は意外に思つた、杉浦先生と山縣公とは火と水の如く相容ない間柄であると世間も思ひ私も思つて居たので。
『さうだ目白まで車を飛ばした』
私は武内宿禰の様に白い髯を蓄へた老先生が痩軀に滿腹の喜びを藏して目白の坂を車で登り行く姿を髣髴と想ひ見た、先生の聲が續く。
『山縣の處へ行くと山縣は何事が起つたかと驚いて直ぐ出て來た、私は此の御文章を山縣に見せた、すると山縣は凝と其れを默讀した、それからもう一度又た繰返して拜讀した、ぽろ／＼涙をこぼしてな、御文章に涙がかゝると畏れ多いから其れを卓子に載せてな、其れから何か私にものを言はうとしたが涙が出るので言へなかつた、私も其の時初めて涙がこぼれた、山縣は



恁う言つた、御互ひはもう死んでも可いな、今の國民は幸福だ、恁う言つてから難有うと私に禮を言つた、私が御教育申上げたからではない、祖宗列聖の英邁な氣が皇太子殿下に聚まり給うたのだ、智は學べば得られるが德は天賦のものだと私が言つたら山縣も同意した』
私は先生の病氣を募らす事を憂ひ、先生に一絕を書いて戴いて暇を告げた、私の車が門に待つて居たが私は車にも乘らずに今まで聞いた先生の言葉を味はひながら靜かな裏通りを歩いた。私の眼の前にはつきりと浮んだのは鬢髮霜を帶びた二老が日本の前途のため、叡聖の皇太子を得て歡喜の涙に暮れながら相擁いて泣いた光景であつた。
『杉浦と山縣と言へば仇敵の樣に世人が言つてるが、いざとなれば握手する、涙を流し合ふ、意見が異つても忠は同じ事である』恁う考へた、其れから暫くあつて又た考へた。
『大きな喜びを得て、其れを頒つべく第一番に山縣公の處へ走つた先生の心持は所謂至公至正なるものである、先生は眞の忠臣だ』
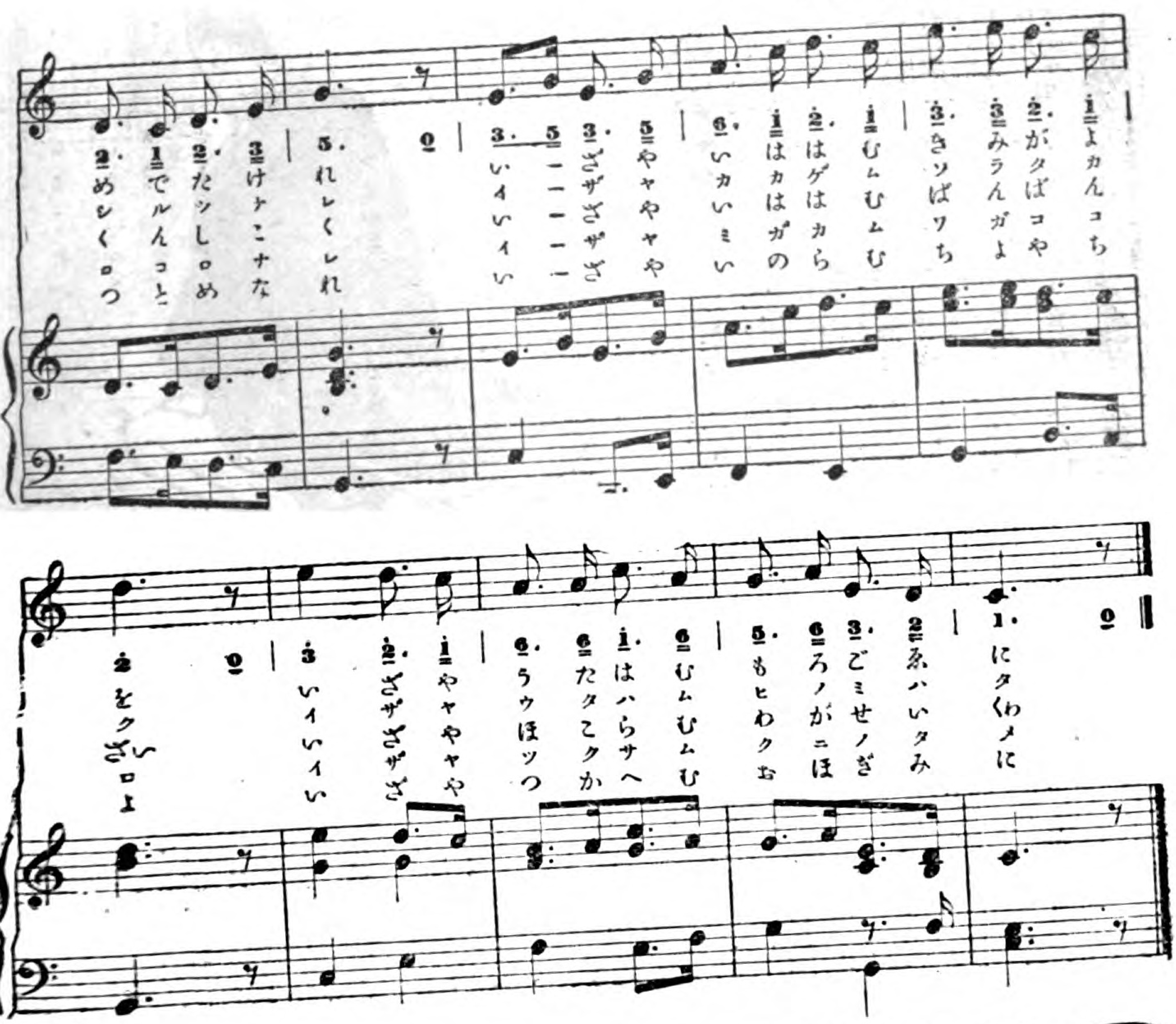
――をはり――

愛國の歌

佳充一路 作
中山晉平 曲

天津日嗣のいや榮え
御稜威あまねき美し國
輝く御代ぞめでたけれ
いざや賀はむ君が代を
いざや歌はむ諸聲に

平和の色の眞白なる
中に昇れる旭こそ
輝く御代の徽なれ
いざや揭げむ空たかく
いざや謳はむ日のみ旗
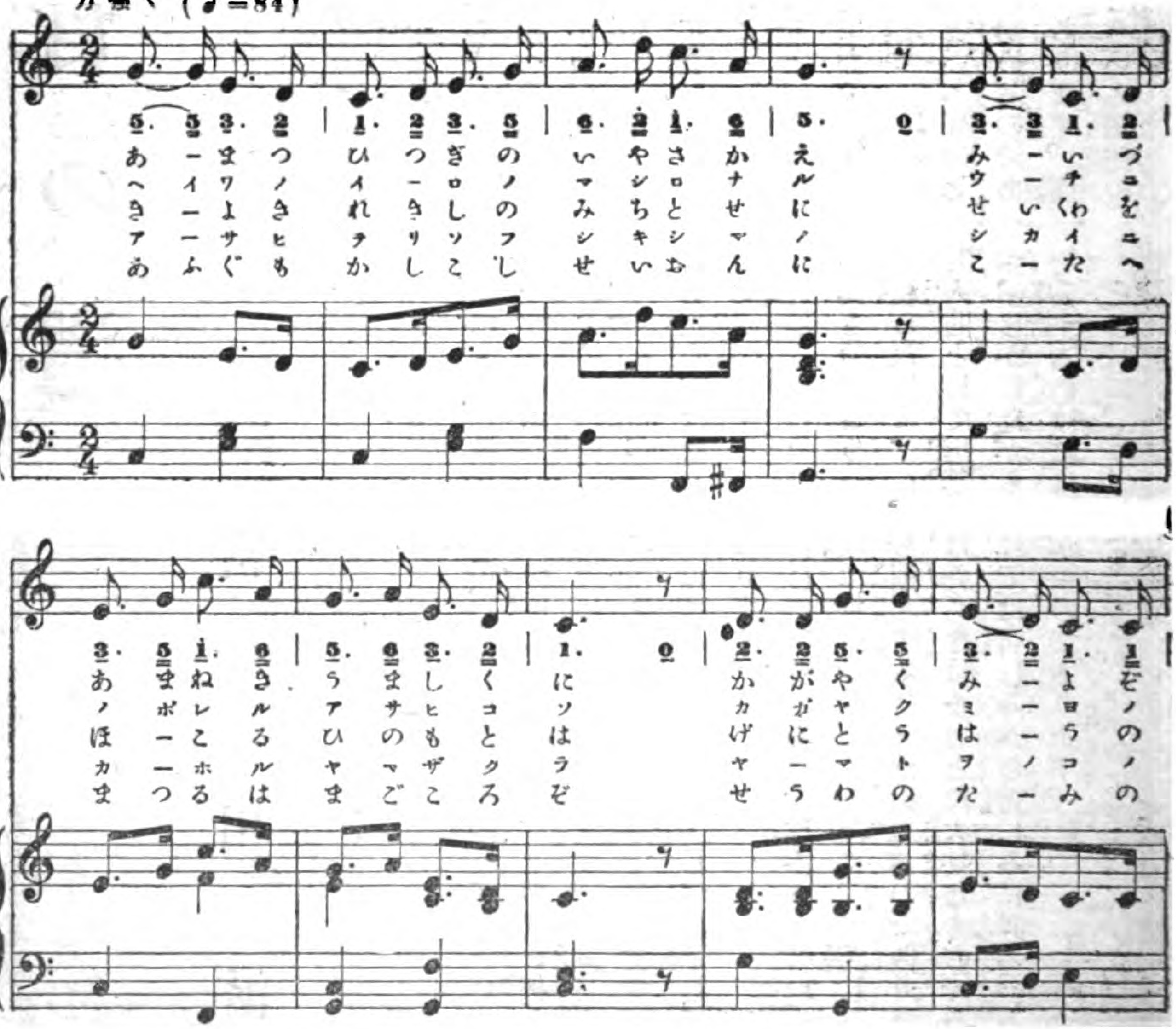


潔き歴史の三千歳に
精華を誇る日の本は
げに東方の君子國
いざや祝はむ萬々歳
いざや誇らむ我が精華

旭てり添ふ敷島の
四海に香る山櫻
大和男の子の心なれ
いざや磨かむ我が魂
いざや盡さむ國の爲

仰ぐも畏し聖恩に
こたへ奉るは忠誠ぞ
昭和の民の義務なれ
いざや祈らむ千代八千代
いざや仕へん大君に

力強く（♩=84）





眞實の道

文學博士　醫學博士　富士川游

忍辱の法

釋尊の教には忍ぶといふことが大切なる法であるといふことが說いてあります。忍辱と書いてあつて何事にも耐へ忍ぶ辛抱するといふ意味であります。ところで、何か事件があつたときに、たとひそれが自分の氣にのらぬときでも耐へ忍ぶといふことは勿論善いことであり、又どうかしてその通りに實行したいといふ考へがありましても實際に耐へ忍ぶといふことは容易でありませぬ。それは普通に言ふところの耐忍は自分といふものをその儘にして、それを押へつけて辛抱する心持でありますから決して安穩の精神狀態でないからであります。

道德の教を向ふに置いてそれを規範として自分といふものを押へつけて、腹の立つ時にも腹を立てないやうに努めるのでありますから、から云ふ耐忍は極めて苦しい心持であります。而るに釋尊が說かれるところの忍辱といふものはさういふ道德の心持から進んで、宗教の心持に入つての忍辱であります。

無我

前にも申したやうに、普通の人々が耐へ忍ぶといふことは『我』といふものをその儘にして置いて、その我を押へつけてそれを道德の教の中にはめ込むのであります。勿論さういふことは我々人間が社會に生きて行く正しい道でありますから、それを止めてはなりませぬ。どうしても努力して耐忍して行くことを必要とするのであります。

併しながらそれは決して宗教の心持ではありませぬ。宗教といふものはさういふ風に押へつけるのでなく、又苦しみの心持が起らないで、しかも耐忍することが出來るのであります。我我人間として道德のはたらきはまことに大切なものでありますが、しかしながらそれでは苦しみから苦しみに移るのみで、心を安するわけには行かぬのであります。

それ故に、どうしても道德から宗教に進んで行くのであるが、宗教に進んで見れば、耐忍といふことは全く無我の心持として

あらはれるのであります。畢竟、『我』といふ心持が強くはたらいて居るから、得手勝手の心が起り、従つて癇癪が起り、腹が立つのでありますが、この我といふ心持を無くすれば無闇に癇癪が起り、無闇に腹が立つといふやうなことは無い筈であります。それ故に、『我』といふ心持を無くしたときに我は何時でも忍辱の法に到ることが出來るのであります。

堪忍

今から八九十年も前に出來た『提燈』といふ書物の中に堪忍のことについていろ〱面白いことが書いてありますが、その書物は禪宗の僧侶が著はしたもので、その最初に

問うて曰く、此方より腹を立てねど向ふより無理非道をいひかけた時どう堪忍しませう。

これはよく人のいふことであります。こちらから腹を立てまいとしても、向ふの方から、無理非道のことを言つて來るから腹が立つのである。それをどうして堪忍する事が出來るかといふ質問であります。

答へて曰く、向ふよりいふことが無理非道と知れば腹は立たぬ筈、こなたの我慢の身びいきがそこへ出て、はやそれに取りついて了簡ならぬなどといふは大なる誤であるまいか、兎角身びいきして、之堪忍せず、向ふの無理にこなたの腹立を調合して、いよ〱無理算段になり終には其身も無理の同行となつて無分別の、我儘のと人にうとまれくらさうよりは五度七度無理をいひかけても取あはず、こなたの腹立を調合さへせねば終には無理もつきはてゝ、道理の人となるものでござる。



理窟は如何にもそうであります。向ふの方が無理非道であると知つて居れば腹の立つ筈はない。然るに向ふの無理非道にこちの立腹を調合するから、ます〱迷ひが深くなるのであります。それで結局、こちらも無理非道の同行となり、向ふが無理非道だといふものが、遂に自分も無理非道になつて仕舞ふのであると說くのであります。

から云ふやうな教は全く道德の教でありまして『我』といふものが身びいきで頭を上げるのを押へつけるやうにしようとつとむるのであります。人が石を投げかけたために怪我をしたとすると、腹が立ちませう。併し、山から石が落ちかゝつて怪我をしてもそれは天災であるとあきらめることが出來ませう。

それ故に、人が石を投げた場合でも山から石が落ちたのであると思へば腹の立つことは無いと教へるのであります。教へとしては道理至極のことでありますが、併しながら大抵の人は、人が石を投げかけたのを、山から石が落ちたのと同じやうに考へることは出來ませぬ。まことに道德の教といふものは知ることが容易でありますが、それを實行することは決して容易でありませぬ。このことは昔から人々のよく知つて居つた事實でありまして、諺にも『論語讀みの論語知らず』といふことがあります。『論語』を讀んでその文字の意味を知ることは容易に出來ますけれども、さてその意味の通りのことを實行するといふことになると到底出來ないことが多くあります。

それ故『論語』は讀んでも『論語』は知らぬといはなければならぬことになるのであります。

道德の徹底

我々が何等かの行爲をするといふことには、それをすることが心持のよいといふ感情を伴なはなければなりませぬ。其故に、人に石を投げかけられて心持の善いといふ感情が起るとすれば腹が立つことはありますまいが、大抵の人はさう云ふ場合には不快の感情を起すのでありますから、どうしても腹は立つのであります。それを災難と諦めて我慢しようとするのは全く道德的の考でありまして、『我』といふものを押へつけるのであつて、それによつて安心立命が出來るのではありませぬ。どうしてもこの道德の心持から、今一層進歩して、宗教の心持にまで到らねば精神の平和を得ることは出來ませぬ。



かやうにして宗教は道德の不徹底なることに氣がつくによりて促がされる。從つて道德の徹底は宗教のはたらきによりて始めて成就するものであると言ふことが出來るのであります。

道德といふものは『つとめてこれを爲す』ものでありますが、宗教では『どうしてもさうせねば氣がすまぬ』といふ心持になるのであります。

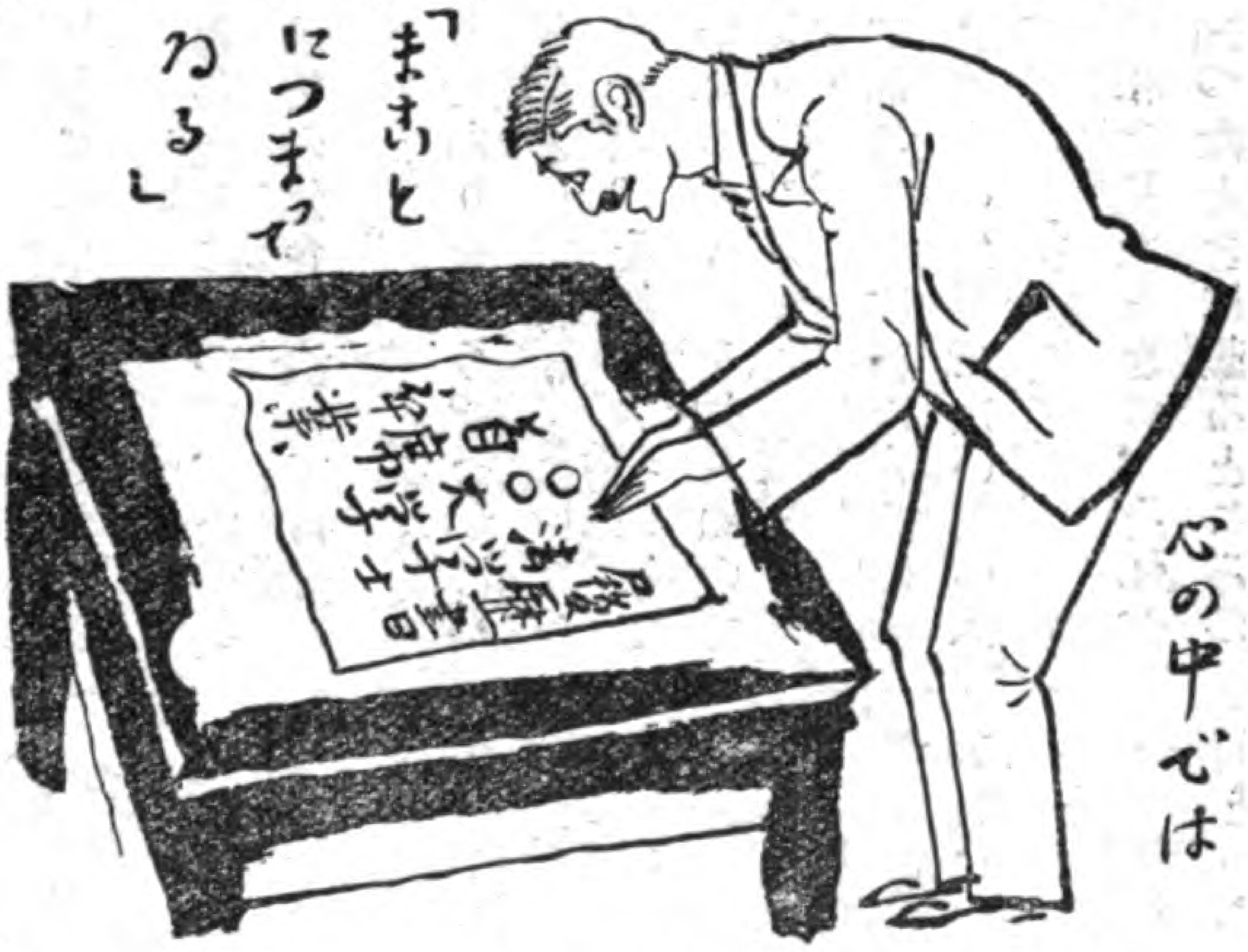
宗教の心持

さう云ふ譯でありますから、我々は道德の心持を變じて宗教の心持にせねばならぬのでありますが、それがためには、我々は自分の相といふものを明かにして、『我』といふ得手勝手の心

のはたらきを止めるやうにせねばなりませぬ。これを『自覺』といひ、又は『内省』といふのであります。併しながら内省といふものは容易に徹底するものでありませぬから、從つて道德の心持から宗教の心持に移るといふことは困難であります。道德の教といふものは容易に分るのでありますが、併しながらそれが容易に實行せられるものでないといふことに氣がついて、さうして自分といふものを内省したときに、いかにも自分といふものに力の無い、まことにつまらぬものであるといふことに考の及んだとき、そこに『我』といふもの丶價値は全く無くなるでありませう。

『我』といふもの丶價値が無くなつた時に、此の『我』といふ心持が頭を上げることは無くなるのであります。

釋尊の說かれるところの忍辱といふものはこの心持にあらはれるものでありまして、決して『我』を抑へつけるのではありません。言葉は同じでありましても、『我』が無くなつてあらはれぬのと、『我』を無くしてあらはさうとするのとは大なる相違であります。



内省の不徹底

しからば道德といふものは我々は實行が出來ないものであると考へたときに、直ぐに宗教のはたらきが誰にでも起るものであるかといふ質問が起るでせう。

併しながら實際にそれは容易のことではありませぬ。その理は『自分が道德の教に徹底することが出來ぬ』といふことを徹底的に知ることが決して容易のことでないからであります。

『私はまことにつまらぬものであります』といふことは人々が言ふことでありますけれども、それはただ口先でさういふだけでありまして心の中では『まことにつまつて居る』のであります。卑下するといふこと、そのものが既に自慢でありまして、決して『眞に自分をつまらぬもの』と知つたのではありませぬ。

誰にしても少しく内省をするときに、自分が力の弱いものであるといふ位のことは知ることが出來ますが、併しながら、眞に力の弱いものであると云ふことには氣がつきませぬから、力が弱いと知りながら、どうにかして苦境を免がれたいといふ心が起るのであります。

さういふ風にして内省が徹底しないところに、宗教のはたら

きを起すことが多くの人々に困難であるといふ根據が存するのであります。

自己を知る

履善師の說教の中に、

『自分は卑しい乞食であるといつてゐる乞食に向つて、お前を大名にしてやると言つて喜ぶやうではその乞食は決して自分を知つたものとは言はれない』

と述べてありますが、まことにそうでありませう。むかしのことでありますから、階級の制度は儼然として居りましたから、乞食が大名になられる筈がありませぬ。それに大名にしてやると言はれて喜ぶのは全く自分といふもの丶相を知らぬのであります。

かう云ふ風に自分のことを知らずに居ることは我々人間の常でありますから、『自己を知る』といふことの容易でないといふことは言ふまでもないことであります。

其故に宗教といふものは自分の心の相を見たときに、それが價値のないものであるといふことを知つたときに起るところの一種の感情であると說明しましても、併しながら、それが容易にあらはれるものでないといふことを繰返して申さなければなりませぬ。

精進努力

それに道を求めるといふことになれば、常に精進努力せねばなりませぬ。他の學問のやうに、たゞ聞いて憶えるだけでは決して宗教のはたらきはあらはれるものではありませぬ。『知るといふことだけで宗教の心のはたらきがあらはれるので無く、自分を內省して『我』といふ得手勝手の心持が無くなつた時に始めてあらはれるはたらきが宗教でありますから、道を求めようとするのには、我々は常に自分をみつめることを努めねばなりませぬ。さうして自分を省みるための材料は自分の周圍にあるといふことに注意せねばなりませぬ。こゝに一つのコップがある。これはガラスで製造されたもので水を飲むための道具であると考へるのが普通であります。併しながら、それではコップと自分とは何等の聯絡もないのでありまして、コップに就て知るといふだけに止まるのであります。

若し此のコップが我々と同じやうに精神の働きがあるものとすれば、我々人間を指して何といふだらうか、コップは誰にたのまれたかも知れないのに、人のために身を捨てゝ水を飲む道具となつて働いて、給料も取らず、讃辭の一言も言つて貰はず、一生懸命に働らいて居るのであるから我々人間の心持を見て、何といふのでありませうか？

我々はさう云ふ意味に於てコップに對して自分の得手勝手の心持の有樣を慚ぢねばなりませぬ。

斯の如く我々の周圍には、我々をして內省せしむるための材料が澤山に存在して居るものでありますから、我々お互はそれによつて精進努力を續けて、得手勝手の心を無くすることが宗敎へ進む道であると考へて居ります。



江原素六翁と稻荷壽司

小田吉郎

江原素六は一年四十俵といふ微祿の貧乏侍の家に生れ、十六の春からは、もう一人前といふので、房楊枝の內職をして、自分の食扶持を稼いだ。

素六は夕方、房楊枝の原料を買出しに、四谷愛住町の自家を出て日本橋西河岸まで行き、米俵位ある荷に大小を結び付けて背負ひ、トップリ暮れた街を歸るのであるが、丁度今の靖國神社のところに稻荷壽司の屋臺店が毎晩出てゐて、それを一度食つてみたいと思ふけれど、素六の僅少な收入ではその餘裕がなかつた。

然し食ひたい一心で、二月三月少しづつ貯め、或晩やうやく熱望の稻荷壽司を一つ買ふことが出來た。

素六はその晩も例の通り大きな荷を背負ひ、タドタド歩き乍ら、ニコニコして稻荷壽司を一口食つた。その時、暗がりから不意に、

『素六ぢやないか』と、紛れもない父の聲。

ハツとして立止まると、ヌツと近付いて來た父は、恐ろしい顏して、いきなり素六の手の稻荷壽司を地面へ叩き落した。

『貴樣、何んたる下司な眞似をする。それでも侍の子か、侍の子かよ』



江原素六翁

嚴格な父は憤怒の形相凄まじく、拳を固めて續けざまに幾つとなく擲つた。

『御免下さい、勘辨して下さい』

素六は到頭泣いて詫びた。

『來い、サツサと歩け』

父は先に立つ。素六は涙をふいてあとに跟いたが、腹の中で斯う思つた。

（いくら侍の子だつて、人足同樣のこんな賤しい仕事をしてゐりやア、立食ひ位してもよからうに……）

（だが兎も角、お父さんは恐ろしい權幕だ。家へ歸つたらこの上どんなに叱られることか――でもお母さんはこんな時いつも自分を庇つてくれる、慰めてくださる……）

處が、素六の期待は裏切られた。父から仔細を聞いた母は、いつもの母ではなく、父同樣の嚴肅な顏して、素六の前に端然と坐り、

『お前はどうしてそんなさもしい心におなりです。お前は屹度、こんな賤しい仕事をしてゐる身なら、路傍で飮み食ひしても構はぬとお思ひだらうが、お前や私達が斯うして卑しい仕事をするのも、生活が立たないから止むを得ずするので、こんな稼ぎに侍の心まで、侍の魂まで賣りはしません。人は貧に慣れ分に甘んじてはもうお仕舞ひ、死んだがましです。どんなに貧しく困り果てても、體面を重んじ、人格を保つやうに心掛けなければ、人として價値は無いのですよ』

この訓戒を素六は生涯忘れなかつた。――宜なる哉、明治大正の人格者江原素六の名は天下に喧傳されたのである。（明治名流自傳）

奈翁の述懐　　正宗白鳥

『おれの沒落は、誰れの所爲でもない、おれ自身の所爲だ。おれがおれの最大の敵であつた。おれ自身が悲慘な運命の原因であつた』『おれは目を閉ぢてゐると、おれの過去のあらゆる過失が、列をつくつて次から次へと、おれの前に現はれて來る』『おれはあんまり強く弓を張り過ぎた。自分の好運をあまりに信じ過ぎた』英雄ナポレオンは、孤島セントヘレナに於て、こんな述懐を繰返し〱、近侍の人に向つて洩らしてゐた。英雄ならぬ者も、晩年に於てかういふ感じに打たれることがあるであらう。

鯉　　佐藤紅綠

眞鯉一尾を友から貰つた、洗濯盥を若楓の下に置き庭井戸から一斗の眞清水を汲んで轉とばかりに打灑ぐ。鯉は一寸尾を振つた、其れは別に嬉しくもなければ悲しくもないと言た風！眞黑な背中、銀色の腹、水に映る楓の影が戰げども三十六鱗が悠揚として動かない。箍の弛んだ石鹼臭い盥の中で彼



は何を考へて居るだらう。恐らくは何んにも考へて居まい。彼は盥の狭さをも考へないだらう、大きな河への自由をも考へないだらう、あるが儘に任せる達人の境地を誰が知らう、三尺の盥の水も河海の水も彼に在ては同じ事である。威嚴ある堂々たる王者の眼を半圓に擴がる碧瑠璃の天が覗いて居る。

爺やの掃除

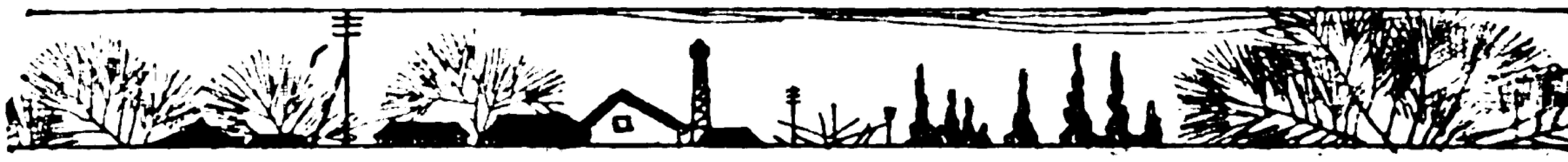
赤司鷹一郎

そぼふる雨の朝、饅頭笠を冠けた爺やが、庭の枯葉を拾つたり、蜘蛛の巣を拂つたり、唯一人で働いて居りました。それを不思議さうに眺めて居ました私の孫が、

「爺や！　雨が降つて居るのにお掃除をするの？」と質きました。

「唯々、坊ちやま！　雨が降つても、日が照つても、爺やの仕事はお庭の掃除でがす。今日はお天道様が御座らつしやらぬが、懶けて居ては濟まねえでな……」

幼い孫には譯がわからなかつたのでしたが、蔭で聞いて居た私達の胸には、左程骨を折つて居さうに思はれなかつた爺やの手で、どうして廣い庭の隅々までが、年中美しく清められて居るのか、初めて合點が行きました。





不思議なバイオリン

田邊尚雄
寺内萬治郎畫

今から百年程以前に於て世界第一のバイオリン大家と稱せられニコロ・パガニニといふ人は演奏臺上に立つてバイオリンをとつて彈き初めると殆んど弓を持つて踊つて居るやうに見え、その指は全く眼にも止まらぬ程の速さで、其の不思議なる響きの絶え間なく千變萬化する有樣は全く精巧極まりない器械に神が乘り移つたかと思はれる許りである。その節の面白さと音の美しさは、どうしても此世の中の人間が彈いて居るとは思はれない。之を聞く人々は、あれはパガニニの持つて居るバイオリンが普通のバイオリンとは違つて居て、何か特別な仕掛けがしてある一種不思議なバイオリンに違ひない、それだからあんなに面白く彈けるのであらうと噂をするやうになり、誰れ言ふとなくパガニニの持つてゐるバイオリンをば『不思議なバイオリン』と名付けるやうになつた。

或る夕、音樂會のあつた時に、相變らず此のパガニニの不思議なバイオリンの響きの面白さに滿場の人々は醉つたやうに夢中になつて、讃嘆するのみであつた。

此時に同じく之を聞いて驚嘆をして居た所の或る貴族があつたが、餘りの不思議な彈き方に、パガニニを傍に呼び寄せ、

『そなたのバイオリンは誠に不思議な音がする。それには何か仕掛けがあるのでは



ないか。』

と尋ねた。パガニニは急に頭を振りながら、

『イヽエ。何も仕掛けがある譯ではありません。お疑ひならば一應お改め下さいませ。』

と言ひながら自分の持つて居たバイオリンを渡した。貴族は之を手にとつてよく眺めつゝ、

『なる程、普通のバイオリンである。それにしても先程のあの響きは實に不思議である。』

と頭を傾むけて居た。そこでパガニニは、

『何でも絃の張つてあるものならば、同じ様に彈いて御覧に入れます。』

と、さも自信のあるやうに言つた。之を聞くと貴族は驚いた風で、

『何でも絃の張つてあるものなら同じだと申すか。』

『ハイ同じです。』

貴族は戯談半分に笑ひながら、自分の靴を指さして、

『そんなら此の靴に絃を張つても同じか。』

『ハイ。同じです。』

そこで貴族は心の中で、『これは面白い。一つからかつてやれ』といふつもりで、直ぐ履いて居た短靴をぬいで、之をパガニニに渡し、

『然らば此の靴の裏に釘をさし、それに絃を張つて彈いて見よ。』

と申した。パガニニは別に少しも困つたといふ様子もなく、言はれるまゝにその靴を受け取り、その裏に釘をさし、バイオリンの絃をはづして之に張り、何の雜作もなく、左手に此の靴をとり、右手にバイオリンの弓を取つて立ち上つた。之を見た貴族を始め周圍の人々は此の小さな一個の靴から如何なる響きが出るであらうか、非常な

る好奇心をもつて、パガニニの一擧一動に目を見張つて居た。パガニニは平生の通り、相變らず弓を持つて踊つて居るやうに彈き初めた。目にも止まらぬやうなその指の早さ。玉を轉ばす如き美しいその響き。貴族を始め人々は、それが靴であるといふことを忘れて、いつもの『不思議なるバイオリン』からその響きが起つて居ると同じく、此の世の音とも思へぬその面白さ。バイオリンを持つて世界第一と稱せられるパガニニは、靴をとつて彈いても、同じく世界の如何なるバイオリン家の演奏よりも優れて居たのである。その貴族はそれ以來、此のパガニニの彈いた靴を我家の寶物として永く子孫に傳へたといふことである。

又或時パガニニが友人と共にオーストリアの或る街を散歩して居たことがあつた。すると何處ともなくバイオリンの音が聞えて來た。銳い耳を持つたパガニニは、其音を聞くと直ぐに友人に向つて、

『あの曲は伊太利の民謠だ。あれはキツト我が伊太利人が彈いて居るに違ひない。どんな人が彈いて居るのか、早く行つて見よう。』

と友人を促してその方へ足早に行つた。パガニニは伊太利人であつたのである。

やがて其音のする方を尋ねて行くと、ある路傍に一人の少年の乞食が、破れかゝつたバイオリンを彈いて居る。其の周圍には少し許りの人が取り卷いて、此の少年乞食を見て居る。然し其の少年は餘りバイオリンが上手でないから、周圍の人達も別に金錢を惠んでやる氣も起らないと見えて、唯立つて聞いて居るばかりである。

パガニニは此の周圍の人々を押し分けて中に入り、少年に向ひ、

『お前は伊太利人ではないか。』

と尋ねた。するとその少年はバイオリンの手を休めて、

『ハイ、伊太利人です。』

『伊太利から遙々とこんな墺太利の國まで來て、どうして乞食をして居るのか。伊太利の國の恥であるとは思はぬか。』

『ハイ。申し譯けはありません。然し之れには仔細のあることです。私の父は早く此の世を去りまして、今は唯老いたる母一人でありますが、母も長く病床に臥し、家にはもはや一文の蓄へもなく、母の病を養ふ方法もなく、そこで止むなく私が少しバイオリンの彈けるのを元手にして、斯うして路傍に立つて行人の袖にすがる身となり、その收入をもつて、唯一人の老母の病を養ふ料として居ります。然るに伊太利では、私のやうな未熟な藝では殆んど收入も得られず、此のウヰンナの市は音樂の都と聞き及び、玆に來て我が伊太利の珍らしい民謠でも彈いたならば、幾らかの收入も得られることと思ひ、アルプス山の險を越え、遙々と歩いて玆まで來たのです。』

此の哀れな話を聞くとパガニニは如何にも氣の毒だといふ様

に、自分の懐中から財囊を出し、之を倒さにはたいて、その中の金錢を全部その少年に與へた。然しそれは幾らもなかつた。

そこでパガニニは、その少年の持つて居たバイオリンと弓とを取り、いきなり之を彈き始めた。例の弓を持つて踊るやうな樣子で殆んど目にも止まらぬ樣な指の早さと、珠を轉ばすやうな美しい不思議な響きとは忽ちにして往來を行く人々の足を留め、其の周圍には幾百の人が集まつて來た。

此の古今未曾有なる世界第一のバイオリン大家たるパガニニの演奏を聞いた人達は、殆んど夢路を辿る如く、その一曲のすんだ時には、雷の如き喝采が轟き渡つた。

此の時パガニニはその乞食少年の汚ない帽子をとつて、之を持つて周圍の人々の中を持ち廻つたところが、人々はパガニニの爲に孰れも財布の底をはたいて金を出し、見る見る中に其の帽子の中には數百



圓の金が一ぱいになつてしまつた、

パガニニは此の金を直ぐと其の乞食少年に與へて、

『之を持つて直ぐに伊太利へ歸り、それで年老いたお母さんの病氣を養ひ、充分よく看護して上げなさい。さうして今後は決して伊太利の恥を外國にさらすや

うなことをせぬやうになさい。』

と言ひ捨てゝ、サツサと其の女人と共に宿へ歸つて行つた。

此のニコロ・パガニニは西暦一七八四年二月に伊太利北部のゼノアといふ港で生れた。父は其の名をアントニオ・パガニニと言ひ、此の港で回漕店を營んで居た。それで此の父は大そう音樂が好きで、殊にマンドリンをよく彈いた。それ故息子のニコロが極く幼少の時から音樂を仕込んで、父が自分でマンドリンやバイオリンなどを敎へた。勿論父はバイオリンは大して上手では無かつたが、幼少のニコロに敎へる位ならば差支なかつた。それで非常に敎へ方が嚴しくて、少しでも出來が惡いと、鞭で打つたりした。

斯樣に父の敎へ方が非常に苛酷であつたが、幼少のニコロは常によく之を辛棒して淚をのんで業に勵んで居た。慈愛の深い母は之を見る每に、淚を流してニコロを慰めて居た。

或時母は夜中に次のやうな夢を見た。それは何處からともなく天の神の使ひが見えて、母に向ひ、

『我は天に在します大神の命を受けて玆に參つた者である。汝の慈愛深い心は天の神に通じ、汝の願ひは何でも一つ丈け聞き屆けて遣はす。と仰せられた。早く之を申せ。』

とのことであつたから、母は喜びに堪へず直ぐに大地に頭をすり付けて言ふには、

『私は自分の榮華も長生も何も望みません。唯一つ御願ひが御座います。それは我が子ニコロが世界第一のバイオリンの大家になりますやうに、何卒此の望みだけは叶へさせて戴さたう御座います。』

と申し上げると、天使は喜ばしげに笑ひ給うて、

『その願ひは必ず聞き屆けて遣はすであらう。』

と答へられたと見えて、その夢は醒めた。

母は朝起きてから、此のことを息子ニコロに話して聞かせ、

『お前は神樣のお力によつて將來は必ず世界第一のバイオリン家になるから、よく今の辛さ苦しさを堪へ忍んで勉強なさい。』

と勵ましてくれた。

それでもニコロは日每父から鞭で打たれるので身體は年中傷だらけで、何回も病氣にかゝつたりした。それでも屈せずに勉强をした。そのお蔭で既に六歲の時には、一度びバイオリンをとつて演奏をすると、之を聞く者が淚を流して感嘆したといふほどの大家になり、父はもはや此の子を敎へる丈けの力が無くなつたので、何うかして此の子を立派な先生に就けようと思つて、その頃少しでも名の知られたバイオリンの先生があると、父は此の子を連れて行つて、

『どうかお弟子にして下さい。』

と、言ふと、その先生は、

『何んだ、こんな小さな赤ん坊が、バイオリンなど彈けるものか。どうだ之れを持つて一つ彈いて見ろ。』

と言ふので、ニコロ・パガニニはそのバイオリンをとつて雜

作もなく難かしい曲をスラ〱と弾いてのけるので、其の先生は驚いて、

『之れは大したものだ。之れではとても私などの及ぶ所ではない。モット偉い先生を探して、其の方にお就きなさい。』

と言つて斷られる。何所の先生に行つても皆同じであるから、パガニニは止むなく自分で工夫し研究を積んで行くより外に仕方がなかつた。

八歳の時になると、自分でドンドンと難かしい曲を作曲して、有名なバイオリンのソナタ曲のやうな大曲さへも作つたといふことである。

それからといふものは年々その演奏の技術や作曲が驚く程に進歩した。其の作曲に就ても實に苦心を凝らす、其の熱心さは、想像以上であつて、まだヤット十二三歳の時にでも、或時一つの曲を考へながらバイオリンをとつて之を弾いて見るのに、其曲の弾き方を色々に變へて試みて、朝から晩まで、百餘度も之を續けてやつたので、夕方になつて





遂に氣絶して其の場に倒れてしまひ、家人の介抱によつて漸く息を吹き返したといふ。

子供の中から斯様に烈しい勉强をしたので遂に身體の健康を害した。そこで其の保養の爲めに、父に連れられて各國を旅行して歩いたが、到る所で其のバイオリンの妙技が評判になり、遂に歐羅巴全體に其の名が響き渡り、殆んどバイオリンの神のやうに呼ばれるに至つた。獨逸皇帝は此の世界第一のバイオリン家に對して男爵を授けて華族の優遇を與へ、又羅馬法王レオ十二世は、パガニニに向つて名譽あるゴールデン・スパー勲章を與へた。

此のパガニニが前に言つたやうに『不思議なバイオリン』を彈くやうになつたことに就ては玆に一つの話がある。

それはその頃伊太利に革命が起つた時、憂國の士が多く監獄に入れられた。音樂者の中にも可なり捕へられて獄に投ぜられた者が澤山あつた。パガニニも其の一人であつた。

パガニニは監獄の中で漸く極く粗末なバイオリンを一つ手に入れることが出來た。然し其の絃は切れてしまつて居て殘つて居る絃は唯一本である。素より監獄の中であるから新らしい絃を買ふなどといふことは出來ない。そこで止むを得ずパガニニは此の一本しか絃の無いバイオリンをもつて、毎日朝から晩まで苦心して練習をし、唯一本を以てしても普通の人が四本の絃で彈くよりも、尙ほ難かしい曲を自由自在に彈けるやうになつたといふことである。

此のパガニニの傳記を讀むと、偉人は皆幼少の時から、よく苦痛に堪へ忍んで勉强をして居るといふことが判る。一體に藝をやる人は餘り天才、即ち生れ付きの才に重きを置き過ぎて、『自分は生れ付き器用だから、藝をやれば成功して名高い人になれるに違ひない』といふやうなことばかり考へて居る人が多い。然し幾ら生れ付き器用でも勉强しなければ駄目である。或る學者は『天才といふのは普通の人よりも以上に多くの苦痛を進んで堪へ得られる人である』と言つて居る。(完)

最高調の三場面

榎本芝水
齋藤五百枝 畫

敵意を挫く至藝

『飛んでもねえ男だ。增長するにも程がある。今後の見せしめ、今夜は野郎息の根も止まる程、取つちめて呉れるぞ』額に青筋を出してカン〳〵に怒つて居たのは、當時東京市內の色物席でも、五本の指に數へられる、神田のK亭の席主であつた。

何をこれ程憤慨して居るのかといふと、其前夜も前々夜も、眞打の橘家圓喬が、お座敷の爲めに缺勤したからで、看板を麗々と揭げながら、眞打が每夜席をぬいて顏を見せぬとは餘り無責任なやり方だと、彼を目あての聽衆は、席主に向つてワイワイと不平を並べる。席主とても、未だ生若い圓喬輩に、馬鹿にされて居るかと思へば癪にさはつて堪らず、扨こそ斯くは烈火の如く、立腹して居たのである。

橘家圓喬は本名柴田淸五郞、初代三遊亭圓朝の門人で、而も近世の名人といはれた其師匠圓朝にまで『我弟子ながら圓喬は、實に巧いもので御座います。私は師匠でも、話術にかけては到底彼に及びません』と、舌を捲かせた程の達人であつた。

されば未だ眞打に成りたての頃から、氣障な風采納まつた態度に、代脈などと惡口は云はれながらも、聽客の衆望は皆彼に集まり、誰も彼もその藝を賞美して止まなかつた。お座敷の申込も多かつた筈で、つい〳〵その方が多忙な爲め、持席大切とは承知しながらも不得止缺勤勝ちになつたのであつた。

席主は癇癪と憤激に我を忘れ、今夜こそ圓喬の顏を見たら、突然鐵拳を喰はせて、增長高慢の鼻を折り、手痛き訓戒を加へてやらうと決心したので、宵の中から顳顬をピク〳〵させながら、來るを遲しと待構へて居た。

神ならぬ身のそれとは知らう筈もなく、圓喬は二晩つゞけての缺席に、少々は極りもわるく、コソ〳〵と樂屋入りをして、時刻が來たから高座へ上つた。

席主は彼の樂屋入りを待つて、物をも云はず橫つ面を毆り倒し、連夜の鬱憤を晴らす心算であつたが、一寸した用事の際

に、圓喬は高座へ上つて了つたので、舌打ちをしたがマア何も急ぐ事はない。下りてから蹴倒して、存分恨みを云つてやらうと逃げられぬやうにわざ〳〵高座のスグ前まで來て、大胡坐をかき兩腕を組み、一席終るのを待つて居た。

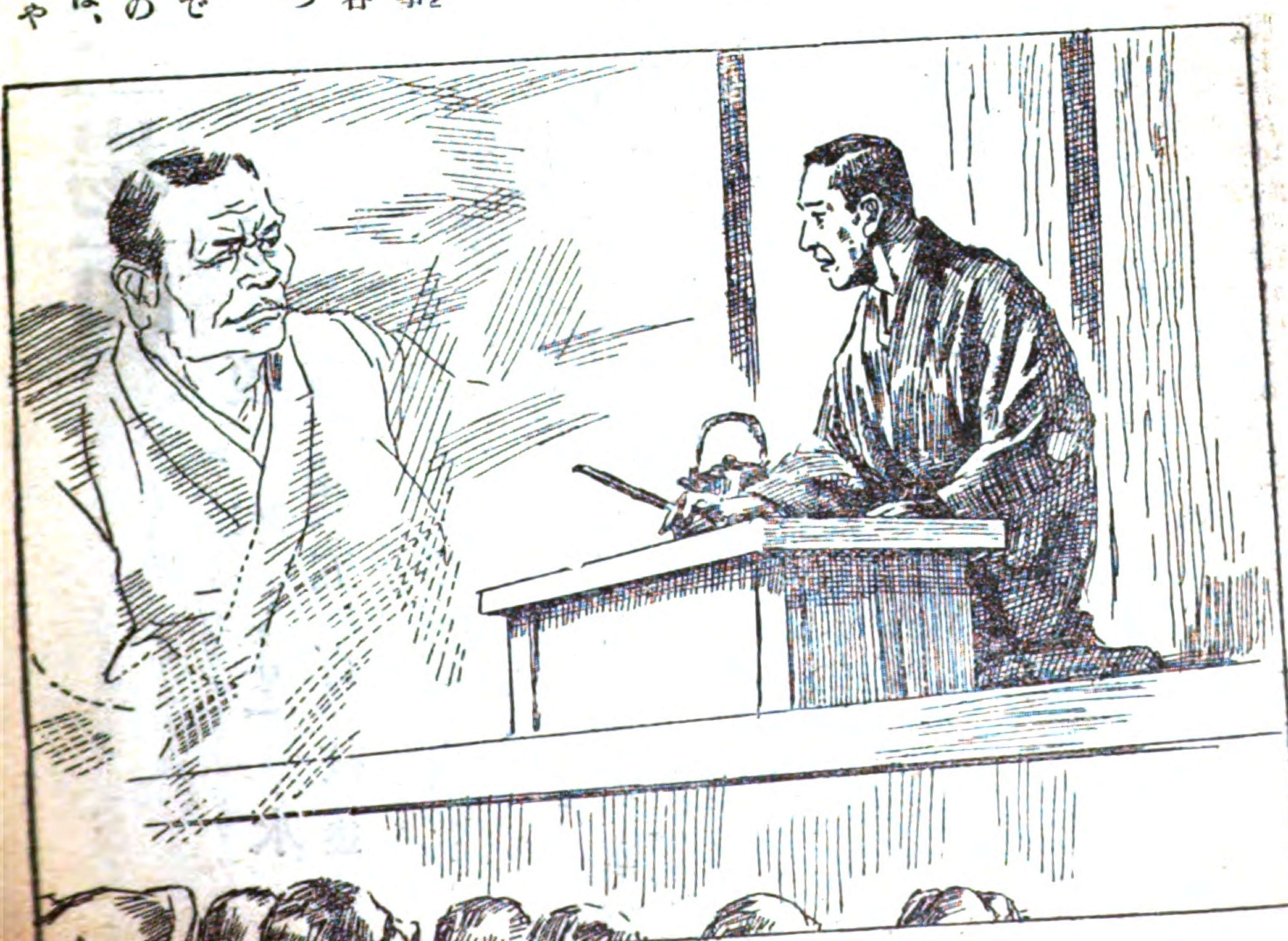
圓喬はそれと知るや知らずや、落つき拂つていつもの如く、湯呑を頂いて悠々と咽喉を濡し、開口一番徐ろに辯じ始めた。演題は得意の牡丹燈籠、二晩も續けて缺席した埋合せの積りか、此晩は特に馬力をかけて、大汗になつて熱演した。さらぬだに上手の圓喬が、精神を傾注して演ずる事とて、その巧さ面白さ、一言一句眞に迫り情を寫し、息もつかれぬ緊張さに、聽衆一同恍惚として醉へるが如く、水を打つたやうに謹聽した。

席主は藝などは何うでもいゝ。野郎め下りたら引摑んで、目の玉の飛出る程打ちのめしてやらうと、殺氣を全身へ漲らせ、武者震ひをしながら聽いて居たのだが……。

ア、藝術の力偉なるかな。

席主は圓喬が餘りの巧さに、何時の間にやら毆る事も打つ事も忘れて了つた。そして外の客と同じやうに、頭を垂れ息を呑み、只モウ話の巧さに魅了されて、呻り〳〵熱心に聽き惚れつつ、感歎敬服するばかりとなつた。

何うなりますか此お後は、又明晩のお樂しみと、惜しい處で圓喬が切るや、雷の如き拍手が起つて、暫らくは聽衆が賞讃の聲ばかり、席主もホツと大息吐いたが、最う事此處に至つては、圓喬を打つどころの騷ぎではない。先刻までの勢ひは何處へや





ら、ニコ〳〵して樂屋へ入り、何うも御苦勞樣と挨拶して苦情がましい事も云へなかつたといふ。

即ち席主が圜喬を打たうとした敵意も、彼の藝術の力で挫かれたのである。人を動かす極致とは此邊かと、これが私の印象を深くしてゐる第一の事蹟である。

客を氣絶させた那智の大瀧

今一つはぐつと古いが、講談界中興の名人と稱せらるゝ、初代東玉の逸話である。

東玉は號を桃林亭と云つた。奇行の多かつた人だとあるが、藝の巧さは非凡だつたといふ。嘗て某所に今でいふ講談大會が催された時、東玉は最後に登壇して得意の文覺上人傳を演じた。而も那智の荒行といふ、眼目の一席である、そして彼が長廣舌を振ひ、扇拍子面白く、那智のお山の峰々に、雪皚々とふり積り、肌をつんざく山颪は、五體の血潮も凍るばかり、瀧の飛沫に巖石の、氷柱は劍の林の如くと、その場の光景を手に取る如に辯じて居ると、時は恰も酷暑の盛夏で、聽衆一同苦し紛れに皆肌ぬぎで居たのが、次第に講談に釣込まれて何となく寒さを覺え、そろそろ肌を入れるやら、中には煙草盆を膝の間に抱へ込む者さへある程となつた。

それもまだいゝとして、最後に大變な事件が起つた。何だといふと東玉の講談が、追々進行して文覺が覺悟を極め、荒繩に腹を卷き獨鈷の鈴を口に啣へ合掌の儘、身を躍らせてザンブと

ばかり、瀧壺へ飛込むといふ條になるや、高さは四十九丈に餘り、幅は四十九間に亙る、那智の大瀧物凄く、ドーッといふ水の音と、此處まで辯じて來るとこは如何に、高座の一番前に坐つて居た一人の聽客が、ウームと一聲仰向けに引くり返り、口から泡を吹いて氣を失つた。サア講釋どころでは無く滿場總立ちとなつて介抱し、漸く正氣づかせたが、段々聞いて見ると何ぞ知らん、この人は生來の水癲癇であつたとの事、即ち海とか川とか多量の水を見ると、病の發作する癲癇であるが、東玉の講談が眞に迫り、突然那智の大瀧を、眼前に見たるが如く思ひ、持病を起しての氣絶と判つた。

何と驚歎すべき藝術ではあるまいか。

而して啻に人を感ぜしむるのみでなく、やがてこの極致は天地鬼神をも動かすべき、眞の藝術の堂奥に達する妙諦は、如何にして修養すべきものであらうか。

その消息の一斑を語るべく、次の話などは可なり相應しいものであらうと思ふ。

二つに裂けた欄間の障子

これは恩師永田錦心氏にあつた事で、前の二話は兎も角として、これは餘り世に知られて居ない筈であるが、今から十年ほど以前のこと、ある地方からの招聘で、私も錦心師に隨行した。先は某豪家の家庭であつたが、三十疊敷程の、さして廣からぬ座敷に、聽客も十人ばかりの小勢であつた。



錦心師の演題は、得意とする『屋島の譽』で、聽客は水を打つた如く、堅唾をのんで傾聽した。

『梅は寒苦を經て淸香を發し、人は死地に入つて大功を立つ』莊重なる歌ひ出しから、師の美音は朗々として、人々は心耳を澄ませた。やがて曲は次第に進み、那須與市宗高が、僅か十

七歳の若武者ながら、源平數萬の敵味方、水陸に分れて環視の中の晴れの場所に、單身海中へ駒を乘入れ、

『若しも此矢を過らば弓切り折つて割腹し、いひ譯せんと思ひ詰め』死を決したる悲壯の覺悟、天地神明弓矢八幡を、心の中に念じつゝ、大切の一矢を放つといふ大緊張の場面に至り、

『此念力や通じけん、磯吹風も音絶えて』の條となるや、聽客は其實景を、此處に見るが如く、何れも手に汗を握つたが、

『宗高心勇み立ち……矢聲を掛て切て放つ』

最高潮の曲となると、錦心師の意氣組も、自ら那須與市その者に化せるが如く、特に力を込めたものか、發止といふ音もろ共、黃楊の撥が眞二つに割れた。而もその途端である。

ピシーリツ。

何ともいへぬ異樣な響きが、聽衆の後方に當つて聞えた。一同は思はずふり返つたが、驚くべし、風が吹いたのでも何が觸れたのでもないのに、欄間の障子が眞ン中から、スツと二つに裂けたのである。誰も彼も奇異な事に思つたが、曲終つて後、錦心師は自分にかう語つた。

『琵琶に限らず何の藝でも、演者の精神が眞に統一したければ、充分な効果は得られないが、今日は自分ながら不思議な程、無我の三昧境に入る事が出來た。そして此念力や通じけんといふ邊りになつたら瞑目して歌つてゐる心眼に、扇の的がありありと見えて來た。而もそれが段々に大きくなり、自分でもこれなら矢を射ても當るだらうとさへ思はれる程となつた。そこで眞に鏑矢を切つて放つやうな心持になり、切つて放つと歌ひ切つたら。途端に撥が折れて欄間の障子が裂けたのである。こんな事は今迄經驗した事が無かつた』

これを聞いた私は眼前に奇蹟を見て、實に感慨を深くしたが、この邊が卽ち藝道の極致といふのでもあらうか。藝術の殿堂の、如何に神秘深遠なものであることよ。

己れ團十郎眞つ二つ

先代左團次がはじめて忠臣藏の鹽谷判官を勤めた時のこと、初日に『己れ師直眞つ二つ』の條りで、相手の九代目團十郎の扮した師直に切り付けて行くと、九代目から『駄目々々、そんなことでは人は切れないぞッ』と舞臺の上で頭から叱りつけられた。見物や座方に恥かしくつて仕方の無い左團次は、『今日こそ叱られないやうに』二日目には氣を入れて『己れ師直眞つ二つ』と切り付けて見たが、矢張り又しても『駄目々々』を連發された。もうくやしくて仕方がない『ヨシツ！ 今日こそは團十郎を本當に切つてやるぞ』とイキリ立つて三日目の舞臺に立つた左團次が、『己れ團十郎眞つ二つ』と心に叫びさま、セリフでは『己れ師直眞つ二つ』と云ひながら本氣になつて九代目に切つてかゝると、九代目はヒヨロ〳〵と舞臺の上をよろけ乍らスツカリ感心して『ヨシ！ その心意氣！』と激賞した。

左團次が、後年荒事師の名人としてもてはやされるやうになつた原因はこの時である。

柳生と觀世

中内蝶二
尾竹國觀畫



……西丸殿辻斬の取沙汰……

『西丸殿が辻斬に出らるゝげな。』

さう云ふ噂を耳にした柳生但馬守は、扇子を膝に目を瞑つて深い溜息をついた。

西丸殿は將軍家の職を襲いで、やがて徳川三代の天下を知ろし召さるべき方、その高貴の御身を以て、深夜御城外に辻斬とはあまりに御輕率なる御振舞、こりや面を犯してもお諫め申さずば相成るまい！

但馬守はその西丸殿の武道師範の職に在るだけに、一しほ責任を感ずるのである。

待てよ！　面とむかつて御諫言申上げたところで、予は存ぜぬ、覺えのないことぢや。と仰せらるればそれまでのこと。何んとか他に、遠廻しに御とゞめ申上げる好い分別がありさうなものぢやが……

色々と肝膽を碎いたが、劍を把つて敵に向ふのと違つて、ここぞ一刀兩斷と云ふ急所へぶつかる智惠は容易に浮かんで來ない。

寧そ、今宵濠端へ出て、通行人の體を粧うて辻斬りに引つかかつたと見せかけ、取つて押へてギューと云ふ目にお遭はせ申して見ようか？

いや〱、それでは恐れ多い！

出來ることならば西丸殿御自身に御反省あらせらるゝやうに……

但馬守は永い春の日の暮るゝも知らぬげに、何時までも〱考へ込んでゐた。

その夜城中から御使者があつて、

『明日巳の刻より紅葉山御舞臺に於て御前能の御催これある

に附き、其方にも陪覧仰せ附けらるゝ。西丸殿御附添ひとして出仕あるやう。』
　との御沙汰。
『おう！』
但馬守は思はず膝を叩いた。好い智惠が浮かんだらしい。
……拔いた
　太刀を眞額に……
二代將軍秀忠公台覽の御前能は、番組も進んで觀世太夫の『井筒』が演ぜらるる順番となつた。
その時、但馬守は西丸殿の耳に口を寄せて、
『觀世太夫がお能の舞の其間に、斬り付ける隙間がございまするか、但しは無きものか。よく〳〵御目を留めさせられまするやう。』
　と囁くと、
西丸殿はあざ笑つて、
『不意を討てば何時にても討たるゝではないか。』
『いや、いや。名人の藝は體に少しも油斷と云ふものはござりませぬ。其油斷に乘ずることが出來ませうや否や。』
『何んの手間ひまのかゝることではない。兎も角も、其方の申す如く打ち込む隙を狙うて見るによつて、其方も同じやうに狙つて見るがよい。』
『畏りました。』
其處で、西丸殿と但馬守は、居ずまひを直して滿身に氣合ひをこめる。
この氣合ひが今揚幕を出て來た觀世太夫の頭にピンと響いた。
こちらも曠の舞臺である。
〽曉ごとの閼伽の水、あかつき毎の閼伽の水、月も心や澄ますらん。
の次第から、西丸殿は拔いた



太刀を眞額に振りかざした意氣込みで、打ち込む隙を〳〵ど狙つてゐるけれど、不思議や觀世太夫の體には鵜の毛で突いたほどの隙間もない。

『如何でござりまする。もうお打ち込みになりましたかな。』

但馬守が囁くやうに背後から訊くと、

『いや、まだ。まだ。』

西丸殿は額から玉のやうな汗を流してゐる。

そのうちに井筒は進んで、

〽契りし年は筒井筒、井筒の陰に隱れけり

と、中入に及ぶまでも、遂に打ち込む隙はなかつた。

……但馬は

確に手ごたへ……

〽あだなりと名にこそ立てれ櫻花

いよ〳〵後ジテの出となつた。

『この度こそは。』

西丸殿は一層氣合ひをこめて、觀世太夫の一擧一動、目も放たずに見詰めてゐたが、到頭斬り附ける隙間を見出だし得ない中に、

〽夢は破れて覺めにけり

『井筒』の一番はおしまひになつてしまつた。

將軍家を始め、陪覽の人々は何時までも觀世太夫の妙技に魅せられて、たゞ感歎の太息を洩らすばかりである。

『如何でござりましたな。』



、但馬守がそッと西丸殿の氣色を窺ふと、さしも强情の家光も我を折つて、

『但馬の申した通りであつた。名人の藝には寸分の隙間もないわ。』

『拔いた刀をお納めになりまするか。』

『幸ひに、正の劍でなうて家光が面目を潰さずに濟んだと申すものぢや。』

『御意にござりまする。』

『但馬も同樣であらうの。』

『同樣と申しますると。』

『予と同じやうに、心で拔いた太刀をムザ〳〵納めねばなるまいと申すことぢや。』

『いや但馬の太刀には確かに手ごたへがござりました。』

『何んと。觀世太夫を斬つたと申すか。』

『仰せの如く私も感に堪へて拜見致して居りましたが、あの井筒を覗きますところがござりますな、如何致しましたことやら、あの一刹那に不思議と觀世太夫の體に隙間が現はれまして

ございまする。』

『ほう。予はあれ程に意氣込んで居りながら、其處に少しも心付かなんだが、それは定か。』

西丸殿は半信半疑である。

『但馬の申上げましたる事を御不審と思召さば、一應觀世太夫におたづねあらせられて然るべきかと存じまする。』

但馬守には確乎とした自信があつた。

……名人と
名人との意氣……

『予は其方の申すことを疑ふと云ふにはあらねど、後學のために名人の心得を聽取り置くも一興と存ずる。觀世太夫を呼べ。』

そこで觀世太夫を召して、西丸殿直直のおたづねである、

『如何に觀世太夫。其方今日のふ演能に、何か心にこれはと思節はなかりしか。あらば憚りなく申して見よ。』

『お言葉に隨つて申上げまする。私儀今日の演能、揚幕を出て橋がかりにかゝりまするると、先づ恐ろしい氣合ひに打たれました。恁かる場合、心に少しも弛みがあつてはならぬと、一生懸命に相勤めまするほどに、井筒のくだりになりまして、中を覗き込みまするると、白紙が一枚落ちて居りましたはてな？何んで此樣なところに白紙が……と、つい心を奪はれましたばかりに氣が拔けました。はつと我に復つて向ふを見ますると、莞爾とお笑ひなされた



お顏は確かに柳生樣。あッ。しまつたなと、あの時は身を斬らるゝやうな心地が致しました。』

と、觀世太夫の申上ぐる言葉は、正に但馬守と符節を合はせたやうである。

『うム、相分つた。さて〳〵、其方は日本一の名人ぢやなう。』

西丸殿が感歎の言葉に、觀世太夫は面目を施して引下る。

後に西丸殿但馬守を顧みて、

『劍道の心得なき者に對しても、うかと刀は拔かれぬものぢやなう。』と、つく〴〵思ひ入つた容子に、

但馬守は隙かさず、

『これにつけても辻斬りなぞは。』

と、じろりと下から見上げると、

西丸殿は扇を膝に落して、

『但馬。まゐつた！』

弓術の名人市川內膳

頃は寛永の末の方、此處三島明神の境內は割るゝばかりの喝采。今日の大祭恒例の弓術大會で、遂に或る浪士が手に金的は見事落ちたからである。

恰度其處へ汗を拭き〳〵驅け付けて來た一人の武士、此の有樣を見て落膽し、

『あゝ殘念！　某今一足早かりせば此の度の金的、如何でか人手に渡すべき』と歎聲を洩らした。

すると最前より傍に控へたる浪人體の武士、之を聞いてツカ〳〵と立ち出で、

『アイヤ、其れなる御仁、只今承れば甚だ御無念の御樣子、御心中御察し申す。付いては今日の金的、斯く申す某が手に落ちたれど、貴殿の爲に一度御返納申すに依り、御勝手にお持ち召されい』『これは〳〵何れの御仁かは存ぜぬが、御芳志忝ない。然らば御免』と仕度に取り掛り、金的は再び的場に揭げられた。

何思つたか此の武士は、矢筒の中から麥稈の樣に細い矢を取出して番へキリ〳〵と引き絞り、フッツと切つて放したが何の音もない。並み居る人々は皆顏を見合せた。二の矢を放つたが、之も同じく何の手答もないらしい。

すると最前の浪人は、スックと立つて刀の柄に手を掛け、怒氣滿面に漲らして、

『ヤア貴殿お戲れ召さるか』と詰め寄つた。そこで其の武士は、

『先づ〳〵』と片手に之を宥め、取り敢へず的場を調べさせた。調べて皆驚愕した。双矢は揃つて先に浪人の射中てた金的の眞中の穴に射込んでゐる。喝采は再び起つた。

先の浪人は、因州鳥取の浪人岩田重太夫と名乘り、後の武士は、甲州市川の鄕士市川內膳と名乘つて、互に無禮を謝し合ひ、遂に二人連れ立ち甲州さして辭し去つた。

惠慶の色紙

薄田泣菫



武野紹鷗は、珠光に創められた茶道を、利休に傳へて大成させた中興の宗匠で、いろいろの逸話を殘した人であるが、あるとき、その頃羽振をきかせてゐた堺衆の一人が催しの茶會に招かれて往つたことがあつた。紹鷗は相客の三四人と連れ立つて露地に入つたが、ふとあたりの景色が眼につくと、誰に話しかけるともなく、

『これは趣向だ。方々、今日は主人秘藏の惠慶が拜見出來ようかも知れませぬぞ。』と言つた。

『惠慶の色紙が。――まさか。』

それを聞いた相客は、惠慶の色紙は主人が誰にも見せない大切な秘藏なのを知つてゐるので、別に心當にもしなかつた。茶室に入つた客は、眼をあげて床の間を見た。そこにはたつた今噂されたばかりの惠慶の、

　八重葎しげれる宿の寂しさに
　人こそ見えね秋は來にけれ

といふ小倉の色紙がかかつてゐた。皆は言ひ合せたやうにびつくりして紹鷗の顏を見た。

『宗匠、全くお言葉通りでござつたな。それにしても、宗匠には見ぬ前からどうして主人の御趣向をお氣づきになられました。』

『さればさ。』紹鷗は吸つけられたやうに色紙に注いでゐた眼を二三度續けざまに瞬きした。『こちらの御主人は世に聞えた茶人なのに、露地を入つた處では、そこらに箒一つ入れないで、落葉や、枯草がそのままに打捨ててあつた。その荒れはてた容子を見て、ふと御秘藏の小倉の色紙のことが思ひ出されたものだから……』

『なるほど……』皆は紹鷗がその道の巧者ほどあつてさすがに勘のいいのに舌を卷いてしまつた。



死の吹笙

岡田東魚
石井朋昌畫

亂世の樂人

『あゝ、いゝ月だ』

その夜も豐原統秋は、いつものやうに、得意の笙を吹きながら、北山の邊を歩き廻つてゐたのであるが、ふと氣がつけば、いつの間にやら夜が更けて、隈なく晴れた大空に、閑やかな月が微笑んでゐた。

『地上の醜さ、あさましさにひきかへて何んといふ清らかな月であらう。あれこそ、天上の神の國の表徴でもあらうか……思へば思へば、羨しいことである』

統秋は、心から羨しさうに呟いた。そして、歩みつ、佇みつ、且つ仰ぎ且つ眺めて賞翫した。

應仁元年以來、十餘年に亙る大兵亂に、都は荒れ、人の心はすさみ切つてしまひ、日々毎日、血腥い出來事ばかり、心の弱い統秋には、見るもの、聞くもの、悉く疎ましかつた。

『無頼漢に言ひかゝりをつけられる恐しさから逃れようと、この北山の邊にさまよひ出て、夜な夜な笙を調べるやうになつてからも、もう五年餘りになる。然し、今夜の今、仰ぐこの月ほど清らかに見えたことがない。何故だらう……？　或は………今迄は唯調べに夢中になつて、心から月を仰ぐだけの餘裕がなかつたのかもしれぬ。だが、それ程努力に努力を重ねても、愈々悩みが多く、技に少しの進歩も自信も持つことが出來ぬとは、我ながら悔しいことだ』

統秋の睫毛はいつか濡れてゐた。

そしてその音は次第々々に亂れ下つた。低く唇を洩るゝは、吐息か、溜息か、非らず、身の不甲斐なさを嘆くしのび泣きの聲であつた。

亂れた世に生れて、藝術に精進しようとする程惨めなことはない。世が世ならば名人信秋五世の孫、その藝術と妙腕は、世の尊敬の的となつたであらうに、あはれや誰に聽けむくれて技を磨かねばならぬのである。

『あゝ、いつそ死にたい。――ただ、これも[illegible]たいのだ』こ

の身には蘭陵王荒序の秘曲が傳へられてゐる。(どうか、これだけは後の世に遺して呉れ)と、呉れ〲も頼んで、戰亂の巷へ身を投じた父上の志を思へば、この身の命であつて、この身の命ではない。石に噛りついても、昔の名人に劣らぬ腕になり、然るべき者を見たてゝ秘曲を讓らねばならない、それまでは、死ぬに死なれないのだ』

果してそれが自分に出來ようか、思ふだけで統秋の胸は潰れさうであつた。



降りそゝぐ蒼い月光を浴びて、しよんぼりと步むでもなく步を運ぶ統秋の姿は、世にも佗びしいものであつた。

群狼襲來

『ウー』と唸る獸の聲に、統秋はハッと吾に返つた。見れば、自分の步くにつれて、鼻をうごめかし、牙を鳴らして尾いてくる黒影。三——五——十。

『おゝ狼だッ!』

統秋は愕然として叫んだ。

その叫びに、早くも逃げようとする統秋の氣配を察したものか、怪獸の群は、さつと分れて統秋を圍み、圓陣を作つた。そして

『ウー』

『ウオ——』

と、思はぬ香餌にありついたのを喜ぶやうに、喉を鳴らして吠えたてゝる。その呪ひ嗚呼が、靜かな四邊に木靈するのも物凄く、更らに多くの狼が、待伏してゐるかのやうにさへ思はれた。

『あゝ、駄目だ!』

萬事休す、最早逃れる道がありさうにも思はれない。統秋はきつと脣を噛んだ。

(憂き世だ、死にたいと今も思つた世の中

だ。死ぬ命は惜しくはないが、その憂き世に今まで長らへ、從らな努力を重ねてゐるのも、唯、父の遺言を守つて、蘭陵王荒序の秘曲を、世に遺したいばつかりであつた。それに今こゝで命を落しては、今までの苦心も水の泡……だが、今更ら、如何にも出來ぬ』

ふとした感傷氣分から、いつもの路を踏み迷ひ、知らぬ山路に入り込んだ身の輕率に、流石に悔いを覺えたが、今はもう後の祭である。

天地感動

（如何にでもなれ、何もかも身と共に滅びるのだ、それもこれも前世の約束だらう）

その一時、捨鉢な氣分になつた統秋は、腕を組んで立ちすくんだ。

だが、忽ちにして統秋は、いま迄嘗つて知らぬ程の愛惜を、その愛笙に覺えた。今までは父の遺言の爲めに吹く、秘曲をよりよく吹奏するために練習するのだと思つてゐた愛笙に、限りなき愛着を覺えた。それと同時に、自分の藝術もいとしかつた。

突如！血を吐くやうな聲で統秋は叫んだ。

『これッ！狼。——おまへ等に若し性があるなら、この統秋の今はの願ひを聞いてくれ！この豊原統秋は、この世で蘭陵王荒序の秘曲を傳へた唯一人の人だ。この骸が今此處で死ねば、秘曲も永久に滅びるのだ。——もとよりこの統秋の肉も骨も、みんなお前達にくれてやる。しやぶれ、嚙め、一滴の血も餘さぬやうに貪り食ふがよい——だが、その前に、この統秋の今生の思ひ出に、蘭陵王荒序の秘曲を調べさしては呉れまいか』

人の言葉を聞きわける狼でないことは知れてゐる、だが、適はぬと知りつゝも、言はずに濟ますことの出來ぬのは、限り



ない遺憾があるからである。然し、狼はその事すらも統秋が反抗でもするかと考へたらしく、愈ゝ猛り狂つて、

『ウオー』

と物凄く吠えたてる。

統秋はどつかと大地に坐した。そして瞑目するや、愛笙を口にあて、瀏喨——と蘭陵王荒序の秘曲を吹きはじめた。

若し、狼の一匹でも飛びかゝれば、その時を以て絶ゆる命である。一調子一音、どれが最後になるのか分らぬのである。吸ふ息、吐く息、どれが最後になるかもしれない。

統秋は唯一生懸命に吹きたてた。

（若し、天地萬物に靈あらば、この統秋の最後の調べに心をとめて、後世の樂人に傳へよ、風の音にてもよし、鳥の啼く音にてもよし、蟲の調べでもよい。告げて呉れ、傳へて呉れ）と心に念じつゝ、息のつゞく限り吹きたてた。

その異常な昂奮に驚いてか、狼連は、統秋の周圍を物凄く吠えつゞけて驅けめぐつてゐたが、やがていづれからともなしに、その足取さへ笙の音と共に高く低く、合せて舞ふやうに見えるやうになつた。それもしばし、いつか、歩みを止め、だらりと舌をなげ出したまゝ、悉く地にうづくまつてしまつた。恰もその妙曲に聞き惚るゝものゝ如くであつた。

曲が進むにしたがつて、いつか統秋は、身に迫る危險をすら忘れてしまつた。唯、魂を打込んで秘曲を奏しつゞけた。妙音愈ゝ冴ゆるに及んで、其處に月もなく、人もなく、狼もなく、天地の間、唯、蘭陵王荒序の曲があるばかりであつた。



曲が終つて、統秋は吾に返つた。ハッと思つて四邊を見廻せば、尾を垂れて彼方に去る狼の群れが眼に映つた。

『おゝ、助かつたか——』

×　×　×

天地感動の自信を得た統秋が、古書の反古の中から古樂を調べ、體源抄を編んだのは、それから間もない。



妙所を悟る一刹那

岡本綺堂
松田青風畫

寛永初年の秋の末である。まだ四十には達くまいかと思はれる旅すがたの男が二人の供を連れて、江戸の能役者喜多七太夫の屋敷の前へ來かゝつた。彼は普通の武士ともみえない、さりとて普通の能役者とも見えない、優雅のうちにも逞しい風丰を具へた人物で、その顔には旅やつれとばかりは思はれない暗い影を宿してゐた。

彼はこの屋敷の主人の喜多七太夫長能であつた。能役者とは云ひながら、金春の大太夫と共に大阪に籠城して、元和元年五月七日、彼の眞田幸村の手に附いて徳川家康の旗本へ斬り込んだのである。幸村はその日の戰ひに討死したが、金春と喜多は無事に落ちのびた。武士ならば兎もあれ、能役者として我に敵對するとは不埒重々であるといふので、家康は見付け次第に彼等を成敗しろと命令した。

それでも彼等は運が好かつた。大阪落城の後、所々にかくれ忍んでゐる間に、家康もさすがに思ひかへした。一旦は彼等を憎んだもの丶、我が奉公する主君のために、武士と共に働いたのは奇特である。殊にあれほどの伎倆をそなへてゐる者を空しく朽ち果てさせるのは惜むべきことであると云ふので、



金春と喜多の罪をゆるして召出すことにした。そこで、金春は藤堂和泉守の手によつて、喜多は柳生但馬守の手に因つて、江戸へ差送られて再び家を興すことになつたのである。

かう經歴を有つてゐる上に、七太夫長能は金剛の門下を出で更に喜多の一流を創めたほどの人物であるから、武士の魂と藝術家の魂とを一つに具へてゐた。彼はいはゆる剛毅の人物であつた。而も現在の彼はその剛氣を挫かれて、江戸の土を踏む草鞋も重いやうに感じられた。

かれは所用あつて京へ上つて、しばらく逗留してゐるあひだに、江戸に殘した最愛の幼い男の兒が病死したのである。その知らせを受取つて、彼は急いで戻つて來たのであるが、江戸へ近くにしたがつて彼の悲みはいよ〳〵深くなつた。

『今更戻つたとて何うなるものでは無い。なまじひに家内の者共に色々の悲い話を聞かされて、いよ〳〵嘆を增さうよりも、もう一度、京へ引返した方が優しかも知れぬ。』と、彼は途中で幾たびか躊躇したが、供の者共に諫められて、秋のゆふ日の傾きかゝる頃に、やうやく我が屋敷の門前まで歸り着いた。

『お歸り。』供の者が門前で大きく呼ぶと、待ちかねてゐた家内の者がばら〳〵と出て來た。そのなかに三十前後の女もまじつてゐた。それは病死した男の兒の乳母である。乳母は他の人々をかき退けるやうにして門前へ轉び出て、主人の七太夫の着物の袖に取付いて、物狂はしげに叫んだ。

『坊樣は……坊樣は……。』

彼女の蒼ざめた顏は涙を浴びたやうに濡れてゐた。我子のやうに守り育てゝゐた幼兒を失つて、乳母が嘆きに取亂してゐるのも無理はない。而もこゝは往來の繁い門前である。うしろには供の者共がゐる、前には家内の者共がゐる。それらの手前、七太夫は日頃の氣性として女々しい風情を見せたくなかつた。彼は無言でその乳母を突き退けると、先頃からの看病疲れに弱つてゐる女は、屏風を倒したやうにばたりと地に倒れた。

七太夫は立ちどまつて、それを屹と眺めてゐたが、やがて獨り言のやうに云つた。

『あの子は孝行者であつた。』





かれは思はず莞爾と笑つた。さうして、無言で草鞋をぬいで、つか／＼と奥へ通つたかと思ふと、忽ち又、彼の乳母のやうにばたりと倒れた。彼は再び莞爾と笑つた。

それを見てゐる人々はおどろいた。わが子をうしなつた悲しみが、我家の門をくゞると共に一度に發して、主人は發狂したのであらうと思つた。而もその後の七太夫に變つた樣子もなく、型のごとく佛前に燒香して、家内の者に臨終のありさまなどを訊いてゐた。これで先づ人々も安心したが、それに付けても呑み込めないのは先刻の擧動である。何が嬉しくて彼は二度までも笑つたのか、何がゆゑに死んだ子が孝行者であるのか、弟子の一人がそのわけを問ひ訊すと、七太夫は涙を浮べながら答へた。

『なるほどお前達には不思議に思はれたかも知れぬ。先刻あの乳母がわたしに取付いたときには、わたしも思はず涙を催したが、人の見る目を憚つて、わざと情なく突き放すと、乳母はそこにばたりと倒れた。その一刹那、不圖わたしの眼に浮んだのは、彼の「藤戸」の能の「佛ころび」である。おまへ達も知つてゐる通り、佐々木盛綱が藤戸の渡で淺瀬を教へた漁師を殺した爲に、漁師の母の亡靈があらはれて盛綱に恨みを訴へる。そのなかに「人目も知らず伏し轉び、我子返させ給へやと、うつつなき有樣を見るこそ哀れなりけれ」といふ件が、いはゆる佛轉びとして、この道では甚だむづかしいものになつてゐる。それを今、わたしははつきりと見出した。乳母の倒れた形が即ちそれで、わたしは急に眼が明いたやうに感じた。わが子が死なずば乳母も躓くまい、乳母が躓かずば私は藤戸の妙所を悟ることは出來まい。わたしは死んだ子にその妙所を教へられたやうなものである。彼を孝行者だと云つたのは其譯であると思へ。』

聽く者も涙をながした。喜多流の「佛ころび」は元祖七太夫の型が後代までも傳へられてゐるのである。

（をはり）

かめ女の香爐

大倉桃郎

長崎の女鑄物師龜女の許へ、りつぱな武士が訪れた。大大名鍋島家からの使者である。携へて來た箱の中から一個の香爐を大切さうに取出して、

『これは殿樣の御秘藏の名器であるが、殿樣はこれを一對にしたい思召である。そこで其方が鑄物の名人であるといふ事を聞しめされて、これと同じものを一つ造らせよとの仰せである。引受けてくれるかどうか』と、語つた。

『いかにも造りませうが、しかし日數が長くかゝります』と、龜女は答へた。

『何日かゝつてもよいが、何分大切な品であるから、その方へ預けばなしにしておけぬ。新しいのができるまで、拙者はこの香爐の番人としてこの家に滯留することに致すぞ。』

『かしこまりました。』

話はきまつた。

香爐には龍の形を精巧に鑄つけてある。龜女はそれを机の上に据ゑて、毎日眺めくらした。横から見たり上から見たり、臥して見、立つて見、或ひは手に取つて見る。夜など俄かに起きて眺めてゐる事がある。使者もそばにつききりである。



かうして一ヶ月。隨分氣が長い、使者はうんざりしてゐる。また半ヶ月ほど過ぎて、やうやく龜女は香爐の色澤、形、大いさ。味ひを頭に入れ魂にきざみこんだ。さて其香爐を手に取ると、突如庭の石に投げつけて打碎いた。

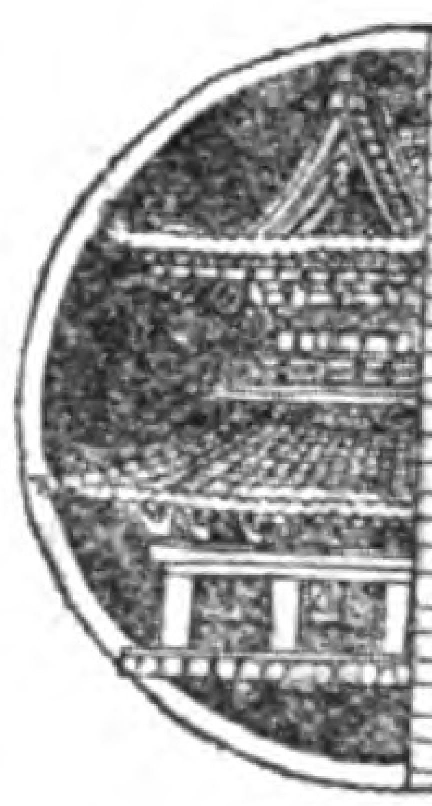
『わつ。』使者は抑天、激怒、刀に手をかけた。

『おのれ氣が狂うたか。御秘藏品を壞されては、拙者は申わけが立たぬ。その方を斬棄て拙者も切腹する。覺悟いたせ。』

だが、龜女は平氣である。

『お待ち下さい。しばらく私のする事を御覽下さい。』

使者をしづめて龜女は、たすきをかけ細工場に下り、型をつくり鐵を溶かして、半日ほどで二つの香爐を造つた。藥をかけ磨きをかけると、さすがに一ヶ月半眺めくらした精神鍊磨の力である。碎いた香爐と微塵もちがはぬ名品が一對出來あがつた。その妙手に使者は又びつくりしたとある。



粒畫奇談

白石實三
苅谷深隍 畫

米粒へ大畫

天才畫家葛飾北齋が、兩國回向院で、疊數百二十疊の大厚紙いつぱいに、布袋の大畫を描き、その後で、粒畫を描いたことは、有名な實話である。そのとき、北齋は、一粒の米に二羽の雀を描いて、江戸市民を驚かした。

ところが、こゝに明治の初年、四谷の街頭に、北齋に負けない不思議な粒畫家があらはれて、評判になつた。

それは、畫家といふよりも、無名の一工人だつた。が、超人間的の驚くべき技術をもつた一種の鋭い天才だつた。殊に、彼は眼がよかつた。一粒の米をとつて、客の求めに應じて、花鳥でも人物でも、乃至山水でも、お好み次第に描くのに、その技の細かくて美しいこと、とても人間業とは思はれなかつた。

『あんなのをこそ、眞の名人といふべきでせう、西洋には、あんな器用な人間は生れない、恐らく世界に二人とない粒畫家でせう』

ある人はさういつて、時の學者菊池三溪のところへ、その粒畫を持つて來て、示した。

その米粒は、小さな錦の袋に包んであつた。三溪が、袋を解き、指先で撮んでみると、一分ばかりの米粒があらはれた。水晶のやうに磨きがかゝつてゐる。

その上に、ごみ〳〵何やら書いてある。が、すこしも解らない。

そこで、大きな蟲眼鏡を取りよせて、じつと見ると共に、三溪は『あつ！』と驚嘆の叫びをあげずにはゐられなかつた。

そこには、實に、見る眼もまぶしい、五彩さんらんたる、立派な美しい大畫（？）が描かれてゐたのであつた。

まづ中央には、大きな白象が畫いてある。象を取りまく護衞のもの三十人、それから約二百輛の車と約千頭の馬が、象に從つて、一大花園の中を行列してゐるのである。地には花咲き、緑樹が茂り、空には、鳥が美しい羽をひろげて飛んでゐる。

象の背には、眼もあやな錦の茵を敷いてある。茵の繪模樣は、或は鳳凰をあしらひ、龍を描いて、龍の鱗まで、はつきり彫み出されてある。美姫の一群が、その上に坐して、或は琴を

かなで、笛を吹き、鼓を打つ有様が、生きてゐるやうである。
その上に童子が數人、或は象の背によぢのぼり、頭に坐り、耳の上にのぼつて、中、二人の童子は相撲をとつてゐる。
さらに象飼が數人、銅盤をさゝげて、象に水をやつてゐるかと思へば、その中の一人は、旗をかゝげて、前驅をしてゐる。その旗には、龍虎の繪が鮮かに描かれてゐる。
その他、路傍に集つて行列を見物する群集は蟻のやうで、その老若男女の區別をも、はつきりと描きわけてゐるのであつた。
『まことに、これこそは世界に稀有な日本の粒畫ぢや、だが一體これは何で書いたものであらう?』
三溪も舌を捲いて、詳覽した。それから、手を廻して調べると、鼠の鬚で描いたといふことだけは解つた。
けれど、鼠の鬚の用筆は彼の粒畫家の秘密とするところだつた。だん〳〵評判になつて、秘術を嗅ぎつけられる恐れがあると思つたか、彼は、まもなく四谷を去つた。
『私の名か、はゝは、一粒齋とでも言つておかうか』彼はさう答へたきり、身分をも明さないで、四谷往還から、姿を消してしまつた。で、それきり、世の中に姿をあらはさない……。ただ僥倖にも、筆者は、彼が百人一首を書いた記念の一隅を、今も大切に珍藏してゐる。

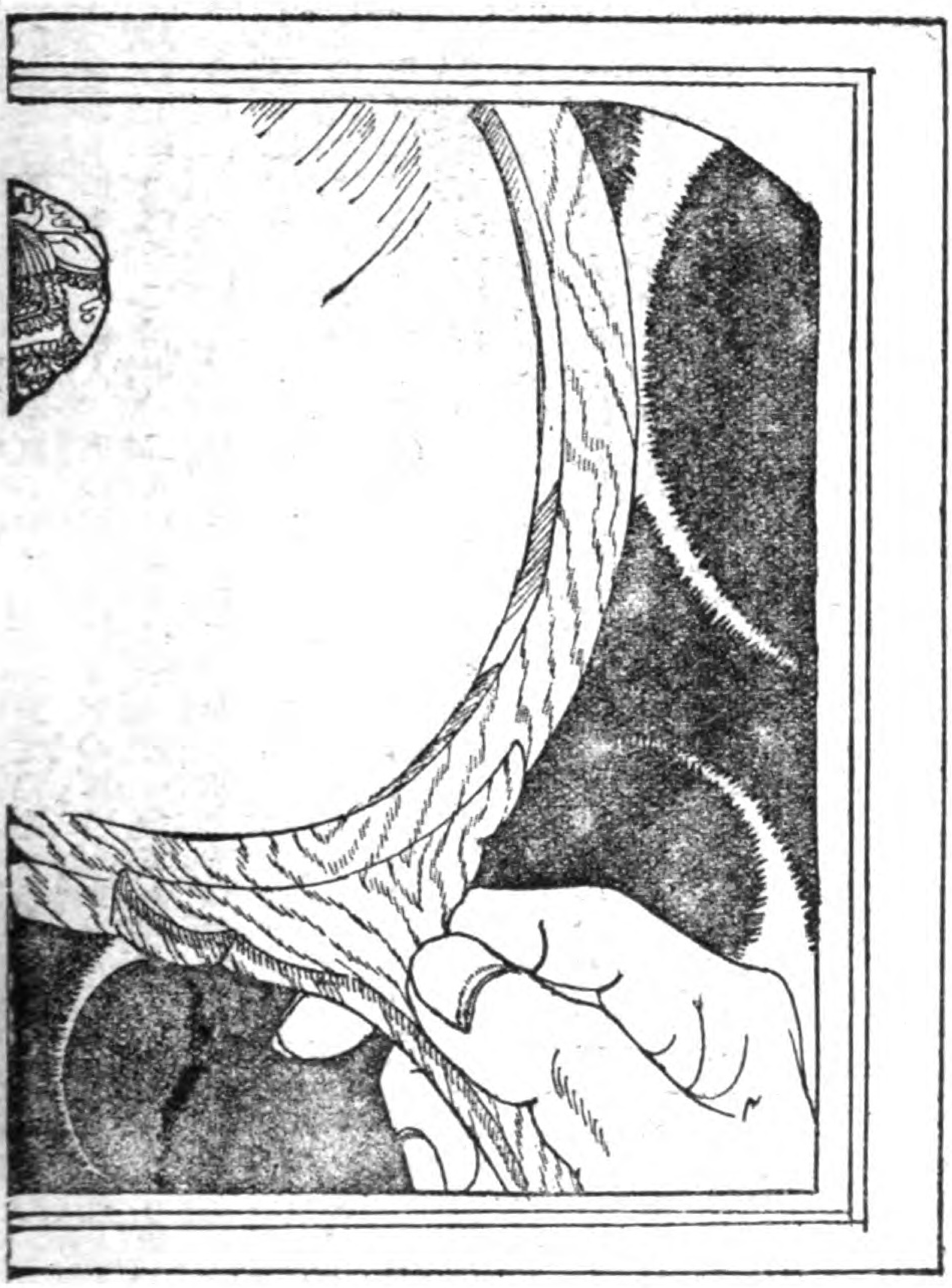
二寸一分の大佛殿

『昔は虱を懸けて射を學んだものもある。大にして粗なるより、小にして精なるものが欲しい』
さう叫んで、日本一の小さな、そして日本一の精巧な佛像佛殿を造らうと思ひ立つたのは、奥州の丹治といふ僧だつた。
彼は、佛師で、つとに奇行を以てあらはれ、その金錢に淡泊なこと、生涯貧困で終始したことは、彼の畫友人北齋に似てゐるが、やはり北齋のやうに、最初は大きな佛畫を描き、大きな佛像を刻むことに興味をもつた。
が、一旦志を立てゝ『小さく精巧な』ものにこそ、魂を打込まうと決心してからは、日夜かんたんを碎いて、まづ自分の技を練つた。
針のやうな錐、鋸、鑿、さういふ道具を揃へる傍ら、まづ自分の眼、指、指の爪、神經、注意力といふものを、ごく〳〵微細たものに馴らさうとした。そのために、彼は毎日、自分の髮の毛を拔いては、その一筋を割く稽古をした。
微塵精進の功は恐ろしいもの、しまひには、一筋の毛が縱に割けるやうになつた。彼は、一筋の毛を四つに割いて、自分の視力と業とを試してみた。
割かれた毛の中は空で、まるで、竹を割くやうであつた。
『小手調べはすんだ、いよ〳〵佛殿に取りかゝらう』
それから、彼は一室に立てこもること數年、遂に、一座の、世にも珍らしい佛殿を造りあげた。
その佛殿は、高さ僅かに一寸一分、四方七分にすぎないが、

その精巧無比なこと、日本のいかなる大殿堂も、遠く及ばないといふ出來だつた。儒者安積艮齋は、曾てそれを一見して『これこそは天下の絶技、名工鍛錬の極致』とまで、筆を極めて、驚嘆してゐる。

掌にも握れる細工物が、それほど巧緻を極めてゐた。まづ、屋根には、今にも羽搏いて飛び立たうとする鳳凰を飾り、四方の檐には、象が鼻をのべて、簷を受けてゐる。四面の梁の間には、諸菩薩の像を彫んであるが、その數三十二、或は蹲まり、手を拱き、または仰のくもの、伏すもの、片肌ぬぐもの、胸をあらはすもの、一つとして姿の似てゐるものはない。姿ばかりか、顏もそれぞれにちがつてゐて、眼も眉も耳も鬚も、同じものは一つもなく、さながら生ける五百羅漢の一部を見るやうである。じつと見つめると、掌のきめ、袈裟のひだまでも、ありありとはつきり彫られてある。

四方の大柱――といつても、文字どほり蚊の脛ほどの太さであるが、その柱には、それぞれ龍が纏ひついてゐる。怒れる頭角、焔のやうな紅い舌、髯、鱗まで、微細に彫つてある。



そこに、また塵のやうな粉末がこびりついてゐる。眼性のよい人が、明るみへ持ち出して、ためつすかめつして見ても、何だかさつぱり解らない。それで眼鏡に照らしてみると、忽ちそこにあらはれたのは、欄間の彫刻である。唐獅子が牡丹に狂つてゐる。一方には、數枝の梅花がほころび初めてゐる。南に面した梅花は、すでに滿開で、日陰のは、蕾が固い。が、薄紅く彩りが施されてある。

その他、殿の中央に安置された彌陀の像から、像の下の蓮華から、左右に侍立する觀音勢至の像にいたるまで、その彫刻は微に入り、細に穿つて、それが六十餘歲の老僧丹海の作とは、到底受けとれない。

『これこそは眞に鬼神の技だ、傳へ聞く飛騨匠の鑿もこれには及ぶまい、名人を超えた神業ぢや』

里の人々が口々に稱へると、奇僧丹海は、始めてにつこり笑つて、頷いた。

『いや、大にして粗なるより、小にして精なるもよい、この細工は拙くとも、これを造らうとした私の精神だけは、世に傳へたいものぢや』(をはり)

○世の中に物の稽古をするがなるふじの高嶺に名をあげよ人(守武)



長屋連を驚かす

その頃の竹本攝津大掾に取つて頭痛の種は『中將姫』雪責の場だつた。どう工夫しても責場の姫の苦しむ表情が思ふやうに語れない。

夜は更けた。攝津大掾は我れを忘れて、責場の工夫にあゝもあらうか斯うもあらうかと顔を疊に擦り付けたり、責められる身振のさま〴〵、泣き苦しむ聲などを出して一心不亂。その異樣な聲は寢靜まつた夜の空氣を顫はして、陰に物凄い。

尼ケ崎の裏長屋の者は、時ならぬ苦悶の聲に夢を破られ、耳を欹てゐたが、どうやら人の縊め殺されるやうな氣配もする。さて一大事と近所合壁の者が寄り集つて、聲の主の家を一軒一軒探し廻ることになつた。

攝津大掾は戸外の人聲に初めてそれと氣付いたが、今更名乘り出ることもならず、面目なげに息を凝してゐると、長屋の連中は彼の家をも起しに來た。言ひそびれた彼は仕方なく素知らぬ顔で合槌を打ち、共々聲の主を探しに歩いたが、これは判らない方が當り前だ。探し疲れた長屋の連中、寒さに口を顫はして、『怪體なことやナ』『大方、狐か狸の仕業だすやろ』といふ事で落着したが、いつか此の事が世間に傳はり、『攝津大掾の中將姫』は大阪名物の一つになつたといふ。

稻田さくさく
黄金が搖れて
村にや笑ひの
波が寄る。

添田唖蟬坊

鈴木文史朗

人生悲涙の谷には多く陷るが、歡喜の山には多く登らない。況んや其の頂上をや。例へば、誰しも親子同胞の死に遭遇する。それは深い悲である。併し、それを相殺する歡喜には誰しも必ず會ひはせぬ。凡人の生活には、悲哀は一度に來り、歡喜はなしくずし的に來る。日常平凡な淸福を自覺し、享樂する者は賢明である。

鶯亭金升

○雀躍の至りと申す當り年。

松平俊子

○祝福のダンス和朝の歡喜天。
○よろこびの戊辰年の日本中

○いざさらばしるもしらぬもろともにこの大嘗に入らんとぞ思ふ。

○大ぞらの雲のゆきゝも只ならぬ代にもみ法の道はありけり。

○のぼりこし深山の奥の岩淸水幾代の人の手にやすくひし。



池邊釣壺

高木角戀坊

○嬉しさの餘り飛び附く犬の泥。

○喊聲を擧げて日の出へ伸び上り。

○逢へて嬉しい瞳の色を見のがさず。

尾崎喜八

今朝、最も純な素朴な一つの喜びが高い樹の涼しく暗いしげみを飛んで降りた。

彼はけむる秋草の穗を愛して走つた。

彼は小川の白い瀬と一緒に笑つた。

それから彼は朝の靜かな町へ入り込んだ。

どこかの窓があいてゐた。

一つの純朴な顏が彼を認めた。

彼等はしばらく一緒にゐた。

そしてその顏に今朝現れた表情は、何か善い事がしたいと言ふ願ひであつた。



北澤樂天畫

石川宰三郎

○しみじみと朝をよろこぶふるさとのもの古る家に味噌たく香ひ。

近藤飴ン坊

○滿腹の馬のきげんは桶を嚙み。

○活動へ誘へば女房いゝ返事。

○緣談に娘無口でなかりけり。

中村吉藏

○波の上に咲ける珊瑚樹よろこびの底は千ひろの海の悲み。

心境を語る

本社々長　野間清治

（一）

自己を語るやうで誠に恐れ入ります。併しながら、此頃、私はどうしても、それを語らずには居られない心境にあります。暫らく御勘辨を願ひたいのであります。

私は少年時代から、どんなに叱られても、滅多に泣いたことはありませんでした。それほど剛情で意地ッ張りでありました。

然るに、青年期に入ると、嬉しさの爲めに涙ぐむやうになりました。だん〳〵年を取り、世の中を渡り、備さに辛酸を嘗むるに及んでは、何か有難いといふ感激に打たれると、どうしても泣かずには居られなくなりました。萬人が皆さうでありませう。人間當然の事でありませう。たゞそれが、

『打つても叱つても泣かない奴だ。手におへぬ剛情者だ！』

と、泣かないが爲めに憎まれた私だけに、自分ながら妙に思ふのであります。

近頃は、さうした傾向が殊に段々強くなつて來たやうに思はれます。年齢のせゐか、それともさうした生活に恵まれてゐる爲めか、何にしても有難い事であります。

今年の夏は、昨日も今日も、毎日の雨。恐らく最近十年、二十年の間には、これ程の霖雨は無いと世間では言つてをる。と、私の一家は、恰も此の雨の如く、生れてから嘗て覺えぬ感激感謝の涙で、この日頃を暮らして居ります。

『こんな自分達であるのに、世間から澤山恵まれてゐる。此の上どんな事をしたらよいのであらうか。今後どうしたら之に報いる事が出來るのであらうか。』

本當にこんな仕合せな事はない。勿體ない事だと思ふにつけても、私は沁々幸福感に打たれて寧ろそら恐ろしくさへ思ふのであります。

（二）

晉羽の宅にをる少年達は、今夜もまだ寢ないと見える。もう夜中の二時といふのに、私の部屋の前を通つてゆく者があります。

『餘り晩いやうだが、早く寢んで貰ひたい。身體を惡くしてはいけないから。』

一寸注意を與へた。それにしても毎日々々あの有樣ではと心配になつた。——新館の二階で全集の仕事のために働いてゐる多くの少年達は、あゝして朝は早くから夜晩く迄の大努力を、もう何十日といふもの續けてゐる。文字通りの不眠不休を敢行してゐる。それについて此の際一寸注意して置く必要もあらうかと思つたので、これらの一團を私の部屋に招き寄せました。

一同は、ずらり私の前に居並びました。

『皆の熱心と努力とは實に感謝に堪へぬが、併し、ものは度を過ごしてはいけない。身體を惡くしては親に濟まぬ。主人にも濟まぬ。國家にも濟まぬ。』——段々さういふ樣な話をして、明日以後は成るべく、十二時に寢むやうにと言ひ聽かせました。

序に、全集の仕事についても尋ねて見ました。『どうだ。讀んでゆくうちに、感銘の深い、とても堪らぬといふ樣な良い所があつたか。』などといろいろの話に入つた。その中に、だんだん近頃の感想といふ樣な事が彼等の口から漏れ始めた。一人は熱心な態度でこんな事を言ひました。

『旦那樣からのお話で、これこそは御國の爲めであるといふ仕事ならば、縱ひ少年部の者でも、社員の人のお手傳ひをして、この大業に貢献せねばならぬと思ひまして、私共一同は及ばずながら一心不亂にやり始めました。初めの中は、可なり辛い樣な感じも致しましたが、その都度、御國の爲めだと自らを撻つて、お互に警め勵ましあひました。私共はもと〳〵學問もないものですけれど、この仕事に沒頭するうちに、どうやら相當進歩したやうに思ひまして、何とも言へぬ喜びを感じます。そして今迄社の爲めだとか、御國の爲めだとかいふ考でやつてをつたのだが、それは同時に自分の爲めでもあつた。情は人の爲めならずと言ふのは本當だと思つて、毎日感謝の心持で仕事に精を出して居ります。』

さうしますと、それにつれられて、第二の少年もまた申しました。

『只今のお話をきいて私も思つたことがあります。自分を捨て、自分を忘れて、唯々社の爲め、主人の爲め、世の爲め、國の爲めと考へてやれば、それが環り來つて自分の爲めになるものだといふことは、この度、全集の仕事をしてゐる中に、つく〳〵感じたことであります。仕事には骨が折れますけれど、それだけ自分の修養が出來るのですから、

こんな有りがたいことはないと思ひます。それで、少しも苦しいことはなく、それは却つて樂しみになりました。今日此頃はもつと苦しみたい、もつと多くの御用を言ひつけて戴きたい。それにしても、どうも時間が足りなくつて困る。人間はどうしても睡眠のために六七時間をとる必要があるものか、どうか、などと考へることが御座います。』

みんなは笑ひました。これは勇ましいたのもしい笑ひでした。

すると第三の少年が、又こんな事を言ひ出しました。

『嘗て少年部修養會の席上、一少年の演説で此のやうな事を聴きました。――或る意味から申せば「キング」は賣れるのではない、賣るのである、よい物を更によくし、安い物を更に安くし、光の上に光を添へ、どこ迄も苦心してどうしても賣り擴めるのである。やつてやつてやつてやり拔くのだ。出來るだけ汎く擴めるといふ事は、即ち世の爲になるのだから死ぬ氣でやつてやり拔くのだ。――といつたやうな話を聴きました。

私は今度本社の企てた御大典記念事業の數々も、同じ心持で當りたいと思ひます。斃れる迄やつてやり拔かう。意義ある仕事だ。男兒の意氣を示せ。死ぬつもりでかかれ。それでこそ聖なる戰の大勇士だ。それこそ親に孝、君に忠なる所以だ。死して餘榮ある痛快事だ。男兒報國の爲めに求めて容易に得られない絶好の機會だと考へてをります。』

といつて愉快よく座に復しました。

さうすると、直に第四の少年が起き上りました。

『左樣です。私共は「キング」を出した時、是れ以上の仕事はもはや一寸難しいやうに思ひました。所が昨年我が國に一の大雄篇たる「明治大帝」が出ました。それが又、日本雜誌始まつて以來の大部數です。もう是以上は難しいと思ひました。然るに更に、此の秋の數々の記念事業を見て私共は愉快でたまりません。私共に限りはありません。日本樣や皆樣が御名聲さへお出し下され、それぞれの道をさへお立て下さるならば、私共は喜々死力を其の間に捧ぐるのを以て光榮と致してをります。どんなにでも働きます。私共の身體を案じて下さる。この日本樣のお身體こそ、私共一同の朝夕御心配申上げてをるので御座います。』と申しました。一座のものは、覺えず拍手いたしました。

私は、たゞ涙であります。而して心中窃かに思へらく『少年ながら偉い事を云ふものかな。天晴れた考へ、見上げた心根、年こそ違へ、考へ方も行り方も自分以上である。』と、そゞろに恥かしくさへなりました。さるにても頼もしの若者よ。この社を、この我を、それほどまでに思うて呉れるかと、たゞ感謝の涙あるのみでありました。

（三）

翌日、晋秋の宅で御大典記念事業の各種の會議がありました。此頃は、ずッと、水曜日と土曜日と、定まつて私の處で會議を開きます。之を大會議と稱してをります。中小の會議は、社内で每日數回各種のものが行はれてをります。宅の大會議も定つては一週二回ですが、其の外にも臨時に何回も御座います。

晋秋の所謂大會議は、午後五時より翌朝五六時、若くは六七時迄ぶッ通しです。もつとも婦人の力や翌朝用事を控へて居らるゝ人は、十二時半の終電車に歸つてもらふ事になつてをりますが。

もう夜中の二時半、今日はこれで珍しく豫定の案件を議了した。そこで私は考へました。餘り無理をしてはならぬ。無理をせず、ぢッくりぢッくり、一歩一歩に、安全の大道之堂々と進んで行く方が、結局、大きい仕事が出來るであらう。碁將棋でも、相撲でも、劍道でも、名人達人のやり方は、奇拔とか壯快とかいふのでなく、普通人が見ては左程面白くないが、そこに言ふに言はれぬ味のある澁いやり方、種々のやり方であるやうに思はれる。我等も無理な手を用ひてはならぬ。血氣に逸つて無理な事をしては續くものではない。さうだ。今後はさういふ事にしようと、竊かに考へて居りますと、その時、一社員が立ち上りました。

『今、まだ二時半です。もうすぐ朝の電車が出ます。あと二時間程です。就いては今日の豫定ではありませんが、「キング」の十一月臨時增刊の事に就いて、諸君のお說を伺つて見たう御座います。』

■どんどん相談が始まりました。いかにも、これは肝腎な相談で、又急を要する事だと思つたので、私も熱心になり、愈々甲論乙駁、もう閑會の考



野間社長

も何もなく、電車の時間すらも忘れて了ひました。其の中に「キング」臨時增刊の相談が濟む。時に五時半、既に夜は白々と明け放れてゐました。

（四）

また一社員は立ち上りました。

『諸君、洵にお氣の毒ですが、營業方面の事で二時間程お智慧を拜借したい事があります。』

また「二時間」と言はれた時に、私は一寸閉口した。他の人はと見ると、平氣である。大いに聽かう、大いに言はう、といふ眞劍味さへ滿ちてゐる。私は愧ぢ入りました。大事を企てるからは、普通の事をしたのでは、普通以上の事は出來ない。萬難に出會ふのは素より覺悟の前だ。「斃れて後已む」は單なる形容詞ではない。自分の事業を天より命ぜられたる唯一無上のものとするならば、之が爲めに病むのも、死ぬのも、大快事、大本望と言はねばならぬ。社員諸君の、あの熱心さを見よ。汝に左樣な怠慢な念のあるは何事ぞ。と自ら叱り飛ばした。

私はゐずまひを直した。一體、其の問題といふのは何であるかと思つた。さてその社員の語り出づるところを聽くと、一同は肅然として容を改め、一座は寂として水を打つたやうになりました。そもそも、それは如何なる事であつたか。社員の言葉は娓々として續く。

『今申したやうな譯で、製本所も、印刷所も、製紙會社も、洋紙店も、あらゆる本社關係の人々約三十軒が、既に十數回の會合を重ね、我社今回の企業に對し、特殊の援助盡力をしようといふ申合せをされた譯です。「我等の有らん限りの誠意と努力とを以て、良いが上にも良く、安いが上にも安く、前にも無く後にも無い底のものにしたいのだ。大日本雄辯會講談社のあの精神、あの熱意に共鳴し、同社を通じて國家社會の爲め、天下の同胞の爲め、やつてやつてやり拔かねばならぬ。銘々それぞれの事業の方面については勿論のこと、進んでは之が宣傳にまで我等の力を致したい。」と云はるゝのであります。何といふ有難いことでありませう。

併し、私は、此の企を耳にした時、「どうぞ、御銘々の事業の方面、製本の方は製本の爲めに、印刷の方は印刷の爲めにといふやうに、其の當面のお仕事の爲めに、最善の努力を盡すだけにとゞまつて戴きたい。この一擧が國家の爲め、同胞の爲めといふので、私共に共鳴して御盡力下さるのは、勿論有難い事であり望ましい事ではありますが、それ以上の事は御辭退申上げたい。皆樣はそれぞれ各方面の出版業者に御關係がある。而して何れの出版業者に於ても皆國家を思ひ、同胞を思つて、努力されてをる事である。然るをたゞ我社の爲めにのみ、左樣に特別なる御援助を下さるといふことは、我が社一同、其の思召を伺つただけで

も、感激感謝に堪へず、それ程までに御信用をたまはり、それほどまでにお肩入れ下さるとすれば、萬一之に背くが如き事あつては、何の面目を以て、再び皆樣にお目に懸かれませう。有難いとも忝ないとも申樣がありませぬ。

然し、あなた方としては、他の思惑もお有りの事故、御迷惑になつてはと、恐縮に存じます。宣傳其他の御盡力は御辭退いたしたい。」と自分は熱烈に申上げました。

けれども、どうしても聽き入れられませぬ。「私共は他の出版業者の方々に對しても勿論信用し尊敬してをります。出來る限りのことを今後とも致さうと思つてをります。それ故、貴社ばかりとは申しませぬ。たゞ何としても今回といふ今回の御計畫が、二大全集と云ひ、大日本史と云ひ、英雄待望論と云ひ、九雜誌の御計畫と云ひ、キングの臨時增刊と云ひ、總べて美擧、壯擧、唯々感謝に堪へませぬ。其の美擧壯擧にたまたま、一二の者より斯うした事でもして、參加したいといふ話が出たので、それが口火となつて、それこそ皆が思つてゐた所だ、言はんと欲した所であると、忽ちに話が纏まり、忽ちに醵金等も出來ました。そして今まで十數回の會合は、或は料理店に於てし、或は他の事務所を借りて之を行つたのですが、今後はその費用を節約するため、參加者の家に於て毎週土曜日毎にこれを催すことゝ致しました。そしてその節約したる集會の費用は、總べてこの運動の費用に宛てようといふ次第であります」といふのであつた。これがその實狀であります。』

一座の者の目には涙が溢れました。何といふ勿體ない事であらうと、孰れも感に迫れる面持であります。

社員は更に語を繼いで、

『それから、「是非、社の方からも一人だけ都合して、此の會に參加して貰ひたい。我々のやる事が却つて御社の迷惑になる樣な事があつてはならぬと思ふから。」といふことで懇請止むなく、私は一日その席に臨んで、世にも美しき御同情のお話、有難い御援助の計畫を承つたのであります。その義俠なる社友諸君は、明かに御銘々の名を以て、我が全集が日本一である事を天下に證明して下さるさうです。各會社、各印刷所等、その關係の總べての人より、其の知れる限りの友人知己に對し、一々本社の爲めに熱烈なる勸誘狀をも差出さるゝさうであります。その他、曰く何、曰く何。諸君、此の外にもお氣付があれば、何なりともお望みに任せると云ふ、親切なお言葉もありました。』

此の場合の感激、感動、不文にして之を言ひ表はす事が出來ないのを遺憾とします。

（五）

此の朝、八時十分前、社員諸君を送つて玄關に出ました。諸君の顏は蒼く、目は赤くなつて居る。然し夜を徹したとか、苦しかつたとか、眠いとか何とか、そんな感じは

一點非難の聲にも無い。唯、有るものは、感激感謝、拭き殘つた涙だけであります。諸君の後姿を見送つて、『ほんたうに御苦勞である。』と私は又しても涙でした。これは、年齡の故ではない。此頃は斯うした有難さに涙の日のみが續くのであります。此の日もまた雨が降りしきりました。社員諸君は今この雨を衝いて、一時間、二時間の後に、やうやく御自分の家にお歸りになつて一寸まどろむ。ほんの一寸まどろまれて、また社に出掛けられるのである。社は例によつて例の如く、匆忙を極めてをる。

『あゝ、御苦勞樣である、有難い事である。社員と思つては相濟まぬ、私を助ける神樣である。あゝ、さうだ。日頃お世話になる印刷所の方々も、製紙所の方々も、日く誰、日く誰、悉く私を助け、私を導く神樣である。有難いことだ。勿體ないことだ。』

感慨は深くして長い。

昨日も今日も、其の翌日も、其の又翌日も、來る手紙も、來る手紙も、見ず識らずの人からも、激勵と讚歎との言葉が續々として盡きない。或は新聞に、雜誌に、而も海を越えた米國のそれ、英國のそれに、微力我社のことを紹介せられ、眞に分に過ぎた言葉をさへ與へられる。大日本史の發刊に對して、四方に御意見なり、御感想なりをお伺ひした御返事の中にも、『やれ、大いにやれ。美事な企てだ。これこそ[illegible]圖である。』と皆樣からの稱揚鼓舞。總て

てが過敢て當らず、たゞ身の至らざるを恥ぢ、たゞ非の及ばざるを歎ずるのみであるが、一々が感激の極ならぬはない。

德富蘇峰先生からも、書留でお手紙を頂戴しました。私は容を正して拜讀しました。

香山一別以來、轉タ想思ヲ勞シ候。

却說、御大典記念トシテ大日本史御刊行、誠ニ此レ以上ノ適當ナルモノハ無之、流石ニ尊臺ノ御炯眼敬服此事ニ候。今更大日本史ニ就イテ彼是贅辭ヲ加ヘ候ハ餘リニ野暮ナ事ナガラ大日本史ハ實ニ日本帝國ノ存セン限リ必傳ノ書ニシテ、日本國民ノ存セン限リ必讀ノ書ニ候。白石モ山陽モ其ノ大綱ニ於テハ全ク大日本史ノ軌轍ヲ踏襲候一事ヲ以テシテモ、其ノ眞價ハ證明スルニ餘リアリト存ジ候。而シテ老生ガ曾テ尊臺ノ事業ヲ目シ私設文部省ト評シタルノ言ノ、愈々的確ナルヲ此擧ニ於テ證明シタルコト實ニ快心ノ至ニ候。

但ダ事業ノ膨脹ト共ニ、主宰者ノ健康尤大切ニ存ジ候。折角御自玉御攝養專一ニ奉存候。匆々拜復

昭和三年八月十六日

蘇峰迂人

野間仁兄大人

玉几下

私は先生の此の書を拜誦して、永い過去を思ひ出しま

した。私は十三四歳の頃から先生の「國民之友」を盛んに讀んだ。其の後、あの赤表紙の「國民叢書」、「日曜講壇」の殆どすべてを如何に憧憬と感激とを以て貪り讀んだことであらう。本當に讀んで讀んで讀み拔いた。其の後、青年期に入つても尚讀み續けました。國民新聞も十四五歳から讀んで今日に至つて居ります。

左樣な譯で、私は直接先生から教を受けた事はないが、先生は私の恩師であると、常に感銘し敬慕してをります。家内にも子供にも社員にも少年にも、話して聽かせてゐるので、皆よく承知して居ります。

其の先生からの御書面には、私は身分不相應にお見立て下され、微力なる我が社の事業を私設文部省とまで賞揚せられ、而して最後に其の身を大切にせよと親身の御愛情を披瀝せられてゐるのを見て私は涙を催しました。

もとより是は到底相當らざる過褒である。一面には、何處までも後進を導き、若輩を勵まし、御國の爲めに一人でも奮ひ起たせようといふ思召でもありませう。私共は愈〻一生懸命にならなければならぬ。愈〻御國の爲めに盡さなければならぬと思ひました。

總べてのもの、盡く感謝感激、たゞ、涙あるのみである。

次々に、諸名士、諸先輩よりの御深切なお言葉、御眞情を籠めての御書面をいたゞいて、私は此の頃毎日々々涙乾く時がない。

涙と云へば「悲しみ」とか「歎き」とかゞ直ぐ聯想される。私は、涙の幸福、涙の歡喜、涙の光榮を沁々味ふ事が出來るやうになつた事を申述べると共に、また天に謝し、地に謝し、人に謝し、事々物々に感謝しつゝある次第であります。

大日本史の刊行と義公生誕三百年記念會

一記者

本年は恰も義公誕生三百年に當るので、水戸に於ては、土地の人々並に朝野の諸名士を以て記念會を組織し、一大記念祭をあげ、幾多の記念事業を計畫されました。大日本史の刊行もその一つですが、何としてもあの浩瀚の書、其の校訂に當られた清水正健先生の御苦心はいふまでもなく、記念會の方々の御骨折は容易ならぬものがありました。

今回、この國寶的典籍が空前の完本として刊行され、意外の成功を收めてゐるのは、記念會の御後援に負ふ所尠からぬものがあります。

茲に愛讀者諸氏に謹告して感謝の意を表したいと思ひます。

寓話 一語の價千金

野邊地天馬



昔タタールの領主が、多勢の家來をつれて狩獵に出かけましたが、その時のこと、
『千貫の金で金言を授けませう、授けませう！』
と叫んで來る一人の坊さんに會ひました。そこで領主は、
『さても、面白い坊さんだ、醉狂に言ふものとも見えぬ、思慮のありさうな人だ、その金言を買ふであらう。これ、坊さんを呼べ。』
家來の一人が、かしこまつて其の旨を傳へますと、坊さんは、
『金言が御入用でございまするか。』
『如何にも左樣で……』
『では、千貫のお金を下さいますか。』
『それは知れたこと、領主樣の思召しだ。』
坊さんは改まつて、さて申しますのに、
『すべて事をなさんとせば、先づその結果の如何を熟慮せよ、家來の得失を察せずして輕々しく手を下すべからず。――と言ふのがそれで御座います。』
と申しました。家來たちは、
『なあんだ、そんな事か、そんなことなら誰でも知つてゐる。知つてゐる事を教へて千金を貪るとは太い坊主だ……』
と罵りましたが、領主は何を考へてか、
『これ〳〵家來ども、そのやうな無禮をしてはならぬ、坊さんに詫びをしろ。』
と言つて、却つて禮を述べながら、約束通り千貫の金を與へて別れました。偖領主は城に戻りましたが、直に近侍に命じて、城内の部屋といふ部屋の壁に、屛風に、衝立に、また扉や柱にまでも其の金言をかかげさせ、それから手近に用ふる諸道具にまで彫刻させました。そして、一二年のあひだは何事もたく過ぎましたが、さて或る時のこと、重臣の一人が逆意を

抱き、恐ろしくも領主を毒殺して、位を奪はうと企てました。

そこで、領主のお氣に入りの侍醫を招き、殿樣に毒をすゝめて巧くやつてくれ、その時は多分の褒美をとらせるであらうと相談いたしますと、侍醫は一時の慾に目がくらみ、『はい、宜しう御座います、立派にしとげるでありませう。』と承知して、時機の到るを待ちました。

ところが折も折、領主が病氣になつて侍醫をお召しになつたので、侍醫は好機到れりと喜んで、領主を診察し、さつそく毒藥を調合し、そしらぬ顔をして、『殿樣はなか〳〵の御重態、良藥をおすゝめ申します。』と恭しく、藥の杯を差しのべましたが、ふと目にとまつたのは坊さんの金言――、『すべて事をなさんとせば、先づその結果の如何を熟慮せよ、……』

侍醫はハッとして目をそらすと、傍の屏風にも同じことが書いてある。これやいけないと思つて他の方へ向きますと、



そつちの壁からも同じことばが彼を睨んでゐます。侍醫はそれに打たれて慄へあがり、懼れと悔いに堪へかねて、見る見る顔が蒼青になり、手がガタ〳〵して遂に杯を下にすべらせました。

領主はそのたゞならぬ樣子を怪んで、

『これ誰かある、この者を取調べよ。』

との仰せに、早速侍醫を糺しますと、恐入りました。實は重臣某のはからひに依つて殿樣を毒殺しようとしましたが、あのことばを目にして恐ろしくなり……と、事の次第を白狀いたしましたので、領主は病ひを忘れて、よろこび躍り、『坊さんは私を欺かなかつた、一語の價は實に千金にもましてゐた、その金言によつて私の命が助かつた。』そして、改心した侍醫の罪を赦し、逆臣は捕へて死刑に處しました。



文明の殊勲者

法學博士 清瀨一郎

一

發明の能力を有つてゐるといふことが、人類と他の動物との相違であると云つても過言ではあるまい。西洋の或學者は、『技術家や發明家は無言の社會改革者である。政治家や立法家はこれに追隨するに過ぎぬ』とまで言つてゐる。實に發明家は社會の先覺者であり、文明の指導者である。

二

まことに發明家は人類の恩人である。然るにこの恩人が世人から厚く報いられた例は悲しいかな甚だ少い。

フランスのラボアジエーといへば、有名な化學者で、又名高い數學者であつて、その發明にかゝる方程式は今日中學校などでも皆敎へてゐて、凡そ學問をするといふ程の人は皆その恩澤を被つてゐる。ところがこの文明の大恩人も、かのフランス革命の際に、もろくも斷頭臺上の露と消えて、後の世の人をして、『ラボアジエーの首は一瞬の間に打落されたが、フランスがこれだけの學者を生むには百年かゝつても不可能である』

車中スケッチ

○

乘合自動車は、淺草へと急いでゐる、『……』女車掌『はい、二十一錢です』老婦人『隨分高いね！私が此の前電車に乘つた時には、そんなに取らなかつたが……』その連れらしき隣席の女客『知つたふりをすると皆様に笑はれるで止めたがいゝよ、これだから田舍者を連れてくるといやになつちまふわ』その女の夫らしい男『何區ですか？』女車掌『三區です』老婦人『え！三區なら二十七錢でないかね！』女車掌『いゝえ一區七錢ですから三區二十一錢です』老婦人不思議さうに考へてゐる。隣席の客は氣をもみながら、『一區七錢で二區十四錢だから三區二十一錢でないか！ほんとにわからないなアー』老婦人『だつて私、學校で三區（三九）二十七といふ九々算を習つたよ』此の言葉を聞いた時、乘客の視線は、



と歎かしめた。

同じくフランスの化學の大家ルブランは食鹽からソーダを取ることを發明した人で、このために石鹼製造やガラス工業などの上に、全世界の人の受けた恩惠はどれほど大きいか知れない。しかるにルブラン其の人は一生貧乏に貧乏をしつくして、この大發明をしてから十五年後に、パリーの貧民救療所で半錢の蓄もなく、誰一人看護してくれる人もなく、悲慘な死をとげたのであつた。

三

發明家や先覺者が、當時の社會の無智な又無理解な爲に迫害や壓迫を受けた事は數うるに暇がない。

イタリヤのガリレオが地動說を唱へた爲に、時の政府から迫害されたのは有名な話で、彼は如何なる世人の攻撃にも政府の迫害にも決して其の說を曲げなかつた。時のある權力者は兇暴にも彼の兩眼をつぶして盲目にしてしまつたが、それでも彼は頑として屈しなかつた。裁判官が彼に、

『お前がその邪說を改めて、地球は動かないと宣誓をするなら、罪は赦してやらう』

と告げた時、盲ガリレオは涙を呑んで、裁判官の前にひざまづいた。そしてその立上る時、

『併しながら、地球は動く』

と口の中で唱へたといふ。

四

されば發明には勇氣と忍耐と自信と良心とが必要である。發明・發見の價値はこ

一度に彼女の顏の上に集つた。彼女もさかしかつたと見えて眼を窓外にそらした。と同時に乘客はがまんしきれず一時にふき出した。（青木治郎）

○

上野の博物館の閉ぢるのも近い初夏の四時頃、滿員の省線G驛で乘合せたお上り夫婦、男も女も五十路の坂を越した文字そのまゝの田舎者、親爺さんは甚くやせた骸骨型、古風な洋傘をしつかり抱き込み、尻をまくつた下の紺木綿の股引はいゝかげん色褪せてゐる。



おかみさんは布袋さん型、黑光りと油光りの顏にどんぐり眼、威風堂々たる巨大な體やお尻が腰掛からはみ出してゐる。痩せた御亭主にデブのおかみさん、丸で達磨の樣だ。おやぢさん目玉をキヨロ／＼させてお隣のお客、令孃風の人に『おいらはYへ行くんだがC驛はまだかい、たしかC驛で乘換へだんべえか』——C驛は通過して三つ目—眞面目に令孃は答へる。

『もうC驛は通り過ぎました』聞いてビック

の發明家の態度によつて一層の光を放つものである。發明・發見は尊重せなければならぬ。發明家は大いに尊敬せられなければならぬ。

こゝに世人が目ざめて來て、はじめて今日の特許法が制定せられ、發明家の勞に報いると共に、その奬勵保護の道が講ぜられるやうになつた。今やいづれの文明國にも特許局といふものが設けられ、有益なる發明品に專賣特許權を附與して、之を奬勵し、之を保護してゐる。

五

こゝにこの特許法の精神を最もよく理解し尊重して、暴虐なるその破壞者を屈服せしめた美談がある。

時は一八〇一年、チェファーソン氏が選ばれて第四代のアメリカ大統領となつた。チェファーソンは歴代の大統領中でも有名な政治的手腕のあつた人で、選ばれてその任に就くに及んで、先づウヰリアム・ソーントン氏を拔擢して特許局長といふ重職を命じた。ソーントン氏はまた非常な熱情家で、この特許制度の完成を以て自分の一生の使命とし、その任期の間にその事の爲に盡くした功は莫大なものであつた。

一八一四年の英米戰爭の際、英國兵は直ちにワシントンに上陸し、こゝかしこの官廳などを破壞し、火をかけなどしてあらし廻つた後、特許局へ押寄せて來て、アハヤ之に火をかけて燒拂はうとした。

この時ソーントン局長は憤然決する所あり、敵前に身をあらはし、群がる敵兵に向ひ、きつぱりとしたおごそかな態度で、

『諸君はそれでも英國兵か。それとも又ゴッスか。ヴァンダルか。(ゴッス、ヴァンダルは當時の野蠻人の名)こゝを何と思ふ。是れこそは實に米國の發明の寶庫た

りおやぢ頓狂な聲を上げ、『おいカカのりすぎだ早く降りよ』……途端ピーッと發車……ドアーはしまる。動き出した列車のドアーにしがみ付き、『降りるよ〳〵』とあわてる。親切な車掌さん、『次の驛で降りて後もどりをしなさい』と敎へる。

これを聞いたデブの癇癪君怒るまいことか、亭主を捉へて、『今日は間違ひばかりで、さん〳〵歩かし、足が痛くて歩けぬぞ、もう動かぬぞ』と、四邊かまはずよい年の夫婦が車内で喧嘩、車内の人々がクス〳〵やつてゐるのにお隣の令孃さん苦しさうにすましてゐる。(中島勝利)

○



日本橋と京橋との間の出來事、丁度電車は滿員……人と人との間から十錢と五錢の白銅貨を握つた手がニューと出たはずみに、其の手から五錢白銅がすべつて前に居た若い夫人の襟に落ちこんで、する〳〵と背中に入つて了つた。白銅の主は赤くなつて何度か頭を下げる。婦人は[illegible]一

る特許局であるぞ。全世界の文明の源泉であるぞ。諸君はそれをも破壞せんとするか。然らば速かに發砲せよ。而して第一の彈丸を以て私の身體を打て。さあ擊て！』

と大聲叱咤した。

さすがに血に餓ゑた敵兵も、ソーントンのこの沈勇な態度に度膽を拔かれ、且その道理ある言葉に感激驚歎し、遂にこの特許局には一指をも觸れず逃ぐるが如くに立去つた。

六

ついでながら特許法沿革を一寸ばかり述べてこの篇を結ばう。

特許制度は一六二三年に英國が專賣條例を設けたのが起原で、その後英人が米大陸に移住して合衆國を組織した時、英國の制度を根本として更に時代に應じた特許局の組織を立てたことによつて完成したのであつた。

我が國では明治二十一年以來、米國の制度を手本として特許條例を作つた。之を輸入したのは前大藏大臣高橋是清翁である。

大正十五年に於ける我が國の特許發明の件數をあげると、三千五百二十件で、この數字は米國の七分八厘、フランスの一割九分、英國の二割、ドイツの二割三分に當つてゐる。尙ほ十五年の實用新案と特許とを合せると一萬一千百三十九件で、この數字は米國の二割四分七厘、フランスの六割一分二厘、英國の六割四分三厘、ドイツの一割六分八厘である。

我が國がまだ〳〵世界の文明國に比して及ばぬ所があるのは遺憾なことで、私がこゝに發明の尊重について世人の注意を促すために此の文を書いた趣意はこゝにあるのである。（完）

唇赤くなるやら、青くなるやら、[illegible]だつた……が其の婦人が漸く自分の紙入から五錢を取り出して白銅の主に渡した。（中準一）

○

田舍の三等列車へ紳士が折詰を持つて乘込みました。列車は滿員で、坐する場所はありません。やがて折詰は、網棚の上に置かれた。すると汽車の動搖で折詰からは雫が雨滴のやうに落ち始めました。下には折惡しく十八九の美人が坐して居りましたが、その耳際の上へポタリ〳〵。御氣の毒に只顏を赤くしてそつと立たれました。と、そばに立つて居つたモボさん、別嬪さんの坐した後は有難いと云つた調子で、ニコ〳〵と坐りました。ポタリ〳〵の雫はやまぬ。サテハ……あーしまつた！と無言のまゝそつと立つ。前に立つて居つた婆さん、座を讓つたと思ひ、禮を厚くして坐す。相變らず御馳走の雫がポタリ〳〵。大聲で折詰の主を探す。誰一人親切で座所を讓合つて居たのではなかつたのでした。（赤帽生）





名器物語 深草の釜

金子光晴

房州里見の家臣に、堀治高といふ豪傑があつて、戰場に於ては、重量八十斤の鐵ののべ棒をふりまはして、いつも先陣をうけたまはつた。しかし、戰國亂世の常で、主家里見家は亡び、治高は浪人して方々を放浪つた揚句、武州蛙沼といふ所で、郷士と野武士の戰に、仲間入をして戰つたが、敵味方ともに蘆原のなかで殆んど全滅してしまつた。

これを見た治高は、卒然として世の無常を知り、關西黑衣の姿となつて京へのぼつた。そこで連歌を紹巴に、茶道を利休に學んで、頗るその道に通達したが、時は豐臣の世で天下は泰平に、自分ももう老境に入つてゐた。

そこで風流の旅を思ひ立つた治高は、日本國中をめぐつて、名所古蹟、さては風景のこゝろにかなつたところがあれば、どこでもかまはず茶を立てゝ飮む。その茶道具と、身のまはりのものを振分けにした姿で、のつし、のつしと歩いてゆく。旅をかさねて、武州境へはいつて來たのは、もう日も暮れかゝつてゐた。

『ふむ。もう武州境ぢやな。されば、思ひ出す蛙沼も近い。今夜はあの沼のほとりで、昔の人達を供養して明さうか』

蛙沼の畔に辿りついたときは、もはや、あたり一面の闇夜。彼はしづかに石のうへに坐つて、四邊を打眺めた。

昔ながらに、枯蘆は見渡す限り高く生ひ茂り、サワサワと風に鳴る音も物さびしい。治高はぢつと眼を瞑り、低い聲で讀經を始めた。と、くらい草の間を、ツツーツと燐火が走つた。やがて一つの燐火が二つになる。四つになる。八つになる。果ては數知れない燐火が、一列に揃ふかとみてゐると、輪になつてくるくる追つかけつこを始める。

鐵砲の音、矢さけびの聲、鬨の音……治高の頭のなかには、その昔の修羅の有様がまざまざとよみがへつてくる。

今は、誰一人、供養をしてやるものもない幾多の精靈が、この沼のほとりに立迷うてゐるのである。これを思ふと、暗然として、止め度のない涙が治高の頰を傳うた。

『よし、さうよ。今宵はなまじひの讀經手向をせんよりも、亡びし人達に靈あらば、野天を座敷として、共に茶を立てて飮まうぞ。……少しは修羅の痛苦を忘れるよすがにならうか』

と、枯れた木の葉を集めて火を焚き、その上へかけたのは、背負つてゐた名器深草の釜であつた。

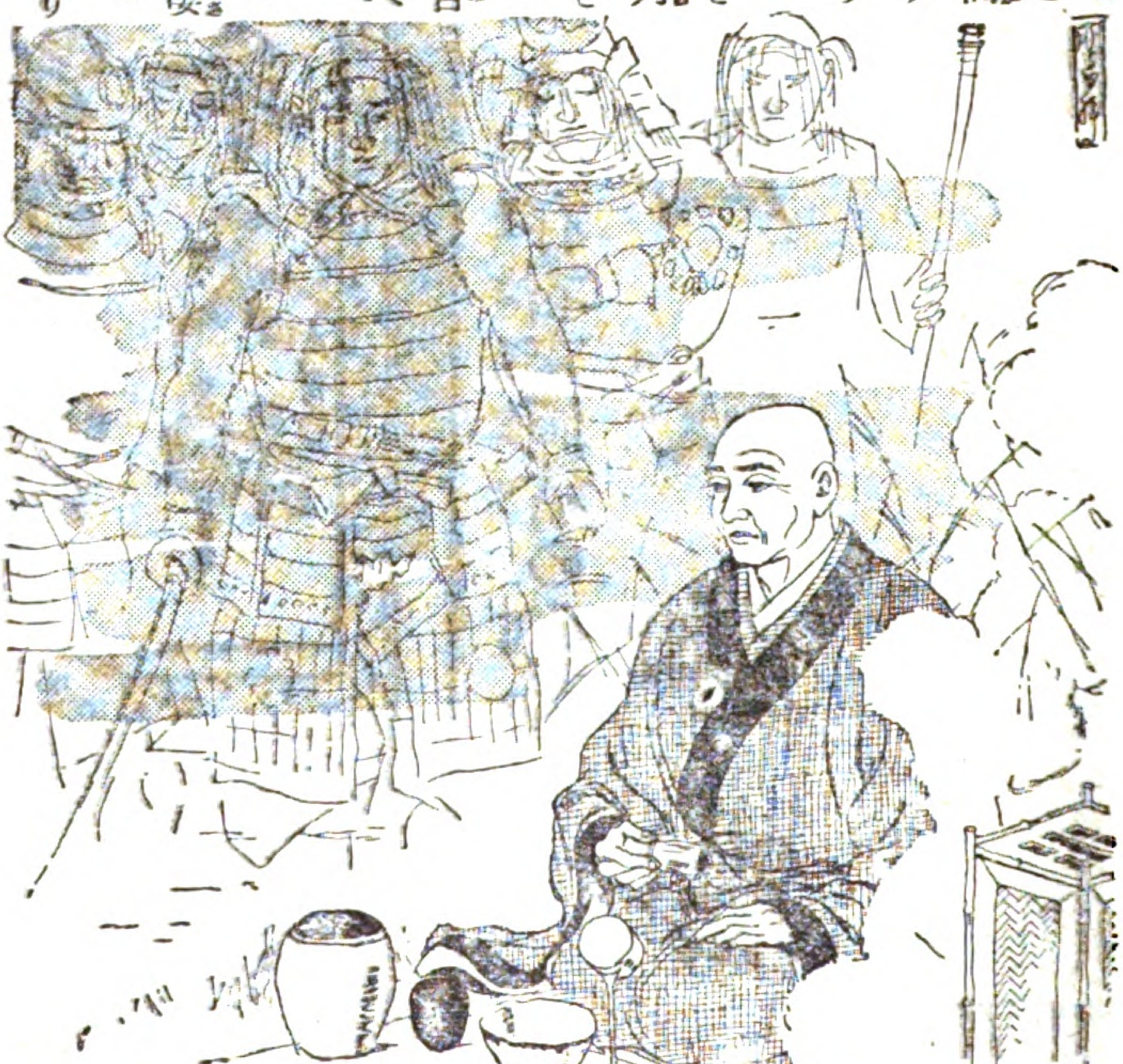
湯がたぎつてくるにつれて、釜はえも言はれぬ妙なる音色を立てて唄つてくる。治高は一念を澄まして、ぢつとそれに聽入つてゐたが、サツと一陣の冷氣がなまぐさく過ぎたかと思ふと、カツと見開いた治高が眼の前に、釜の周圍を取りかこんで、肅然として首をうな垂れた甲冑姿の武士幾人、あたかも釜の音色を感心してきいてゐるもののやうに立列んでゐる……甲冑姿と云つても、鎧は破け、緘はほつれ、或者は全身血に塗れて、夜目にもしれる卯の花を緋に變へてゐる凄慘の有樣。

鬼哭啾々とでも云ふのか、なをざめ窶れたその姿は、物凄まじいと云ふも愚であつた。

『堀殿、よい釜の音でござりまするな』

大將らしい武士が、力ない聲でさう云ひながら、微笑さへ浮べて、治高を見上げた。

『おう。難波殿か』



治高の胸は、感慨無量であつた。彼はしづかに松風を汲み、一ぷく立てて、鬼客の前に置いた。

難波はそれを法通りに禮儀正しく飲んで、次から次へと廻した。一口がぶりと飲んで、苦い顏をするものもあつた──それにつれてドツといふ笑ひ聲も起つた。そこには、普通の茶席とかはらないやうな落つきと氣品が保たれつゞけた。

夜のほのぼのと明ける頃まで、歡をつくした難波をはじめ武士達は、かへすがへすも禮をいつて、やがて草の繁みのなかへと歸つて行つた。治高は尙も懇ろに供養して後、自分もそこを去つて旅へのぼつた。

これから後、治高は深草の釜で茶を立てるごとに幽靈の茶會のことを話し出した。そして『まことに茶の德は、鬼神をも和めることが出來る』とつけ加へた。

德川の治世に、この釜は浪華の分限者、鴻池に傳はつてゐたが、類燒の時、惜しくも行方がわからなくなつてしまつたと傳へられる。



神風連唯一の生存者末岡翁の直話

神風敬神黨

前田曙山
鰭崎英朋 畫

鎮西女子腸

草露滴々として萬籟沈む、明治九年十月下旬の夜は更けたり。喞々たる虫の音は咽ぶ道芝の息吹き、陰々たる鐘の聲は悲しむ。松籟の歎き、大江川の流れは森に沿ひ林に砕けて、一練の素絹を曳く熊本の新屋敷町、杉の生垣の欝々と茂つた中に、一構への古い屋敷が有る。締り戸を閉め切つて、外からは人の氣配有りとは見えぬが、中には神州の正氣が、烈々火の如くに

燃える慷慨悲憤の主客六人、肘を張り肩を怒らすもあれば、眉を昂げ眼を瞬つて敦圉くも有る。

『恁樣に相成つては、只斷の一字有るばかり、太田黑先生加屋先生、いづれも決心の臍を固められた上は、我々誓約の一同は、先生の指さす處に從つて、火の中水の中へも飛び込み申さう迄。』

恁言つたのは、主人の古田孫市二十四五の血氣の勇士で、髪は總髪の大髻黑の紋服の着流しに、短かい脇差を前半に帶して居る。後の床に飾つた紺糸縅の鎧は今や其主の身體を包んで、矢玉の中に貫の强弱を試さうと意氣組むらしい。兜の頬當は自づと火のやうな息を吹くか、飾りの武者髭が生有つて動くかと見える。

『愉快ぢや。我々共の時が來たのぢや。』

心から滿足したらしいのは森下照義。

『此刀は奸賊の血に餓ゑて居るぞ。』

片側に置いた大劍を取つて、其欄を叩きながら、軒昂の眉に電光させたのは島田嘉太郎まだ十八歳の若武者で有る。猿坂唯夫太田三郎彦とは共に十七、花ならば蕾の春風を待つ軟らか味が、凛々たる勇氣の間に仄見える。

一同は孰れも勇み立つた、今を限りの死出三途、君の御爲國の爲、命を鴻毛より輕んじて、乾坤一擲の快擧を試みようとするので有る。

『手前も元より御同感では有るが、然し手前は先刻より申す通り、今僅かの人數で事を擧げるよりも、窃かに決死の士を東京に出して、要路の大臣參議顯官、凡て此神の國を夷狄の魔道に導かうとする禍の不臣の輩に片端から天誅を加へたなら、一層効果があらうと存ずるが。』

自分の主張の行なはれなんだのを、殘り惜しさうに洩したのは、一座の中の最年少者、年も十六夜ふ紅顏の美少年、末岡兎三郎武足で有る。



神風連唯一の生存者末岡武足翁

神風連唯一の生存者にして當年六十八歳、矍鑠として壯者の如く、一意祭政一致に精進し、目下立憲尊皇黨の設立に必死の活動を續けつゝ有る。

『拙者も至極同意ぢやが、太田黑加屋兩先生は、神武天皇建國



の大精神を貫ぬくは、天地の公道を行なふのぢやから、左樣な奇兵を弄するのは、例へ成功の捷徑で有つても、卑怯だと言はれるのぢや。正々堂々と兵を擧げて、奸臣を懲す、事若し成らずんば、仆れて已むのみぢやと有る。』

一人が詮方なげに太い息を吐いた。

『然し正々堂々の擧兵にしても、味方は僅かに百七十五人、敵は二千から有つて、難攻不落の熊本城に籠るのぢやでなう。』

末岡は事の到底成るまじきを洞察して、悲愴の氣が胸に込み上げて來る。一黨の目的は、要路の奸臣を倒して、卑屈な尊歐主義を革ため、汚らはしい西洋化を一掃して、此日出づる神の皇國を、神武の昔に復さうと期するので、一意只皇室の御安泰にある。徒らに名を賣らうといふのでは無いから、始めから玉と碎ける覺悟で、鷄卵を岩石に叩き附けるよりも、瓦とたつても、功を完うするに越す事は無いと考へたのだが、一黨中の最年少者、鷄卵の殼がまだ後にくつついて居る少年としか思はれないから、飽くまで先輩に反對するといふ事は出來なかつた。

一座は少し白けた。此場になつては、擧兵といふ事が、動かす可らざる既定の事實となつて居るのだ。

『もし末岡樣、貴方樣は東京の上野の朝櫻や、隅田川の夕月の景色にお焦れ遊ばすけれど、都にばかり美しい眺めが有るのでは御座いますまいに。』

座を取持つて居た古田の姪のおくん殿が、匂やかな白齒を仄めかしつゝ、側からしとやかに人々の顏を見廻した。古田の小町娘と言はれる美女が、水も滴れるやうな高島田、女の嗜なみの化粧さへ婀娜に施して居る。此度の快擧を早くも知つ



て、女ながら皇上の御爲には、身をも家をも惜しむまじき決心が、健氣な眉宇に仄見え、鎭西女子の腸は血を絞つて、鮮やかに滑かな頬に滲んで來る。

『此熊本にも、江津川の月見、立田山の紅葉狩、種々の名所が御座りまする。遠い都へお上り遊ばすよりも、近い熊本で、居ながらの月見なり、紅葉狩なり、皆樣と御一緒に遊ばしたが宜しう御座ります。妾も及ばずながら薙刀の一手位は存じて居りますから、御月見なり紅葉狩なり、其時はお供を願つて、劒の舞を舞つて、御座興を添へたいと存じます。』

萬綠叢中の紅一點。同じ殺伐な恐ろしい言葉でも、女の優しい口許から、媚めかしく美化されて來ると、今や破裂せんばかりに行詰つた昂奮の意氣が軟らかに緩和される。

『ヤア御尤も、おくん殿出來された。都にばかり名所はない、さうぢや〳〵。』と、手を拍つたのは森下照義。

『コレ、靜かにさつしやい、千丈の堤も蟻の一穴から崩れる。秘めた上にも秘めねばならぬ。』

古田孫市はおくん殿に目交せして、心ばかりの酒肴を持ち出させた。生別死別を兼る此世の訣別で有る。一同は心ゆくばかり大盃を傾むけたが、大事が前に横たはるので、慘として醉はない。

慈愛の袂別

『末岡よい處で逢うた。愈々今夜ぢや。誰にも覺られぬやう、戌刻半（午后九時）までに、宮内の愛敬殿へ集るやう、太田黑先生から御傳言ぢや。』

恁言つたのは、隊中に其人ありと知られた島田嘉太郎で有

る。秘めに秘めた義兵の旗擧を、同志に傳達すべく、窃かに東西に奔走して居るのだ。

『左樣か、夫は愉快ぢや。最早仕度は整のへ置いた。』

高浪の里と聞えたる新屋敷の水道端、清く流るゝ幽泉の音を聞きながら、二人は木立に脊を凭せつゝ立つた。

『御兩親たりとも洩さぬやうにな。』

『宜しい、事を擧げる迄は、一切他言せぬ宇氣比ぢや。』

宇氣比といふのは、神意で有る。敬神黨の面々は、何事にも神意を受けて振舞ふので、今夜の旗擧も、藤崎の宮の宇氣比に由つたので、決して私の人意で定めたものでは無い。

『貴公は之より何れへ。』

『拙者は尙七八軒、此事を知らして來ねばならぬ。』

『夫は御苦勞な事。』

『差當り成るたけ早く米村氏（勝太郎）の處へ集る事とされたい。拙者も元より參會する。さうして一同打揃うて、愛敬殿へ參着すると致さう、遲れては相成らぬ。』

『承知致した。』

言ひ知らぬ悲壯な緊張した心が、浪を打つやうに昂まつた。豫て覺悟では有るが、今夜に迫る大事となると、徐ろに若い血が騷ぐので有る。

末衞は島田の姿が見えずなる迄見送つて、急ぎ我家へと取つて返した。大江川の景勝に臨むだ幽邃閑雅の構へ、秋老いて蔦の錦は喬木の梢を綴り、栗や樹の半ば紅葉したのが淸い流れに水銀の雫をつくらふ。日頃住み馴れた懐かしの家も、今が見納れの見納めで有るかと思ふと、鐵心石腸にも、訣るばかりの寂しさが襲つて來る。

末衞の部屋は、此流れに臨むだ小座敷で、其處には豫て用意の戰陣の仕度が整のつて居た。大劍は竹中邦彦が名[illegible]の鍛へ、新刀ながらも鐵をも斫るべき天晴業物、小劍は無反の關物にして、銀岸作の一尺三寸、軍服としては濃淺黄の木綿の袷に小倉の小袴兵粮の糒、梅干を練つた戰陣の氣附藥、白木綿の小旗には、勝の一字を縱太に認ためた合標、鉢卷の中には、姓名年齡を記して疊み込み、一首の詩を賦した。

孤忠擲つて蠻夷を攘はんと欲し
英氣凛然挑むの時無し
筆を投じ刀を執り座を蹴つて起つ
死生命有り亦何ぞ疑がはん

之は彼の僞らざる少年の魂で有る。蠻夷の僞りを雪ぐの外、一黨の精神なのだ。其間に一點の私も無ければ慾も無い、只大君の御爲といふ事が、頑牢な岩石も碎ならずに凝つてゐるので有る。

更に又書き流した大和振は、率直に思ふ處を述べて居る。飾りもたければ、澤も無い、魂の生地を露出しにしたもので有る。

雨霰矢玉の中も君が爲
樣には[illegible]かじ身を楯にして

歌人の歌でもなく、作つた歌でも無い、思ふ處を思ひの儘、無遠慮に歌つたので、軈て夫が敬神一篇の魂の呟きで有つた。

『ウム之でよい、何にも取殘しはないぞ。』

末岡は四邊を見廻して獨首肯きつゝ、竊かに家を忍び出ようとした。父清久は生憎朝から外出して留守で有る。慈愛の深い母の和歌子刀自に別れを告げるのは、鉛の熱湯を吞むより苦しいので、寧ろ心を鬼にして、無斷で立去つた方が、未練を殘すまいと思つたので有る。

『コレ兎三郎刀など持つて何處へ行きます。』

誰知るまじと思つたのに、母は疾くも後に立つて居たので有る。ハツと振返ると、早暮れ始むる逢魔ケ時、薄暗い部屋の中に、スツクと立つ母の姿は、神の使女よりも神々しく拜まれた。

『ハツ。』と、彼は後髮曳かれるやうにモヂモヂしたが、漸く苦しい口實を搾り出した。

『明日は小旗八幡宮の御祭典、今夜は宵宮の劍神樂が上りますから、私の刀を其神樂に遣つて戴だく積りで御座います。さうすれば此刀の御淨めにもなり、武運長久の御祈にもなりますから。』

ビツショリ汗を搔く程の、行詰つた苦しみであつた。母に心配させないには、恁した僞りで糊塗はねばならず、又父母兄弟の間たりとも、此度の業を洩さぬが神文の誓ひで有る。赤穗四十七士が誓文を守る上には、親に代して子を殺した者さへ有ると思へば、今の我身の苦しい胸中に思ひ合せて、湯の如き涙を呑み下すと、其涙の流れて行く道筋が、歷々と覺得される程滲み透るので有る。

『あゝ左樣で有りますか、夫は誠に瑞たい事。折惡しく阿父樣は居なさらぬが、妾が祝うて進ぜませう。……此方へ來たがよい。』

小旗八幡の宵宮へ行くのを、賑々しく祝ふといふも、相應しからぬ言葉で有る。母はモウ今夜の事を知つて居るのではないかと、末岡は胸を打たれた。

母の後から無言に從つた末岡は、五十目の蠟燭を立てた大燭臺を前に、床を脊にして上座に坐らされた。見ると床の間には墨痕鮮やかに、活きて飛ばんとする如き林櫻園先生の筆蹟『敬神尊王者國家之大本也』の十一字が大書して有る。其右には父が秘藏の名刀が置かれ、豪宕不羈な黑松の盆栽が、主人の奇骨を表彰すべく据ゑられて有る。

『丁度今朝神樣にお供へ申した御神酒が有る、夫を祝うて行きたすつたがよい。』

更に取亂さぬ母は、末岡の行先を知らぬ程迂闊では居ない。知つて言はぬので、暗默の間に、血で血を洗ふ神化の機運が、黑潮の如き流れとなつて動いて居るのを、知り過ぎる程知り拔いて居た。

末岡は眞四角に畏まつて、土器の神酒を戴だき、靜かに飲み

乾したが、萬感交も臻つて、盃持つ手は不覺意に戦慄した。十六年間海山の育ての大恩、自分が今敬神黨加盟の一人となつて、大君の御爲に血肉を捧げるといふのも、畢竟父母の薫陶から出發したので、我身に教養が無かつたら、大義も名分も有つたものではない。空々寂々として、道端の瓦片となつて了つたのである。

此大恩愛、此大慈悲、夫を今茲に見限つて、筐の身體を道草の肥料と捨去るは、不孝此上もなく、後の悲歎も思ひやられると思ふと、危く湯のやうな涙が迫りかける。親子が一世の別れの血の轟ろきである。

見上る目、見下す眦、無言の間に、骨肉至親の温か味は、ナンドリと流れた。母は我子が献した盃を雫も殘さず綺麗に飲み乾し、にこやかに笑つた。

『阿父様は今晩遲くなければ、お歸りにはならない筈、お歸りになつたら、汝が飲むだ此盃で、一杯差上げますから、安心おしなさい。』

別れの盃。烈女は一切を知り盡して居るのだ。血の餘りを分けた我子の必死の決心、虫が知らすやうにも、母の胸に通はぬ事はない。



『あゝ左様だ、女々しい未練を起して何となるだらう。御兩親の教訓は、君の御爲に身を殺すべく、十六年の手塩にかけられて成人したのだ。今夜潔ぎよく討死する事は、親の志を成すので、後に喜びこそあれ、歎きの雲のかゝるなどとは、萬に一

つも無い。』

少年の心は俄かに晴々しくなつた。母が恩愛の微笑によつて、密雲を披いた最中の月が、皎々と照り輝やいたので有る。

『今夜は定めし遲くなる事で有りませう。袷一枚では寒いに因つて、此羽二重の小袖を、下着にして着たがよい。之は妾の着物では有るが、地味で目に立たないし、薄いけれども、眞綿が入つて居るから、夜中の寒さを防ぐには良いで有りませう。』

取出して來た淺黄小紋の小袖、夫には母の魂が宿つて、我子を溫たかく抱擁して居るのだ。何處までも我子の行く處に附き添つて、冥土までも守るので有る。假令敵の矢玉や刀刄が落下しても、母の影身の魂を斫つた後でなければ、慈愛の我子の骨肉を破る事は出來ない。

『サア、時が遲れて、劔神樂に間に合はぬと不可ません。早く行つたがよい。』

流石に思ひ切つた烈女の聲の底には、血の滲むやうな悲痛の傷みが有つた。



『然し輕佻みの事などして、成るたけ怪我をしませぬやうに。』

只一言が千萬無量の思ひで有る。

門に凭つて見送る母、小袖を抱きしめて見返る子、冷たい夜風は死の底から吹き上げて來て、難面く二人の面を掠めて吹く。

藤崎の旗擧

明治九年十月二十四日は、陰曆の九月八日で、重陽の節句の前日で有る。夜は更け渡つて、露はシットリと草木の葉に結び、弦月逆しまに落ちて、寂しき風はソヨ〜と、遠砧の聲を送つて來る。

熊本郊外宮内の愛敬正元の邸に集つた面々は、いづれも思ひ思ひの扮装をした。鎧、直垂もあれば、腹卷に小手臑當の武者繪其儘のも有る。身輕の働きを期したのは、薄着に義經袴の甲斐甲斐しき身拵らへ、中にも續三郎は、兩刀の外に、差添の大小劔を負ひ、右手差を手挾み、薙刀を搔込んで居た。昔話の辨

慶の七ツ道具にも劣るまじき扮裝、幾年代かの扮裝を此時に集めたので、百鬼夜行の體たらくだつた。

然し服裝は揃はずとも、精神は只一つ、百七十餘人は一人の心と凝つたので有る。目指すは鎭臺に縣廳、一擧に乘つ取つて、義を鎭西に徇へ、威を都に揮はんとするので有る。

『恁樣に一同約の如く集つた上は、大將無くては斷け引き思ふに任せぬ。仍つて拙者は隊長を定め、一切其人の指揮を仰ぎたいと存ずる。』

門出の祝ひの神酒を傾け、若々しく勇み立つた老武者愛敬正元は、一同を見廻した。

『御同意仕つる。』

『手前も至極御尤もに存ずる。』

我も〳〵と贊成した。大將の無いは、首の無いやうなものである。

『然らば太田黑先生に御迷惑を願ひ、尙加屋先輩に御差副へをお願ひ致したい。』

太田黑は名を伴雄と言ひ、維新の志士大野鐵平として、勤王同志の間に英名を轟ろかしたのは此人で有る。加屋は通稱榮太、霽堅は其名乘で、熊本勤王黨の一人、曾て京都へ出て、學習院の錄事にまで擧げられた人で有る。此二人が一黨の總師たる事に、誰一人異論を唱へる者はない。

『いや夫は折角ながら相成りますまい。御一同此度の擧は、神慮を伺つた上で御座るから、お互ひは御同樣に神兵で御座る。然る時は神こそ大將にお在します。人間の大將などは不用で御座る。』

恁言つて拒むだのは太田黑で有る。

『御同樣の中で、今夜の戰功第一の者を推して 此後の大將と仰いだら然るべきでは御座るまいか。』然し强ち大將と名を付けずとも、衆望の歸する處は、二人を主將に押上げて了つた。

本陣の愛敬邸から、藤崎八幡宮は只一跨ぎで有る。百七十餘人の一黨は、肅々として社頭へ登つて來た。

藤崎八幡といふのは、九州五社別宮の一つで、古來由緒正しき御社、祭神は應神天皇にして、弓矢の守護神で有る。

全軍の士氣慘として驕らず、孰れも社殿の下に額づいて、最後の祈禱を捧げ、戰勝の神軍に下されん事を祈つた。見る〳〵神前の御燈明は赤々と輝やき來つて、人々の顏を明らかに照した。

『神意で御座るぞ。神も感應在まして御座る。』

『勝戰の吉兆だ。』

一同は雀躍して喜んだ。

忽ち婆娑として廣前に飜へる天照皇大神と大書した一旒の大旗、之ぞ神風連一黨の魂の結晶で、加屋榮太霽堅が奉持して、威風凛然と立はだかつた。木庭保久が確かりと植てたのは、御神勅と大書した神旗、別に動と靜と記した二旒の軍旗は、飄飄として山風に搖へる。

主將太田黒伴雄は、背に軍神の御靈代を背負ひ、劍を執つて眞先に立つた。此人の指さす處、火も恐れず、水も避けず、如何なる堅城鐵壁も、肉彈を以て突破する勢ひで有る。英氣凛々として、當るに前なく、墨より黒き殺氣は、見る／＼熊本の天に擴がつた。

『御一統に申入れる、之より我々一同は、縣廳並びに鎭臺に討入り、政府の大姦を助ける處の縣令以下の官員、及び司令長官以下の將校を誅したる上、舊藩熊本の御城を奪ひ取り、諸縣同盟の義兵を誘つて、神軍を東京まで進め、君側の姦臣を除いて、畏れ多くも聖慮を安んじ奉るに在る。就いては豫て定めた通りの手筈に從ひ、各奮戰致されるやうに。』

朗々たる音吐は、天に響き地にも轟ろく。一同は無言の中に、勇ましき激勵を覺え、筋骨も哮ゆるばかりに感じた。

豫て定めた手筈といふのは、

第一部　熊本鎭臺司令長官陸軍少將種田政明邸襲擊
高津運記　櫻井直成　立島駿太　林田鐵男　村島一太　森下照義＝以上六人

第二部　同參謀長陸軍中佐高島茂德邸襲擊
石原運四郎　木庭保久　水野貞雄　加來十郎　荒尾延彥＝以上五人

第三部　同歩兵聯隊長陸軍中佐與倉知實邸襲擊
中垣景澄　齋藤熊次郎　古田孫市　堀田四郎　平野寅雄　椋梨武毎　太田三郎彥　藤井才喜＝以上八人

第四部　熊本縣令安岡良亮邸襲擊
吉村義節　沼澤廣太　伊藤健　愛敬元吉　角田新太郎＝以上五人

第五部　民會議長太田黒惟信邸襲擊
浦楯記　吉永秀雄　坂本重孝　平川景逝　行藤宗雄　平川熊八＝以上六人

此人數は思ふ儘襲擊を遂げた上は、夫々の邸を燒拂ひ、十分に火の手を舉げて、直に城内に馳け附けて、速やかに本隊に合する事になつて居る。

本隊は又二つに分けて、一隊は砲兵營の攻擊を目的とし、主將太田黒伴雄を始め加屋霽堅、上野堅五、齋藤求三郎、阿部景器、緒方小太郎、古田十郎、小林恒太郎、鬼丸競、辻橋見直、加々見十郎等七十餘名、中に最年少の若武者末岡兎三郎武足は、健氣にも白鉢巻に勝字の肩章、襷十字に綾取り、慈愛の籠る母が生筐の小袖を着け、足踏み鳴して眦を決した。仰げば夜目にも著るき熊本城、空に聳ゆる天守閣は、魔の如くに虚空に屹立して居る。

第二隊は富永守國、愛敬正元、福岡應彥、吉海良作、荒木同、深水榮季の面々七十餘人、歩兵營舍を襲ひ、一擧に熊本城を乘取る計畫で有る。

機は熟し、部署は定まつた。いざといふ合圖に、鹿島甕雄が吹上ぐる陣貝の音、ブー／＼と呂に吹き込むかと思ふと、一同は屹と一縮して、各々志す方へと、旋風の如くに馳せ去つ

た。方に明治九年十月二十四日午後十一時、陰暦八日の月は業に落ちて、西山の空には金色の雲が、燦として名殘の光を止めて居る。

種田邸の襲撃

城下新屋敷町に在る種田少將の屋敷は、宏壯な一構へで、裏には杉の生垣鬱々と回らし、表は塀高く、門の扉は嚴重に鎖し、早くも寢靜まつたと見えて、コトリといふ音もない。

主人は宵に客が有つて、快よく酒酌み交した後、一しきり黑白を闘かはせ、客が辭した後は、秋の夜の寢心地よい夢を貪ぼるべく、錦の衾に軟らかく眠つて居るのであらう。

一番手の中、村島は期に遲れて、高津、櫻井、立島、林田、森下の五人は、音もなく闇中より姿を現して、門の側に寄るよと見えたが、力の限り押しても引いても、扉は堅くしてビクともしない。

『えいッ、打毀せ〳〵、何程の事があらう。』

血氣の高津は、足を擧げて力任せに戸を蹴破らうとした。



『待つた〳〵。無暗に物音を立てたら、敵は忽ち祭して逃げ失せようも知れぬ。まづ靜かにさつしやい。拙者考へが有る。』と言つたのは森下照義、直ぐに身を飜がへして、程近き古田十郎の家に行つたかと思ふと、忽ち二間梯子を擔いで來て、

『夫ッ、早く乘込め。』

言ふ間も遲しと、眞先かけて躍り込む高津運記、一人は裏口へ廻つて、敵の退路を扼し、五人は玄關の戸を破つて飛込

むだ
『何奴ツ。』と、夢の中を蹴放された書生が、驚いて跳ね起る途段、曳ツと勢ひ込んで斬り込んだ高津の切先、呀と言つたまゝ、憐れむべし書生は眞先の血祭となつた。

『猶豫するな。』

血を見て勇氣百倍する同志の面々、後をも見ずに奥の間へ飛び込むと、有明の行燈仄かに夢を照す衾は、少將が兩手に花の一人なる美女お安、熊本の布袋徳酒の娘で、名高き美人と評判の娘だつたが少將に見初められて、行儀見習ひの小間使とは表向、實は手活の花の閨の友だつた。

不意の物音と書生の斷末魔の叫びに、お安はアレーツと魂消る一聲、寢くたれ姿の奥の間指して逃げ込まうとする後に追ひ縋つた一人『汝ツ』と叫びも敢へず、後袈裟に浴びせかけた、一刀無殘お安は血烟立てゝバツサリ倒れる。夫を見向もやらず、一散に奥へ飛込む森下、正面の唐紙を蹴放すと共に。

『國賊ツ、天誅。』と獅子吼の怒聲物凄く斬込んだ。

係る不測の陰謀が、命の下に獅噛附つゝ有りとは、夢にも思ひ設けぬ種田少將、今夜は夜氣冷々として、寢心地よき重陽の前夜、醉を帶びた快よさに、愛妾小勝の介抱を受けて、天長く地久しく、幾千代の樂しき契を罩めつゝ、比翼連理の仄めく思ひも覺めやらぬ間に、何事ぞ、花吹き破る夜半の嵐、俄破と刎ね起き樣、床の軍刀執るより早く拔き放した。途段に肉薄する森下櫻井高島の三人、切先揃へて詰め寄つた。



然し少將は維新の變亂に、大西鄕に從つて身を起し、桐野篠原村田の諸豪傑と同じく、彈丸雨飛の中に膽を鍛へた薩閥の勇將で有る。暗殺暗討の如きは、屢ゝ馴れて居るから、咄嗟に床柱を背に當て、背後に敵の廻るを防ぎつゝ。『無禮者。』と一喝して、軍刀を揮ふ必死の防戰、流石神風連の猛者も、左右なく

斬り込み兼たが、哀れ運の傾むく處は、少將は衾に躓いて、バツタリ膝を突いた。途段に斬込む櫻井の刀、然し餘りに二人の身體が肉薄したので、長鞭馬腹に及ばず、斬り下した刀の切先は、空を劈いて空しく疊を切つた、此瞬間少將は櫻井の袴の襠に手をかけて、半身を起し樣、曳ツと一聲憤怒に激發する猛獸の一擊、力任せに森下の眞向へ打込んだ、之が眞面に斬つたなら、さしもの猛者も殼竹割の兩斷となつたのだが、片手打の手許狂つて、刄の平で打つたから、呀と思つた儘、掠傷一つ與へなかつたので、森下は赫と怒つて太刀投捨て、少將にムンズと組付いて來た。

『何を己ッ。』と、少將は咄嗟に摑み挫がうとしたが、森下は鄉黨にあつても柔道の免許取り、『えい小癪な。』と、身を沈ませて撻と投附けた。途段に猛虎の如くに飛蒐る高津運記。

『貴樣、神軍に手抗ひするかッ。』



惡鬼の呪ひの一聲、二尺三寸の業物を閃めかして、ズバリと少將の横腹を貫ぬいた。急所の傷手に少將も堪らず。

『殘念ッ。』と、叩きつけるやうに叫んで仆れるを、疊みかけて斫り附ける高津森下櫻井三人の亂刄の下に、虛空を摑むで悶ゆる所を、曳ツと擧下りに斬り下した櫻井の一刀に、憐れむべし、少將の首級は、水もたまらず前に落ちた。夜具疊から障子襖まで、唐紅の悲風慘雨。少將の愛妾小勝は柳橋の名妓で、少將が花の左門樣と唄はれ、狭斜の衢に豪遊を極めた頃、根引して手活の花と移しかへ、熊本の任地まで伴ひ來つた寵姫で有るが、不時の騷動に氣も顚倒。

『アレー、助けてえ。』と悲鳴を擧げて逃けるのを。



『えい汝もかッ。』と、一人が横に拂つた刀に、バッタリ前へ蹟つたまゝ、氣を失つて了つた。

『ホウ、幸先がよいわい。』

高津は手早く羽織を脫いで、少將の首を押裹んだ。

『いや高津、夜討に首を擧げるは法でない。棄てゝ了ひなさい。』と、櫻井は手を振つた。

『いや、之でも九州では大將首ぢや。大將の首を取るに差支は無い。』

高津は左手に提さげてスックと立つた。

『よし、さらば火をかけようではないか。』

『然し恁樣に十分本望を遂げた上は、近所合壁へ迷惑をかけるも不本意ぢや。此儘に致さう。』

一同は凱歌を擧げて、意氣揚々と引上げた。九州鎭臺の主將を討取つたので、一同は天下を取つたやうに勇み立つた。

此手の一人たる村島一太は、期に遲れて襲擊に間に合ず、氣を苛ち、心を焦らして、墓地に馳け附けると、折柄急を鎭臺に報ぜんとして、轉げつ輾びつ、アタフタと馳けて來る種田家の食客大槻丈夫に、パッタリ門前で行き會つた。

『汝、逃げるか。』

『狼藉者ッ。』

罵しれば罵しり返し、忽ち火花を散して戰かつたが、村島は十分支度した上に、明晃々たる大刀を振冠つて居る。大槻は寢込みを襲はれて狼狽へる上に、獲物とては、僅かに輕き洋杖を持つばかり、二三合渡り合ふ中に、忽ち獲物を斬り落されたので、最早敵はじと、踵を回らしてバラ〳〵と逃げ出すを、何處までもと追縋り、白川町の角まで行くと、大槻が石に躓づいて仆れる處を、後から只一刀に斬り伏せた處へ、少將の首を提さげて引揚げ來るに出會ひ、一手になつて城攻の本隊へと向つた。

敵に斬られた阿嬌小勝は、機轉の利く氣丈者で有つたから、呀と言つて血の海の中へ打仆れ、縡切れたと見せかけたが、實

は死んで居なかつたのみならず、思ひの外手も淺かつたので、狼藉者の引上げたを見届けるや、血潮の傷帯引締め、裏口より忍び出ると、其儘裾もホラ〳〵驅け附けたのは、最寄の電信局で有る。

『種田です〳〵、早く此處を開けて。早く〳〵。』

息も切れ〴〵に叫ぶ女の聲、局内では深夜の爆音や銃聲、市内二三ケ所より揚る火の手に、只事ならずと不安に狩える處だつた。

『司令長官の種田樣ですか。』

『ハイ、大變です。早く開けて下さい。』

何かは知らず戸を引明けると、轉がり込むやうに入つて來たのは、豫て見知り越の美人が、艶やかな寢くたれ髪に、血みどろな物凄い姿。

『オウ貴女は奥樣。どう遊ばしました。』

『今暴徒が押込んで來て、旦那は斬られました。妾は此通り。』

花と見紛ふ熊城第一の阿嬌が、血走る眼に凄愴水の如き鬼氣、宿直の局員は齒の根も合はずガタ〳〵顫へた。

『早く電信の紙を。……直に打つて下さいまし。』

局員の持つて來た用紙に、戰のく手で日本橋の實家宛てに認めたのは。

『ダンナハイケナイワタシハテオヒ』

簡にして明なる小勝の打電は、神風連の暴動が帝都へ知れた最初の閃報で有る。

當時の流行唄は、壯戲者が其役をうけて、

『ソシテオマヘハドウシタカ』

一時京童の口々に傳唱された（つゞく）

本篇は、實に未だ何人にも知られざる秘話中の秘話、唯一人生き殘つた平岡翁が、今回はじめて發表せる內話にして、而も作者前田曙山氏が渾身の熱誠を以て描かれたる大力作。眞に悲壯凄烈！以下次ぎ次ぎに起る、鬼神をも哭かしむべき大場面は、恐らく天下熱狂、到る處大喝采を博することであらう……。

偉人の名言

ロダン曰く、『勉強は不斷の若返り法である』

ゴールドスミス曰く、『蜜蜂の如く吾人の勤めを、吾人の樂しみとなすべし』

乃木大將曰く、『贅澤するな、贅澤すること程人を馬鹿にするものはない』

更に曰く、『男は男らしくせよ、例へば、風呂敷等赤いのや華美のものを持つな』

米國の大統領ガーフイールドが少年の頃、或る人の問に答へて曰く、『先づ我は第一着に人間にならうと思ふ。若し人間となることに成功しなかつたら、何事にも成功出來ないであらう』

大膽な敵前行動

貴司山治

大正十一年の夏、支那南方の國民軍は一兵のこらず北伐に出征し、大本營の廣東には、陳炯明が部下をひきゐて、總大將孫文を護つてゐた。

その陳炯明が突如として、叛逆をおこした。孫文はびつくり仰天、危い所で本能寺の信長となりかけた身一つを、軍艦永豐の中に逃げこんだ。その時、蔣介石といふ一青年將校だけが、僅かに五十人あまりの部下をつれて孫文とともに永豐艦へ來た。

永豐艦は敵の手のとゞかない珠江のまん中へ出て漂流しつゝ、援軍の來るを待つた。岸には敵軍が張り番をして、頻りに大砲をうつ。

一日、二日、三日……と江上に漂つてゐる中、永豐艦の中には食糧がなくなつてしまつた。乘組の兵卒はよし身をけづつて存へるとしても、國民革命の父孫文を、こゝで餓死させるわけにはゆかない。

『孫總理！　私が陸上へ食糧をとりに行つて來ます。』

蔣介石が孫文の前にすゝみ出ていつた。

『何？　陸上へ？　陸上にはあのとほり敵がゐるぢやないか！　行けば殺されるぞ！』

と孫文はおどろいて蔣の顔を視た。

『私は軍人ですから殺される事は怖くありません。』蔣介石はかういつて簡單に擧手の禮をした。

彼はすぐに決死の部下二人をつれてボートを闇の江上に泛べた。孫文は甲板上からじつと闇にひゞくオールの音をきいてゐた。

その夜、蔣介石はボートに食糧を滿載して永豐にかへつて來た。孫文の喜びはいかばかりだつたらう。しかし百人近い乘員のために、その食糧は一日でなくなつたのだ。明る日は又食べるものがない。



『總理又行つてまゐります。』と元氣よく、蔣介石はボートにのつた。彼はかくして、孫文と、部下を餓死から救ふ爲に、毎夜のやうにこの大膽な敵前行動をくり返すのだ。

『誰れか外の者にやらせろ！』とみてゐられなくなつた孫文が蔣の身を案じてとめたが、

『部下は大切です。それにこの仕事は大事な仕事ですから私がやるのが當然です。』

と彼れは敢然として一箇月の間、珠江の波の中をボートで往復して、遂に總理以下を危急存亡の場合から救つた。

『あゝおれは今迄あんな男がおれの部下にゐるのをしらなかつた。あの男が革命の大業をなしとげてくれるだらう。』と孫文は深く彼れの沈勇と誠實を信じた。其證據に翌年の春、無名の一青年將校蔣介石は一躍大本營參謀長に任ぜられ、革命軍中に彼の名が彗星の如く出現したと思ふ間もなく、俄然として、彼は支那統一の大立者となつたではないか！

（寫眞は蔣介石氏より鶴見氏に贈れるもの）



東京行進曲

菊池寛

寺内萬治郎 畫

延期

折枝は、花野のお女将の罵聲を聞いたとき、心が多少とも脅えたが、しかし彼女は自分の身の大事と思ふので、氣持を亂すまいと努めながら、怯びれずに、元のお座敷へは入つて行つた。お座敷には、ふーさんと云はれる老紳士が、年とつた女中のお酌でもう幾杯も重ねたと見え、額のあたりを、ほんのりと赤くそめてゐた。

折枝は、しづかに坐ると、だまつて目禮した。

『さあ。折枝さん、お酌してあげて下さいな。わたしのお酌ぢや、折角の御酒がおいしく召し上れないさうですから。』

さう云ひながら、女中は空いたお銚子を持つて座を立つて行つた。

『お酌いたしませう。』

さう云つて、折枝はお銚子を取り上げて、お盃についでやつた。

こんな立派な風采の紳士が、いやしい慾望を持つてゐるのかと思ふと、折枝は急に世の中が、いとはしくなつて來たやうな感じがした。

『おい。お前、お女將から、何か云はれなかつたかい？』

『…………』折枝は、はづかしいのでだまつてゐた。

『あはゝゝ俺は、さう無理なことを云ひはしないよ。かう見えても、酸いも甘いもかみ分けてゐるつもりだからな。お前が、して貰ひたいと思ふことはどんなことでもしてやるし、いい藝妓になりたければしてやるし、あはゝゝゝゝそれとも、あんまりお爺さんだから嫌ひかあはゝゝゝゝ。』

さう云つて、ふーさんはてれがくしに笑つた。そこへ、さつきの女中が歸つて來たと思ふと、

『あのお女將さんが、一寸お顏を拜借したいのですつて。』

と、ふーさんに云つた。

『おいと來た。』

ふーさんは、氣輕に立つて、廊下へ出て行つた。おそらく、そこでお女將から、折枝についての報告をきいたのだらう。二三分もすると、またお座敷へ歸つて來た。よく見ると、足許がふらふらしてゐるのだつた。

『今、お女將に聞いたがね。お前はなかなか剛情ださうだね。妾は手を引きますから、御當人同志でいゝやうにとお女將の奴云ひやがつた……どうだ、お前俺が嫌ひか。』

折枝は、憎ろしさで胸が一杯だつたこんな老人を、嫌ひとか好きとかは問題でなかつた。

『どうだ、嫌ひか嫌ひなら、きらひと云つてもいゝのだよ。』

『嫌ひでもありませんわ。でも、好きでもありませんわ。』

『好きでもない、嫌ひでもないはよかつたね。ぢや、好き嫌ひは、どちらでもよい、俺の云ふことはきくかどうだ。』

『…………』折枝は胸が迫つて返事が出來なかつた。

『その方が、問題なのだ。そんなに遠くへ坐つてゐないで、もつとこちらへお寄り。その可愛い手位は、握らしてもいゝだらう。』紳士は折枝の左の手を握らうとした。折枝は、急いでそれを卓子の下へひつこめた。

『あはゝゝひどい奴だな。手さへ握らさないんだな。あはゝはゝどうだ、俺を旦那に持つことはいやか。』

折枝は、返事をすることさへ汚はしいやうな氣がした。

『決心がつかないのか。ぢや、一週間だけ、待たう。この次ぎの月曜に來よう。それまでに、よく考へて置いてくれ。お前も年が若いんだから、何も分らないのは、尤もだよ。これまで

に、よく考へて置くといゝ、家へ歸つてよく相談するといゝ。』

さう云つて、ふーさんは鷹揚に話を打ち切つた。

折枝は、かうなつて見ると、なぜハツキリと斷つて置かなかつたかと後悔した。一週間後まで、こんないら／＼した氣持をつゞけることは、たすからないことだと思つた



しかし、とにかく今宵だけでも無事に濟んだのは、うれしかつた。丁度、そのとき後のお座敷がかゝつて來たので、折枝はホツとして迎ひの俥にのつた。花野のお女將は、歸りの挨拶をする折枝を尻目にかけながら云つた。

『ねえ。よく考へて置くんだよ。この鄕で、いゝ藝妓にならうと思へば、お金が一番だからね。お金に厭目をつけない旦那を持たなければいつが來ても、ウダツが上らいよ。殊にお前なんか、直ぐ一本になつた妓ぢやないか。マゴ／＼してゐると、不見轉でも、かせがなければ追付かなくなるよ。』

と云つた。

恐るべき大敵

良樹は、その後も崖下の家の少女のことが、どうしても忘れられなかつた。彼は、あの少女が、知合の實業家のどの令孃よりも美しいやうに思つた。美しいばかりでなく、高貴で、王女のやうな氣がしてならなかつた。お伽話の中にある陋巷の美少女が王子のお妃になるシンドレラの姫と云ふのは、丁度彼女のやうな人であらうと思つてゐた。

彼は、學校を出てから、父の關係のある會社ならば、どんな所へでも、は入れるのであるが、彼はそれを潔く思はなかつたので、彼は父とは何の關係もない、ある信託株式會社へ、その年の九月かは入つてゐた。そこで、自分自身の進路を開拓するつもりでゐた。それに、親友の佐久間雄吉が、一年前からは



入つてゐたからでもある。

佐久間は、良樹とは、一高時代に同窓だつたが、良樹が病氣したゝめに、一年だけ遅くれたのである。佐久間は、學生時代ランニングの中距離の大選手として、オリムピックへ行つたこともあり、今でもその盛名を記憶してゐる人は、可なり多かつた。佐久間の父も、良樹の父に劣らない位、有名な實業家だつた。

しかし、良樹も佐久間も、さうした實業家の息子に似合はず、割合に眞面目だつた。

良樹が、入社してから、十日目位だつた。佐久間は、良樹の所へ來て云つた。

『ねえ。藤本君、君の入社を歡迎するために、一高を出た連中だけで集らうと云ふんだが、どうだね。』

『それは、有がたいが、一高を出た人つて、そんなに澤山あるのかい。』

『專務を入れゝば、丁度十人あるんだ。まあ、さう云ふ口實で專務を、ひつぱり出して、御馳走させようと云ふんだよ、あはゝはゝ我々の會費は五圓で、後は專務が出すんだ。』

と、佐久間は笑つた。色の黒い、鼻筋の通つたいかにも男性的な顔だつた。

『結構だけれど、何だかすまないやうな氣がするよ。』

『なあに、いゝんだよ。ぢや、明後日の晩、場所は築地の錦水と云ふ料理屋だ。料理屋説と待合説とが、あつたが僕が、がんばつて料理屋にしてしまつたんだ。社からみんなで一しよに出かけよう。』

その日良樹は佐久間達五六人と、六時少し廻つた頃に、錦水へ行つた。專務の岩永氏は、みんなから三十分ばかり遲れて、

顔を見せた。同じ、一高を卒業したと云ふことは、何となく親しみがあつた。お膳が出て、杯が一巡廻つた頃には、もうみんなは、和氣あい〳〵たる空氣の中には入つてゐた。

『専務さん。今日は、藝妓は、ヌキですか。』

『いや、そんなケチなことはしないよ。お約束をつけてある筈だが、どうしたんだ。おい！』

岩永氏は、さう云つて女中に催促した。女中が、席を立つて去つたかと思ふと、二十七八の中年増の藝妓が、二人揃つては入つて來た。つゞいて、二十二、三の丸顔の一寸美しい妓が、は入つて來た。一座は急に賑かになつた。良樹は、藝妓の來るお座敷などには、馴れてゐないので、皆が藝妓を中心に、輕妙に運んで行く會話の中などへは、どうしてもは入つて行くわけには行かなかつた。彼は、サイダアをたゞ、ガブ〳〵飲んでゐるだけだつた。その中に、藝妓の數は、六人ばかりになつてゐた。

『どうだ。氣に入つたのがあるか。』

横にゐる佐久間が訊いた。

『いや、僕はないね。僕は、藝妓と云ふものゝ美しさを認めないのだ。』

良樹は、實際作られたる脂粉の美を美しいとは思へなかつた。

『さうか。君のやうな人間もたまにあつてもいゝね。ぢや、やつぱり令孃がいゝのか。』

『令孃など云ふものも、威張つてゐていけないよ。僕は、やつぱり、貧家に育ちながら、雜草の中の一莖の白百合のやうに匂つてゐる純粋な女性がいゝね。』

良樹は、階下の少女のことを考へながら、少し興奮して云つた。

『なか〳〵むつかしいね。そんな女がどこかにゐるのかい。』

『居やしないが、たゞ僕の夢さ。』

『とにかく、藝妓が嫌ひなら、こんな席は興味がないだらう。』

『と云つて、諸君がさわいでゐるのを見てゐるのも、わるくはないよ。』

佐久間は、そのとき、前に來て坐つた二十位の、この中では一番美しい妓に良樹の方を顎で示しながら云つた。

『おい。この人はいゝ男だらう。』

『ほんとに。』

その若い妓は、良樹の顔を、しみじみ見上げながら云つた。

『しかし、斷つて置くが君惚れちやいけないぜ。この人は、君達を嫌ひだと云ふから。』

『まあ。殘念ですわねえ。』

その妓も調子を合はせながら笑つた。佐久間は、もう可なり、醉つてゐた。

それから、五分ばかり經つてから佐久間は立つて不淨へ行つたらしかつた。

佐久間は、歸つて來ると、いきなり大發見でもしたやうに一座に向つて云つた。



『驚いたね。あんな美しい妓が、新橋にゐるのかな。』
『勿論ですよ。どんな、美しいんだつてゐますよ。さう、新橋を見くびつて貰つちや困りますよ。』
老妓が、からかひ半分に返事した。
『驚いた全く。』
『佐久間君、一體どこでそんな美しいのを見たんだい？』
『今、僕が洗面所で手を洗つてゐますとね。前の鏡にとても美しい顔が映つてゐるぢやありませんか。僕は、思はず聲を揚げたかつた位ですよ。實に美人ですな。』快活な佐久間は、少し醉ぱらつてゐると見え、大聲でしやべつた。
『ぢやこゝへよべばいゝぢやないか。どこか、外のお座敷へ來てゐるのだらう。』
岩永氏が云つた。
『どんな着付でした。』女中が云つた。
『さうだね、僕は顔ばかり見てゐて、分らなかつたが……』
佐久間が、眞面目な顔で云つたので、皆はドッと笑つた。
『着物は、薄むらさきの地だつたな。そして、白い花模様がついてゐたらしいな。』
『あゝ分りました。顔は、島田でせう。』
『さう。さう。』
『ぢや、折枝さんですわ。つい、この間出たばかりで、大した評判ですわ。』
女中は云つた。

『ぢや、直ぐ呼んでくれないか。』
岩永氏が、さう云つた。
『はい。向ふのお座敷の都合をきいて、御挨拶だけにでも、直ぐよこしますわ。』
女中はさう云つて席を立つた。
佐久間は、少しひよろ／＼した足つきで、良樹の傍へ寄つて來た。
『おい藤木君、どんな藝妓ぎらひの君だつて、その妓が來ればきつと、驚嘆するよ。』
『いやしないね。』
良樹は、佐久間の態度が、少しいやだつたので、わざと反抗的に出た。
『さうか。ぢや論より證據、その妓が來るまで待ちたまへ。』
それから、二十分位經つたらう。一座がもつとさわがしくなつた頃、出は入りのために、開け捨てられてゐる襖から、影の如くしづかには入つて來る藝妓があつた。それを目ばやく見つけると、
『やあ、來た！ 來た！』
佐久間は、うれしさうに叫んだ。
良樹は、それをにが／＼しく思ひながら、その方へ目をやらずにはゐられなかつた。うす紫の單衣の着附の裾を引いて、上品な島田に結つた、水のたれさうな髪とあくまで白い顔を下げて、

『今晩は！』

と、挨拶した。良樹は、さすがに美しい姿だと思つた。しかし、彼女が挨拶した後の顔を上げたとき、彼は驚きのため、あやふく聲を出すところであつた。それは、この四五月の間、朝暮忘れたことのない崖下の少女に、まぎれもなかつた。珠の如き天性の麗質は、完全な技巧と粉飾とにみがき立てられて、光を放つばかりの美しさであつた。一目みると、あまりの美しさに、良樹は顔をそむけたほどだつた。

『ほゝう。これは、美しいね。』

『ほんとうだ。』

『これは佐久間君の大發見だ！』

『なるほどね。』



一座は、折枝の美しさに、一齊に打たれた形だつた。競爭者である若い藝妓達も、一言もなく、見入つてしまつた。

『さあ。折枝さん、あなた向ふの方の前へ行つて下さい。あの方が、あなたを洗面所で、見染めたさうですから。』

老妓の一人が、さう云つた

『まあ！』

折枝は、かるくさう云つて、一寸顔を染めたが、直ぐ氣輕に立ち上つて、佐久間の前へ來た。

良樹は、佐久間の前へ來られるのは、つらかつた。しかし、彼女の顔を見ることに、幸福を感じないでもなかつた。

『折枝さんと云ふんですつて？』

『えゝ。』
『洗面所で見たときは、光線が暗かつたが、かうして見ると、更に美しい。』
『そんなことを、おつしやると、わたし彼方へ參りますわ。』
『あやまる。ぢや、君の美しさは、既に既定の事實として置いて。ぢや、お酌して貰はうか。』
『はい。』
　折枝は、美しい白い手をさし出してお酌をした。それと同時に、横に坐つてゐる良樹の前を見た。
『あなたは、おサイダー？』と良樹に云ふと、彼女は半間ばかり向ふにあつたサイダーの壜を取り上げようとした。
　すると、佐久間はあわてゝ、それを制した。
『おい！　待つてくれ。待つてくれ！　その人は、藝者が大きらひなんだよ。お酌なんかすると、嫌はれるぞ。』
　良樹は、このときほど、親友の佐久間を憎くらしく思つたことはなかつた。が、折枝は、それをかるくあしらつて、
『まあ！　藝妓が、お嫌ひ？　わたし、そんな方が頼しいわ。』
と云ひながら、良樹のコップに、サイダーをなみ／＼と注いだ。
『この人は、なか／＼外交官だね。才人だな。』
　佐久間は、折枝の才華を頼もしげに云つた。
　折枝は、佐久間の前に可なり長く坐つてゐた。
『僕は、こんなところへ殆ど來たことはないんだが、君のやうな人が居ることが分れば、これから時々來るよ。來ても迷惑ぢやないか。』



『あら、どうぞ。』と、折枝は美しい微笑で云つた。

佐久間は、本氣にそんなことを云つてゐるらしかつた。良樹は、崖下の少女の所在を、ハツキリ知つたことはうれしかつたが、知ると同時に、はげしい嫉妬に襲はれかけてゐた。佐久間は、學生時代から、眞面目であるが、いざとなると、猪進して止まない男であつた。丁度、彼が得意の中距離を疾走するやうに。その上、男性的な立派な肉體を持つてゐたし、金力も位置も、申分がなかつた。彼が、望めば、どんな貴族の令孃とも、結婚することが出來るほどの身分だつた。戀愛を爭ふには、恐るべき大敵だつた。

良樹は、半年も前から、少女の美しさを認めてゐるとは云へ、そんなことは何の利益にもならなかつた。相手は、良樹のことを、何にも知らないのに違ひなかつた。

良樹は、折枝が佐久間の前に坐つてゐる間、苦しい嫉妬の思ひを、どうす



ることも出來なかつた。

『おい！　佐久間君、君一人で獨占はこまるよ。少し、こちらへ廻したまへ。』

そんな、横槍が出始めたので、折枝は立つて、一通りお酌に廻つた。だが、折枝は、他のお座敷から、一時借りて來たらしく、二十分もゐると、女中に催促されて、去らねばならなかつた。去り際に、折枝は佐久間の前に、もう一度挨拶に來た。

『ぢやまたどうぞ。』

『ぜひ、來るよ。』

『お待ちしてゐますわ。』

さう云つて、佐久間と言葉を交はした。横にゐる良樹には、たゞ默禮したゞけだつた。

それは藝妓として普通の挨拶ではないかと思つたけれども良樹は胸がかきむしられるやうに苦しかつた。

『どうだ。藤本君。あれでも藝妓の美はみとめないか。』

『…………』

認めると云ふこともくやしかつた。しかし、認めないと云ふことは、自分に對して、一番ヒドい嘘をつくことだつた。

『どうだ。降參なら、降參だと、ハッキリ云ひたまへ！』

良樹は、泣きたいやうな氣持で云つた。

『降參だ！』

『あはゝゝゝ。いゝ氣味だ。しかし、藤本君！』佐久間は、急に聲を落した。『僕は、あんないゝ女はないと思ふ。藝妓だつてよさうぢやないか。』

『うむ。たしかにさうだ。』

『性質だつて、善良だらう。』

『勿論だらう。』

良樹は興奮して云つた。

『あんな商賣をしてゐても、處女だらうた。』

『勿論、さうだとも。』

良樹は、聖母マリヤの貞操を肯定するかのやうに云つた。

『さうか。君にもさう見えるか。ぢや僕はあらゆるものを犧牲にしても、あの女を自分のものにするよ。向ふで、望めば結婚する！』

良樹は、崖下の少女の美德を讃美することで、自分自身で恐るべき大敵を作つてゐたのである。彼は佐久間の最後の言葉を聞いて愕然としたが、もうどうすることも出來なかつた。

（つゞく）

古今風流函

めでたかれひ

元の杢網が壁の仲塗のところへ年賀に行つた。

お祝ひは飲みはじめから――とばかり早速酒の支度をした。お肴は有合せの鰈。それが又煮こゞつてゐて杢網が箸を立てようとするとポキリ、箸は二つに折れた。仲塗顔色をかへて、

『どうも面白くないことぢや』

杢網

『ところが面白い、まあ聞け』

と詠み上げた一首

杉箸のをれとお前の中なれば
めでたかれひのにつこにこごり

西行の悪戯

西行法師が近江の琵琶湖畔を旅してゐた時、一人の老翁が、若狭への道はどちらかと尋ねた。そこで西行はつい悪戯心から、

しら雪をいたゞきながら若狭とは
死出の山路と問へばとへかし

と詠んだ。ところがその老翁は直ちに、

白雪をいたゞけばこそ問ひもすれ
若狭へかへる道を知らねば

と返歌したので、流石の西行も一言もなかつた。

なすの與市

文治のはじめ屋島の戰ひの時、沖の舟に扇をたて、これを射て見よとさし招く、源氏の大將義經は那須の與市に仰せつけてこれを射落させた。それを狂歌に詠んだ人がある。

扇をば海のもくづとなすのどの
弓の上手はよいちとぞきく

不遜な使者

某宮殿下御西下の折、停車場に奉送した高崎正風男が脱帽して不圖その裏を見ると、伊丹重賢といふ見知らぬ名刺が附いてゐる。『ハテ、どこで取違へたのであらう』と考へても分らぬ。『それにしても他人の帽子を被つて今が今まで氣付かずにゐるとは何んたる鈍漢ぞ』とわれとわが心を恥ぢ乍ら歸邸した。すると、恰度そこへ伊丹家の使者が高崎男の帽子を持つて取換へに來た。處がその使者は一言詫びるでもなく、態度も極めて不遜なので、高崎男はこれは自分が間違へたのであらうかと考へて即座に狂歌一首を認めて贈つた。

たかさきに取りちがへたか知らねども私
ならばいたみ入ります。

はつぱ坂

岩手宗也が旅をして木曾路のはつぱ坂で一人の客僧に逢つた。いろ〳〵話しをした末、『おいくつです？』と尋ねると、六十四だといふ。そこで宗也は、

客僧の年はと問へば六十四
はつぱ坂とは九々にあひたり。



君臣の情

矢田挿雲

印籠を發矢と投げつけた！

『余は胎内からの將軍ぢや』と豪語して、最初から三百諸侯に君臨した三代將軍家光にも、苦手と云ふものがあつた。

芝居や講談では、大久保彦左衞門が、毎々家光の苦手になつて居るけれど、その多くは傳説であつて實否不明である。家光の幼時から傅役



として、嚴重に陶冶したのは土井大炊頭利勝、青山伯耆守忠俊、それに上州厩橋の城主酒井雅樂頭忠世であつた。

此の三人はいづれ劣らぬ名臣であつたが、就中酒井忠世は家光の人物を砥礪する上に於て寸分の假借も無かつた。彼は家光が立つて將軍職に就いた後までも、幼時と同樣に手嚴しく仕つけた。

傲岸なる家光は、其の都度、理には服しても感情が不快であつた。彼は次第に酒井の顏を見ることを忌むやうになつた。或時大手門を通過の際、門外（今の内務省）の大きな屋敷を見て、

『あれは何者の屋敷ぞ』

と尋ねた。左右の者が、
『あれは酒井侯のお上屋敷でございます』
『……』
家光は颯と顔色を變へて、そつぽを向いて過ぎた。坊主憎けりや袈裟まで――と云ふ諺を實地にして見せたのである。
忠世が或時御前へ出たら、床の間に其の頃流行の刑部梨子地の印籠が置いてあつた。忠世は早速それに目をつけて、
『あれなる華奢な品物は何にて候や』
家光は不屈な氣質に似ず忠世にさう云はれると、外の者に對するやうに笠にかゝつて云ひ返すことが出來なかつた。稍や赤面して、
『いやなに、あれは』
『あれは?』
『あれは加賀守（お側衆、後の大老堀田正盛、家光公無二の寵臣）の獻上品ぢや』
『どれ〳〵』
と忠世はお側衆に促したけれど、將軍當惑の體を拜し、お側衆は誰も取りに立たぬ。忠世は再び家光の方をジロリと見た。
家光は遣瀨なげに、
『誰か、あれを持て』
と命じないわけには行かなかつた。



御小姓衆の一人が立つて其の印籠を床の間から持ち來り、忠世に渡した。忠世は其を大業に受取り、態々眼鏡など掛けて仔細に拜見の後、
『是は〳〵華美な物を何かと存ぜしところ、印籠でござりましたな。加賀守は年若故かゝる物を獻上致せしかなれど、其の昔大殿樣（家康）駿府御在城のみぎり、夕御膳の御給仕に、罷出でし某と申す御小姓衆の袴を御覽ぜられ、何と云ふ物ぞとお尋ねあり、是は茶宇と申候と申上げしに、扨て〳〵汝は憎き者かな、天下の大亂漸く平ぎて、萬民安堵せしも昨日今日と覺ゆるに、汝が輩早くも名も知れぬ美服を身に纏ふ。奢りは亂の始め、以ての外なり、目通りかなはぬ――と悉く御機嫌を損ぜられ、其の小姓を追ひ立て、御箸も附けず憤り玉ひしを、さま〴〵に御詫び申上げて、型ばかり御膳を濟ませられし事のござります。御先祖樣はかほど奢りを戒め玉ひ、萬民の疾苦をお心にかけられしに、當代上樣、印籠まで斯る華奢なものを御賞翫ありては、東照大權現樣の神靈に對し勿體なく存候』
と起ち上がり、右の印



籠を踏石に發矢と投げつけて微塵にした。

聲を吞んで泣き出した

或年の八朔の祝日（家康が江戸に初入城せし八月一日を祝ふ儀式あり）に、家光は前夜から二の丸へ遊樂に御成のまゝ、歸還の沙汰が無い。彼是するうちに御三家を初め、諸大名、御役人、次々と登城し、綺羅星の如く本丸大廣間へ詰めた。

酒井忠世は二の丸にかけつけて切に將軍の還御を促した。家光殊の外立腹し、

『雅樂は兎角我意を云募り、二タ言目には、昔はしか〱と申せども、昔は昔、今は今なり。余の前に取次無しに推參するなど、上を輕しむるの罪屹度正すぞ』



例にない見幕で今日は苦手を征服しようとする意氣組であるが、酒井の方は落つき拂つて、

『雅樂が不屆の段は追つておさばきあらせられまして、今日のところは枉げて還御遊ばしませ。上樣出御御禮受けさせられ候はずては、諸大名に退出致させやう御座なく、さりとて今となりて、俄かの御不例とも觸れ出しがたく、何卒此儀お聽入れ遊ばしますやう』

と理に詰められて、家光は已むなく宴遊を中止して本丸へ歸還し、儀式萬端滯りなく濟ませた。

酒井忠世は大老職として其の日の殘務を處理し、退出して何分の御沙汰を待つたが、其のまゝ何事も無くて日一日と過ぎた。重き職分の手前、一日として登城せずには居られないから、御勘氣の身を憚り、御目通りを忍び〱て登城し、政務を觀た。

八月十五日には西丸御成の儀があつて、大老は厩で

も其の席に參列しなければならない。是は將軍が西丸大御所（先代秀忠公）に御禮の御成であつて、八朔の儀に引續く重き儀式の一であつた。

大御所は家光の面前で酒井忠世に一つの頭巾を手渡し

『其方老年に及び本丸の出仕、怠儀であらう。追々冷氣も增されば、此頭巾をかぶりて奉公せよ。苦しうないかぶりて見よ』

『はツ〳〵』

と酒井は頭を上げ得ない。疊の上には老涙潸々と滴り落つる樣。

『余の許し故、將軍家のお咎めは無いぞ。早くかぶりて見せよ』

『はツ〳〵』

と忠世は涙に濡れた面を上げて、頭巾を推し戴き、すぽりとかぶつた。

秀忠は

『おう、似合ふぞ似合ふぞ』

と顏の相好を崩したが、急に引緊めて將軍の方を向き、



『雅樂がつけ〳〵物を申上ぐるとて、將軍不機嫌の由聞及べど、權現樣以來、我等の世にかけて、天下の事に明るきは雅樂の外に無し。それ故わざと將軍指南役を仰付けてあるに、その雅樂を嫌ふは將軍の我儘と申すもの、總じて我儘は天下取りに禁物ぞ。さほど我儘が致し度くば、隱居して我儘致すが可し、天下は國松君（駿河大納言忠長卿）に讓り申さん。去んぬる八朔の日の體たらくは何事ぞ。あの時若し雅樂が居らずば、如何になりしと思はるゝや。雅樂の如き忠直の臣があればこそ、將軍の威光も落ちずに濟みしなれ。それをも難有しと思はず年老いたる者を不實に致すとは、不屆至極に候ぞ』

と年久しく仕ふる者も曾て見た事が無いほど聲を勵まして將軍を叱りつけた。酒井忠世は頭巾をかぶつたまゝ、聲を呑んで泣き出した。

予を可愛がつて呉れい

そんな工合で其の日の御成は散々であつた。一座白けて折角の親子御對面も氣まづい骨頂であつた。

忠世はお頭巾拜領の一件で、將軍のお憎みは祿に係するであらう。今宵にもあれ重き御沙汰を蒙る事と覺悟して下城した。果して夜に入ると、酒井邸へお使が立つて、早々登城せよとの御諚である。忠世は再び衣服を改めて登城した。

家光は待ち兼ねて聲をかけた。

『雅樂近う來い』

其の聲は子供の時に、忠世に甘えたのと同じ調子であつた。

『はツ〳〵』

と忠世は膝行した。家光

『今日は大御所樣に叱られて、巾開き、相立たず誠に當惑したぞ』

『はツ〳〵』

『けれども、熟らく考ふるに、是まで、そちが天下を大切と存じて予の不機嫌を冒して樣々に申上げしを、一々惡しく取りしは予が過りであつたぞ』

『はツ〳〵』

『此の後とても老年にて大儀では有らうが、諸事に心をつけて、予の足らはぬところを遠慮なく申上げ、其の外政治萬端の存じより、何くれとなく聞かせて呉れい』

『……………』

『よいか、改めてしかと頼んだぞよ。今までは身の我儘故に、そちの心づくしが一つも見えなかつたのぢや。是からの予は、今までの予と違ふぞ。からだを大切にして子供の時のやうに、予を可愛がつて呉れい』

雅樂は兩手を疊に突いた上へ顔を伏せたまゝ、一言も返事をすることが出來なかつた。(完)

靈驗物語



◆神馬の汗◆

後花園天皇の御宇、嘉吉三年九月二十三日の夜、京師に亂あつて、兇賊、禁裏に亂入し、畏くも玉座にさへ近づき奉らうとした。然るに、怪しむべし、兇賊共俄かに懊亂の態にて、或はもんどり打つて倒れ、或は虛空をつかみつゝ輾轉び、須臾に悉く悶絶したので、幸ひに事なきを得た。

程なく、伊勢大神宮の宮司から『櫪飼の御馬が、不意に御厩を破つて逸走し、やがて戻つて來た時には、餘程の遠距離を疾驅したかのやうに流汗淋漓、しかも鞍を置いたあとさへ見受けられるのは、如何にも奇異のことである』と、至急の奏聞があつた。日を繰つてみれば、それは正しく九月二十三日の夜にあたる。しかも京師の亂を知らずして宮司が奏聞したことは、時日の早いのでも知れてゐる。洩れきくもの、さては兇賊どもの俄かに顛倒せしは、畏くも皇祖の神靈の守護させ給ふところなりしかと、恐れ惧れぬはなかつた。（續神皇正統記）

◆由留田觀音緣起◆

京の佛師眼淸は、名人の聞え世に高かつたが、深く觀世音を信仰し、如何なる日も必ず觀音經を三十三遍宛誦したといはれてゐる。

或時、丹波國の金成長者に招かれて、三十三日の日限の間に、觀世音の尊像を作つたが、それが素晴らしい傑作だつたので、金成長者はいたく喜び、過分の作料引出物等を與へて引取らせた。



然し、元來貪慾な長者は、あとにて考へるに餘りに莫大であつたと俄に物惜しくなり、取返さんと先廻りして、大江山の麓で、眼淸を待伏せして打殺した。

しかるに、其後京から來た人の話をきけば、眼淸は彌ゝ繁昌してゐるといふので、不思議に思ひ、持佛堂に行つて見れば、思ひきや、自分の作らせた觀世音の尊像に、慘しくも數多の太刀傷がついてゐた。

流石の長者も、目のあたりの靈示に、身の罪業のおそろしく、一念發起して出家し、我家を寺となし、菩提寺と名づけて、この觀音を安置した。丹波の由留田觀音とよばれてゐるのが、これである。（觀世音靈驗圖會）

智勇連翹襷

本田美禪
近藤紫雲畫

悲痛なる哀願

『この瓶割は御承知どほりに』と勝美は續けた。その方手では助宗を靜かに取つて蚊帳ごしに各務に見える位置に置きながら、『小野家になくてならない重寶、其れが紛失して二百年來什う探してもわたくしの家へは戻らなかつたので御さいますのに、いつか先生のお手に入つて、御秘藏にしてゐられましたは、つまりこの瓶割が、自然と先生に備つてゐて然うなつたやうに考へられます。殊に先生は劍を執つては無双の達人でゐらつしやる。流祖一刀齋先生以來、先生ほどの達人はわたくし家の歷代中にもなかつたさうで御さいます。劍をもつて公方家に仕へる家に然やうな有様、お耻かしい譯で御さいますが、是ればかりは人の力で什うすることも出來ませんので』

『其れは無論じや』

『で、わたくしは考へましたの』勝美は零り落つる涙を拂つて、悲しい聲で哀訴し續ける。『願へますことならば、宗家へ入つて小野の家名をお續ぎになつて頂きたいと……。喃え先生、お願ひで御さいます。勝美不束では御さいますが、命にかけてお仕へ申して決して御意に負きませんです。父忠孝も先生が養子にお成り下さいましたら、どんなに欣ぶか分りませんです。喃え先生！』

『はゝゝゝゝ』大彌太は體を反らして、覺えず高く笑ひかけたが、ふと氣がついて聲を潜めて、『悲しい事を申してくれるな。小娘の狹い心で、然やうな事を考へて明に訴へに參る迄には、種々娩悶をしたのであらうが、六十を超えた大彌太がお身

の養子にはなられまい』
『でもわたくしが先生に』
『待て！』大彌太は早くも抑へて、『冗談は別にして、いかに苦しい內情が小野家にあるにいたしても躬の與り知る許でない。其れにお身の本意は兎も角、お身には既に笹島といふ許した者があるではないか』
『笹島殿はこの世にはもう亡き人で御ざいます』
『何ッ！』大彌太はやゝ驚き顏で、『民也は死んだか』
『いえ、體だけは生きてゐますが、魂はもう疾に死んどる人で御ざいます』
『其んな筈はない』大彌太は斷乎といつた。『先夜瓶割を遣はした際、渠の生命は躬の首と共に一ケ月の期限をもつて慥にお身に預けた筈じや、那れからざつと半月あまり、まだ少くも十日ぐらゐは渠には死ねぬ筈であり、また死なしては預つたお身の失體となるわけじや』
『其れはよう存じてゐますが、どのみちいづれ久津見樣御兄弟の家に討たれて上げねばならない人で御ざいますから』
『其所だ』と大彌太はちよつと頷き、『民也の首は兄弟に與へる筈になつてはゐるが、兄弟の手で民也の首を討ち取ることは困難なのだ。武道の手前一日も生けては置けぬ民也めを阿容々々として生かして置くのは、兄弟の手に合はないからじや』
『でも先生がお助太刀をば……』
『無論その約束で、躬は引受けてあるのだが、お身の家の內情をよく知つてゐる躬としては、然う容易には兄弟に復讎の手を下すやう助力をすることは出來ぬのじや』
『……………』
『と、いふものは民也を死なすと、同時にお身も死なさにやならぬ、喃う然うであらう』
『……………』
『で、兎も角も一ケ月、躬の首と共に民也の生命をお身に預けた大彌太が什ういふ事を爲出すか、まア信賴して見て居るが好い。惡い事はいはぬから、今夜は何も申さずに、其のまゝお身は引き取るが好い』
『は、はい……』
『はいではない』大彌太は嚴格に、『いかなる事情があるにせよ、女性の身にて夜中密かに他家の邸內へ闖入するなど穩當でない振舞じや。幸ひ誰も氣づかぬやうだで、些とも早く引き取るが好い』
『でもわたくしには先生の……』
『今いうた事が解せぬといふのか』
『はい。其れに……』と暫く躊躇ひ『わたくしには來る二十日に、公方家御前にて先生と立合ふやうにとの御內意が下つて居りますので御ざいます』
『何ッ！』頷きながら大彌太は勝美の顏へ蚊帳ごしにその光の眼を屹と射据ゑて、『公方家御前試合と申すと、戶田の渡しへお成り當日……といふ意味の御內意か』

『はい』
『ふむ――、其れは初耳！』と大彌太は考へてゐたが、『いや、其れならば尚ほ幸ひ、躬の思ふ壺に萬事嵌るわ。然うであつたか』
『で、わたくしが先生に敗を取ることは分つてゐますが、然うなりますと父までが……』
『忠孝殿にも御内意が？』
『いえ、父には立會の御内意はまだ下つてはゐませんが、お手直しの家名の面目、わたくしが敗を取れば默つて見ては居られませんゆゑ、父も先生と手合せをしなけりやならぬ運命に立ち至るので御座います』
『むゝ成程』
『然し父は先生と、立會ふことは偕て置いて、合せる顔もないやうに申して居りますので御座います。其れはこの瓶割のため……』怨めしさうに助宗を涙の眼を以てじつと見ながら『これ



さへなくば原來が淸いお心のお父上、笹島殿を唆かし、いえ―武士にあるまじき事などをお頼みなさる人ではないので』
『其れは躬も存じをる』
『で、わたくしは怨めしいこの瓶割はお返し申して、父の胸中の切なさを救つて上げたいので御座います。一つにはもし願へ

る事なら、宗家へ入つて小野の家名を貴下に續いで頂いて……　喃え先生！　生命にかけてお願ひします。不束では御ざいますが、勝美は小野家正統の血筋を受けて居ります女で、もし先生がわたくしを……』

『もう好い、もう好い』大彌太は蚊帳ごしに――憐れみながら抑へる眞似して、『その口上が誠なら、いや、お身の胸中は分つてゐるが、然し彌のごときは生れ損なひ、武道の神が氣紛れに、惡戯半分に作つたもので、いかなる配偶を得た許で兩個と出來るものでない。人傑はみな一代限りじや。其れに彌は餘命を持たぬ。小野家がたとへ柳生家同樣大名格の家柄にしろ、相續をして何にいたさう。はゝゝゝゝゝ好い年をして小娘の言葉にうか〳〵と釣り込まれ、無用な事を申してのけたの。さア早く引き取るが好い』



『は、はい……』

と、勝美は起ちかねて忸怩してゐる。その渾身にはびつしりと慚愧の汗を搔いてゐる。

夜は曉天に近いのか、鷄の聲が何所かでしてゐる。

苦しき冥想

この翌日は邸内の人々はみな未明から緊張をした氣分で起きた。老臣各務大彌太の二十年來の苦節苦心が今日やう〳〵と酬いられ、新主幸丸は登城して所領安堵の台命を拜することになつてゐるので、其の初登城の用意のために、家中の者は多忙しいのだ。

尤も次郎太意冬はもちの木坂の本邸にある。幸丸家督相續の結果は自然選の身柄は、部屋住として中澁谷の下屋敷の方へ逐ひ下げられるか、當澁町の控へ屋敷へ、新主と入更りに移つて來るか、孰かになる豫定なのだが、今日はまだ其の邊の細いことまでは確定してゐぬ。が、權勢につくのは人情、況て新主幸丸は、中興の祖意次（田沼主殿頭）の實子である上に大彌太といふ後見人が背後にはある。其れに意冬の是れまでの不善の性行は公儀から排斥されてゐる事は家中の者も知つてゐるので、今はもう意冬に心を寄せる者は一個もないのだ。各務から出頭するやう指名されぬ者までが先を爭つてやつて來て、新主登城の供の人數に加はらんことを切望してゐる。

知行はたつた一萬石、領地は痩地奧州下村、家中はわづか三百足らずの吹けば飛ぶやうな小諸侯だが、然し大名には相違ないので、今日新主幸丸の登城の行列もかなりに立派だ。尤も例の先箱はない。黒羅紗の袋のかゝつた青貝柄の一本道具を、眞先に立てゝ行くだけなのだが、乘物は新規に造つた漆の色澤の鮮かなもの。駕脇の武士、押への者までみな新調の衣服を着けて、歡喜に充ちながら附いて行く。附添として公方家の御前へ出ることになつてゐる大彌太もまた附いて行く。二十年來の宿願が叶つて今日の晴れの登城に、附添として行くのであるから、その胸中の歡喜は深い。その面積の極めて廣い、皺で疊まれたいかつい顏には得意の色が溢つてゐる。

營中にては幸丸は玄蕃頭を叙爵した。名は意正と改めるやうその場で披露して許可を受けた。田沼玄蕃頭意正、其れが新主幸丸の向後名のるべき公稱である。

× × × × × × ×

恭姫は考へてゐる。かの女は先刻――といつても其れは午前の事だが、意正が伺候して、これから登城する旨を告げ、敬意を表して出て行つた姿を嬉しさうに見送つた後、熨斗目上下に盛裝をした愛息の風采の水際立つて美しかつたことなどを侍女等と共に賞してゐた。が、暫くすると侍女等を遠ざけ、獨り瞑想に耽るべく、机に倚つて頭をうな垂れ、其所に人形を据ゑたやう身搖ぎもせずにゐたのであつた。

小名木川にゐた時とは異なり、今はもう邸内にあつては何をするのも自由で、外出の外は意のごとくたらない事はないのだが、平常は依然田沼家の一食客に過ぎぬので、自分の地位の什ういふものかを思ふと矢はりかの女の胸には不快の感が起つて



來るのだ。その上絶えず大彌太をかき口說して要求してゐる新主意正との婚禮も實行してはくれさうにない。外のことは兎も角も、かの女は其れが解らないのだ。

『解せぬのは各務の仕打じや。婚禮すれば幸殿はいふまでもなく自からの夫、自からの夫は取りも直さず父將軍家の聟君じや。三家三卿と同格の大名どしては見られぬにもせよ、御家門中の一人として羽振りが利くに相違ないのに、什うじやわけで自からと婚禮さすことを欣ばないのか。分らぬ！分らぬ！各務の胸がさつぱり分らぬ。幸殿もまた然うである。浪々中の稼業は兎も角、今はもう立派な大名、小祿ながら自からと婚禮しても耻かしくない身柄になつて居りなが

ら、倘ほ兎や斯うと辭退して色よい返事しようといたさぬ。梅のあるためかも知れぬが、然し其れなれば自からの許しを受けて公に側女とすればよいではないか。以前と違ひ今は大名、一個二個の側女を置くのは是りや何家にでも有りうちの事、自からもまた悋氣はいたさぬ。父將軍家は二十餘人の側女を持つてゐらつしやる。何の梅一個ぐらゐを……』と其れから其れへと、苦しき姫の冥想は際限もなく擴大して行く。

が、斯うまでに讓歩した——といふよりは妥協してども、婚禮すべく考へてゐるかの女の意圖は本物ではない。底には強い嫉妬の火の手が焰を上げてゐるのであるから、際限もなく擴大して行く冥想中の半分以上は憎惡と呪咀に亂れて苦しい。で、耐りかねてつと起つて、かの女は前の廊下へ出て見た。

小名木川の隱れ家にも河水を引いた池があつたが、この濱町の別墅にも河水を引いた泉水がある。四五百坪の水面は、水無月の日の直射を受けて赤くきら／＼と輝いてゐる。遲れ咲の菖蒲の花がその汀には二三輪、蒔繪のやうに見えてゐる。

『父將軍家のお側にあれば、是式のこと自からの任意にならぬ筈はないのじやが、吁、もどかしい、腹が立つ。各務も各務なら、幸殿も……第一梅のあるのが好うない！』心の中で絶叫したから、姫は無意識に廊下傳ひに橋がかりの方へ歩みを運ぶ。

侍女は遠ざけて置いてあるので、後から續く者はない。奥向は表と異り、新主の供をして出て行つて人の出拂つたわけではないから、不斷のとほり女中の部屋は賑やかである筈だのに、什うしたわけかひつそりしゐる。容易に獨り歩きをしない姫が橋がかりへ出て來たことすら氣のついた者はないらしい。

『じやが、今晩は什うしても……、お表の幸殿の寢間へ押しかけて行つてども婚禮だけはさせねばならぬ。否といへば田沼家はお取潰しになるやうに父將軍家に讒訴してやる』恐しき決心を胸に据ゑながら其所にある柱にじつと凭れかゝつて、かの女は池の面を見てゐる。金銀の箔で美しく模様を摺つた羅衣の下には緋縮緬の胴着を着てゐる。切下げにした頭髮には似合はしからぬ青黛を置き、白粉を濃くつけてゐる。名は姫君だが態は後室、其れが橋がかりの柱に凭れて遣る瀬なき心の懊みに囚はれた身を立てゝゐるのだ。見やうによつて哀れさを惹かれぬほどの間柄でもない。

と、この時だつた後方から意外な聲が聞えて來たのは。

『本當にねえ、知らぬが佛ッてこの事ですわね』

『何ッ？』姫が氣がついて聞耳立てると、

『何にしろ姫君のお居間はあのとほり此方とは懸けはなれた許にあるのですから、此方で何をいたしてもお氣づきになる筈は御座いませんよ』と續いて聞える。

嫉妬の權化

驕慢な姫の顏色は眼に立つやうにさつと變つた。『自からに内證で……？　奇怪至極な！　一體何をするのであらう』

と、怪しむ途端に、
『けどお梅樣はどんなにかお嬉しい事で御ざいませうねえ』
と重ねて聞えた。
『梅というたな？』と姫は疑惑を深くする。我にもあらでつか、つかと話し聲のする窓の下までかの女は足を運んだまゝで、其所に停んで改めてじつと聞耳を立てゝゐる。
『其れはもういふだけ野暮です。二年來の戀が恊つて、お剩けに貴女、殿樣と內御祝言をなさるんですもの』
『何じや祝言？』くわつとなつた姫の柳眉は三日月狀にきり、、、と吊つた。話し聲のする女中部屋へ飛込まうとでもするやうに、壁に沿うて二步三步、廊下の上を走りかけたが、『急く許でない』と自省して步みを停めると、今度は壁に體をくツつけ、呼吸を呑んで竊聽してゐる。
『其れといふが御家老樣のお子同樣に御最屓にして頂いてゐるからなのです』
『其れも無論ありますね』
『私達は新參で、精しいことは知りませんけど、お梅樣の親御といふのは、この御別莊の番人で、低い方ださうじや御ざいませんか』
『親御の身分は什うであらうと、殿樣と御家老樣のお氣に入りなれば其れでもうどんな御出世でも出來ますよ。第一御器量があのとほりお美しいんで御ざいますもの』
『一引、二運、三器量と、諺にさへ申してありさす。其れをお梅さんは三つともお持ちになつてゐるんですから、御出世なさる筈ですよ』
『其れにしても姫君がお夢になりとも斯んな話をお聞きなすつたら何うでせう』
『其れこそ是れです』といつた一個の女中は、兩手の指を頭の左右へによつきり立てたやうである。
『其れどころかお口は耳まで……』
『其れでは丸で般若ですわね』
『えゝ、般若より恐しいお顏になるに極つてゐますよ』
『おゝ怖やな』
『桑ばら〳〵、考へただけでもぞつとして來る』
と女中等は嘲してゐる。
事實姫の胸中はもうその通りに燃えて來てゐる。吐く息は火となつて其所らの物を燒かうとするほど嫉妬の情は熱して來てゐる。
『矢張り然うであつたのだ。自からを出しぬいて……。好し、ツ！』
頷いた時の姫の心は却つて冷靜になつてゐた。悟られぬやうに壁から離れて、廊下の上を徐ろに裾を曳きながら跗んで行く。
行く先は何所？
盲探しに行くのだが、其れはお梅の部屋だつた。
『梅、居やるか』多分愛だらうと思はれる或る一室の前まで來



た時、姫は廊下から訪うて見た。内ではお梅が、蒔繪の鏡臺の前へ坐つて、侍女に手傳はして化粧してゐた。今、湯あがりの綺麗な體の、兩肌脫いで白粉をつけ、合せ鏡も濟ましてしまつて、襟すぢの毛に二三本餘計なものゝ生えてゐるのを侍女に剃らしてゐるところであつたが、外の聲を聞くと同時にみな飛上つて驚いた。調子から言葉使ひから、其れは恭姫であることをすぐ知ることが出來たからだが、然し常識では姫が一個で、然も突然、妥らへやつて來る道理はないので、その驚いた心の底には疑惑も多少持つてゐた。

『まア姫君が斯んな所へ……？』

『其れは好いがひよつとしたらば……』といふ想像は、お梅を初め侍女の胸にもひとしく懐かれたところであるから、かの女等は狼狽をした。殊にお梅は、たゞ一縮みに顫へ上つた。猛虎に會つた小兎以上に小さくなつて戰いてゐる。いふまでもなく脫いでゐた左右の肌は慌てゝ入れて、島田に結つた綺麗な頭を疊へ摺りつけてゐるのだが、其れは眞蒼になつてゐる。

『喃う、梅はゐやるか』

と、恭姫は重ねて訊ねた。

『は、居ります……』

『なら何故出迎へをしないのじや』

『は！』氣がつくと成ほど然うだ。たゞ狼狽して恐れて居つては不敬の罪を重ねるばかりだ。で、勇氣を揮ひ起して起つと、お梅は入側の襖を開けた。

『思ひもよらぬお出ましで、とんだ失禮をいたしました』

『…………』姫は足元へ跪伏したお梅の頭から帶のあたりを燒くやうな眼で睨まへてゐる。眼尻は凄く吊り上り、唇はぴり〳〵と眼に立つばかり痙攣してゐる。

『御用事が御さいましたら、お召し下されば何ぞ



子は全部開けられてある。床脇の櫺子の許に据ゑられてある鏡に向つてお梅は侍女を相手にしながら化粧をやつてゐたのであるから、鏡臺の周圍には化粧道具が散ばつてゐる。姫は凄い眼で其等の物を妬ましさうに眺めてゐたが、什う思つてかにんはりと微笑を頰に湛へると、戰く聲でお梅にいつた。

『む、梅、爰へお來や』

『は……』お梅は矢はり鰭伏してゐる。

『爰へ來て元のやう、鏡臺の前へ坐つて見や』

『は……、什ういたすので御ざいます』

『承れば汝は今晩、內祝言をするとの事で』

『えツ！』お梅は胸をどきりとさせた。疊の上に島田を並べて鰭伏してゐる四名の侍女も、みな戰慄して體を竦めた。

『で、自然念入りに、身仕舞をしてゐたのであらうが、斯う見たところ襟筋がまだみな剃れて居らんでないか』

『………』

『自からが邪魔をしたので、剃らして居つたのを止めたのじやらうが、爰へお來や。汝の果報にあやかるために自からが後を剃つて取らせる』

『と、頓でもない！』

『遠慮をしやるな』といふかと思ふと、姫は立ち寄つてお梅のひますのに………』

『いや』極度の怒りを姫は押耐へてわざと靜かに、『今つれづれに耐へかねて廊下を漫歩きをしてゐた。序に多分爰らであらうと思うて寄つて見たのじやが、梅！　身仕舞をしてゐたところ、―

『……』

『許しや』いひながら室內へ姫は徐ろに步みを入れると、異光を持つた凄い眼で四方の狀をじいつと見廻はす。

次の間との堺には襖が四枚立つてゐる。庭に面した緣側の障

手を取る。
後園の逍遙にさへ、手を左右から取らせぬと歩を運ばない姫である。お櫛上げには多くの女中が側についてゐて何から何まで
「白粉でさへ溶いてやらぬと面に塗らぬ姫である。其れが今、刀を取り、小間使として左右の川を足さして居つた少女のために、襟毛を剃つてやらうといふのだ。什う考へても尋常の事態であらう筈がない。
『も、勿體ない什うか然やうな……』
『遠慮をしやるな』戰いてゐるお梅の手首を握つた右手に力を入れて、有無をいはせずに立たせると、姫はぐい〳〵とお梅の體を鏡臺の前へ引ツ張つて來る。
『體が當りますお姫樣！　勿體ない什うか然やうな……』
『まア好い、坐りや』
『は、はい……』
『強情な女子じやの』と肩を抑へて、お梅を無理に坐らせる。

葵の上實演

事態容易でないことは侍女等も無論悟つてゐるが、然し姫の面には、いつものやうに狂的に怒つた色は出てゐない。内祝言のあることを聞き知つた人の樣子としては穏和すぎる嫌ひさへある。で、かの女等は惴々と心で思ふのみで什うにもならない。お梅のために口を揃へて謝罪をしようにも爲やうがない。

のだ。
『幸殿は今日登城して』と姫は冷やかな調子で續けた。『父將軍家にお目もじをする。玄蕃頭に叙爵して所領安堵の御沙汰を蒙り、歸つて來やる筈なれば日本一の聟がねじや、喃う梅！』
『……』お梅にはもう口も聽かれぬ。什ういふ思召であらつしやるかと思ふと其れが恐しい。戰きながら上眼使ひに眺める前の鏡には、自分の顏と自分の後に佇んでゐる姫の顏とが重なり合つて映つてゐるが、姫の眼の中には何となく殺氣があるやうに思はれる。『ひよつとしたら剃刀で……？』と思ふ途端に、
姫は侍女の中の一個にいつた。
『剃を執りや』
『は……』とは答へたが執りかねてゐる。
『執りやと申すに』
『はい……』と據なく執つて捧げる。
と、この時だつた彼方から謠曲の聲が聞えて來たのは。鼓の音も高く聞える。
『欣哉が何か初めたの』呟きながら恭姫は剃刀の刃をじいつと見てゐる。
お梅は恐しさに耐へかねて、隙を見て逃げ出さうかと考へながら坐つてゐるので、體は毫も沈着かぬ。
『好う結へたのこの髪は』姫は後れ毛のあたりを見ながら、中腰になると剃刀をお梅の右の襟へと下す。

『我、人のためつらければ、われ人のため辛ければ、必ず身にも報ふなり』謡曲の聲は續いて聞えた。葵の上を謡つてゐるのだ。

姫はぶる〳〵と身慄ひをした。

お梅はぞつと恐怖に打たれた。剃刀の刃はぞり〳〵と、氷のやうに冷やかにその襟筋を舐めてゐる。

姫の意圖はお梅にはもう充分に讀めてゐる。が、然し什うにもならぬ。言葉を返すことさへも出來ない人に――眞意は兎も角――冥加にあまる仰せを蒙り、其のなす儘に任せてゐるのだ。振りあげた白刃の下に坐つてゐるよりも危險なのだが、白刃の落ちて來ぬ中は身は自由には動かせぬ。『何の多寡がお姫樣、力づくならば私の力が些と強いかも分らない。變な事をあそばしたら、すぐ飛び退いて剃刀を捥ぎ取つてしまや其れで好い。もし敵はなくなつたらばあの和尚樣の許へ逃げてゆく。さア什うなりとあそばすが好い』と弱いかの女も、終には堅く覺悟を据ゑた。で、全身の氣力を集めて、鏡に映る姫の手の動き工合に注意してゐる。

『喃う梅』姫は剃りながら言葉を續けた。『幸殿には自からも、執心をしてゐたのじやが、とう〳〵汝に取られてしまうた』

『何と御返答申して好いやら……梅はたゞ御家老樣の仰しやるとほりして居りますばかりで……』と顫聲でお梅は答へた。

『其所じや。この家は各務次第で、自からでさへ渠の言葉は用ゐにやならぬほどなれば、汝がいふとほりになつてゐるのに不思議はいさゝかもないけれど、然し梅、いふとほりになつて居りさへすれば、自然と思ふ殿御と添はれる。其れからいふと汝の方が自からよりは仕合者じやぞ』

『……』

『尤も物の本などには、戀は僞勝ち、上下の差別ないやうに記されてあるやうなれば、下樣の男女の道は、強い者勝であるかも分らぬ。つまり汝は自からに男女の道で勝つたのじや。僞勝ちの戀に勝つたのじや。喃う然うは思はぬか』

『……』

『あら怨めしや、今は打たでは叶ひ候ふまじ』と謡曲の聲がまた高く聞えて來た。皷の音も交つて聞える。

『あれは欣哉の謡うてゐる葵の上の一節じやが……』と呟いた姫の瞳は、異樣に凄く輝やき初めた。剃つてゐる剃刀の手は暫いて止まりかけたが、直にまた動き初めた。

『あら淺ましや六條の御息所ほどの御身にて……』と謡曲の聲は續いて聞える。

『喃う梅!』

『は、はい……』

『那れはうはまり打ちじやの』

『御意のやうに御さいます』

『いや、いかにいふとも』と謡曲の聲は高調して行く。皷の音もはんぽんと激越の調を帶びて行く。『今は打たでは叶ふまじと、枕に立ち寄り丁、打てば……』

『あれ、何をあそばす』お梅は叫びながら鏡臺の前からさつと飛び退いた。
『慮外者、身動きしやかるか』姫は怒りながら飛び退いたお梅の上に掩殺の手を下すべくすつくと立つた。振上げた剃刀の刃は先の方が五分ばかり血汐をもつて色取られてある。
『でもお姫様、御無體な……あれッ!』
『もう今日こそは恕して置かぬぞ』と逃げ廻はるお梅の後を、姫は狂ひながら追ひ廻はす。逆手に持つた剃刀は右へ薙ぎ、左へ斬りつけ、身をかはすたびに隙間なく必死となつて揮ふので、電光のやうにきら〳〵閃めく。
『梅は御成敗に會ふやうな不束なことといたした覺えは……』
『えゝいやるな、召使ひの分際で、主人の思ふ男を寢取る。什うして其れが罪でないのじや。不忠者め! 不屆者め!』
『あれ、其のやうな御無體な……。誰殿か早くいらして下さい』叫びながら手當り次第に其所らの物を取つては擲つ、既に横ざまに咽喉から襟へ、剃刀の刃を受けてゐるので、血はとくとくと流れ出てゐる。其れが帷子を赤く染め、右の乳の上あたりまで滴つて來てゐることはかの女自身にも分つてゐるので、今はもう貴賤高下の差別を思ふ暇などはない。殊にかの女には恭姫は畜生同樣に見えてゐる。放縦にして倫理を解さず、たゞ本能の動くに任せて見るに耐へぬ醜行を白晝ですら敢てする犬同樣の姫に對して敬意を拂ふ念などは芥子粒ほども抱いてゐない。たゞ將軍家の秘藏子といふ其所に憚つてゐたゞけの事。で、今無法なる成敗を受けねばならぬ災厄に逢着しては默つてゐられぬ。傷ぐらゐついても構はぬ。いや、投げた物が急所に中つて、其所へ仰反つてしまつても構はぬといふ考へで擲つのだから耐らない。鏡臺が飛ぶ、金盥が飛ぶ、衣桁にかけた着物のごときは、手當り次第に投げられてふはりと姫の頭上に被さり、幾たび猫が紙袋を被つたやうな有樣にしてのけたかも分らなかつた。
『奇怪至極な、汝や自からに手向ひしやるか』と喘ぎながら姫は叫んだ。
『いたします、致します。いはれなき御成敗蒙る筈は御ざいませんから』お梅も酷い勢ひで身をかはしながら行り返す。
この時だつた大彌太が其所へつか〳〵と入つて來たのは、恭姫は今新主の供して、歸邸、玄關へ昇ると共に、出迎へた女中の一個に急報を聞いて走つて來たのだ。
『是れはしたり姫君にはいよいよ御亂心と相見ゆる。誰かあるッ!』大彌太は殊更に大聲を揚げて呼び立てた。その時はもう逸早く剃刀を揮ふ姫の手首を確と後から執つてゐた。
『放しや、放しや』と身踠きしながら、姫は悔しげに叫び續ける。『亂心でない。梅を成敗して居つたのじや』
『其れが亂心……。憚りながら些との間、彼方へ行つてお心をお鎭めになつてゐらせられませ。喃う、誰かある』
『は』若侍が三四人其所へ繋がつて入つて來た。
『お見やるとほり姫君は御亂心の態でゐらつしやる。座敷牢ー



ーいや！』眼色をもつて大彌太は意中をそつと飲み込ませつつ、『別室へお連れ申して、姫と御介抱申して居られい』

『畏まりました』

『さ、彼方へ』といつた時には、大彌太はもう姫の右手から危い物を捥ぎ取つてゐた。行かじと踠く姫の體を、廊下の上へ押し出してゐた。

若侍は手取り足取り、姫を引ッ擔いで連れて行く。渠等も姫に對して執るべき最後の處置は斯うするより外、仕様のないことを知つてゐるのだ。

『お悼はしいが據ない……』見送りながら大彌太は悲痛な聲で呟いた。『當家將來の爲を思ふと、然うするよりは仕様がないのじや』

『御家老様！』とお梅は抱きつく。

『お〻梅……』引き寄せながらじつと見下し、『恐かつたであらう』

『は、はい……』

『然しもう是れでよい。今夜は天下晴れての祝言——何者にも遠慮なく、心の儘に出來るのじや』

『お嬉しう存じます』

『む〻。汝もいかい苦勞をしたのう』大彌太は眼に涙を湛へて、お梅の顔を見下してゐた。（つゞく）

外國名士の特別寄書

前メキシコ公使　堀口九萬一　譯

偉大なる日本國民に對する興味

メキシコ共和國文部大臣　ホセ・マヌエル・プイッグ・カサウランク



月刊雑誌『キング』から、私に與へられたこの好き機會を利用して、私は茲處に、日本國民に對し、尚又殊更に教育の事に關係ある方々及び若い學生諸君に對して、私の極めて誠實にして且つ懇篤なる挨拶を爲さんとするものであります。

偉大なる日本の、驚嘆すべき進歩と、その發達とは、誠に吾等メキシコ人にとつては、他に比類の無い好い手本であり、同時に我々メキシコ人を刺戟し奬勵する爲めには永久に盡きることの無いよい源泉であります。日本國民が今や世界の文明國の先頭に立つに至つたのは、これ全く進歩的にして且つ愛國心に燃え、而して賢明なる歴代の政府が盛に教育を普及した偉大な盡力に基くものであることを私は善く知つて居るのであります。

日本の物質的並に精神的生活の現れに就て、我々メキシコ人は決して無頓着で居られる理由のものではありません。日本人とメキシコ人とは非常によく似た處があります。その中でも愛國心の強烈なことと、藝術を愛する點とは特別の精神的共通の關係があるかと思はれるのであります。今その證據の一例を擧げて見ます

れば、先頃、メキシコに在る日本帝國公使館の手を經て、メキシコへ寄贈せられた、日本の子供達の描いた圖畫を見まするに、メキシコの子供の描いたものと餘り善く似て居て、殆んど區別し兼ねる程であります。これが即ち日本とメキシコとの兩國民間に通有する最も明かな類似點であるのではないでせうか?

特に私の弟のカルロス・プイッグ・カサウランクが、先年東京駐在のメキシコ公使でありました關係からして、自然私は、偉大な日本國民に對する興味を持ち、而して色々と深く日本の事を識るやうになりました。ですから私は自分自身でいつか日本へ行つて我がメキシコの青年の心からなる誠實の挨拶を日本の青年諸君にお傳へ申したいと切望して居る次第であります。

私の親愛なる『キング』の讀者諸君へ



メキシコ國立銀行總裁　アルベルト・マスカレニヤス

私は、終始一貫、何時も日本を崇拜して居る者であります。その理由を申し上げますれば、日本が、今や世界文明諸國と肩を並べて、少しも劣らぬのみではなく、これ等諸國の上に、一頭地を抜きんでて居るほど、盛大になつたのは、これ全く、日本國民が一人も殘らず皆してしてゐる間斷なき勉強の力と、その熱烈にして火のやうな愛國の熱情との現れであることを、私は善く知つて居るからであります。

顧みれば、日本とメキシコとの友交關係は、遠く三百年以前から始まり、以て今日に至つたのであります。そしてその三百年の間、兩國の親善は日に益々増進して來たのでありますから、この後も日本とメキシコとの親善關係は永遠にますます濃厚ならんことを、私は心から祈つて已まぬものであることを茲に申し上げるのであります。

勤勞を第一とせよ

貴族院議員　永田秀次郎

勤勞と云ふ事は人生の最も尊ぶべき責務である。

ウイリアム・ペンが言つた。

『勞働を愛せよ、汝若し食物の爲に之を要せざれば肉體の爲に之を愛せよ、これ身體を強壯に精神を健全に、そして怠惰を防衞するものなり』

實に働くと云ふ事は一身一家にとつては安全に生活する道であり、一國にとつては富強に繁榮して行く道である。日本では稼ぐに追付く貧乏なしと言ひ、西洋では勤勉は幸福を生むの母なりと言つて居る。之は洵に平凡なる眞理である。

貧者曰く、『憐み給へ空腹に堪へず』富者曰く『空腹とは羨ましき事なり』斯樣な問答がスマイルスの著書に書いてある。貧者が憐み給へ空腹に堪へずと訴へるは普通の事であるが、富者が空腹とは羨ましき事なりと言ふ所に面白き教訓を含んで居る。

人間は勤勞すべき使命を以て生れて居る。勤勞しなければ身體も精神も共に發達しない。そして安佚な贅者に身を持ち崩しては遂に健康を害し生命を喪ふ事となる。誰しも病氣の時經驗するが如く少しも空腹を感じない、若し空腹を感ずる樣になればそれは餘程快癒した證據である。病氣が重くて何も食べたく無いと云ふ時には我々は金錢も名譽も何も要らぬ、唯健康になりさへすれば外に何の求むる處もないと考へるのは一般の人情である。今若し富者が日夜餘りに贅澤を盡して健康を害し一日も氣持よき空腹を感じた事が無いとすれば其富者は決して幸福では無いのである、そして自分も亦決して幸福とは考へないのである、それで『空腹とは羨ましき事なり』と叫ぶのである。

之は冗談の樣であつて極めて眞劍な[illegible]評であ

る。それ故に人間は勤勞せなければならぬ。衣食の爲に勤勞する事の必要なき人でも身體の健康の爲に勤勞せなければならぬ。精神の健全なるが爲に勤勞せなければならぬ。

或人が米國の富豪チャールス・シュワップに金持になる秘訣を訊いた。シュワップは之に答へて、

『唯他人より少しく餘計に働く事である』

と言つた。無暗矢鱈に働らくとは言はずして少しく餘計に働らくと言つた所が面白い、凡そ人間には體力能力に限りがあるから無暗矢鱈に働く事は或は其人の健康や知識に堪へられないかも知れぬ、併し乍ら普通の人ならば他人よりも少しく餘計に働らくと云ふ事は何人にも出來る事である、此心掛がありさへすればチャールス・シュワップの樣な富豪となれるのである。

サミュール・レーイングの言に、

『勤勉は國民を富す唯一の資本なり、此無趣味の說數こそ國家無二の經濟學なれ』

と言つて居るが、一國の富強を來すには何と云つても其國民が勤勉でなくてはならぬ。勤勉でなければ生產は無い、生產がなければ富強にならぬのは當然の事である。

西班牙の諺に、

『天も良し地も良し唯中間のものは宜しからず』

と云ふのがある。それは西班牙は氣候も良し土地も肥えて居るが其中間に生活して居る人間は怠惰で善く無いと云ふ意味である。私は朝鮮の事を考へる時に何時でも此諺を思ひ出すのである。朝鮮も亦天もよし地もよし唯其中間のものは宜しからずである。

朝鮮の衰亡する第一の原因は國民が怠惰で勤勞を賤しむ爲である。

第二の原因は口舌の徒のみが跳梁して黨爭を事とした爲である。

凡そ國民が怠惰で且不和であつて其國が維持せられる道理がない。朝鮮は兩班が社會上の上層の地位を占めて居り、是等の人が威儀を正し衣冠を着けて堂々として所謂『兩班步行き』を爲して勞働を賤視するのである。支那では『雨讀晴耕』と云ふ言葉があるが朝鮮は之に反して『雨睡晴遊』であつて雨が降れば決して働かぬ、そして朝からでも睡る。晴れた時は樹下石上に悠々として長煙管を持ち天神髭を撫でて遊んで居る。斯かる習慣を爲すに至つた理由は政治上經濟上それ〴〵の原因があるに相違ないけれども斯の如く怠惰であつて勞働を賤しむ樣では民族として發

達すべき道理が無い。此點は今後内鮮人双方にとつて最も重大なる敎訓であると思はれる。

近頃經濟社會に於て屢々勞働時間の短縮と云ふ事が叫ばれる。卽ち數十年前迄は各國共に凡そ十二時間位の勞働であつたが其後に於て八時間勞働と云ふ事が唱へられた。國際勞働會議に於ても日本が之に賛成しないと云つて種々に批難されて居る。社會主義者の或者は六時間勞働說さへも唱へて居る。更に甚だしきは電氣學者は電力其他機械の發明によつて四時間勞働で十分なる時代が到來すると云つて居る。斯く勞働時間の短縮が叫ばるゝに至つた理由は近時工業の進步に伴うて勞働階級と資本階級の差が漸やく顯著となり來り之を大局より觀察すれば結局勞働者も資本家も共に共存共榮でなければ産業が發達しない事は明かであるけれども、差當り之を近視眼的に見る時は勞働者と資本家とは其利害相反して勞働者は成るべく勞働時間を短縮して多額の賃銀を得む事を求め、資本家は之に反して成るべく經費を節約して配當を多くせむ事を求むるが爲動もすれば勞働爭議を生ずるに至るのである。

凡そ大工業組織の下に於ける勞働は殆と機械的となり千人一律機械の如くに動いて少しも自己表現と云ふものが無いそれが爲に仕事に興味が無くなつて行く事は無理ならぬ事であるが、其結果勞働者にも資本家にも共に血の氣が無くなつて機械の如く相衝突するが如き事は大局から見て結局共倒れに終るべきものであるから我々は人類社會生活の本分を誤らない樣に心得て相戒めて階級鬪爭を避け階級緩和に努力しなければならぬ。

又勞働時間短縮と云ふ事は階級鬪爭と云ふ問題から離れて考へて見ると何等の意義を有しないものである。身體の健康に害ある事なれば適當に之を保護する必要がある、又婦人や小兒の勞働にも相當の制限を加ふる必要がある。併し乍ら無意味に勞働時間の短縮を圖る事は畢竟人間としての責務を怠るものと言はねばならぬ。人間は自己の健康を害せざる限りは出來得るだけ多く働らくのが自然の道德である。之を考へ違ひをして多く働くのは損である、資本家の腹肥やしとなるだけである、出來るだけ働らく事を少なくして資本家を困らしてやるのが善いと言ふ議論は唯階級鬪爭だけを見て社會生活を見ない議論である。其窮極の議論が露國の如くに勞農者專制の共産國の主張となるのであるが、露國が其慘憺たる經驗から新經濟政策新々經濟政策と豫定せさる退却を爲せる經過を見ても我々には十分の敎訓となるのである。況んや其露國の第一の憲法は、

『働かざるものは食ふべからず』

と云ふのである、結局人間と云ふものはどの樣な極端な事を考へて見ても矢張り働かざるものは食ふべからずとなるの外は無いのである。

八時間勞働問題に就て考へて見ても伊太利や獨逸では八時間勞働は原則として異議が無いとしても國家の復興の必要上八時間以上勞働するの必要があるとして之を實行して居ない、勞働の性質によつては八時間勞働も過多に失するものであらう。現に我國の炭坑夫の勞働を見ても炭坑内に於て實際勞働する時間は八時間に達しないのが多いのである。之に反して勞働の性質によつては十時間位勞働しても何等健康に害なきものもある。是等は其宜しきを見て定むべきである。八時間勞働し八時間睡眠し、八時間休息すれば三八二十四時間となつて都合が善いと云ふ樣なことでは小學校の算術の問題には適當ではあるが人間の實際生活の問題としては全く根據の無い議論である。況んや之を六時間とし四時間とし短縮すればする程文明開化の如くに考ふるは淺間しき次第である。獲らぬ狸の皮算用と云ふ事は要するに分配論に捉はれて生産論を忘れた事を言ふのである、資本家と勞働者の分配論の爲に肝腎の生産論を忘れ勤勞の美德を失ひ怠惰の悪風を來す事があつては全く人間の退歩であつて國家社會の衰亡であると言はねばならぬ。

ソロン曰く、『働かざる者は盜賊なり』

ポール曰く、『働かざる者は食ふべからず』

アーノルド曰く、『吾人は休息すべき永世を有するにあらずや』

是等の言は皆勞働の道德を説いたものであつて金言と言ふべきである。併し乍ら私は決して休息なく餘暇なきを人間の生活とは考へ無い。張り通したる弓は彈力を失ふが如く適當の勞働に對して適當の休息が必要である事は論を俟たない。唯此休息や餘暇（Leisure）は如何にして之を消化すべきかは大問題である。

東洋では小人閑居して不善を爲すと言ふ、西洋では怠け者は七人の惡魔之を誘惑すと言ふ、此の如く餘暇を消化する事は實に難中の難事である。

近頃米人アルチャー氏が『餘暇と新奴隷文明』と言ふ事を論じた中に次の樣な事が書いてある、則ち昔は富者は奴隷を所有して餘暇を得た、今日の米人は機械と云ふ新奴隷を用ゐて餘暇を得て居る、此新奴隷文明に於て生じたる餘暇に就て米人の多くは自ら樂む事を知らないで概ね他より樂みを求めて居る、例せば活動寫眞、自働ピアノ、蓄音機、ラヂオ、等の類である、それでも尚此餘暇を消費するに苦んで居る。

ホフマン博士の統計によると過去十年間の米國の殺人率は人口十萬に對して七、二、である、之を伊太利の三、六英蘭の〇、〇五瑞西の〇、〇二、に比せば實に驚ろくべき多數である。一九二四年の統計では倫敦の殺人件數二十七件に對し紐育は二六二件に達して居る。何事にても世界第一で無くては承知の出來ない米國は實に殺人に於ても強盜に於ても狂人に於ても亦世界第一である。是等は畢竟米國が富裕なるが爲に餘暇が多い。此消化せられざる餘暇が罪惡を産んだものに外ならない。實に餘暇は人類を頽廢せしむるものである。我々は餘暇の爲に墮落せざる文明を作らねばならぬ。

此アルチャー氏の説から考へても人間には適當の勞働が必要である。勞働は罪惡の消毒劑である。勞働は惡魔の避難場である。十時間勞働を八時間とし八時間を六時間とし六時間を四時間とし之に依つて得たる餘暇を消化する事が出來なければ人間社會は罪惡を以て滿たさるゝと云ふ結果とならねばならぬ。それ故に之を消極的に考へても勞働は罪惡を防止する爲にも必要なりと云はねばならぬ。

勤勞は神聖である。勤勞は神の意思である。一身の爲一家の爲一國社會の爲に我々は勤勞を尊ばなくてはならぬ。勞資問題は勞資問題である、之が解決は別問題である。勞働は神聖なりとの根本的原理は此枝葉の社會問題の爲に其光輝を失ふべきものでは無い。

花井博士の努力ぶり

辯護士　大井靜雄

大正六年の衆議院總選擧の折、私は恩師花井博士が出身縣より立候補せられたので、四月一日東京を出發して縣に歸り、選擧期日まで二十日間、朝から晩まで田舍道を人力車で驅け廻つて、一日に三回宛都合六十回の政見發表演説會に、いつも先生の前座の役をつとめた。而して選擧が終ると、先生について直に朝鮮に行き、京城の高等法院の談合事件の上告公判に立會つて、東京へ歸つたのは五月四日正午頃であつた。東京驛から一應錦町の博士の事務所へ寄つたところ、先生は自分の室に入るや否や、机の上に積つて居た留守中の手紙を見初められた。私は三十分ばかり默つて机の側に坐つて見て居たが、一向やめられそうな樣子が見えないので手持無沙汰ではあるし、一ヶ月ばかりの旅行で身體がへとへとに疲れて居たから失禮して歸宅し、湯に入つて早くやすんだのであつた。さて翌日事務所に行つて書生に聞くと、先生は留守中の手紙や事件の整理などして、とう〳〵夜三時頃になつて初めてやすまれたそうである。私はこれを聞いた瞬間に自分の努力の足らざるを恥ぢ徐行の者に勝るを痛感したのであつた。

一日作ざれば一日食はず

可睡齋主 秋野孝道

支那の百丈禪師は九十六歳の長壽を保たれたが、その最後の齢まで、若い者と一緒になつて、毎日元氣に仕事をされた。それが老人に氣の毒だといふので、弟子共が氣を利かして、仕事の道具を隱してしまつた。道具さへなければ、仕事はなさるまいと思つたからである。果して禪師はその日一日は仕事をしなかつた。弟子共は扨こそと安心した。併しその安心は永く續かなかつた。禪師は仕事をしない代りに、一日飯を食はないのであつた。弟子共は驚いた――『老師には、どうして食を召されませぬもしやお體でも？』『一日作ざれば一日食はず、今日は仕事をしなかつたから、食ふことも止ぢや』それを聞いた弟子共が恐れ入つたばかりではない、誰しもこの尊い言葉の前に禮拜しないものは無いであらう。いかなる階級、いかなる職業の者と雖も、作ずして食ふことは許されない所である。抑も人生の本義に反することである。



衲は常に言ふことぢやが、人世は線香の如くあるべきだと思ふ。線香は灰になるまで熱を以て働かねばならぬ。

昔印度の脇尊者は、八十歳になつて始めて出家されたが、爾來三年間といふもの、晝は學問を研究し、夜は坐禪三昧に入つて曾て席を脇につけて眠らず、即ち體を横にして眠つたことがない、依つて脇尊者と稱された程である。晝夜兼行、嘗て安息されることは無かつた。かくて三年修業の曉には、脇尊者の名、全印度を動かすに至つたのである。

八十の手習を笑ふやうな淺はかな事ではならぬ。八十の手習の尊さを感銘するまでに目醒めねばならぬ。まして年若く力強き青年にして、働かずして食ひ、勉めずして費すが如きは、たゞに人道の罪人たるのみならず、また天道の罪人である。

○何人が賢者なるや――各人より學ぶところの人なり。

○何人が强者なるや――自分自身に打克つところの人なり。

○何人が富者なるや――所有物を以て滿足するところの人なり。

○何人が尊者なるや――人間を尊ぶところの人なり。

海鼠の腸

法學博士　中村進午



○犬でも馬でも牛でも成長しても大きくせずに小さくして置く方法があると西洋雑記といふ本に書いてある。其方法は、生れて數日を經て眼の始めて開く時に、燒酎少しばかりに小麥の粉と紅珊瑚のよく搗きて細末にしたるもの四匁を混ぜて食べさせると云ふのである。眞僞は知らぬが、是れが人間にでも適用せられて人間をだだん小さくしてしまつたらば食料問題も解決し、不戰條約も效能が薄くなるであらう。

○老人雑話に左の一節がある。當時の帝室が如何に窮乏を告げられたか、公卿衆が如何に困苦されたかが窺はれる。

常盤井殿と云ふ公家に目見えを望む人あり、中立の人いひ入りければ、夏衣裳にては耻かしきと宣ふ、苦しからずとて伴んひ行きけり、彼人も夏の裝束の事ならんと思ひしに、帷子もなくて蚊帳を身に卷きて逢はれけるとぞ、信長の時分なり。



噺の樣だと思うて聞いたことがある。或る御公卿樣の御姫樣が若し少しでも錢が入つたらば鹽を買ひたいと仰やるので、何の爲にですかと聞き糺したらば、雨漏りで疊がよごれるのを防ぐのだと答へられたと、さながら嘘でもないかも知れぬ。安普請の借家に住んだ經驗のある僕などは、此の御姫樣に同情を寄せる一人である。

○殺人の手段が澤山ある。上士は三寸の舌を以て人を殺し、中士は筆頭を用ひ、下士は劍を用ふと云ふ諺がある。今の世の

中には、武器で殺される者よりは金で殺される者の方が多いやうである。そして其中には暫くして社會的に蘇生するものもある。女に殺される者も随分ある『糸屋の娘は眼で殺す』と云ふことがあるが、女の殺人器には眼ばかりでなく、口もあり、笑くぼもあり、腕もある。所謂る名士と稱する者が女の理由で死んだ（精神的に殺されたのを含む）のが數知れぬ。さればとて『世の中に酒と女は敵なり、どうぞ敵にめぐりあひたや』などと呑氣にかまへても居られぬ。女がなければ男が出來ず、困つたものなり。『アミバ』時代に逆流するわけにも行かず、それとも神樣に頼んで男は男を生み、女は女を生む樣な分業的にでもするか。『小學』に男は內を言はず、女は外を言はず（男不言內、女不言外）とある。若き女性、乃至は女權論者は以ての外と宣ふべし。

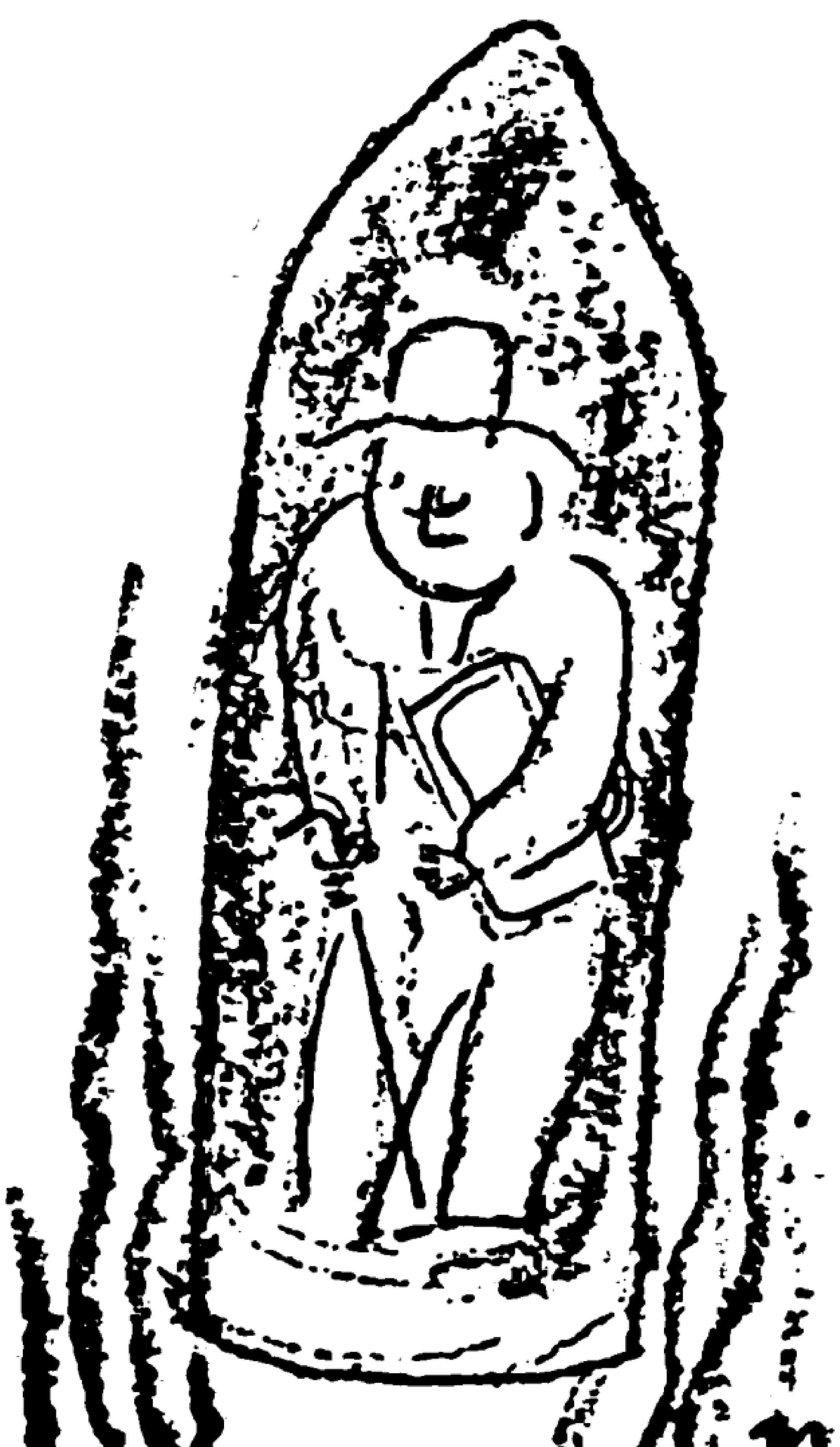


○放蕩息子が毎晩出て遊ぶので父に叱られた。息子が言ふに、友達の交際で致し方がありませぬと。父親は大層怒つてお前はいつも〳〵友達々々と言ひのがれをするが、親と友達と孰れが大切か考へて見ろ。そんなに友達の言ふことに背くことが出來ぬと云ふならば、友達が若し火を喫へと言つたらば、御前は火を喫ふかと責めつけた。息子曰く食べますとも。そこで父親が火鉢の火を皿に盛りうつして、さあたべて御覧と差出すと、息子ぬからぬ顔で醬油をかけて下さい。はなし家の好材料なり。」

○信濃の善光寺如來が諸所に出張して、大分御賽錢があがつて福々になつた。鎌倉まで來て長谷の觀音に出逢うた觀音が焦眉の急があるから少々頂戴したいと云ふ。善光寺如來は如何程位ですかと問ふと、なあに嚢にたつた一ぱいでよろしいと云ふ。所が其嚢を見るとすてきな大きなものであつたと云ふ。此話しは曾呂利新左衛門が豊臣秀吉に袋に一ぱいの米をと望んで、倉庫の五つも入る紙袋を作つたと云ふことにも書かれて居る。佛蘭西人がチュニスの土人に、或は西班牙人が呂宋の土人に一疋の牛の革で包むだけの土地を貰ふと約束して、牛の革を細長く澤山に切つて莫大の土地を取つたと云ふ話しとも似通つて居る。奈良の大佛の前で耳かきを拾つて歸宅して見たら杓子だつたとか。仁王様の草鞋を盗んで來たら穿けなかつたとか云ふ話しもある。それは扨置き今日信濃の善光寺に詣づる

度毎に不快を感ずる。丸で宿屋の客引に出あつた樣な感じがする。ちよつとそこらの坊さんに物を聞けば、ワンケンドンの挨拶をする。然も金を拂へば敎へてやるがと云つた風なり。坊さんに云はすればこれも時世の變遷か。

○交通機關の發達もすばらしき勢である。昔は徒歩、次に馬や牛の力を借る。或は駕籠と云ふ重寶なものが出來る。次で人力車になる。馬車になる。汽車になる。電車になる。自動車になる。愈々進んで航空機になる。水上の船などは何程速くとも追付くものでなし。擬て此次はどうなるか、大砲で人體を打ち出す位になるか。但し打ち出された人間が安全に止まる方法は餘程考慮を要するものであらう。月世界まで行く位なことはさほど遠からぬ内に可能になりそうである。



○食べ過ぎて胃病に患んで死んだ所が、地獄に墜ちて閻魔の前に引き立てられた、閻魔は帳簿を調べたが、罪がないので鬼共に命じて極樂の方へ遣らうとした。其男がもぢ〳〵して居るので、餘をぐづ〳〵して居るかと閻魔が問うた。其男曰く極樂へ往くに及びませぬ、便所へ行きたいのですと、穢ない話しのやうだが、眞理が其間に含まれて居る。物質的必要の方が精神的要求に先んずることを云つたものである、此の場合便所の方が極樂以上に急務であるのだ。故岡本監輔先生は或人に北門の鎖鑰を云々せられた時に、『今日の急務と云ふは外に無し飲んで小便、食うてくそひれ』と答へたと云はれた。先生は露國に北海道を脅かされるが危險だと云つて、北海道を周遊せられたが、道中險しくして、尿がつまり、或は赤尿が出て困りきつたと云はれた。

○長壽の法は藥にあらず、空氣にあらず、怒らず、恐れず、疑はず、憂へず、欺まさるに在り。夢窓國師は『長生せんと思はば一嘘を云ふべからず、嘘は心をつかひて少しのことにも心氣を勞す、心氣大に勞せざれば命長きこと疑ふべからず』と言つて居る。兀僊仙人の說に『仙人は不養生せず腹立たず物ほしがらずそれで長がいき』とある。日本居家秘用には『多く人を聚めば志氣日々に耗りて事からず心にむは不和なるをよしとす』と

ある。愚なる者に長壽者あり。無責任者（よく云はゞ、物事にとんちやくせぬ人）に長壽者多し。



○自動車の運轉手に祝儀を遣らなければならぬと云ふ場合が、或人の結婚式披露式の時に起つた。新婦の母親が、一圓やるべきか二圓やるべきかに惑うて非常に苦心した揚げ句、兩方やれば間違つこなしと思うて三圓やつたと云ふ實話がある。さしづめ獨逸のプロフエッサーたる資格がある。日本のプロフエッサーは勘定高いから斷樣なことはすまい。插畫　小杉未醒

○

物識りになることは、藝術家にとつて、不要ではないが、必要でもない。學識は藝術を廣くはするが、深くはし得ない。（森田恒友）

革命を鎭めた愛國心

佛蘭西ナンシーの衛戍聯隊に革命が勃發した時、政府は鎭撫のため各地から軍隊を急派した。

革命兵は城門に巨砲二門を据ゑて今將に點火しようとしたその一刹那、城内から驅け出て來た少壯士官テジョルは、砲手の火繩を奪ひ取り、砲口に立ち塞がつて、

『わがナンシー聯隊は祖國に反かず。』

と叫んだ。

その時また他の大砲が點火されようとしたので、テジョルはそれを見るや否や飛び付くやうにして又その砲口に立ち塞がり、

『汝等は汝等の同胞を撃ち殺して快いか。どうしても發砲するなら先づ余を殺せ！』

猛り立つた革命兵はテジールに小銃を發射した。

テジールの愛國心、そしてその勇敢な行爲は忽ち喧傳され、ナンシー市民は城門に雲集した。そして市民は重傷のテジョルを民家に擔ぎ入れて手厚く看護した。

その甲斐もなくテジョルは、

『わが佛蘭西の同胞同志砲火を交へ刄を結ぶ、誰れかこの悲しき修羅地獄を救ふものはないか。』

と細りゆく聲をふり搾りながら死んで行つた。

然し、この少壯士官の悲壯な最後の言葉はまた忽ち喧傳され、叛逆に昂奮した革命兵も深く感動して、間もなく鎭靜した。

（武林叢談に據る）



明るい世界へ

大同電力社長 増田次郎

親しきが故に與へない

『増田君、君のやうに直接、我輩についてゐる人は月給は安いよ。』

と、或時後藤子爵は私に言はれた。約十年の間、子爵の左右に侍して種々其の指導を蒙つた、私にとつて、中でも此の一語は胸深く牢記して永く忘れ得ない。

一寸考へると何でもない事のやうだ。否むしろ見様によつては恨むべき事のやうでもあらう。然るに私が牢記して忘れ得ぬといふ意味は何か。味へば味ふ程、無盡の教訓を覺ゆるからである。

世間一般からいふと、親近のもの、直屬の者に對しては、兎角、情に囚はれるといふか、或は愛に溺れるといふか、どうしても偏重、偏厚、偏愛、といふ事になり易いものだ。だから、物質的報酬——云はゞ月給の如きも澤山やりたくなるのが人情である。然るに子爵はその反對の事を云つて居られる。

實際、子爵の云はれる通り、我が親近のもの、直屬のものを特別に待遇するといふ事は不公平の本である、情實の弊に陷る源である。さうしてその結果は、使ふ人、使はれる人、兩方の身を誤る事になるのだ。

古人も言つた。

『人はその親愛する所に於て偏す、その哀矜する所に於て偏す』これ即ち身修らず、家齊はざる所以であると。子爵の言葉は正にこれを穿つて遺憾ない。

處世のコツは腹八分目

これは單に月給の問題だけではない。凡

繪入警句選

『賢者と愚者の相違は、自分が感情を支配するか、感情が自分を支配するかの違ひである。』



『賢者は自分の不明を知るが、愚者は自分は何事でも知つてゐる者だと思つてゐる。』



『婦人を美しくし、崇高ならしめるものは、黄金の光ではない。金剛石、エメラルドの光でもない。

ての事に對して應用出來る處世法であると思ふ。

例へば衣食住について之を云ふならば、自分の口を可愛がり過ぎて、甘い物を澤山食べると病氣の因となる。

自分の體を愛する餘り、澤山着過ぎると、皮膚が弱くなる。

愛するといふことは、その者の欲望を過度に滿たすことではない——與へる事のみが愛することではないのだ。子供の欲しがるものを悉く與へて、その及ばざらん事を恐れる親はあつても、與へたい心を制して與へないことが、即ちその子を愛する所以であることを知る親は少い。近來子供の教育といふことが大變やかましく叫ばれるやうになつたが、それは徒らに子をあまやかす教育に墮して、古人の『與へざる』教育に及ばざる事遠きを憾まざるを得ない。



増田次郎氏の執務振り

昔から腹八分目といふ。人に對しても、己れに對しても、欲望を八分目にするといふこと、これが處世のコツではあるまいか。

金の貸方より仕事の貸方

『君の俸給が仕事に比べて餘計に殖えるやうな事になれば、君は解職しなければならぬよ』

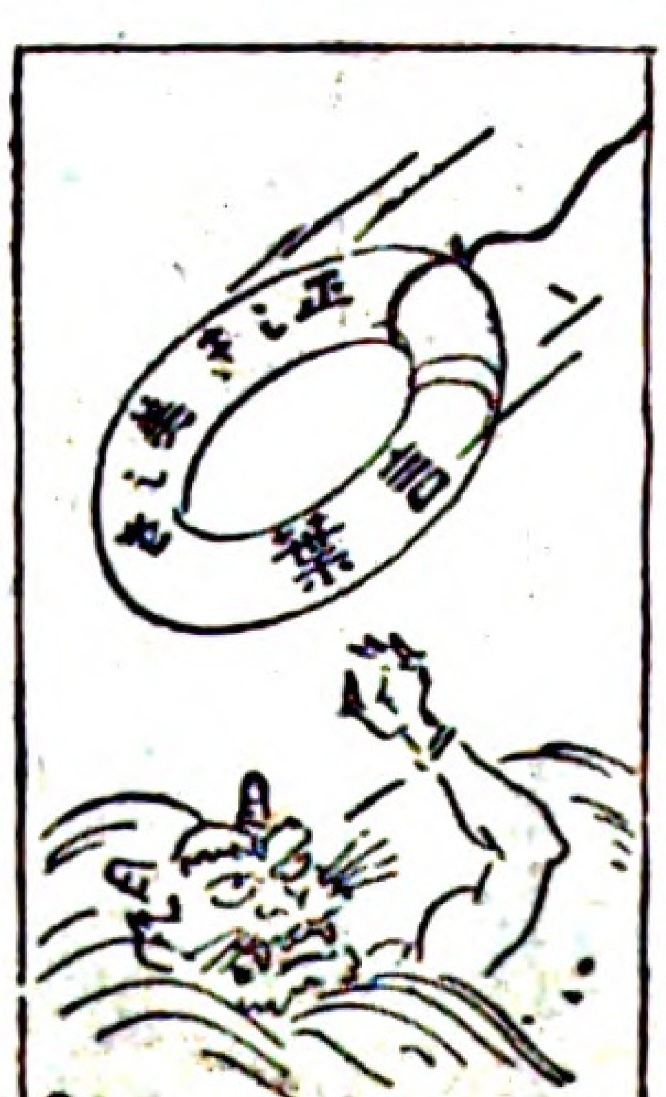
子爵は又かういはれた。

近來の人間が非常に利口になつたといはれる。それはどういふ意味かといふに仕事は少

沈勇、謹直、謙讓及び親切である。』



『惡口雜言に酬ゆるに、正しく美しき言葉を以てすることは、好果の多いことで、費用のかゝらぬことだ。』



『もとからの友は二人の新らしい友よりも尊い。』



くして報酬は多く得ようとするからだと云ふ。仕事の質量と報酬と秤にかけて見ると仕事の方がずんと輕く、報酬ばかりを重くしたいといふのだ。いかにも利口は利口だらう。

だが本當の利口だらうか。

かういふ人に限つて、ぢきに不平を起したがる。使ふ方でも、さうした見えすいた心根を嬉しいと思ふ筈はない。だから兩者の關係は久しからずして破綻を生ずる。甲にゆき、乙に行き、丙に行く。どこへ行つても、この利口さが改まらない限り、明るい天地は開けない。利口は利口だが、小利口だ。小利口は即ち大馬鹿だ——子爵はそれを教へられたのである。

福澤翁が言はれたことがある。

『金の貸方になるのも結構だが、それよりも仕事の貸方になれ』

と。『仕事の貸し方』何と味ひある言葉ではないか。本當の利口は、これでなくてはならない。

『これこれの仕事をしたから、いくらいくら貰ひたい。』

と云ふやうに、現代の若い人達は、あまりに精算を急ぎすぎる。

そんなに早く精算せずとも、いつか必らず勞力に對する報酬はあるものだ。のみならず急げば急ぐほど報酬が少く、遲れれば遲れるほど報酬は多いものだ。

此の信念を持つて自己の仕事に勵んだならば、前途は自からにして展開される。光明は自からにして、我に近づいて來る。明るい世界に住む所以の道は、これに外ならぬと、私は信ずる。

歐米先進國に照して日本の改善すべき事

高島米峰

明治大帝の御詔文に、『人心をして倦まざらしめんことを要す』と仰せられてあるのに、今世界の文化國で、日本ほど人心の倦み切つて居る所は無いでせう。歐羅巴の戰敗國獨逸を見ても、困つて居ても、なかなか緊張してせつせと活動して居る狀を認めました。我國でも、是非人心を刷新し、この倦怠から救ふことが經濟家の最大急務です。

その根柢は人口調節です。その次は學校などの資格問題です。歐米のどこにも、日本の樣に、人物よりも、才能よりも、一枚の免狀の役に立つ國は無いでせう。之を打破せねば日本の前途は危險です。歐米のどこでも、享樂の經濟的に、品よく出來るやうになつて居ますけれども、日本の如く、この機關が不備であり、不經濟であり、社會の階級の一方に偏して居る所は無いでせう。公園の改善増設、美術館博物館の建設、利用、活動、オペラ、演劇、カフエー等の改善、何れも歐米に照して、必要であると思ひます。

『一掴みの常識は、千石の學問に優さる。』



『藏つて置く知識は埋めてある寶と同然である。』

獨學美談

報いられた努力

癸生川美三

世には家が貧しくて、義務教育さへ受けられぬ者がまだ／＼少くない。然るに、去る六月、桐生市で執行された徴兵檢査の際、かうした不幸な境遇に生立ちながら、見事學科の試驗に合格し、關口市長から、小學校卒業同等の資格を認定され、郷黨からは昭和の二宮金次郎よ、生きた修身の教材よと謳はれて居る、世にも感心な青年がある。

この青年こそ、赤城連峰の東麓、桐生市本町六町目、西洋洗濯業、長澤盛一郎さんの長男、宗太郎君で、同君は幼少の頃、病身の故を以て學校へ上れず、漸う身體が癒つたかと思へば、家運が悪い上に父が病氣で、まだ年端も行かぬ君が、一家の大黒柱となつて働かねばならなかつた。

人間生れてこんな不幸があらうか、かうして好きな學校へ一日も通ふ事の出來なかつた宗太郎君は、十五六才になつても、文字一字讀めない全くの明盲目でその爲め人々からはまるで馬鹿者扱ひをされ、口惜しい、恥かしい！情ない！で、人知れず悲憤の涙を絞つたのも幾度か知れなかつた。

『よし、石に嚙りついても、人並に讀み書きの出來るまで勉強しよう。』

と、先づいろはから初めた。そして仕事の合間、寢る手間に、暇さへあれば――いや無い暇を無理に拵へてはひとりで一心に勉強した。いろはが解ると、今度は振假名を辿つて、新聞雜誌を手當り次第に讀む、小學校の教科書も讀む、かうして血の滲むやうな努力を何年か續けた。實際其の間の苦心努力といつたら、とても容易なものではなかつた。



長澤宗太郎君

併し其の努力も遂に報いられる日が來た。

それは男子として最も光榮ある徴兵檢査の當日、關口市長が試驗を行つた際、君は高等小學校程度の問題をすら／＼と讀みこなし、

『就學もしない君が、どうしてそんなに出來るやうになつたか？』

と、驚き怪しむ市長の問に、宗太郎君は謙遜しながら以上の苦心談をしたので、

『君は實に感心な青年だ。就ては早速君に小學校卒業程度の認定書を與へ、長く學校記錄に殘す事にする。尚、今後とも何事によらず其の意氣その心掛でやるやうに。』

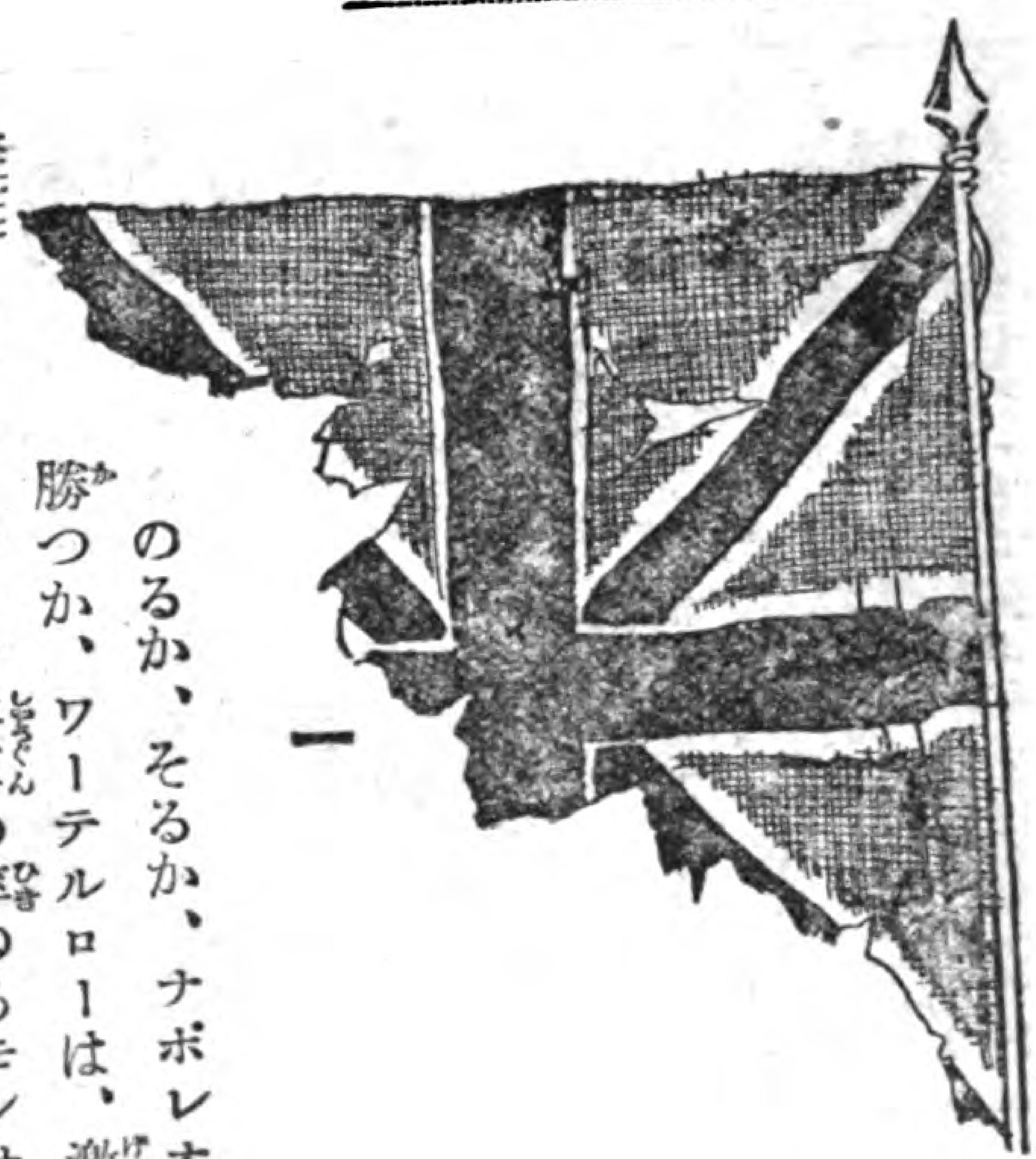
と賞讃し且激勵した。宗太郎君は夢かとばかり喜んで家に歸り、翌日は早速市長宛に禮狀を寄せて來たが、其の文といひ筆といひ、迚も小學校卒業者など何處へも及ばぬ程の出來榮えなので、益ゝ市長を驚かした。

宗太郎君の家でも、この晴れの日に此の榮ある譽を得たので、兩親初め老先の短かい祖母が、宗太郎君を取巻き、涙を流して喜び合つた。かくて同君は、近來モボ、モガといつて、青年男女の氣風が著しく浮華情弱に流れて來た際、君の如く質實剛健な青年は、全く世の龜鑑であるといふので、今や全市民の賞讃の的となつて居るばかりでなく、市の各小學校でも、生きた修身教材として、朝夕兒童を教訓する絶好の資料として居る。

泰西美談

少年騎手の最期

安藝三郎



一

のるか、そるか、ナポレオン勝つか、聯合軍勝つか、ワーテルローは、激戰の眞最中。

何事ぞ、ウエリントン將軍の率ゐるモンサンジアン高地の英國軍は、刻々に悲境に陷る。

英軍は死力を盡して突撃したが、佛軍の「赤獅子」とうたはるゝ猛將ネーの大理石隊に當るべくもなく、行けば死し進めば殪れ、肉彈又肉彈、あはれ、我軍拙く、英軍は敗北と見えた一八一五年六月十八日の正午過ぎ。

『ヴブルまで、一氣に乘切る程の騎士はゐないか？』

きつと結ばれたウエリントン將軍の唇から、突然、かういふ一言がもれた。

『はつ……』

丁度傍にゐたハツチンソン大佐には、咄嗟の場合、質問の意味が解しかねた。

『見い、我が大英帝國の鐵壁と恃む剽騎兵の突撃も……あゝ、もういかん、この儘で三時間も戰ひ續けたら、我軍は全滅である。ヴブル方面に駐屯するブリユツヘル將軍のもとに傳令を送らねばならん。』

漸つと質問の意味が解つたので、ハツチンソン大佐は、屹となつて答へた。

『少年鼓手ジョン・グレーを差出しませうか。』

『何、少年鼓手？……』

將軍はきり〳〵と眉を動かして、大佐を見返つた。全軍を死地から救ひ出すべき重大な傳令に少年鼓手を用ひようとする大佐の心意が、將軍には判りかねたからで。

『彼はエヂンバラの馬喰の伜で、三歳の時から今日まで、一日



として馬に乗らぬ日はない馬術の達者、技倆はロシアのコサック兵中にも、彼程の者はあるまいと存じますが……』

世界一の名騎手といはぬばかりの賞め方。

『む！　それなら好からう、何處に居るか。』

ウエリントン將軍も、心ひそかに頷いて、ジョン・グレー少年を面前へ呼出させた。

間もなく、將軍の面前に現はれたのは、色白く眼鼻立の美しい、娟々たる美少年。

『ジョン・グレーといふのは、お前か？』

『はい、さうであります。』

少年はきつぱりと答へて、擧手の禮をした。

『ヴブルまで、傳令に行けるか、地理は解つてゐるか？』

『はい、解つて居ります。』

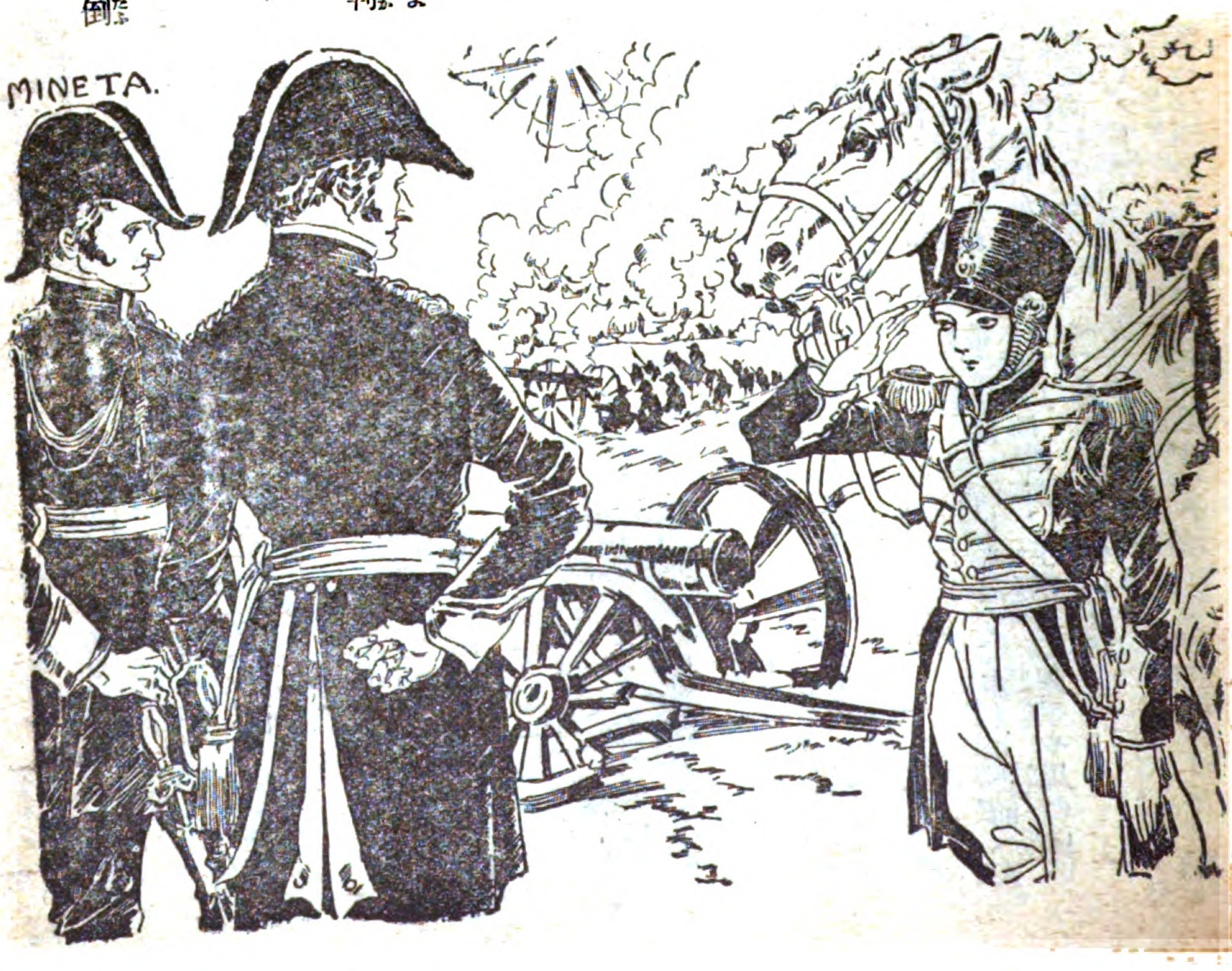
『では、ヴブルに駐屯するブリユツヘル將軍の許に馳參じて、斯う傳へよ。(ワーテルロー方面の聯合軍は危機に瀕して居ります、直ちに援軍を向けて、佛軍の右翼を突かれよ)と……、判つたか？』

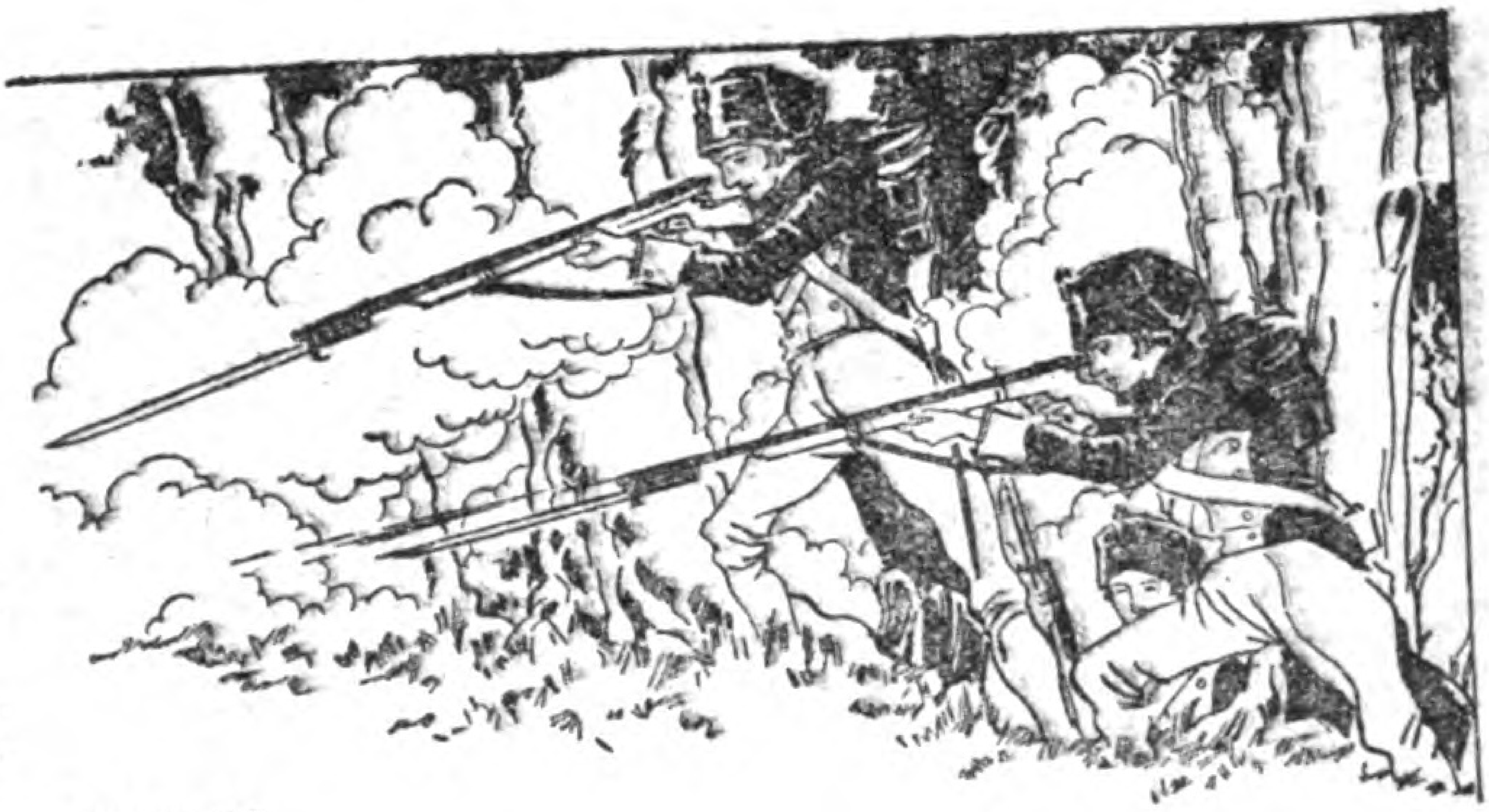
『はい……でも、將軍よ、そのやうな重大な任務を帶びて、ヴブルまでの遠乘りは、私には出來ませぬ。』

『それは、何故ぢや？』

『私の馬は、年寄りの上に、息も細く足も弱く、途中で屹度倒れます。』

『ふむ！……』





將軍は莞爾とした。

『――なかなか馬術は出來るな？　宜敷い、では、余の控馬「春」に乘つてゆけ。』

二

『では、行つて參ります。』

グレーは、白色の名馬「春」號にひらりと跨つて、一鞭びしりと當てるや否や、宛ら宙を行くが如くモンサンジアンの高地を驀らに駈け下りて、ヴブルへ、ヴブルへ……。

彈丸雨飛の戰線を、物の見事に突破してワーテルロー外れの森蔭まで來た。ほつと一息吐いて足並を跑足に緩めると、馬も人もはや、べつとりと汗ばんでゐる。

『こゝまで來れば、もう大丈夫、後はこの國道を眞直ぐに一本道、眠つてゐても行かれるんだ。これからはお前の足次第、全力を盡して走つて呉れるんだよ。』

クレー少年は人に物をいふ如く、情を籠めて「春」の平頸を叩いた。馬にもそれが通じたか、ぶるッるるる……と鼻を鳴らし泡を吹いて、またも戞々々……。

その瞬間である。森の中から耳を突裂く銃聲、ズドン……と靜かな森に反響して、ピュッ！　と飛來つた彈は、誤またず少年の左腕へ命中。

『あつ！』

と叫んで、少年は危く落馬する處だつたが、ぐつと踏堪へた。振返ると、濛つと立昇る白煙の中に見ゆるは、紛れもない佛國兵の軍帽。

『失敗つた！』

けれど沈着な彼は、ぐつと足に力を入れさま、馬の腹に拍車を入れて、ぐいと軀を縮めると、次の瞬間には全速力で疾走し出した。

ど、ど、どッ。

釣瓶打の一齊射撃。一彈は又しても、少年の左の肩から胸へ物の美事に貫通した。

『うゝむ……』

傷手に怺りかねて、彼の軀は一溜りもなく、がくりと前へ突伏した。傷口から滾々と噴出す血が、手綱持つ兩手や馬の白い頸筋に濃紅のやうに、べつとりと粘り付いた。

『あゝッ！』

幾ら藻掻いてもこの重傷では何うする事も出來なかつた。此時

血と共に彼は次第々々に、朦朧として來る意識中で、死を覺悟した。もう何にも見えなかつた。傷の痛みさへ感じなかつた。突然闇に襲はれたやうに眞暗な中を、消え殘つた少年のみが叫び續けた。

『責任……重大任務……それを果たすまでは死んではならない……』

つゞいて浴せかけられた時には、疾足の馬は既に着彈距離を外れてゐたが、少年の耳にはその音さへも響かなかつた。唯、不思議な事には、少年は既に死んでゐるのに、ぐつと馬の兩腹を締め附けた足の力、手綱持つ兩手の構へ、突伏してはゐても輕く馬上に留つてゐる乘馬姿勢。凡てが寸分の隙もない馬術の極意。

ぐい／＼と責められるので、馬は背の騎手は生きてゐると思ふから、息を切らせ泡を吹き、全身汗だく／＼で走り續ける。けれど、死人を乘せてこの馬は一體何處へ行くのか？ ヴブルまでの一筋道を駈け拔けて、さて何になるだらう？ 怖らぬ止める者のないこの馬は、駈けて／＼駈け死ぬるのであるまいか？

三

『わッ！ 暴れ馬だ！』

ヴブルに駐屯する普國軍司令部の眞中へ、死物狂ひの白馬「春」號が飛込んで來たので、兵士達はどつと騷ぎ立つた。

そして漸く暴れ狂ふ馬を押へて、鞍の上の少年を下ろして見ると、無殘た銃傷を受けてはや冷たい骸となつてゐるので、兵士達は二度吃驚。

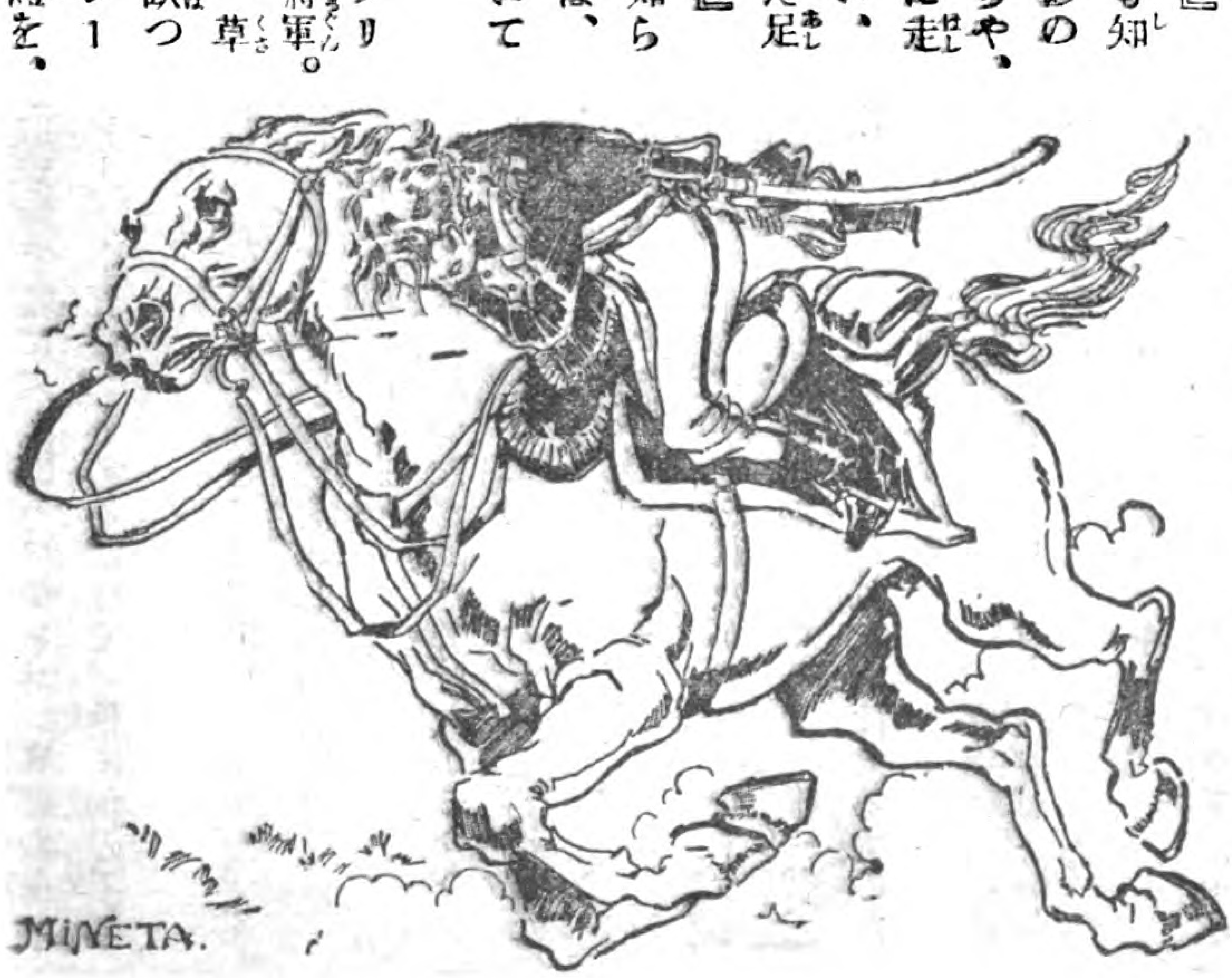
『何だ、此の少年は死んでるぞ。』

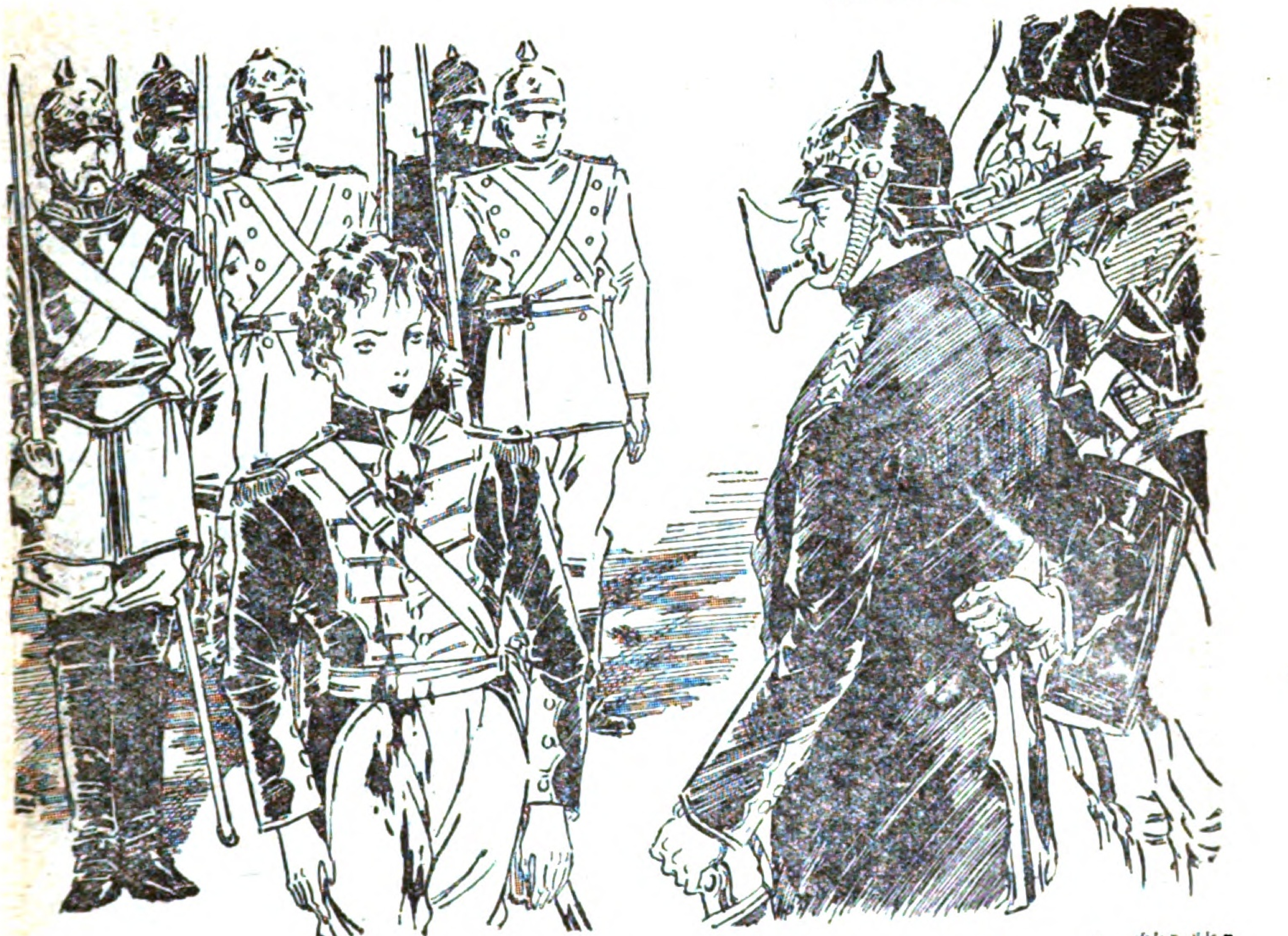
『英軍の少年鼓手らしいが、ワーテルロー方面から脫走して來たんだな。』

『さうかも知れない、あの馬の容子ぢや、滅茶苦茶に走つたらしい、見ろ、まだ足踏してる。』

何にも知らぬ兵士達は、只ざわめいてゐる。

と見たブリュッヘル將軍。近づいて、草の上に橫臥つてゐるグレー少年の身體を、





些細に検査したが、軍隊手帳に、（英國ハッチンソン聯隊の少年鼓手、ジョン・グレー、十五歳）とあるだけで、他に何の手懸りもない。

此時、「春」號も、どうと地響きさせて倒れて了つた。死せる少年鼓手に乘潰されて、心臟痲痺を起したらしい。

『少年には不似合な立派な馬だが……』

ブリュッヘル將軍は、不審に思つたが謎は解けなかつた。

『可哀さうに、人も馬も銃彈を受けてゐる處を見ると、名譽の戰死である、厚く葬つてやるが善い。』

將軍は情ある言葉をかけて、暫く默禱した。

けれど、最後まで責任――の二字を忘れなかつたグレー少年の屍は、神の言葉を嬉しくは思はなかつたらう？　唯一言、――傳令――の二字がいひたかつたらう？　それをいはせる力のない神の禱りが恨めしくはなかつたらうか？

折しも、瀏喨として起る軍樂隊の樂の音は、少年鼓手の名譽の戰死を弔ふ英國々歌である。

ゴッド、セイブ　アワ　グローリアス　キング、
ロング　リーブ　アワ　ノーブル　キング、ゴッド　セイ
ブ　ザ　キング
樂の音は、勇ましく嚴かにこの小さい勇士の靈を慰めた。
センド　ヒム　ビクトーリアス、
ハピイ　エンド　グローリアス、
ロング　ツー　レイン　オーバ　アス、



ゴッド　セイブ　ザ　キング

と、突然、ブリユツヘル將軍が叫んだ。

『おツ！』

意外、意外！　今まで死んでゐたグレー少年の屍が、むくむくと動き出したと思ふと、すつくと立ち上つて直立不動の姿勢をとつた。それと一緒に、樂手も驚いてぴたと奏樂をやめた。

『傳令！……』死者の聲とは思はれぬ朗らかな底力のある聲。

『ワーテルロー方面の聯合軍は、危機に瀕して居ります。直ちに援軍を向けて、佛軍の右翼を突かれよ、終り。』

いひ終ると、少年は又バツタリと倒れて再び聲もない。

責任――の二字のために、死に切れなかつた少年の魂が、祖國の國歌に甦つたのだ。完全に自己の任務を果した後、始めて彼の魂も、彼の肉體と共に天に歸つたのだ。

『さては、英軍の傳令であつたか、……』

將軍も、愕然として、時を移さず、直ちに進軍の命令を下した。太鼓は鳴る、馬はいなゝく、今ぞ、のり出す、普軍の援兵！

四

ワーテルローの戰は、はや終局に近かつた。泥濘の中を今朝から數度の合戰に、疲れ果てた英軍は、妖星の如き大ナポレオンの陸軍に最後の突撃をして敗れたので、遂にモンサンジアンの高地を明け渡さねばならなかつた。

忽如、ワーテルローの東方に一沫の黒煙が立昇つた。

敵か？　味方か？　見分ける遑もなく、急霰の如く注がれる砲弾は、勝運に乗つた佛軍を見る〳〵混亂させてしまつた。

『敵の援軍、ブリユツヘル將軍麾下の普國軍なるぞ！』

叫ぶ間もなく、形勢俄かに逆轉した。

戰場に日が暮れかゝる頃には、ナポレオンは悲痛な面持でモンサンジアンの丘を見かへりつゝ、疲れた身を馬背によせてパリへ引きあげねばならなかつた。

凱歌はあがる、モンサンジアンの丘、今し、普軍の本營から、白布に包まれた砲車が、丘の上に到着した。ブリユツヘル將軍は、その白布をとると、中には生けるが如く眠つてゐるジヨン・グレー少年の屍が安らかに横臥つてゐた。

『お！』ウエリントン將軍も、ハツチンソン大佐も思はずその屍に取縋つた。

『げに壯烈な少年鼓手の最期でした。……』

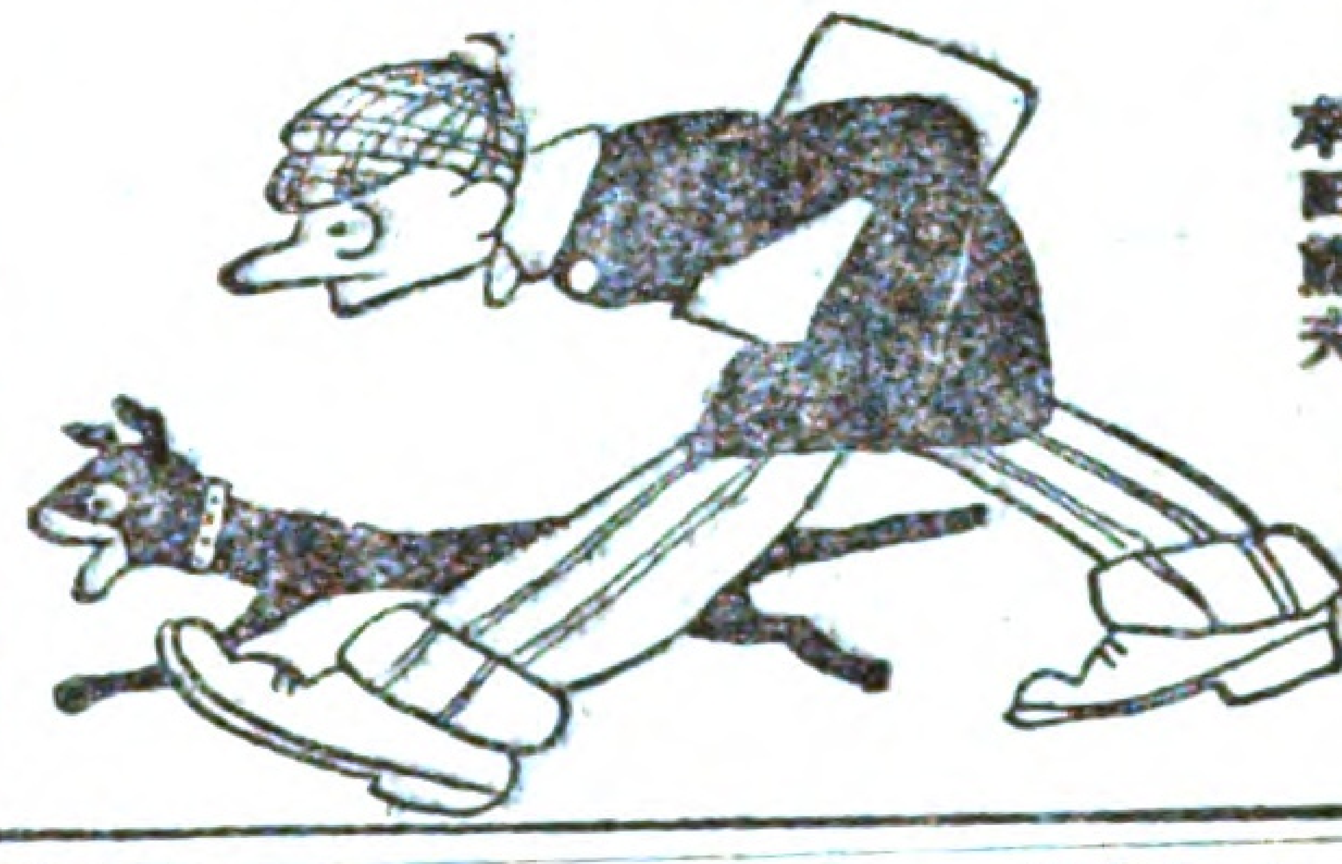
ブリユツヘル將軍の說明に依つて、ウエリントン將軍始め一同は、暗然として少年の顏をさしのぞくと、祖國の爲に責任を果した滿足さうな微笑が、彼の紅顏に漂つてゐた。

風腥い戰場には、歡呼の聲――何時果てるとも知れなかつたが、こゝモンサンジアンの丘の上には壯烈な少年鼓手の靈を哀弔する、嚴かな沈默が續けられた。

（をはり）

ドン吉繪日記

本田[illegible]夫





(1)先生『さア皆さん、亞鈴をしつかり握つて、元氣よくやるんですよ——男子が女子より大きいのはよく運動するからです』



(2)ドン吉『先生ッ、家のお父さんはお母さんより小さいんです』
先生『それはお母さんの方が運動が多かつたからです』



(3)ドン吉『先生ッ、違ひます。お父さんは大口開いて御飯粒を横に呑み、お母さんは口をつぼめて縦に呑んだせゐです』



(1)『痛いワー』



(2)ドン吉『梨頭奴ッ、氣を付けろい』
梨頭『何だッ、君がぶつかつて來たんぢやないか』



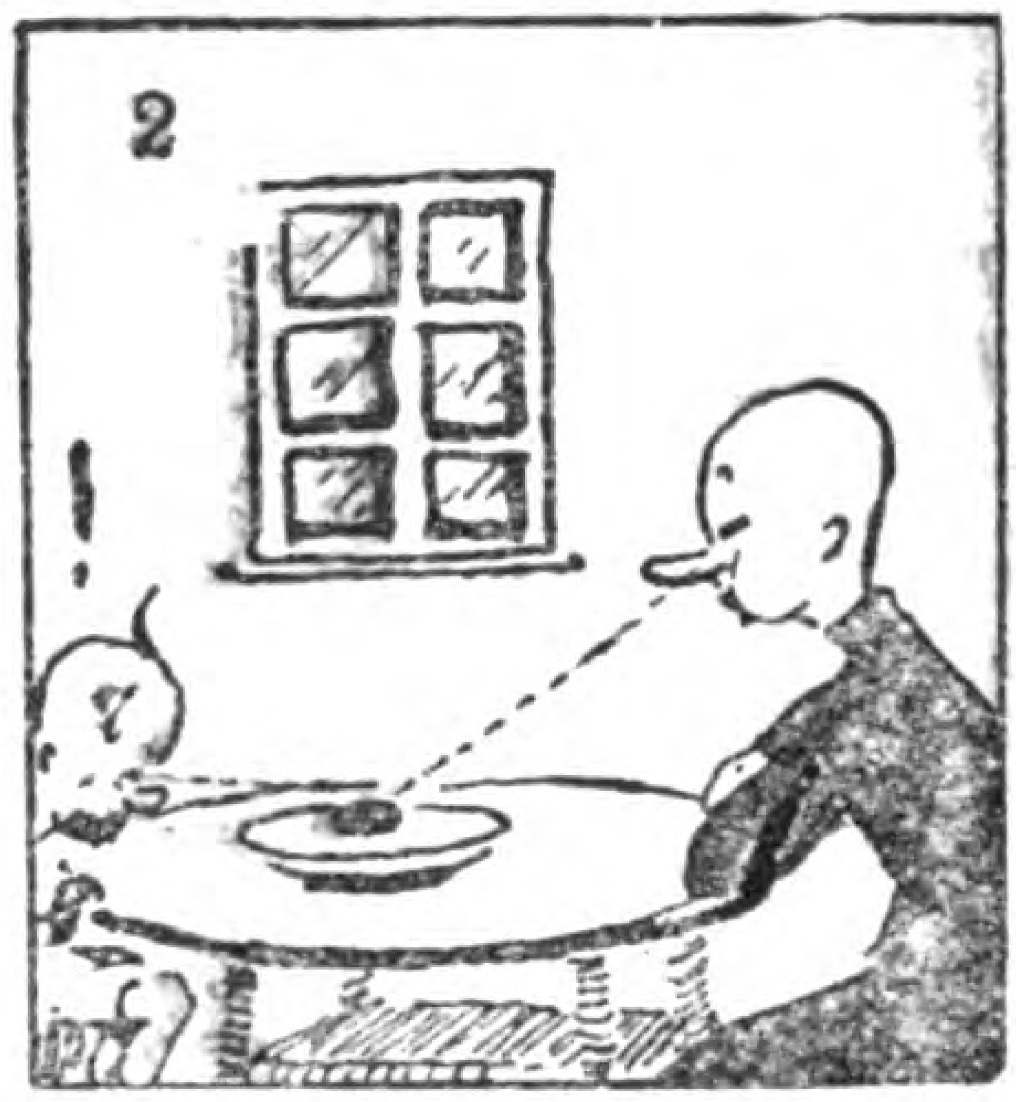
(3)先生『何を喧嘩してる？——フン、宜敷い。どつちが先にぶつかつたか、もう一度やり直して御覽』



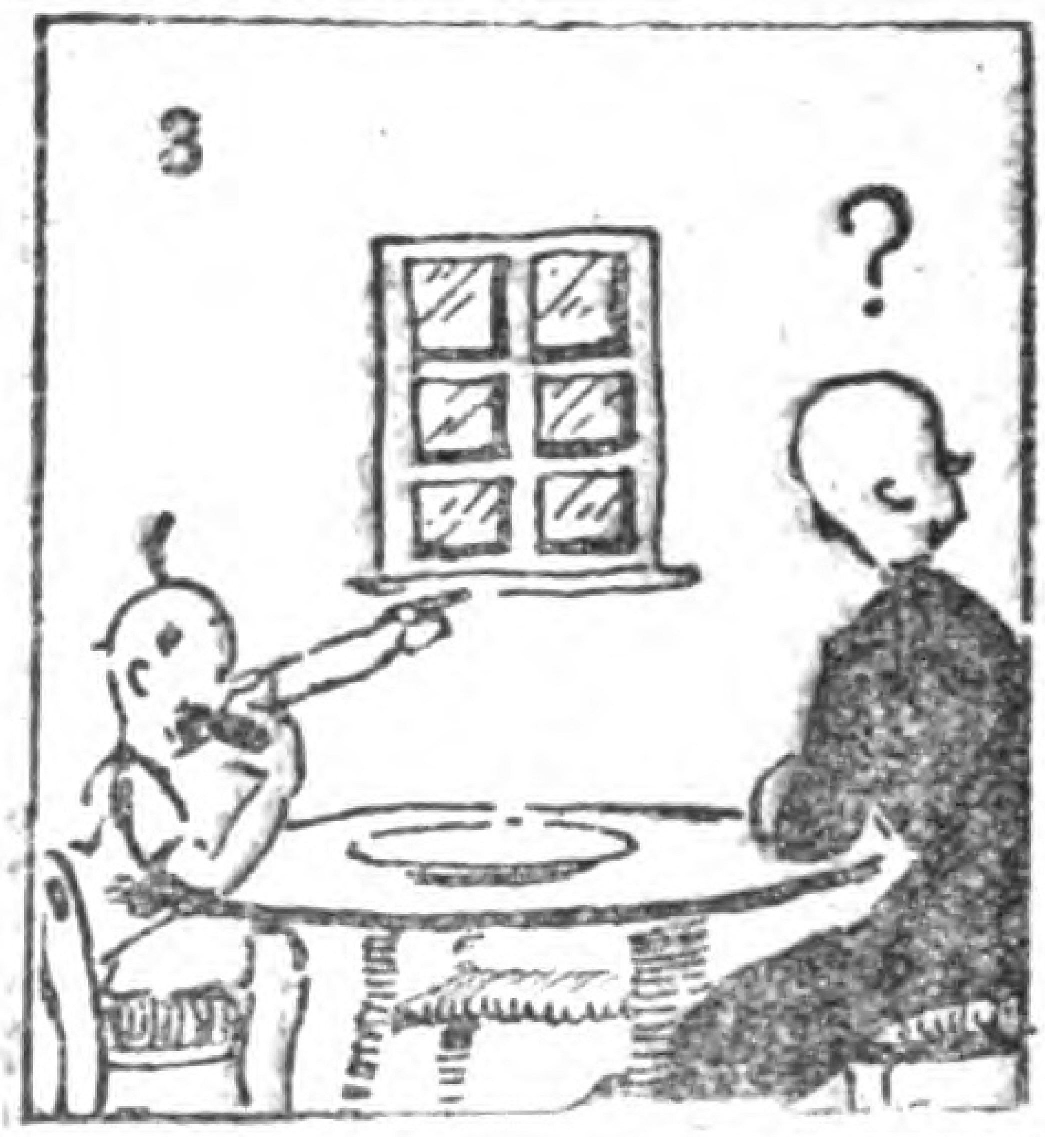
(4)兩人『もうたーくさん』



(1)ドン吉、トン子『勉強が済んでお八つだ。嬉しいな』



(2)両人『一つ残つたな。ハテ、どうしてくれよう』



(3)トン子『あらッ、兄さん、飛行機ッ』



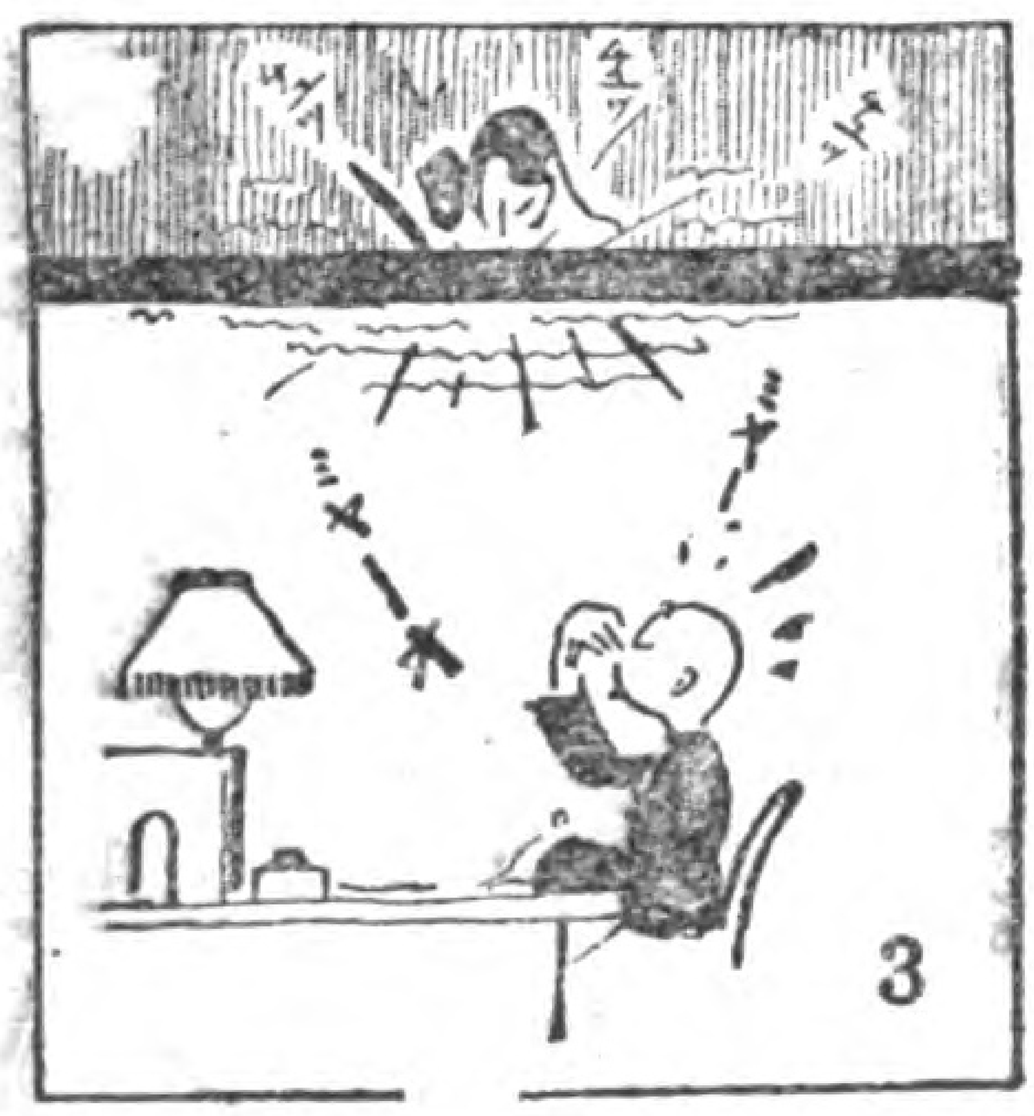
(4)ドン吉『やいッ、こん畜生奴ッ』



(1)ドン吉『エートト、一里十八町加へる二里二十九町加へる……難かしい算術だな』



(2)『煩い鼠だ。勉強なんて出来やしない』



(3)『猫の真似をしてやれ』



(4)『まだ逃げないか、えゝ面倒だ得意の手裏剣ッ』
これぢや明日の試験も覚束ない。

諧謔小説

新家庭双六

佐々木邦
田中比左良 畫



初客

『私、恥かしくて出られませんわ。』

と徳子さんが嬌姿を作つた。團扇で顔を隠して、身體を曲つて。

『何あに、構ふものか。』

と里見君は籐椅子に倚つて意氣軒昂としてゐる。夏夕の縁先、電燈の灯がお嫁さんの新しい調度を照らして明るい。

『でも。』

と徳子さんが口ごもる。

『お祝ひに托けてお前を見に來るんだもの。』

『ですから、私……』

『そんな氣の弱いことを言つちや交際が出來ないよ。』

と里見君は本氣になつて勸めた。

『それぢや私、眞の顔出し丈けよ。』

『それで澤山だ。』

『お辭儀をしてお茶を差上げて引つ込みますわ。』

『結構だよ。』

『何人いらつしやいますの？』

『さあ。課全體だと二十人から來る。』

『あらまあ！』

『冗談だよ。しかし五六人は來るかも知れない。』

『困りますわ。』

『何故？』

『お座蒲團が足りませんもの。』

と徳子さんは客間の方へ目をくれた。新家庭の座蒲團は五枚に定つてゐる。

『安心しなさい。實は精々二人だよ。』

『まあ、段々と懸値がございますのね。』

『代表者が來るんだもの。』

『お二人なら椅子にしても間に合ひますわ。』
『西洋間を使ふか？』
と里見君が笑つた。座蒲團を使ふ時は日本間だ。三つの籐椅子で事足りる時は西洋間だ。八疊の客間が和洋兩式活用自在になる。それに晩は寢室の役を勤めるから、一疊二間についても決して高いことはない。
『二人つて何んなお方？』
『一人は相良君さ。』
『もうお一人は？』
『吉田君だらう。』
『相良さんて新婚旅行で肺炎をおやりになつたお方ね？』
と德子さんは妙なことから相良さんを覺えてゐる。
『然うさ。頓狂ものだけれど、話の面白い男だよ。』
『吉田さんは？』
『これも能く喋る。要するに口の惡いのが代表者になつて譯ひ半分にやつて來るんだから、うつかり出來ないよ。』
『厭でございますわね。』



『何あに。』
と里見君は確信がある。口も八丁、手も八丁、同僚中の評判ものだ。
『何時頃いらつしやいますの？』
『九時と言つたよ。時間勵行だよつて斷つてゐた。』
『精々お支度をして置きますわ。』
『綺麗にしてゐて吃驚させてやりなさい。』
『そんなお支度ぢやありませんよ。』
『しかしお前を見に來るんだからね。』
『そんなこと何うですか分るもんですか。』
『いや、現に俺も相良君や吉田君の時見に行つたんだもの。』
『厭な人！』
『お嫁さんてものは兎角興味を惹くよ。近所からも覗きに來るだらう？』
『えゝ、私、困りますのよ。』
『ハツハヽヽヽ。』
『御近所ばかりぢやございませんわ。御用聞の小僧さん達まで婆やぢや承知しませんの。』
『評判が好いんだね。』

『オホヽ。』

『俺も皆から冷かされ通しだ。結婚すると誰でも然うだが、俺のは特別のやうだ。』

『何故でございませうね？』

『お前が綺麗だからさ。』

『まさか。』

『それに細井さんの姪だつてんで皆羨ましがるのさ。』

『まさか。』

と否定を續けたものゝ、徳子さんは器量に關する確信と重役の姪といふ意識が常にある。

『口うるさいものさ。中には眞面目になつて忠告を試みた人もあるよ。』

『何て？』

『そんなものを貰ふと、折角出世しても自分の手柄にならないつて。』

『何方？ それは。』

『庄司つて獨身者さ。』



『厭な人ね。』

『しかし結局贊成したよ。』

『明日お出になさると宜いわね。』

『何故？』

『私、睨むで上げますわ。』

『今度つれて來るよ。』

『何んなお方？』

『風采は好くない。この間見合をして斷られたらしい。』

『好い氣味だわ。』

『妙に主義主張のある男だから、何か詰まらない理窟を言つたんだらう。思想も少し左傾らしい。』

と里見君は新婚の御機嫌を取る爲めには親友を犧牲にし兼ねない。

專務の片岡さんは披露式の席上で無論徳子さんの父親の姓名を言ひ落さなかつたが、座に列つた連中の頭にはそれよりも細井重役の令姪といふ紹介が殘つてゐる。

『拜領物は大抵割引つきだけれど、里見君のところは特別のやうだね。』



『綺麗だよ。僕は近かつたから能く見た。』
『お互のところと違つて、おつ奉り甲斐がある。』
『然うさ。さうしてそれが精勤同樣に見做されて出世の土臺になるんだから巧く出來てゐる。』
『長く物色してゐた丈けに好いのを貰ひ當てたよ。』
『お互は早まつた。』
といふやうな次第で、里見君は判任官吏の娘を貰つたのでない。重役の令姪を拜領したことになつてゐる。他の課の連中に至つては更に極端だ。
『細井さんの姪だつてね。巧くやりやがつた。販賣課の何とかいふ男だつたか知ら?』
と里見君そのものを忘れてゐる。
さて、新家庭第一日曜の朝、徳子さんは食事が濟むと直ぐに本式のお化粧に取りかゝつた。里見君は斯ういふ場面が物珍らしい。煙草に火をつけて見物してゐる。
『九時きつかりに來るんだよ。間に合ふかい?』
とか何とか言つて、茶の間を離れたがらない。
『大丈夫よ。』
『隨分塗るんだね。』
『彼方へいらしつて頂戴よ。』
『宜いぢやないか?』
『いけませんよ。』
と徳子さんは化けるところを仔細に見られたくない。
『今のは何だい?』
『厭よ、私。』
『暑いだらう。』
と里見君は團扇を取つて煽ぎ始めた。
『婆やに見られてよ。』
『何あに。』
『私、もう少し手間を取りますから、恐れ入りますが、あなた、客間のお支度をして置いて下さらない?』
と徳子さんは賢い。もう悃願的に命令することを覺えて了つた。

里見君は立つて行つたが間もなく、
『西洋間にしようか？』
と訊きに來た。
『然うして戴きますわ。』
と徳子さんは姿見の中から答へた。
『事によると、三四人來るかも知れないよ。矢つ張り日本間にしよう。』
と里見君は又相談に來る。兎角茶の間へ引きつけられる。
『然うして戴きますわ。』
と徳子さんは今し引き眉に全精神を罩めてゐる。
『もうそれでお仕舞ひかい？』
『えゝ。』
『綺麗になつたよ。』
と里見君が背後から鏡の中を覗き込むでゐるところへ、
『旦那樣。』
といふ胴間聲がかゝつた。婆やだ。
『郵便が參りました。』
『……』
『あゝ、然うか。』
と里見君、少し具合が惡かつた。
客間の支度と新婦のお化粧が出來上つてから待つこと少時、

その間に、
『あなた。』
『何だい？』
『私、直ぐ出ますの？』



『さあ。』
『早過ぎても變でせう？』
『然うだね。』
『ですからお茶は婆やに出して貰つてずつと後からにしますわ。』
『しかし餘り晩くても變だから、俺が呼ぶよ。徳子、お出つて。』
『尙ほいけませんわ改まつてしまつて。』
『それぢや好い加減の時を見計らつて出て來るさ。』
『矢つ張り然う致しませうかね？』
『他に仕樣があるまい。』
『あなた。』
『何だい？』

『丁度好い頃合に何か合圖をして戴けませんでせうか？』
『然うさね。咳拂ひをしようか？』
『えゝ。』
『俺が咳拂ひをするよ。それを合圖に出てお出。』
『然う致しませう。私、お茶の間で待つてゐますわ。』
と二人の間に打ち合せがあつた。
それは然うと、客人はナカナカ見えなかつた。
『何うしたんだらう？　當てにならない時間勵行だ。』
と里見君は落ちつかない。
『もうソロ〳〵十時よ。』
と徳子さんも腕時計を眺めてゐる。
『人間は何うでも宜いんだけれど、日用品を持つて來るんだからね。』
『まあ、慾張つてゐますのね。』
『買はないで待つてゐるんだもの。』
と二度目門まで偵察に行つた里見君は、
『來た〳〵、相良君と吉田君だ。』
と慌てゝ斷け込むだ。續いて、
『御免。』



と案内を請ふ聲。
『さあ、何うぞ。』
と里見君は姿を見られてゐるので自ら出迎へた。
客間へ納まると、相良君は威儀を正して、
『毎日顔を合せてゐるけれど、吉例によつて一寸改まるぜ。今回はお芽出度う。一同から宜しく。』
とお辭儀をした。
『態〻恐れ入ります。』
『これは例のものだよ。君は値段まで知つてゐるだらう。』
と吉田君は早速大きな風呂敷包を解いて、桐箱入りの置時計を無造作に取り出した。
『何うも有難う。重かつたらう？』
と里見君は相良君の時にも吉田君の時にも代表役を承はつて同じ品物を持つて行つたから目方まで知つてゐる。
『停留場からこゝまで美人持ちさ。』
『相變らずやつてゐるんだね。』
『ところが一向目ぼしいのに行き會はないものだから、悉皆相良君に徳をされてしまつた。腕が痛くなつたよ。』
『目先の利かない男さ。こゝへ來て下してこそ初めて美人持ち

といふものだらう？ ねえ、里見君。』
と相良君は巧い。
『何うだかね。』
と里見君は濁したが、肚の中は異存なかつた。
『それからそれが一味徒黨の連判狀だ。』
と吉田君は目錄を擴げた。
『有難う。斯うやつて貰つて見ると矢つ張り好いものだね。』
『こゝに鍵が入つてゐる。二週間に一度捲きさへすれば止まりつこない。君も知つてゐる通り機械は充分吟味してある。これが時計屋の請合證さ。』
『種々あるんだね。』
『今この時計の如く御夫婦の愛情に休みや狂ひのないやうにといふ一同の微衷さ。』
『重々有難う。』
と里見君は再び改まつた。
『大に能書を述べ立てるね。兎に角、この鶴龜よりは眞情が罩つてゐる。』
と相良君が床の間を顧みた。重役一同から贈つた置物が置いてある。

『君、これは僕達が貰つたのと違つてゐるやうだぜ。』
と吉田君は氣がついた。
『然うかい？』
『特製らしい。』



『成程。何うも心持大きいと思つたよ。』
と相良君は床の間へ這ひ寄つて品物を持つて見て、
『これは重い。銀だよ。厭になつちまふなあ。覿面に待遇が違ふんだもの。』
『これからは萬事この通りだらう。里見君、將來宜しく頼むぜ。』
と吉田君は大形に這ひつくばつて見せた。
そこへ襖が開いた。二人は慌てゝ居住ひを直したが、それは期待してゐた新婦でなくて、婆やがお茶を薦めに來たのだつた。里見君はその引つ込みを機會に厄拂ひをしようと思つたけれど、
『君。』
と相良君に遮られた。
『何だい？』
『未だ處分しなかつたのかい？』

『嫌やかい？』

『然うさ。』

『何うも然う現金には行かない。何れその中さ。』

『しかし邪魔だらう？』

『うむ。』

と里見君は首を縮めて迷惑の程を示した。

『僕は入り代りに追つ拂つてしまつた。』

『何と言つて？』

『いや、都合の好いことに縁談が纏まると早々、先方から氣を利かして進退伺ひを提出したんだよ。』

『成程。』

『しかし僕だつて人情はあらあ。一寸色をつけたよ。』

『何ういふ具合に？』

『新婚旅行中留守番をして貰つて暇を出したのさ。』

『驚いたね。』

『ハツヽヽヽ。』

『僕のところのは元來氣の利かない女だから困る。折を見てパツサリとやる外仕方あるまい。』

『斯ういふ連中にかゝつちや奉公人もやり切れない。狡兎死して良狗煮らる。世の中はそんなものかね。』

と吉田君が慨歎した。

『そんなものだとも。お互だつて用がなくなつて見給へ。直ぐに首だよ。』

『成程。然ういへば此方の身の上か？　おや／＼。』

『それだから遠慮なんか些つとも要らないよ。里見君、早い方が宜いぜ。當然のことを延して置くと先方に口實を與へるばかりだ。』

と相良君は單純な親切者だ。何でも自分のした通りをすれば他も幸福になると信じてゐる。

『何とかしよう。』

『そんな煮え切らないことぢや駄目だよ。』

『早速やるよ。置けば若いのだ。』

『それも子供が出來てからの話さ。新家庭に第三者は油の中に水が交つたやうなもので親だつて感心しない。』

『極端だね、君は。絶對的に別居説かい？』

と里見君は然るべく扱ふことに努めた。

『理窟も何もないが、結局そこへ歸着する。現に僕の親戚に適切な實例があるよ。娘を手放すまいと思つて婿を貰つたんだが、何うも年寄が邪魔になるやうで氣の毒だと言つて、却つて



兩親の方から別居を申出たのさ。』
『ナカ〳〵話せるんだね。』
『精神は大に現代的さ。しかしそれが滑稽なんだよ。』
『何うして？』
『父親といふのが若い時分から溜め込み一方さ。金が大切だものだから、夜半に目が覺めると必ず咳拂ひをする。』
『それは又何ういふ次第だい？』
『泥棒の用心さ。始終起きてゐるやうに見せかけたいんだね。それだから夜半に目が覺めると序をもつて頻りに咳拂ひをする。金を溜めるくらゐの人は有らゆる機會を活用するよ。それが長年の事で、習ひ性となつて居るから今更改まらない。』
『成程。』
『ところが娘に婿を貰つて見ると、この咳拂ひが毎晩氣の毒で仕方がない。』
『大きにね。ハツハ、ハ、。』
『母親も氣をつけるやうにと諫めるけれど、今言ふ通り三十何年間の習慣だ。つい出てしまふ。それも元來泥棒を威嚇する爲に修業したんだから、或は警むるが如く或は諷するが如く或は罵るが如く家中へ響き渡る。エヘン、ン！とまあこんな調子さ。』
と相良君が見本を示した刹那、襖がスーツと開いて徳子さんが眞赤になつて現れた。里見君は、



『おや。』
と思つたが、直ぐにそれと氣がついて、
『妻です。この方は相良さん。此方は吉田さん。始終お世話になつてゐるんだよ。』
と丁度好い幸ひに紹介した。
『私達こそ。』
と二人はかしこまつた。
『これを戴いたよ。課の皆さんからだ。』
と里見君は時計を見せた。
『結構なものを恐れ入りました。』
と徳子さんは漸く口をきいて又お辭儀をした。
『少し話しなさい。』
『はあ。』
『何れ妻を伺はせますから宜しく。』
と相良君が言つた。
『何うぞ。』
『私達は悪友ですから、宜しく御監督を願ひます。』
と吉田君は冗談を試みた。
『この二人に川上君と庄司君さ、四人組といつて有名なもの

だよ。』
と里見君も調子を合せた。
『奥さん、實は五人組ですよ、里見さんが大親分です。』
『まあ。』
と徳子さんが僅かに答へた丈けで、少時沈默が續いた。
『ところで里見君、今の咳拂ひの話だがね。』
と相良君は長く口を噤むでゐられない。
『もう分つたよ、君。』
と里見君は笑ひ出した。
『老人、目が覺めると必ずヱヘヘン！』
と相良君は今しがた馬鹿聲を出した辯解の意味もあつた。
『ハツハヽヽヽ。』
『よせよ。馬鹿々々しい。』
と吉田君が制した。
『お賑かでございますこと。』
と婆やは評判が悪いのも知らずに冷紅茶を持つて入つて來た。徳子さんはそれを薦めるとソコ〳〵に引き退つた。

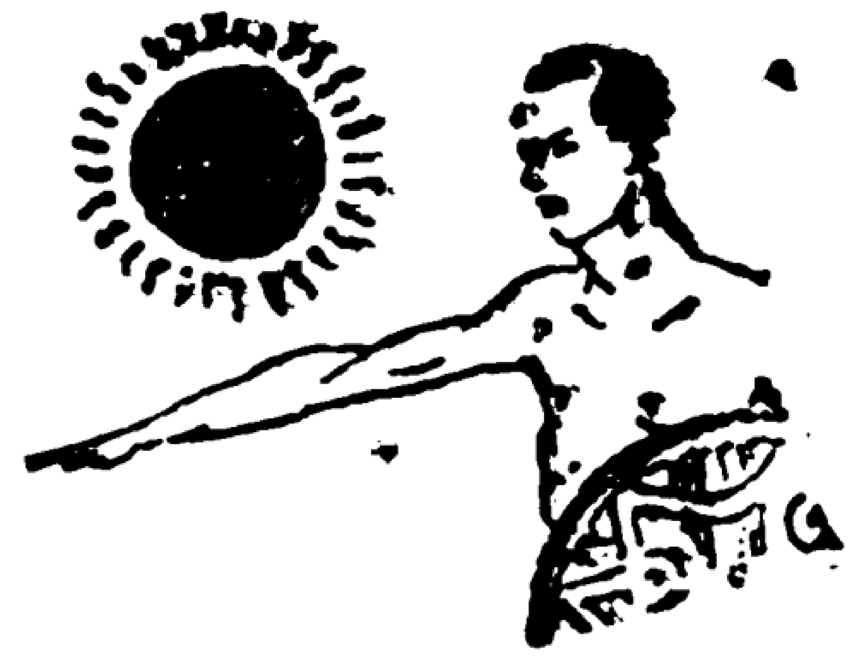
（つゞく）



寓話

顔が無くなつた話

或る愚痴な女がありました、或る朝鏡を見ますと、自分の顔が映らぬ、女は吃驚して、夫のところへ飛んで行きました、
『まあ、大變なことが出來ました、妾の顔が無くなりました』
『何をいふか、馬鹿な』
夫は相手にしません、
『貴方はひどい人です、無情な人です、妾の顔が無くなつてゐるのに。あゝ妾はどうしよう』
身もだえして歎きました。夫はいよいよ呆れて鏡を持つて來て見せました
『映らぬのは裏の方だからだよ、お前の顔がなくなつたわけでもないのだ表の方で映して見るがよい、ホラこの通り、ちやんと映るではないか』
『まあ口惜しい』
女は一層金切聲をあげました、
『あなたは鏡の中に他の女を隠してゐる！』
愚痴な人間は手がつけられないものであります。



現金の受授

第五高等學校教授 八波則吉

こゝは大阪三井銀行支店、出納係の窓口である。年の頃四十五六の正直さうな男が息急き切つて、

『もし、私はM商店の主人ですが、先刻店の者が戴いて歸つた爲替金が間違つてゐました。』

と言つて、財布から一束の紙幣を出した。出納係が調べて見ると、百圓札を十枚束ねた千圓の紙幣で、慥かに先刻渡した物に相違ない。

『どう間違つてゐましたか。』

『九百圓多過ぎます。』

『えツ。』

出納係の眼は點背になつた。

『百圓戴けば好いのに、それは千圓です。』

出納係は書類を調べて、

『成程、これは有難うございました。全く私の勘違ひで、誠にどうも有難うございました。』



と、何度も何度も禮を述べて、紙幣の束から一枚拔いてお客へ渡し、殘りの九枚を收めようとした。

此の時、

『一寸お待ち下さい。』

と言つて、つか／＼と窓口へ近寄つた人がある。見れば支店長の米山梅吉氏である。

米山氏はお客に對して、

『御親切の段は忝う存じます。しかし當銀行に於ては、決して左樣な誤算は致しません。萬々一誤算がありましたに致しましても、現金の受授は其の場限りといふことに堅く御約束申してゐます以上

は、是非これが御實行をお願ひ申します。』

斯う言つて、今しも出納係が小筥の内へ收めようとした紙幣の束を、其の儘取つて差出した。

商人は呆氣に取られて、

『でも、現に間違つてゐます以上は……』

『いや、間違があつたとなつては、當銀行の信用に關します。どうか御納め下さいませ。』

『それは困りましたね……』

と、如何にも困つたらしい。

『でないと、當行の方が非常に困りますので……』

と、無理に紙幣の束をお客の手へ渡した。

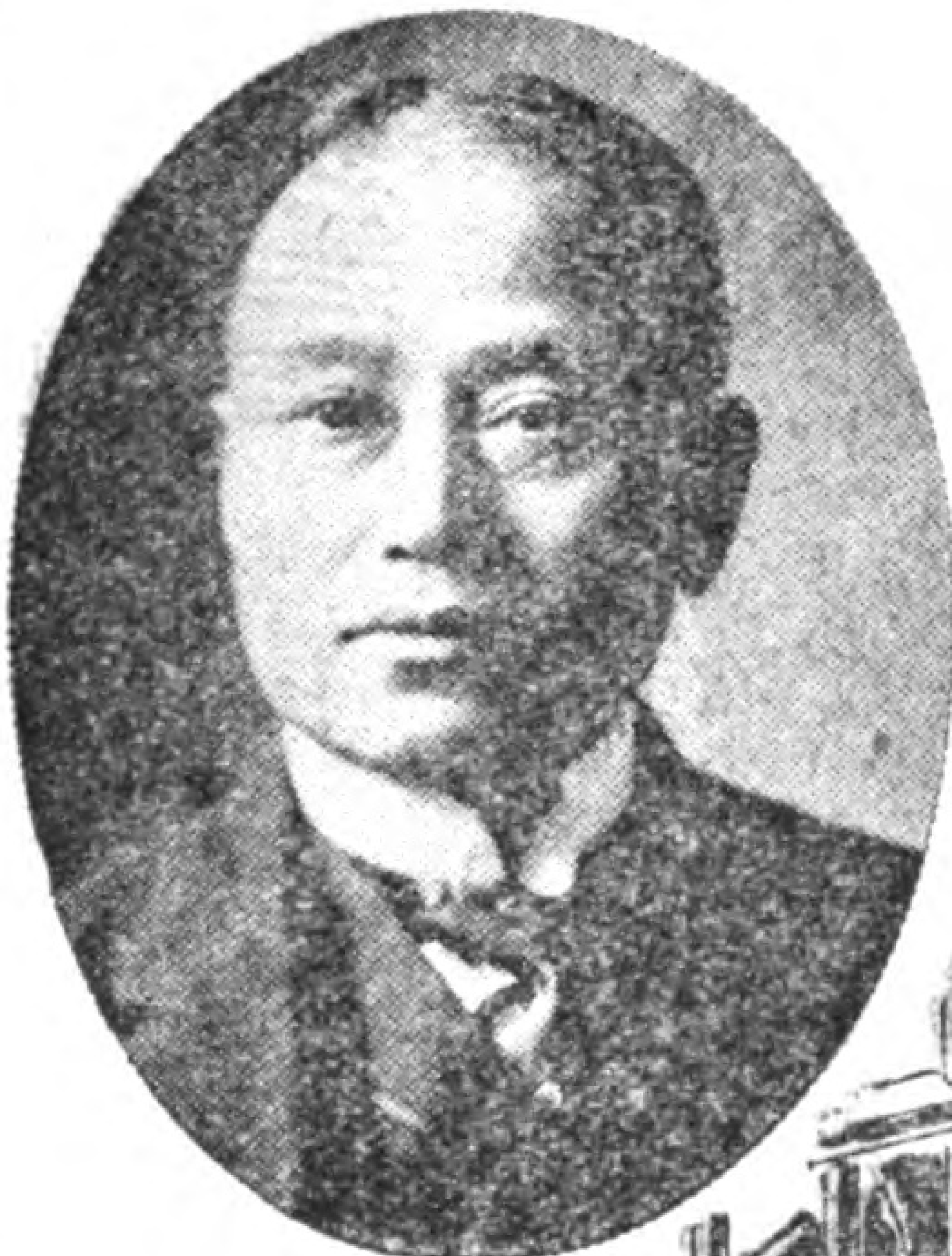
之を見たものは、誠に君子の爭と思つた。

聞けば、米山支店長は、自分のポケットマネーを出して九百圓の缺損を補つたといふことである。

此の事が本店へ知れた。

『米山は偉い！』

氏の出世は、こゝに其の緒を摑んだのである。



寫眞は米山梅吉氏



縮尻話

岡崎右岳

中學卒業後、一時小學校の代敎をやつてをつた時の話である。或日の書方の時間に、私は障子を明けて外を眺めてゐた。すると兒童はこれをよいことにして、がや〳〵と騷ぎ出した。丁度その時私は屁を催してゐたので一策を案じ、放屁と、障子を締める音と、『やかましいッ』の大喝と、此の三つを同時にやつて全兒童をにらみつけたものだ。ところが放屁の力が少し後れたためスッカリ計畫齟齬。惡事忽ち暴露し、私のにらみの一角先づ自ら崩れ、はては兒童諸共大笑となつた。私は此の大縮尻を今でも時々想ひ出して噴飯に堪へないのである。



お伽 三つのお人形（にんぎやう）

小川未明

須藤しげる畫

一

外國人が、人形屋へはいつて、三つ並んでゐた人形を、一つ、一つ手にとつて眺めてゐました。どれも、同じ人形師の手で作られた魂のはいつてゐる美しい女の人形でした。一つは、坐つてゐましたし、一つは立つてゐました。そして、もう一つは、手をあげて踊つてゐたのであります。

どれを買つたらいゝだらうかと、その外國人は、ためらつてゐましたが、しまひに、つゝましやかに坐つてゐるのを買ふことにしました。それを箱にいれてもらふと、大事さうにして、店から出て行つてしまひました。

殘つた、二つの人形は、互に顔を見合せました。そして、傍に、誰もゐなくなると、お話をはじめたのです。

『とう／＼、あの方は、行つてしまひましたね』

『妾達は、いつまでもいつしよにゐたいと思ひましたが駄目でした。この次には、誰が先にお別れしなければならんでせうか……』

二つの人形は、心細さうに言ひました。しかし、かうなることは分つてゐたのです。美しい、三つの人形が、はじめて、この賑やかな街の店さきにかざられた時、通る人々は、男も、女もみんな振り向いて行きました。綺麗なお嬢さんや、奥様達までが、うつとりと見とれて行きました。人形は、世の中に、自分達程、美しいものはないと思ふと鼻が高かつたのです。そして、誰でもが、にこやかな顔附で、やさしい眼をして自分達を眺めますので、どこへ行つても可愛がられるものと考へました。

『どんな人に、妾は、つれられて行きますかしらん』と、三つの人形は、口々に言つて、行末のことを空想しますと、何とな

く、この世の中が、明るく、かぎりなく楽しいところに思はれたのでした。

『どこへ行つても、お互の身の上を知らせ合つて、おたよりをしませうね』と、お人形達は、言つたのでした。いま、二つになりました。

『あの方は、外國へつれられて行くのでせうか』と、踊りながら、一つの人形は、立つてゐる人形に言ひました。



『さうかも知れません。妾は、外國へなど、行きたくないものです。けれど、あの方は、おとなしいから、どこへ行つても可愛がられると思ひます』

こんなことを話してゐると、不意に、店さきへ、娘さんが立ちました。そして、ぢつとふたりを眺めてゐました。お人形は、急に、口をつぐんでしまひました。

娘さんは、内へはいつて、立つてゐる人形を指して、見せてくれいと言ひました。それから、これを手に取つてよく見てゐたが、

『これを下さいな』と、言つた。

かうして、二つの人形は、つひに買はれて行つてしまひまし

た。そして、あとには、踊つてゐる人形が、たゞ一つだけ殘つたのでありまず。三つの人形は、かうして別々になつてしまつたので、もはや、お話をすることもできなくなりました。

『私達の親しかつたお友達は、何うなつたであらう……』と、三つのお人形は、互に、胸のうちで思ふより他なかつたのです。

二

夜になると、街燈が、店さきでともりました。その光りは、ちやうど踊つてゐる人形のところへとゞきました。

『おや、あなたおひとりになつたのですか。あの方は、どこへ行かれました』と、光りは、たづねた。

『ひとりは、外國人に、ひとりは、どこかの娘さんにつれられて行きました。妾は、ふたりの方のおたよりを知りたいと思ふのですが、あなたはお分りになりませんか？』と、人形は、言ひました。

圓い頭をした、背の高い街燈は、ため息をついて、



『いくら、私が背が高くても、なんで、おふたりの行衛が分りませう？ もし、もし、待つて下さい。毎晩、蛾がやつて來ますから、知つてゐるか聞いて見てあげませう』と、答へました。

踊つてゐる人形は、何分にもよろしくと言つて頼みました。

夜になると、街の中は、一層、にぎやかになりました。樂器の音が流れたり、草花屋が出たりしました。ちやうど、その時、どこからか、街燈の光りを慕つて蛾が飛んで來ました。光りは人形と約束をしたことを思ひ出して、二つの人形について、何にか知らないかとたづねたのです。

『お人形ですつて？ 蛾がなんで、そんなものを注意しませう。私の好きなのは、花とあなたばかしです。蛾は、花をたづねて歩き、夜は、かうして光りを慕つて飛んで來ます。短い私達の一生は、この世の中で一番美しいものを見ることです』と、蛾は、言ひました。

あくる日の晩、街燈は、このことを踊つてゐる人形に話しました。これを聞くと人形は、がつかりしました。それは、ふたりの友達の消息が分らないといふことよ

りも、世の中で一番美しいのは、花と光りであると蛾が言つたといふなら、自分は、全く無視されたためです。
『さう、力を落したものではありません。もう、しばらく、あなたがここにおいでなさるなら、誰か、他のものにも聞いて見てあげますよ』と、街燈は、なぐさめたのであります。
二三日經つてから、あたりのまぶしい晝間のこと、燕が、ちやうど頭の上へ飛んで來ました。
『もし、もし、燕さん、少しおたづねしたいことがあるのですが……』と、街燈は、呼びとめたのです。すると、燕は、家根の廂にとまりました。
『何のご用ですか？』と、言つて、燕は、首をかしげて、街燈を見ました。
『こゝから、あの店さきに飾つてある、踊つてゐる人形が見えるでせう……』
燕の眼は、よかつたから、すぐに分りました。
『よく見えます。あの小さな棚には、たつた一つしかありませんね』



『三つあつたのですが、ついこの頃、二つ賣れてしまつたのですよ。三つのお人形は、同じ人の手で作られたので、それは仲がよかつたのです。それで、一つになつてしまつて、あのお人形はさびしがつてゐます』
『それは、無理もないことです』と、燕も、同情しました。
『そんな譯で、二つのお友達は、どこへ行つたかと思ひ暮らしてゐるのですが、あなたは、身輕に方方をお歩きなさいますがお知りにはなりませんか……』と、街燈は、言ひました。
『いくら、私が、身輕に方々を飛び廻るからといつて、どうして、家の内のことまでが分りませう……それは、無理といふものですよ』
『一つの坐つてゐるお人形は、外國人が買つて行つたといふのですが』
『外國人ですつて……さういへば、私は、人形を澤山集めてゐる外國人を知つてゐます。その人は、こゝから七八里離れた、海岸に住んでゐました。家族といつては、他に年とつた、



雇ひのお婆さんがゐるばかり、廣い庭には、いつぱい草花を植ゑて、これを愛してゐました。また、晩方になると、その人は、海のほとりに立つてあちらを眺めて、ふる郷のことを思ひ出してゐました。ある日、私が、人のゐない時分に、窓からのぞくといろ〳〵のお人形が、棚の上に飾られてありましたが、それ等のお人形達は、近々に、主人が外國へ歸るさうだが、多分、その時つれて行かれるだらうといふことを話してゐました。知らない國へ行くのを面白がつてゐる者もありましたが、また、行つたら、もう二度とこちらへは歸られないといつて悲しんでゐる者もありました。……もし、あの中に、そのお友達がゐられたなら、恐らく、もう消息は聞かれますまい。なぜなら、二度目に、私が、その家の窓を覗いた時には、すつかりお人形は、荷造りされてゐた樣子でしたから……』

燕は、かう物語つたのであります。街燈は夜になつた時に、二たび、このことを踊つてゐる人形に話しました。

『あの人形は、どこへ行つても可愛がられるでせう』と、人形は沈み勝に、踊りながら言ひました。

三

それから、間もない、ある日のことでした。醉ぱらひの紳士が、人形屋の店さきへはいつて來て、いろ〳〵の人形を出させて見てゐましたが、どれも氣にいりませんでした。そのうち、踊つてゐる人形に眼をつけると、早速、手に取りあげて、『これがいゝ』と、言つて、金を拂ひ、例のごとく箱にいれてもらつて持つて行きました。その晩、街燈は、店さきを照らして、びつくりしました。踊つてゐる人形の姿が見えなかつたからです。

『とう〳〵あのお人形さんも、どこかへ行つてしまつた』と、街燈は、ひとりごとをしました。

醉ぱらひの紳士に、つれられて行つた人形は、氣が氣でなかつた。自分は、どんなところへつれられて行くのだらう？　かう、暗い箱の中で考へてゐました。

紳士は、電車に乘ると、うと〳〵居眠りをしました。そして、ふと氣がつくと、乘り越してゐましたので、びつくりして飛び降りました。家へ歸るまで、人形をどこかへ忘れて來たことに氣づかなかつたのであります。

不幸な、この人形は、それからいろ〳〵の目に遇ひましたが、その年の夏の末の時分に他の古道具などといつ

しよに、露店にさらされてゐました。

『落ぶれても踊つてゐるなんて、のんきなものですね』と、こちらの隅で、硯と筆立が、あちらの人形を見て冷笑してゐました。



しかし、露店の主人は、人形を大事にしました。車に乗せて、はこぶ時分にも、手や、足をいためはしないかと新聞紙で卷いて、できるだけの注意をしたのです。

『美しいものは、ちがつたものだ』と、他の古道具達は、自分等が、そのやうに可愛がられないので、不平を洩らしたものもあります。しかし、人形は、昔のことを思ひ出すたびに、お友達は、いま頃は、それぞれ落付いて、平和に暮らしてゐるであらう。自分ばかりは、いまだに身の上が定まらぬのを悲しく思ひました。ある日のことです。いつもの如く、露店にならべられると、傍に、新しくどこからか賣られて來た、電氣スタンドがありました。

『私は、今日、こゝへお仲間入りに來たのですが、あなたと姉妹のやうに似てゐるお人形さんといまゝで、一つの家で暮らしてゐましたよ』と、スタンドはつくづくと踊つてゐる人形を見ながら言ひました。

『どんな樣子の人形ですか？』と、つい踊つてゐる人形は、スタンドの話に、釣りこまれて答へたのでした。なぜなら、自分の

知りたいと思つてゐる友の身の上のやうな氣がしたからです。

『ちやうど、あなたと同じ位の形をして、すらりとすまして立つてゐるお人形でした』

『それなら妾と仲のいいお友達ですよ。妾は、どれ程、その方の身の上を知りたいと思ひましたか、どうか、妾に、くはしくお話を聞かして下さいませんか』と、頼みました。

電氣スタンドは、次のやうに物語つたのであります。

『いまゝで、私がゐた家のお孃さんが、ある日、街から、美しい、立姿のお人形を買つて歸りました。すると、家中の人達は、まあ綺麗なお人形だといつて、棚の上へ飾りました。そして、それまで、棚の上に載せてあつた、古い鼓や、また汚れたおもちやなどは、新しく來たお人形に、蹴落されたやうに、棚から取りのぞかれてしまつて、立姿の美しいお人形だけが、ひとり、そこを占領したのであります。すると、いまゝで、棚の上にあつた、鼓や、おもちやは、不平を言ひました。あのお人形が來たばかりに、私達は、棚の上からおろされて、箱の中へおしこめられてしまつた。ほんたうに、にくいお人形だと言つたのでした。耳のとれた、馬のおもちやは、口の缺けた鼓に、さう不平を言ふものでありません。いつか、あのお人形も私達のやうになる時がありますよと、いつてなぐさめたのでした。それは、全くお馬の言つた通りでした。ある朝、お孃さんは、掃除をしようとして、はたきで、あやまつてお人形を落しました。そのはずみに、お人形の片手がもげてしまつた。お孃さんは、びつくりして早速、糊で、とれた手を附けました。けれどどうしても傷跡はとれませんでした。このお人形が、かうして不具になると、箱の中へいれられた、口の缺けた鼓や、耳のとれたお馬や、他のおもちや達は、また取り出されて、棚の上へ並べられたのでした。それは、もはや獨り、このお人形だけが完全だとは、言はれなかつたからです。それで、今は、お人形も他のおもちや達も、平等のもてなしを受けて、みんなは、仲よく、平和に暮らしてゐます……』と、話したのであります。

飾つてゐる人形は、かうして、二人の友達の消息を知ることができました。一つは、外國へ行き、一つはお孃さんの家に、暮らしてゐることが分つた。けれど、自分の消息は、どうしたら、あのふたりの人形に知らせることができませう?

『もし、お友達は、妾が、まだかうして街の露店にさらされてゐると知つたら、不幸な方だといつて、憐れんで下さるにちがひない』と、飾つてゐる人形は、言ひました。

『いえ、さうでありません。きつと、ふたりのお友達は、いま頃は、感心して、この明るい賑かな街をもう一度見たいと思つてゐなさるでせう。そして、あなたの身の上を羨ましがつてゐなさるにちがひありません』と、電氣スタンドは、言ひました。なぜなら、ひとのことゝいふものは、なんでもよく見えるものですから。………毎晩、大空に照らす月だけは、みんなの運命を知つてゐました。そして、ある晩であつたが、あの街頭にも、飾つてゐる人形のことを話したのです。(をはり)

當世詩人氣質

一妙女史

北原白秋氏

詩壇の大家北原白秋氏は、また斗酒猶辭せずといふ豪酒家として有名である。ある日、お弟子達と共に某旗亭で酒宴をひらき、例ものやうに高吟しつゝ盃の數限りなく重ね、無禮講に醉つぱらつた。さて酒宴も了り、先生はお弟子の肩



につかまつて階段を降り、玄關で靴を履くとき、お弟子が先生の靴の紐を結ばうとすると、今の今まで、殆ど正體もないほど醉つてゐたと見えた白秋氏は、率然として謹嚴に云つた。「日本語で詩を書く君達に、靴の紐を結ばせるといふやうな、そんな失敬なことは僕は斷じてしない！」

野口雨情氏

民謠の泰斗野口雨情氏は、誰に對しても腰の低い謙遜な人で、挨拶が極く叮嚀なのには若い詩人など、先生のお宅を訪問したとき、却つて恐縮して了ふさうだ。

その野口先生が最近、自宅の庭の一隅に離室を新築された。ところが、その離室の天井の低いところは、恰かも先生のお腰の如く、そこへ這入つた者は誰でも腰を屈めて這入らなければならない。そこで先生が叮嚀なお言葉で、

「やつと私の心に適つた部屋が出來ました。失禮で御座いますが……」と仰言る。そして、そこへ卓臺がはこび出される。その卓臺がまた別誂らへで、脚の高さが一寸足らず。卓臺ばかりでなく、德利から盃からお皿まで、みんな他家では見られない低いも



のばかり。そこで靜かに話しながら、御馳走になつてゐると、初めのうちは餘り低いものづくめで不自然な感じがしてゐたのが、だんだん自然の感情をあらはして來て、先生の謙遜な人格と、天井の低い部屋と、脚の低い道具とがよく調和してゐることに感づかずにはゐられなくなつてくる。

千家元麿氏

白樺派の詩人千家元麿氏は、向日葵が好きで、郊外のさゝやかな庭に、向日葵の種を蒔き、少しばかり芽が出かけたのを、我が子の成長を見るやうに樂しんでゐた。

ある日、遠來の客が千家氏の宅を訪づれた。恰度あいにく千家氏は不在だつた。庭を見ると、雜草



が生えしげつてゐるので、主人の歸りを待つ間に庭を綺麗にしておかうと、早速草むしりを初めた。軈て千家氏の歸つて來たとき、庭が清潔になつてゐたのはいいが愛する向日葵の芽も一つ殘らずむしりとられてゐた。千家氏は、心の中では、玩具を壞された子供のやうに悲しんだが、遠來の客の好意に對して、どうしても、それが向日葵の芽であつたといふことは、言ひ出し得なかつた。



美髯悲喜劇

新井誠夫
谷脇素文 畫

（一）髯試合

髯武者といふから髯試合といふことも云へるだらう！

當時聞こえた儒者赤松滄洲は、頷くと膝の塵を拂ふといふ素敵な髯の持主であつた、身始末に冷淡だつた儒者も髯だけは大切にして手入れを怠らない。滄洲は平常に斯う云つてゐる。

『學問は一生盡しても及ばぬが、先づ乃公の髯だけは日本一だらう。』

と、これを捻り、これを弄び、これを撫して、得意滿々たるものであつた。

と或日のこと、取次の門生は告げて、

『先生、初めて見えられた仁ですが、御講義を拜聽したいと申します、時に先生、其が實に立派な髯をたくはへた仁で……』

と、如何にも其の髯ぶりに感心した如に云つた。

さア滄洲はをさまらない、髯だけは日本一と自任しきつてゐるのだ。

『何ツ立派な髯だと、ふゝむン。』

と、其の髯を一ツしごいて、

『こゝへ通してみろ。』

と頗る悪い御機嫌で云つた。

門生は、イヤこりや拙い事を云つたとは思つたが、然し事實に於て我が先生より彼れの髯の猶立派なる事を如何せん。

『はい。』

と引退つた門生は、風雲甚だ面白からずとは思ふが、直ちに其の訪問の髯の客を、滄洲の書齋に通した。

滄洲は、汝如何で我が髯に及ぶべき……といふ息込みで、入來る其の客を見迎へた、が不可ない、思はず滄洲は呆つと其の息を彈ませた。

實以て其の客の髯の立派さ！　丈は滄洲の其れより長きこと幾寸、耳根より毛並を揃へてふつさりと豐かに光りを帶んだ美

髯、とても〱滄洲の及ぶところでなかつた、然も客は悠然と其の髯をなぶりつゝ、冷やかに笑ひを含むで、どうだ乃公の髯を見よ……と云はないばかりの態度をしながら初對面の挨拶をした。

滄洲は忽ち日本一の看板を蹴落されたわけである、講義拜聽などと申入れて、此奴實は髯の試合に乘込んで來たに相違無いと想はないではゐられなかつた。

滄洲は思はず髯を顫はして、講義も談論もあつたものではない、髯を握つて默した顔に見る〱朱をそゝいだ、客は亦眼に笑ひながら、

『先生の御講義を得たく……』

と膝頭まで垂れる髯をすくふ樣にしながら話をしかけた。がどうしたものか、いつも談論風發、議論にかけては一歩も後へ引かぬ滄洲も、何か重いものに抑へつけられたやう。やがて、この客の得意さうに述べ立てる勝手な議論を默々と聞いて居た滄洲は口惜しさうにたゞ一言、

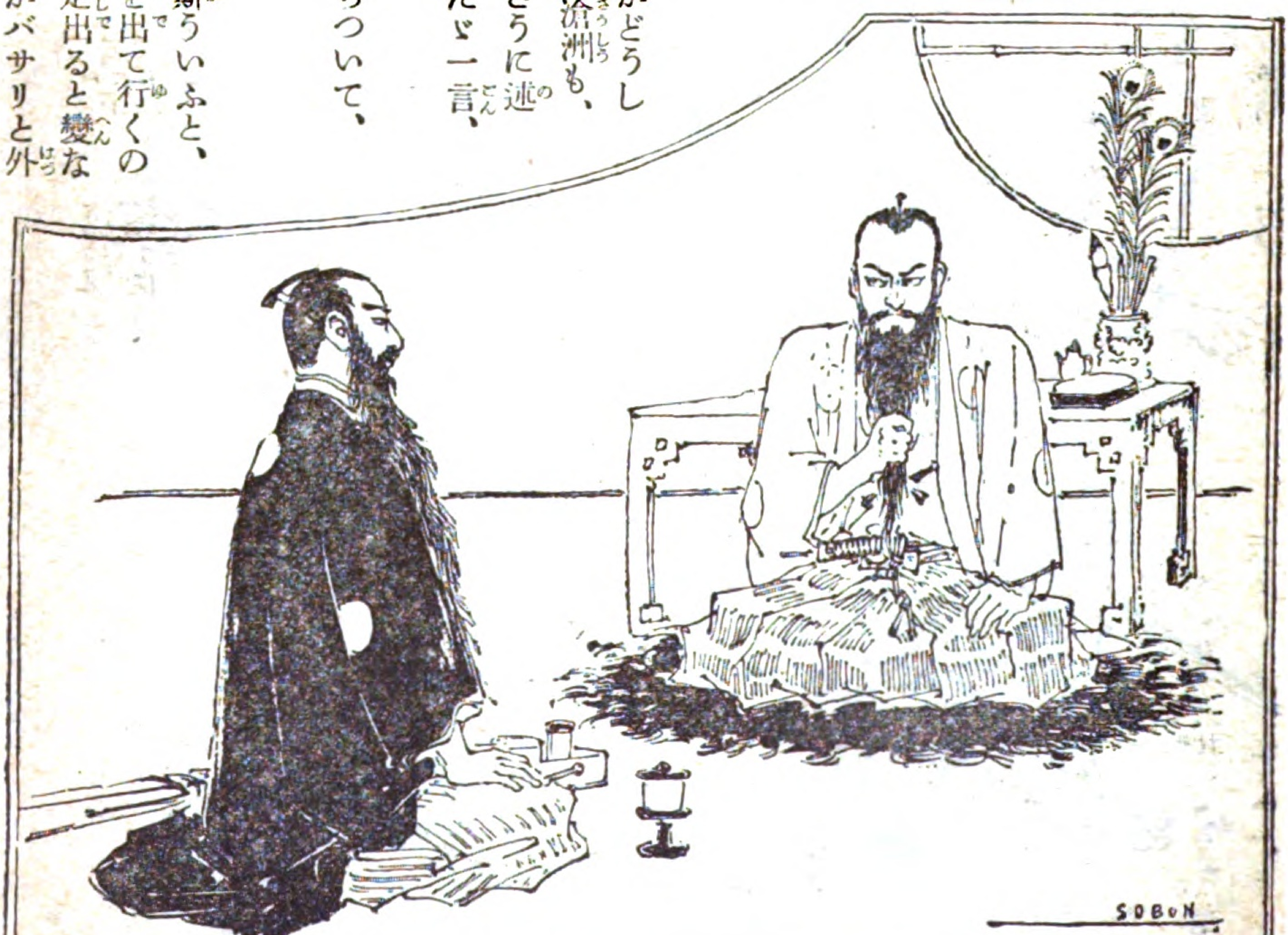
『今日はチト不快でござる。』

と髯の先を指にギユウと卷いて苦り切つて云つた、客はおちついて、

『ハヽヽヽ。』

とさらに一笑して、

『存ぜぬ事とて意無しの次第、然らば後日また參上……』と斯ういふと、會釋をして立上つた。そして玄關で辭儀をしてツカ〱と門を出て行くのを、滄洲は怨めしさうにその後姿を見送つてゐた。客は門を一足出ると變な手附で耳のあたりを弄つた、と、これはまた！ その立派な髯がバサリと外



れたのである。そして無雜作にその髯を右手につかんだまゝ、後も向かず揚々と歩いてゆく。滄洲は眼を圓くしてそれを見てゐたが、

『シッツ、彼奴一杯食はしやがつた！』

彼は切齒して玄關で地團駄をふんだ。

(二) 髯ドロ

宗祇法師は美しい髯の持主であつた、愛憎の心を去つたこの法師にも白い拂子のやうな髯だけは言ひ難い執着があつた。そして其の髯に、たしなみの香を焚いて煙りをこめ、なぶる度に其の美しい香の鼻をつくのを無上の樂しみとしてゐた。

と或時、法師が山道を通りかゝると山賊に出遇つた。

『オイ坊さん、金を出せ。』

『ホヽウ、これは泥棒さんか、よし／＼。』

と靜かに頷くと、財布を取出し逆さに振つて、

『これッきりぢや。』

と殘らず與へて、惜しいといふ顏もせず髯をなぶりながら立去らうとした、と山賊はさらに法師の髯に目をつけて、

『オイ坊さん、ついでに其の髯を置いていけ。』

宗祇もこれには吃驚した。此の世に何一つ惜しいものゝない墨染の姿にも此の髯だけはさすがに愛惜が深い。物もあらうに此の數十年來の親しい友まで奪はうとする人間の心は何といふ無慈悲なものだらう。宗祇はそのなつかしい髯を撫でながら山賊の顏をつく／＼と眺めた。

『髯を何にするのだ？』

『其れを拂子に賣るのだ。』

『なるほど。』

宗祇は眼をつぶつて暫く無言であつたが、悟る身の諦めは早く、

『よし／＼進ぜよう。』

と頷くと、獨りつぶやく如に、

我が髯が拂子になるも法の道浮世の塵を拂ひ濟まして



と一首詠じて、

『さア剃るがよい。』

と山賊の鼻先へ、其の髯を突出した。山賊はあまりに淡白した法師の動作と、意味は解さないが其の歌に氣を引きつけられて、聊か遲れが來た時、其の突出された髯からプーンと香が薰つた、山賊は如何で髯に香が焚き込まれてゐるとは想はない、元來香をきくなどといふ事のおぼえの無い山賊である、其の香の薰りを嗅ぐと忽ち靈像に對する感じがしたのだつた、と共に彼れは、

『あッ佛樣……ごッ御勘辨を……』

と顏色を變へて、平蜘蛛の如に大地につくばつてしまつた。香が救うた宗祇の髯！　吻として慈眼一笑法師はそこを立去つた。

『うーむン、たしかに人間ぢやア無え、臭ひが違はア……』

と、山賊は後を視送つて身を顫はした。

(三)　髯代三十兩

年齢はさほどでもないが白髪銀髯、恰かも高砂の尉の樣な髯の持主、其れは江戸の青山の町人、謂はゞつまらない荒物屋の亭主ながら、其の髯に依つて大評判、名は亦四郎といふのだが「ヒゲ赤」なる綽名の方が通つてゐた。

と、荒物屋の店に坐つた其の髯振りを、お忍びの通りすがりに睨らず見たのが、市ケ谷藥屋敷の殿樣で、徐して家來を差向けて其の髯を強つて所望と申込んだ。

もちろん自慢の髯であり、賣込んだ名物の髯である、これには「ヒゲ赤」も面喰つたが、對手が大名、金鐘に糸目はつけぬとの言條だ、高が荒物屋の亭主であつてみれば、面喰ひながらも慾は出て來た。

『へいお直段に依りましては……』

と、使者の顏色を窺つて、商人根性遂々斯う切出したのだッた。

『些少ではあるが三十兩遣はさう。』

『えッ三十兩ッ。』



と「ヒゲ亦」は思はず頓狂な聲で叫ぶほど喜んじまツた、其の時代の三十兩は大金である、「ヒゲ亦」程度では大資本だ、頓狂な聲も出る筈だッた。

使者は早速用意の三十兩を差出して、

『主君もさぞ御滿足であらう、然らば明日早速其の髯頂だいに參る。』

と、斯う云つて立戻ると、約束通り其の翌日、同じ使者の武士は面師を伴れてやつて來た、卽ち其れは能樂の翁の面にうゑつけようといふのである。



『さらば只今剃落して差上げます。』

と「ヒゲ亦」愈よ「ヒゲ亦」なる綽名の別れ、流石に殘り惜しい氣もするが、三十兩にならうとは夢の如な髯の身賣、未練無く落してしまへと、髮剃を取直した時、

『やれ待て、何をするのだ。』

と使者は慌てゝ云つた。

『へい髯を剃落しますので……』

『剃つてはならぬ……剃落したのでは死髯になつてもの丶役には立たぬ、根元に血を含む生きた髯を其のまゝ面にうつすのだ、これから一本づつ拔き取るから、些と痛いがまんを致せ。』

とキッと云はれて、「ヒゲ亦」は、

『うへいッ』

とばかり頰を抱へて飛上つても追着かない、やがて面師が取出した鑷、使者の武士が「ヒゲ亦」の體を押さへて、端から一本々々拔き始めた、其の痛いこと！

『いツ痛てゝゝ。』

『何だこれしきに、確り致せ。』

『痛ッてゝゝゝ。』

「ヒゲ亦」はボロ〳〵淚をこぼして齒をくひしばる、斯うとは知らず三十兩で飛ついた慾の間違ひ、然も一本づつ拔いては面に植ゑてゆく悠り構へた面師の仕事、氣は面の方に打込んで、人間の方には同情も何も無い、此の髯全部を拔きうつしに、其の日で漸く三分の一、三日かゝツて漸つとの事、「ヒゲ亦」の顏



は哀れに腫上り、翁の面には生き〳〵とした豐かな髯がうつされたのだつた。

亦四郎はこれからどうしたものかボツとして氣抜けの狀態となつてしまつた。髯亦とまで評判された髯を金で賣つたといつては江戸ツ兒の面目が立たない。亦四郎は髯が無くなつてからはろく〳〵外へも出なかつた。

そして浮かぬ氣で室内に閉ぢ籠つてゐたが、それから五六十日して死んでしまつた。年は何でも七十九歲であつたといふことだ。

—をはり—



駄噺三題

上田武夫

大丈夫

氣の強い嬶左衞門に擲られて弱い宿六先生、こは堪らぬと縁の下へスッ込んで出て來ない、餘りの馬鹿々々しさに、女房も機嫌を直し、男の癖に何んだね早出ておいでなさい。と言ふと、亭主殿、床下で俺も男だ、出ないと言つたら金輪際出るものか。

大力味、

陰辨慶

嬶天下の宿六二人の出會つての話に近頃貴公の御臺所はどうか知らぬが、手前處の御力と來たら、火の手が益〻盛んで絕對權威を振廻すから堪らない、何しろ嬶殿の褌まで洗はされるのだから。夫を聞いて、乙は臂を張り肩を怒らし夫は、怪しからぬ、若し手前ならば、と言ひかけると後に立聽く乙の妻が、大喝一聲、若し手前ならばどうするんだつて、乙は喫驚敗亡思はず大地に、ひざまづいて直に洗ふのさ。

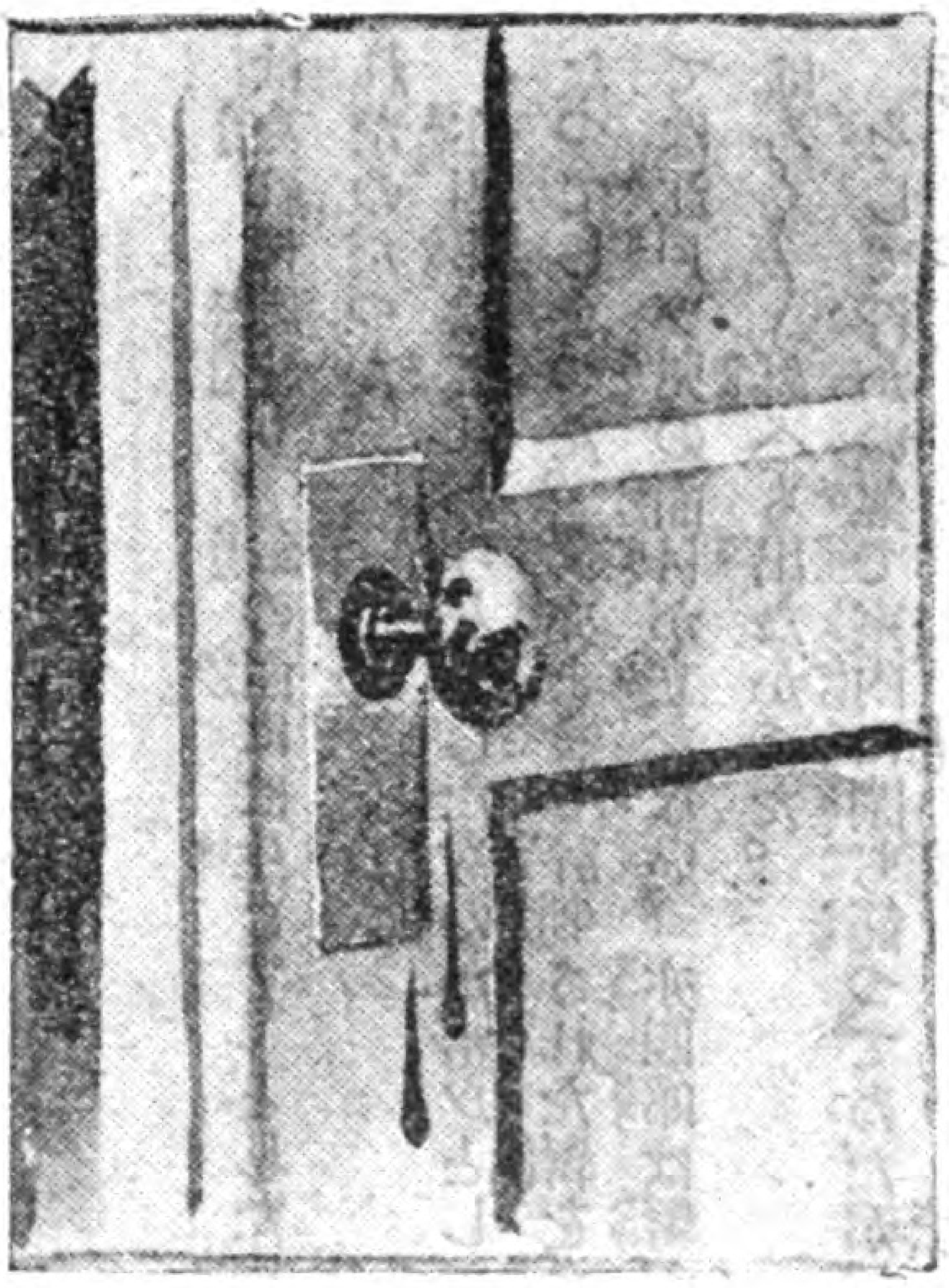
新嫁

某家の娘、嫁入りするので途中の駕の中で頻りに泣く、宰領の者が餘りに痛ましくなつて、そんなに、お家が戀しければ、一度歸る事にしませうかと言ふと、新嫁は、すゝり泣きながら、もう決して泣きません。

驚嘆すべき大科學探偵小説

透明の人間

槇尾赤霧
椛島勝一畫



四、深夜の訪問者

その日の夕方、此の事件の起つたS村からは約五里程離れたK町を一眼に見下される山の中腹に建てられた瀟洒な文化住宅の一室で星野博士は靜かにペンを走らせてゐた。此の部屋は彼の書齋であり、研究室であつた。三方に窓をとり、一方の壁には大きな書架があつて、金文字の書物がずらりと並んでゐた。そして北側の窓の下には廣い卓子があつて、其の上には顯微鏡や、硝子の薄い板や、精密な機具や、試驗管や、試藥の壜なぞが所狹きまでに置いてあるのだつた。博士が今向つてゐる卓子は、南側の窓近くに置かれてあつて、窓と窓との間の壁には油繪の額が掛つてゐる。西の空は未だ夕殘りの光りがあか／＼と輝いてゐるが、夕日を避けるためか西側の窓には厚ぼつたいカーテンが掛けられて、室の中を薄暗くしてゐる。博士は丈の高い髮の毛のふさ／＼した五十過ぎの男である。去年まで東京で大學教授をしてゐたのだが、彼の科學に對する學究的な態度は却つて一般に受入れられず、彼自身も教授であることを却つて邪魔にして、自分一人の研究の爲に東京から離れた此の寂しい田舍町に移り住んだのである。家族と云つては早く妻に別れて只一人の娘と女中との三人暮しであつた。

彼は今非常に驚くべき論文を起草中であつた。若しも今彼が研究中の實驗に成功したならば、日本は勿論、世界の學界は驚

に震駭するであらう。而も博士は殆んどそれに成功しかけてゐる。唯だ今では靜かな彼獨りの思索の時間を得ればいゝのであつた。

　彼はペンを休めて、紫色に暮れて行く町の重なり合つた屋根や、遠くの山脈を眺めてゐた。

『お父さま。御飯ですわ。』

　扉が半開きになつて、若い女の香が漂つて來た。博士の最愛の娘の美代子である。死んだ妻と瓜二つとでも云はうか、面長な色白の顏や、恰好のいゝ鼻や、紅い唇や、それに睫の長い、何時も潤ひのある可愛い眼。博士は彼女を天上の者の樣に愛した。博士が研究に勞れた時の慰めであり、又忠實な助手ともなつた彼女は、博士の室に無斷に入り得る世界中での唯一人であらう。彼女は今年丁度廿歳であつた。若い而も彼女のやうに美しい乙女を此の山中の小都會に生活させることの可否を博士も考へないことはなかつた。然し彼女は父を愛してゐた。何物にも換へて父一人を愛して居た。そして今父と二人生活することに依つて彼女は實に幸福さうに每日を樂しんだ。然し乙女の心は幸福な中にも淚するものである。彼女は時とすると、自分の部屋で獨り寂しさうに物思ひに沈んでゐることがあつた。その時の彼女の美しい瞳は淚の爲に潤んでゐたかも知れない。

　夕食後博士は平常の樣に美代子と樂しい時間を過して、八時過ぎ書齋に歸つて來た。晴れた夜だつた。眼の下には町の燈が、空には星くづが寶石の樣に輝いてゐた。氣持のよい微風が開け放された窓からカーテンを戰かせて、博士の皮膚を撫でた。博士は五分間計り窓框に凭れて、煙草を吸ひ乍ら偉大な自然と、そしてその自然を祝福し乍らそれを究める自分のことを考へてゐたが、やがて窓を締めて卓子に歸つた。

　それから約一時間程してからであつた。玄關の呼鈴が鳴つた。熱心にペンを執つてゐた博士は、手を止めて耳を澄ました。女中が玄關に出て行く音がした。來客かなと思つて、今にも女中の足音が階段に聞えるかと待つてゐたが、來ない。

『何だらう?』

　博士は獨言を云つて、又書き續けようとしたが、今のベルが氣になつて續けられない。で、到頭立ち上つて、書齋から階段の下り口まで行つた時に、紅茶を持つて來る美代子に會つた。

『手紙かい。』

　書齋に引返し乍ら博士は訊ねた。

『いゝえ。ベルが鳴つた丈で開けて見ると、誰もゐないんですつて。』

　美代子は卓子の上にお茶を置き乍ら答へた。

『可怪しいな。』

『でも、きつと誰か惡戯したんでせう。』

『さうかも知れん。』

　美代子は部屋を出る時、父に優しい『お休みなさい』を云つて降りて行つた。

博士は又熱心に仕事を始めた。然し少し經つと、又厭きてしまつた。

『今夜は如何も落付けない。』

博士はさう獨言を云ひ乍らも、無理に續けた。大分夜も更けたと見えて、階下では美代子も女中も寢たらしい。靜かな夜だつた。室の中は時計の秒を刻む音と、博士の手の中で白く光る鵞ペンの柔い音だけだつた。

其の夜博士が仕事を終つたのは、一時も大分過ぎて居た。博士は大きく背伸びをして、隣の寢室に行つた。そして着物を脫ぎ寢間着に着換へた時、馬鹿に咽喉が渇いた樣に感じたので、ウイスキーとソーダ水とを探す爲に臺所に降りて行つた。

博士の科學的の研究は彼を非常に觀察力の强い人にした。で、彼が臺所から出て來て玄關の室を横切つた時、階段の下のリノリウムの上に黑い斑點のあるのを認めた。博士はそのまゝ二階に上つた。だが、急にその黑點が氣になつて來た。明らかに何かゞ博士に疑問を起させたのだ。兎も角博士は兩手に酒壜を持つたまゝ玄關に再び降りて行つてそれを調べた。そして別に大して驚きもしないで、それが固くなつて乾きかけてゐる血液の色であることを發見した。

博士は酒壜をとり上げた。そして何かその血液と關係のある物を見出さうと周圍を見廻し乍ら、ゆるりと階段を昇つて來た。そして階段を昇り切つた時、遂に發見したのだ、彼の寢室の扉の把手が血に染められてゐることを。

今度こそは流石の博士も驚いた。彼は自分の兩手をあらためた。きれいなものである。それに彼が書齋から來た時には扉が開いてゐたので、手を觸れなかつたことを覺えてゐる。彼はそのまゝ寢室に入つた。もう全く落付いてゐる。多分いくらか緊張した顏ではあつたが。彼の眼は素早く求むる如く室中を見廻した。卓子の上には血だらけの小刀が置いてある。そして敷布が裂かれて居る。彼は寢臺に近寄つた。そこでは脫ぎ捨てた彼の着物が今迄その上に誰か坐つてゐたかの樣に壓しつぶされてゐる。

『おゝ、星野先生。』

博士は背後で誰か嗄れ聲に叫ぶのを聞いた樣に思つた。はつと思つて振り向いたが、誰も居ない。博士は空耳だらうと思つた。その時彼は明らかに室を靜かに歩いて、手洗臺の方に近寄る足音を聞いた。確かに聞いた。如何に最高の教育を受けても人間と云ふものは、いくらかの神秘を信ずる迷信的な氣持を心の隅に殘してゐるものである。恐れと云はうか、驚きと云はうか、一種の心の壓迫が彼を襲うた。と、その時彼と洗面臺との間の空間に血に染まつた麻布の繃帶が渦を卷いてゐるのを見た。博士はもう明らかに驚きを過ぎて恐怖の中に立竦んで、其れを見つめた。それは空虚の繃帶である——滑稽にそして巧みに卷かれた繃帶ではあるが、その中には何にもない。不思議を通り過ぎて、彼は近寄りさまそれを掴まうとした。突然彼は耳の傍で力强く鋭く聲を聞いた。

『橋野先生！』

『え！』

『氣を落ち付けて下さい。お願ひですから、騒がないで下さい。私は透明の人間です。』

博士は暫くの間繃帶を凝視めたまゝ、耳を疑ふ樣に頭を傾けて立つて居た。

『透明の人間だつて。』

『さうです。僕は透明の人間なんです。』

博士の頭の中には非常な速度で彼が五十年間に知り得た總べての知識を展げた。然しその中に今彼が事實彼の耳で聞いた樣な物があつたらうか。そして今科學の大家としての彼の頭腦は、さう云ふ種類の人間を認容することが出來たらうか。いや、いや、世界の科學は決して其れを認めない。

『君は今繃帶してるんですか。』

博士は空に向つて問うた。

『さうです。先生。』

空虚に答へがあつた。

『おい、もう手品は止さうぢやないか。すつかり俺は欺されたよ。巧いもんだ。』

博士は寛やかに微笑み乍ら、前に一歩出て繃帶の力に手を伸した。そして彼自身の手でその透明の人の見えない指に觸れた。

博士は觸れるや否や、微かな叫聲を發して手を引込めた。見る見る中に彼の顔色は血の氣を失つて行つた。

『先生、しつかりして下さい。何も怪しい者ぢやありませんから、先生。』

見えない手が博士の腕を摑まへた。博士はもう恐怖の餘り今はその手から逃れたい一心である。彼は自分を捕へてゐる手を力一ぱい毆つた。すると繃帶した腕が彼の肩をつかまへたと思ふと博士は急に足をさらはれて寢臺の上にどつかりと尻餅をついた。叫ばうとしたが、敷布の端が彼の口の中に押込まれた。

『まあ、先生、僕の云ふことを落付いて聞いて下さい。』

博士は藻掻きに藻掻いたが、如何にもならなかつた。そしてやがて諦めたものかいくらか靜かになつた。

『若しお騒ぎになると仕方がないから、縛り上げますよ。』

透明の人はさう云ひ乍ら、漸く博士を壓へ付けてゐた手を弛めた。

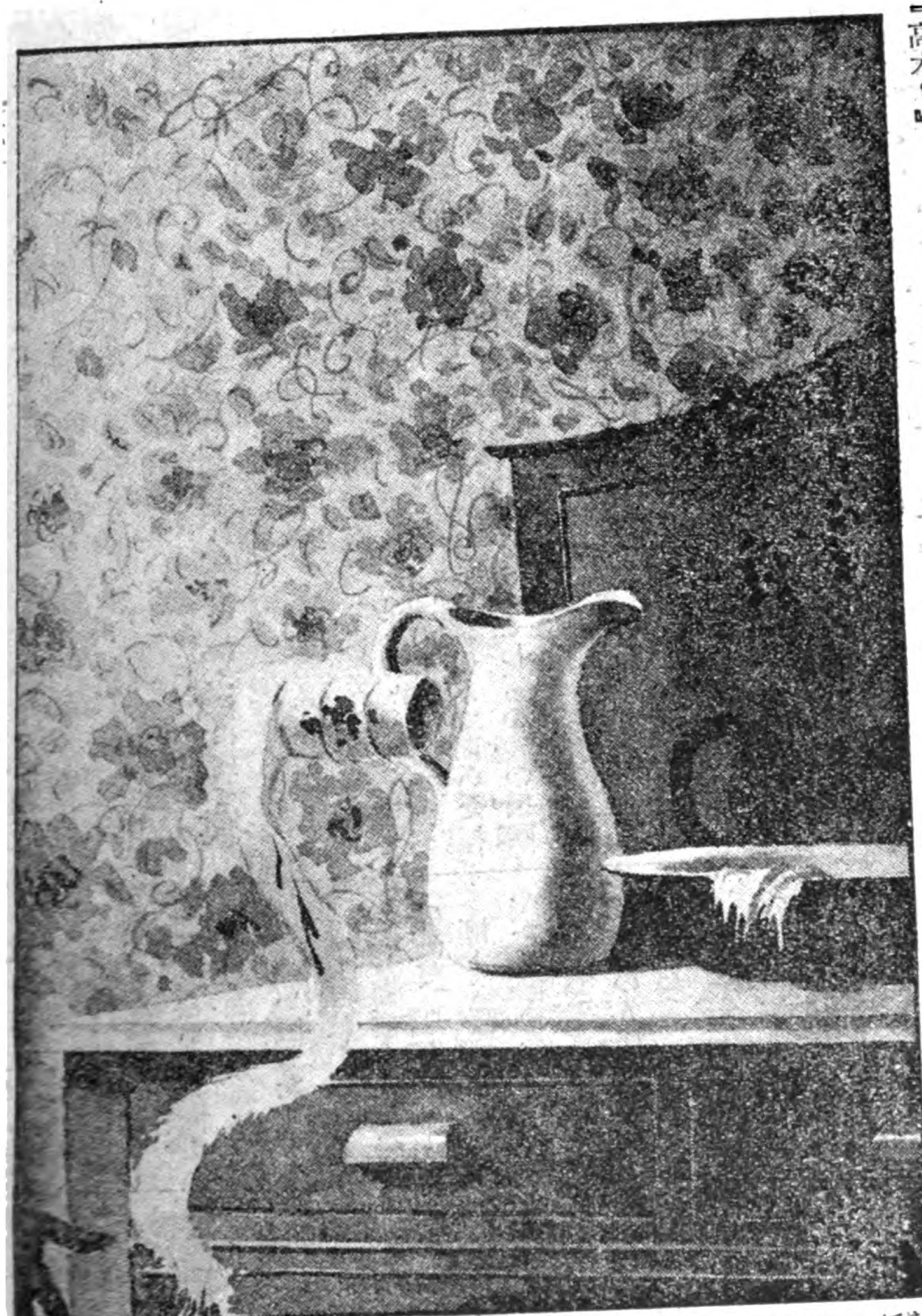
『ねえ、先生。僕は透明なんです。誰にも見えないんです。これは手品でもなければ、魔法でもない、正眞正銘のことなんです。そして偶然此處で先生にお會ひしたのを神の助けと思つてゐるんです。僕は先生の御助力が願ひ度いんです。僕はもう氣が狂ひさうなんです。先生、僕は、僕は、覺えてらつしやいますか、四年前まで先生のとこに御厄介になつてゐた助手の高木功です。』

『起こして呉れ。騒いだり叫んだりはしないから。』

博士は起き上つて頸筋に觸れて見た。

『僕は助手だつた高木ですよ。そして僕は自分を透明にして了つたんです。僕は普通の人間です。先生の御存じの男ですよ。唯だ誰にも見えなくなつた計りですよ。』

『高木？』



『さう、高木ですよ。先生のところに三年御厄介になつて、四年前にお暇を頂いた高木ですよ。』

博士は困惑した様に眉をしかめた。

『何だか頭がこんがらがつて了つてよく判らん。――それで、その高木と此れと如何な關係があるんですか。』

『先生、確りして下さい。僕が高木ですよ。』

『何だ！　君があの高木だ？　そんな馬鹿な事が、彼は温柔しい男だつた。前途有望な男だつた。然し如何して透明になつたんだ。悪魔の仕業か。』

『悪魔でもなんでもありませんよ。或る方法によつてです。全然科學的な方法によつてですよ。先生。』

『なに、科學的、うむ、いや、如何してそんなことが、――』

『いや、先生、それが出來るんです。僕は到頭その發

見に成功したんです。あゝ、だが、今僕は傷を受けて、それが痛むんです。その上疲れ切つてゐるんです。先生、お願ひですから、何か飲み物と食物を下さい。そして暫く休ませて下さい。』



星野博士は室の中をゆらめく繃帶を見つめた。椅子がひとりでに引寄せられて、寢臺のそばに据ゑられた。ぎいつといふ音がして、クッションが一寸許り下に壓へ付けられた。博士は眼をこすつて、穴のあく程見て居たが、

『まるで幽靈屋敷だな。』

と云つて笑つた。

『うん、有難い。その調子ですよ。少しは落付きましたね。先生、序のことに御手數作ら、ウヰスキーでも下さいませんか。』

透明の人も始めて心安く云つた。

『だが、何處に君は居るんだ。危いぢやないか。俺が不意に立ち上つたら、君の頸を突き上げるかも知れんぢやないか。――あゝ、其處か。よし／＼。さあ、受取り給へ。』

椅子が再びぎいつと鳴り、コップが博士の手から取られて、

椅子の前端から二尺許りの空中で支へられた。博士は未だすつかりは解けぬ疑惑の眼で、それを眺めた。

『うん、さうだ。君はきつと催眠術で俺に君は透明だと云ふ暗示を與へたんだな。』

『馬鹿なことを云ふものぢやありませんよ。それよりも腹が減つた。それに着物を着て居ないんで、夜は流石に寒いですよ。』

ウヰスキーのコップがひとりでに傾いた。

『食物かい。』

『いや、先づ何か着物はありませんか。』

博士は衣服棚に行つて、彼の部屋着を持つて來てやつた。その着物は博士の手から受取られると、ふら〱しながら暫く空間にぶら下つてゐたが、やがて順々にボタンがはめられて、椅子の上にどつかと腰掛けた。

『ズボンも欲しいですな。――それから次に何か食べる物を――。』

博士はズボンを取り出して、臺所の方に食物を探しに降りて行つたが、やがてパンとチーズとを持つて歸つて來た。

『や、有難い。』

客は飛び付く樣にして、パンを受取るや、空中でむしや〱噛んで喰べる音がした。

『何しろ今朝少し食べたつきりで、一日中暴れ廻つてたんですからね。すつかり腹が減つて。』

見えない客は口一ぱい頬張り乍ら云つた。

『そして腕の傷はどうだね。』

『大丈夫です。』

『だが、實際驚いたね。不思議だよ。』

『全くさうですよ。然し繃帶する爲に手當り次第に飛込んだ家が、先生の家だとは偶然でしたね。僕はこれから幸福になれるかも知れない。曙が見え出した。然しお部屋を血で汚して、御迷惑でした。凝固すると見える樣になるんですよ。唯だ生きてる僕の體の中では見えない。』

『然し如何して此麼ことが出來たんだ。全く解らん、始めつから終りまで不合理だ。』

『いえ、先生、合理的ですよ。完全に合理的ですよ。直ぐ說明しますよ。』

彼は手を伸して、ウヰスキーの壜を取つた。博士は着物がウヰスキーを呑込んでゐるのを驚いて眺めた。肩の所の破れ目から電燈の光が漏れて、左の脇の下に三角の光を作つてゐた。

喰べ終つた後、彼は博士に卷煙草を所望した。彼が煙草を吸つてゐる樣は、又天下の奇觀であつた。彼が一息煙を吸ふや、煙は一筋の棒の如くなつて彼の口や、咽喉や、咽喉佛などの恰好が微かに見えるのだつた。

『あゝ、やつと煙草にありついた。先生に遇ふとは僕も運がよかつたんですね。ね、先生。僕を助けて下さい。先生の御力を借りたいことがあるんです。』

『一體如何したと云ふんだ。說明して吳れ。如何して透明にな

つたんだ。』

『お願ひですから、も少しゆつくり煙草を吸はして下さい。それからお話しますから。』

然し彼は中々話し出さなかつた。彼の腕の傷が痛み出した。それに彼は實際疲れ切つて居た。そして彼の心には彼が今まで成して來た種々の出來事を次々に順序もなく思ひ出してゐる樣子であつた。段々彼の眼には氣狂ひ染みた憤怒の焰が輝き出した。

『今夜はとても話せません。先生、御迷惑でせうが、僕を眠らして下さい。』

博士も此のいら〳〵して困憊し切つてゐる靑年に同情し出した。

『さうだな。ぢや俺は他の室に行かう。』

博士が立ち去り掛けると、不意に高木は叫び出した。

『先生。後生ですから、警察なんかには知らせないで下さい。僕を靜かに眠らせて下さい。』

『うん、安心していゝよ。君も大分興奮してゐるらしいから、今夜はゆつくり眠るがいゝ。俺のうちに居れば大丈夫だから。』

博士が力強く請合ふにも係はらず、彼は寢室の二つの窓を仔細に檢べ、鎧戸を引下げ、窓框を檢べた。もう夜明けには二時間もあるまい。月は彼方の山の端に隱れようとしてゐる。物音一つしない夜である。透明の人は寢室の扉や、化粧室の扉を調べて、漸く安心したらしく、室の眞中に突立つた。星野博士は彼が欠伸をするのを聞いた。

『今まで僕の身の上に起つたことを今お話し出來ないのは殘念ですが、僕はほんとうに疲れ切つて、倒れさうなんです。明日何も彼もお話しませう。』

『ぢや俺は出て行くからゆつくり休み給へ。――隨分奇怪なことだ。もう二つも此んなことが起つたら、俺は氣狂ひになるかも知れない。』

博士は呟き乍ら室を出ようとした。透明の人は不意に走りよつて、博士の手を取つた。

『先生、ほんとにお願ひですから、僕の仕事を邪魔したり、捕縛しようとなんかしないで下さい。』

彼の神經は針の樣に尖つてゐるらしい。博士は大きく頷いて、扉を後に閉めた。鍵が中から下された。博士が扉の前に突立つて、耳を澄ましてゐると、化粧室の方の扉にも鍵の下される音がした。博士は額に手を當て乍ら、ゆつくりと歩いて行つた。

『夢を見てるのかな。――俺の頭が狂つたのか、世の中が皆狂つたのか。――自分の寢室から追出されて。』

彼は鍵の下りた扉を振り返つた。

『事實だ。否定の出來ない事實だ。』

彼は深い苦悶の中に、階段を降りて、階下の食堂に入つた。そして電燈のスヰッチを捻つて、卷煙草に火を點けて室の中を大股に歩き出した。

『――透明? 眼に見えない動物! そんなものが此の世にあるだらうか。――海の中に――さうだ。幾千萬となく居る。總べての顯微鏡的な生物は、――海月? さうだ、海の中には眼に見えるものよりも、見えないものの方が多い位だ。池の中にもゐる。透明だ。そんな微生蟲は透明だ。――然し空氣中には、空氣中には、――決して無い。――然し何故空氣中には有得ないと云ふ理由があるか。若しも人間が硝子でこしらへられてゐたら、吾々には見えない理ぢやないか。』

博士は段々深く考へて行つた。煙草の吸殼が床の上にいくつも投げ捨てられた。夜がほのぼのと明け初めて、部屋は電燈の黄色い光と曙の紫色の光とで滿された。煙草の煙が濛々と立籠めてゐる。だが、彼は未だ首をうなだれて、歩き廻つてゐる。

女中が眠さうに起きて來た。何事も知らない彼女は、彼を見て餘り勉强し過ぎたのだらうと思つたばかりだつた。博士は女中が起きて來たのを見て、思ひ切つた樣に、二階の書齋に二人分の朝食を用意する樣に命じた。女中は一寸不審の色を現はしたが、何事も聞き返さなかつた。彼はその後も階下に止つて、朝の新聞の來るまで食堂を靜かに歩いてゐた。

新聞が投げ込まれると、彼は大急ぎに取上げて、期待に充ちた眼で、先づ社會面に眼を注いだ。あつた! 確かに書いてある。然し通信記者そのものも餘り事實を信ずることが出來なかつたと見えて、『S村の怪事件』と云ふ小さい見出しで、村人から間接に聞いた昨日の事件の概樣を簡單に書いてあるばかりであつた。

博士はもつと詳しいことが知り度かつた。女中を呼んで町に降りて行つて、東京の新聞を全部買つて來る樣に命じた。然しどの新聞も〱大同小異である。全然書いてゐないものもあつた。

『うむ、彼の男は眼に見えない。今は二階で犬の子の樣に眠つてはゐるが、可成狂暴性を持つてゐるらしい。若し彼奴が氣狂ひだつたら。殺人狂だつたら。』

博士が深い思索に耽つてゐる中に、二階でも起きたらしい。彼は氣むづかしさうな樣子であつた。博士は頭の上で室を横切る足音に注意した。何か呟く聲が聞えたと思ふと、荒々しく椅子を蹴倒す響が聞えて、洗面臺に何か叩き付ける音がした。博士は大急ぎで階段を昇つて、寢室の扉を叩いた。

五、原理

『如何かしたのかい。』

高木が扉を開くと、博士は問うた。

『何でもないんですよ。』

『然し今の音は?』

『又癇癪が起り掛けてたんですよ。』

彼はいらだたしく云つた。

『君のことが新聞に出て居るぜ。S村のことがね。世間の人は

透明體の人間の存在と云ふことに就いては半信半疑らしい。』

寢臺に腰を降ろしてゐた高木は、床に落ちた硝子の破片を拾ひ上げ乍ら頷いた。

『朝飯を食はないか。隣の室に運んであるんだが。』

客は直ぐ立上つた。博士は先に立つた。

『世間の人の中で透明の人間が居ると云ふことを信じて居る人があつても、今此處に居ると云ふことは全然知る者はない。此處は俺の城廓だ。科學の治外法權なんだ。で、俺は君の何だか知らないが、計畫を出來る丈援助する積りだ。然し俺達が研究を始める前に是非君の不可視の原理に就いて知つて置きたいと思ふがね。』

博士は云つた。高木は非常に重大なことを云ふ人の樣に神經質に窓の外を見た。話全體が不健全極まるものの樣に思へた。然し頭も手もない高木が、ハンカチを袖で持つて、唇を拭き乍ら坐つてゐるのを見ると、又さう不健全な話でもない樣に思へて來た。

『それは簡單なことですよ。』

『さう、既に成功した發明は容易で簡單に見えるものだ。然し全然知らない者にとつては矢張り不可解で複雜らしく見える。』

博士は微笑み乍ら云つた。

『さうです。僕にも最初は不思議でなりませんでした。――僕は初めて房州で透明になつたんです。』

『房州で。』

『えゝ、東京を發つて、直ぐそこに行つたんです。先生も僕が醫科から理科に變つて、先生の助手に參つたと云ふことは、御存じでしたでせう。さうです。理科に變つたんです。光と云ふ題目に馬鹿に興味を持つたのです。光學的の密度ですね。全體が謎の網の目のやうに、込み入つてゐて、解決が出來さうで出來ない。未だ二十三かそこいらの熱中し易い時でしたから、此の研究に一生を捧げる決心をしたんです。それだけの價値があると思つたんですね。考へて見ると愚なことですよ。』

『さあ、愚なことかも知れんな。然し人間て奴は何でも知り度がるもんでな。』

『僕は研究を始めました。勞働者のやうに朝は早くから夜は遲くまで隨分熱心にやりました。そして到頭、僕は色素や光の屈折の一般原理を發見したんです。四次元の幾何を含んだ公式なんです。普通の人も、いや普通の數學者も原子に關する物理を研究してゐる者にも、或る共通の意味があるにも係らず、とんとそれを知らずに居るんですからね。然し今僕が發見したと云ふのは、一つの觀念に過ぎません。けれどもその觀念から物質の性質に變化を及ぼさず、唯だ或る場合にその色だけを變じて、その光線の屈折率を低下させることが出來るんです。固體だらうが、液體だらうが、空氣の屈折率にまで低下させ得るんです。――實用の目的範圍ではね。』

『ふうん。そりや面白いな。然し君はそれで寶石なんかを變へることは出來るだらうが、人間を透明にするなんてこと

は――。』

『それが出來るんです。まあ、考へて下さい。目に見えると云ふことは、物體の光に及ぼす影響から來るんですよ。さあ先生を前に置いて此麼ことを云ふのは釋迦に說法のやうだが、まあ先生が何も御存じないものとして根本から話をしますよ。抑も物體と云ふものは光線を受けてこれを吸收するか、反射するか或ひは屈折するか、又は此れ等の組合せをやるかなんです。若しも或る物體が光を反射も屈折もせず、又吸收もしなかつたら、それは眼に見えない透明なものぢやありませんか。赤い色に見えるのは、光の中の一部分を吸收して、赤色の部分を反射するからです。若しも吸收を少しもせずに、總べて反射したとすれば、それは光り輝いた白色體になるでせう。又ダイヤモンドは夫々の面で反射したり、屈折したりするから、あのきら〱する輝きと美しい透明とが見られるんです。硝子はさうきらきらしないし、ダイヤモンドのやうによく見ることが出來ません。何故かと云ふと、硝子の場合はダイヤモンドよりも、小さい屈折と反射をするからです。これを他の點から考へますと、或る種類の硝子は他の或る種類の硝子よりも、一層可視性をもつてゐます。フリント硝子は普通の窓硝子なんかよりも、輝いて見えます、普通の硝子の非常に薄い板は少し薄暗い處では見えません。それは吸收、反射、屈折などが非常に小さいからです。若しも普通の無色の硝子を水の中に入れると、一層眼に見えなくなります。倘ほ水よりも密度の大きい液體の中に浸すと、倘ほ見えなくなります。何故なら、水或ひは他の液體を通つてから硝子に入つて行く光線は、極く微少しか屈折や反射をしないからです。それは丁度、空氣中にある石炭瓦斯や水素瓦斯の見えないのと同樣です。そしてその原理は同一なんです。』

『うん、明瞭なことだ。今日の中等學校の生徒なら、誰でも知つてゐる。』

『それから未だ中學生の知つてることがありますよ。それは硝子の板を壞して粉々にすると、硝子の板のまゝよりも、一層よく眼に見えるやうになつて來る。それをもつと小さく碎くと、遂には不透明な白い粉になつてしまひます。それは硝子が屈折や反射を起す面を非常に增加したからです。板のまゝの場合には、唯だ二つの面しかない。ところが粉の場合には、光線の通る各々の粒や塊の處で、屈折や反射をするからです。だが、これに反して、其の粉を水中に浸すと全く見えなくなります。水と硝子の粉とは非常に接近した屈折率を持つてゐるからです。で、透明體と云ふものは、それと同一の屈折率を有する媒體の中にある物體のことになります。それで一寸考へれば判ることですが、硝子の粉だつて、その屈折率を空氣の屈折率にまで低下してやつたら、目に見えなくなる筈です。光線が空氣から硝子を通過する時に、少しも反射屈折をしないことになりますからね。』

『判りきつた話だ。然し人間と硝子の粉とは少々違ふからな。』

『いや、人間はより透明ですよ。』

『馬鹿なことを云つちやいかん。』

『それは醫者に聞けば、よく知つてますよ。先生はもう生理學をお忘れになつたのですか。紙は透明の纖維から成つてゐます。そして硝子の粉と同一の理由で白色に見えて、不透明です。ところが油とか蠟を塗ると、纖維間の隙が油で埋められて、光の反射や屈折はその表面で少しするばかりになります。だから硝子のやうに透明になります。これは紙ばかりぢやありません。綿の纖維も、麻も、羊毛も、木の纖維も、それから骨も、先生、肋骨も、髮の毛も、爪も、神經系も、人間の身體の總べては、透明なものですよ。無色の筋から成つてゐるに過ぎないんです。透明にするには、身體の小部分を變へれば充分ですよ。』

『さうだ。さうだ。俺も昨夜海中にゐる微生蟲のことを考へてゐたよ。』

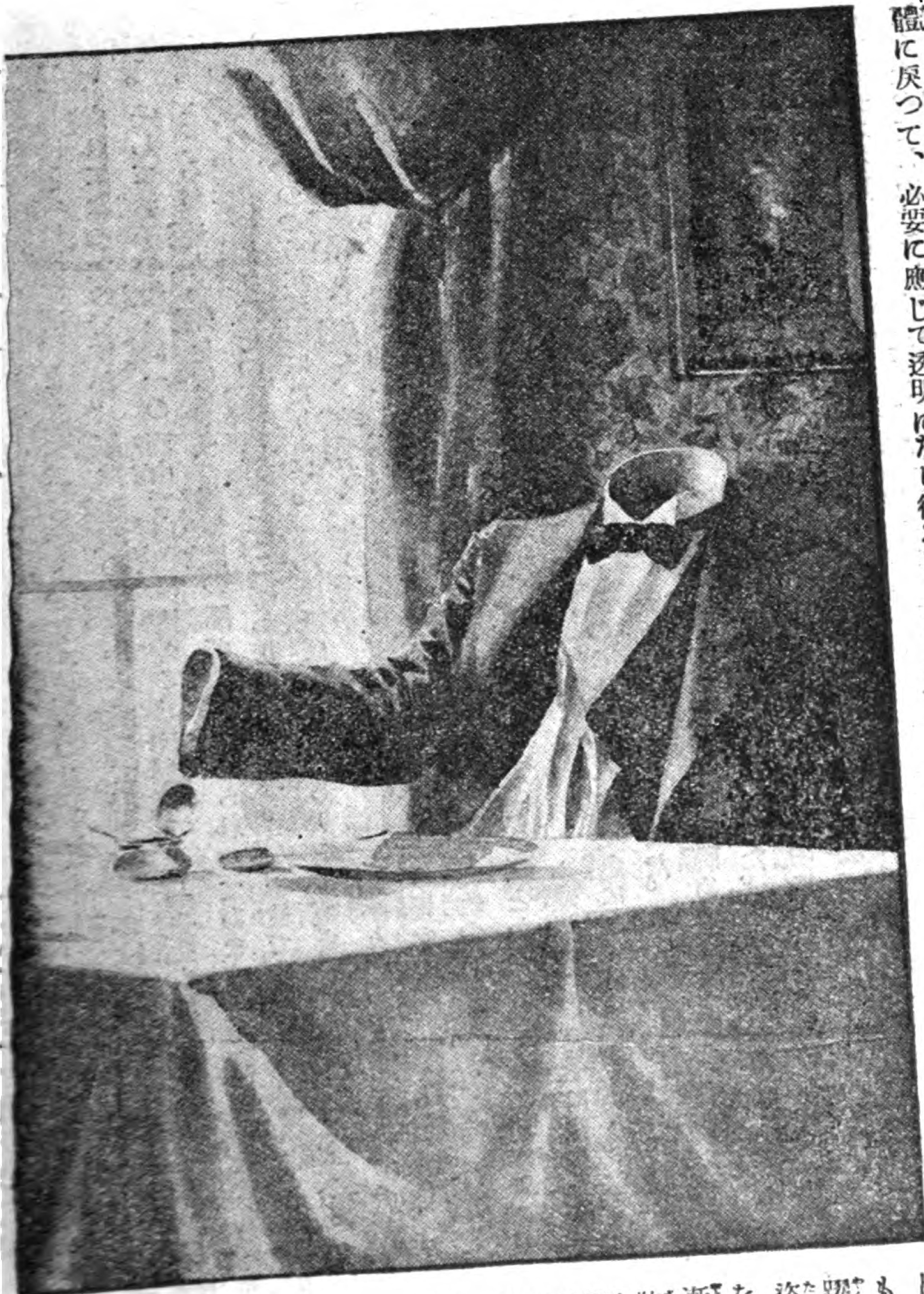
『それでは、先生には理解して頂けたと思ひます。私はそれらの理論を發表しませんでした。そして尚ほも私は研究を續けて行きました。自分の發見した理論を漸次、實驗的に具體化して行きました。誰にも話しませんでした。私はその完成された發表で全世界を驚かしてやらう、一舉にして有名にならうと思つてゐたのでした。そして自分は人體を透明になす爲に、未完成の域に殘されてゐる色素の研究を初めました。が、到頭生理學上の一大發見をしたのです。血液中の赤色の色素は無色に變ずることが出來ます。そして其の機能は以前と少しも變らないのです。』

博士は少々不可解だと云ふやうな表情をした。

客は立ち上つて寢室の中を歩き出した。

『先生もお驚きになるでせう。僕もその夜のことをよく記憶してゐます。それは夜更けてのことでした。晝間の中は矢張り何や彼でうるさいので、よく研究が出來ないんです。その日も夜明け頃まで實驗してゐました。そして到頭僕の中にそれが明瞭に確乎と浮んで來たのです。靜寂な實驗室の中で、青い光を投げる燈の下で、實に自分乍ら神秘な氣持に充されました。動物を動物の筋々を透明にすることが出來る、唯だ色素、血液とか毛髮とかの色素を除く他は、總べて透明にすることが出來ると云ふ確信から、白子になるとは一體何を意味するのかを了解して急に私は叫び聲を擧げました。それは耐へられない喜びでした。私は試驗管を投り出し、大きな窓に走り寄つて、空の星を眺めました。そして俺は透明になり得るぞと、繰返し呟きました。まるで魔法だと、疑問の中に思ひました。そして人間が透明になると云ふことは、一體何を意味するかと考へました。神秘であり、或る勢力であり、自由であります。透明になつて、不利益なことは何一つ私は見出しませんでした。そして私は尚ほ研究して、遂に實驗的に私の身體に試みて、成功したのです。然し先生。僕の實驗は尚完成されてはゐないのです。或は殘つてゐる部分の方がより困難かも知れません。先生、私が透明になつて翌日感じたことは、どんなことだとお思ひになりま

す。それは堪へられない不自由さでした。世間の馬鹿者共は、私を怪物とも、幽靈とも恐れるでせう。早い話が新聞に出てゐると云ふS村の事件が、それなんです。で、私は再び元の不透明體に戻つて、必要に應じて透明になり得ることが、理想的だ



と思ひました。ところが先生、私は此の三年間に、親父が殘して呉れた可成りの財産を總べて透明になる爲に使ひ果して、それに成功した時は殆んど無一文だつたのです。私にはもう研究すべき費用がありませんでした。そこで私は透明のまゝ東京に出て來て、先生も御記憶かも知れませんが、警視廳が躍起となつた、例の奇怪な盜難事件を敢てして、資本を貯へたのでした。そして漸くにして必要な丈の實驗裝置や試藥、それから一年間計りの生活費を得て、S村のあの旅館の一室に閉ぢ籠つたのでした。然し實驗を始めて見ると、色々の不足を生じて、勢ひ費用が嵩んで、あの昨日の失敗が起つたのです。』

高木の長い話は一段落を告げた。博士は今更のやうに此の不思議な男を見つめた。

『そこで先生、お願ひ致し



度いことと云ふのは、私も折角いろいろな危險まで冒して、求め得た實驗道具を昨日總べて失つて、金はなし、非常に途方に暮れてゐるのですが、若し先生の方で御都合が惡くなかつたら、以前の誼みで、助手にお使ひ下さる譯には參りますまいか。私は先生のお仕事の間間に、自分の仕事をやらせて頂ければいゝのですから。』

博士は腕を組んで、深く考へ込んでゐたが、やがて顏を擧げておもむろに云つた。

『よからう。此處に居たまへ。そして助手などはしなくていゝ。お粗末乍ら此の俺の實驗室を解放するから、自由に使ひ給へ。そして必要なものは遠慮なく申し出で給へ。日本にないものなら、外國にでも注文してやらう。』

高木は躍り上つて喜んだ。

『先生、有難うございます。私は繃帯する爲に偶然此の家に忍び込みまして、始めて先生のお顏を見た時に、何だか救はれたやうな氣がしてゐました。私は命懸けでやります。決して先生の御親切を無には致しません。きつと成功して、お目にかけます。』

『人類の科學の爲にお願しよう。此の實驗室は娘の外、誰も出入を厳禁してあるんだから安心して使ひ給へ。』

博士は云つた。

『えつ、ではお孃さんもいらつしてるんですか。』

高木の聲はいくらか慄へを帶びてゐた。

『うん。あの娘も此んな山奥に來て、可哀相とは思ふけどな、感心なもので、少しも不平を云はずに、働いてゐるよ。私の助手にもなつて呉れるが、近頃では大學生の頭の惡いのよりは、よほど使ひよくなつた。君も必要なら遠慮なく使ひ給へ。あれも喜んで働いて呉れるだらう。』

『美代子さんも大きくおなりになつたでせうね。』

高木の言葉は突拍子もないつゝぬけた調子だつた。

『うん、もう廿歳ぢや。もう結婚してもいゝ年ぢやが、自分ぢや一生俺の助手で暮すと云つてゐる。俺がいくつまで生きる積りにしてるかな、アッハヽヽ。』

博士は娘のことを云ひ出すと、機嫌がよかつた。高木はぢつと何か深く考へ込む風にうなだれて、默つてゐた。

六、人知れぬ惱み

透明の客はかうして博士の家に停つた。彼は毎日を博士の實驗室で送るやうになつた。そして博士は此の竊盗犯人を彼の研究の成功迄、安易に此處に送らせる爲に、彼のことは最愛の美代子にさへ秘密にしてゐた。それは高木の切なる願ひでもあつたのである。實驗室には最早や、美代子の出入も禁ぜられた。そして彼は殆んど必要の時にのみ、例の手袋をはめ、頭に繃帶をして、下に降りる他、戸外には一切出なかつた。

そして幾日もの日が割合に平穩に續いた。が、彼の研究は中々進まなかつた。その緒をも掴むことが出來なかつた。で、彼の例の癇癪が次第に數多く起るやうになつて來た。時としては博士の深切な慰さめや勇氣付けにも係らず、彼は絶望的な呻りを洩らすことさへあつた。そして博士に自分の身體が透明であると云ふことが、如何に大きな悲しみであるかと云ふことをしみ〴〵語るのであつた。然し身體が透明であると云ふことが、科學に一生を委ねた學徒にとつてそんなに大きな悲しみであらうか。博士は彼の言葉に充分同情はしたけれど、或る不可能な矛盾をも見出さない譯に行かなかつた。

然し到頭博士にもそれが明瞭に分る時が來た。

或る夜、それは博士の家に秘密の客が來て一月餘りもした頃であつた。博士はのつ引きならぬ用事が出來て東京に出て、その夜は歸つて來ないことになつた。美代子は淋しかつた。星の明るい夜だつた。父の居ないことが、父と一夜でも別れてゐると云ふ意識が、彼女を非常に感傷的にし、亡き母や、次第に懐しくも淡桃色にうすれて行く東京の友達なぞの過去の追憶を、そこはかとなく追つてゐた。彼女の兩の眼には何時しか涙が光つてゐた。あゝ、懐しかつた過去。現在の彼女自身に不滿がある譯ではなかつた。父は彼女を愛して呉れるし、彼女も父を此の上に

なく愛することが出來た。然し、彼女に取つては、今の生活が此の片田舎にあると云ふ理由からでなしに物足らないのであつた。そして此の彼女の心の空虚こそ、彼女が如何に求めても遂に充たされぬものではなかつたか。彼女の眼からは遂に熱い涙がこぼれ落ちて、露西亜更紗の机掛けを黒く濡らした。

彼女は机の抽出しを開けた。そしてその奥から紺のリボンで飾られた西洋封筒を取り出した。彼女はその封筒を輕く胸に抱き締めて物思ひに耽つてゐたが、やがて靜かにその中から一葉の寫眞を取り出して、机の上に立てた。それは若い大學生の半身像であつた。眉の濃い、鼻の高い、そして口の締つた、實に立派な青年であつた。彼女の眼は寂しさうに輝いた。あゝ、彼女の總べての寂しさと悩みとは此の一葉の寫眞にこめられてゐるのである。遂げられなかつた戀の形見か、彼女は何時迄も何時迄もその寫眞から眼を離さうとしなかつた。

ふと、美代子は自分の部屋の扉を叩く音に我に歸つた。

『どうぞ。』

彼女は何の疑念もなしに答へた。多分女中が紅茶でも入れて來たのだらうと思つたのであつた。

扉が開けられた。彼女は輕い驚きの聲を擧げた。其處には氣味の悪い眼鏡を掛けて、頭を繃帶した男が立つてゐた。勿論彼女は、此の男が二階の客であることを知つてゐた。然し、何用あつて今頃、殊に父の居ない夜、女の私室に入つて來たのであらう。

『何か御用で御座いますか。』

それでも今まで無邪氣に育てられた彼女は、まだその男を怖れては居なかつた。その男は彼女を見詰めた。美代子は廿歳であつた。はち切れさうに成熟した肉體は、ふくよかな曲線となつて、肩や腰や四肢に現はれてゐた。きつく帶に締められた彼女の小さい乳房は、彼女の呼吸と共に輕く喘いでゐた。

『美代子さん。』

男は叫んだ。その聲には熱い〳〵情熱とやるせない悲しみとが含まれてゐるやうに思はれた。

今まで話もしたことのない男から突然自分の名前を呼ばれて美代子は驚いた。然し男は美代子が驚いてゐる間に、机の上の寫眞に眼をやつた。

彼はつか〳〵と走り寄つてその寫眞を取り上げようとした。

『あら、いけません。何をなさるんです、失禮な。』

美代子は男の腕をとつた。然しその時には、既に寫眞は彼の手の中に握られてゐた。

『あつ。』

男は思はず寫眞を取り落さうとした。そして美代子の顔をしげしげと見詰めてゐた。

『お返し下さい。でなければ女中を呼びますよ。』

美代子は處女の秘密を盗まうとする男を、許すまじき氣勢で睨んだ。

『あゝ、美代子さん。僕が判りませんか。此の寫眞は、……此の寫眞は、……』

彼は餘りの驚きと歡喜の爲にその後を續けることが出來なくなつた。美代子は然し、その聲に何處か聞き覺えがあるやうに思つた。

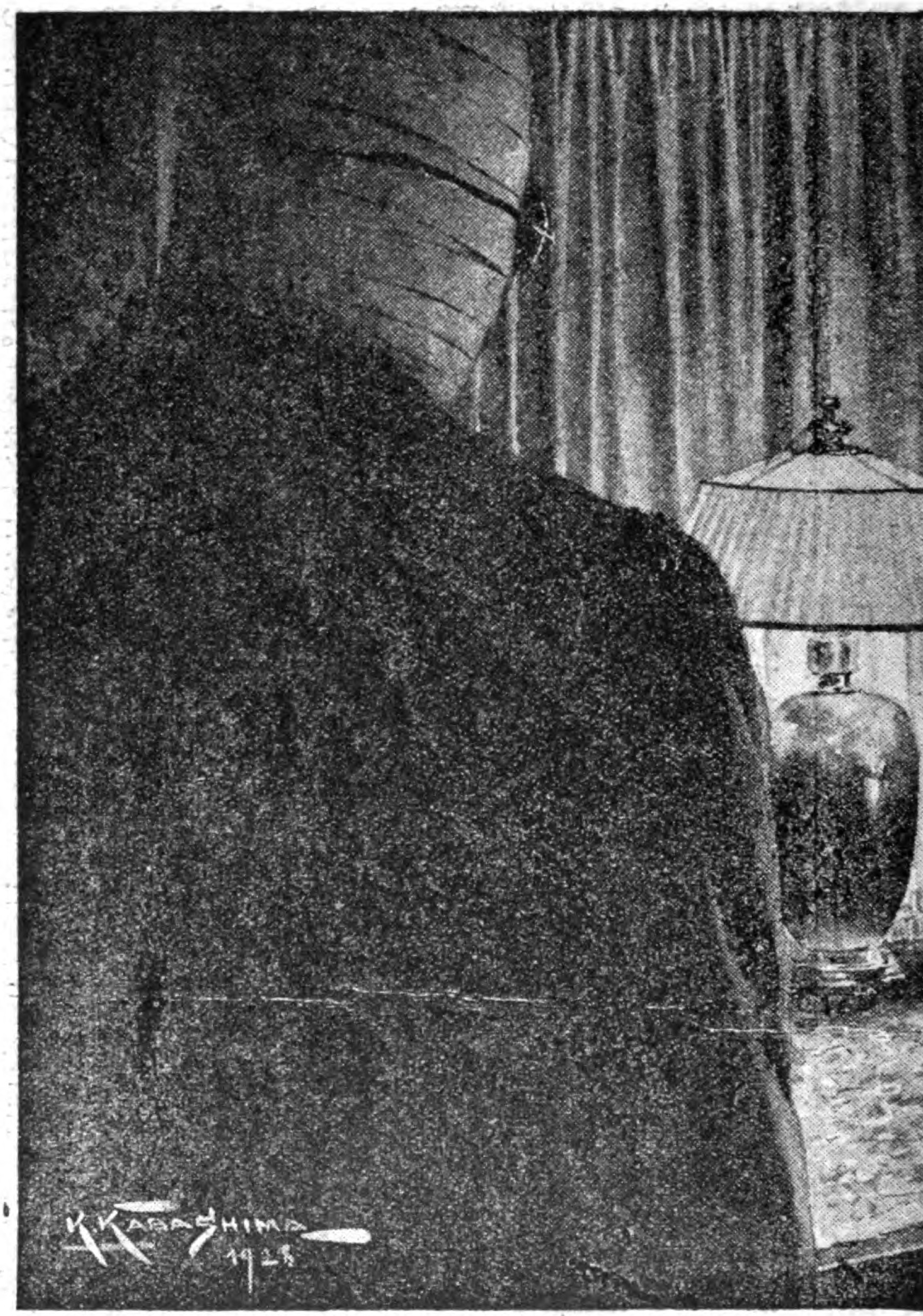
『おゝ、美代子さん。僕です。此の寫眞は僕ぢやありませんか。高木ですよ。高木功ですよ。』

續いて彼は氣狂ひのやうに叫び續けた。



『あなたは僕を忘れないで下すつた。僕があなたと別れた時、あなたは十六だつた。女學校に行つてらしつた。セイラーを着て、お下げに結つて、あゝ、あなたのことを一日でも忘れたことがあつたでせうか。あなたはあの時は未だ子供だつた。そして今はこんな立派なお孃さんになつてらしやる。僕はあなたのことを一日だつて忘れなかつた。そしてあなたも僕も忘れないで下すつた。』

彼の言葉は興奮の爲に支離滅裂だつた。美代子は男の顔を驚きの眼で眺めた。實際彼女も此の四年間、高木のことを忘れたことがなかつたのである。まだ十六の彼女ではあつたけれども、彼の男らしい容貌と、父博士の推稱する頭腦と、



そして時々彼女に示して吳れた優しい情愛とは、物の哀れを知り初めた乙女の胸に、生涯消されない烙印をはつきりと燒付けたのであつた。おゝ、彼女がその爲に泣き、悲しみ、寂しんで求めてゐた男は、彼女の前に立つてゐる。然し、然し。――彼女は信ずることが出來なかつた。

『あ、此の裏に何か書いてある。』

ふと寫眞の裏に何か書いてあるのを見出した高木は、さう云ひ乍ら燈火の下に寄らうとした。美代子はその腕に縋り付いた。

『いけません。いけません。それを見ちやいけません。』

『如何してです。僕が高木だつてことが、未だお信じになれませんか。』

『高木さんだつて誰だつて。若しあなたが高木さんなら尙ほのこと、それを見てはいけません。』

然し、その時にはもう高木の眼は優しい水茎の跡を追つてゐた。

『私の、私の、高木樣。私を棄てゝ何處かに行つた高木樣。私が泣いてゐるのが判りませんか。』

高木は讀んだ。

『美代子さん。美代子さん。』

高木は美代子に近寄つた。美代子は怖ろしさうに退いた。

『有難う。有難う。もう泣かないで下さい。あなたの高木は歸つて來たのです。而も世界を驚かすやうな發見をして、あなたの處に歸つて來たのです。私達は幸福になれます。』

彼は彼女の手を採つた。彼女は恐怖に充ちて、その手を拂つた。

『美代子さん。僕が高木だと云ふことが信ぜられないんですか。あなたは此の僕を待つてゐて下さつたんぢやないのですか。』

高木の聲は段々喜びから悲しみへ、それから更に哀願へと變つて行つた。

『私の待つてゐる高木樣は、あなたぢやありません。歸つて下さい。私の高木樣は優しい奇麗な方でした。あなたのやうな、恐しい、氣味の惡い方ぢやありません。出て行つて下さい。』

彼女は嚴しく彼を見た。彼の顏には微笑が浮んだ。

『やあ、さうだ。あなたは僕のことをちつとも御存じぢやないのでしたね。僕はね、發見をしたんですよ。實に偉大な發見です。先生も驚いて讃めて下すつたんです。人間が透明になるんですよ、或る方法でね。そして僕はその實驗に成功して、今僕の身體は透明なんですよ。昔のまゝの高木功なんですが、唯だ誰の眼にも見えないんですよ。ところがそれでは不自由だから、此んな恰好をしてるんです、お判りになりましたか。』

美代子は然し答へなかつた。

『お判りにならなければ、見せて上げませう。一寸待つてゐて下さい。』

彼はさう云つて、靜かに繃帯を解き出した。彼は此の思ひもよらぬ今夜の幸福、即ち、彼女が此の四年の間自分を愛し續けてゐたと云ふことを知つた喜びの爲に、氣を顚倒させてゐた。そして彼の科學上の偉大な發見が、彼女にどんな精神的打撃を與へるかと云ふことを少しも考へて見もしなかつたのである。

『どうです。私の身體が見えますか。』

彼は氣安く面白い手品でも見せる氣で、いくらか愉快さうにさう云つた。然し、その聲は既に洋服の襟のすぐ上の空間から出てゐるのではないか。美代子はその不可思議をまじろぎもしないで見てゐた。

『お判りになつたでせう。』

彼はそろ〳〵歩いて、彼女に近附いた。首のない洋服が歩いて來る。

『キヤツ！』

美代子は悲鳴を擧げた。そしてそのまゝそこに失神してしまつた。

『美代子さん。美代子さん。しつかりして下さい。』

驚いた彼は、花瓶の水をとつて來て、彼女の顏にかけた。そしてひしと彼女を抱き上げた。

『おゝ、こはい。お父樣、お父樣。助けて下さい。こはい。』

正氣に歸りかけた美代子は叫び出した。

『美代子さん。しつかりして下さい。僕ですよ。高木ですよ。』
『あゝ。高木さん。高木さん。』
『えゝ。僕です。僕です。』
美代子は眼を細く開いた。
『あつ、誰か來て。こはい。高木さんぢやない。高木さんは大嫌ひ。こはい。大嫌ひ。高木さんぢやない。こはい。』
美代子は續け樣にさう叫んだ。そしてまたぐつたりと失神してしまつた。それから扉の外に足音が聞えて來た。到頭女中が起きて來たものと見える。高木ははつと美代子を離して、扉の陰にかくれた。

七、悲しき成功

翌日博士が歸つて來たのは、午前の十時頃であつた。家に入ると直ぐ、彼は女中から昨夜の事件を聞いた、然し詳しいことは、美代子が云はないから判らないと、彼女は附け足した。博士は大急ぎで美代子の部屋に入つた。美代子は寢臺に寢て居たが、博士が入つて來たのを見て、嬉しげに起きて來た。然しその眼は、涙の爲か、それとも昨夜眠れなかつた爲か、赤くはれて居た。
『美代子、如何したんだ。』
博士は優しく娘の手を探つた。美代子は博士の腕に顏を當てて、激しい歔欷の中に埋つた。
『泣いてちや判らんぢやないか。如何したと云ふんだい。お父樣に詳しく話して御覽。』
『高木さんが――。』
『えつ。高木が。彼奴は、自分が高木だつてお前に云つたのかい。』
『えゝ。――お父樣。お父樣。噓云つちや駄目よ。ね。お父樣。あの人ほんとに先にうちに居た高木さん？』
博士は何も云はなかつた。然し、娘の熱く燃えた眼と、そしてその悲し氣な言葉は、充分に事件の内容を語つてゐた。博士は娘の心を凡そ察することが出來た。そして娘のいぢらしい戀をどうして惡魔のやうに蹈みにじることが出來よう。博士は優しく娘の肩に手を置いた。
『さ。美代子。泣かなくつてもいゝ。お父樣が居るぢやないか。お前を泣かせるなんて、ひどい奴だ。高木はそんな男ぢやなかつたぢやないか。優しい男だつたらう。今からお父樣は二階に行つて彼奴を叱つて來てやるから、もう泣かないでお出で。東京からいろんなお土産を買つて來たから、直ぐにねえやに持つて來させるからね。』
博士は娘の室を出て、女中を呼んだ。
『二階の男は如何してる？』
『さあ、如何してますか。朝御飯を持つては參りましたが、未だ起きていらつしやらないやうでございますよ。旦那樣、一體あの人は何で御座いますか。夜中にお孃樣のお室に這入りこむなんて。旦那樣がお甘やかしになるから、いけないんでござい

ますよ。あんな男は追ん出しておしまひなさるがようござんすよ。どんなことをするか知れやしませんもの。』

主婦を失つた博士の家庭に永年忠實に勤めてゐる彼女は、時時とすると主人の博士をさへ凹ますことがあつた。善良で忠實で主人思ひの彼女が怒つたのも、無理ではなかつた。

『まだ、起きて居ないのかな。』

『どうせ起きては居るんでせうが、皆に顔が合はせられないんですよ。』

『兎も角見て來よう。』

博士は二階にあがつて行つて、寢室の扉を叩いた。中からは何の返事もなかつた。聲を掛けて見たが、矢張り物音もしない。

『をかしいな。』

と、博士は呟き乍ら扉の把手を引いた。すると不思議なことには、毎日嚴重にあらゆる鍵を掛けてゞないと寢ない彼が、如何したものか、此の扉の鍵を掛けなかつたと見えて、扉は苦もなく博士の手によつて開かれた。

博士は奇怪な豫感に囚はれて、急いで寢室を見廻はした。すると、寢臺の上に靜かに眠つてゐる高木が見出された。はつと思つて、馳け寄つて見ると、先づ彼の眼に止つたものは、高木が胸に組んだ自分の手の上に置いた二通の封筒であつた。博士は驚いて高木の手首をとつた。然し彼の血は既に冷たくなつてゐた。そして生命の鼓動は、彼の身體から永遠にその響を消してゐた。

博士はその二通の封筒を取上げた。一通には『北野先生』と、今一通には『美代子様』と書かれてゐた。博士は靜かに封を切つた。

先生

四年前には突然先生の膝下を去り、今はまた永久に先生とお別れしなければならない私の悲しさをお察し下さい。先生には誠にお禮の申上げやうもない程の御恩にあづかりました。そしてその御恩に報ゆることも出來ずにお別れすることは、非常に殘念です。然し仕方ないことでございます。抑も私のやうな氣の弱い男が、科學者になつて、大それた發見をしようと試みたのが間違ひでした。科學者と云ふものは、身體に熱い血が流れて居てはなれません。悲しみの爲に涙を流してはいけません。世間的な或ひは家庭的な幸福を望んではいけません。私も一時はそれらのことを總べて振り捨てゝ、眞實に人類文化の開拓者とならうと決心したのでありました。四年前、先生のお宅を出た時がさうでした。私はその時のことを今、自分の死と云ふものを眼の前にして、懐しく憶ひ出してゐます。先生は多分御氣附きではなかつたでせうが、その時既に私は美代子さんを愛してゐたのでした。然し、私はまだ二十三才の學生、美代子さんは十六才の少女でした。私は待たうと思ひました。そして其處には何時か知

れませんが、自信があつたのでした。先生は他の學生達より私を可愛がつて下さいました。美代子さんは私に親切にして下さいました。そして若かつた私は、未來の樂しい幸福を夢見てゐたのでした。それだのに、私の頭に例の發見の可能性が段々と形造られると共に、私の野心に燃える心は、一時的であるとは云へ、それらの幸福の夢を追ひ退けたのでした。私は世界を驚かしてやらう。若しも私が此の偉大な發見に成功した時、世界は此の極東の一端に生を享けた一介の青年をどんな眼で見るだらう。事實それを考へてゐる時、私は全く愉快で元氣に充ちて居ました。

然し私が自分自身を透明にした後、世間からは疑惑の眼で見られ、金はなくなり、引續いて始めた研究は成功しさうにないことを思つた時、私は幾度絶望したでせう。然し私はまだ若かつたのです。その度に何とか勇氣を附けて、今日まで來たのでした。

そして今夜です。私はいろ〱先生のお留守中昔のことが憶ひ出されて、到頭お孃樣と懐しい話をして見度いといふ氣になり、下に降りて行つたのでした。すると幸か不幸か、お孃樣が私を愛して居て下さる、私が先生の家を去つてからも愛し續けてゐて下さつたと云ふ事を明らかに知つたのでした。私は嬉しさの餘り、躍りたい位でした。そしてその揚句、自分の身體がこんな惡魔のやうなものになつてゐるといふことを、完全に忘れてしまつたのでした。そして私はお孃樣を氣絶させてしまひました。考へて見れば、當り前のことです。誰を恨むこともありません。唯自分を呪ふばかりです。

美代子さんとして見れば、高木功が此んな幽靈見たいになつて現はれるとは思ひ掛けないことでしたでせう。そして再び現はれた私が、よし本當に高木であつたにしたところで、此の儘の私を以前のやうに愛する氣持になれないのは、分り切つた話です。

さて、一方では私の研究は成功しさうもありません。私は、先生は勵まして下さいますが、もうそのことは絶望してゐるのです。私の持つてゐる頭腦の働きでは、到底駄目だと信ずるやうになつたのです。して見れば私は遂に此のまゝの怪物として終るのでせうか。再び人間に返ることは出來ないのでせうか。少くともお孃樣に丈は、私が高木であること、そして決してお孃樣のことを忘れてゐなかつたことを信じて頂き度いのです。

到頭私は決心しました。

私の身體は最早誰にも見せることが出來なくなりました。然し、私は一つの方法に望みをかけてゐます。それは私の死です。細胞の崩壊は私の身體の組織を變へて與れるでせう。そして私は普通の人間として死んで行くことが出來るでせう。さうすれば私の願ひは遂げられた譯です。私の研究は悲しい成功をする譯です。

先生、なが〱お世話になりました。私の身體に、若し

要でしたら、御存分に研究の材料としてお取扱ひ下すつても差支へありません。
　　　　　　　　　　　　　では　さよなら。

讀み終つた博士は、美代子を呼んだ。美代子は恐る恐る室に這入つて來た。博士は默つて高木の遺書を手渡した。美代子に宛てたものは簡單に、彼が高木であること、彼は彼女を愛してゐること、これから幸福に暮して呉れるやうにと云ふやうなことが書かれてゐた。

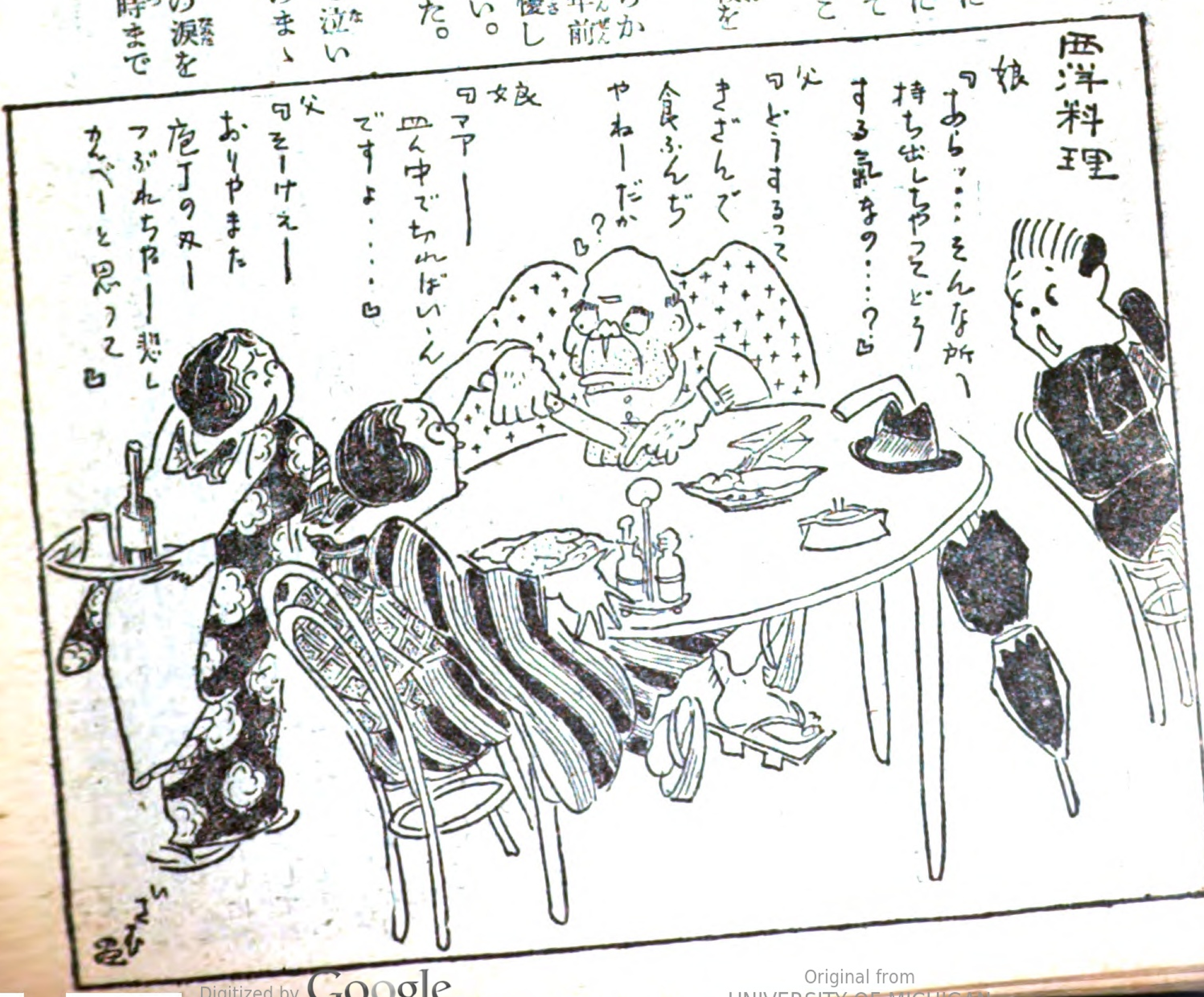
讀み終つた彼女は、博士の顏を見上げた。そして寢臺の彼を見た。と忽ち、彼女は彼の屍骸に縋り付いて泣き出した。

そして、そして、おゝ、彼の身體は、手は、顏は、いくらか落ちた眼や、高い鼻や、總べての高木功は、彼女の眼に四年前と同樣に見えるではないか。たゞ、たゞ、もう既に彼女を優しいその眼で見ては呉れない。優しい言葉を掛けては呉れない。然し、男らしく美しかつた高木が、再び美代子の眼に映つた。そして彼の唇は微かに笑つて居るではないか。

美代子は、父の前をも憚らず、高木の身體を抱擁して泣いた。泣いても、泣いても、涙が止らなかつた。彼女はそのまゝ自分も死ぬこと願つたかも知れない。

博士も此の科學の犧牲となつた殉情の青年の爲に一掬の涙を注ぐのを惜まなかつた。そして彼等父娘は何時までも何時までもぢつとそこを動かないのであつた。

——完——



發明發見奇談

燐はかうして發見された

人間が火を使用しだしたのは隨分大昔からのことだが、最初、人間は何うして火を手に入れたかは分らない。落雷による火事、或ひは山火事や火山の噴火などから火種を得たものらしいといふのが、人類學者の想像である。兎に角、大昔から火を使用してゐたことは確かだが、發火の方法は容易に知られなかつた。だから火を使用するには、一旦手に入れた火種の存在といふことが何より必要で、古代人の間では、火を傳へるといふことが宗教上の儀式になつてゐた。發火の方法の知られない時代には、火を絶やすといふことは非常な災難だつたに相違ない。古代の羅馬では、ヴエスタールといふ尼僧の團體が、聖火を保存するために、晝夜交代で看守の責任を負はされてゐた。萬一火が消えでもしようものなら、その番に當つてゐた不幸な尼僧は、無慘にも生埋といふ恐ろしい罰に處せられたといふ記錄が殘つてゐるところから見ても、如何に火の保存といふことが大切であつたかが思ひやられるではないか。

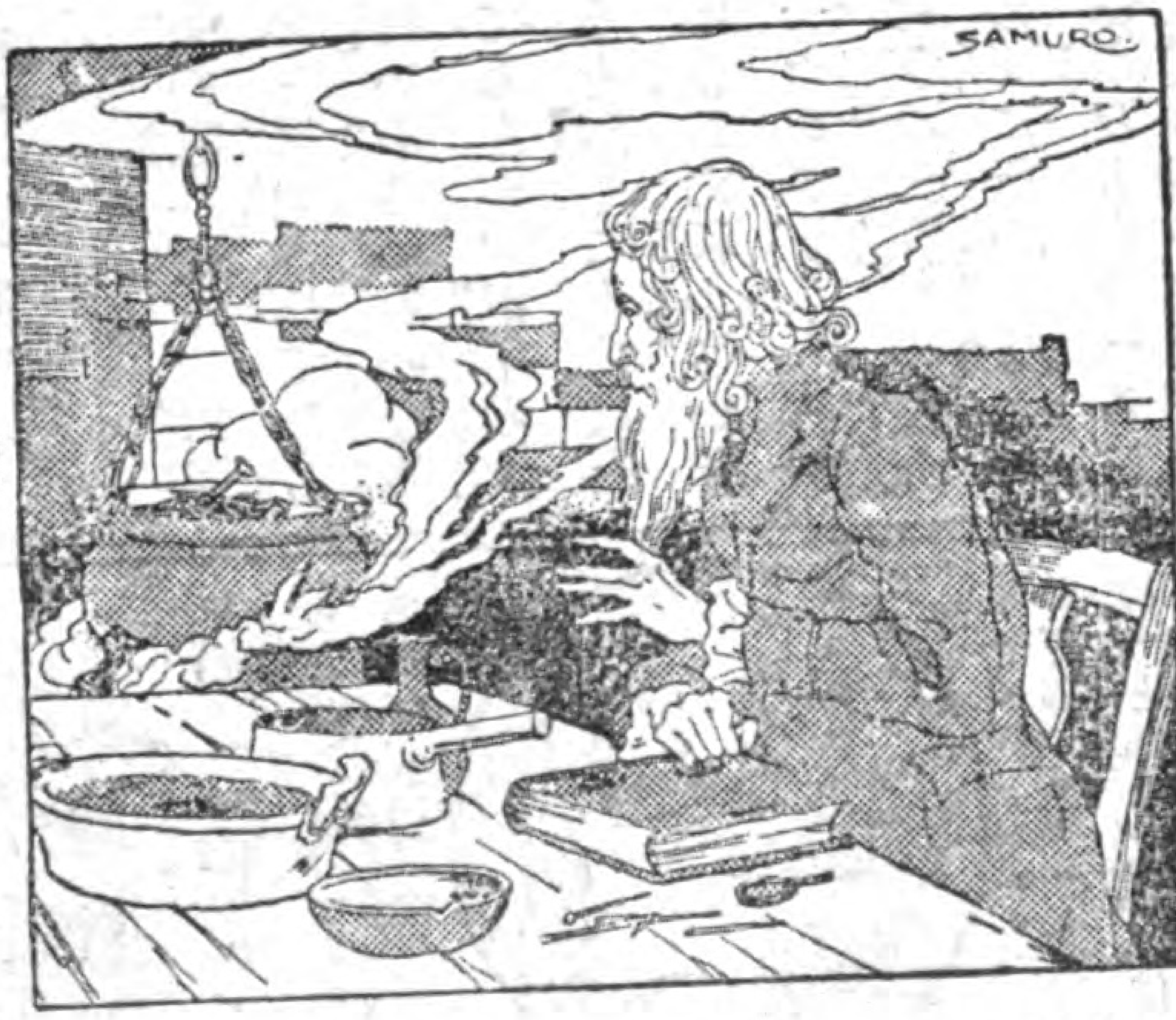
燧石から火を打ち出すやうなまだるつこしい方法から、現在の便利なマッチの使用に至るまで、人間が雜作もなく火を手に入れるやうになるまでには、幾世紀も幾世紀もの歲月が流れたのであつた。さて、その便利なマッチの製造に必要な燐の發見については面白い話がある。

十七世紀の中頃のこと、ハンブルグの町にブランドといふ一人の老學者が住んでゐた。此の老學者がふと奇妙なことを考へついた。といふのは古釘や古鍋などの金屑から黃金を得ようといふのである。兎に角非常な熱心で、金屑を熔かして黃金に變へるために、晝となく夜となくその仕事をつゞけてゐた。併し結局、お伽噺の魔法使ひでもない限り、古釘や古鍋が黃金にならう筈がない。だが、ブランド老人は飽くまでもその奇妙な實驗をつゞけ、終にはいよ〳〵突飛な話だが、尿水の中にあらゆる金屬を黃金に還元する要素があると考へだした。そこで、古釘や古鍋を小便に混ぜて火にかけ、高熱で以てぐら〳〵沸かして蒸發させたり、煮つめたりして、幾度となく實驗した。その結果、或る晩、ブランド老人は、小便を煮つめた汚物の中にピカピカと光つてゐるものを發見した。

『黃金だ！　黃金だ！』

老學者は狂人のやうに叫びながら室內を躍りまはつた。

だが、それは黃金ではなかつた。併し、黃金よりもずつと吾々の日常生活に必要なものが得られた。尿水の中に含まれてゐる燐が、奇妙な實驗の豫想外の結果として發見されたのであつた。



燐はあらゆる動物の體內にも植物の中にも含まれてゐるものである。此の突飛な發見の結果、吾々が今日、火を得るのに最も便利な化學的マッチが製造されるやうになつたのである。



新らしい科學の光

工學博士 佐藤定吉

今までずべて物質といへば酸素、水素金銀銅鐵等の八十數個の元素から成つてゐると考へられてゐたのであるが、それらは全く上つつらの見方であつて更に夫れらの内部を斷ち割つて見ると、たゞ一種の電子といふものから出來上つてゐる事が分つて來た。即ち之れ迄は物質の根源は原子なりとされてゐたが、其れは更に電子から成るものであり、其の電子の配列と數との差によつて私共の感覺には異れる物質として見えてゐるのであつて木も草も金も銀も悉く此れ一元の電子に過ぎないことが分つて來たのです。そして今迄萬物の根源と考へられてゐた原子内部をよくしらべて見るとその組立には秩序整然として一糸の亂れなく、電子はある數理的にキチンと排列されてゐるのです。今まで一番輕い小さいものは水素であると考へられてゐたが、電子の大さを水素に比べて見ると驚くことにはその千七百分の一にしか當らぬ程小さい。その微粒子の直徑は一センチメートル（一センチメートルは三分三厘）の億分の一のその億分の一の更にその億分の一のその又百分の一の微小なものであることさへ分つた。砂糖の最小分子を大伽藍とせばその中に飛び込んだ蚊一匹が電子である。何と云ふ驚くべき微粒子ではありませんか。その微小な陰電子が陽電子の周圍に一個廻轉してゐるのが即ち水素

珍聞奇聞

窪田菊次

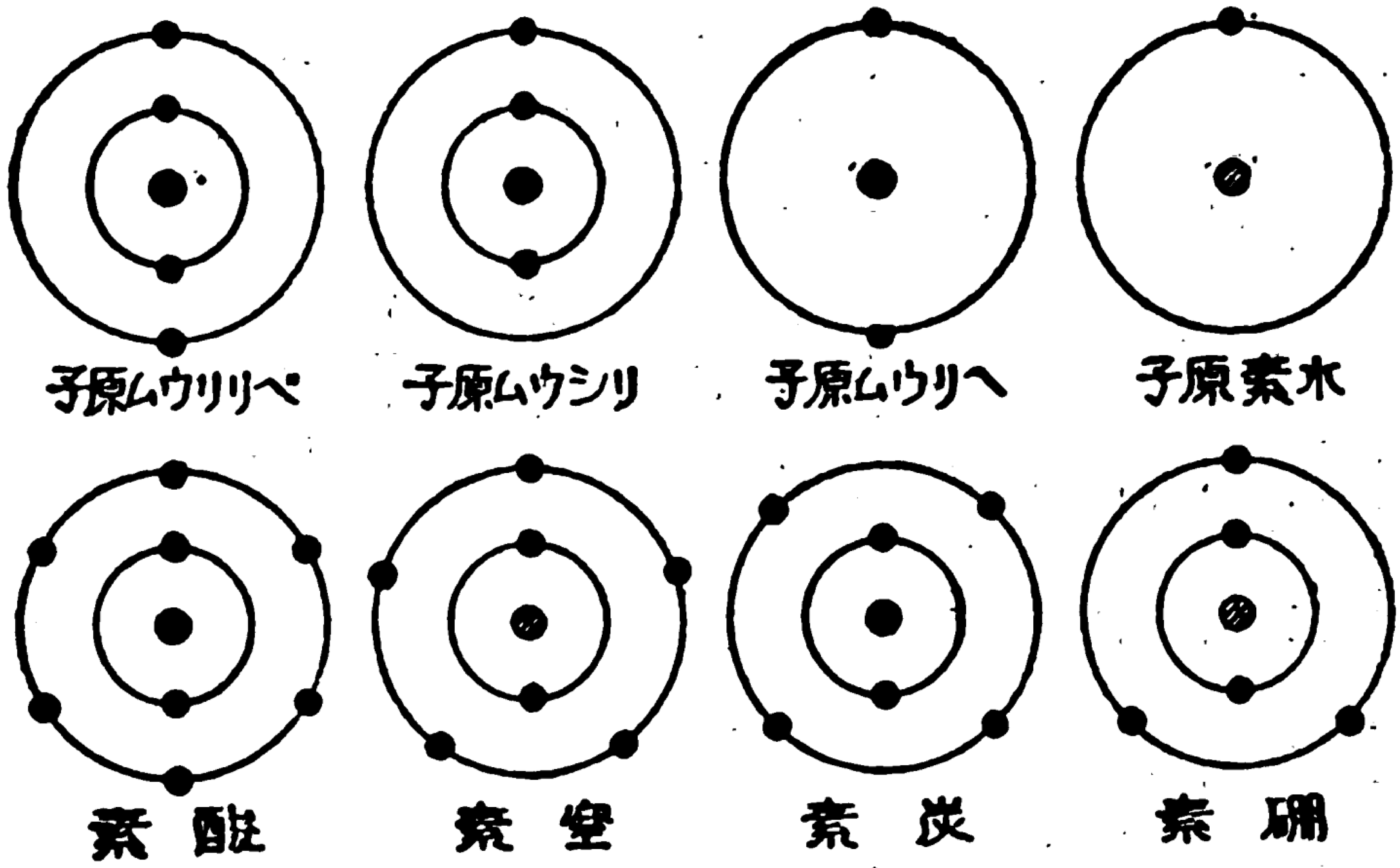
時計用法

『時』で仕事をする郵便局に、其監督官廳から初めて時計の交付されたのは明治七年の事であるが、其時驛遞頭から各局へ布告した『時計用法』の文句が中々振つてゐる。



第一が卷方、『卷切の際に破損する事あり、因て能く注意すべし、卷方十二時を上に見て左へ卷くなり、若し針の動かざる時は、時計の緣に手を掛け左右に振るべし』とある。第二は遲速の調節、第三『日々時計のゼンマイを卷くことを忘るべからず、又必ず盤の十二時即ちⅫ文字の上に長針短針合せし時を卷方の定時とす』第四は壁に掛けずに柱に掛ける樣注意し、第五に『六時を六つ時とし八時を五つ、十時を四つと唱ふる類、これ迄の習なれども、既に日の長短にかまはず、晝夜

であり、二個廻轉してゐるのが太陽素(ヘリウム)、三個廻轉せるのがリシウム、四個廻轉せるのがベリリウム、五個が硼素、六個が炭素、七個が窒素、八個が酸素、九個が弗



電子排列の圖

素、十個がネオンと云つたやうなわけで、一個宛增し加はるに從つて、順次高級の元素になつて行く。而して白金は七十八個、黃金は七十九個、水銀は八十個の電子圏から成立してゐる。故に若しも水銀の八十個の電子圏から一個の電子を取り除くことが出來れば乃ち黃金が得られるわけである。若し二個除去し得れば、白金が生じる理である。

今迄、炭素、窒素、酸素と云へば全然異つたものの如く考へて來たが、かくなつて見ると謂はば年齢の一つ違ふ兄弟姉妹のやうなものである事が解るではないか。白色人種、黃色人種、黑色人種等人種の異同などに就ても、何んだか根本的にちがふやうに考へてゐる人々もあるが、物質界を科學の眞理の光もて見れば炭素、窒素、酸素が兄弟姉妹となるやうに、精神界の眞理の光に照して見れば、全人種すべてがその神の靈を共有することによつて眞の兄弟

平均して二十四時と定められたる上は、此唱を廢るべし」第六、時間の讀み方「長短針共に十二文字の上に重なるを十二時と心得…」とある。心得となつてはまるきりお叱りだ。

妙な監獄

マニラ監獄は米領となつてから模範監獄と評判が高い。が、こゝに珍妙な話は、其監獄の中央に八角堂の様な建物があつて、其堂の周圍、上部を上等席、下部を下等席として、そこで囚人の敎練を一般に觀覽させる事だ。先づ其堂內で役人がベルを鳴らすと、監房間の空地に向つて、淺黃色の服の囚人が一隊づつ、各房から足並を揃へて、手に手に樂器をプカ〳〵ドン〳〵とやりながら出て來る。出揃ふと振鈴で一齊に脫帽、氣を付けの姿勢の下に米國國歌を吹奏し、それが終ると、又振鈴によつて各隊は奏樂入りで異様な體操をし、敎練をやるのである。この見物料上等十仙、下等五仙で、同じマニラ人が隨分澤山見物にゆくとの事である。



姉妹である事が面倒なく解るでありませう。

この樣に物質界の奧義が明らかになつてくると、今まで物質と名づけてゐたものは、即ち電子の一集團に外ならない事が知れる。そして物質と云ふものがあるのでなしに電子團があるのだといふ事がおわかりになると思ふ。さうしてこゝに大切な注意すべき事は電子の本質は物そのものでなくて、驚く事には電子自身は「力」そのものであるとの一事である。

乃ち今までは天上天下たゞ物質あるのみと考へ來つた思想が物の見事に全く土崩瓦壞されて、最近の科學の證明する處に從へば『天上天下、たゞ力あるのみ』と叫ばねば眞理でない事に一變して了ひました。物質があるのでなしに、一個の力の集團があるのです。即ち物質とは力の結晶であるとも云へませう。

然もなほ甚深微妙、驚くに堪へないことは原子內部の構造が明かになつて見ると、今迄何等の關係もないと思つたものの間に不思議な關係を見出してくる。例へば私共の棲んでゐる太陽系は水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星の八つの星が太陽を中心として廻轉し、互に引きつ引かれつして一體系をなしてゐて地上の人類は太陽より來る日光を生命の親とし、また一切のエネルギーの根元としてゐるのです。而して一方人間が同じく地上に住んで一刻も離すべからざる生命の親は空氣で、空中の酸素なしには人間は一刻も生きてゐられないのですがこの酸素の內部構造が不思議にも太陽系のそれの如くに八つの電子團よりなり、陽電子を太陽として八つの陰電子の星が互に引きつ引かれつして廻轉して相扶け相協調して酸素なる元素を構成してゐるのです。乃ち極大とも云ふべき太陽系の構造と、極小の酸素原子內部の構造とが微妙にも符を合したる如く同樣の構造の下に形成されて然も同じ樣に私



珍問

○

問。默つてもの言ふ法あるか

答。お茶の子サイ／＼、戀人の目と目は默つてものを言ふ。

問。そんなら寢てゐて走る法

答。これもお茶の子サイ／＼。汽車の寢臺を買ひ切れば、晩から朝まで寢て走る。

問。そんならも一つ目で聞く法

答。なんのそれしき朝めし前。朝飯前に見る新聞、目で見るけれど『新しく聞く』と書くではないかいな。

○

雲水『獨參を乞ふ。』

和尚『善哉』

雲水『什麼、眉と睫毛との間

共人間の生命を支へてゐるとは何と云ふ驚くべき事實ではありませんか。この一事を見ても私共の棲息する宇宙が同じ筆法に依つて唯一人の作者に依つて造られた作品であることに思ひ及ばざるを得ないではありませんか。

この事實を觀察する丈でも大なる無聲の聲を聞きうるわけである。

極小極大の中間に位する人類の國家、社會、家庭、個人も亦同樣の力の支配下にあつて互に協調し活動を保持しなければ永生し得ない事を悟る事が出來るわけである。

萬世一系の皇室を中心として相助け合つてゐる日本の姿こそ理想のものではないか。

近代科學の母とも呼ばれるガリレオは『この大自然界は數理的記號をもて書かれた一卷の書物である』と叫んだが、私達は更に『この宇宙は一人の作者によつて造られた作品であり、而も今なほ活きて活動せる活物そのものである』と言ひたいのであります。

人間自身が活物であると云つても肉體内にある靈魂そのものは見ることが出來ぬ如く、この宇宙の活動體の中には目には見えぬが、靈なる神が活きて在し、一切を支配してゐ給ふことを信じ得るではないか。

今迄科學は宗教を否定し、宗教はまた科學と一致しないなどと唱へてゐた時代は既に過去に葬られ、今や新しい光が科學の地平線上を打ち破つて東天に皎々と耀き出で、新時代到來を隈なく世界全人類に告げてゐるではないか。

御信用下さい！

小社は云つたからには必ず行ひます。

『修養全集』『講談全集』

◎中途から頁數を減じたり、物を惡くしたりすることは斷じてありません。（卷を逐ふて益々良くと心掛けます）

◎中途から頁數を增加するやうなことは斷じてありません。

◎〆切日嚴守（但し、期日前と雖も、印刷能力以上に達した場合は〆切るかも知れません）

奇答

途』

和尚『眉は大屋根、睫毛は小庇、倶に眼中に雨雪の闖入するを防ぐ。』

雲水『獨眼尚足る、双眼は如何。』

和尚『一眼は物體を正視す、他は口程に物を言はしむるの用に供す。』

雲水『鼻孔一にして足らむ、兩孔何の要ぞ。』

和尚『兩孔素と兄弟、兄弟相反目するも、一は即ち呼吸し、他は即ち嗅ぐ。』

雲水『耳孔是れ任あらむ、耳朶是れ無用の長物、和尚如何々々。』

和尚『咄、耳朶は是れ眼鏡の蔓架而已。』

雲水『然らば更に問はん。髯の任務や什麼』

和尚『可笑しくも無きにゲタ／＼する奴の笑ひを止めるスイッチぢや、喝！』



必ず御覽下さい！

親愛なる諸君！
只今豫約募集中の二大全集
是非之丈は何は措いても御覽下さい
必ず御失望はないと確信いたします

面白い！　面白い〳〵
眞に感銘深い

修養全集

品もよく體裁もよく
本當に爲にもなつて面白い

講談全集

どうして之が

僅か一圓で出來るのか

（普通ならばどうしても三四圓のものでせう）

不思議！ 驚嘆！

必ずほめて下さることと存じます

日本一！

今までにない全集です

之だけはお身のため　御出世のため

御家繁昌のため　子孫永遠のため

而して村もよくなります町もよくなります

天下に良い人が澤山出來ます

ほんとに御國のための犠牲的大出版であります

それで面白い〳〵トテモ面白い

物識にもなる

有益此上ない全集です

キング讀む人
富士を讀む

最近雜誌『富士』の異常な發展振りは天下の雜誌界を驚嘆させてゐます『一體何處迄進展するのだらう』と云ふ聲が愈々高くなつて來ました。『富士』の出現によつて始めてキングと肩を並べる雜誌が出來たと云はれてゐますが、本誌の姉妹雜誌として此くも全國的に好評嘖々たることは兎に角愉快なことです。

此雜誌『富士』の今月號には御大典記念附錄として堂々本文の百頁を割いて『燦たり!!大和魂物語』と云ふ素晴らしい新作講談が特輯されてゐます。『富士』の記事讀物の立派であることは既に定評がありますが、此特別附錄は又一段の光彩を放つてをります。いづれも感激措く能はざる名篇、尚此他の讀物は申す迄もなく毎號讀者歡喜の焦點であります。何卒、本誌と共に御愛讀下さい。

「修養全集」「講談全集」

實物見本が書店へ十月中旬に現はれます

一時も早く早く早く!!

早く!!! 御近所の書店へ御申込下さい

ぜひ之丈は何は措いても御覽下さい!

お勸め下さい!

御近所御知人四方八方におすゝめ下さい

斷じて失望はありません

右確信を以て切にお勸め致します

大日本雄辯會講談社 一同謹白

報いられた『雄辯』

九月號から內容を刷新し定價引下げを斷行して、一大進出を企てた雜誌『雄辯』の活躍は遂に報いられた。從來の六倍に餘る大部數も、發賣後一週日を出でずして全部賣り切れとなり、營業局は全く品切の申譯に忙殺されて居る。

是全く愛讀者諸君の深厚なる同情に依るもの、何としてもこの好意にお報いせねばならぬと、十一月御大典記念號については、有益なる雄辯記事、修養記事の外に

私の描く理想の世界(土田、正木、赤松諸氏) 驚異!驚嘆!成功出世物語(淸澤、澤田、富田諸氏)拔、神に入る熟練鍛錬物語文士諸氏。等の感動美談を網羅し、加ふるに『御大典記念 感嘆感激熱血至誠物語』と題し、憂國の熱情溢るゝ美談集を附錄として非常な人氣を呼んで居る。

ふバアクの言葉を呪みながら、勉強を續けた。

或る時、鳩を射つた罰に、校長から、

『ヴアージルの羅典語の詩を百行暗記しろ』

と、命ぜられた。彼はこのとき考へた。『他人が一度でやることを、俺は十度かゝつて成し遂げよう』といふ豫ての決心を實行するのはこの時だと。

程なく彼は校長の前に立つて、暗誦を始めた。命ぜられた百行はとつくの前に終つたが、彼は平氣で暗誦を續けた。

校長は氣が氣でなかつた。その日校長は他所に行く用事があつて、發車の時刻は迫つてゐたのだ。二百行は終つたけれども、彼はまだ暗誦を續けた。校長はいら〳〵して、ポケットから懷中時計を出して見た。時刻は逼迫してゐる。

『君々、一體君は何のくらゐ暗誦したんだ』

『五百行』と、ウエブスターは平然と答へながら、まだ暗誦を續けてゐた。

校長は驚いて、叫んだ。『ウエブスター君。もうよい。今日これから鳩獵に行つても宜しい』

學院一の咄辯家であつたウエブスターをして、後遂に世界第一の大雄辯家とならしめたのは、この精神であつた。

『他人が一度でやることを、俺は十度かゝつてやり遂げる』

といふ、堅忍不拔の精神であつた。(澤田謙)



亂暴者が一躍勉強家

維新の英雄大村益二郎

維新の英雄大村益二郎も、その青年時代は無暗な亂暴者。江戸の醫學塾にゐても勉強もせず、毎日市中で喧嘩三昧、或日も何處であばれて來たか額から血をたらしたまま歸つて來て、折柄書見してた先輩へもう喧嘩口調。

『おい、今日も醫者坊主の本と首ッ引かい』

『いいや、これア兵法の本ぢや』

案外の答に、大村も鳥渡どぎもをぬかれ、

『へーい、君が兵法を讀むとは不思議だな』

『なんの不思議があるものか、俺はな貴樣のやうな一人一人の喧嘩は大嫌ひな代り、大きな戰爭なら大好きなんぢや』

『さういふ君が、なんでふだんは、醫學の蘭書ばかりひねくつてるのだ』

『だから、貴樣は馬鹿だといふのだ。これからは西洋兵法ぢやなきや役に立たぬ。その洋書を讀むために、先づ手近な蘭學醫書を、研究してるのぢや。どうだ、理窟がわかつたか』

『ふむ、では、先づ蘭書が讀めねば駄目だな』

『さうぢや、どうだ、貴樣も小喧嘩をやめて、勉強せんか、その才氣だ、物になるぞ』

だまつて突立つたまま、腕組して暫時考へてた大村は、俄かに力強い語調で叫んだ。



『よし、俺も勉強して大喧嘩の大將になるぞ』

さすがは英雄、その瞬間から、ガラリ心を入れかへ寢食を忘れての

大勉強。つひに醫者としても兵法家としても當代隨一の名を馳せるに至つたのである。（鈴木彦次郎）

畫三昧に精進する
畫聖圓山應擧

▽天才の萠芽

享保十八年五月朔日、丹波國桑田郡穴田村の百姓藤左衞門の家で一子が生れた。今から丁度百九十五年前の事である。

其子は幼稚な頃から繪を畫く事が好で、一般の兒童の群には加はらず、朝から晩まで獨ぼッちで繪ばかり描いて遊んで居た。

若しその道の具眼者があつてそのさまを見たならば、そこに驚くべき大天才の萠芽が發見されたかも知れないが、不幸にして彼の兩親には全然その眼がなかつた。

兩親は矢張りこの子を百姓に仕立てるつもりで、少し成人すると早速野良へ連れて出て、農事を敎へたけれど、彼は一向身を入れなかつた。

やむなく藤左衞門は村内の禪寺金剛寺へ預かつて貰つたが、彼の畫癖は少しも改まらなかつた。

所がこゝの和尚も亦藝術に對する理解は少しもなく、いよいよ出家させて了はうとしたので、十二歳になつてゐた彼は吃驚して自家へ逃げ戻つた。



藤左衞門も流石に我を折つて、『それほど好きなら勝手にせい』と、それからはなすがまゝに放任しておいた。

斯うなると彼はもう〳〵繪に熱中する一方だつた、花と云はず、鳥と云はず、苟くも形のあるものは見るもの〳〵之を寫生してひとり悦に入つてゐた、慾も徳もなく、たゞ好きだから畫くだけの本能的行動に過ぎなかつたのである。

『一層の事、誰か然るべき先生に就かせたら……』と勸める人もあつたが、藤左衞門は貧乏でそれだけの資力も有つてゐなかつた。

彼は不相變我流で畫ばかり描いて暮して行く中、だん〳〵彼の評判が高く廣まつて、近郷近在から迎へられるやうになり、

謝儀も多少は貰へるやうになつた。

▽傑僧の訓戒

十七歳の春を迎へた彼は、遠く但馬國まで招かれて、頻に毫を揮つてゐると、そこへ立派な坊さんが來合はせて、彼の勉勵ぶりをヂツと見てゐたが、軈てのこと、

『お前さんは若いにしてはなか〳〵よく畫かれる、就いては、一度是非見せ度いものがあるからわしと一緒に寺へ來なさらぬか』と勸められた。

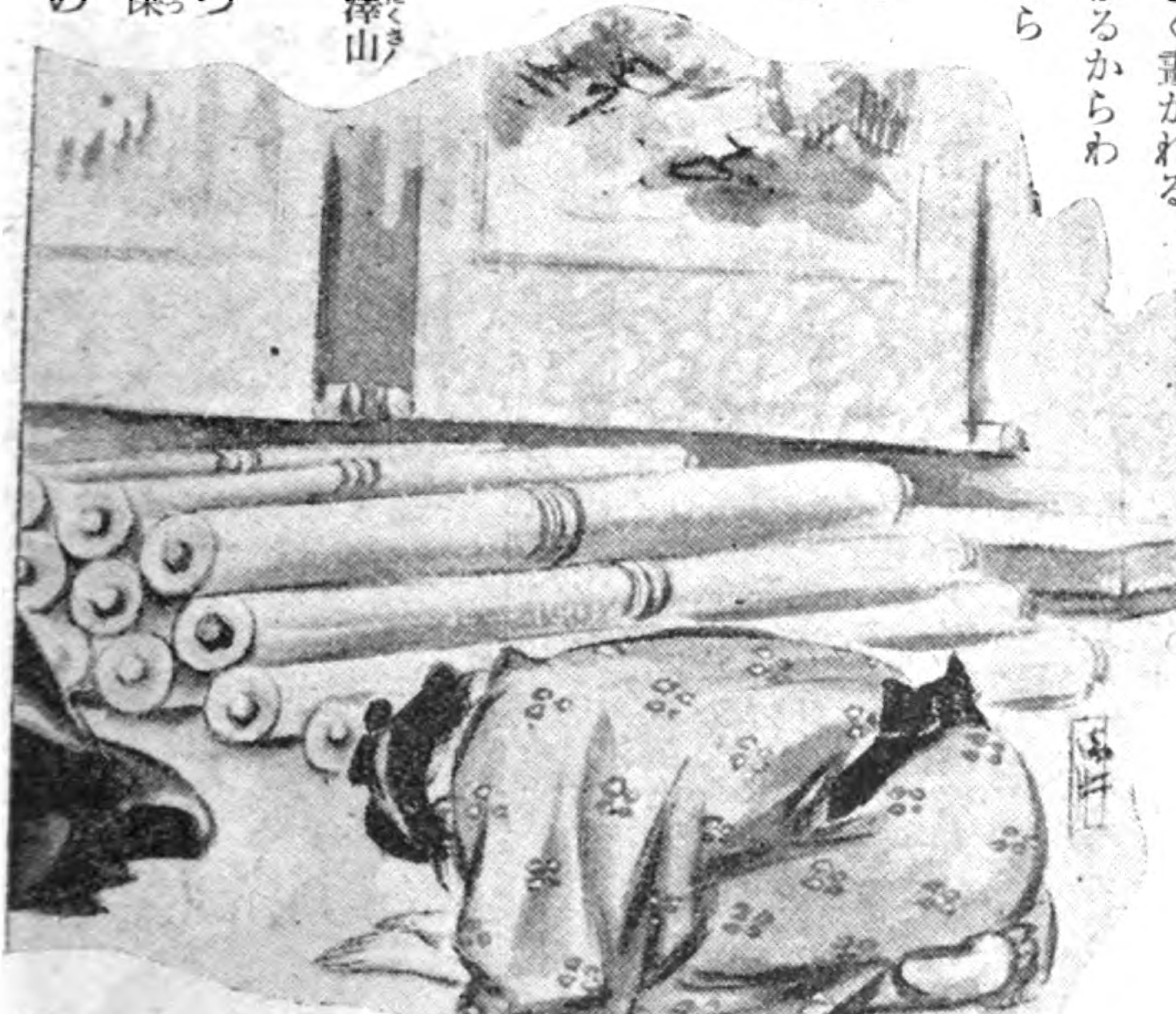
『難有う御座います、では早速お供を致しませう』と、彼は素直に僧侶のあとに隨つた。

寺と云ふのは名刹として知られた大乘寺でその坊さんは時の住職密英上人であつた。

『さア、之を見なさるがよい』

寺へ歸ると上人は早速秘藏の寺寶を澤山見せて呉れた。

それは彼の夢にだに知らない國であつた。見た事も、想像した事もない名畫傑作が、ズラリと彼の眼の前に展開したのであつた。



彼は『アッ』と叫んだまゝ、身動きもせずにその一つ〳〵を見つめてゐたが、宛然魂が畫面に吸ひ込まれて行くやうであつた。

『あゝ、之が本當の畫と云ふものか』と、永い自失から醒めた彼は、感激に燃ゆる眼で上人の温顏を仰ぎ乍ら、斯う呟いた。

優れた藝術の威力は犇々と彼の五體を鞭つやうに壓迫した。

『どうぢやな、斯う云ふ畫を見た心地は……』と、上人が物穩かに尋ねると、何と思つたか彼はさめ〴〵と泣き出した。そして兩手を疊の上へついて、ハッとひれ伏した。

『お上人樣、私が惡う御座いました。どうぞお許し下さいませ』

『ハテ、異な事を……、何が惡いのぢやな』

『私は身の程が恐ろしうなりました、私が之まで描いて居たものは畫では御座いませんでした、お恥しう御座います』

『何もさう恐縮するには及ばない、如何なる名人巨匠と雖も最初から神技を備へたわけではない、みな刻苦勉勵の結果なのだ、そなたも發奮してこの畫に劣らぬやうな名作を世に出すがよい』

親切な上人の訓戒で彼の蒙は初めて啓かれた。彼はそれから間もなく京都に出て、暫く石田幽汀に師事し、別に沈南蘋、仇英、錢舜擧等、明清の大家に私淑して、懸命に勉強した。



畫は漆器の下繪や仕入物の扇子に描いて、辛くも生活の資を得、夜は用意の水風呂に飛込んで睡魔を逐ひ、只管藝道の極致に邁進した。其の間十年、日本に傳來した舜擧の畫は、片ツ端から之を模寫して、研鑽に力め、遂には原畫と模寫との區別がつかぬ程になつた、それは彼の三十歳前後の事であつた。

彼の名は岩次郎、即ち後年の圓山應擧その人である。（柳原緑風）

泥濘にうづくまる
元帥山縣有朋

明倫館は長州藩の子弟に劍道を教へた道場――そこの小使をしてゐた辰之助少年が、或る雨の降る朝近處へお使ひに出た途中で、身分違ひの有地といふ少年に出會つた。詮方がない、彼は路を讓つた。途端に雨泥をビシヤリ。

『ヤイこらツ、足輕辰！　氣をつけろ！！』

一喝と同時に右拳が額へ。……辰之助の双眸には、見る〳〵悲憤の涙。痛かつた爲めではない。父は身分低い足輕、彼はその子だ。とは言へ、足輕辰とは親と子を一緒に馬鹿にした樣なもの、それが口惜しかつたのだ。

『つい、うツかりしてとんだ粗忽を……』でも彼は素直に首を

さげた。途端に又ポカリ！

『馬鹿ツ、いくら何も知らない足輕の子だつて、武士の作法にそんな謝罪法があるか！』

『何をツ』危く口を突いて出ようとした怒りをヂツと噛み殺した辰之助は、無念さにブル〳〵と双の拳を震はせながらも、下駄を脱ぐと、神妙に泥濘にうづくまつて、

『どうぞ、御勘辨を……』

――だが肚裏では、ふん今に見て居れ……

辰之助とは、後の元帥陸軍大將山縣有朋公爵だつたのである。（眞下醒客）

遊學の志に燃ゆる
志士高野長英

『いや、私はどうでもまゐります。江戸遊學の志だけは、どなたの仰せでも挫折致しません』

かう云つた高野長英の目には、燃ゆる火の如き熱望と期望との光が輝いて居た。當時の彼は十六歲、養父玄齋から醫學と蘭學とを學習し、特に其蘭學によつて泰西文物の進步せる狀況を知り、廣く海外の知識を吸收したい希望に燃えた。養父玄齋は夙く江戸に上つて、杉田玄白の門に遊び、醫道に必要なる和蘭語は學んだものゝ、新知識に渇いて居る長英を滿足せしむる程の科學の造詣はなかつた。長英はどうしても江戸に上つて、親しく大家に就き、その蘊奥をたゝかずには居ら



れなかつた。

其折も折、實家の兄直之進（後湛部と號す）が江戸留學と極つたので、彼は居ても立つても居られない程の焦燥を感じ出した。



『阿父さま、どうか江戸へ上らせて下さい』

彼は養父にも說き實父にも賴んだ。併し二人は『家には金が無い』の一語で、きつぱりと斷つてしまつた。長英は殘念で堪らない。何とかしてと機會をうかゞつて居る中に、とうとう逸すべからざる好機が到來した。併し長英の胸には尙聊か不安なものがあつた。そこで彼は自分の漢學の師である阪野長安の許を訪うて、胸中を打明けたのであつた。

『併し下世話でもいふ如く「裸で道中はならないもの」ぢや。江戸へ着いても、又そこで餘分な金が要る。金がなくてはいくら志があつても實行は出來ない』長安は諭すやうに云つた。

『その金はもつて居ります』

長安は驚いて尋ねた。

『十五兩ございます』長英は自若としていふ。

『どうしてそんな澤山な金が手に入つたのだ』

長安は不審さうに長英を打戍つた。

『實は養父の月掛の無盡の金でございます。今日取りにやられたのを幸ひ、この儘之を懷にして、江戸へまゐらうかと思ひましたが、あとで親戚故舊から泥棒呼はりをされるのも殘念と存じて御相談にまかり出でました。聖人は「大行細謹を顧みず」といふ語もござるが、如何に親のものでも無斷に持逃しては、果して細謹と申す事が出來るか如何か、實はその事も御意見を伺ひたう存じてまかり出でたのでございます』

『いや、如何に親のものでも、その承諾を得ぬ中は他人のものぢや。が、それをわしに相談に來てくれた貴公の志はいかに

もたふとい。わしが大人に掛け合つて屹度遊學させる』長安はから云つて、長英の養父に嚴談した。玄齋も伜の志に感じて、終に遊學を許した。長英が蘭學者として、いかに我邦の文化に資する處あつたかは、わたしは戯曲の形を以て、此『キング』に連載した。而して彼の大才は實に此江戸遊學の爲めに涵養されたのであつた。（松居松翁）

一心に皿を鳴らす
大物理學者パスカル

『ブレイズや、そんなにしたら、お皿が壞れてしまふぢやありませんか』

食事半ばに、皿をナイフで叩き鳴らしては、何か一心に考へてゐるブレイズ・パスカルの樣子に、姉は驚いて聲をかけた。

『惡戯をしないで、早くおあがり』

『いゝえ、姉さん、僕は惡戯をしてるんぢやないんです。ねえ、姉さん、僕が皿を掌に載せて、輕く打つと、ホラ、この通りチーンと鳴るでせう、然しね、皿を掴むとね、直ぐ音響が止まつてしまふのですよ。――何故鳴るのでせう、何故掴めば響かなくなるのでせう、僕は不思議でならない』

と、尚も一心に皿を鳴らして考へてゐた。この時パスカルは十歳であつた。今日物理教科書に載つてゐる音響



の原理は、少年パスカルが三年かゝつて（十三歳の時）發見したものである。（岡田實魚）



スパルタ式の教育を受けた
侯爵淺野長勳

明治維新の功臣たる諸大名のうち、八十才以上の長壽を保ち、宮中鳩杖の光榮に浴した、めでたい人は、廣島の舊藩主たる淺野長勳侯である。

侯は、家老から舊藩主の分家に、分家から更に本家と、三度、繰上げて養子になり、遂に侯爵になられた。分家から本家直ほりをするときは、しかも親子づれであつた。維新前から、かくの如く波瀾に富んだ生涯で、維新の際には養父と共に、勤王に盡し、一面には朝廷と、徳川將軍家との間に立ち、將軍の爲にも親切を盡された。

明治以後の官歴としては、伊太利の公使を勤められた。少年時代に、その實父から極めて嚴格な武士教育を受け、それが修養の本になつてゐる。

侯が少年時代、劍術の道場に通ふのに、途中、俄に大雷雨になり、途中、知人の家に立寄り、雨具、傘、下駄など借りて、引返すと、父君は大立腹、

『それくらゐの雷雨に恐れるといふ弱いことで、どうするか、すぐ引返して、稽古に行つて來い

非常な劍幕、母や祖母が、執成してもいつかな聞き入れない、侯は、またもや大雷雨を衝いて、遠い道場に行つた。

槍も稽古に通つた。それは、日出前、暗らいうちから行く。

晝飯は辨當行李に、飯と梅干とに定まつてゐる。或時、祖母さんが、內しよで魚肉を入れたのを、實父が發見して、それもすぐ取捨てさせ、冷飯と梅干とに詰めかへさせた。

少年時代に、かういふスパルタ式の硬教育を受けたればこそ、長勳侯は、諸大名に稀な長壽と健康と人格とを持つてゐられるのである。（横山健堂）

父の慈愛に感奮した
偉傑佐久間象山



『貧乏子の惡たれ坊主！』

『何ツ甘垂の弱虫！』

家老恩田賴母の息と、貧乏侍の倅啓之助はどうしたものか道で會へばいつも火の出る樣な喧嘩をした。然し家老の家には僕が居て加勢するので、折角家老の息を門の處まで追詰めても啓之助は一寸中へ入れなかつた。

『ヤイ臆病者！ 卑怯者！ 早く出て來て勝負せんか。侍の法を知らない弱虫め！ 知らないなら知らないで何でも敎へてやるからおれの家に來い。』

啓之助は腹立ちまぎれに散々に毒づいて家に歸つた。すると父は彼れを呼んで、

『御家老樣のお子樣と喧嘩するなど以ての外だ。しかも知らない事は何でも敎へてやるから來いと云つたさ

うだが左様か。



『ハイ餘り口惜しかつたものですからつい……』

『スリヤお前は何事でも知つてゐると云ふのだな。』

『………』

『それ見ろ、若し本當にやつて來られたらお前も困るだらう。よしお前もさう云ふからには三年間の勉強を許す一生懸命にやれ、今日の廣言を決して忘れてはならぬぞ。』

慈愛のこもつた父の訓戒は少年の肺腑を刺した。これに發奮して一心不亂に學問武藝を勵んだ啓之助は、遂に後年佐久間象山として中外に英名を馳せるに至つた。（川島堰一郎）

尼院を追ひ出された
名女優サラ・ベルナール

『わたしが下へ降りても罰しようといふのなら、わたしは此木の上から飛び降りて死んでしまひます。死んだつて拘留なんかにされるものか。』

少女は高い栗の木の梢の上でから叫んで居る。樹をめぐつて立つて居る尼さんだちは、お互ひに驚きと怖れとに滿ちた視線をとりかはすのみで、答へる語さへ發見し得なかつた。たゞ一番年を老つた教母は、それでも臨機の手段を取る即智をもつて居た。

『もう〳〵決して罰しはしないから、降りて來て下さい。』

『ほんたうに。』天上の若い聲。

『大丈夫。』地上の老けた聲。

少女は猿よりも敏捷にする〳〵と幹をつたはつ一降りて來た

これは後年佛國第一流の女優として、その美貌と、天才とで、世界の劇壇に濶歩したサラ・ベルナール夫人の幼時の事である。

サラは十二歳の時、巴里の都に近いヴェルサイユのグランシャンに在るオーギュスタン尼院に送られて、そこで教育を受けつゝあつた。が、生來の不羈奔放な野性は、彼女をこんな幽靜な牢獄生活に滿足せしむるわけにはいかなかつた。彼女は同窓の二人の少女を誘惑して、逃走を企てた事もあつた。而してそれが途中で露顯して、引戻されるに至つても、彼女の狂暴性は、一向靜まらなかつた。彼女自身の語るところによれば、次の樣な亂暴な事さへ平氣でしたといふ。

『わたしは或時、墓地と尼寺との境に在る煉瓦塀の上に腰をかけて居た事がある。そこへ恰度ヴエルサイユの大僧正が葬式の導師としてやつて來て、しかつめらしい顏をして說教をして居る。その殊勝らしい態度が馬鹿々々しくなつたので、わたしは大きな聲で唄をうたつて、その葬式を滅茶々々にしてしまひました。これが尼院中の大騷動となつて、わたしはとう／＼三日の拘留を喰ふ事になりました。そこでわたしは近いところに在つた、高い栗の木へ登つて、院内の人々の目から姿を躱してしまひました。』

ところが尼僧たちは犬をつかつて、サラの蹤跡を探させた。



犬は忽ち少女を嗅ぎつけ、その木の下で猛然と吠え立てたので、忽ち露顯に及んだのであつた。而していふまでもなく、彼女は此尼院から遂に放逐された。併しその悲運は却つて彼女の將來の運命を打開する事になつた。この尼院生活が如何にも自分の性に合はないことを骨の髓まで覺つた彼女は、勇躍一番

國立俳優學校の入學試驗を受けて之れに通過し、とう〳〵俳優志願者の生活を初めた。そして專念努力、幾年の後には、佛國無比の名優となつたのである。彼女にして栗の木登りの大冒險をやつてくれなかつたら、われ〳〵の世界は、此大天才を舞臺の上で見る事が出來なかつたであらう。（松居松翁）



熱烈火の如き意氣！
巨人ムツソリーニ

腕白で困り抜いて居たベニト・ムツソリーニが洞聲をあげて演説の稽古して居るのでそつと母親が覗いて見ると、『しつつ！　しつ！　御母さん、默つて、僕は今演説してるのです。全伊太利は僕の演説に感動する時が來ます』

これはベニトが十一才の時であつた。ベニトはがき大將であつたが只だ理もない惡戯ではなかつた。伊太利統一の義人ガルヴアルヂーの崇拜者であつた。鳥の巣を叩落して追驅けられた時も、隣りの果實を盜んで友達が足を挫いた時も伊太利統一の勇士振つて指揮棒を振る少年であつた。古代世界を支配したローマは彼の理想の國であつた。算術の本にも國語の本にも所嫌はず書付た文字はRoma Roma ROMA。喧嘩屋の主義者の負けじ嫌ひの父アレサンドロもベニトには一歩を措いて居たので、彼が師範學校を卒業した時、プレダツピオ市の書記に申込み、拒まれるや、

『オイ、君達覺えて居ろ、ベニトには將來があるのだぞ、今に君達は後悔するぞ』

と啖呵を切つて還つて來た。ベニトの生涯は波瀾重疊、黑シヤツ宰相となるまで明日を豫測し難い變化の連續であるが要するに『全伊太利は感動する』此の信念が彼を今日あらしめたのだ。（木下乙市）

天才畫家レンブラント

從妹の木履に繪を描く

或夏の夕方、和蘭はレエデンの町を圍む城壁の上に腰をかけて、刻々にかはつて行くヘーグ街道の景色を、飽かず眺めて居る一人の少年があつた。彼はやがて小さい手帳を隠袋から取り出して、その景色を寫し出したが、若し側でそれを見て居た人があつたら、彼が自然を描寫するその才能に打たれた事であらう。併し少年はヘーグ街道を向ふから來る一人の老人の姿を見た時、われにもあらず手帳を棄てゝ身を起した。

『あゝあれは叔父さんだ』

此少年は學校の放課時間に、この叔父さんの娘のウヰルヘルミナといふ少女の木履へ畫をかいた。それは家鴨や、鷄や、豚などが遊んで居る繪で、色チョークでそれを綺麗に塗つたので、ウヰルヘルミナは非常に喜んだ。

『まあ、わたしの履はこんなに綺麗になつたわ』少女はかう云つて、朋友や、先生にもそれを自慢した。

するとミンヒール・スピールブルグといふ先生が非常に怒つた。學校の時間を、こんな事で費すといふのは怪しからんといふので、烈しく此少年を叱りつけた。而してウヰルヘルミナの叔父に手紙をもたせてやつた。これは前日の午後起つた事で、少年はもう學校へ行く勇氣もなく、けふは一日この城壁の上に腰をおろして、誰か學校から自分の父に苦情を申し込んで來はしないかと心をいためて居たのであつた。併し彼の天禀の藝術的衝動は、此美しい景色に對して昂められずには居ない。思はずチョークを執つて、描寫の三昧に入つてしまつたのであつた。が、その小さい心の法悦も叔父の姿にかき亂されて、彼は忽ち現實のみじめさに直面しなければならなくなつた。

『甥よ、何だつて今時分、そんなところにまご〳〵して居るんだ。おれは、これからおまへの阿父さんや阿母さんに逢ひに行くんだ。此木履の繪の事について』

少年はいよ〳〵一大事の起つた事を知つた。叔父は從妹の履にいたづら畫きをした事について、非常に怒つて居ると見える。

『叔父さん、許して下さい。わたし、もうそんな惡戯はしませんから』

『なに、馬鹿な事をいふんだ』叔父は却つて驚愕の目を睜つた。『今、スワンネンブルグといふ畫の先生が、この木履の畫を御覧になつて、これは將來見込のある少年だ。わしの弟子にして仕込んでやらうと云つて下さるので、其相談をしようと思つて來たんだ。さあ降りて來い』

少年はわれを忘れて城壁から飛びおりた。而してかねての望み通り繪畫に終生を打込む機會をつかんだ。



此少年こそ世界に名高き和蘭の畫家レンブラント・フアン・リンであつた。（松居松翁）

警官を叱咤する大宰相クレマンソー

強敵カイゼルの前には迚もフランスは敵でないと人々が云つて居た、其フランスを敗北の運命より救つた人は誰あらう虎のクレマンソーの獅子吼イヤ虎吼であつた。又講和會議では世界の立役者ウイルソンを田舎者の新参とばかりに飜弄したあのクレマンソーは其革命的氣魂と、世界をへいげいする膽力を何所から得たか。それは彼が僅か六歳の幼童の時であつた。

バタ〳〵と室内に闖入した數名の警官は有無を云はせず父親を共和陰謀者として拘引しようとした。彼は飛出して玄關にはだかり、

『君達は共和國の大統領になる偉い人を知つてるか、御父さんを何うして引張つて行くのだ』

と怒鳴りつけた。僅六つの少年、日頃父親の感化によつて壓制に反抗する強い精神を吹込まれて居たとは云へ、人並外れた大膽さであつた。其時彼は骨の髓から共和主義の鬪士となつた。パリの醫科大學を出てから社會運動のため各國に流浪したがナポレオン三世が追はれ巴里モンヤートル區長



に任命されてからはトン〳〵と花々しい政治の梯子をよぢ登つた。（木下乙市）

入選漫畫

夜店の木

山田椀久

一、人のよささうな植木屋が毎晩夜店に出る。買ひたい木が一本ある。眺めてゐると植木屋が『旦那、相場をつけてくださいよ、いくらでも…………』

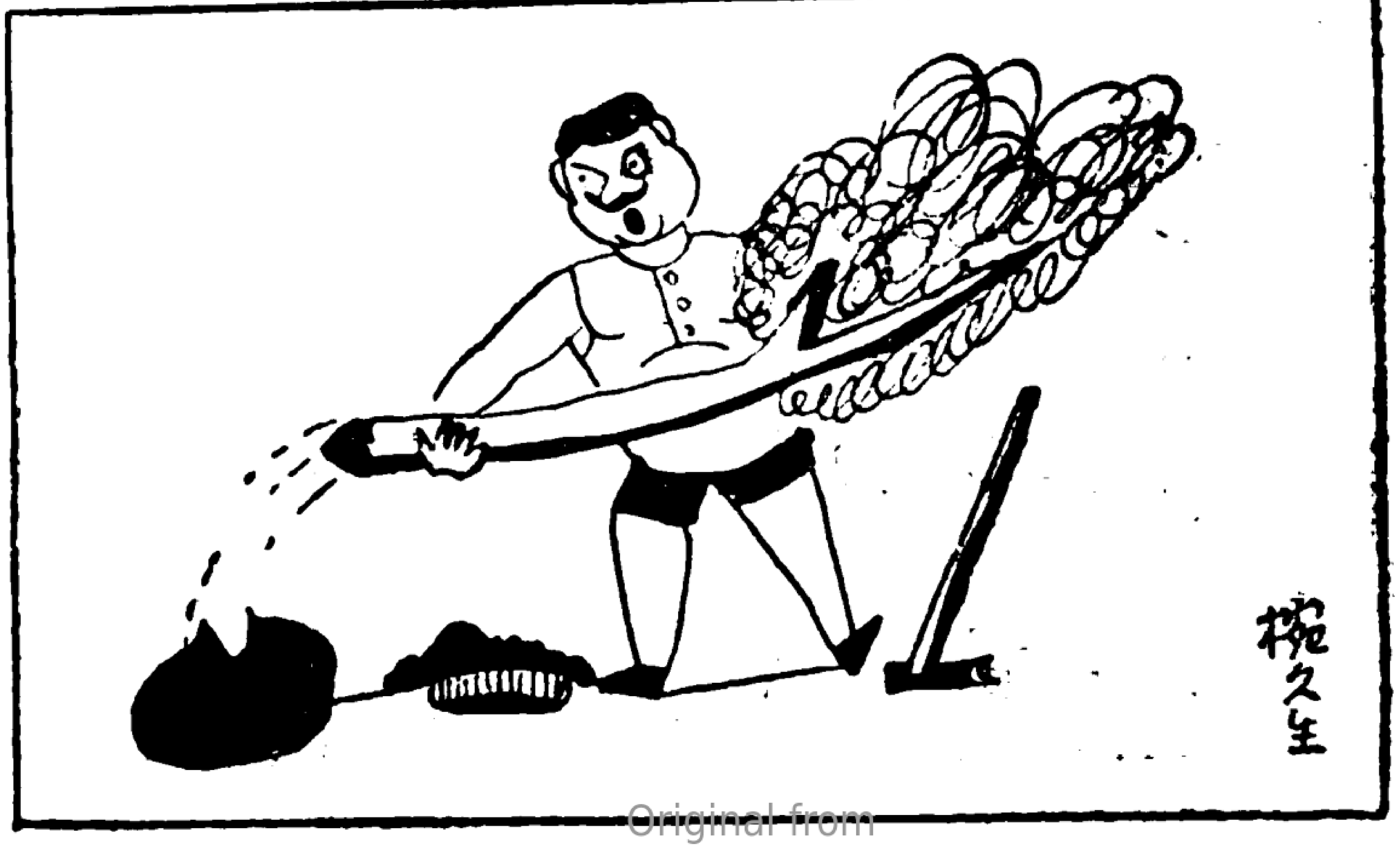




二、そこで、三圓の木を一圓にしろといふと、植木屋はお客の袖に手を入れて二つたゝいて『これで買つて下さい』といふ。二圓のことだ。

三、それを、やつと半値の一圓五十錢にまかして得意になつて引上げた。お客は途々考へた。『これで庭も一段と光を添へるだらう』と。





四、ところが圖の通り木には根がなかつた。カン〳〵になつて怒つたお客が翌晩、夜店へやつてくると、かの植木屋はもう姿を現はさなかつた。

大慾は無慾に似たり

圍棋準名人 中川龜三郎

圍棋は二人で擲つものである。自分だけひとり旨いことをしようたつて、さうはゆかない。『貪るは勝を得ず』である。彼れにも相當の地步を與へ、自分もよく擲ち、唯、其間に毛筋ほどの利を得、それを集積して全局に於いて、勝を制すれば足るのである。

世の中の事もさうではあるまいか。商人の秘訣は薄利多賣にあるとか聞いてゐる。安ければ買ふ者にとつても利益である。隨つてよく賣れるといふことになる。個々のおかげは少くとも賣れれば必ず利があり、賣高が多ければ全部に於いては、巨額の利益を獲ることにならう。ひとり商人の場合ばかりでなく、この世の中はすべて共存共榮、俗に所謂持ちつ持たれつである。自分だけ旨い汁を吸はうといふのでは、末が榮えよう筈はない。

然し、口には敵にも相當の地步を與へると言ふことを知つてゐても、實際に當つては其辛抱が却々出來ない。ともすれば慾に驅られて一擧に敵を屠らうと策動し易い。これは吾々は打過ぎといつてるが、破綻はそこから生じ、一局を放了する禍因となる事が多い。大慾は無慾に似たり、人生に於いても山氣のために身を誤る人が多いが、よく似てゐる。

が、然し、辛抱は隱忍であつて屛息ではない。具體的に說くなら、此處に一目敵にとられる手があり、彼處に敵の十目をとる手があるとする。一目と十目では無論十目が大きいが、彼處の十目は孤立



ほほづき

まつかなく
ほほづきさん
あなたは子供か
としよりか
あなたの着物は
赤いのに
あなたの
頭は
はげあたま。
（大川はつえ）

おひげ

祖父ちやんおひげは
白いひげ
白くてきらく
銀のふさ
父ちやんおひげ
は黒いひげ
黒くてすゞしい
ぼつちり毛
（野村喜美子）



して大局に關係せぬが、この一目を助けてゐれば自他の活形に關係するといふ時に一目を救けるのが辛抱である。他日盤上に風雲が捲き起れば、この一目がものをいふ。即ち、局部では辛抱した譯だが、大局から見れば、敵の缺點を衝くために、己れの缺點を守つたことになつて、勝つ手段である。味方に缺點なく、敵に弱點が多ければ、よし、表面の形勢が互角でも、實質に於いては遙かに優勢といふことになる。事業の基礎が堅く、



中川龜三郎氏

信用が厚ければ、一朝不景氣が襲來しても惧るゝところなく、好景氣來に際してはぐん／＼のびてゆくと同樣である。

結局辛抱とは、勝たんがために、餘力を殘して置くことで、一に辛抱二に辛抱三に辛抱は結局、一に勝たんがために努力し、二に勝たんがために努力し、三に勝たんがために努力すると、何等變らない。心の働きと形の上の表現だけの差に過ぎない。私なぞは、生れて六十年、圍碁といふ一小技藝に沒頭してゐるので、其戰法を應用して、處世上特別の利を得たと誇張するだけの經驗はないが、自ら他人を裏切る氣にならないだけの辛抱が出來たのは、或は其お陰かもしれない。よし、他人に裏切られても德は孤ならず、活きる道には惠まれてゐる。萬藝一心とやら、棋局も人生も結局は同じ樣なものだと思ふ。



蓮の花

あか蓮しろ蓮
お池に浮いて
大蓮小蓮
お風にゆれて
夢のお國に
咲いてゐた
（吉堂芳明）

夕ぐれ

夕燒赤いな
あすは天氣だ
お家の父ちゃん
畑歸り
おくはをかついで
赤い顔
お酒も呑まずに
赤い顔
（網川みつる）

キング講座

良犬を得る秘訣

高橋虎雄

百聞一嗅に如かず

我々人間はよく百聞一見に如かずと云ひますが、犬は見る丈では未だ満足が出來ません。嗅ぐと云ふ事が、聞く事見る事よりも、信ずる事の一要件となつて居ります。

或晩愛犬チヤーは私共の聞く事の出來ない微妙な音を感じ、突然興奮して、押入の襖と疊との隙間を切りに嗅ぎ始めました。それから如何にも自信ある態度で、どうか押入を開けて呉れとホワイン（鼻聲）するのでした。

『この中に鼠の隠れ居る事最う疑ひありません、萬一さうでなかつたら、二度と私の鼻を信頼しません、どうぞ〱。』チヤーの眞劍味に動かされた私の手が押入の襖にかゝるや、犬は最う闖入して中では、ガタ〱キユ〱と立廻りの音がしました。それから暫くして、大鼠をくはへて出て來た彼の得意の表情は、さながら芝居で見る先代萩の鐡之助が鼠をふまへて見えを切つて居る樣でした。

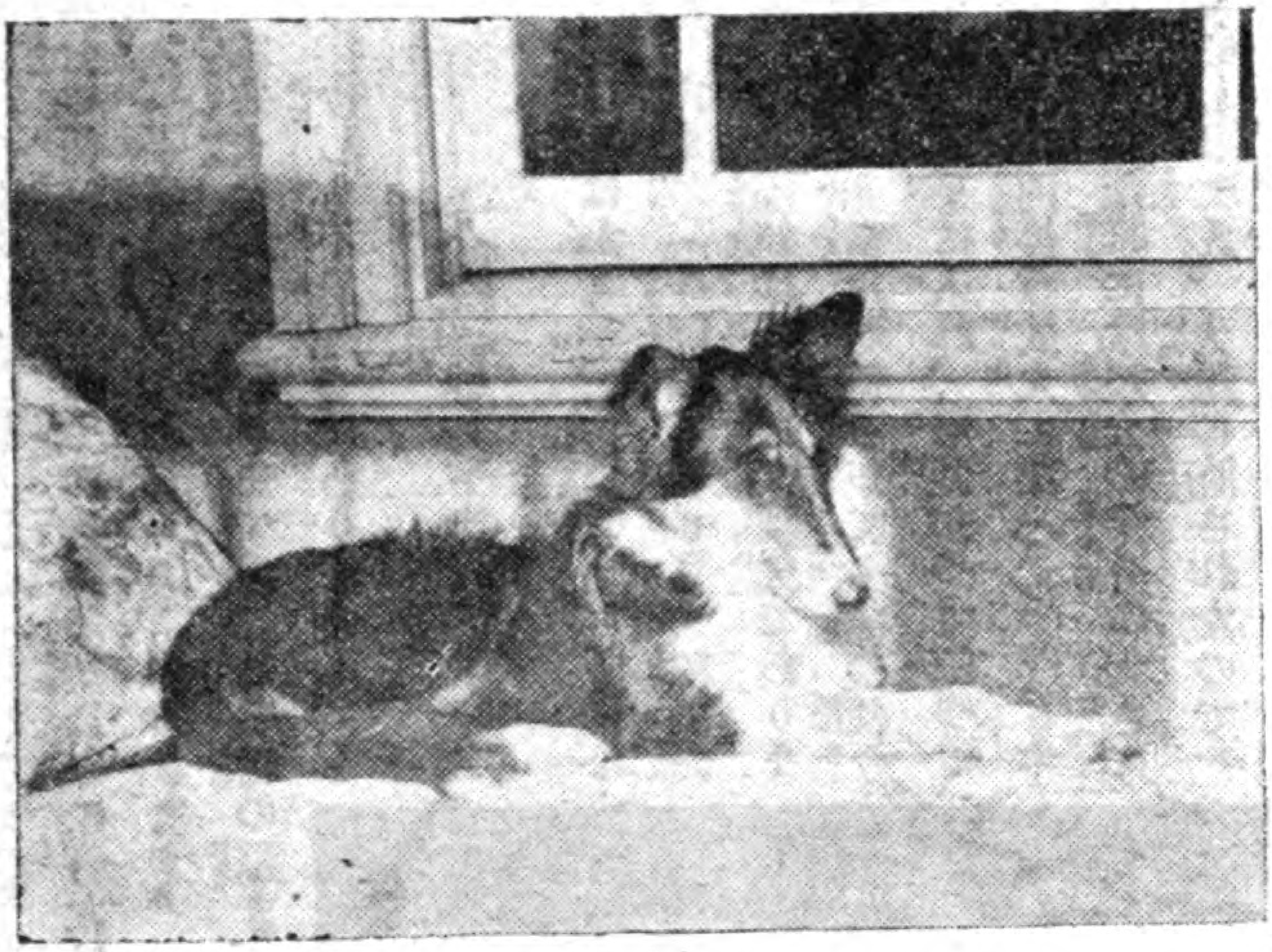
この犬の鼻がきくかきかぬかと云ふ事は、良犬を見分ける大切なテストの一つで、この力の鋭敏でない犬は良犬とは云はれません。

犬の三等級と名犬

一體良犬とはどう云ふ犬を云ふのであるか、私は各種の犬を普通三つの等級に分けて考へて居ります。平凡な頭腦と體型を持つものを凡犬とします。どんな良い毛並と姿をしたものでも、低能で主人と他人の見境のつかぬ樣な犬は駄犬であります。それから凡犬以上の優秀な頭腦と體力又は體型を備へて居るものを良犬とします。併し一向風采の上らぬ犬で駄犬だと思はれて居たものが泥棒の用心にかけ拔群の功名をするのもあれば、又獵犬で外見は全く駄犬の樣でも、いざ獵場となれば一廉の良犬ぶりを發揮する事はまゝある事であります。で、御家庭

で駄犬だと思つてお飼ひの多くの犬の中にも隱れたる良犬のある事を私は信じます。

前に述べました三等級の外に、も一つ名犬と云ふのがあります。良犬を幕内力士とすれば名犬は横綱でせうが、この犬の横綱は滅多に世の中に出ません。最高の頭腦を持つた主人思ひの結晶かと思はるゝ犬を云ふので、西洋人の所謂ノウブルドッグで有ます。例へば四十人も人命を救つたサン・バーナードのバリーや十四年間も主人の墓を守つたスカイ・テリヤのボビーは此で、我邦にも物部守屋の墓を守つた名犬のあつた事を、嘗て動物愛護會で三上參次博士が話された事があります。



久邇宮御愛犬レイシヤ

頭腦の最も發達するコリ種

黒ん坊の赤ん坊

私の永い經驗によりますと、犬が良犬となるも、駄犬となつて仕舞ふも多くは、生れて四ケ月目位より成犬になる迄の間の躾け方如何によるものでありますが、玆に見逃がす事の出來ぬ生物學上の事實があります。

白人と黒人の混血兒をミユラトウと申します、そのミユラトウと白人との混血兒をクオドルーンと申します、その又クオドルーンと白人の混血兒をオクトルーンと申します。最うこのオクトルーンになりますと誰が見ても白人と少しも違はない位。この種の混血兒は米國に澤山居ります。

彼地一流の某大學の男學生と女學生との間に淸き戀愛關係が成立つて、樂しい家庭を作つた。この男學生は純粹の米國人郎ち白人でありましたが、女學生は前に申しましたオクトルーンであつた。勿論この事はこれ迄學校では秘密にされて居り、本人自身も自分は白人と少しも違はないと思ふ位でありましたから、默つて結婚したのでした。やがて目出度姙娠と云ふ事になつて月滿ちて玉の樣な赤ん坊が生れると思ひきや、とんでもないものが生れた、赤ん坊でなくつて黒ん坊が生れた。暫くして

産婦は自分の生んだ黒ん坊の赤ん坊を見て、吃驚すると同時に自分の秘密が最愛の夫に知れる悲しみに打たれて、アツと云つて人事不省に陷つたと云ふ實話があります。

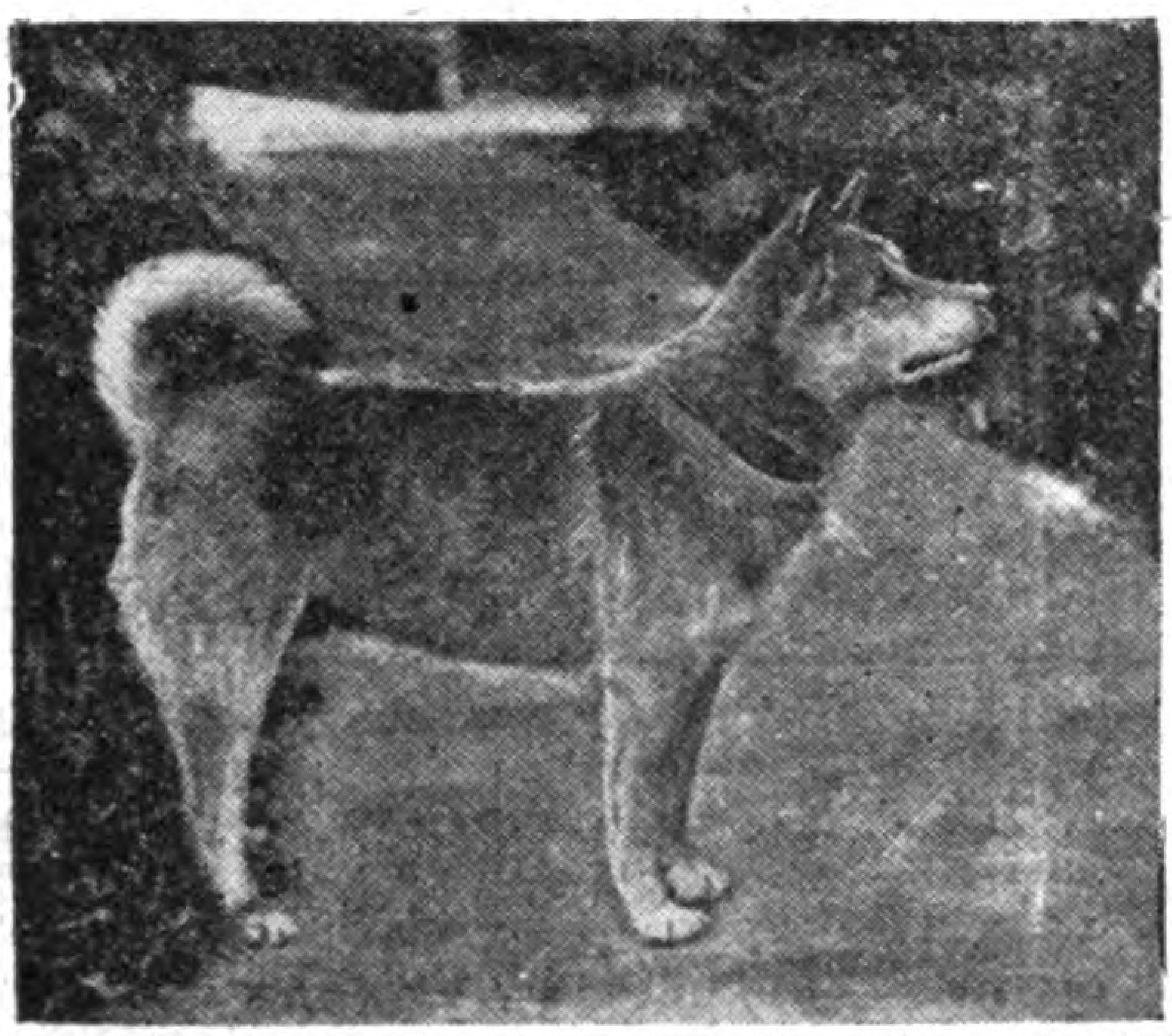
私共犬を飼つて居りますと、この種の驚きは常に經驗する處で、少しも不思議ではありません。

犬は育ちより氏

先日私はかう云ふ質問を受けました。曰く。『今飼つて居ります秋田犬は、その兩親は見事な大型犬でありますから、非常な期待を以て多額の代金を拂つて手に入れ、可愛がつて飼つて居ります内最う成犬になつたのですが、驚いた事には親犬の半分の大さにも達しません。犬屋に瞞されたのでせうか』云々。

私の判斷いたしますに、之れは瞞されたのではなく、前に述べました黒ん坊の赤ん坊が生れたと同じ理由でありませう。良犬を得んとする時は唯當の兩親を吟味した丈では充分でありません。

我々人間は『氏より育ち』と云つて、教育環境の力を重く見て居る樣ですが、犬はその反對で、育ちより氏であります。主人思ひの良犬は主人思ひの良犬種の系統からでなければ生れません。いくら仔犬時代に教育いたしましてもその力には限りがあります、生れついた素質には勝てません。で、良犬を得んとするには出來るだけその血統を確かめなければなりません。さうして大概、良犬にはその血統書がついて居る筈であります。



純日本種にて頭腦のよく働く紀州猪犬

總領の甚六と末子の甚六

犬が身心の完全なる發達を遂げます年齡は種類によつて相違がありますが、概して大型犬は小型犬よりも長くかゝり、同種の中でも牝犬は牡犬より早く成熟期に達します。先づ普通、グレイトデーン其他の大型犬は二年半を要し、ポインタ、セタ、ブルの中型所は二年で、エイヤデール其他のテリヤは一年半であります。頭腦の最も發達すると云はれて居りますコリやウルフドッグは三年の長い時を要し、狆、パグ、ポマレニヤンは小型でも二年かゝります。

良犬は右の年齡以上の兩親から生れるのが多い。人間でも總領の甚六は成熟しない兩親から生れるのと同じであります。併

し犬には又末子の甚六と云ふのがあります。それは一期に生れます仔犬の中末になる程體質が貧弱になるからです。

ハチワレは迷信、良犬は頭腦が第一

或る地方の方から、

『宅へ何時となしにまぐれ込んだ雜種犬は利口でありますから飼つてやらうと喜んで居りますと、老人はハチワレ犬だから家に置くことはならぬと申します。私が嘆願しますとお前は家が大事か犬が大事かと申します。それ位ハチワレは不吉なものでせうか。』

このハチワレ説はよく耳にする事ですが、無論何等科學的の根柢を持たぬ迷信で人間の丙午説と同じく困つたものです。

普通の愛犬家は犬の毛並や形のよいのに迷はされ勝ですが、美人が必ずしも賢ならず、いくら縹緻がよくとも低能では仕方がありません。良犬を選ぶの要は頭腦第一で、毛並其他に迷つてならぬ事です。

仔犬のメンタルテスト

或高貴の御方鎌倉御別邸にウルフドッグの仔犬が八匹生れました。彼是もう六ケ月になりますので私は主として其メンタルテストをする爲め參邸いたしました。ウルフドッグの一番の缺點は臆病な事と野性であります。私は先づ犬の最も大切な嗅ぐ力と聽く力及び視力の優劣を試驗せねばなりませんでした。これに及第したものでも、臆病な犬、弱い犬、無暗に咬みつく樣な犬は落第といたしました。

私は犬の頭腦が今少し發達した第二次のメンタルテストにはいつも食事を與へる係のボーイと高貴の御方とを區別する事の出來る犬を優等とするつもりであります。



動物美談
美しい鶴の愛情

弘中咲子

昔は日本の何處でも見られた鶴、その鶴が今ではこの八代村と鹿兒島縣の一所より外には見られなくなりました。

八代村は山口縣熊毛郡にありますが、毎年冬になると、必ず鶴の大群が訪れて、一冬をこゝで過ごしては、また北の空へと歸つてまゐります

八代村では、この珍らしい訪問者のために嚴しい規約を結んで、この靈鳥を保護してをります。私は病を養ふために、一冬この村へまゐつて、鶴に朝夕を慰められたことがあります。

朝、夜があけて、人の顔がやうやう判るくらゐになりますと、鶴の高い澄みきつた聲が全村の空に響きわたります。その鳴き交ふ高音に、村人は呼びさまされて、希望に充ちた朝な朝なを迎へるのであります。



鶴は多く田におりて、田螺や泥鰌を取つては食べながら、一日を過ごします。而してそのおりる場處が大體定まつてゐて、甲の田には甲の鶴の一家族がおりる權利をもつてゐるといつたやうなことになつてをるらしいのであります。もし他の鶴が、この場處を侵すやうなことがあると、雄鶴が

『ココココーカ、ココココーカ』

と、鳴いてその侵入者を追出さうとします。恰も『こゝは私達の場所だから、あちらへお出でなさい』とでも云ふやうに——。

私の居た宿のすぐ下の田には、いつも三羽の鶴がおりて來ました。大抵鶴は雌雄の親鶴と二羽の子鶴をつれた一家族のものですが、この一家族は子鶴を一羽失つたものと見えて、いつも三羽づれでありました。

ある日、この三羽鶴の地域内へ、近所におりる四羽鶴の家族がはいつてまゐりました。すると、父鶴は、

『ココココーカ、ココココーカ』

と、鳴いて、侵入者の不都合を詰りましたが、なか〱出て行かうとしませんので、父鶴は怒つて追つか

けてまゐりました。すると四羽鶴は小山の方へ逃げ出しましたが、父鶴は尚もその後を追うて、容易に歸つて來る樣子がありませんでした。あとに殘つた子鶴は、母鶴の方を見ながら、心配さうな樣子をしてゐましたが、あまり歸りが遅いので、長い首を一層長くして、ヒーヨ、ヒーヨと鳴いて、母鶴に訴へてゐるのが、いかにもいぢらしく哀れに思はれました。母鶴は子鶴があまり父鶴を案じて鳴きますので、一聲高く、ツルーと呼びかけました。すると、カーと答へて、父鶴は歸つて參りました。その時の子鶴は、いかにもうれしさうに父鶴の側へ寄つてゆきましたが、その情愛の美しさには、見てゐた私も涙ぐましいほどでありました。

夫婦鶴の中の一羽が、ツルーと唱へれば、その配偶者の方が、カーと鳴いて和するのが、鶴の習はしなのであります。

長いものを持つてゐなければ人間が二間ぐらゐ近寄つても、鶴は決して驚かないで、ゆつたり遊んでをります。鶴はよく村の人達を知つてゐて、他郷の人だと油斷をしないといふことであります。



雨になるとか、また天氣になるとかいふお天氣の變り目には、全部の鶴が相連れて、高く飛翔して、ツルー、カーと呼び交はしながら、亂舞いたしますが、その壯觀は實に天下の觀物であります。そして一齊に田におりて來ては、一種の面白い足どりで滑走をいたしますが、鶴ダンスとでも申しますか、その姿には思はず微笑ませられます。

夕方になると、鶴はまた一齊にたつて、西の山の宿所へと歸つてゆきます。その山では、百羽にあまる鶴が、點々として地上に眠るのですが、用心深い鶴は、必ず終夜交代に歩哨の鶴をおいて、休むのであります。

時々村人が、夜中用事があつて、その近所を通ると、その歩哨のために鳴き立てられて、大いに驚かされると申します。

昔から目出度いものとされた、美しい姿の鶴、その鶴は氣高く上品なその姿のやうに、その態度も悠揚として氣品があり、また優にやさしい心をさへ持つてゐるのであります。



理想小説

死よりも強し

鶴見祐輔

野崎貞雄畫

一

ハイド・パーク・ホテルに一週間を過した中江眞人の一行は、駐英公使森男爵の世話で、英國議事堂から十分程南にある、セント・ジエームス館といふ大きい七階建のアパートメントに移つた。それはホテルでは、人眼につき易く、又秘密が洩れ易い。さりとて一軒を持つのも召使などの關係でうるさいから、その折衷案として、英國でそろ〱流行り出したアパートメント生活を初めたのだ。

大きい中世紀城塞風の門を入ると、石で疊んだ中庭。その突き當りの大きい玄關を入ると、制服金釦の玄關番が、血色のよい赤ら顔に、柔和な眼をして、悠然と控へてゐる。鐵格子に部厚な硝子を張つた扉をあけて、内に入ると、波斯絨毯をしきつめた左手に事務室、右手は大きい梯子段、上に中世紀風の欄干を引き廻した廊下、壁には馴鹿や、熊や、鹿の首の剝製を打ちつけ、古風な鐵砲や、槍などが、掛けてある。

倫敦の物音は、どこに消えたかと思ふ程、森閑として空寺のやうだ。

廣間の隅に大きい煖爐、わざと丸太の薪を燃してある。パチパチと薪のはねる音、赤々と燃え上る火。

その四階南向き、大きい貴族の庭の芝生に面した一角が、中江眞人の住居、戸をあけて入ると、薄暗い間、帽子掛け、鏡、洋杖立て、椅子兩三脚、それを通つて入るのが二十疊じき程の應接間、中央にエリザベス式の大きい木の机、重い立椅子、鞣皮の大きい安樂椅子、長椅子、部屋の隅の小卓の上に花瓶、赤い薔薇の花幾輪、足音のしないやうな部厚な毛氈。さうして無くてならぬもの、煖爐。

次の左部屋が食堂、右手が、書齋、その奥が閑寂な寢室。

それが眞人の倫敦の假住居である。

同じ床の三軒置いて隣りが、小早川輝男の部屋、これは寢室と食堂と小さい應接間。それから廊下を左へ折れて二軒目が小笠原剛の部屋、寢室と居間の二つ。

それで一行が荷物を纏めて引移つた。

『先生、僕の部屋は僕には贅澤すぎますね。二つも部屋があつちや多すぎらあ。先生、一つのところはありませんかねー』

と訊いた。

眞人は笑ひながら、

『鄕に入つては鄕に從へさ。僕のところなんか、まるで殿樣ぢやないか。それも仕方ないさ』

と言つた。

『先生はあれで結構ですよ。しかし、僕は……』

と言ひかけると、

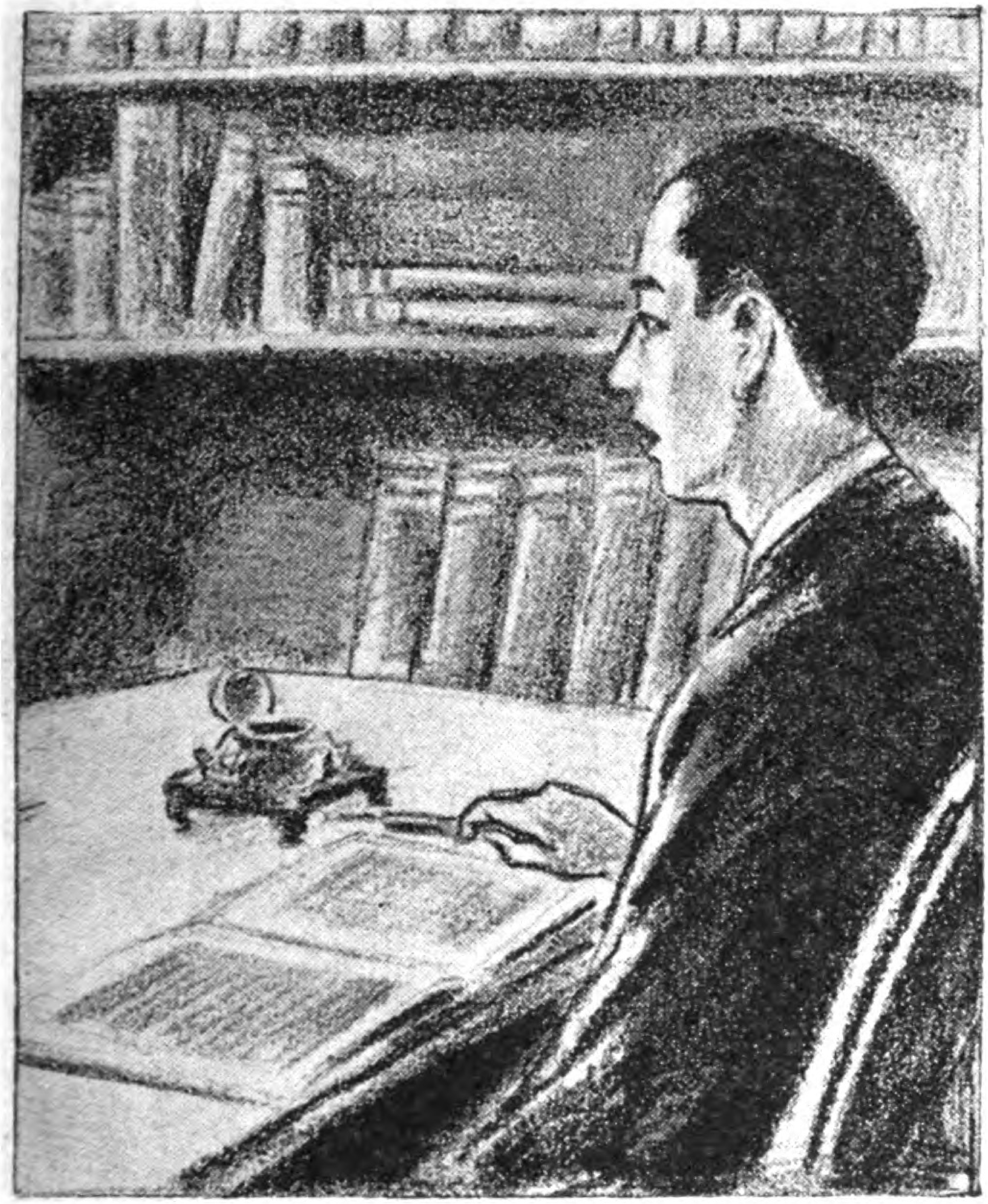
『僕だつて誰だつて同じだよ。お互に仕事をしに來たんだらう？ 遊びに來たんぢやあるまい？ それなら仕事の出來るだけの態裁をとゝのへなくちやね。ね、さうだらう？ からして居なくちや、英吉利ぢや駄目なんだよ。まあ我慢し給へ』

『先生、我慢ぢやありませんよ、よ過ぎるんだ』

『あはゝゝゝ。可笑しなことをいふね。同じことぢやないか。富貴に處しては富貴に安んじ、貧賤に處しては、貧賤に安んず、さ。ね、解つたかい。人間は、大きい家にも平氣で住まへ、小さい家にも平氣で住めるのでなくては駄目だよ。何も貧乏してゐるのが自慢ぢやない。家とか着物とかは、綺麗でもきたなくても平氣といふところまで往かなくちや駄目だ。穢ない着物を自慢するのは、穢ない伊達だ。それも一種のおしやれだ。態と小さい家に入つて威張るのは、矢張り一種の虛榮心だ。そんなことが氣になるうちは駄目だよ。アハハハハ』

それでも、剛は氣が濟まなかつた。

一たい西洋へ來て、綺麗な寢臺に寢るのからして贅澤だ。それを二つも部屋のあるところに住むなんて、無駄だ。無駄はまだいゝが、日本の金をかうやつて、西洋で澤山使つちや、國民に申譯がない。さう思つて彼は、毎日二つの部屋を苦にした。



ところが、先生がまだ贅澤をした。

それは英吉利人の秘書を一人雇入れて、手紙や文章を口授して速記さして居られる。その方はまだいゝとして、今一度從僕を雇入れた。ヴアレーといふのださうだ。これが先生の洋服や靴や荷物一切の世話をするのだ。

『その用は、私にやらして下さい』

と、いくら剛が頼んでも先生はきかれない。

『君は國士だ。國士が他人の靴の世話などしてはいかん』

と、先生に叱られた。

『國士だつて志士だつて、靴を磨いて惡いといふ法はないや』

と剛は不平だつた。

しかしそれは三ケ月程たつてやつと、意味が解つた。

剛が先生から云ひ附かつた用は、せつせと新聞を切つて貼ることだつた。

先生が朝起きて、倫敦の新聞全部を眼を通されて、赤鉛筆で印しをつけられると、それを剛が、せつせと切つて、整理して帳面に貼るのだ。

ところが、これがなんでもないやうで、仲々骨が折れた。それは剛が一と通り切抜きを讀んでおかうと思ふと、先生の讀む力の四分の一も、五分の一もない剛としては、殆んど半日がかりの仕事であつた。

輝男は社交の用と、機密の手紙と、會計の用を預つて、綽々として餘裕があつた。剛は自分一人がまるで馬鹿のやうに思はれて、夜眠られない程口惜しかつた。

それは剛が、初めての洋行の如何に能率の少いかを知らなかつたからだ。日本で憶えた語學などは、少しも役に立たない。右を見ても、左を見ても、皆



日物が解らないのが、日本人の初めての洋行だ。歸國してから、色々の法螺は吹くが、あれは實は方々の公使館や領事館、乃至は三井物產の支店の人に、日本語で敎へて貰つてきてゐるのだと、剛は自分で洋行して初めて氣が附いた。

二

——

剛は午後の時間は、英語の先生を取つて勉強した。

嚴格な先生は頭から剛の英語を、直し出した。

『駄目々々、あなたは、エー、ビー、シー、がまだ憶えられてゐない。一たいあなたのオーといふ發音はそれは、何國語ですか。日本語ですか？　英語には、そんなオーの字の發音はありませんよ』

などと、づけ〳〵やられた。

日本では英語自慢であつた剛は、すつかり悲觀してしまつた。さうして、發音學の初歩からやり出した。やればやる丈け、英語の六ケいしことが解つた。

『もう先生、僕は日本へ歸ります。こんな六ケしい英語なんかやつたつて、とても上手にはならないし。芝居を見ても、ちつとも解らないし、新聞を讀めば時間ばかりか丶るし。こんな高い旅費を使ふだけ無駄ですから歸ります』

さう言つて、先生を困らした。

『その謙遜な心掛けが、大事なんだよ。それをいつまでも失はないやうにし給へ』

さう言つて、先生は慰めた。

三

先生は毎日のやうに、午後はお茶の會、夜は食事に呼ばれて出てゆかれた。ソールスベリー卿の保守黨内閣の全盛期で、社交に長けた外相ランスダウン卿が、世界の外交家の集まつた倫敦に光つてゐた。ことに社交季節の冬であるから、夜の倫敦は不夜城のやうであつた。

従つて剛も屢〻引きずり出されて、輝男の後について、芝居やら、夜會やら、ダンスやらに出掛けた。

今夜も、ロンドンデリー侯の夜會の歸りを、サヴオイの踊り場へ流れ込んだ。

『これも、仕事のうちだよ、交際ひ給へ』

と輝男に引つ張られて、公使館の木戸書記官夫妻と一緒に、剛は近頃大分身についてきた燕尾服に、絹帽、厚い外套に身を裹んだまゝ、馬車から降りると、外套室に帽子と外套とを預けて、輝男の後について、廣い食堂に出た。

大きい懸垂燈のついた廣間の四圍には、大小五六十のテーブルを並べ、中央の床には、奏樂につれて、百五六十人程の男女が踊つてゐた。

近頃は大分慣れてきた剛は、木戸夫人の世話などしながら、給仕長の案内する設けのテーブルへ歩いていつた。

『同じ踊り場でも、倫敦の方が巴里よりは、どこか落ち附きがありますね』

と、剛が夫人にいふと、輝男が後をふりむいて、

『へえ！あれ程巴里崇拜家の小笠原君が、一ケ月のうちにもう倫敦信者かね。早い改宗だね』

と冷笑かす。

『何かお氣に召したことがあるのぢやなくて？』

と、若い花やかな木戸夫人が揶揄かふ。

『馬鹿な！』

と剛はうまい返事が出ないので、ぶつきら棒に叩きつける。

『大分景氣が悪いね、小笠原君。僕が助太刀に出ようか』

と、木戸が助太刀だか横槍だかわからないことをいふ。

『いや、包圍攻撃だ、まるで北京籠城のやり直しか』

と、初めて剛が人間並の返事をする。

『すると我〻一同が義和團匪といふわけだね。これは驚いた！』

と、木戸がわざと大袈裟にびつくりして見せる。

『しかし、いゝですわ。皆さんにお揶揄はれになるのは人望のある證據よ。嫌はれ者は、だれも冗談を言つてくれませんものね』

と、夫人が人生哲學の一端を洩らす。

『馬鹿に風向きがよくなつたね』

と、輝男が言つた時分には、一同は、どや〳〵と、雪崩のやうなテーブル掛けのかゝつた食卓のまはりに腰を下ろした。

ふうはりと、木戸夫人が黒の絹に金の刺繍のしたマントを椅子の背中に投げ掛けると、眞白なデコルテ姿が浮み上つた。眞黒な髪に、涼しい黒眼、白い肌、小柄な釣り合ひの取れた姿。

今ダンスが一きりしてぐるりのテーブルに歸つてきた人々が、一齊にこちらを見て、何やらんひそ〱と囁ひかはす。美しい日本の婦人を外國の婦人のうちに發見するときに、一樣に起る賞讚の言葉だ。さうして、その時に同行した日本人の一樣に感じるある誇りの感じを、三人が言ひ合したやうに感じた。

剛はすつかり、うれしくなつてしまつた。

『奥さん、ダンスをしませう』と、いきなり言つた。

『へえーつ！』と、輝男がびつくりして、

『珍らしいことがあるもんだね。小笠原君が進んでダンスの申込みか。あしたは槍が降るね』

と、附け加へた。

『それは名譽ね。有り難う御座います』

と、夫人が四方から見てゐる幾十の碧い眼を意識しながら、滴たるやうに微笑む。

その刹那である。剛の心臟が、ドキッと一度に止まつたやうに感じたのは。

彼が見るともなく正面を見ると、今自分達の歩いてきたあとを靜々と歩いてきた一人の婦人が、丁度剛の隣の小卓に腰を下ろすと、彼の顏を見て、嫣然と一杯に笑つたのだ。それが紛ふ方もなく、彼が巴里のホテル・カールトンで會つた女性だ。

と、彼女は、一寸から品を作つて、頭を右に心持ち傾けると、

『今晩は』と、小聲で言つた。

已むを得ず剛が、

『グード・イヴニング・マダム』と、虫のやうな小聲で言つて、頭を下げた。

『おや』と、木戸夫人が眼ざとく見つけて、剛の視線を傳つて、その方角を見ると、

『まあ！』と、涼しい眼を一杯に見開いて、

『油斷のならない方！』と、附け加へた。

そのときには、他の二人も、そつとそれを見て、流石に先方に敬意を拂つて、何も言はずに、剛を見て、につこり笑つた。

剛は髮の根まで赤くなつた。

すると三人は氣の毒になつて、すぐ外の話を初めた。

暫らくして、物慣れた輝男は、

『小笠　君、あの婦人は、あれは確か巴里のカールトンで我々とダンスをした人だね。さうだらう？　うん、それならほつておいても惡いから、一人のやうだからこつちへ呼んでやらうぢやないか』

と取りなした。



剛が、どぎまぎしてゐるうちに、彼はすつと立ち上つて、隣のテーブルにゆくと、流暢な佛蘭西語で、二言三言話して、やがてその婦人を扶け起して、こちらのテーブルへつれてきた。

『こちらが、木戸夫人』

と婦人二人を互に紹介して、それから、彼女を木戸と自分との間に坐らした。剛はほつと息をついた。

と、奏樂の音が一齊に起つた。

『踊ひませうか』

さう言つて剛が、木戸夫人に一禮した。

『私でよろしくば』

輕く剛をいぢめながら、夫人は鵞毛の扇の紐に手を通して、ふうはりと背中に投げかけると、剛と一緒に踊りの床に出た。

音曲はワルツ。

元來が運動家の剛は、新しい踊手としては割合に上手であつた。

『日本でもお踊りになつて?』

夫人が訊いた。

『いゝえ、巴里で初めたばかりです』

と、正直な剛が一本槍の返事だ。

『お相手は?』

と、人の惡い夫人が、輕く攻めよせる。

剛は忽ちどぎまぎして、

『だつて、先生だつてお踊りになるんですもの』

と、見當違ひの方角に逃げ出す。

『お逃げになつてはいけません。あなたの踊りのご師匠さんは、どなたと仰つてゐますのよ』

と、土俵際まで追ひ詰める。

生一本の剛は、土俵の劍の峰をする〱と小走りに廻る藝など、てんで持ち合さ



ない。

『だつて、小早川君があの人と踊れつて、無理にすゝめるんですもの』

『あ、さう。小早川さんのお付き合ひなのね』

『………』

と、剛が小供のやうに窮してしまふと、流石に氣の毒になつて、

『まあ、あなたは正直な方ね』

と言つて、「私好きよ」と口まで出たのを、木戸夫人はぐつと飲み込んでしまつた。また剛がどぎまぎして、足でも踏まれてはと思つたからである。

輝男は、件の婦人と踊つてゐた。

『何時いらつしやつた？』

『三日前よ』

『お幾人で、と伺がつては失禮でせうか？』

『さあ、どうかしら、まあ聞いてご覽なさい』

『それでは、試みに伺ひませう、お幾人で？』

『オホホホホ、英吉利の國の女王さまの數

だけ』
『よくお家來の衆が、ご微行を許しましたね』
『まあ、お家來と複數を使つたりして、失禮ね』
『すると單數なら、失禮でないと仰有るの？』
『それはご自分の胸にお聞きなさいまし』
『こちらの胸？　こちらは空屋です！』
『まあ、憎らしい。日本人はみんな、そんな嘘つき？』
『と、仰有ると、外に氣にかゝる日本人がありますか』
と行つて、輝男はすぐ、
『あの小供は、まだうぶですから、あんまりからかはないで下さいよ』
と附け加へた。
『今、あの人と踊つてゐるのは誰、綺麗な方ね』
『むかふでも、さう言つてゐます』
『ばー！　有りがたう』
と、奏樂が、はたとやんだ。
みんなが促がすやうに、ドッと拍手した。すると又、奏樂が起つた。

彼女が踊りながら、すーつ、と餘つた左手で、キッスを投げた。
『人ごみの中に物を投げると危ないですよ。だれにぶつからな



いものでなし』

『お世話さま。相手はたしかに受取りました』

『そんな修業はまだ出來てゐない筈ですが』

と言つて、輝男がその方向を見ると、身の丈六尺あまりの紳士が、につこり笑ひながら、彼女にキスを投げ返してゐる。

そのとき、ある考がさつと、輝男の頭の中を走りすぎた。その相手の紳士といふのは、露國の財務官で、正面は倫敦の町で露國の公債の價格を維持する爲めに派遣せられてゐるのであるが、彼が澤山の交際費を費つて、何をしてゐるのかは、倫敦外交界の謎であつた。

『あの男と、知り合ひなのか』

さう思つて、輝男は駭然とした。

『この女の正體は、突き止める必要があるな』

烱眼な彼は、すぐ考へ出した。

『ご家來のうちの一人ですか？』



と、とぼけて彼が追ひかけた。

『誰が？』

と、鷹はつと横にそれる。



『投げ物の受け取り主さ』
『お氣の毒さま、投げた花瓶は床に落ちて、眞二つに割れました』と、三里位むかふへ突つ離す。
『だうりで、大きな音がしました』
と、野暮は言はないで獅男は退却する。
その次の踊りには、剛は休んで、獅男が木戸夫人、木戸がその女と踊つた。さうして、三度目にはどうしても、剛がその女と踊らなければならなかつた。
『巴里以來、久し振りね』
と言つて、女は互に握つてゐる手で、一寸剛の手を抓つた。
剛はすつかり、周章てしまつて、
『さうですね』といふと、額からもう汗が滲み出てきた。
『あなたは、お友達の力に較べると無邪氣ね。女に可愛がられますよ』

で、剛がガタンと、相手の足を踏んだ。

女は可笑しいのを、じつと我慢しながら、

『さつきのお相手の方とは、あなたはよく話してゐらつしやつたわね』と、少し攻め手を間接にする。

『えゝ、あれは友人の奥さまです』と、まるですきだらけの合槌だ。

『オホホホ、他人の奥様なら、話が轉むの！　あなたは隨分人惡ね』と、また握つた手を強く握る。

『日本語だからだ』と、剛がとう〳〵、ぶつきら棒にやる。

『上出來々々！　その方がいゝ』と、笑つて顔を剛の鼻のさきにすーつと近づけたと思ふと、あつといふうちに、一寸自分の頬を彼の唇に押しあてた。と、すーつと顔を遠のけて、

『ご免なさい？　わたし逆つちやつたの！』と、言つて、

『オホホホホホ』と笑つた。

剛は體ぢうの血の、ぐーんと腦天に上つたやうに感じた。

四

その年が明けると、世界に大事件が起つた。それはヴイクトリア女王の崩御であつた。六十四年の永い女王の御代は、成功と繁榮との記錄であつた。その女王の崩御である。全倫敦が火の消えたやうになつた。

『愈ゝ大變な時代が初まるよ』

先生がその晩方、剛に話された。

『えつ？』と、まるで見當の付かない剛が、訊きかへした。

『うん、あんまり突然で解らなかつたらうね。いやね、世間はヴイクトリア女王の崩御のことばかり考へてゐるだらう？　ところが、此處にそれ以上のことが起つてゐるんだ。いゝかい、今度エドワード七世陛下が即位されたといふことを、世間の人が忘れてゐるんだ。ところがこの新帝陛下の即位とゝもに、世界の形勢が變るんだよ。いゝかい、見てゐ給へ。これが日本に取つて大問題だ。愈ゝ面白い時節になつてきた。申しては甚だ恐多いが、日本にはこれは仕合せなことになるよ、見て居給へ』

先生が、さう言はれた。豫言でもするやうに。

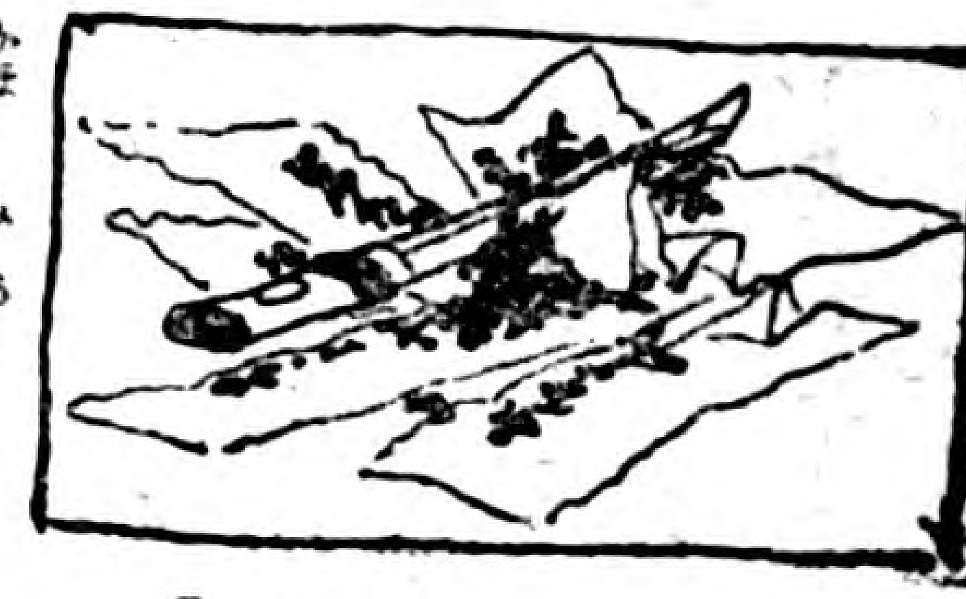
剛は何も解らぬながら、先生がさう言はれる以上はこれは大事件かなと思つてゐた。

しかし、これが歐洲の外交を一變し、從つて全世界の政局を一變するやうな事件になるのだとは、若い彼に氣の付かうわけはなかつた。

その時にはもう、ソールスベリー卿は首相をやめて、甥のバルフオアーに讓ることに腹を定めてゐた。さうして、外相ランスダウン卿が愈ゝ自由の手腕を振ふときが迫つてゐた。その大きい世界的渦まきの中に、中江先生がこつそり飛び込んで、新日本の國策を築いてゐたのだ。

しかし、不思議な女が、この三人の後につきまとつてゐた。

（つゞく）



忠義

小鹽義郎
井川洗厓畫

『父上、忠義とはいかなるものに御座りませうか。』

泉良介は、さう言つて、ちらと父良左衛門の顔を見上げた。その瞳には、なぜか悶々の憂色がみなぎつてゐる、生年僅かに十六。青山佐四郎が自慢の小姓だ。

『はて、突然に異なことを……』良左衛門は、訝かしさうに眉をしかめた。彼は遠州指をりの豪士である。年齢やうやくに四十歳。文武の両道に深く、あかるく、領主下野守からは、

『新知三百石をとらさうに。如何ぢやな。』

と、さうした招きを、再三ならずうけてゐるのだ。が、彼は、その度毎にきつぱりと断つてゐた。

『最早や世に、榮進の望み、露いさゝかも御座りませねば。』

しかし、下野守にしてみれば、土着の名望家である彼良左衛門を、そのまゝにすてゝ置くといふことは、なんとなう氣がかりである。そこで、彼の弟、源兵衛を二百石で召抱へた。更らに、彼の長子、良介をも、

『是非小姓にいたし度い。』と、所望した。それは、もうかれこれと、四年も前のことである。

以來、良介は暫く、下野守に仕へてゐたが、間もなく、下野守の弟、佐四郎親正に懇望せられて、その稚小姓となつたのだ、その後、二年の餘にもならうか。今日、突然、父良左衛門の許に歸つて、さて、例の『忠義』問答である。良左衛門、流石に一寸、答へに澁つた。

『一體、何うしたと申すのぢや。』

『父上ッ。』

あゝら不思議、良介の眼には、瞬間、ちらと涙が光つた。



『ど、どうしたのぢやな。』

親おもふ、心にまさる親心。良左衛門の言葉には、千萬無量の愛情懸念が火のやうに燃えてゐる。

『父上、佐四郎さまは、兄殿に、御逆心をもたれてゞ御座ります。』

『おゝ。』

『今日、叔父上源兵衛殿より、お家のため、佐四郎さまを、討ち参らすやうにとの、只ならぬ御言葉をたまはりました。』

『や。』

『なほ、大殿さまからは、首尾よういたさば、二百石の加増をとらすと御墨附まで下さりました。』

『む、し、し、して、その方は、なんと答へた。』

『されば……』良介は、涙に濡れた兩の瞳を、キッと雄々しくみひらいて、言葉凛然と語りつゞける。

『私、佐四郎には、三年に餘る年月、並々ならぬ御懇情を戴き居ります。さあれ、兄殿への御逆心は許されますまい。』

『さらば、その方……』

『はい。佐四郎さま御首を、頂かう覺悟に御座ります。』

『そ、それを大殿に誓つたか。』

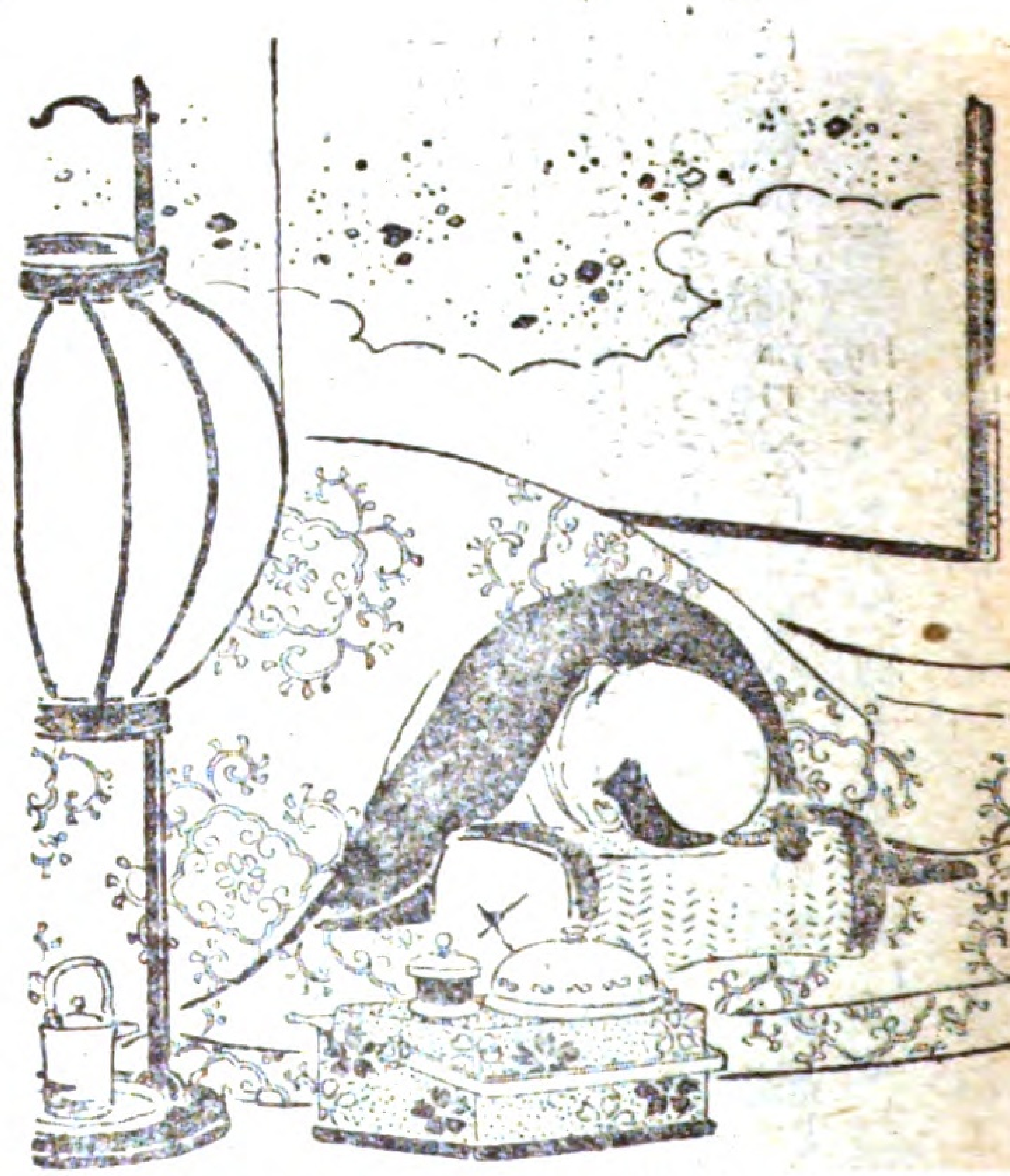
『誓ひました。それが、お家への、誠の忠義と思ひましたで。』

『ふうむ。』

『しかし、父上がそれを、心得違ひと、お怒りのやうにも御座いましたなら、私、いかやうにも改めまするで……』

その時、良介の紅顔は、ある神色に輝いてゐた。良左衛門は、暫く、默々と沈思してゐたが、やがて、おもむろに口を開いて、

『父は、何も申すまい。が、そちの恩顧は、佐四郎さまに深いのぢや。人間、慾にまようてはならないぞ。が、順序の道をあやまつても一大事。よつく正邪の別を考へ、まことの忠義に精進するのぢや。よいか、わかり居つたか。』と、諄々、父の教訓である。良介は、悄然とそれを聞いてゐた。



○

青山佐四郎が、その寢所に於いて、日頃寵愛の小姓泉良介の刃に、悲慘の最期をとげたのは、その翌々日のことである。

良介は、佐四郎の死體を前に、端然、腹かき切つて死んでゐた。そして、その傍らには、下野守から與へられた、二百石加増の墨つきが、ずたずたに引きさかれてちらばつてゐた。この凶報が、良左衛門の許へ傳へられた時である。彼は、手をうつて躍り上つた。

『よくした良介、そ、それでこそ父の子ぢや。まことの忠義は、それでなうてはかなはないのぢや。』

その眼には、熱い涙が滲潸とほとばしり、いつまでも、いつまでも頬を濡らした。（完）



情熱時代

三上於菟吉
岩田専太郎畫

妖婦の本性

千世子は、あまりに靜かに、あまりに眞直な目で注視しつゞけられて思はず瞳を反らさないわけには行かないのであつた。

『まア、あなたの外に、あの方の側から遠ざからねばならぬ人があると仰有るの？　一たい、誰のことを――』

彼女は事もなげに訊きかへさうとしたけれども、それが出來なかつた。そして妙にかすれた、ゆらいだ聲で言つて、最後を輕い咳でとぎれさせてしまつたのだつた。近一はまじろがなかつた。何事もハツキリと言つてしまはねばならぬと決心したものだけに特有の、何等の激しさもない、しかし、力强い調子で答へた。

『僕はあなたのことを言はうとしてゐるのですよ。』

『まア！　私のことですつて！』

千世子は先程から何か只ならぬものを近一の容子に感じてゐたが、こんなにキツパリ言はれて、絶望的に、ヤケな調子で笑ひ出した。

『ホ、ホ、ホ！　あなたはどうかしていらつしやるのね！　あの、私が、あの方

の側を遠ざからねばならないんですつて！　まあ、何といふ馬鹿らしいことでせう！　ホ、ホ、ホ！　私、あなたが正氣でいらつしやるとは思はれないわ――笑ひが止まらないわ――何てつまらない思ひつきなのでせう！』

千世子はどこまでも笑つてのけようとするやうに嘲けるのだつたが、近一は少しも昂奮したり激昂したりはしなかつた。

『いゝえ、この考へはちつとも馬鹿らしくもなければ、笑ふべきことでもないのです。僕は生れて以來これほど眞面目に口を利いたことはありません――僕はまじめに要求するのです。』

『近一さん――山田さん。』

と、千世子は紅い美くしい唇をいくらか曲げるやうにした。

『私、今度の問題に關して、どなたからも束縛される必要はないと思ひますのよ。誰だつて、他人が幸福にならうとする時、それを妨げることは出來ないのですもの――』

と、いかつげに言つたが、急にじつと相手を訴へるやうにみつめて、

『況してあなたは私の親友ではありませんの――ずッと／＼古くから私を知つてゐて下さる方で、只今でもおつき合ひしてゐるのはあなただけですわ。私の方ではたつた一人の相談相手――たつた一人の親友とお思ひしてをりますのに――こんな時、あなたこそ一ばんに喜んで下すつてもいいと思ひますわ。』

『千世子さん、それを僕に言はうとするのですか？』

近一はみつめ返した。

すると、千世子は、あんまり烈しい相手の目つきを、全く誤り解したやうであつた。

――ああ、やつぱしこの人は私がどこまでもどこまでもあきらめ切れないのだわ。いざ私が結婚するといふことになつて、惜しくつてしかたがなくなつたのだわ。それも無理がない。私をあんなに戀してゐたんだもの――でも、仕方がないではないの？　私だつて、何もこの人がどこまでも嫌ひといふわけでもない――私にすれば世界の男なんぞといふものは、どれもこれも同じやうな好色で馬鹿なものにすぎないとしか考へられないのだから、昌一郎さんだつて、近一さんだつて、別にどつちが好きといふわけはないのよ――たゞ、昌一郎さんはあんなにお金持で、そして近一さんは、いかに出世をして見たところが、タカ／＼その人の使用人にすぎないではないか！　だれが、こんな場合にAを捨ててBを取ることが出來るでせう――

彼女は心の中で嘲笑したが、しかし目や口には、急に限りない媚びをうかべた。

『近一さん、あなたは私の胸の中を、まだようく知つてゐて下さらないのね――私、あんなに申し上げて置いたつもりですけれど――』

近一はすこしも調子を變へなかつた。

『あなたの胸の中？　いゝえ、僕は何も知りません――また、それを知らうとも願はないのです。僕はあなたに昌一郎君から

逢ざかつてさへ聞けばそれで滿足なのですから――』
『どうしてあなたはそんな風にばかりおつしやるのでせう！』
と、千世子は吐息と共に言つた。
『だから、私、何度もあなたにお逢ひしたいと申し上げたのよ――もつと〳〵十分心の中をおはなししたいと思つて――だのにあなたは逢つては下さらずに、今になつて――あなただつて、私がどんなにいろ〳〵苦しんでゐるかを知つて下すつたら、そんな風にはおつしやらないと思ひますわ。』
――彼女はうつむいて、膝の上で、淡色のハンケチを白い指に巻いたりほぐしたりした。
『私、あなたはもうよく知つてゐて下さると思つてゐたのに――』
近一は答へなかつた。
『ねえ――あなたも隨分殘酷な方ですわ！　私に何もかもハツキリ口から言はせようとなさるなんて！　默つてゐても十分おわかりになつてゐる筈だのに！』
とうとう千世子は、椅子を離れた。彼女は愛のなやみに堪へ切れなくなつたもののやうに、顏を兩手でかくして、壁添ひの紺い長椅子へ行つて、ぐつたりと埋もれた。
『あなたはどうしてそんなに邪慳なのでせう！　もつとも、罪は私にありますわ。けれども、それは昔のことではないの！　あのためにどんなに私が苦しんだか、ちやんと知つていらつしやるではありませんの！　そして、今度突然お目にかゝつて、私がどんなに驚きもし、よろこびもしたか――出一郎さんへ嫁ぐと決心したあとで――ああ、口ではハツキリ言へないわ――それが二重の幸福になつたのを、自分にさへ内所で、どんなによろこんだか！　これで一生あなたとどんなにでも親しく出來ると！　私、いろ〳〵考へてゐたのよ。他人に聽かせたら、人でなしと言はれるか、けものと言はれるかわからないけれど、あなただけは、私の氣持を知つて下さると思ひますの。あなたとのこれまでのことは、お互にどんなに愛し合つてゐても、境遇のために悲しいことばかりでした。しかし今後は、私達が馬鹿げたやり方さへしなければ、どんな愛の樂しみでも味はへるのですもの――』
彼女の言葉はしどろもどろであつたが、その聲や擧動にはいかなる男の心をも蕩らかさずには措かぬやうな媚惑があつた。それはあらゆる企圖を粉碎し、あらゆる木石を燒きこがすやうな熱を包んでゐるやうに見えた。
が、近一は、自分の椅子に坐りつゞけたまゝだつた。彼はむしろあはれむやうに答へるのだつた。
『あなたのさういふ心持も、決してわからないわけではないのです――理想の僕でなければ――一切に盲目であつたころの僕であつたら、歡んだり感謝したりしたかもわからないのです。ですが、もう今の僕には無關係な世界です――僕は何も外のことをあなたに要求はしない――ただ、あの人から離れてくれゝばいい――あの人は、正しい人です。汚れを知らぬ、清らか

な、温かい人物です。僕は勿論、あなたにしても、あの人の側で、平然として生きられるはずがないのです。』

誘惑が利き目を奏さないのを見て取ると、千世子はいかにも自分の美の力を誇ることのみしか知らぬ女性にふさはしく、理性の道徳力をます〳〵失くして反噬的な態度を露骨にする外はないのだつた。

彼女はソファに起き直つた。彼女の目にいかりとさげすみが漲つた。彼女は悄々しげに、反抗の微笑を見せようと努力した。

『まア、では、あなたは、私が昌一郎の妻として生きる資格がないとおつしやるのですね！』

『ええ。』

と、近一は冷たく、しかし一種かなしげに答へた。

『汚れたものは、清らかなものを腐敗させる役にしか立ちませんから――』

『私がどんな女にしても、近一さん、あなたは私の生活を左右する權利はありませんのよ――あなたは何か夢を見てゐるのではないこと――あなたが何とおつしやつても、昌一郎さんが、私を妻と呼びたいといふ氣持なら仕方がないではありませんか――――あなたが何と言ひ出して茶々を入れて見たところが、あの人は私を追ひのけることは斷じてしませんわ。どんなにあの人が私を愛してゐてくれるか、ホ、ホ、お他人さまにはわからないのよ――ねえ、近一さん、あなたもいくらか苦勞をして來たこと〻思つたら、ずゐ分た我まゝものねえ――昔とちつとも變りはしないわ。私、なんのめぐり合せでか、一度別れたあなたに逢つてしまつた以上は、あなたとも一生まるくおつき合ひして行くことをおことわりするつもりはなかつたのよ――あなたの望みは、秘密さへ守ればどうにもして果させてあげることが出來るのだから、決して淋しい思ひはさせないと考へてゐたのに――あなたはまるで馬鹿な十七八の生息子か何かのやうに、また私を御自分で專有したくなつたのね――ほんとうに、それはしつッこすぎるといふものだわ。めい〳〵に備はつた力といふものを考へてくれなければ――』

彼女は嘲けるやうに、近一をみつめた。

『いくらあなたがいつまでも夢ばかり見てゐる人にしろ、この世でお金といふものや位置といふものがどんなに大切だか知つていらつしやるでせう。そして私達女性が自分を十分に生かして行くためには、男たちの持つさうしたものをどんなに必要とするか――ですから、私、あなたのお言葉ばかりを、さう易々と受け入れてはゐられませんのよ。ですから、强ひてあなたが私の結婚に邪魔を入れようとなさるなら、私もその覺悟で應戰しなければなりませんわ――』

――應戰といふ言葉を彼女は使つた。

近一の目つきは動搖しなかつた。彼はこのことを言ひ出すのに、勿論ここまで來ることを豫期してゐたのだつた――この考へを貫徹するには、相手が千世子である以上なか〳〵素直に行

くものではないと知り拔いてゐた。が、千世子も人間である以上、何等かの方法で動かせぬこともあるまい——話がこんな風にななつてしまつても、彼は絶望したり、輕々しくいかつたりしてはならぬと思つた——彼はどんなにもして、女人の顔に泥を塗るやうなことを防ぎたい——あの柔しい心の昌一郎に、今後一生、限り無い苦痛をあたへたくないと願ふのみであつた。

『千代子さん。』

と、彼は彼女を昔の名で呼んで、

『あなたは何かつまらない偏見にとりつかれてゐるのですよ——幸福とは、そんな欺むきから生れるものではないのです。僕自身にしても、あの事件のあとで、正直に言へばあなたを呪ふことからはじまつて、世の中全部を呪ふやうな身の上に落ちてから、つい最近までは、人生にどんな惡が蔓こつても當然だ——われ〳〵



自身も惡の使徒として生き拔けばいいと決心してゐたのです。が、それは畢竟下らない、小さな陷穽でした。人間にはもつと晴れ〴〵とした、自然で、美しい道が別にあるのです。だれにだつてさういふ生き方は出來る——自分の心の中の暗い、みにくいものを一々追ひはらつて行くといふことだけで、われ

われはいつでも幸福であり得るのです──あなたは怖れなければいけませんよ──ね、千代子さん、女性が結婚するのに、良人の外にもう一人の男と秘密な愛を約束する──そんな怖ろしいことは二つとありません──それはみんなを不幸にして地獄へ落とすだけです。』

『まあ！』

と、千世子は、自棄的に打ツつけるやうに笑つた。

『近一さん、あなたはいつお坊さんになつたの─新教？ それともカトリツク？ ホヽホ、そんなそんな御說教はもつとひまな方のところへ行つてして頂戴な。私、いろ〳〵いそがしいのですのよ。』

そして、挑むやうな目で、

『で、若し、どこまでも私があなたの忠告をしりぞけたら、どうなさらうと言ふの？』



『その時にはその時で、僕として別途の手段に出るばかりです。』

『屹度、昌一郎さんにこれまでのことを何もかも告白しようとでも言ふのでせう──あなたの智惠や勇氣では、その邊がオチらしいもの──まあ、やつてごらんなさるがいいことよ──私

とあなたが、どつちがあの人に力を持つか、それはいい試金石だわ。かまはないことよ！　何でもやつてごらんなさいね。』

――どこまでも妖婦性になり切つてゐる千世子は、今や遠慮もなく本性をあらはしはじめた。

『どんなにあなたが私のあらゆる過去をあの人の前で並べたところで、それはあなた自身を傷附ける役にしか立ちませんから、十分考へてからなさるがいいことよ。人間が一々自分の過去に責任を持つて、この世の中に一日だつて生きて行けるものですか！　馬鹿馬鹿しいわ！　ほんたうに――』

近一は歎息した。

全く、悪の観念が人間と人間とをいかにすばやく結びつけるか！　そしてそれに反して、正しい世界への歩み直しが、どんなに人間と人間を背かせてしまふものか！

この上は仕方がなかつた。

『しかし、千代子さん、もう一度考へて見て下さい――僕は明日あなたをおたづねします。』

『いらつしやるのは御随意よ――でも、もう御説明だけは御免ですわ。それに、千代子さん、千代子さんツて、昔の名で呼ぶのはよして頂戴。面白くもない、貧乏じみた日のことが思ひ出せてきたならしいわ。』

その言葉は、明らかに近一を侮辱するものに相違なかつた。彼とのあの過去の純を嘲笑する言葉に外ならなかつた。

けれども、近一はそれには[illegible]かのやうに見えた。

『では左様なら。』

千世子はたそがれが深くなつた町をわが家に歸つた。

玄関に出迎へた叔母の顔を見ると思ひ出したやうに無遠慮に笑ひ出した。

『まあ、あの人は何を食べさせられたのでせう！　何であんな風なお馬鹿さんになつてしまつたのでせう！』

『お前、何をそんなに笑つてゐるの？　まるで自堕落な小娘みたいに！』

『ホ、ホ、だつて、叔母さん、近一さんがまるでお坊さんのやうなことを並らべてゐたんですもの！』

『お坊さんのやうな？』

と、叔母は険のある眉のあたりをひそめた。

『一たい、どんなことをさ？』

『何だか馬鹿げたことをモゾ／＼並べてゐましたのよ。』

『私はね、あの人と行き来をすることが嫌ひたのだよ――いかによんどころない役目にしろ、あの人とつきあつてゐていいことがあろはずがないからね。で、今日は何でお前をそんなに腹を立てさせてしまつたのさ？』

どこか下品な、鋭い目つきつきで彼女は言つた。

二人は居間の方へあるいた。

『それがとてもつまらないことで何にも何もなりはしませんのよ。』

と、千世子は言つて、

『あの人は今度の結婚問題に賛成出來ないなんて、今になつて言ひ出したのよ。』

『フン、どうせそんなことになるだらうと思つたのさ。どんなお人よしだつて、自分があんなに惚れてあんな目にさへ逢つた女が、お友達のおくさんになると聽いては、胸をさすつてしまふことも出來まいし――そりやあお前のことだから、何とかうまくやるつもりはつもりだらうが、用心しないといけないよ――男つて奴は、馬鹿になるとどんなにでも下らなくなるものだから――』

『大方、あの人に、これまでのことを言ひつけでもしようとしてゐるかも知れないわよ。しかし、そんなことは何でもないわ。何でもありはしないわ。どうせあの人にどれほどの力があるものでもなし――昌一郎さんは、私の過去なんか今更問題にするはずはありませんもの――』

が、叔母の眉のひそみはなか／＼取れなかつた。

『それが不用心だといふのだよ――若い人たちは、あんまりものごとを輕く見るからいけません、千丈の堤も蟻の一穴と言ふではないか――そんなことになつてしまつたら、何とか急に方法を取らなければ――』

彼女は考へ込むやうにした。

『何でもありはしないわ。あの二人はどつちにしても、私の傀儡にすぎないのだもの――それでも、叔母さまがそんなに心配なさるなら、私、今日中に昌一郎さんと逢つて、先くぐりをしてうまく話して置くからいいことよ。昌一郎さんは決して背のことでかれこれとがめ立てなんかしやしないわ。そんなことの出來るやうな氣力のある男じやありませんもの。』

『それは一刻も早くお目にかかつて、ようく話し込んで置くに限りますよ。まあ、考へてごらんなさいね。私たちに取つては今度のことは生れて二度とない仕合せなことなのだもの、一生懸命全力をつくさなければ駄目ですよ――安心してゐるうちに、昌一郎さんの氣が變つて、ヒョンなことになつてしまつたらどんなだと思ひます。』

『大丈夫よ――私、いつまでも叔母さまに氣をもませなくてはならぬ千世子ではないことよ――ホ、ホ、ホ。』

全く、彼女は男ごころを籠絡することには自信を持つてもいいのかも知れない。叔母は鋭どい目で、めつきり働らきものになつたには相違ない姪をみつめて、滿足げにかすかに含笑ふのであつた。

毒舌

――間もなく、千世子は入浴してすつぱり化粧をしかへた。いつも濃艶な彼女にしても、今夜はことさら妖冶に粧ほつて、寧ろきらびやかすぎるいでたちで自動車に揺られてゐた。千世子は叔母に言つた通り、近一から何か面倒なことが昌一郎に持ち出される前に、自分から巧妙な言葉でうまく一切を話し込んで置かうとするのであつた。

──昌一郎はまだ會社にゐるのだつたが、千世子の自宅への來訪が電話で報告されると、すぐに歸つて來た──どんな重要な社用があるにせよ、今の彼としては千世子と相逢ふほど大事な、樂しい役目はないに相違なかつた。

彼は帽子を片手に持つたまゝで客間の椅子に待つてゐた彼女の側へ走しるやうに近づいて來た。

『まあ、よく來てくれましたね──今夜は重要な會議があつておたづねが出來ないのを殘念に思つてゐましたのに！　一日君に逢はないと、まるでその日が空白なやうな氣がします。』

が、千世子はいつものやうには媚笑を見せなかつた。何か惱ましげに含笑んだだけだつた。

『お邪魔だとは存じてをりましたのですけれど──今日はどうしてもお話して置かなければならない場合に迫つたものですから──』

昌一郎は明らかに懸念さうな表情をうかべた──瞳は曇り、聲は喘いだ。

『どうしても話をしなければならぬことツて、一たい何ごとです──何だかいつもの容子とは違ひますが──』

『いゝえ、格別何でもないのよ。申し上げたがいゝものか、どうか、今でもわからないのですけれど──』

昌一郎は差し迫つた結婚問題に關することに相違ないとすぐに直覺して、そして一倍心配なのであつた。彼は彼女の周圍にどれほどの崇拜者があつまつてゐるかを知つてゐる。いな、事實以上に彼女讃美者を見つもつてゐるかも知れない──それだけ、いろ／＼な意味での懸念が多いのだつた。

『いゝえ、どんなことでも言つて下さい。どんなことでも──君に關したことは、僕は何でも知りたいのです。また知らねばならぬのです。さあ、言つて下さい。』

二人は並んでソファに腰を下したが、千世子はなるべく相手から目をそむけるやうに見えた。

『でも、もし人さまに御迷惑が行くと、私困りますのよ。』

『他人に迷惑が行く？　では、何か僕の知つてゐる人間の問題で？』

『ええ。でも、そんなことはまあどうでもいいとして──』

と、言ひかけて、千世子は突然じつと熱い目で昌一郎をみつめた。

『ねえ、あなた。あなたは私の過去のことは、何もとがめないとお約束なさいましたわねえ──』

昌一郎は見返した。彼は彼女の目をのぞき込むやうにした。

『ええ、勿論お約束しましたとも！　君が非常に不幸であつたころ、いろ／＼な苦しい經驗をして來たといふことも聽いてゐます。そんなことは何でもないことだと言ひました──それは君の責任ではないと考へると言ひました。だからそんなことで氣を揉まずともいいのですよ。』

『うれしうございますこと！』

と、彼女はこゝろから感動したやうに叫んで、そして彼をみ

つめる美くしい情熱的な目に一ぱい涙をためた。
『うれしうございますこと！』
『僕はどんな過去が君を暗くしたり明るくしたりしたにもせよ、そんなことはどうでもいいのです。現在の君をこんなに愛してゐるのですから――』
『ほんたうにあなたがさう思つてゐて下さるなら、私、申上げることなぞは何もなくなりましたのよ。』
彼女は涙で一ぱいな目にハンケチを當てた。
『何で、君は泣くのです。』
彼の手がやさしく彼女の肩にかかつた
『だつて、あんまりうれしいのですもの！』
と、彼女は淡緑の訪問服につゝまれた女らしい肩と背に、泣いじやくりの波をかすかに打たせながら、
『私、もう、どんなになつても、そのお言葉だけで十分でございますわ。この場で死んでも幸福だと思ひますわ。』
『どうして今日に限つて、そんな哀しさうなことばかり君は言ふのです？　もうぢき樂しい生活の日が創まらうとしてゐるのに！』
『だつて、私、あなたは明日になつたら、私を違つた目でごらんにならずにはゐられないと思ひますのよ！　だから、私、いつそ死んでしまつた方がいいのです。』
『なぜでせう！　われ〳〵の間に、こればかりでも秘密があつてはならないのです。何もかも言つて下さい――何があなたをそんなに苦しめるのです？　云つて下さい。』
千世子は昌一郎の膝の上に白いふくよかな手をかけた。そして片手のハンケチで顔をおさへたまま懊惱した。
『私、あなたに死んでおわびしても足りないことがあるのでございますのよ――何もかも昔のことを打ちあけながら、たつた一つのことが言へませんでした。それを言ふといふことが、あなたとあなたの親しい方との間にヒビを入れることになりはしまいかと思つて――全く、私が氣が弱すぎたのでせうけれど――――そのために、今では自分がこんなに苦しまなければならぬことに――』
彼女の聲は嗚咽でとぎれた。
昌一郎は眉をひそめた――何かよほど複雑な裏面があるに違ひなかつた。
『屹度、このことを私がお打明けしたら、私へのあなたの愛もこれかぎりだわ――でも、それを哀しみませんのよ。私にすれば、今まであんなに愛して下すつただけでこの上ない幸福なのですもの――でも、もう今後私に笑ひなぞといふものがあらうとは思はれませんわ。』
『言つて下さい！　どんなことでも！』
と、昌一郎は心を噛む疑惑に堪へられなくなつて叫んだ。
『ええ、もう何もかも申し上げますわ――實は今日――』
と、言つて、千世子はチラと昌一郎を見上げてまた目を伏せた。

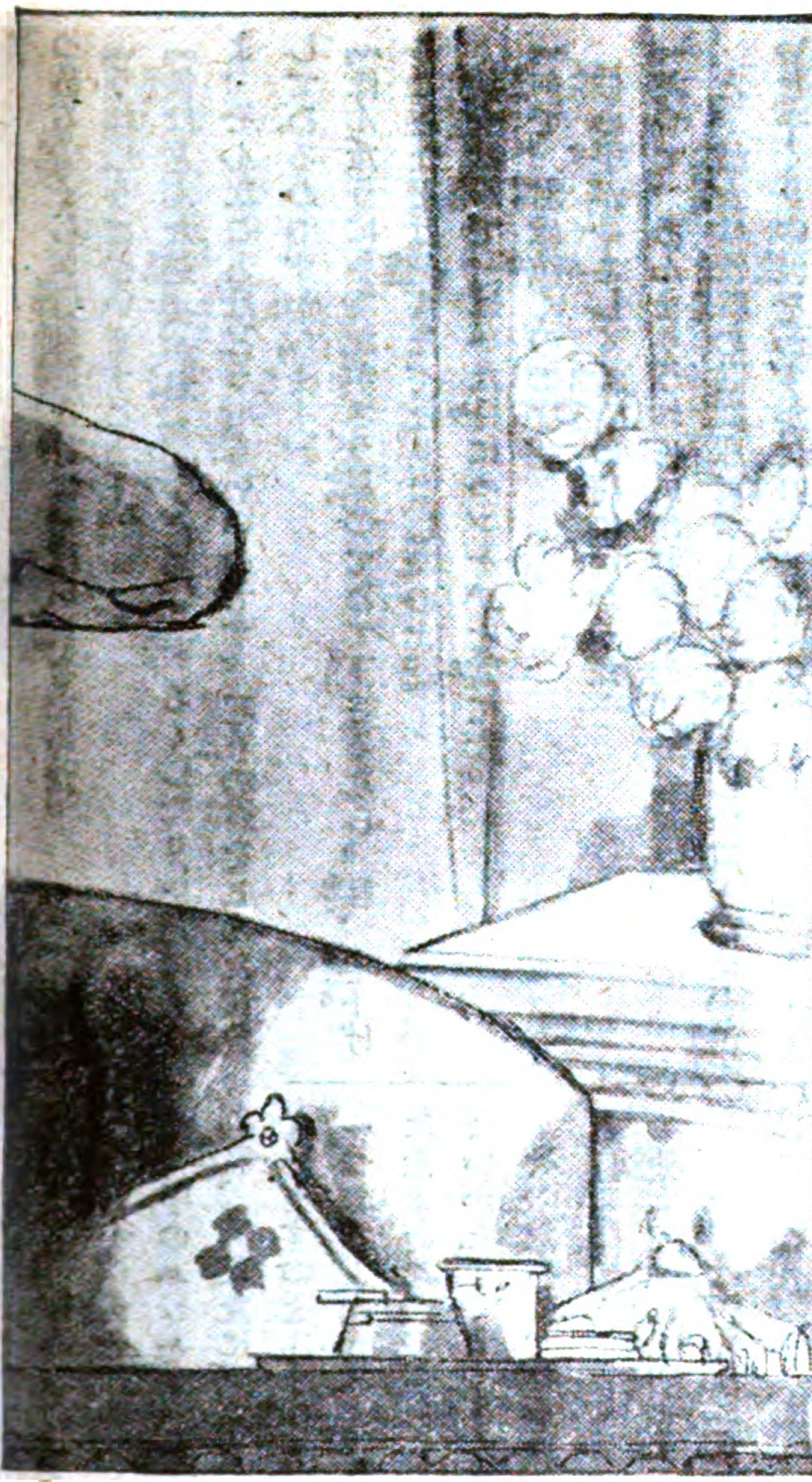
『實は今日、山田さんが私をたづねてお見えになりましたのよ。』

『山田？　山田ツてどこの山田です？』

昌一郎はいぶかしげに反問した。彼には彼女どの間に、山田近一が介在してゐようとは思ひもかけなかつたので、その人と思ひつくことは出來なかつた。

彼女は涙にぬれたハンカチを、例のくせで指に捲いたが、

『いつぞやこちらへ伺つた時、偶然山田さんにお目にかゝつて、あなたとあの方とが御親友だと伺つたので、ほんたうにびつくりしましたの！』



と、その時、はじめて昌一郎は思ひあたつたのだつた。

『いやあ、君は近一さんのことを言つてゐるのですね？』

『ええ、さうですのよ——』

と、彼女の聲はかすれて消えさうだつた。

『しかし、古い〳〵昔のことなの——でも、いくらか友情以上のまじはりがあつたものですから、あの時あなたにから〳〵だとお話したら、結局あの方の御迷惑にもなるでせうし、私もあなたからいまはしい目で見られるやうなことがあつては、死ぬよりつらいと考へて、卑怯なやうでしたけど、お互に、これまで知らない仲の二人にならうと約束したんですの——決してあなたをあざむかうなぞといふ氣ではありませんでした。私、たゞ、あなたに若しいやになられるやうなことがあつたらどうしようと思つたので——』

——昌一郎は青ざめずにはゐられなかつた。

『では、君と山田君と——』

と、彼は苦しげに呟いて、兩手で、まるで頭痛がするかのやうに左右の米かみをおさへた。あんまり思ひがけなかつたことなので、いかにいつも心の平らかな彼でも、落付いてゐるわけには行かなかつたのだつた。



『――でも、何もけがらはしいわけがあつたのでも何でもありませんのよ――私が大變こまつてゐた時に、あの方は私に同情して救つて下すつたのです。私はあの方を尊敬もすれば、兄の樣にも信じてゐましたわ、種々な事情があつて私達ははなれ〲にならなければならなくなつたのですけれど――でも、決してあの方が、今の樣な方になつてゐようとは思ひもかけませんでしたわ――何といふけがらはしい――』

千世子は顔を兩手でかくした。

『あの方は、あなたと結婚するとすれば、以前のことは秘密を守つてやるから、そのかはりにある約束をしろとお強ひになるのですもの――』

昌一郎はキッと千世子をみつめた。

『もつとくはしく言つて下さい――僕にはまるでわからない――』

了りの言葉は、口の中で呟やくやうに消えた。

（つゞく）

[illegible]息づまる如き興味は、今やその最高潮[illegible]せんとす！ 刮目して次回を待て!!



落語

士族の商法

古今亭雷門
細木原青起畫

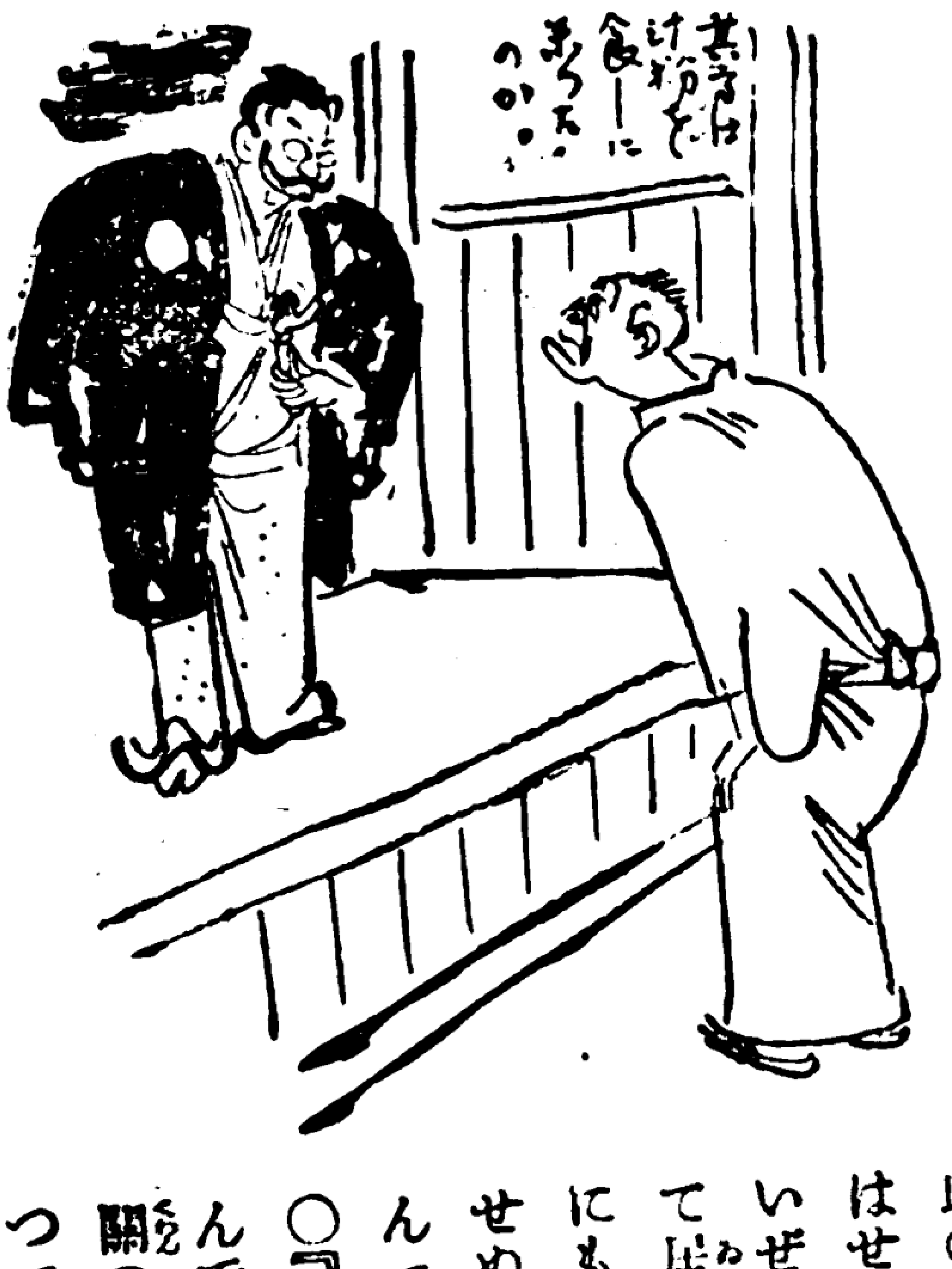
士族の商法といふお笑ひを一席申上げます、習はうより馴れろと申しまするが、何事も馴れないと巧く往かぬもので、見て居ては譯がないやうでございますが、扨やつて見ると中々むづかしいもので、私共が高い所へ上がつてお喋舌をするのも馴れでございます、初めて高座へ上がつた時には、目がグラ〳〵として、男だか女だかお年寄だか若い方だか、トンと分りませぬ、下手をやると高座から落ちたり何かいたします、それが馴れて参りますと、ア、あの方は勤め人だな、何處の會社で此の位の月給を貰つていらしつて、今日は月給日だから奥さんの御機嫌が好いので寄席へいらしつたのだな、あの方は大層赤い顔をして景氣が好いが、カツレツにフライか何かで、勘定が一圓二十五錢だらう、などと餘計な心配までするやうになります、それが馴れでございますが、馴れない内は失敗が多いやうでございます。

徳川家御繁昌の頃、立派な御旗本の殿樣、徳川の幕府瓦解の後は、今までの樣に御扶持が出ませぬから、町人同樣に御商法を遊ばさなければなりませぬ、斯ういふ事をしようか、あゝいふ事をやらうかと考へた末が皆んなやり損なつたなどといふお噂がございます。それは其の譯で、お商人はお商人の世辭愛嬌といふものがなければなりませぬ、それがどうもやはりお武家の見識が抜けませぬから、商法にはいけませぬやうで、主人『ア、奥や』奥『ハイ、お呼び遊ばしましたか』主人『ウム、お呼び遊ばした』奥『何か御用でございますか』主人『外ではないが、大分近邊で朋友達が商法を始めるやうだが、當家も斯く安閑としてゐる場合でない、何かいたさうと思ふ』奥『御尤もでございます、何ぞ遊ばしたらお宜しうございませう』主人『私は料理屋を出さうと思ふがどうぢや』奥『誠に結構でございますが、馴れるまではお魚の仕入れが大層難かしいさうでございます、それに夜の更ける商法で、自然朝寢をして誠に身體の爲に宜しくございませぬから、料理屋はお見合せ遊ばせ』主人『さうかなそれでは小間物屋はどうぢやな、綺麗で宜からう』奥『綺麗ではございますが、數が澤山あるので、賣る時に値段が覺え切れませぬ』主人『成程、それでは燒芋屋はどうぢや』奥『食べるだけなら結構でございます』主人『食べるだけといふことがありますか、商法だから燒いて賣るのぢや』奥『それなら家中が燻ぶりますから御免を蒙ります』主人『困

つたな、では風呂屋はどうぢや』奥『風呂屋も唯番臺に坐つて居ると宜いやうでございますが、どうも旦那樣などには御目の毒でございます』主人『フン、それもいかんかな……では近頃ちよい〳〵見受けるが、西洋料理はどうだ、珍らしくて宜からう』奥『飛んでも無いことでございます、左樣な事をしては御先祖樣へ對して申譯がございませぬ』主人『何で御先祖へ申譯がないのぢや』奥『權現樣御遺言百ケ條御條目の中に、異人の船が參つたら打拂へといふことがございます、其の御遺言に背いてまでも、異國の料理をして今日を凌がうといふのは誠に情けないことで、どうも良心が咎めて私には出來ませぬから、お止まり下さいますやう、又強て貴郎が遊ばす御所存ならば、私は自害をいたします』主人『そんなやかましいことをいつては困りますよ、何も無理にしようといふのではない、……どうも困つたな、何にもする事がない、……汁粉屋はどうだ』奥『アレマアお汁粉は結構でございます、阿母さまもお好き、孃も好き、貴郎もお好き、私も大好物で……』主人『何を言つて居るんだ、お前方が拵へて食べるのではない、商法にするのぢや』奥『それでも貴郎、間にちよい〳〵……』主人『ちよいちよいなどは不可んよ、……ナニ看板かえ、どうも、看板書きの書いたのは綺麗は綺麗だが、拵へてあるから文字が死んでゐる、開業の看板に文字の死んでゐるのは緣起でない。予が認ためよう』予が認めようといふお汁粉屋だから堪りませぬ、それから太い筆を執つて、御家流か大橋流か何かで見事に『御膳汁粉』とお書きになつて、御屋敷の御門へピタリとお揭げになりました、斯ういふのですから直ぐに目が着きます。○『オヤ、世の中は三日見ぬ間の櫻かなといふが、變れば變るものだな、馬に乘つて家來を連れて往來をした殿樣が、武士の見識を捨てゝしまつて、汁粉屋になるとは感心だ、「時よ時節とあきらめしやんせ馬に乘る殿汁粉賣る」ッてな都々逸は詰り、甘から割出したんだな、……屹度是れは安いよ、普通の汁粉で五錢ぐらゐ取るのが二錢か三錢で、殿樣御機嫌宜しうございますとか何とかいつて煽てれば、宜しくば澤山食べろ、代價は要らんといふので只食はせるよ入つて見よう、……オヤ店がない、是は驚いたね、此の玄關が入口だらうが、ウッカリ入つて叱られるといけない、本來なら此の障子を左右へズ



ーツと開けて、前へ、、、、ちよつと洒落た暖簾、か何か掛けてあると入り宜いんだけれども、暖簾がなくつて障子が閉つてゐる所を見ると、此所ぢやアないかしら、臺所へ廻つて聞いて見よう……お頼み申します、驚いたねどうも、何ぼ時勢が變つたからといつて、汁粉屋へ來て頼むといふのは可笑いね……お頼み申します』取次『ドーレ』○『オヤ〱』取次『何ぢや』○『ヘエ、只今此の御門前を通行いたしますと、お汁粉樣の御看板が出て居りますから、御當家樣の御殿でお商ひになりまするか、或はお長屋樣でございますか、伺ひたう存じます』取次『ウム其方は汁粉を食しに參つたのか』○『ヘエ』取次『イヤサ汁粉を食しに參つたかと尋ねるのぢや』○『ヘエ、好い鹽梅にお天氣になりまして……』取次『分らぬ奴ぢやな、天氣を尋ねるのではない、汁粉が食べたいかと申すのが分らぬか』○『ヘエ、食べたうございます』取次『食べたければ玄關へ廻れ』○『ウヘーツ……大變々々併し幾ら以前は御身分があつても、今では商ひをするとの考へから、假令町人風情にでも、臺所へ行つたら、玄關へ廻れといふ所はさすがに有難いね、どうだい、是れで玄關の障子が左右に開いて、どうぞ此方へと、可咲に案内して呉れるかどうだか、此の樣子では分らないな、何しろ玄關へ廻つて見よう』玄關の方へ行つて待つてゐると、ソコはお武家でございますから叮嚀でございます、お障子が左右へスーッと開くと、お孃樣がお出ましになつて孃『あのお汁粉を食べに參つたのはお前かえ』○ウヘーツ私でございます』孃『此方へ上がりや』○『ヘエ、御免下さいまし』孃『履物を持つて上がらんと犬が咥へて行くよ』○『エ、ツ、では何所へ置きませう』孃『別に置き所もない、玄關へ脱ぎ捨てゝは不潔であるから、其方の懷へ入れて置きや』○『オヤオヤ是れは恐れ入つたな、下駄を懷へ入れろは驚いたね、此の鹽梅では何を食はせられるか分らないぜ』孃『何を申して居る』○『イエ何にも申しては居りませぬ』孃『サア愼しんで通るが宜い』○『ヘエーッ、愼しんで通りますか』玄關の次のお座敷へ通つてボンヤリ坐つて居りますと、お附紙を隔つて向ふのお座敷で御隱居樣らしい聲で隱『あのお前ちよつと……』男『ハイ、阿母さま、御用でございますか』隱『イエ別に用ではありませぬが、何か參つたやうだね、物貰ひかえ』○『オ、オツ、物



貰ひだとよ情ないな』奥『イエ物貰ひではございませぬ、町人がお汁粉を食べに参りましたので』隠『ア、町人が汁粉を食べに來ましたか御開店になつてから初めての客ぢやの』奥『ハイ左様でございます』〇『オヤ〳〵乃公が第一番かい、開店の口開けと來たね、大變な所へ飛込んでしまつた』隠『お前小豆はどの位仕掛ける積りだえ』〇『オオオッ今頃小豆の相談をして居るぜ冗談ぢやない、客の顔を見てから小豆の相談は恐れ入つたね、此の鹽梅ぢや夜明方でなけりやア汁粉に有り付けない、眠くなるだらう、腹も空るだらう、情ねえな、斯うと知つたら辨當でも持つて來れば宜かつた、まさか汁粉を食ひに來るのに辨當が要るとは思はないからな』頻りに考



へて居ります所へ、正面大鞘形のお唐紙がスーツと開くと、出て來たのは御用人、黒紋付の羽織に袴を着け、料紙硯を持つてピタリとそれへ坐つて用人『ア、汁粉を食したいッちふのは其方か』〇『ホーラ又始まつた、ウヘーッ……』用人『其方の住所姓名を尋ねる』〇『ヘエ、清兵衛さんは一緒ぢやございませぬ』奥『さうではない、所と名前を尋ねるのだ』〇『ヘエー、お汁粉を食べるに一々所と名前をいふんですかい』用人『御當家の御家法だから仕方がない、萬一如何なる者が參つて、窃盜を働かんとも限らぬから……』〇『オヤオヤ泥棒扱ひは驚いたね……ヘエ申上げます、神田小川町二十番地古今亭雷門といふ落語家でございます』用人『ア、落語家か、落語家も此の頃汁粉を食ふやうになつたか』〇『ヘエ先から食べます』用人『世の中が末になつたな』〇『オーヤオヤ……』用人『ソコでどうぢや、御當家に於てお拵へに相成るお汁粉は御膳汁粉、田舍汁粉と二種あるが、何れを食べるか』〇『ヘエ、御面倒でございますが、御膳汁粉を二杯ばかり……』用人『二杯……それは不可ん』〇『ヘエ』用人『不可んよ二杯ばかり、少ない』〇『少ないと仰しやつても、私は其の位が丁度宜しうございます』用人『お前は丁度宜からうが、御當家に於て御不都合ぢや』〇『それでもお代は現金で差上げます』用人『當然ぢや』〇『それでどういふ所が御不都合でございますか』用人『尋ねるなら言つて聞かせるが、二杯拵へるも十杯拵へるも、殿様奥様お嬢様を初め吾々共に至るまで、手の掛る所は同じ事だ、二杯ぐらゐ商つて居つては、御當家に於ては利益がない』〇『ヘエー、それではどの位食

ぺたら宜しいので』用人『十杯食へ』〇『エエッ十杯……』用人『食へんと申すのか、イヤサ食へんと申すのか』〇『どうか脅さないで下さいよ、驚いたな……あゝ一杯幾らでございます』用人『一杯五十錢ぢや』〇『エ、ッ五十錢……お椀へ一杯でございますよ、馬穴ぢやございませぬよ』用人『當然だ、馬穴へ汁粉を入れる奴があるか』〇『ヘエー、一杯五十錢とはどうも高うございますね』用人『ナニ高い……モッット前へ出ろ』〇『ヘエ』用人『イヤサ、モッット前へ出ろ』〇『ヘエ、どうか御勘辨を……』用人『御勘辨ではない、よく聞けよ、豊臣の天下滅びて全く政權德川家に歸し、居城を江戸に構へ、二百六十餘大名は參覲交代を申し遂し旗本八萬騎を備へ正々堂々と打續いたる今日、畏多くも王政復古の御代となり、二百六十餘大名は公侯伯子男の五つに別けて華族に列せられ、我々旗本八萬騎は士族といふ稱號を賜はり、奉還金をお下渡しに相成ると雖も唯遊び居るは恐縮に堪へず、仍て御親戚御協議の上、お汁粉屋を以て御生活をお立て遊ばすことゝなり、其席上に於て一杯五十錢とお取極めに相成つたるお汁粉値段、高いなどとは不屆至極の奴だ、今一言申して見ろ、其の分には捨置かんぞ』〇『ウヘーッ、どうか御勘辨を願ひます』用人『勘辨しろといふからは一杯五十錢のお汁粉値段承知か、それとも不服とあらば權現樣御入國以來……』〇『モウ分りましたよ』用人『分つたら宜しい、是からお汁粉は製造にかゝるから、暫らくの間愼しんで待つて居なさい』〇『ヘエーどうかお早く願ひたいもので……』まるで白洲へでも行つたやうな塩梅、是から奥樣お孃樣總掛りでお汁粉の製造に取



かゝるといふのですから心細い譯のもので、奥『サア孃や、此處へいらつしやい、私が粉を掻き廻すから、其方は丸めて下さい……其のやうに大きく拵へてはいけませぬ、お樂みにするのではない、お父樣が御商法になさるのだから、サアよく見て在つしやい、此の位の大きさに拵へれば宜しうございます、町人が食べるのだから、少し位生煮でも構ひませぬ』それから漸く出來上りましたが、お武家のことでございますから御行儀は確かでございます、お孃樣がお盆へ載せて目八分に疊の縁を踏まないやうに徐々とお持出しになりまして、前へ置くと疊三枚ばかり下がつて 孃『サア町人遠慮なく食べるが宜い』〇『ウヘーッ』 孃『妾は此所で見屆けて居ります』

○『オーヤオヤお檢視附きかえ』キチンと兩手を膝へ突いて見て居ります○『ヘエお孃樣頂戴いたします……大變窮屈なお汁粉屋へ入つてしまつた、それも安ければ宜いけれども、一杯五十錢、おまけに十杯食へといふ、御膳壓制汁粉、此の頃間が悪いから、しること爲すこと斯ういふ工合、あんじるよりは餅が高い、御膳涙汁粉の愚痴汁粉、掻廻し汁粉の薄汁粉、底へベッタリ附ツ着汁粉、恐れ入りましたなどうも食べるグニヤツお孃樣是れは甚だ失禮でございますが、まだしんこが半分粉でございます』孃『半熟の方が樂だよ』○『ヘエー、玉子と間違へちやいけませぬ、氣味の悪いお汁粉だ……お孃樣、是れは甘くございませぬが、貴方はお馴れになりませぬから、小豆とお砂糖、鹽の割り力が本當でないかと存じますが、どういふお割合でございます』孃『小豆が一升』○『ヘエ〱』孃『お砂糖が一錢五厘』○『エ、ツ、一升の小豆へ砂糖が一錢五厘、それではお天氣續きでお雨氣無し、鹽はどの位……』孃『八合五勺』○『ウワーツ……』斯ういふ風では繁昌いたしませぬ、忽ち失敗をいたしましたから、御夫婦又御相談をして主人『どうだ奥、今度は鰻屋を始めようか』奥『それは宜しうございませう、鰻屋といふものは魚が一品で濟みますから、外の料理屋と違つて世話がございませぬ』主人『それでは鰻屋を始めよう』



モウ今度は屋敷構ではいけないといふので、町へお引越しになり、御用人などは暇を出して女中が一人、鰻屋を御開業になりました、處が五六日すると、鰻を裂く職人が怠けて出て參りませぬ奥『旦那樣、鰻裂きが參りませぬから、今日はお休みになつたら宜しうございませう』主人『さうはいけないよ、休むといふのは宜くないよ』奥『それでもお客が來ると鰻を裂くのにお困りでせう』主人『困りはせぬ、拙者がやるよ、職人のやるのを見て、鰻の押へやうから突き力から串を刺して燒くまでの手順はチヤンと心得てゐる、心配には及ばぬから看板を出して置きなさい……ア、客が來た、是れは〱能くお出で、其所は端近、先づ先づ二階へお上がりなされ』トン〱トントン。『吉兵衛さんどうだい』△『何だい此の家は』○『何だつて德川家御繁昌の頃、千石取りのお旗本で松平紋之丞樣といふ、大した御方だ』△『ヘエー、道理で是れは〱其所は端近先づ〱二階へお上がりなされと來た、まるで芝居だね』

○『お前、あれに驚ろくやうでは此處の家の鰻は食へないよ、あの調子だから二三度は劍突を喰ふ、四五度は當身、七八度は脊負投げ、十度以上になると命が危ない』△『冗談ちやアない、命取りの鰻屋だね』○『それは冗談だが、何しろ根が旗本の殿樣だから物が鷹揚だ、其代り職人の良いのが居るんだ、私が連れて來るのに無駄の所へは連れて來ないから默つて居なさい』トン〱トン〱女『入らつしやいましお誂ひを伺ひます』○『アア中串を二圓ばかり燒いて、酒を早くつけて……』女『畏りました……旦那樣』主人『何だ』女『御酒を早くして、それから中串を二圓ばかり……』主人『マア待ちなさい、中串などと贅澤をいはれては困る、大小合併してゴチヤ〱に泳いでゐるのだから、どれが中串だか分らない』女『それでもお客樣がさう仰しやいました』主人『お客はさういつても、是だけの中から中串だけを選り分けるといふことは容易なことではない、成たけ寸法の中ぐらゐの所を捕まへるのだが、鰻だつて捕まへれば命がない僕は心得てゐるから。一生懸命に逃げ廻ります……サア奥や、鰻を捕まへるのだ、支度をおし……襷を持つて來なさい、それから鉢卷を……』奥『襷鉢卷をして』主人『それから表の戸を閉めて、萬一鰻が逃げた時に、外へ出ないやうに……』奥『戸を閉めたら暗くつていけませぬ』主人『何しろ此澤山居る中から、中ぐらゐの所を此方の方へ追ひなさい』奥『さう仰しやつても、鰻は皆んな同じやうな顔をして居りますから……』主人『ソレ〱其方へ行つた……ア、潜つてしまつた、不埒な奴だ、ソレソレ鰻が其方の端にかたまつて相談をしてゐる、此方の方へ追出しなさい』奥『ハイ……サア〱皆さん其方へ入らつしやいましよ』主人『何も鰻を捕まへて入らつしやいましなどといふには及ばないではないか、ソレ捕まへた……アレツ、拔けてしまつた、已れッ……ア、捕まへた』奥『貴方早く爼へ載せて刺さないと、又逃げてしまひます』主人『お前はさういつたつて、斯うなつた以上、却々爼へ載るものではない、ア、脫ける脫ける』奥『貴郎外へ出て行つてはいけませぬよ』主人『出たくはないが、鰻がヌルヌル頭を脫け出すから、段々外へ出てしまふ……モシモシ八百屋さん、其の荷車をどけてお呉れ……其所にゐる方、濟まないが其の郵便箱を片付けて……』大變な騷ぎ、二階のお客はポン〱女『ハーイ』○『姐さん馬鹿に長いぢやないか』女『相濟みませぬ』○『相濟みませぬぢやない、何時まで胡瓜の香物で飲ませるのだい、第一此の胡瓜はまだ漬つてゐないぜ』女『それでも手前共の爺婆などは生で食べて居ります』○『人を爺婆と一緒にする奴があるものか、鰻はどうしたんだ』女『今捕まへて居ります』○『捕まへてゐるえ、まだ捕まへないのかい、冗談ちやァない、行つて見ろ』トン〱と下りて來て見ると、殿樣、鰻と組打をしながら町内をグル〱廻つて居ます○『旦那、何所へ行くんです』主人『何所へ行くか、鰻に尋ねて頂きたい』（終）

川柳―蒲燒はあふぐ方やなくて引ばたき

家庭笑話

○公園のベンチで休んでゐる老婦人のところへやつて來た子供、
『お婆さん、あなたは齒が丈夫ですか』
老婦人『いいえ、妾の齒はもうすつかり拔けてしまひましたよ』
子供はそれで安心したといふやうに兩手に一ぱい持つてゐた胡桃を老婦人に渡して、
『ぢや、お婆さん、すみませんがこれを預かつといて下さいな。僕、もう少し取つて來たいんですから……』



○大家の五郎兵衞が黒塀を塗替へて、そこに白木へ『落書す可からず』と書いて貼つたのを見た凸助が、早速その黒塀にチョークで太々と、
『ハイ承知しました』



○兩替屋『只今の兩替賃を戴きます』
客、別の拾圓札を出して、
客『これで釣錢をくれ』



○井戸の中へ降される男『おい、ちよつと綱を下げるのを止めてくれ、もう一度上る用があるから』
綱を持つてゐる男、矢張り綱を下げ乍ら、
『いいぢやないか、用事は今一度上つた時にしろよ』
井戸の中へ降ろされる男立腹して、
『いや、いけないいけない。それとも、どうしても下げるのを止めないといふなら、綱をブッ切つてしまふぞ』



○『モシモシ良人、端書の表に「大阪市伯父上様」と書いただけでは解りますまい』
『馬鹿を言ふな大阪に俺の伯母は一人しかゐないんだぜ』



○給仕『社長さん。あなたが失くしたお金です。ヘイ!』
社長『有難う! 仲々正直者だね。オヤこれは紙幣じやないか? 儂が失くしたのは十圓の小切手だよ』
給仕『銀行で現金に替へて來ました。お禮を一割だけ戴きたいと思つて……』





武勇講談

塚原小太郎

寶井馬琴
井川洗厓畫

木刀の冴え山賊退治

木立明神の前へ強拐されて來た娘、繩を解き、猿轡を脫つて話を聞いてみると、この娘は下矢吹村の名主多左衞門の娘のおみつといつて今年十九、上矢吹村の金満家福富吉郎太夫の悴萬之助といふ者の所へ、今夜嫁入の途中、上矢吹村と下矢吹村との境まで來た時に、この界隈を荒す大賊大山六太夫といふ三好長慶の浪人者が二十人餘りの手下を從へて現はれ、附添ひの者を殘らず縛り上げ、自分はこゝまで連れて來られたが、この先どうなることか心配なことでございますと涙ながらの物語。これを聽いた塚原小太郎勝義、素より義に強い人でございますから、何でこのまゝ打捨てゝ置きませう。それ

小『憎くきところの賊徒共、御身の嫁入の衣裳を奪つて、それを身に着けてまゐつたからは、福富とやらの家へ、御身に化けて押入り、賊をはたらかんとするに相違ない。よしッ、拙者がその賊を退治して、福富方の難儀を救つて遣はす。御身はこれより福富方へ參る途を存じてをるか』

娘『はい、存じてをりまする』

小『然らば直ぐに案内いたせ』

娘『はい……』

小『それにしても、大小は修験者に奪はれて、身には寸鐵もない。何か獲物は……』と、四邊を見廻しますと、最前目についた、劍の奉納額。

小『オヽ、ツこれぞ究竟の得物……』と、立上つてその額にかゝ

つてゐる二本の木劍を取つて、堂の外へ出で、試みに二つ三つ振つてみると、ビューツ、ビューツとしなふ音のするのは柔の色付ではない、確かに赤樫の木刀。

小『これさへあれば大丈夫……さア娘、案內をいたされよ』

これから娘の案內で、闇の山路を、辿り辿つて來た上矢吹村の福富吉郎太夫が邸、こんもりとした森で圍まれ、立派な冠木門がある。

娘『これが福富の邸でございます』開いてゐるから、ズイと門の中へはいる。

小『賊共に姿を見られてはならぬ。御身は何れかへ隱れてゐなさい』

娘『それではこの傍の木小屋の中に隱れてをりまする』

小『うむ、さういたせ。事の濟むまで決して出てはならぬぞ』と、娘を木小屋の中へ隱しておいて、小太郎勝義、玄關の方へ進んで來て、耳を欹てゝ樣子を窺ふと、家の中ではザワ／＼ザワザワ騷立つ人聲。

『さては賊共、やがてこれへ出て來るに違ひない。出て來たらば唯一打に』と、木劍を持つて、玄關式臺の所に待ち構へてゐる。奧へ入つて退治するのは譯はないが、同じことなら邸を血で汚したくないと、年は若いが塚原小太郎、人の身上の思ひやりがある。さア來い來れと息を呑んで待ち構へる。かくとは知らぬ小賊共、『ドッコイサ、ウントコサ、ドッコイサ、ア、重い重い』と、千兩箱を擔いで出て來た玄關口、箱段を下りて式臺へ來ると、狙ひすましたる小太郎、『エイッ』と一聲、振下ろした木刀に、賊の一人は腦天を破られて『アッ』といふと、ドターリ倒れて、千兩箱を持つたまゝ死んでしまつた。死に態の惡い奴。千兩箱を片隅へ片付け、近寄つて賊の差してゐる刀を引拔き、月明りに翳して見ると、取るに足らぬ鈍刀、役には立たぬと、向ふの堀の中へボチャーンと投り込んでしまふ。

『ウントコサ、ドッコイサ……』又一人が千兩箱を擔いで來る所を、『エイッ』唯一打。『キャッ』パクンと頭を破られて、ドターリ倒れる。來る奴も／＼四五人といふ者、何れも木刀のために唯一打に殺されてしまつた。

ところへ『ウントサ、ドッコイサ』と今度は長持を擔いで來た二人。

『おい／＼玄關だぞ。箱段だ。それから式臺になるんだ。躓いて倒れるな』

『何をいひやアがるんだ、泥棒めえ。暗がりで躓づきやア泥棒は出來ねえ。暗い所が眞ッ晝間、晝間が夜と反對の稼業だ。大丈夫だッてえことよ。ドッコイショ』と、箱段を下りて式臺へ來たところを『エイッ』と一打。『キャッ』ドターリ。

『やい／＼、何をしてゐやアがるんだ。だから乃公が言はねえこつちやアねえ。氣をつけろといふんだ……やい／＼そんな所へ寢ちやアいけねえ。質の惡い野郎だ。物を擔ぎながら寢てしまふ奴があるものか』と、側へ寄つて來る所を『エイッ』と一聲。パクンと頭は破れて、ドンと倒れる。死骸をズル／＼ッと

引摺つて行つて、長持を向ふの廣場へ片付ける。ところへ、
『それぢやア先へ行くぞ。木立明神の前で待つてゐるから早く來いよ』
『ようございます。それぢやア小頭御免なせえ』といふ聲。さては小頭といふ奴が來るかと、小太郎は木刀を一振りピューッと振つて待ち構へてゐる。そこへ出て來た小頭といふ奴、玄關式臺へおりた所を『エイッ』と一打、『キヤツ』パクンと頭は破れて打ち倒れる。小太郎の腕前にかゝつては、小頭も中頭もない。同じやうにたつた一打。左の足で小頭の胸を踏んまへて、差してゐる太刀をスラリと引抜き、雲間を洩れる月の明りに照して見てをりましたが、
小『ウム、これなら斬れる。この刀なら五人や十人、何



のものかは……』と、刀を打ち振つてゐる所へ一人の小賊、『小頭、待つておくんなせえ』と、出て來て見るとこの有様。髪はおどろに振り亂し、ボロ／＼に破れた着物をきた男が、兩眼を光らして、これなら斬れると、刀を振り廻してゐるから、小賊驚いて、『泥棒ーツ』と聲をあげた。何方が泥棒だか分らない。奥へ逃げ込まうとする所を、飛込んだ小太郎、『ヤツ』と一聲、後袈裟に切つて落す。もう聲をあげられてみると、かうしてはゐられない。血振ひなしたる一刀を提げたまゝ、奥の間さして來て見ると、年齢四十五六、色あくまで黒く、熊の皮の胴服着たる大男、これぞ三好長慶の浪人で賊の張本大山六太夫、大胡坐をかいてガブーリ、ガブリと酒を飲んでゐる。小賊共十人餘り周圍を取卷いてゐる。前には主人の福富吉郎太夫夫婦、伜の萬之助をはじめ家内一同、後手に縛められ、ブル／＼ブルブル慄へてゐる樣子。キッと打見た塚原小太郎、大音揚げたることにして、『これやい、他人の財產を奪はんとする憎くき賊奴等、天に代つて誅戮いたしてくれる。覺悟いたせ』と呼ばはつ

た。大山六太夫これを見て、

六『やア洒落臭え若僧め、邪魔をするな』と、いふより早く持つてゐた盃、小太郎目がけて打付ける。體をかはしたから盃は向ふの柱に當つて、微塵になつて砕ける。『それやつてしまへ』心得たりと小賊共、抜きつれ／＼斬つてかゝるを、右に切り伏せ左に切り倒す。六太夫烈火の如くに憤り、『覺悟ひろげ』と、大刀抜く手も見せず、斬り込み來る。この時、小太郎の體が飛鳥の如く轉つたと見えたが、『エイツ』といふ鋭い氣合の一聲。『アツ』と叫んで六太夫、早や腦天より鼻柱まで切り下げられて、血煙立つて打ち倒れる。『それ、頭がやられた。氣をつけろ』と、逃げようとするを後より追斷け、或は袈裟掛け車切り、水も溜らぬ空竹割、バツタバタ／＼當るを幸ひ切り倒し、到頭こゝに賊を鏖殺しにしてしまひました。『これでよし』と、ホツと一息、縛られてゐる吉郎太夫これを見て、『いかに亂世とは言ひながら、人の財産を的にして、泥棒同志で斬合つてゐる。後から來た泥棒の強いこと』と思つたが、五萬石の若殿塚原小太郎を泥棒と間違へてゐる。小太郎ヅカ／＼と前へ來て、



小『當家の主人は御身か。かやうな姿はいたしてゐるが、拙者は決して怪しい者ではない。常陸の住人仁科與四郎と申す者、木立明神の社前に於て、圖らずも當家へまゐる嫁、名主多左衛門の娘を助け、當家に賊のはいつたことを知つて、退治のためにまゐつた。賊は殘らず退治いたしたから、安心いたせ』と、これからズバリ、ズバリと一同の繩を切つてやつたから、主人をはじめ一同は地獄で佛と打喜び、

吉『危い所を有難う存じました。して、嫁の身には何事もございませぬか』

小『オヽ、身共が助けて連れまゐり、木小屋の中に匿まひおいた』と、木小屋の中から娘を連れて來て會はせたから、一同の喜び

は一通りではございませぬ。やがて夜が明ける。すぐに代官へ此事を届ける。代官が下役の者を連れて出張、死體を調べて見ると、皆一刀の下に打ち殺されたり切り倒されたりしてゐる。その非凡の腕前に、代官も舌を卷いて驚き、これにて近郷近在の者が安らかに眠ることが出來ますと、丁寧に禮を述べて引上げる。

こゝで小太郎、湯浴をなし、月代を剃ると見違へるやうな男振り。家内のものは、悴萬之助の衣服を出して着せるやら、馳走をするやら、下へも置かぬ待遇。だん〳〵話を聞いてみると、羽黑山へ登つて比那丸大道圓海を討ち取つたが多くの修驗者共に捕へられて云々と小太郎の物語。主人をはじめ一同も且つ驚き且つ喜び、衣服を改めて禮を述べる。これも先生のお蔭と、婚禮の時には小太郎を上座に据ゑて祝の酒宴。小太郎は十日あまり福富方にをりましたが、身體もすつかり回復いたしましたので、暇を告げて出立することになりましたが、福富方では命の恩人とて、塚原の定紋付いたる衣服を調へ、平安城信國といふ銘のある大刀、小刀は銘は、ございませぬが、これも名刀、この大小に路用の金も十分に添へて、これを塚原に贈り、こゝで一同に送られて小太郎は、矢吹村を出立いたしました。



丸女藏人の祈願

さて矢吹村を立出でました塚原小太郎は、間もなく出羽の天童へと差しかゝつてまゐります。この天童といふ所は、出羽國最上の城主最上出羽守義光の領地でございます。最上領には天童、山形、上の山といふ三箇所の城があつて、天正時代の最上領は八十萬石からも上がつたといふ大したもの。南は會津方面に接し、北は越後領一帶を押さへてをり、百萬石といつても恥かしくないほどの領地。天童は最上家の支城ではあるが、なか〳〵繁昌な所。その城下へはいつて來た時に、圖らずも羽黒山の修驗比那丸入道圓海の舍弟信濃坊圓達といふ、身の丈七尺に近く、力あくまで強い悪逆の修驗者に出會つて、これを切り倒し、天童五郎次郎といふ劍士に仇討をさせるといふお話もございますが、殺伐なお話が續きまするから、この邊は略して申上げませぬ。

天童を立つて、あれから道を上州路へとつて、信濃と上野の國境碓氷の峠へ來た時に、上泉の門人四天王の一人で、この上州坂本に道場を出してをりまする丸女藏人に出會ひました。小太郎より羽黒山へ登り、比那丸入道圓海を打ち殺して、恩師の恥辱を雪ぎ、其後これ〳〵との話を聞いて、藏人も大きに喜び、こゝで塚原を連れて峠を下り、坂本の中宿、己れの道場へ小太郎を案内いたしました。長途の疲れがあるから、湯浴をさせ、膳の支度をいたして久方振りで小太郎は藏人と盃を取交すことに相成りました。すると、どうしたのか丸女藏人が、一口飲んでは盃を傍らへ置いて考へてゐる。小太郎ぢッと見てをりましたが、

小『丸女氏』

藏『ハツ……』



小『甚だ失禮だが、貴公は何かお心に御心配がござるか』

いはれて藏人が、

藏『流石は塚原氏、御眼力恐れ入つた。いかにも拙者身にあまる心痛がござる』

小『ハ、ア、如何なる事かは知らぬが、拙者の身で出來ることならば、御心配の相談相手にならうではござらぬか。その仔細をお話し下さい』

藏『まことに千萬忝けない。實はお訊ねがなくとも、拙者からお話をいたさうと思つてをつたが、外ではござらぬ。毎年赤城明神に於て、源平旗取の試合といふものがござる』

小『ハ、ア、拙者參つたことはないが、噂には聞いてをる、それがいかゞいたしました』

藏『然るにこの勝負、一人にて十人に勝つたる時は、神勅によつて、神前の白旗を其者に賜はります』

小『成程』

藏『翌年其者が又十人に打勝てば、源平の旗を神前より下さる』

小『ハ、ア成程』

藏『三年目にまたく其者が一人にて十人に打勝ちますれば、何流を問はず武藝の源として日本隨一と記したる額面を赤城明神に奉納いたすことが出來ます』

小『ウーム、成程』

藏『然るに當國間庭の住人樋口十郎左衛門の倅十藏光義と申す者、なかくの達人にて、一昨年昨年と兩度の勝負に勝を占めましてござる。當年いよく彼が十人の者に打勝ちますれば、神勅によつて、間庭念流を以て日本隨一の額面を神前へ奉納致されます。然る時は同じ上州にあつて、上泉先生の御名前にもかゝはり、門人一同此上もなき恥辱にござる。それゆゑ當年は是非拙者樋口十藏に打勝ちたく心得てござるが、何分十藏光義は適れの腕前、吾々の遠く及ぶ所でござらぬ。さりとてこのまゝに打捨ておきますれば、流名の恥辱、恩師の名折れに相成ること。此上は神明の御力を借りて十藏光義を見事に打込まうと心得、實は三七二十一日の間、この榛名山の熊野大權現へ日參をいたしをりました。然るに滿願の今日、參詣の戻り道、其許に此處にて御目にかゝりましたは、所謂神明の御引合せと申すものでござらう。なんと塚原氏、御迷惑でもござらうが、試合の當日は六月十三日、赤城へ御出張に相成り、當の相手の樋口十藏光義を打込んでいたゞきたうござる。流名の大事、恩師のお名前にも係はる勝負、どうか枉げて御承知を願ひたいが、いかゞでござる、塚原氏』といはれて小太郎勝義、暫らく考へてをりましたが、

小『宜しい。手前も赤城の旗取の試合に就て一見いたしたいと存じをりしところ、勝負は今より斷言をすることは出來ぬが、この試合確かに小太郎勝義お引受け申した』、

藏『早速の御承知、まことに千萬忝けない。然らば一旦[illegible]へお歸りに相成つて、改めて當道場へお出で下されるか』

小『いや、もう十三日と申しては、日數もござらぬから、御道

惑でも當日まで當家に滯在をいたすによつて、お世話を願ひたい』

藏『さうしていたゞけば、何よりも結構。然らば何分御願ひ申す』

これから丸女藏人は、塚原小太郎を自分の道場へ留め置いて、六月十三日赤城明神試合の當日の來るのを、指折り數へて相待つてをりまする。

間庭の小天狗樋口十藏

丸女藏人の話の通り、この上州の赤城明神の神官村上能登といふ人は、武術の達人でございましたから、神慰めのため每年全國の武藝者を集め、神前に於て源平旗取試合と稱けて大試合をするのを例といたしてをりました。この試合に一昨年昨年と二年續けて、一人にて十人の武藝者に打勝つたのが、上州間庭の住人樋口十郎左衞門の一子十藏光義、年は本年二十五歲に相成りますが適れの腕前。今年の試合に、十人を拔けば、いよいよ日本隨一と記した大額を赤城明神の額堂へ掲げ、適れ武藝の司といはれるのでござい



ますから、十藏光義にとつては最も大切な試合。又他流の者も、この三回目に十藏に勝を占められて、日本隨一の額を上げられるとなると、自分の流儀の面目にも關するから、どうしても負けることが出來ない、意地にも十藏を打込まなければなりませぬ。それだけに今年の勝敗こそ、各流各派にとつては實に乾坤一擲の大試合でございます。

　ところが、何事でも評判がいゝと慢心をするのが人の常。門弟の中心になつてゐるだけに、間庭の小天狗、樋口の鬼とよばれて、人から賞められると、年の若い十藏光義、乃公こそはと鼻を高くして、この頃では人を侮り、稽古にも碌々身を入れないといふ有樣。そればかりではない、近頃十藏には戀しい女が出來て、木刀取る手に美しい女の手を取つて歩いてゐる姿を、村の人達にも見られるやうになりました。この戀の相手といふのは、同村の名主喜右衛門の娘のおちか、間庭小町といはれるほどで、鄙には稀な美人。

『どうだね太郎作、見たかね』

『何をさ』

『樋口の若先生が、名主どんのお孃さんと、手に手を取つて、ふざけながら歩いてゐただ』

『さうか。乃公はまだ見ねえが、甚兵衛が昨夜見たつて言つてゐただよ』

『乃公も見ただ。樋口の小天狗といはれるだけに、劍術ばかりでねえ、女を打込むことも上手だと見える』などと、寄ろとさはると此噂。それが高まるにつれて、父十郎左衛門の耳に入りましたから、十郎左衛門の心配は一方でない。

父『十藏、これへ參れ』

十『はい……父上、何か御用でございますか』

父『赤城の奉納試合も近づいたに、なぜ稽古をいたさぬ』

十『いえ、仰せでございますが、稽古には及びませぬ。本年の試合も、この十藏の勝利にございます』

父『この度は三回目、日本隨一の額を上げるか上げぬかの境……』

十『それも存じてをります。二年續けの勝利、本年で三度目、十人を打込んで、いよ〳〵日本隨一の額は手前のものと存じてをります』

父『それならば尙更のこと大事の勝負。稽古を十分に勵まねばならぬ。聞けば諸國の武藝者、樋口に日本一の額を取らせまいと、必勝の意氣を以て出場いたすとのことである。油斷は大敵。萬一、他の者に勝を占めらるゝ時は、其方の面目、樋口の家の名折であるぞ』

十『アハヽヽヽ、父上近頃お年を召して、氣が弱くおなりになりましたな。たとひ他流の者、何十人參らうとも、機に臨み、變に應じて打込む手の中、十藏自信がござる』

父『默れッ』いつもやさしい父にも似ず、破れる樣な聲で怒鳴つた。父『其方は近頃慢心いたしたと見える。侮る者必らず敗る。慢心は武術にとつては惡魔も同然。天下は廣大、いかなる

大敵が現はれぬとも限らぬ。負けたら何といたす。身の程を辨へぬか。それに近頃は女に溺れてをるといふ噂を耳にいたした。武藝修業の身をもつて、女色に溺れるとは何事。試合までは大切の身體であるぞ。愼みなさい。馬鹿者めッ』女のことをいはれると、流石の十藏光義も返す言葉がない。殊に例にない父の立腹に恐縮して、そのまゝ自分の部屋へ歸つた。

『父の心配も無理はない。萬一敗けては……』と、考へた十藏、悧巧な男でございますから、それからは道場へ出て稽古をするやうになりましたが、稽古をしてゐる中にも、ニツコリ笑つて自分を招いでゐるやうなおちかの美くしい顔が目先に浮んで來る。『ア、會ひたい』と思ふと、髯だらけの、武骨な門人を相手に、木刀を振り廻してゐる氣になれない。木刀を投げ出して女に會ひに出てゆく。かう女に溺れて來ては、どうも仕方のないもの。

赤城明神奉納試合

さて弘治元年六月十三日、奉納試合の當日と相成りますると、この晴の勝負を見ようと、近郷近在はもとより、遠方からも泊りがけで押しかけて參りますから、赤城の附近は人を以て埋まるかと怪しむばかり、その前日、丸女藏人に於ては、門人を引連れ、十分の支度をなし、塚原小太郎勝義と同道して、坂本の道場を立出でまする。途中、赤城の手前、大胡の宿へ來て一泊。疲れを休めて翌朝日のまだ上らぬ先に大胡を出立、いよいよ赤城へ登りましたが、眞直に行けば幾らもないが、曲りくねつてゐるから上り三里ある。土地の人に聞くと三里半と申します。山の半ばへ掛つて來た時に、丸女塚原の兩人が山下を見下ろすと、試合見物の人々の登つて來る有樣は、恰も蟻が木へでも登るやうな騷ぎ。やう〳〵にして頂上へかゝつて來て見ると、神官の心づけで、一間に幕張りがしてございます。別に棧敷などしつらへてはないが、その幕の中には、今日試合をしようといふ武藝者が、それ〴〵控へてをります。いつも森閑としてゐる赤城山も、今日は實に山を蹈み碎くかと思ふやうな人出でございます。

試合の場所はと見るに、北の方に方つて洲濱の紋を染出したる幔幕を張めぐらしたる傍らに、信州上田の住人青木市左衞門胤貞控所といふ札が建つてゐる。まつた東の方を見れば、丸の内に桔梗の紋を染出したる幔幕、その傍らに當國坂本の住人丸女藏人太夫控所としてある。西の方に方つて、白地に黑く丸の内に五枚笹を染出したる幔幕を張りまはし、傍らには當國館林の住人樋口十郎左衞門控所といふ札が建つてをります。その傍らの幕の中はといふと、或は一人二人三人と、別々に參りました武藝者一同の控所に相成つてをります。

もう四つ（午前十時）近くなつた時分は、この張幕の周圍を數萬といふ人が取卷いて、ワーワツといふ賑はひ。何しろ應仁以來世の中が亂れて、金があるからといつて、一日でも安心が出來ない。外へ出れば無禮打、試し斬といふ恐れがある。領主

の政治が屆かないから、自分の命を自分で守らなければならないといふ時分でございますから、どうしても百姓町人でも、己れの身を守るために武藝に志すといふ有樣。それで何れも武藝には熱心。從つて見物の雜沓は一通りではない。高い所は勿論のこと、木といふ木はまるで人が生つたかと思はれるやう。山は見物の人でぎつしりでございます。

そのうちに赤城明神の神官村上能登、裝束に身を固め、階段を登つて神前に進み、恭しく祝詞を捧げます。それが終ると階段を降つて、傍らの高臺の上に登り、一同を見廻して『東西ーッ』と聲をかける。見物人一同は鳴を鎮めてシーンとする。

能『さて御一統、例年の通り、當月本日を以て神前に於て旗取の試合を催します。武藝者一人にて十人に打勝つ者は、神勅によつて白旗を下さる。又その者が翌年一人にて十人に打勝てば、源氏の旗を下さる。まつた其者翌年一人にて十人の武藝者に打勝つに於ては、何流たるを問はず、日本隨一の額面を當山に奉納いたすことをお許しに相成る、その儀を心得て、武藝者一同、尋常の試合をいたし、勝敗によつて決して宿意をさしはさむことは相成りませぬ。まつた見物人一同は、立騒がざるやう、愼んで立合を拜見いたさるべし』言ひ終ると同時に、ドーン、ドーン、ドーン……と太鼓の





音がはいる。ブー、ブーツといふ法螺貝の音。どうもこの武藝の立合の鳴物は、法螺貝と太鼓に限つたやうで、誠に勇ましいものでございます。幾ら流行るからといつて、喇叭や三味線の入つたのはいけませぬ。『いざ、時刻に相成つてござる。これより試合を開始いたしまする』といふ神官の聲。『それツ』といふと、向ふの幔幕を引絞つて、その所へ現はれ出でたるは年齢二十八九の武士、神前階段の下へ來て默禮をいたし、『拙者儀は常州江戸崎の住人諸岡一羽齋國廣の門人野島三四郎と申する者、姓名をお認めを願ふ』神官が筆を執つて姓名を認める。神前の傍らの所に木劍、槍、薙刀、鎖鎌の類をズラリ列べてある。野島三四郎それへ來て、赤樫の木劍を手に執つて、二三度打振つてゐたが、やがて場の中央へ進んだ。見物これを見て、『ヤア〱出た〱。おーい先生、しつかり頼むぜ。乃公が附いてる——』こんな者が附いてゐたつて仕方がない。此時、向ふの幔幕を引絞つて現はれ出でたるは、これも年頃二十八九、青木重左衛門胤員の門人山口五郎三郎と名乘つて、これ亦木刀をとつて出る。互ひに一禮して『エイ、ヤツ』と立上つた。ボンポーン、二三本打合つたと思ふ間に、山口五郎三郎、物の見事に野島三四郎のため、右の小手を取られて『參つた』とさがる。

野島三四郎は第一番の勝負に勝つて、氣を良くしてをりま

す。つゞいて又一人出たが、これも野島のために打込まれる。見物は大喜び。

さア出る者も〳〵、終に七人まで打込んでしまつた。

○『どうです。あの野島といふ人の強いこと。屹度今年はあの人が十人抜いて、白旗を取りますぜ……おーい、しつかり頼みますぜ――。もう三人だ。さア〳〵あとが出ねえか〳〵。もう三人だ。はい、もう三人、もう三人でござい』

△『何を言つてやアがる』ワイ〳〵騒いでゐる。この時に白地に黒く丸の内に五枚笹の紋の付いたる幕を絞つて現はれたのは、年頃三十五六、後鉢巻、襷を掛け、木刀をさげてゐる。ツカ〳〵と階段の下へ進み、

『拙者は當國間庭の住人樋口十郎左衛門師範代村山宗藏でござる。姓名をお認めを願ふ』と名乘つて、それへ出る。

村『野島氏、お手柔かに』

野『御同様に……』エイヤッと後へ下つて身構へた。ジリ〳〵と付けて二三本打合ふうち、野島三四郎、惜しくも小手を打たれて『參つたッ』とさがる。

『おーやおや、負けてしまつた。口惜しいなア』

『お前さん、そんなに口惜しがつたつて仕方がない』

『けれどもさ、魚を釣つたつてさうだ。大きな奴が鈎にかゝつて、水際まで來て逃げられると口惜しいからな』

『釣と劍術と一緒にする奴があるものか』

續いて出る者、今度は五人まで村山宗藏のために打込まれる。

乾坤一擲大事の勝負

すると、向ふの幕の中より、大手を振つて立出でたる身の丈六尺餘りの大男、黒の紬の削袖、野袴を裾短かに穿き、鮫小紋の脚半、箙縞の足袋、切付草鞋、赤銅造りの太刀を佩き、色あくまで黒く、兩眼は鋭く、黒い髯は頤の所に長く垂れてをります。神官の前へ來て、

『手前事は關八州の探題北條左京太夫氏康の一族二階堂權四郎と申する者、帳簿へお認めを願ふ、得物は槍を以て相手をいたす』と名乘つたが、その聲の大きいこと、立てかけてあるタンポ付の槍を執つた。この槍といふものは、正平の四年正月十一日、河内四條畷、飯森山の戰ひの時に、楠正行の守役隅田入道了觀といふ者、大和の信貴の毘沙門天の利益によつて授かりました三尺三寸の鉾へ、八尺の赤樫の柄を附けて、それを戰場に用ゐて大功を現はした。矢よりも利があるといふので、やりと稱けたと申しますが、これは當にはなりませぬ。二階堂權四郎は大島流の槍の達人、陣刀を向ふの刀架へ直して、ツカ〳〵とそれへ出た。

『どうですえ。強さうな奴が出ましたね。二階堂權四郎といふので、名からして強さうぢやござんせんか。今度は樋口の師範代も骨が折れませう』と見てゐるうちに、ヤツ、エイツ、暫らくの間立合つてをりましたが、二階堂權四郎『ヤツ』と叫んで

突出した槍、見事村山宗藏の腰を突いたから、宗藏、『参つたッ』と、悄然としてさがる、續いて出る者三四人、皆權四郎の槍のために突伏せられる。

ところへ現れたのは身の丈六尺二三寸、見るも恐ろしき人物。これぞ甲斐國八花形の主武田信玄の家來原大隅守といふ千軍萬馬の間を往來して勇名を轟かしたる英雄。

『ヤア〳〵二階堂權四郎とあらば、相手にとつて不足なし。見參見參』と、これも槍を扱いて現はれた。

『ヤア猪口才なり原大隅。いで、汝の首取つて功名手柄にいたしてくれん』と、戰爭でもしてゐるつもりでゐる、双方槍を捻つて十五六合といふもの突合つたが、勝負がつかない。

權『待て、大隅』

大『何だ、降參をしたか』

權『降參などをするものか。草臥れた。一服してやり直さう』

大『それもよからう……おい、火を貸してくれ』

二人の英雄、得物をカラリと投捨てゝ、敷島か何か喫み始めた。いや此時分敷島などありはいたしませぬ。

『おや〳〵煙草を喫んでゐますぜ。仲入かな』芝居かなんかと間違へてゐる。

『さア來い來れ』

『心得たり』と、再び立つて突合つたが、『ヤツ』と叫んで突出す槍、これを受損じて二階堂權四郎、胸先をしたゝか突かれて『参つたッ』と引きさがる。それから又五六人突負かした原

大隅、『さアどうだ。我れと思はん者は出て來い。唯一突に田樂刺にしてくれるわ』と大變な鼻息。

折しも五紋笹の紋付いたる幔幕を絞つて立出でたる若侍。その姿を見ると、見物一同に『ワーッ』と聲をあげたのも無理ならず。これぞ二年續けて勝利を占め、小天狗と名を取つたる樋口十郎左衛門の一子同姓十藏光義であります。『それ間庭の小天狗が出た』『樋口の若先生が出た。この一番が見物だ』と大變な騒ぎ。悠々と神官の前へ來た十藏、一禮して名前を帳簿へ記し、木刀をとつてそれへ出る。

十『手前は當國間庭の住人樋口十郎左衛門一子十藏光義と申する者、お手柔かに……』

大『これは〳〵、御高名は雷の如く承知いたす。手前は武田信玄の家來原大隅でござる』互ひに會釋をして後へさがる。外の奴はどうでもいゝ。この間庭の小天狗を一人退治をして、國への土産にしようといふ意氣組。リウ〳〵と槍を扱いてゐる。『ヤッ』と双方身構へに及び、暫らく睨み合つてゐたが、『エイッ』と叫んで突出したる槍先は電光石火、樋口十藏を唯一突と思ひの外、ヒラリ體をかはしたその早さ。空を突いて流れる槍、これを手許へ繰込まうとしたが遅かつた。忽ち手許へ飛込んだ十藏光義、

『エイッ』と一聲、肩先をピシーリ。

大『参つた』原大隅守、残念さうに引揚げる。さアそれから入り代り立ち代り出たが、何れもバツタバタ〳〵と十藏のために

打ち据ゑられる。十藏、勝ち續けること九人、もうあと一人、勝てば三年目の十人拔き、日本隨一の月桂冠はこの手に落ちる。流石にこの大切の一番勝負、誰出ようといふ者もございませぬ。此時、神官村上能登、その所へ進み出で、

『最早、樋口殿と勝負を望む者はござらぬか、勝負を望む者なきに於ては、樋口十藏殿を第一位の優勝者といたし、本年を以て三年續いての優勝でござるから、日本隨一の額を神前に奉納することに致しまする。不服あらば勝負を申出でられるやう。勝負を望む者はござらぬか』と高らかに呼ばはつた。

この時遙か彼方に聲あつて、

『あいや暫らく、暫らく待たれよ』と、聲をかけた者がある。

人々何者であるかと見てあれば、年の頃二十才前後、身の丈六尺餘り、綠の髮を左右に振り分け、悠然として現はれたる一人の若武士、

『我れこそは常陸國の住人仁科與四郎と申する者、樋口殿の御相手仕らん』と呼ばはつた。この若武士こそ仁科與四郎とは假の名、實は塚原小太郎源勝義であります。樋口十藏光義を向ふに廻しての大試合、いかゞ相成りまするか、次號のお樂しみといたします。(來月號はたまらなく面白くなります)

〇內談は客へ火箸を二本貸し

〇隣のもつるべ取られて千代こまり

絕對無害色を眞白くす脫色素法

ニキビそばかすを除くは極めて容易なり

本文の原稿者は斷言したい。曰く、新聞雜誌の廣告文なるものは百中の九十九までは虛僞的文章の羅列だと。從つて、一般の讀者が廣告文を見る眼は、これを多大に割引して判斷する。ところが、この一頁の廣告則ち『レオン洗顏クリーム』の宣傳文に對しては絕對的の信用で讀まれて宜しからう。次の文章は些少の割引もなく讀まれたい。

何故ならば、この一頁の宣傳文中には、所謂宣傳的の色々の巧妙な言葉を悉く除きて商工省特許局の特許條文の一部を拔萃して報告するに止める。レオン洗顏クリームなる品は、今日までの化粧品中には、曾つて類例を聽かぬ日英米三ケ國の專賣特許品である。どんな色の黑い人でも、レオン洗顏クリームを二月も連續的に使用すれば、色黑の原因たる色素が漂白されて西洋人の皮膚の如くに綺麗な純白に變化するのは當然であつて、その點が新發明である。これだけの權威ある發明品も大々的な宣傳をせぬので知らぬ人も多いやうである。幸ひにして此文章を見付けた人は早く御試驗あれ。默つて使用すれば顏や手の皮膚が別人の如く白く美しくなるので隣人などは吃驚するであらうが、**ニキビ**そばかすに惱んでゐる人々には藥品などより何層倍も迅速な奏効だから御知らせを乞ふ。若し廣告本位の他品に失望せる人は特に滿足すべし。本品は效力本位なれば博士の證明等は省略す。

特許條文の拔萃

英國專賣特許。第一一七〇六〇號。
米國專賣特許。第一二七八五一八號。
日本專賣特許。第三一九〇八號。第三八一一九號。第四一六〇四號。

(前略)……右ヲ濕湯ニ於テ使用スル時ハ、極微細ノ狀態ニ混和セル硫黃ハ石鹼樣泡沫中ニ薄ク散布シ『コロイド』硫黃ニ近似セル働キヲナスト共ニ、石鹼樣ノ加水分解ニ伴ヒテ苛性曹達ト結ンデ硫化曹達ヲ生ジ、普通ノ硫黃泉ニ於ケルト同樣ノ勢能ヲ發揮スルニ至ル。こニ成生セル硫化曹達ハ一部分分解ニ依テ生ズル有機酸又ハ酸性鹽ニ觸レテ、硫化水素ヲ發生スル事アリト雖モ、石鹼樣乳中ニ散布セル『ワゼリン』膜ニヨリ水分ヲ遮斷セル過硼酸曹達ガ此際石鹼樣溶解ニ從ヒテ水分ニ觸レ過酸化水素ヲ放チ、此分解ニヨリテ生ゼル強力ノ酸素ト樹脂石鹼ノ『レジネートドライヤー』ニ類スル一種ノ接觸作用ノタメ、新鮮ノ傾向ヲ帶ビタル附近ノ酸素ニ依リ概不直チニ酸化サレテ新鮮硫黃ニ復シ、一層強力ニ作用スルニ至ルヲ以テ(中略)多量ノ極微硫黃ヲ遊離シテ美白ノ効果ヲ一層有力ナラシム。(下略)



顏と手だけ白くなりし少女の寫眞

△注文の方法▽

レオン洗顏クリームは、その特殊効果を認めて、各雜誌社の代理部でも取扱つてゐるが御希望者は、發賣元たる東京市牛込區西五軒町橫通三番地**レオン**商會(振替東京七四九一二)へ送金あれば直ぐ嚴重小包で發送する。(代金引換はハガキで申込めばよし)但し發賣元への書面には**【キング】**で見た事を必ず記入あれ(振替用紙は裏面に書く)＝價格は眞面目な美顏料として極めて安價である。德用大瓶金三圓四十錢(送料十八錢海外五十五錢)なれば賣藥等より遙かに多量で凡そ二月以上の使用となり他の化粧料や石鹼まで節約し頗る經濟である。また小瓶金一圓四十錢(送料內地十二錢海外四十五錢)を申込みてもよい。レオン洗顏クリームは雜誌の口繪の上におけば忽ち漂白するほど確實の發明品なれば何人も躊躇なく直接注文を寄せられたい。或は東京市本鄉區駒込坂下町四八講談社代理部(振替東京六六二九番)に申込まれよ。

(注意) あまり早く色白くなりたる故に何等かの害なきかと照會書面に接するも却つて皮膚を艷々となす安心あれ。他に專賣特許と稱するも本品の如く內容を公開し得るは絕無なり。この點に刮目あれ！

時は御大典！
感激は奮起となり遂に
此の驚くべき大壯擧！

見よ！キング生れて初めての大計畫！

曠古の御大典に際し、平素國家奉仕の念に燃ゆる小誌キングは、雜誌界空前の大計畫を以てこれを記念し、併せて讀者諸君の熱烈なる御援助に報ゆべく、茲に大壯擧を斷行することゝなつた。それはキング創刊以來始めての

臨時增刊としてとても〱面白い、とても〱爲になる！

必ず忘れ給ふな
十月中旬發賣

國民修養繪物語

滿天下の

一度「明治大帝」キング附錄として世に出るや滿天下驚嘆と賞讚の聲！當時の歡喜と光榮とは、今なほ思ひ出す毎に吾等の胸は躍る！併も今回の臨時增刊は、更にそれに數倍した熱と誠と力を一字一句に打込んで、大なる確信の下に編輯した素晴らしいものであります。

諸君!!

全卷に充つる金玉の文字

全卷悉く精選又精選、或るものは崇高、富嶽の雪の如く輝き、或るものは清麗、白百合の如く香ふ、眞に名篇中の大名篇揃ひ！　感激と興味は誌上に躍動し、一讀萬人の胸を打たずにはおかないもののみである。

更に吾等の誇りとするのは絢爛目を奪ふ表紙口繪である。尙その上に苦心慘憺全卷どの頁にも一流畫家の壯麗無比の大挿繪。何の頁も美しく、何の頁も面白く、何の頁も感銘深いやうにする爲めに、一同は實に粉骨碎身したのであります。

御大典記念として

思切つた大犠牲出版！

これこそ國民全部が一人殘らず必讀すべき大寶典是れ以上のものはない、

最も善いもので最も安いもの

驚き給ふな定價は僅に三十錢！　全部賣盡しても

莫大な損失！　眞に日本始つて以來の大奮發！

國家奉仕の一念より
萬難を排して
此の大事業
敢行！

この一冊こそ
御大典記念として
萬代に傳ふべき
國民寶典
である

キングの眞精神は

「此の増刊に躍る！」

この増刊こそ日頃のキング精神の眞髄を傳へて餘りあるものである。史傳あり、美談あり、感激感動の物語、痛快無比の快話あり、小說あり、講談あり、落語あり、道話・寓話あり、脚本あり、喜劇あり、仁義禮智忠信孝悌あり、大勇士あり、美少女あり、眞に涙ぐましき幾多の物語等々「遉がキングだ！」「キングはやつた！」と天下驚嘆の聲は今より既に耳に鳴り響く！！

發行部數、是亦日本始まつて以來

「破天荒の大部數！」

滿天下の

眞に有意義の増刊！　何としても一冊も多く天下に廣めたい、之れがキングの尊い使

諸君!!

命である。從つてその部數の如き、日本始まつて以來の驚くべき大部數！　印刷所製本所は今や必死の大活動！　晝夜兼行全能力を擧げて之に當つてゐます。

かくしてキング臨時增刊は

◇萬代に傳ふべき——珠玉の樣な內容と
◇大犧牲を拂つた——驚くべき廉價と
◇日本始まつて以來の——大部數とを以て

白熱的歡迎のうちに

十月中旬！

華々しく發行

待たれよ！　その日！

忘れ給ふな！　その日！

吾等は確信を以て
これを
天下に推奬す
快又快一同大勇躍！


女房を
物さしにして棚をつり


大工わろ左官に帯を
しめてやり


子が一人出来て
それなり
けりになり


屁をひつた
方が居角力
負けになり


よい姑ほんの鼾を
かいて寝る

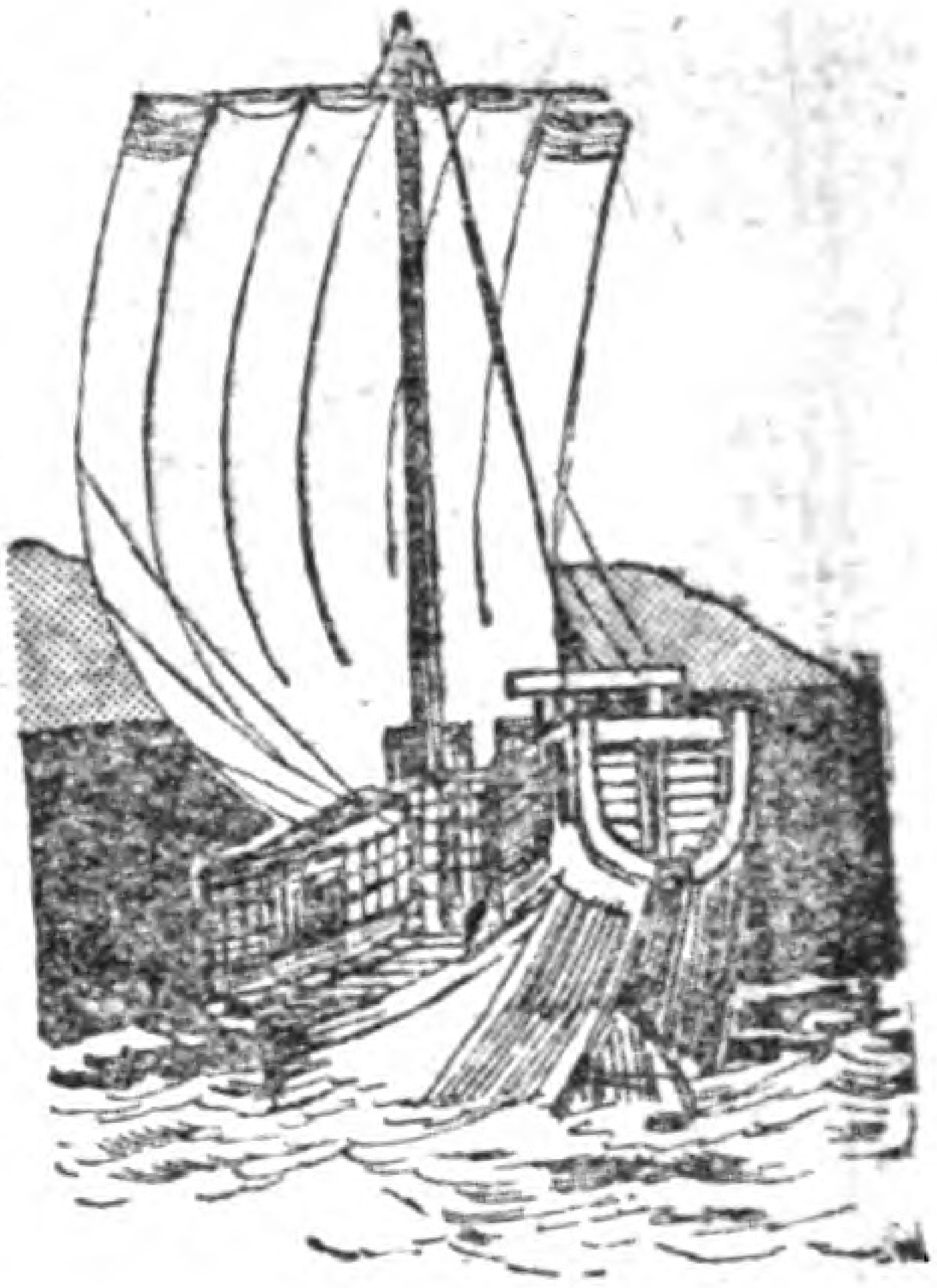

籠かけの
四五間さきで
犬がじやれ


渡し守一と棹戻す知つた人
つかふ息子に福の神追つ付かず
疊屋は腕も道具の中に入れ
旅踊り子をさし上げて隣まで
心中の邪魔して今は禮を受け
どこで落したとは無理な尋ねやう
川柳名句漫畫
素文畫

北海の勇者

――七代百七拾年の血涙物語――

本誌記者



若い男の意氣

奥州三厩から蝦夷松前に通ふ船の中で、十餘人の乘合が海上の穩かなのに安心して、いろ／＼な世間話しをしてゐます。

その中で默つてゐるものが二人ありました。一人は武士、四十がらみの年配で相當身分のありさうな人柄、隅の方へ緩やかに陣取つて瓢箪の酒を樂みながら人の話を聞いてゐます。一人はこのあたりのものとは見えぬ若者、遠い旅をかけて來たらしい身裝、それもごつ／＼した木綿の垢つき汚れた布子一枚。これは話しをよそに腕組みをして考へこんでゐましたが、やがて思ひ出したやうに袂をさぐつて、二寸ばかりの小さな木彫の佛像をひねくりはじめました。と見た側の行商體の男が、

『お前さんは津輕かね』

言葉をかけられて顏をあげた若者は、旅窶れはしてをるが、眼の鋭い元氣の溢つた相好で、

『いや』と首を振りました。

『でも、持つてゐなさるは、大光寺の不動樣ではないか』

『何んだか知らない――拾つたのです』

手にしてゐた像を行商體の男の前へ突き出すと、その男はおどろいたやうすをして、

『ほんとに拾つたか。えらいことをやつたな。大したことをしたもんだな』

莫迦に感歎するので、皆話を止めて行商の方を見まもりました。

『お前さん。大光寺の不動樣は出世不動といつて、津輕附近では大そう信仰される。だからお像が道に落ちてゐるなどといふことは、滅多にあるはずはない。それを何うかして拾つて手に入れるものがあつたら、その人は十年の間に、きつと千兩分限になれるといふ話しだ。大したことをやつたもんだ。一體お前さんは、どこで拾ひなすつた』

『南部から三厩へ來る街道で拾ひました』

『うむ、おれも南部の方から來たんだが――大切にしなさい。』

これが千兩になるのだから、大したもんだ』と、行商は殘り惜しさうに不動像を若者の手へ返しました。

　返された像を掌上に載せてうちまもつた若者は、にやり冷笑をうかべたと見ると、つと立ち上つて舷端から、ぼちやんと不動像を海中へ投げ込んでしまひました。

　あつと皆おどろきの目を瞬りましたが、中でも行商はわが物でも捨てられたやうにあわてゝ

『勿體ねえ、お前は氣でも違やしねえか。おれの言つたことを聞き違へたのぢやねえか』

『わたしには要らないお像ですから捨てました。十年間かゝつて、千兩位の金を拵へるつもりなら、何にも故郷を捨てゝ、北の果までやつては來ません』

　かういつて若者は、また腕組みをして口を噤んでしまひました。



不思議な再會

　出世不動を海中へ一擲した若者は、紀州有田郡栖原村の栖原角兵衛といふもの。栖原家は土地の名門で代々里正の家柄。その五代目がこの角兵衛であります。この時の栖原家は家運傾きて多くの資産も皆人の手に渡つてしまひ、五代目角兵衛は何うかしてわが家を元の繁榮にかへさんと、さま〴〵苦心の末に目を着けたのが蝦夷の地であります。時は明和二年――今から百

七十年の昔――僅かの金を懐にして故郷を去り、まづ松前へと志して來て見ると、思つたよりは皆意外のことばかりでありました。

その頃の蝦夷地といふは、北海道、樺太、千島を合せて松前藩の領有するところであるが、極北嚴寒の地、交通は困難だし、土蕃は心服せず、おまけに羆熊は到るところに出沒して、人を咬はんとしてゐる。松前藩の政令の如きはほんの一小部分にしか行渡らず、領土の大部分は全くの蠻地で手のつけやうもない。領主松前若狹守の居る松前でさへ、漁村に毛の生えた位のところですから、他は推して知ることが出來ます。

角兵衛は松前へ來ると、旅費を剩した僅かの金を働かして、蝦夷と內地の物産交易をしてゐるうちに、さゝやかながら店舗を構へることも出來、資本も次第に殖えて漁業にも手を出すやうになりました。この間の辛苦といふものはそれは並一通りのものではなかつたが、不折不撓奮闘した



結果は、信用も金も、今は松前に及ぶものなき第一人者となりました。それへ目をつけたのは松前若狹守であります。

『運上金の滯納には、ほと〲持てあます。源內、何んとかよい方法はないか』

ある日若狹守は家老布施源內にかう言つて零した。それは松前藩の收入といふものは、大部分漁業の運上である。その漁業請負者がやゝもすると運上を持つて來ない。そこで證人を立てさせようと思ふが、請負者の責任を負擔するほど資產のある人物が領內にない。源內は若狹守の相談をうけて、

『いや、その事に就いて實は申上げようと存じてをりました請負人の保證をさせる適當な人物が出來ました。この者なら何十人、何百人の保證に立ちましても、運上を滯らせるやうな事はないと思ひます』

『そのやうな者がどこにゐる』

『お城下にございます』

『それは何者ぢや』

『栖原角兵衛と申し、十餘年前紀州より移つたものださうでござりますが、腕一本から仕上げて、今は幾萬の富を積み、交易と漁業と合せて營んでをります』

『それは至極適當な人物ぢや。漁業も請負はせまた運上の保證人にもしよう』

それから君臣相談の上、角兵衛に天鹽國一圓及び離島、天賣、燒尻の漁業を請負はせ、他の漁業者の保證人に立てることに決定し、布施源內は角兵衛を城內へ呼出した。

角兵衛は多年の辛苦空しからず、今や北海漁業の全權をわが手に占める機會が來たのですから、喜んで命令をお受けした。源內は申渡したあとで、ぢつと角兵衛をながめてゐたが、思ひ當つたやうに膝を打つて、

『角兵衛、今ぞ思ひ當つたぞ。なるほどそちの眼中に、千兩分限など物の數にもなかつた譯ぢや』

『え、御家老樣は何うして――おゝ貴方樣は、わたくし初めてこの地へ渡るとき、三厩からの便船內でお見かけ申したお武家樣』

『いかにも、出世不動を海中へ投げ捨てたのを見た一人ぢや』

二人は誠に不思議な再會でありました。



北斗と我が家

角兵衛の眞の活躍はこれから始まつた。藩主より命ぜられた漁場の開き、附近の開拓、土人の撫育に努め、各地に神社佛閣を建立して人を信仰に導きました。飲料水の乏しき留萠に水道を敷設し、留萠河口に巨資を投じて掘鑿を行ひ、また四方に道路を開き、各地に旅宿を設けるなど、實によく私利を忘れて土地と事業の開發に盡瘁しました。

かくて幾ばくならず、北海全道の漁業は栖原家の資金に依らざるもの殆んどなく、角兵衛の保證に立たざるもの一人もなきまでに達しました。

この時角兵衛も既に老齡に及び、事業は嗣子六郞兵衛に委ねたが、彼れの雄圖は尙ほ北に向つて動いてゐます。

『六郞、緊かりしろよ。今にオロシヤの唐人めがやつて來るぞ。今のうちに擇捉の方も樺太の方も開いて置かぬと、オロシヤに取られてしまふぞ。そしたらこの本土も危くなる。おれがもう五年若ければ、樺太も擇捉も開いてしまふのだが』

『さうなつたら、御領主も捨てゝ置きますまい』

『うんにや北の守りは、松前様のやうな小大名に出來るものか、いや幕府の力でも容易でない。その土地に永住して事業をするもの〻力でなければ駄目だ。今に見ろ、幕府は狼狽て〻騷ぎ出すから』

常にかう言つてゐましたが、年には勝てない。とう〳〵臨終の床に横はり、枕下へわが子を呼び、

『擇捉を開け、樺太を開け――北斗星の輝く限り、わが家の子々孫々、北溟にうしろを見せるな』と斷末魔の聲を絞つて遺言しました。

六郎兵衛、六代目角兵衛を襲ぎ、よく父の業を守りました。その時代から父が遺言の如く、魯人はしばしば樺太を侵し、また千島列島を南下し、擇捉、國後にまで迫つて來ました。



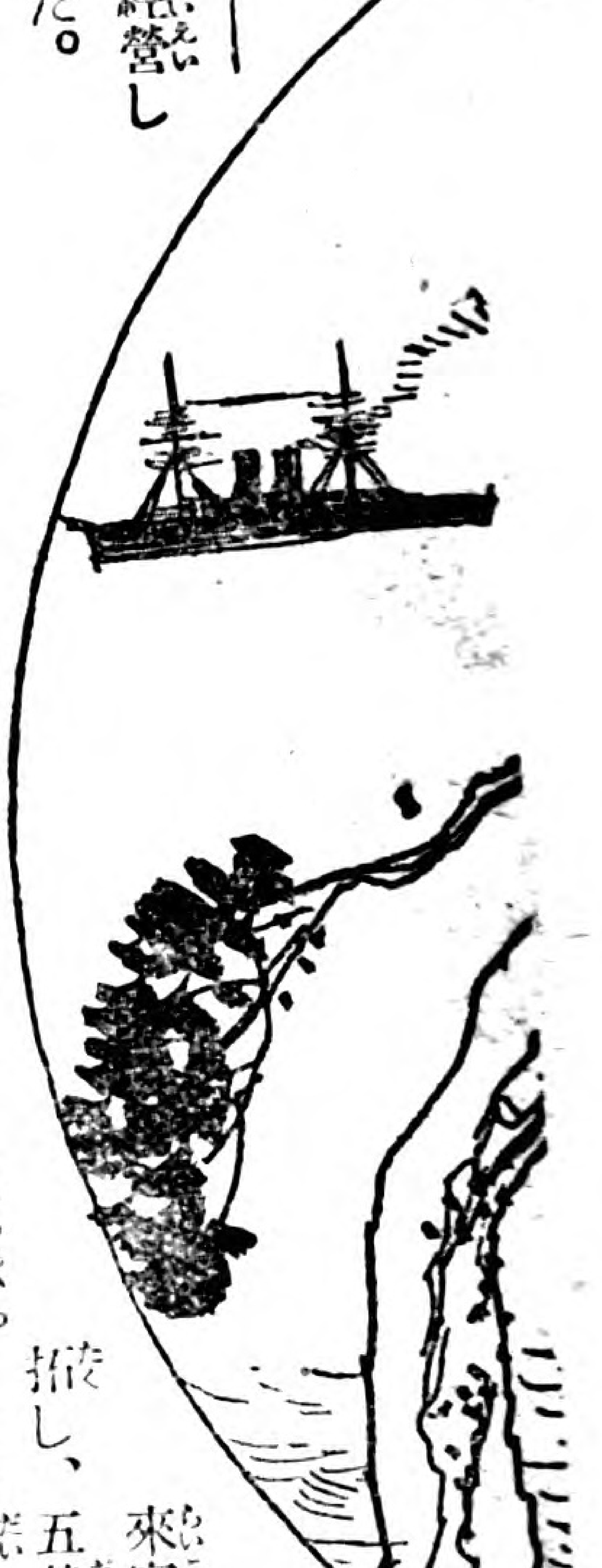
幕府は大に驚き、間宮林藏に北邊警備の調査をさせましたが、實際問題として得るところがありませんでした。

寛政二年頃から松前藩は栖原角兵衛――七代目と謀つて樺太開拓を思ひ立ち、初め村上傳兵衛、つゞいて小山屋權兵衛の二人を樺太漁業に從事させ、資金は栖原家から支出したが二人とも失敗し、その後二三人經營者を代へて見たがやつぱりうまくゆきませんでした。

そこへ魯人の侵犯はます〳〵甚しくなり、松前藩の力ではどうすることも出來なくなつたので、その旨を幕府へ報告しました。幕府は會津藩に命じて、樺太防備に當らせましたが、さすがに強い會津武士も、

半年と辛抱が出來ず引上げてしまひました。

そこで幕府は遂に角兵衞——八代目——自身に行つて、經營して貰ひたいと頼んで來ました。



七代百七十年

角兵衞は敢然として樺太へ乘込みました。使用人に悉く武裝させ、決死の覺悟を以て、漁場開拓に着手し、終に六十有ケ所の漁場を開らくことが出來ました。

擇捉は初め高田屋嘉兵衞が幕府の許しを受け、開拓に從事したが、密貿易の嫌疑をうけ失敗し、その後闕東屋喜四郎、藤野喜兵衞等經營を命ぜられたが、魯人の來寇と、土人の騷擾に手を燒いて引下つたあとは、誰も引受けるものがない。そこで幕府はまたも角兵衞に擇捉經營を仰付けました。

角兵衞はこの度も死守の覺悟ですから、配下數百の人を悉く武裝させ、振別に會所を置き、大砲數門を据ゑ、各漁場へも大砲小銃を配置して守備を嚴重にし、まるで戰爭同樣で漁業に從事しました。一方土蕃の撫育、土地の開發に努め、長い年月の辛苦を重ね、終にわが版圖たる實をあげることが出來ました。

明治八年わが國と魯國との間に、樺太と千島と交換談判が開かれたとき、擇捉、國後の二島が日本領土であると證據立てることが出來たのは、實に八代角兵衞が開拓したお蔭であります。

政府の政令も行はれず、外國の來寇になやめる蠻地を、獨力を以て開拓し、五代角兵衞より當代十一代角兵衞に至るまで、子孫相繼ぎて七代百七十年間、連綿帝國極北のために盡したる功績は、眞に地上の北斗七星として輝けるものであります。

娯樂室解答　（本文三八九頁）

◎智惠くらべ

一、かどとさ（加賀土佐）

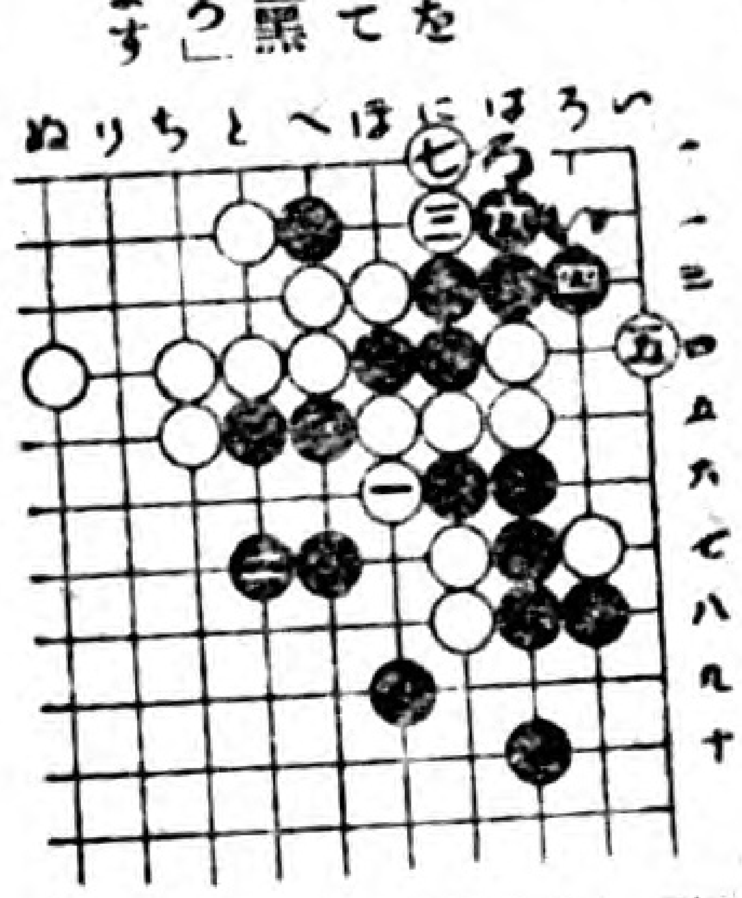
二、ももすもも（桃李）

◎詰碁解答

白先勝

變化

黑「四」を「六」に打てば白「い」黑「四」白「ろ」となります

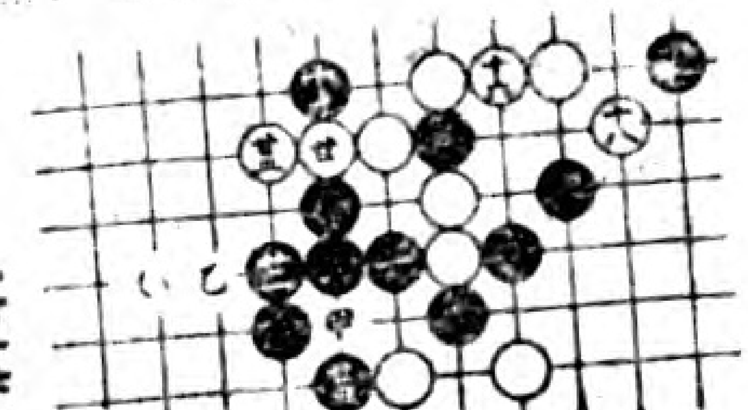


聯珠解答

◎（廿三）と打つて次『甲』と『乙』の兩勝

變化說明

△（廿二）を圖以外に止めれば「廿六」「い」の



四追勝

△（廿）を甲なら『廿二』い、『廿一』の順で勝と三聯因に白が（十六）と構はずに乘つたのを黑が止めにはおけぬがそれを止めて居ては追手が缺ける、そこで（十七）と伸び（三十九）と三聯を引いて白三聯の働きを消した（此黑は自由に追詰ました十七と十九）の止め方を夏止めと云ひます。

將棋必至の研究解答

△七四桂▲同歩△七三銀▲同銀△八五桂打迄にて

（解　說）

是初△七四桂と打て必至をかける▲玉方が捨て駒けば△八二桂成▲九三玉△九二成桂▲同玉△八一銀▲九三玉△八二銀打にて桂香が餘る。そこで▲玉方は同歩の一手、△七三銀と打つて必至をかけるのが肝腎である▲玉方同銀の一手、其時△八五桂と打つて上から銀を打つ順となつて絶對に凌ぎが無いのである。

映畫若かりし頃

マキノプロダクション社長　牧野省三



一

なにゝしても古い話になる。私が映畫及び映畫事業に關係してから二十餘年、映畫がまだ嶄新奇拔な見せ物として『呀ッ！あれ〳〵波が動く、まるで本物そツくりだ』と言つて喜ばれ、終に福地櫻痴先生に依つて『活動大寫眞』と命名せられた頃から、今日の劍戟映畫モボ、モガ映畫宣傳映畫教育映畫全盛時代に至るまでを回顧すると、全くぼうツとした一の煙のやうな思出となるのである。

黴の生えた古い話は兎も角としても、今日映畫界に君臨指揮して居る日活卽ち日本活動寫眞株式會社の創立當時を回顧しても、創立が大正二年だから既に十五年の昔になる。

この日活は、明治末期に於ける吾邦映畫界の分布であつたMパテー商會吉澤商會横田商會福寶堂の四社が合同して一大トラストを作つたもので、初期の社長が椎二郎氏で、鄕誠之助、岩下清周、後藤勝三の諸氏が重役として就任した。創立當時の資本金が一千萬圓の四分の一拂込。行詰つた當時の日本映畫を統一して國內映畫事業を獨占しようと企てたものである。

是のトラストが實現されるまで、私は横田商會の京都撮影所卽ち最近移轉するまでの日活撮影所に、撮影所長兼總監督として映畫製作に從事して居たのだが、日活の出現とともに、引續き前記の撮影所を日活唯一の撮影所として撮影所長兼總監督に就任して、大正九年の私の獨立に至るまで勤めて來たが、トラスト實現當時、私は是に反對で、『トラストを作つて映畫事業を獨占しては、競爭が失くなるために映畫の質が粗惡になる』と主張したのであるが、横田商會社長つまり現日活社長横田永之助氏が、飽くまでも合同論に贊成なので、遂に主張をまげてしまつたが、幾何もなく日活は收支償はずとして、一千萬圓の資本から二百五十萬圓に減資してしまつた。卽ち事業を獨占し競爭を失つたために、映畫の質を悪くしてしまひ、當時入場料十錢地方は五錢の觀客に飽かれてしまつて、一千萬圓の厖大な資本を擁しては居られなくなつて

しまつたのである。

映畫事業には獨占といふことが大禁物である。それは事業を獨占すると競爭が失くなるからである。競爭が失くなれば自然撮影所の映畫製作方針に制限を加へ自由を奪ふといふ結果になつて來る。映畫製作に制限を加へた時は、映畫會社が一番大切な觀客を忘れてしまつた時である。

二

私の日活の總監督時代が、いはゆる世間に名高い忍術映畫時代で、この忍術映畫を發明するには實に面白い挿話がある。

尾上松之助君――後年映畫の神樣のやうにうたはれた目玉の松ちゃん、即ち尾上松之助君のことだが、ある時當時の日活專務取締役鈴木陽三郎君が東京から長距離電話で、

『尾上松之助といふ男を即刻馘首にして呉れ』と言ふのである。一體どうしたんだと尋ねると、

『此の前の天一坊でもあの男は伊賀之亮に扮して白粉の化物のやうに眞白に顏を塗つてゐた。こいつ小々氣が狂つてゐるのぢやないかと思つてゐた矢先、今日京都から屆いたフヰルムを試寫して見ると、あの男が木村長門守に扮して居るのだが、木村長門守は大阪城中一の美男子である、その木村長門守がやはり白粉の化物みたいな顏をして鼻の下が三寸も長いのでは誰に見せたところで物笑ひになるばかりだ。もう我慢がならんから直ぐ馘首にして撮影所から追ひ出して呉れ』と言ふのがその理由なのだが、松之助にして見たところで後年あれ程大きな人氣があつた時代ではなかつたが多少鼻の下の長いのと目玉とで一部分の人には噂されて居た頃であつたから、

『案外こんなのが人氣が出るかも知れませんぜ』と再三辯解して見たけれど鈴木專務は頑として取上げて呉れない。



牧野省三氏

そこで仕方なしに松之助を私の事務室に呼んで、

『鶴三（松之助の本名）お前もどうも心懸けの悪い役者だ。あまり顏を眞白に塗りたがるものだから重役がどうしても馘首にしろと言ふのだ』と言つて聞かせると、松之助もつくづく考へて、

『大將。ぢや私も二三年旅稼ぎをして來ます』と言つてすごすごと去つたが、其の後一兩年再び日活へ歸つて來て、今度は心

右より、日活社長横田永之助氏
東京教育博物館長棚橋源太郎氏
故尾上松之助氏



を入れ換へましたと言ふので、寫眞一本に就いての出演料二十圓といふ約束の下に復社が許されたのである。

丁度其時私が監督してゐた寫眞は「佐賀の猫化」といふ怪談もの。その寫眞のうち婆の猫といふ役のやりてが無かつた際であつたから私が松之助に、

『どうだ、猫婆の役を買つて出ないか』と言つたところ、松之助は眞白に塗ることには餘程こりたものと見えて、

『それは、顏を白く塗らずに濟みますか』と私に尋ねた。

『うん、この役なら地顏に皺ばかり描けばいゝんだ、お前の顏ならそれで立派に化物に見えるぜ』

『ひどいことを言ひますね……兎も角やりませう』

――といふのでこの撮影が始まつた。

この映畫の中で一番苦心をしたのは、松之助の猫婆がすうつと現はれて鴨居へ飛びつくところ。こんなことは今日の進歩した撮影術で撮影すれば朝飯前のトリックだが、何しろ今から十幾年昔の話、トリックなぞといふことは思ひつかれる時代ではなかつた。撮影技師と私とが四日程寢ずに考へたのが、最初松之助の猫婆を鴨居の所に登らせて置いて、其處から疊へ飛び下りるのをカメラを倒さまにして撮ればよいと言ふ世界的大發明。

『うん、これだこれだ』と雀躍して喜んだが。キヤメラを倒さまにしたらば飛び降りたものが飛び乘つたやうに見えるかどうか、賢明な讀者諸君よ嗤はないで下さい。その時の私達は眞劍だつたんですから。

…………兎も角これが動機で映畫にトリックを使ふといふことを發見し、松之助はあの特別仕立の顏を怪奇的に使用するといふことを工夫し始めた。そしてこの「佐賀の猫化」を東京の淺草の大勝館に封切すると、驚く勿れ百五十日間の連續興行で滿都の人氣を集中してしまつた。日本の映畫始まつて以來いまだ百五十日間の連續興行といふのはこれ以外にない。而かもこの「佐賀の猫化」が後年日本映畫界を風靡した忍術映畫の最初だつたのである。

三

その後間もなく私は町角などでしば〳〵子供が忍術ごつこなどをして遊んでゐるのを見かけた。目のぱつちりした子などが居ると、

『俺は目玉の松ちやんだい』などと十字の印を結んだりなんかしてゐる。自分が偶然作つた忍術映畫が、それから自分が子飼ひにして來た松之助が、かく人口に膾炙しかく流行を極めてゐるのを見ると、心の底では何となく嬉しい氣がせぬではなかつた。



右より、山脇房子氏、鳩山春子氏、跡見花蹊氏

ところが或日お茶の水の教育博物館長棚橋源太郎氏に逢ふと『牧野君。君は近頃子供が町角で忍術の眞似などをしてゐるのを見て、あゝつくづく自分は兒童教育のために悪いことをしたとは思はないか。昔は子供が日清戰爭ごつこ、日露戰爭ごつこをして遊んだものだ。ところが近頃の子供はどうだ。みんな松之助になつたり猿飛佐助になつたり佐賀の猫婆になつたりして喜んでゐる。これは君が作つた時代だ。それを見て君は惡いことをしたとは思はないかね。思はなければ君は非國民だ。成程君はこの映畫を作つて日活をしこたま儲けさせてやつたであらう。が國民には罪惡を殘したのだぜ』と言はれた時私はハツとした。活動寫眞術の面白さに、偶然から發見したトリックを使つて盛んに忍術映畫を製作したが、それが斯くの如き流行を來し、斯く子供の頭に浸み込んでしまつたのでは、私は大變な罪惡を犯したと氣附いたのである。そこで棚橋氏とも相談して今後子供のために見せる教育映畫を主として作つて見よう、と言つて別れたが、年に一本又は二本でよいから自由に教育映畫を作らせてくれと日活に提議をしたけれど、これは終に許可にならずじまひになつた。



その後まもなく、內務省社會課で選定した「都に憧れて」といふ映畫脚本を、全國處女會創立記念に製作しようではないかといふ議がまとまつて、內務省の囑託大野氏が私に交渉に來ら

れた。私は日活に對する氣兼ねもあつたけれど、前の棚橋氏の言葉もあるので、職を賭してもこの映畫を製作する決心を語り獨斷撮影を開始したのである。

筋は極く簡略で、平和な田舍の娘が、都に憧れて出奔する。そして東京で散々苦勞した末、やはり生れ故郷へ歸つて來て、處女會の助けを乞ふといふ簡略なものだが、映畫としては全六卷の長尺である。

處がこの映畫を撮影するに當つて、最初に困つた大きな問題がある。それは女優。今でこそ女優は一桝いくらで賣る程あるが、その頃女優などと言ふものはたゞの一人も居なかつた。皆男の役者が白粉を塗つて女に化けるので、女形を使ふやうでは教育映畫にならないと内務省では言ふ。又假りに舞臺から女優を借りて來るとしても、その頃何等女優に權威のない時代であつたから、風儀の惡い女優等が出演する映畫ならば、處女會では結束して見ないと主張する。これでは私は全く撮影が出來ないも同樣である。忍術の罪ほろぼしはしたし、さりとてその手段はなし、と散々苦しんだ揚句思ひついたのが、自分の娘四人をこの映畫の主人公役に使はうといふ方法であつた。



貧弱なりと言へ其私は京都に於て近代的な産業即ち映畫製作事業を營む實業家の一人である。社會に對しては私の娘等は實業家の娘である以外の何者でもない。これならば内務省からも處女會からも苦情が出る理由がない。と思つたので囑託天野氏に相談すると天野氏は兩手を打つて『それならば申分がない』と言はれるのだ。早速自家へ飛んで歸つて家内に相談すると、家内は有る無しの柳眉をさかだてゝ、

『今更うちの娘を女優になど出せますか』と怒り出した。

『忍術の罪滅ぼしだ』

『それは貴方が自分で勝手にしたことだ』

『まあさう言ふな、これも國家に對する奉仕の一つだ』といふやうなわけでとう〲家内を納得させてしまつたけれど、可哀想なのは長女富美江で、この映畫に出演したばかりに、當時せつかく縁談がまとまつて居た西陣の織物問屋から『活動になど出演する娘さんは貰へません』と斷られてしまつた。だがこの映畫は一家總出演で父の國家奉仕を助けてくれたので長女富美江の外次女靜子三女勝子四女惠美子（この惠美子が後年のマキノ輝子である、當時まだ十一歳であつた）等が出

演して居る。

四

ロケイションは靜岡縣の富士山麓のある農村。こゝに模範的な處女會がある。それを內務省と文部省で世話してくれたので、大正六年の秋、一行四十餘名、內務省囑託大野氏の案內で堂々と乘り込んだ。村長、村役場委員、村會議員、青年會、在鄕軍人、處女會等全村を擧げて歡迎してくれたが、世の中といふものは捨てるものあれば拾ふものありで、全村民が最も熱狂的に歡迎してくれてゐるのは、一行中の長女富美江である。村人達や處女會員達は言ふ――

『西陣一の大問屋の嫁入先きを斷られてまでも、親の事業を助ける孝行娘だ。ほんとに氣立ての立派な娘だ』この歡迎の言葉を聞きながら富美江は嬉しさと悲しさとが一緒になつて、しくしくと泣いてゐたが、それを見るにつけても私の腸は斷ち切られさうであつた。



尾上松之助の扮した楠木正成

處女會の歡迎、村人の歡迎大會、私達は自分の一時間を持つことも出來ない程の歡迎詰めであつた。宿泊は村長の座敷の大廣間とお寺とに分宿する。



ところがこゝに困つたことは、長女富美江が子供の時からどういふ譯だか煙草が好きであつた。家庭に對して放慢な私だが、流石に父に對する遠慮もあつたのだらう、私の前では絶對に吸はなかつたけれど、私の居ない所では始終吸つてゐるといふことを私はうす〳〵知つてゐた。

歡迎の四五日が續く。朝は歡迎、晝は撮影、夜は歡迎と講演。段々富美江の顏が青く變つて行く。私は直ぐ氣附いた。が富美江にしたならば、孝行者として或ひは實業家の令孃として、全國模範處女會々員一同から、連日下にも置かぬ程大切にされてゐる手前、その大切なお客の姫御前が、模範處女會員の前で敷島の袋を出してスパ〳〵と吸ふわけには行かない。だか

ら既に顔色が惡くなるのには無理もないことだ。しかし此の場合富美江は私の娘であるばかりでなくこの映畫に於ける最も大切なスタアである。スタアに病氣になられては、私にしては名譽快復のこの映畫を放棄してしまはなければならなくなる。すると、ある日富美江の煙草のためには非常に好都合の時が來た。それはこの村から二里程はなれた所にきれいな小川が流れて居て、富士山が繪のやうに浮き出して見える所がある。この話は秋の末で、その富士山の見える小川の傍らで田の刈入れをするといふロケエションがあるのだ。此處ならば村からは二里、人里はなれた所だから、富美江もゆつくり敷島の煙を味ふことが出來るといふもの。そこで私はそのロケエションに出る前夜村長邸の奥座敷で寢床に身を橫たへながら、

『明日は誰も見物人はないぞ』とかたはらに居た富美江にそれとなく囁いた。もとより思ふ存分煙草を吸へといふ謎である。

正午前三時の夜の明け切らぬうちにそのロケエション地へ着いて、朝日の上るのを待たうといふ計畫。ところが驚く勿れ、まだ眞暗な午前三時に、吾々がふしどをあけると、村長の庭先には處女會員三百名が、田の刈入姿で今日の場面のエキストラに出演してくれるために午前二時から集合して庭一ぱいに待つてゐるのであつた。

小川に着く。朝日は登る。富士は浮出す。三百名の處女達は甲斐々々しくも農村繁榮のために汗水をたらして働く。その間に交つて私の娘四人も刈入姿で働いてゐる。私は撮影技師を指揮してこの美しい場景をどし〳〵キヤメラに收めて行く。

とう〳〵この日も富美江は、煙草を吸ふ機會がなかつた



五

やがてロケエションはこの純潔な靜岡縣の一農村を終つて東京の場面となる。こゝでは主として都に憧がれて出て來た處女の如何に都會の惡習に苦しめられるか、といふ場面を撮すのだが、兎に角東京は廣い。その頃今のモダーンガールはないにしても、東京の旅館の奥座敷で、女が敷島をふかしたからと言つてこれを批難するものはない筈である。だから富美江も今度こそはゆつくり煙草が吸へると思つたのは大間違ひで、旅館昌平館には、連日早朝から文部省内務省の御歷々が詰めかけて、色々の撮影事務を斡旋して下さる。

又一方跡見花溪女史山脇房子女史嘉悦孝子女史の三女子教育

家が、特にこの映畫に好意を示されて、その講演して居られる有樣或ひはその婦人職業紹介所長として社會的に種々活躍して居られる有樣などを撮影する自由を與へられ、殆んど數日間撮影隊と行動を共にされて居る狀態なので、これら嚴格な三女史の面前で、本映畫の主人公が煙草をスパ〳〵とふかすわけにはゆかなかつた。富美江の顏はこゝでも再び益々青くなつて行く。父であり撮影監督である私はスタアが突然の禁煙のために病氣におちいらないかとハラ〳〵してゐた。

とう〳〵或る日が來た。都に憧れて出奔した乙女は、東京の誘惑に打ち負けて、段々自墮落な荒んだ生活におちいつて行く、といふ場面を撮影する日が來たのである。自墮落を表現する最も好適な表現技巧は女の喫煙である。私は多勢の人が見物



して居るのもかまはず、その場面で思ひ切り富美江に煙草を吸はせてやつた。富美江はかぶり附くやうに敷島をくはへて、マッチの火を點ずるのももどかしく、一二服心ゆくまでに吸つて居たが、間もなくくら〳〵と倒れてしまつた。久し振りの喫煙で眼まひがしてしまつたのである。何も知らぬ三女史の一人は、『牧野さん。藝術のためとは言ひながら、あまり御無理をなさらない方がよいでせう。吸ひつけない煙草を無理に吸はせたりなすつたので、お孃さんが眼まひをして倒れたではありませんか』と注意をされた時、私は顏中汗がふき出して來た。

かくして作られた日本最初の教育映畫「都に憧れて」は、內務省文部省に納入すると、たちまち全國の處女會に無料でこれを映寫公開することになつた。又その後二年お茶の水の博物館で開かれた映畫展覽會に於いては、かしこくも高貴の御方の御眼に止るの光榮を浴し、私及び私の一家一同はこの光榮に感泣したものであつた。

六

總括して私はこの映畫から一厘の金錢上の利益を得たわけではなかつた。が、この映畫は忍術映畫の流行を作つた私の罪滅しに、國家の教育事業への一奉仕であると共に、また一面に於いてはこの映畫に依つて聲色を廢し、映畫は一人の說明者の說明で充分である、といふ今日の映畫劇の導火線ともなつた映畫であつたのである。その翌年の大正七年には、映畫藝術協會が

創立して歸山敎正、村田實、青山杉作、近藤伊與吉等に依つて映畫劇の製作が開始され、三年後の大正九年には大正活映松竹キネマの設立に依つて、映畫劇の勃興期が作られたのである。歷史的に考へるならば、今日の映畫隆盛時代は、この「都に憧れて」の一敎育映畫に端を發してゐると言つても決して過言ではないと私は信じてゐる。

滑稽なことには、この映畫劇の試驗的製作は全國の聲色辯士の迫害を受けて、「吾々のパンを得る道を絕たうとする映畫劇製作者牧野省三を殺してしまへ」と言ふので、東京の聲色辯士組合と稱するものから、刺客が六名京都に乘り込んで來て、半年間私をつけねらつてゐたといふ事實がある。が、大勢と映畫の正道とは刺客の手でどうすることも出來るものではない。時勢はこれらのものを顧りみずドン／＼と進んで行く。恐らく今日の時代にあつて、映畫劇製作に反對しようなどと言ふものがあつたら、その男は日本國民七千萬人から腹を抱へて笑はれるではないか。

この映畫が動機になつて私は終ひに日活から分離して獨立し、マキノ敎育映畫製作所時代マキノキネマ時代東亞キネマとの合同時代を經て今日のマキノプロダクションに至つたのである。私が映畫界に試る事業の總べてを私の仲間達は、時期が早いと言つて制止しようとする。しかし活動寫眞を利用して敎育映畫を撮ることを考へたのも、忍術映畫を製作したのも、敎育映畫を製作したもの、それから映畫劇製作、獨立プロダクション、劍戟映畫もこと／＼く時期尙早だと言つて、皆がよつてたかつて私を喰ひ止めようとしたに關らず、その全部がかつては實現して來たではないか。體驗から生んで來た新らしい制度、新らしい組織、新らしい藝術に時機尙早は絕對にない。それは現狀に溺れんとする弱い者の使用する字引きにのみ明記されてある言葉である。私の字引きには時機尙早は書いてない。

以上が私の二十餘年の映畫生活に於ける信條信念であります。



村田實氏

近藤伊與吉氏

青山杉作氏

苦學談

机の下から摘み出された富井政章博士

杉田星城





富井政章博士

佛國リオン大學法科大學の講堂では、今將に講義の眞最中であつた。數百の學生は肅然として在つて無きが如く、只、老教授の流暢な講義の聲のみが、室の隅々にまで冷徹してゐた。と、その時、唐突に、何處からともなく大きな不可抗的なクサミの聲が起つた。

『ハツクシヨイ！』と續けさまに又一つ。

俄然、室内の緊張は破れた。

『何者かゞ床の下にひそんでゐるやうだ』

『いや、室の中らしいぞ』

學生たちは總立ちになつて騷ぎ出した。各自探し廻つた末、やがて机の下に縮こまつてゐる一人の怪しい男を發見し、引ずり出して來た。見ると、それは眼色、毛色の變つた東洋人だつた。

『支那人だ、支那人だ』

『支那人の泥棒だ。毆つてしまへ』

客氣にはやる青年學生であるからたまらない。あはや鐵拳の雨が降らんとした。そのとき、

『待て！』と制止したのは老教授だつた。

容子を見るとまだ年も若い。物盜りとも思はれない。第一、

この講堂には盗難の對象となるやうな眼ぼしい物は何一つないので、何か事情があるに違ひないと思つた老教授は、その男を職員室に連れて來て改めて糾問にかゝつた。

不可思議な闖入者を見んがために他の教授連も側に集まつて來た。

最早、これまでなりと覺悟をしたその男は悉一事情を、述べ立てた。

彼は實は支那人ではなくて、日本人であつたが、時は明治十一年（西暦一八七八年）多くの外人間にはまだ日本の存在がハツキリしてない頃の事であるから支那人と間違へられたのも無理もない。



彼は、さうした時代の日本に生れ乍ら、早くも西洋文化に着眼し、洋學研究の爲、親類知己が反對するのもきかず、母國をあとに單身佛國に向つた。冒險にも船賃だけしか用意してゐなかつたのでリオンに來たときには嚢中無一文、覺悟はしてゐたものゝ、言語も充分通ぜぬ異國の空に食ふや食はずに流浪すること數ケ月、その間の悲痛さ、心細さは想像にあまりあるのである。やつと、同地の東洋博物館長ギーメ氏をたよつて、立志渡航の苦衷を訴へ、その婢僕として使つて貰ふことになり、主家の用務の傍ら大學豫備校に通ふことになつた。

嬉しかつたに違ひない。併し、片手間の勉強では意の如くならず、遲々としてはかどらなかつた。こんなことでは何日故國に錦を飾ることが出來るかの見極めもつかず、海外萬里やつて來た甲斐がないと思つた。

夜な夜な、夢に入るものは故郷の山河、なつかしき父母同胞の俤！　自分が故國を去つたときは西郷隆盛が鹿兒島に兵を擧げた時であるが――西南戰爭後の國情は什うなつてゐるか。『早く大學に入學し、大學を卒業して歸朝したいなア』

でも、それは思ふだけで、豫備門を經ねば入ることを許されぬ關門だつた。

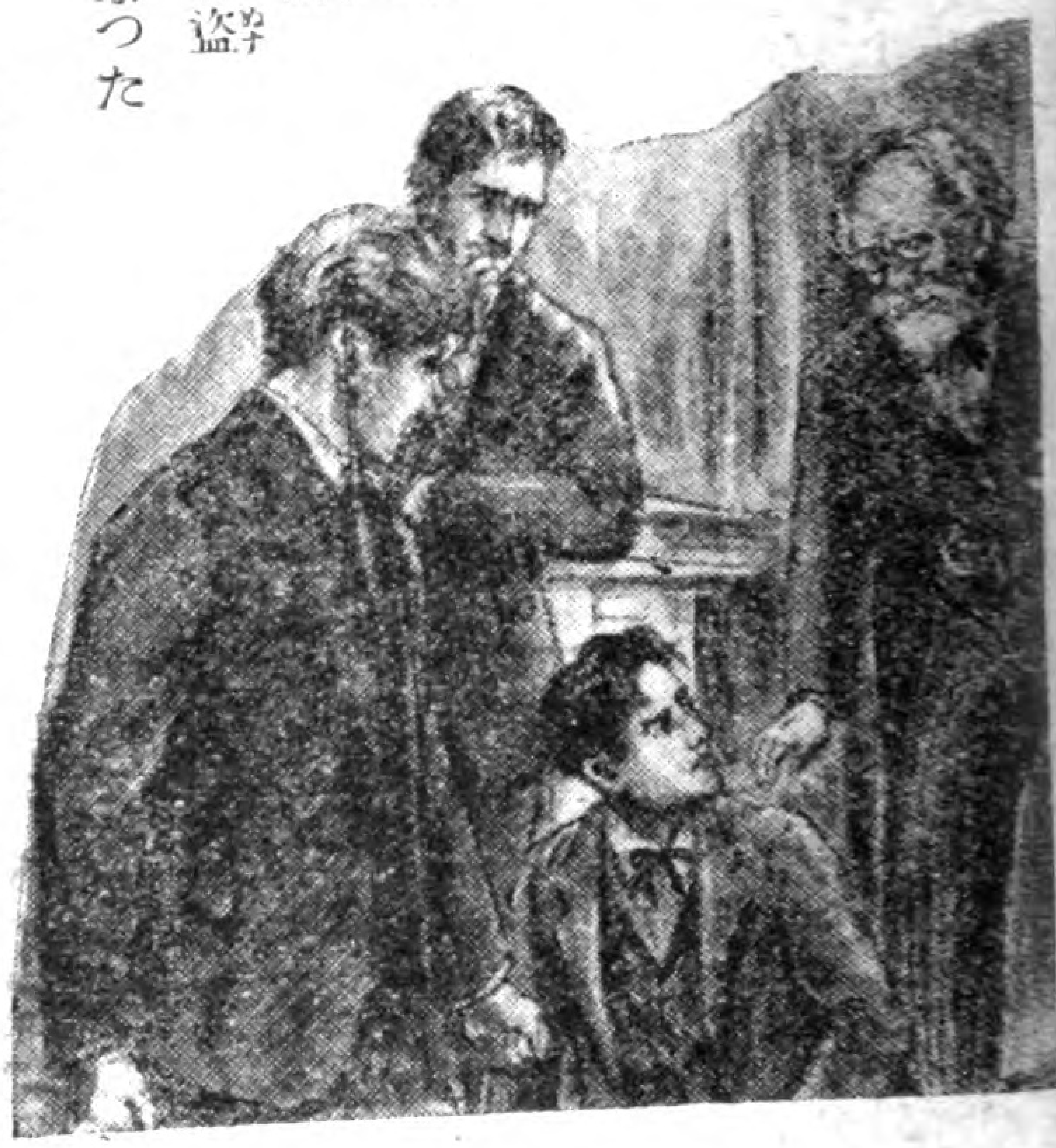
豫備校は大學とは棟こそ違へ、同じ敷地の中にあつた。大學の教授たちは皆世界的の大學者ばかりだつた。

世界的大學者の風丰、深遠高尚であらうその講義振り、それを思ふと蠱がうづく。胸がときめく。見たい、聞きたい！

遂、彼の熱烈なる憧憬と、知識慾とは、夢遊病者のやうに彼の軀を引ずつて大膽にも大學講堂の机の下の盗み聞きとはなつたのだつた。

事情をきいた教授連は驚き且つ呆れた。と同時にその熱烈なる冒險的苦學青年の心情には一種の興味が湧いた。彼の後援者と云ふギーメ氏に彼の平素を聞き合せて見ると一層同情に堪へぬものがあつた。で、學長初め教授たちは協議の上、『試驗をした上に場合によつては特に入學させて見よう』と云ふことになつた。『當然、酬いらるべき制裁』を豫期してゐた日本青年は、意外の言葉をきいて飛び立つばかりに喜んだ。

早速、翌日試驗をうけて實力を認められ、爾來、大びらで大學の講座に列することが出來た。



婢僕で仕時間が不整則である所から、ギーメ氏は彼をリオン府東洋博物館に採用し、自家にあつて日本文の飜譯に當らせた。かくて、苦學奮闘、首尾よく明治十六年二月、大學を優等で卒業し、ドクトル・アンドロアの學位を贏ち得たのである。

立志苦學の人も世に多いが、今と違つて、日本の存在さへも多くの人に認識されない頃、彼の如く、單身異人種の間に伍しての慘たる苦學はあまり例がない。

彼とは東京帝國大學名譽教授として、我國民法學界の鼻祖、現、樞密顧問官、法學博士、男爵、富井政章氏のことである。

偉人の名言

◇各自の天性に適合したる最高等の職業に從事し死期に臨みて毫も遺憾なかるべきの生活を爲せ。シドニー・スミス

◇事業を左右せよ、事業に左右せらるゝなかれ。フランクリン

◇多く事を爲すは易く、一事を永く持續するは難し。ベン・ジヨンソン

◇汝の位置を決定し、而して世界を動かせ。ギヨテ

◇余は余が信頼すべき唯一の朋友なり。テレンス

◇汝に滿足を與ふるを得るは只汝のみ。エマーソン

美談の華・逸話の泉

◎母の知識

天文學者のラグランジュは幼い時のある晩、母に抱かれながら、空高き月を指さして、

『あれ、何？』と訊いた。

『お月さま。』と母は答へた。



『お月さまつて何？』

母は返辭に窮して黙つた。しかし幼いラグランジュは『何よ、何よ。』と飽迄も答を迫つた。

普通の母親なら子供の注意を他の事にむけて誤魔化すところだが、ラグランジュの母は正直にその子の質問に惱んだ。しかし、月に就ての知識を少しも持合はせてゐない母は一言も答へられなかつた。ラグランジュは到頭身悶えして泣き出した。するとラグランジュの母も一しよに啜り泣くのだつた。――ラグランジュを泣かせるのは自分に知識のない爲めである。その知識のない自分が悲しかつた。知識さへあれば、ラグランジュを悲しませ、涙を流させはしないのに……

ラグランジュの母はそれからひまあるごとに讀書して知識の攝取に努めた。そして段々ラグランジュの質問に充分答へられ教へられるやうになつていつた。

後年ラグランジュは『自分の母がもし幼い自分の疑問を深く考へてくれない不親切な女性だつたら、自分は天文學者に――否、いかなる學者にもなり得なかつたらう。』

と言つてゐる。

◎荒ごなし

島津征伐に赴いた秀吉は、肥後國八代まで來ると、一晩ヂッと沈思瞑想、翌朝になると、左右のものを呼んで命じた。



『最早戰ひはこの位にやめ、殘る城々を許し、急ぎ歸つて四方泰平の謀に及ばうと思ふ、ついては、一揆や寺など、仁俠の爲に手向つた者は皆この際許

すと云ふ高札を立てよ。』
左右の者は、意外に思ひ、
『折角こゝまで攻めて來て、もう一いきの所で引上げ、一揆などを許しては危なうござります。』
スルと秀吉カラ〳〵と打笑ひ、
『一つ殘らず退治ようなどと云ふ狹い心ではいかぬ。兎に角高札を立てよ。』
そこで臣下の者は、仕方なく、
『みな許すによつて、御禮に罷り出よ。』
と云ふ高札を立てたが、これを見たその近邊の一揆その他は、『意外にも寛大な御下知！』と悅び、お禮を述べに來るもの門前に群がつた。
秀吉のやり方は萬事この筆法――小事に拘泥せず、荒ごなしにこなしつけて片附けて行くと云ふ風であつた。――
イヤ、この調子だつたからこそ、あの亂世をまとめ得たのである。

◎精神一たび到らば

名人天野宗歩が松前へ漫遊した時、土地の豪商なる材木屋の主人某が熱心に數授を受けた。處が性質の悪い將棋で更らに進歩しない。宗歩も相當させるだけの腕を仕込んでやらうと骨折つたが駄目だつた。
『あなたはおやめなされた方がよからう。』
と或時宗歩が忠告すると、
『私も自分の痴鈍に呆れてをります。
併し、人
が考へて
指せるも
のを私
ばかりが
出來ない
といふの
はいかに
も殘念だ



から、今少し面倒を見て下さい。』
と主人某は一そう稽古を勵んだ。そして遂に松前屈指の上手になつたといふ。
一度は名人に見放された不器用者も、熱心によつて上達する。精神一到何事か成らざらんである。（名人小野五平將棋上達法）

◎泥棒を歡迎する牧師

英國の南部地方に、自分の住宅の戸締りをしたことの無い牧師が棲んで居た。
此の牧師は、春夏秋冬と雖も、四六時中
決して窓も
閉めなけれ
ばドアの鍵
もかけたこ
とが無かつ
たので、友
人達が不審
がつてその
理由を訊ね
ると、『イ
ヤ、別に理



由があつて戸締りをしない譯ではないが、御覽の通り私の家には宗教と修養の書物以外には何もありません。で、これ等の書物は盜まれゝば早速傳道の役に立つし、傳道は天から授かつた私の義務ですから、住宅の戸締りなどする必要は更

らにありません。』

と答へた。

又、彼の庭には四時美しい草花が咲き亂れて居て、勝手な時に土地の百姓達が無斷で切り取つて行くのであつた。それは、百姓は忙しいので花など作つて居る閑が無さそうだからと云ふので、牧師が代つて自分の庭に草花を作つて居たのであつた。

◎特長を發揮

松本幸四郎が師の九代目團十郎に女形の踊りを教へられた時團十郎の小指が屈み、同時に無名指がしなやかに屈むのが、いかにも女らしく優しい形なので、幸四郎もその通り眞似て踊つた。と、見てゐた團十郎、


松本幸四郎氏

『それは何んだ。』と目をむいて、

『俺の小指はつれてゐて伸ばさうとしても伸ばせない。止むを得ず指の調和をとる爲め無名指を屈めて小指の不足を補つてるのだ。お前の指は揃つて完全なのに何を苦んで不完全な俺の指の眞似をする。師匠を模範とするのは無理もないが、恥を掻く缺點を殊更ら後世に遺さなくともいい。一たい人には各〻天性の特長があつて、いかに眞似たいと思つても俺のする通りに出來ない事もあり、又、お前や他の弟子達のやる事で、あゝいゝなと思つても俺に出來ない事がある。各〻その特長の發揮を第一の目的として修錬しなければならぬ。何事も團十郎の眞似ばかりしてゐては團十郎以上にはなれぬぞ。』

と訓戒した。

◎大隈侯の孝養

大隈重信侯の親孝行は有名なものであつた。母堂は書生二人をお供に、人力車に乘つて神社佛閣を巡拜するのを何よりの樂みとしてゐた。從つて神官僧侶は常に其邸を出入し、其數は政客にもをさ〳〵劣らなかつた。


故大隈侯

或日、善光寺の僧が母堂に一個の佛印を示し、之を掌上に捺せば、死後極樂淨土に至る事疑ひなしと言つたので、母堂は大に喜んで其言に從ひ、更に合掌して僧を拜し、侯に向つて、

『八さん、お前もお手形を受けて後生を願ひなさい。』といふ。

侯は嬉しげに掌を差出して、僧侶の爲す儘にまかせ、尚ほ母の命に依つて、合掌禮拜したといふ事である。

◎痛快なしやれ

某文學博士に、峨山和尚に謁し、しきりに自己の學識を披瀝して已ます。峨山、

微笑していふ。

『お前サンは牛の尻ジャノウ。』

東博士、大いに憤ほる。峨山、笑つていはく、

『ナニサ、もうのしりといふことじや。』

◎小村壽太郎の幼時



故小村壽太郎氏

小村壽太郎が五歳の春のこと。ある日、悪戯盛りの兄の壽平が父鍾愛の盆梅を故意に打ち折つた。それを知つた父は烈火の如く憤り、壽平の襟元を捉へ、弦をはづした弓を振上げて、今將に笞の雨を降らせんとした時、駈寄つて袖を押へる母の側で、壽太郎は父の顏を見乍ら、

『父さん、梅の樹はお隣りにも澤山あるよ兄さんはお隣りにもどこにも無いよ。』

と兄思ひの一言。父は胸を打たれて、

『お前は感心なことを言ふ、父さんが悪るかつた。』

と壽太郎の頭を愛撫した。

壹萬人當選特別大懸賞

◆問題◆

(一)「この新聞紙は花がなくて○○○○ばかり」この○印の中に鳥の名を二つ假名で入れて下さい。

(二)假名三字で家庭に必要な物があります。上と中を合せて讀むと農具となり、中と下を合せて讀むと、どこの家にも必ずあるものです。假名三字の物とは何でせうか。

(三)次の頁の圖のやうに間數の多い家があります。入口から入つて、一室に二度入る事なしに、六十二室を殘らず廻つて、各部屋にある品物を一つづつ取揃へて、最後にそれを全部土藏へ入れたいのですが、どういふ風に廻ればよいでせうか。左の圖に線をひいて答へて下さい。

(四)一の袋に一圓、二の袋に二圓、三の袋に三圓、といふ風に百圓まで順々に一圓づつ殖して金を入れた袋が百袋あります。この所有者である父が、一郎から十郎までの十人の子に十袋づつ、而も各々の總額が同じになるやうに分けてやりたいのですが、どうすればよいか、左の圖の中に數字を記入れて答へて下さい。

◆以上四題の中二題出來れば正解者とします◆

規定

◆締切　昭和參年十月二十五日

◆發表　昭和四年キング新年號

◆募集　左の切取線から切取り、答、住所、氏名、明記の上開封(二錢)で御送り下さい。

◆用紙　必ず此用紙をお用ひ下さい他は無效。

◆宛名　東京市本鄕區駒込坂下町四八 キング石版圖懸賞係

賞品

壹等 金側懷中時計 壹名・
貳等 銀側懷中時計（銀鎖付）十名
參等 美術置時計 壹百名
四等 圖書券（三十錢）壹萬名

正解者多數の場合は嚴正抽籤によつて當選者を決定します。

（キリトリ線）

キング特別懸賞解答用紙

（一） です。

（二） です。

（三）

イ ロ

士
嚴

（四）

一郎	二郎	三郎	四郎	五郎	六郎	七郎	八郎	九郎	十郎

氏名

府縣

郡市

町村大字

番地



昭代の一大美擧
大日本史の刊行

文學博士 中村孝也

大日本史は日本帝國の眼目である。思想國難の恐怖の中に屹立して、私共は敢てこのやうに大聲疾呼するのである。大日本史は嘗て我が國家を救つた。今も亦我が國家を救ふであらう。國民は、この北極星を仰いで、その羅針盤を正さねばならない。

神代より筆を起して南北朝の合一に至るまで、史實の穿鑿は微に入り細を穿ち、史筆を行ること最も謹嚴、尊王賤覇の意氣隱約として閃き、大義名分の旗幟きはめて鮮明である。布置結構の壯大なるは固より、全編を貫く雄渾なる大精神に至つては光焔萬丈、暗黒を照破する概を備へてゐる。宜なり、この書一たび出でて、天日明らかに蒼生を照らすに至りしことや。本書の編述は眞に經國の大業、不朽の盛事といふべきものである。大日本史は水戸藩が全生命を投じたものであつた。水戸藩は今は無いけれど、この書の存する限り、その精神は尚ほ永久に生きて世道人心を指導するのである。この貴重なる文獻が、今秋の御大典記念として、大日本雄辯會によつて刊行せられるのは、實に昭代の一大美擧である。同社報國の至誠が、この一擧によつて、一層の光彩を發し來ることは、出版界のため慶賀の念を禁ずることが出來ない。

徳富蘇峰先生より
野間本社々長宛書翰

香山一別以來轉た想思を勞し候。却説御大典記念として大日本史御刊行寔に此れ以上の適當なるものは無之流石に尊社御慧眼敬服此事に御座候。今更大日本史に付て彼是贊評を加へ候は餘りに野暮臭きことながら、大日本史は實に日本帝國の存せん限り必傳の書にして日本國民の存せん限り必讀の書に候。白石も山陽も其の大綱に於ては全く大日本史

豫約者に對しては、特價金三十五圓を以て之を提供するさうである。同社は御大典奉祝記念のため、一切の採算を超越して、このやうな廉價販賣を斷行するのであらう。この機會を逸しては、これ程の良書を手に入れることは困難と思ふ。

あゝ時は正に秋にして瑞龍山頭月明かなり。光圀卿の英靈、これを見そなはして、莞爾として微笑せられるであらうことを思へば、我等も亦、欣快の情を禁ずることが出來ない。

大日本史の出版を感謝す

小久保喜七



大道の湮滅せる暗黒時代にありて、能く大義を明かにし、名分を定め、國體の尊嚴を顯彰せしは我水戸義公の心血を灑ぎたる大日本史である。此書一度出づるや天下向ふ處を知り、儒者に、國學者に、浪士に、神官に、諸藩の有志に之れを中心に或は論議し或は奔走するもの踵を接して起り、勢の熟する處遂に維新の大業を成就したのである。他語以て之れを言へば維新改革に就ては各般の事情議論起伏し、幾千の志士英雄出沒したるは云ふ迄もなきことながら一度其源に溯れば此大日本史の影響にあらざるはないのである。さればこそ明治大帝は明治三十三年常陸に御行幸に相成り義公の位を陞せられし際、洵に勤王の倡首にして實に復古の指南たりと云ふ有難き御詔を賜つたのである。

吾々日本人たるものは此大日本史を戸に備へ家々に藏せなければならないのであるが、如何にも卷帙浩瀚其價額も高きが爲め非常なる篤志家にあらざれば之れを需めないのは無理からぬ次第である。隨て之れを讀むものは殆んどない。野間君は深くここに慨する處あり、大犠牲を覺悟して此思想國難を濟はん爲め出來る丈け輕便に此書を社會に弘布せん爲め、義公生誕三百年の記念として頗る安價に之れが出版を決意せしと聞く。是れ野間氏の力と野間氏の意氣にあらざれば出來ない事である。君が我國體顯彰の爲め久しく奮鬪努力せしは余の常に敬意を拂ふ處なるが、今回此盛擧を見るに及んで益々其國家に對する忠誠に嘆服して止まぬのである。

の軌轍を踏襲候一事を以てしても、其の價値を否認するに躊躇ありと存じ候、而して老生が曾て貴社の事業を目して、私設文部省と稱したる言の愈よ的確なるを此舉によりて證明したること實に快心の至りに候。但だ事業の膨脹と共に主宰者の健康尤も大切に存じ候。折角御自愛御攝養專一に奉祈候。匆々拜復

昭和三年八月十六日

蘇峰迂人

野間仁兄大人 玉几下

感謝！感激!!

本社一度大日本史の刊行を發表するや、天下に多大の反響を喚起し、諸名士より陸續として讃評を賜はり、激勵の辭を寄せらるる。我等唯感謝感激の涙あるのみ!!

右はその一二に過ぎず。

皆樣！喜んで下さい‼

横山桐郎博士著

蟲の世界を探ねて

といふ素晴しい本を今度本社から出版しました

横山先生は、蟲の研究では日本の第一人者、而も、其の文章は諧謔味に富んで、人を惹きつける魅力を持ち、本誌に一篇を發表する度に、皆樣の熱狂的の歡迎を受けてゐました。

横山先生の著書を讀みたい。纒つた一冊の本を出して貰ひたいといふ希望は、毎日編輯室の机上に山積しました。先生も亦、キングの讀者の爲め、うんと面白い、珍らしい、ためになる本を出したいと云ふ御考へで、二十年間苦心の御研究を傾注されたのが即ち本書です。

本書は、從來この種の讀物にみるやうな、或る種の生硬な型に捉はれず、理科的にも偏せず、



雄を食ひつゝあるオホカマキリの雌。彼等の戀の慘酷なる反面。

目次の一端

◇蓬萊島に蟲を探ねて

南國に咲き誇る花の美よりも、紫水緑よりも、それから芳醇な果物の香よりも、私達を魅するものは、天女のやうな胡蝶の舞踊、斷崖にさく花に群がる金亀子蟲の宴や、果ては水牛の糞の山に潜む所謂糞蟲の奇である。とは、開卷劈頭に先生の述べられた言葉です。本項は先生がはるぐ臺灣にわたつて、珍奇な蟲の生活をさぐられた貴い記錄。

◇蟷螂の戀

有名なるファブルの昆蟲記にも見えない驚くべき實驗記錄、蟷螂の雌雄が戀の抱擁を續けながら、雌が雄の身體を食つて仕舞ふ。戀は死よりも強しを如實に物語る得難い材料。

◇秋の野原の樂壇消息

蟲界樂壇の代表者。名手揃ひコホロギ科。聖樂家エンマコホロギ。南洋渡來の[illegible]松虫。大家の[illegible]キリギリス科。[illegible]家の

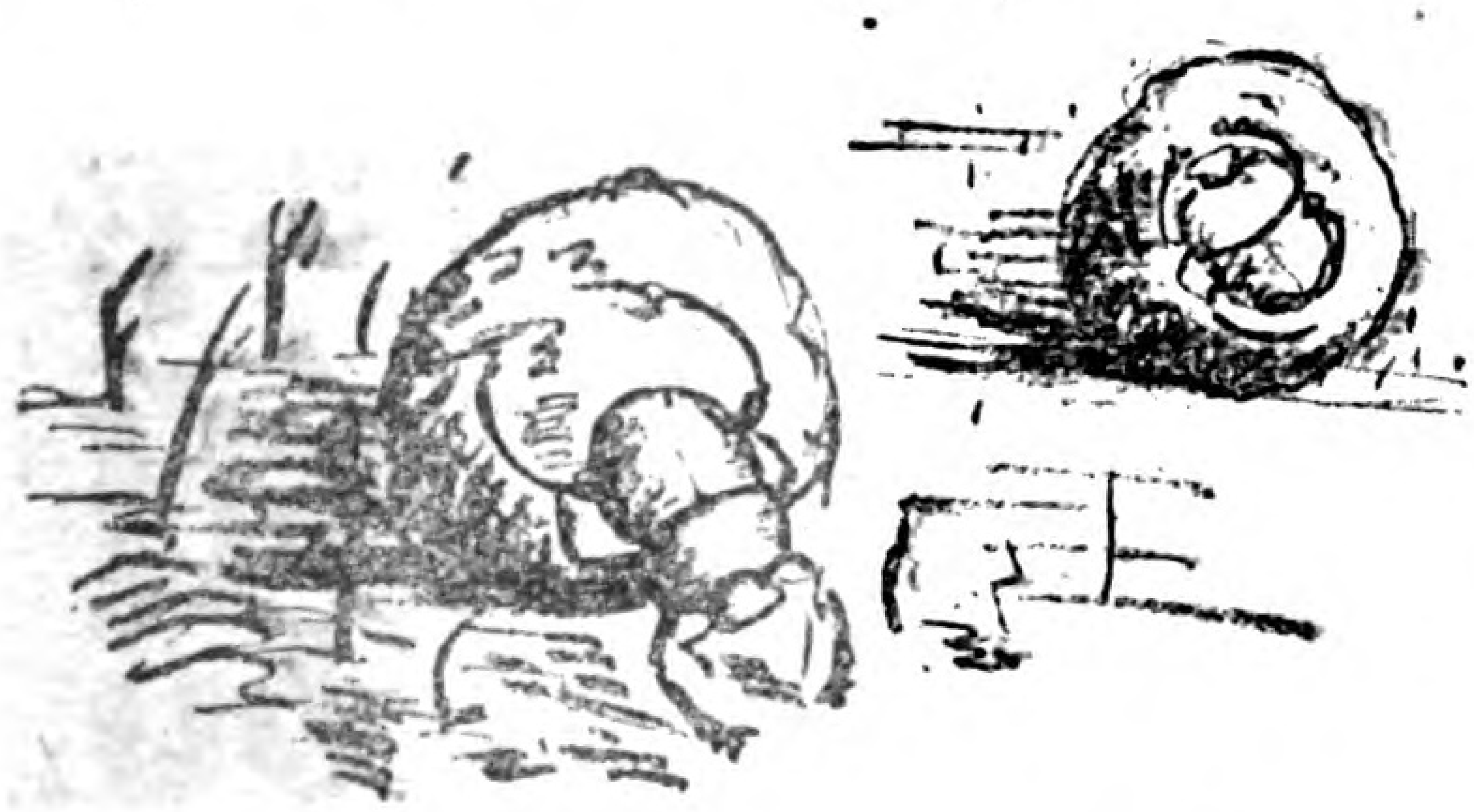
ピンくした蟲の生活のありのまゝを微細に觀察し、先生の第六感を交へて、平易に、誰にも面白く讀めるやうに書かれたものです。蟲の生活といふものは、決して人の考へるやうに單純ではなく極めて複雜なものです。この複雜な生活狀態を觀察すると、諷刺教訓が無限に湧いてきて、私共の處世訓として銘すべきものが多々あります。その生活を觀ることは、人間世界の芝居や、活動寫眞を見るより遙かに面白い。そこには何等の技巧なく、虛僞もなく、あるがまゝの生きた芝居が演ぜられてゐます。一言に昆蟲といふと、無味乾燥の世界のやうに見られてゐますが、決してさうではない、彼等の世界にも、戀もあれば、生活問題もある。就中彼等の戀の闘爭は、實に人間社會のそれよりも眞劍であり、決死的なものがあります。

先生が採集用の服に卷ゲートル、胴には蟲を殺す硝子びんの並んだ皮の胴締め、腰には刄物のスコップといふ輕裝で、日本內地は勿論、遠く蓬萊島まで蟲を探ねて行脚を續け、彼等の戀愛、彼等の生活、何れも先人未發見の新事實をくまなくさぐり、先生一流の輕妙洒脫の筆致を以て綴られたもの、多數の新奇な挿畫と相俟つて、又と得難き名著です。

時は淸秋、讀書の好時期、切に皆樣の御愛讀を希望します。

全國書店にある筈、若し品切の節は直接本社へお注文を願ひます。（振替東京三九三〇番）

糞玉を轉がす玉押し君



A

樂器調べ。何の爲の演奏會等。

◇雌だけで子を生むあぶらむし

あぶらむしの如きは、雄がなくとも雌だけでどんどん子を生む。この外女の子でも男の子でも、母親の考へ通りに生む蜂の一種等驚くべき事實を語る。

◇蟲の飼方

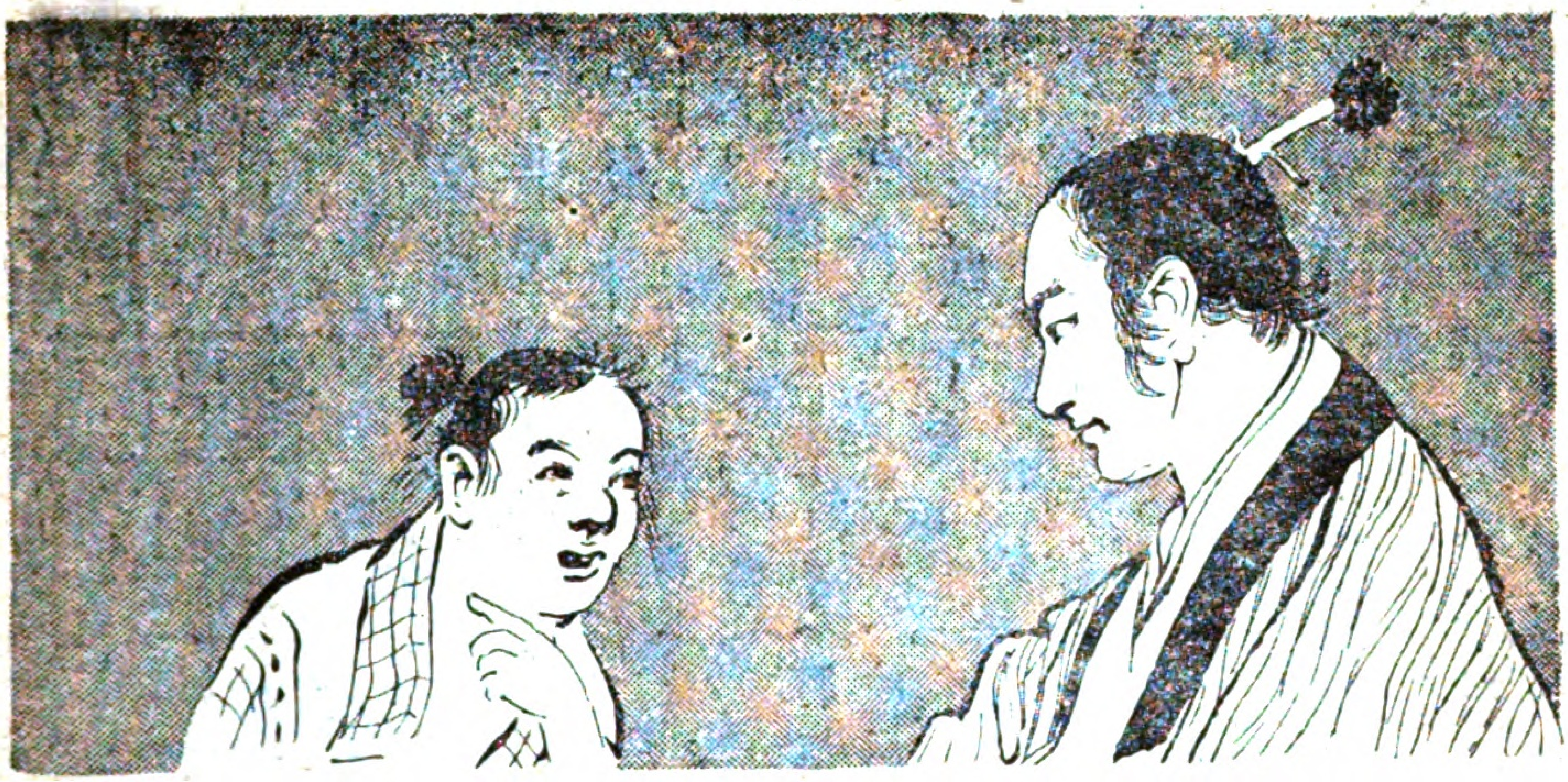
こゝでは蟲の飼方について色々の注意を擧げ、更に素人にも出來る簡單なる蟲の孵化法について、親切に說いてあるので、蟲を飼つて樂しみたい人々には、もつてこいの記事です。

◇動物園のカメラ行脚

著者が、カメラを持つて全國の動物園巡りをするの記。珍しい寫眞が豐富で興味津津、お子さん方を連れて動物園見物には、なくてはならぬ好手引、これだけでも立派な單行本です。

◇其他いろく

（定價一圓二十錢、送料十二錢、大日本雄辯會講談社發行）



蜂須賀小六

村上浪六
小山榮達　畫

蜂須賀村を虎穴として小六の寝首を搔きに來た坂田小平次、同じ捨身の死場處を教へられて清洲へ歸りしより三日目の朝、ふと例の針賣の姿が見えない、

小六の家へ轉げ込で二月の餘にもなるが、たゞ愛智郡の熱田神領で中村の產といふ以外、誰に問はれても自分の名をいはない、無論また土民の子に氏も苗字もある筈なく、をかしい小僧といふだけで深く詮議するほどの相手にもされず用もないため、やはり今も猶そのまゝ針賣々々と呼ばれ、本人また平氣に針賣を自己の名として少しも嫌な顏せぬばかりか、まめに素早く小さい身體を持運ぶ調子は枝から枝を渡る小猿のやうで、おい、猿と呼ばれても、ひよこりと不意に面を出す時は穴を見失うた豆狸のやうで、おい、狸と呼ばれても、また案外の喰ひぬけで飯袋といはれても、すぐに氣持よく粗末な顏に微笑を浮べて振返る工合を、主人の小六は猶更ます〳〵此奴たゞの小僧でないと見て居る、

土民の子に生れた豐太閤の幼名を日吉と稱し或は日吉丸と稱し、また面貌の猿猴に肖たるため、いたるところ猿と呼ばれ、乃至また干支を取て申之助と稱した類は一切これ悉く浮世の俗書より作り出した事で、全く豐公の幼名は判然せず信ずべき記錄は何物もない。

出るにも入るにも蒼蠅く主人の影に附纏うて離れない針賣が突然その姿を隱したので、小六の家の者は面白半分の冗談まじりに騷ぎ出した、

あの猿め、折角の餌に有付て居ながら、どこへ飛出したか、あの狸め、こゝに居れば暢氣に腹鼓も打てるが、うかうか餘所へ行けば生捕に逢うて狸汁にされるぞ、もう賣歩く針もない奴が何を種にして出たかと、わいわいいふ中に主人の小六は眉を顰めない、笑ひながら飯はあるかといふ言葉に氣が付て調べて見ると、家に居る十三人の大男が食ひ殘した今朝の飯櫃二個、晝の分が一粒も餘さず空になツて居る、

一度の一人前三合づつとしても三升九合、四合宛とすれば五升二合、ちよいと手輕の握り飯にして行ける筈がない、どうして持出したか、いつの間に偸ンで提げて出たか、いかなる大喰ひでも四五日の兵糧持參で出奔したぞと、呆れ返る中に暫く目を閉ぢて居た小六、そツと思はず自分の膝を叩いて、

『や、無言のまゝ的もなう出奔する奴でない、飯のある間ぢや、すぐまた舞ひ戻るぞ、はゝゝゝ』

忽然と清洲の城下へ現はれた小さい身體に脊負うて居るのは、針を賣歩いた時の風呂敷で中味は飯をふり掛けた三升あまりの冷飯、蜂須賀村より此處へ來るまでの間に晝の一度を摑み喰ひにして、指頭に付た飯粒まで舐め盡し、あとは半餅のやうに力を込めて固く握り詰め、どこの水でも掬ひ上げて飲めば茶も入らず、いづこの里でも野宿に馴れた身で苦にならず、ある時こそ人並に外れた大喰ひでも、食ふや食はずの憂き目を重ねて來た胃袋の辛抱強さで、また少々の腐るぐらゐは承知で冬の日を引伸せば半月ほども持堪へる兵糧を脊負ひ込で、この清洲の城下へ何をしに來たか、

だしぬけに黑雲を起して清洲の空に龍の片鱗が現はれたとなれば、それこそ城内も一時に驚き恐れて上を下へと騷ぎ廻るが、この雲龍いまだ時を得ず今年十五の見苦しい小柄は蚯蚓のやうな形狀で、草履の裏に踏潰されぬ用心さへすれば、どこに居ても人目に立たない、

夜は町外れの鎭守の森の中を我宿として、日中は絕えず城下の町々を歩き廻り、ちよいとでも人立のするところへは素早く潜ぐり込で小耳を欹てながら、それとなく頻りに世間の噂を聞かうとするが、城内の事は容易に外へ漏れないため、この清洲へ來てより三日の間、さらに何の得るところもない、

用意の兵糧も凡そ三分の一を腹に入れた四日目の朝、我宿とせる鎭守の森を鴉の聲と共に離れて、三町あまり町外れの初霜を踏出した路の傍にある寺の門前より何心なく覗いて見ると、本堂の眞正面に奧深く蠟燭の火が赤々として、その横の庫裡から出て來たのは七八人の武士、いづれも殊勝氣に差俯いて物もいはず悄然と步み出す中に一人麻上下を着けて刀の柄に白紙を卷て居るものがある。加之も時刻が時刻この早朝に打連れて墓參りの歸りとも思はれない、さては表向きの葬式を憚かり

内々そツと夜中に埋めし佛のため身寄りの人々といふ事は、幼少より諸方を彷徨うて目早く見て取るや否、其まゝ小走りに入りて、

『旅の空に宿もなう、終夜こゝまで疲れた體を運びましたもの、きのふよりの空腹、御佛事と伺ひまして、御報謝を願ひまする』



かういふ事には不思議でない容貌風體を備へて、年よりも小さい瘦せた五體の腰を屈めた工合、いつも空腹で難儀をする横着な小僧とは見えない、わけて無常の佛心を起した時で猶更の哀れに首肯かれ、鼻紙に捻りし幾何の鳥目、それを有難く押戴いて、

『かやうなものでも、他生の御縁に繋がりまする、佛になられました御人の、お名前は』

有緣、無緣、法界一佛と思うたか、流石に涙を浮べて、

『まだ法號も戒名も憚かりあるもの、俗姓は坂川と申す』

や、これが小平次の兄かと思うたが、驚きもせず顏色にも出ない、たとひ出ても急に色合の分る面でない、

その去り行く後姿を見返りて、また再び門内へ立戻り、正面の本堂に向うて、南無阿彌陀佛と唱へたのは心からの回向で、いよ〳〵あの畫に描たやうな若衆が主を諫めて座も動かず手討に逢うたは大晴の魂、敎へられたにせよ、その敎へを守りて忠義の方角を取違へず、よい死場所を得たぞと思ひながら、門を出る時、ふと氣付たのは日蓮宗の寺、ちよこ



ちよことまた再び足まめに立戻りて南無妙法蓮華經と題目を唱へ直したのは、いかにも他日の大物になるべき奔放自在の少年らしいところがある、

蜂須賀村に居ても、實は別段これといふ用のない身、をり〱居ない方が却て邪魔にもなるまいと、自己の勝手に極め込で十三人分の晝飯を持出したが、その飯を持出したゞけの事をして歸らうといふ考へで、この清洲へ入込だ第一は坂川小平次の最後、もし助けられた恩義を忘れ敎へられた死場所を卑怯に生伸びて、あの長袖を祭り人形のやうに引ずり歩く奴ならば、さういふ奴と生命の遣り取りは嫌なれど、出る隙を窺ひ眞ツ逆樣に堀の中へ突落してくれる位の藝當をしに來たが、案外の確とした肝魂で全く忠義の門違ひをしたと後悔したか、いよ〱諫め死をした證據を見屆けた上は、小六への注進かた〲直ぐにも去るべき筈を、まだ喰ひ殘りの冷飯があるため、ついでに何か面白い土產話しを持て歸らうといふ大膽な惡戯氣を起し始めた、

今度は城の南に當る鎭守の森と方角の違うた北の端で、いざといふ時は搦手の出曲輪になるらしい小山の麓を選び、やはり一叢の茂れる森の中を夜の寢床と定めて、ぐる〱晝は絕えず城の周圍を廻りながら、頻りに底光りの目を光らして居たが、これも幸ひ人らしいものに見られないため、咎められる恐れもなく、たま〱城內の武士に出逢うても、目觸りに追ひ拂はれるだけの事、かうなると元來の不敵な

興味ます〳〵面白い面白味が増して來る。

たま〳〵英雄の兒戯に類する事ありといふの後、いつまでも活氣横溢を續けて、年と共に益々尠くならない意味で、その意味に於ては後年の秀吉が徳川家康と長久手の對陣以前、乃公の出るまで戰ひを始めるなと豫じめ先鋒の諸將を戒めて置たが、いよ〳〵家康の濱松を發したと聞くや否、折しも千の利休を呼で伏見の里に茶會を催して居た秀吉は茶席の庭に躍り出して、くるりと尻を捲りながら力足を踏み、小兒の相撲でも取るやうに、えい〳〵と五六度叫ンで其まゝ直ぐに發したのが四十九歳の時で、もはや鬢髮に白味を帶び額際そろ〳〵禿げて居ても意氣なほ老の至るを知らざる天眞爛漫の人、それが今年十五で牛に踏まれるか馬に蹴られるか自己の運命に一寸先の闇の世の中と來ては、この腕白小僧、どういふ氣まぐれの無茶を仕出すか分らない。

然し不意に飛出して向ふ臑の搔ツ拂へる相手でない、清洲の城主で織田一族の本流で四方に聲威を振ふ彦五郎信友、まして戰國時代に築き上げた要害堅固の中に數千の兵が滿ちて、日夜間斷なく敵に備へた武備嚴重の相手に向ひ、少許りの冷飯に空腹を凌いで彷徨く小僧が何でも跳ねても藪蚊一疋、石地藏の頭を螫すやうなもので仕方はないが、仕方ないで其まゝ指を咬へながら眺めてゐる奴でない、何とかして城中を一時に騷がしてやらうと考へた果は、火、火、つまり放火で、だしぬけに火事を起して燃え上る火焔を見返りながら舌を出して嘲らうといふ、實に油斷のならない恐ろしい悪戯小僧が城の隙を窺ひして居ると城主信友、夢にも知らない、

それほどの大膽不敵でも、うか〳〵すれば自己が黒焦げになる火の中へ飛込で城主の首まで提げて歸らうとは思はない、ちやんと無謀の領分を心得た小僧、たゞ上を下への火事騷ぎを起して城中を引ツくり返せば滿足、殘りの冷飯も無駄にはならず蜂須賀村への土産話しにもなるといふだけの事ながら、冷飯の殘りと城中の火事と取替へられる方は堪らない。

また一番こゝで面白く取揃てやらうといふ方も、野原の一軒家へ火を付けるのとは違ひ、四方の敵軍を引受けた亂世の城廓、第一に大手と搦め手その他の諸門にも日夜警戒は嚴しく、どこの出口にも入口にも番所々々が設けられて、なか〳〵蟻の這ふ隙間もないが、城の中に住む諸士の家々は却て簡略な粗末な建物で、大小を飾る後世のやうに立派ではない、敵軍もし堀端まで押寄せて來て勝敗旦夕にありといふ際は、忽ち取拂うて馬の驅け場となり武者働きの廣場とするため、本丸に築いた城主の屋形は兎も角、諸士一體の住居は當時の言葉これを繋鉛の屋敷といはず小屋掛と稱したくらゐで、一旦その城中に忍び込めば、積重ねた木材と稱し假屋掛材に火を放つよりも樂に燃え上るが、さて外堀と内堀を廻らした輪形の中へは容易に忍び込めない。

そこで考へたのは、鼠の如く暗夜に紛れて忍び込むよりも寧ろ晝に番所へ駈けて大びらに城門を通る事、これには幸ひ坂路か



平次といふ名がある、
　わざと大手の脇木口より足輕ども見張りの詰所前で、小さい身體を猶更ます〳〵小さく縮めながら
『御城内、坂田樣お小屋へ通りまするもの』
　ぺこ〳〵頭の下げた風體を、じろ〳〵見下した足輕共、いかにも不思議さうに、
『坂田、坂田では分らぬ、諸士中に坂田は三人ある、どの坂田ぢや』
『坂田、小平次樣といはれまする』
　坂田小平次は城中第一の美少年で名高いばかりか、あの女のやうな優しい姿で、大の荒男さへ恐れて居縮むほどの城主を憚からず諫め死の手討にされた事が猶更ます〳〵名高く哀れの話り草になりて、まだ新らしい噂の絶えぬ折柄、その坂田小平次に今この見苦しい小僧が何の用で來たかと、眉を顰めながら、
『その小平次殿は近來、急病で、頓死されたぞ』
　馬鹿野郎め、もう内葬まで見て來たぞともいへず、あツと驚いたやうな調子で、わざと反身の呆れ顏、
『や、急病で、頓死、あの若々しい、あの美はしい人が、花の嵐で御座りまするな』
　うすぎたない小僧め、生意氣なことを吐すと苦笑ひの足輕、
『じたい、何の用で來た』
　俄かに悄れ出して、
『實は、十日あまり前、御城外の田舍道で空腹に行倒れましたところを、救はれたもので御座りまする、その節、もし寄る邊なく食ふ道もなくば尋ねて來い、使ひ奴にしてやると仰せられました其、其お言葉を力に』
　これで三四度も空腹を用ひて居るが、外の事では誰の眼にも承知の出來ぬ風體、空腹の行倒れが分相應、いかにも尤らしく見える年齡容貌で、他日の天下を翻弄した神算鬼謀と違ひ、今の境涯は萬事この飯を食ふや食はずの間から智慧も工夫も湧て出る、
『せめて、お位牌の前で一度、手を合したら思ひまする、お身寄の方は御座りませう』
『身寄は、兄御一人、あられる』
『その兄御樣へ、お目に掛りたう願ひまする』
　亂世でも戰國でも現在の眼前に敵も軍もない時で、せい〴〵十三ぐらゐに見える小せがれ、もし間違へば捻り潰しても濟む事、まさか城の中へ火を附けに來た大膽な奴とも思はず、加之も坂田小平次には陰ながら感歎の舌を卷て居る折柄、仔細あるまいと互ひに顏を見合した、上一寸ばかりの燒印を捺した木札を與へて、
『坂田殿の小屋は、この桝形をぬけて左の御門を右へ松並木の内堀に添ひ、三の丸の入口に建添ねた小屋御番で聞け』
　まンまと首尾よく大手の門を通りぬけて、要害堅固の城内へ難々と入込だが、さて火事を起して今度この城を逃げ出す事は、なか〳〵の難かしい放れ業で、いはゞ籠中の魚が天井に跳



ね出さうとする藝當、決して樂でない、まごつけば騷ぎの中で踏殺される、下手を遣れば見附けられて生捕られる、つまり生命がけの惡戯で、かうなると聊か間垂れ氣味も出て來るが、折角こゝまで入込で此まゝ引返すも殘念と心得、正直に敎へられた通り步を運ばない。

第一また兒には內藏の時に手の內を貰うて顏を知られて居る身、もし出逢へば當意即妙の方便もあるが、ちッかりと行けない、わざと不案內な顏をして方角違ひを彷徨き廻り、その間に二度も咎められたが門札を示して巧みに見遁され、なるべく人目を避けて淋しいところを步きながら時刻を待受け、城外の町に夕陽の沈みかけた頃は、四方を高めた狹地の城內は旣に宵闇で、早くも目を附けて置たのは二の丸の隅にある森陰の稻荷神社、

どこの城でも當時の風習は必ず一曲輪每に武運長久のため鎭守の神を祭りて、加之も諸士の住居に遠く離れ祭日の外は人も通はぬところで、たゞ當番のものが每夜の燈明をあげに來た後は、森閑として居るを結句の幸ひ、豆のやうな一點の火でも、それを火種に使へば案外の大火事になる、

その稻荷の內殿の扉を押開けて、恐れ氣もなく神體と共に身を潛め、おうるさくとも暫時の御同居を願ひます、この城の武運よりも私の逃げ路を守り玉へと勝手な事を念じながら、見れば普通の人家にある行燈の火とは違ひ、なか〳〵大きい深い火皿で、なみ〳〵と油も惜氣なく注込で太い燈心が五筋、

こゝで握り詰めた小餅が木餅のやうに固くなりし喰ひ殘りを三個と、きのふあたり例月の祭禮でもありしか幸ひ三方の上に鼠の引き餘した干菓子、これは思はぬ不意の御馳走で有難く戴き、むしやむしやと遠慮なく喰うて腹を拵へた後、次第に更け渡るを待受けて居ると、諸士の小屋々々を見廻る拍子木の音は幽かに響いて來て、それが町の往來でない靜かな城內に猶更の物淒く聞え、やがて櫓に打出す太鼓は二更三更に悉く城門の閉切、さアいよいよ千番に一番の兼合が來た、

自己の片袖、ずたずたに引裂て綿の如くに柔かく丸め、これに充分の油を吸ひ込ませ、干菓子の三方を逆さにして、その底へ火皿を入れると、まるで龕燈のやうに風も受けず火も消えないが、殘る片袖を蔽ひ加減に持出して、そろそろ忍び足に這ひ寄りしは第一に覘うて置た馬草納屋、戸に鍵もない、そツと引開けて燈心の火種を仕掛け、續いて諸士小屋の裏口より丸めた襤褸の火の玉を抛げ込み、其まゝ一散に駈け出して二の丸の松並木に攀ぢ登りながら、茂みの間より目を光らし、どうなるかと見て居ると、まツ暗い闇の中に薄赤く、ぽツと光り出したのは馬草納屋の窓で、それと共に諸士小屋の方からも白い烟が吹き始めた、

すは一大事と驚いて、目早く夜廻りの足輕が大聲に騒ぎ出した時は、ふしぎに時刻を合して待受けた如く冬空の北風が吹き始めて、加之も連日の天氣續きに乾き切ツた例の小屋普請は堪らない、燃え上る渦巻きの火焰は俄かの夜風に押伏せられるため、猶更ますます却て火足の早さは後から後からと赤蛇の土堤を傳うて追ひ行くが如く、寝ぼけ眼に狼狽へて持場々々へ人數の繰り出すよりも次第に燃え移る火の手の方が順序よく盛に勢ひを增していよいよ城內の大火事、上を下への大騒動、

もう占めたと、この面白さを松の茂みに隱れて見て居たが、いづれも火の方へ駈附けて四邊に人影のない暗闇を幸ひ、そろそろと靜かに降りて、這ふが如く物陰に添ひながら音もなく走

り出し者の間に覺えて居た二の丸より外曲輪まで迷ひもせず無事に逃げ伸び、大手の門内は木戸續きの柵を身輕に越て、また傍の大木に攀ち登り梢の茂みに再び身を潜めながら、悠々と城内の火の手を見物かた〳〵夜の明けるのを待受けた大膽さは、十二の時より野山の難所を何の苦もなく飛歩いて來た自然の修業もあるが、いはゆる敵中にありて身を全うし危ふきに居て安きを得る業は殆ど其天生にあるらしい、

どッと燒け落ちる物音、わッ〳〵といふ人聲、手に取る如く聞えた火事騷ぎも次第に治まりて、東の空の白み渡る頃、夜明けの太鼓と共に大手番所の足輕七八人が總身の力を協せ鐵綱を引絞りて城門を開け放ち、其まゝ元の番所へ踵を返すや否、この間一髮を覘うて居た身は栗鼠の如くに大木の上から降りて來て、ちよろりと脫け出した工合、遠くより見れば人間と思へない、まるで何か黑い小さい物が風に吹かれて散るやうである。

蜂須賀村の師走空に誘はれて來る蓮華寺の森の枯葉は、どうしても小六の門前に吹き寄せる、わけて前夜の北風に今朝それを掃て居る下男が何心なく見ると、十三人分の膳飯を持出して行方の知れぬ七日目の顏、

『や、御寶、けふまで何處を彷徨て居た』

にや〳〵笑ひながら、

『あまり戀しうて、うまれ故郷の中村まで、ちよと母親の乳を呑みに』

ふざけた事をいふ奴と睨み付けて、

『あれほどの大飯を持出した上、まだ母親の乳を呑みたいか』

眞面目に首肯て、

『はる〳〵と吸ひに行きましたが、その後に生れた幼い妹や弟に氣の毒で、一雫も舐めずに戾りました』

『はゝゝその年で、その顏で乳房を吸へば化物に喰ひ付かれたやうに母親は氣絶するぜ、木の根に獅嚙付て夜露でも吸う

たかが似合ぢや』
彼といはれても氣にしない、其まゝ門内に入りて母屋の縁傳ひに奥座へ廻り、主人の居室の縁端に両手を掛けて、
『歸りました』
その聲に障子を引開けた小六、ふしぎらしい顔も見せず、放し飼の小鳥が籠に飛歸りしやうな面持で、
『めづこを歩いてゐた』
輕く頭を下げて、
『ふと思ひ付きました事で、淸洲へ』
『淸洲、淸洲へ、何を思ひ付て』
『坂田小平次、あの後、どうなりましたかと』
案に違はず。いかにも我心を得た奴と、首肯た小六の面には、ます／＼微笑を浮べて來る。
『あの小平次、まだ生きて居たか』
『いや。みごとに斬られましたげの噂、噂ばかりでなう現在、その内弊にまで出逢ひまして』
小六は目を閉ぢて淸洲の方角へ向き直り、心に一片の念佛を唱へたらしい、
『惜しい若者を殺したぞ。今この戰國の武士と生れて生命は時を嫌はず誰も覺悟の前ながら、あの弱々しい風にも堪へぬ姿で、あの健々しい十七の身で傍若無人の主君を諫め死するとは、敵に向うて討死するよりも大剛の業ぢや、よい土産話しを齎た、よくも見届けて來た』
『その外に、もう一事、まだ土産が御座りまする』
『ほう。淸洲名物の霜柿でもか。それを取らうとして枝に片袖を置忘れて來たな、はゝゝ』
引裂て片袖のない片腕を聊か自慢げに見て、その目を其まゝ小六に向けた笑ひ顏、
『小平次の最後を見届けましたのは三日目、握り固めた辨當の飯の殘りを、むざ／＼喰ふは勿體ないと心得、先達この村へ不意に押寄せた一隊の攻め、そつと城内に忍び込み』
『何。城へ忍び込だ』
『首尾よく忍び込で、火を附けました』

絶好の出版物！

キングは不眠不休
この日本始めての大部數！
雑誌界始めての大廉價！
一は御國の御爲め、
一は同胞八千萬の爲め

満天下諸君！

わが社に特別の同情を寄せらるゝ親愛なる諸君！　微衷御賢察。到らぬ隈なき迄、この書の強烈なる後援者として、出來得る限り之が頒布に御高援あらんことを

切望！　懇願！

大日本雄辯會講談社

これには流石の小六も驚いた顔色で、びく〳〵と太い眉を動かし、切れ目の長い眼を大きく見開いたが、實は此奴この小倅の無鐵砲に呆れたらしい、
『火の手は』
『たしかに、あがりました』
『よもや、本丸であるまい』
『残念ながら、本丸へは近寄れませぬ、二の丸と三の丸の間、諸士一體の寝小屋は丸焼け、煙に巻かれ火に追はれて狼狽へ騒ぐ雑兵の面白さを松の木の茂みに隠れて、ゆる〳〵と見物いたしました』
いよ〳〵呆れた小六
『大手からか、搦め手からか、城門、いかにして逃げ出した』
これには口で答へない、只今お目に掛けますといふ風で、庭前を四つ這に這ひながら、ちよろ〳〵と二十日鼠の如く樹間を縫うて自由自在の巧みに舞ひ歩く身軽さ、目にも止まらぬ早業で、をり〳〵は蝗のやうに飛び上る餘興までも附け加へ、すツと其まゝ自己の寝小屋へ走せ去りし後姿を見送りて腕を組み始めた小六、おもはず獨言
『末の恐ろしい奴』
末の恐ろしい奴も奴、これほど恐ろしい奴はない、應仁以來の麻の如くに亂れた天下を黍團子の如く、くる〳〵と手の内に丸めて一呑にした豊太閤の卵子が今この巣に温まり、そろ〳〵孵らうとして居る時である。（つゞく）

キングの増刊は

一、日本ではじめての大發行部數！
一、日本ではじめての大廉價！
一、日本ではじめての獨創的新編輯法！
一、日本ではじめての感激讀物滿載！

名人の心掛

七十兩の刀

初代、尾上菊五郎が、市村座で『忠臣藏』の大星由良之助を演めた時の事だ。僅か刀一口の拵へに七十兩も大金を掛けたといふので、かれこれ批難する人があつた。

處が、或る日、看客中の目の利いた一人の武士は、四段目判官切腹の場で、國許から到着の由良之助が、バタ〱と花道へ走り出で、刀をピタリと側に置き『ハヽツ』と平伏する所作を、つく〲打戍つて居たが、



『如何にも國家老相應の刀だ。見應へがあるワイ』と云つて格別その刀の出來を讃めた。

それを聞いて、前に惡口を云つた人々も、成程と合點き、『名優の心がけは、違に異つたものだ』と、今度は反對に感心した。

尺八の變調

寶永年間、京都鳴瀧に、城松といふ盲人が居た。尺八にかけては稀代の名人で、瀧に對つて吹くと、さしも鏜鞳とたぎり落ちる瀧の響もこの爲に壓せられ、たゞ聞えるのはこの尺八の妙音ばかりであつた。

この城松が、或る日、いつもの通り瀧を前に尺八を吹いて居たが、忽ち愕然として其手を止め、傍の人達に云ふには、

『如何にも尺八の調子が變だ。これは近いうちに天災がある前兆に相違ない』



この突飛な言葉は、誰も本當にはしなかつた。が、城松一人は大に怖れて、愛宕山に登つて豫め避難したのであつた。すると、それから五六日後のこと、果して近畿一帶に大地震が起り、夥しい死者があつた。

辨慶の急所

或る日、喜多七太夫は『安宅』の能の稽古に熱中して居た。側で見て居たその母は、

『お前の藝も大分進んだが、こゝだと、思ふ壺に嵌らぬところが未だある。今一工夫が肝腎だ』と注意した。

そこで七太夫は、種々と工夫を凝らして見たが、母はまだ〱と云つて、容易に肯はなかつた。七太夫は、

『この上は、私の思案には及びませぬ』と匙を投げた。處が母は容を改めて問うた。

『一體、お前は、辨慶の役をどう云ふ心もちで演つて居ますか』

『それこそ豪氣一杯、一見それと、直ぐわかる樣にと心掛けて居ります』

『それがいけませぬ、そも〱、辨慶は山伏姿に身を窶して居る。それでさへ關所の役人に見咎められたのだから、況して、最初から辨慶と見えるやうでは、どうしてどうして、關所を通ることが出來ませう……』



七太夫は、この母の言葉を聞いて、礑と膝を打ち『成程、さうだ』と、それから思案をこらして、つひに一世の名人となるにいたつた。



この親、この子

廣島縣吉田町　津川修一

この町の小學校には、生徒が六百人以上も居ります。近頃、非常に讀書熱が盛んになつて父兄間でも喜ぶべき事だといつて賞讃して居りますが、中でも、幼年倶樂部の讀者ばかりでも四五十人はゐるそうです。この町には、田丸と、三好といふ書店が二軒ありますが、どちらも競爭的に早く雜誌を注文してくれますので、みんな喜んで居ります。靜江姉さんは、少女倶樂部の愛讀者です。私などは思はず知らずに、少倶や幼倶を讀まされるやうになりました。毎日、事務がすんでから有益な肩の凝らない幼年倶樂部を讀むときは、一日の疲勞もスツカリ忘れてしまひます。そして自分もまたあの天眞爛漫な子供に若返るやうな氣持になつてしまひます。此間、五つになる弘子までも、『わたしは幼年倶樂部の愛讀者よ』といつて、お隣りの奥さんを笑はせました。私共、一家は皆揃つて御社の雜誌の愛讀者で明るい家庭に滿たされて居ります。

末筆乍ら記者皆樣の御奮闘をお祈り申上げます

福島縣石川郡　矢吹源八

前略

人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまよひぬるかな。

『幼年倶樂部はどの雜誌よりも一番よいのだ』と、寢ても起きても嬉しい〱とよろこんで小踊りしてゐるのでございます。よそ目ながら可愛くて、涙が出る樣です。娘は今年十一歳で尋常四年生ですが、成績がよいので優等生です。これは全く幼年倶樂部のお蔭であると感謝して居ります。

東京府北品川　川上靜子

私の子供は唯今品川小學校の二年一組の男生ですが、御社の幼年倶樂部を購讀してからまだ十ケ月にしかなりません。昨年の學業成績はあまり目立つ程でもございませんでしたが、本年になつてからは、算術も國語も上成績で、中でも讀方の時間にはいつも先生にほめられるさうです。そんな話を聞かされる度毎に、親の情としてこんな嬉しいことはございません。子供も幼年倶樂部のお蔭だと申して居ります。それにしてもこんなに有益な雜誌がタツタ四十錢とはいかにも安いものだと、つくづく感謝の涙がこぼれます。

〔記者〕お子樣を愛せらるゝ御家庭で、まだ幼年倶樂部の入つてゐないお家は、ないと信じます。その普及は實に驚くばかりです。こゝに掲載した樣な、感謝的の書狀は日々夥しき數に達します。小學校にお通ひのお子樣方には、最も良い課外讀本としておすゝめ致します。



探偵冒険 七妖星

保篠龍緒
齋藤五百枝畫

襲撃の襲撃
百萬圓の寶玉

慘忍の假面を妖艶な白粉に包んで、媚態纖手、男という男を活殺自在に操つる石波艶子が、『慘殺された女優の魂の涙にぬれてゐる此の室で、さあ、話せ!』と脅迫された位で、おめおめ苦心の秘密を白狀する程初心ではなかつた。

そんな感傷的な文句に動かされるには、彼女の豐滿な肉體の中に包まれた心が餘りにも慘忍と不敵さとに蝕まれてゐた。

が然し、彼女は好奇心が、白面純情の青年品川に對して異常の興味を呼んでゐた。恐らく彼女自身の心の底の何物かゞ快青年品川の持つ男らしさに引つけられてゐたのかもしれない。

『頼しいわ、愉快な力だわ。なんのこんな大學出の子供が……でも話したつて構はない……好いたらしい男だから、話しちまはう……そして邪魔になつたらなつた時の事にしてやらう』

艶子はそんな事を考へて居た。殺人、強盗、目的の爲には手段を選ばない彼女である。と同時に好いたな! と思ふと同時に妖艶な熱情が湧く、彼女である。

男性的な、純情な彼品川隆太郎の腕に抱かれた事が今日までに一度、妖婦艶子の心の奥にはたくましい青年の腕に抱かれた

あツ探い感觸がまざ〳〵と殘つてゐた。好いたらしい！　と思ふ彼女の心はその感能に刺激されてゐた。

『話せツ！　早く』

品川隆太郎は彼女の斯うした內心を知る由もなく、唯單に彼女が秘密を打ち開け兼ねて躊躇してゐると思つた。

『話すわよ、そんなに急かなくたつて……では手取り早い方がいゝわね、こんな話は筋だけで片付けてしまひませうや』

彼女は捨鉢らしく談り出した。

『細かい事は省略して本題に入るわ。……別に長くもなければ、複雜でもゐないんだから……丁度今から卅七年前、明治二十五年、東小路行輝の先代輝正が京都嵐山の自邸で病氣になつて重態に陷つたといふ時、一乘寺の老和尚が馳けつけて來て、人拂ひをした上で、一時間餘に亙つて何事かひそ〳〵と話し合つた。そして和尚が歸つた後子爵の枕元には小さな包がおいてありました。……それから四日許りして子爵は死んでしまつたんですが、丁度その當時、先日殺された行輝はまだ十位の子供で、後見は小笠原重光がしてゐたんです……では、先代の輝正子爵が死ぬ時、小笠原に向つて、「行輝が一人前になつたら一乘寺の和尚の處へ行つて話を聞け」と傳へるやうにと遺言したんです……』

『フーム』と品川がいつた。『その包には何があつたんだ？』

『包の中には軸が一本と、風鎭が三組と妙な白い玉と、青玉七ツ玉の根掛一くさり、あつたさうですわ、……けれども、子爵の歿後家財整理の時に軸も風鎭も根掛も賣つて仕舞つたんですつてさ……』

『一乘寺の和尚はどうしたんだ？』

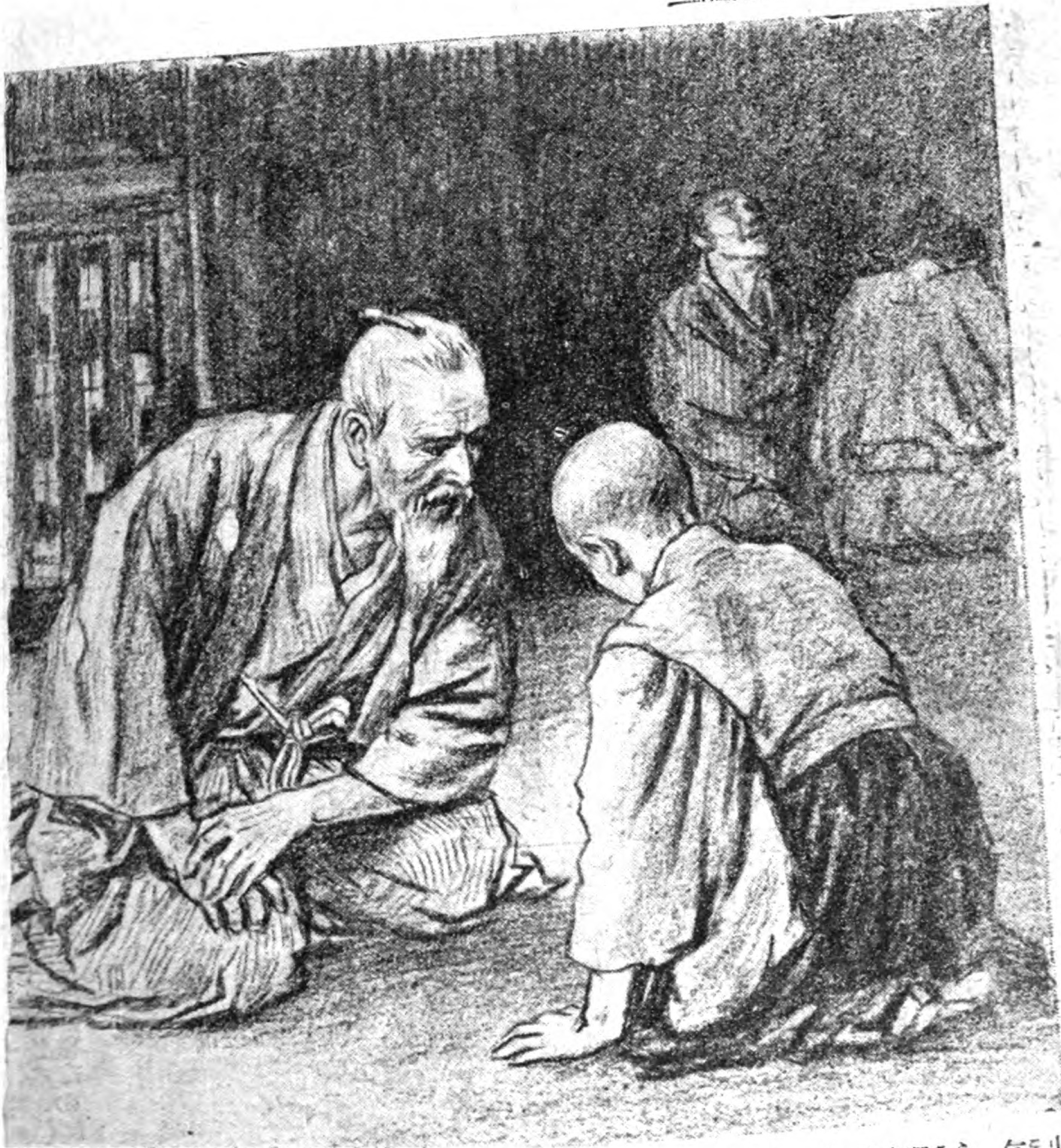
『一乘寺の和尚はそれから三年許りするところり、腸チブスで死んでしまつたのよ……』

『すると？……』

『死んでしまつて種なしになつた樣なもの、……』と艷子は暗誦するやうな口調で繼けた。『和尚が死に先立つてその秘密の大要を寺の秘錄に書き殘しておいた事が解つたんです……それはね……』

艷子はぢつと品川の顏色の動きを見守りながら一乘寺の和尚の書き殘した記錄の大要を話し出さうとした時、コトリ奧の方で輕い音が忍びやかに一度ならず二度、三度起つたけれども話に夢中になつてゐる品川の耳には入らなかつた。

『和尚の書き殘した話といふのは大體斯うなのよ……丁度文久三年の七月に新選組が大阪へ行つた留守の中に、藤本鐵石といふ人達の天忠組が京都佛光寺高倉の八幡屋卯兵衛を千本西野へ引ばり出して首を切つて、三條の橋へ晒し「大和屋庄兵衛及び外商三名の巨商も同罪たれば晒すべし」と捨札を出した事があつたんですとさ、その大和屋庄兵衛といふのは外國とも交易をしてゐて大變な金持だつたんですね、……で大和屋は驚いて板倉筑前介つて人に賴んで朝廷へ一萬圓を獻じたり、藤本の天



忠組へ軍資を出したりして一生懸命乞ひをやつたんですが、それが大阪から歸つた新選組の耳へ入つたから、芹澤鴨つて人が憤慨して八月十三日に大和屋へ押かけて金を出せつていつたんだけれども、大和屋が出さなかつたから、大砲を引張り出してドン〱打ち始めて大和屋の燒討をはじめたんです……そんなこんな事のあつた時、一乘寺の和尚はまだ小坊主だつたんですがね、當時京都の六角の牢屋に勤王方の人達や何かが一杯入れられてゐたんで、小坊主だつたその和尚がその人達の世話をしてゐたんです……處が、大和屋の燒討があつた翌々日長州と會津とが喧嘩を初めて、三條、三條西、四條、東久世、壬生、錦小路、澤なんて七卿落が起つたんですが、その時には公卿も浪人も町人も十把一からげに、捕つて殺されたり、牢屋へ投り込まれたりしたんですつてさ、……以上が秘密の話の發端、前書きなんですよ、

「ホ、ホ、ホ、、、」

すつかり落付を見せた妖婦石波艶子は輕く笑つた。

『フーム』

品川隆太郎も引き込まれて思はず太息も洩したが、どうやら多少最前の緊張味が拔けて來たやうだつた。

石波艶子は尙ほ語りつゞけた。

『血なまぐさい京の町々、維新の大騷ぎの渦に捲き込まれて京六角の獄舍には罪の人、無辜の人、明日知らぬ命を抱へて一杯積め込まれてゐましたが、その中で品のよい一人の老人が、姓名もいはず、調べも受けず、冷たい死の牢獄の中に默々として呻吟してゐました。當時小坊主の一乘寺の和尙は、妙に此の老人が好きでたまらなく、なつかしさすら抱くやうになつて、冷たい獄舍の中へ行く度に何かと此の老人をいたはつてやつてゐました。さうかうしてゐる內に七月十九日の朝、蛤御門や堺御門の戰について燃え出した京の兵火は京の町々を赤い焰の舌で嘗め初めたが、その折も一乘寺の小坊主は六角の獄に來てゐて、何かと手傳をしてゐたさうです。すると夜になつて火は次第に此の牢舍の方へ近づいて來る、牢內は次第に騷がしくなり、中にゐた人々を片端から首を切り初めるといふ物凄い生き地獄が始まつたのです。小坊主は、あの穩なしい老人も殺されるのかと思ふと、たまらなく悲しくなつて、騷ぎを幸、老人の處へ知らせに走りました。

「老人は今夜殺されまする」と老人が初めて落付いた聲で小坊主にいひました。「御坊」と老人はやゝ力の籠つた聲で再び口を開いた「俺は名も身分も知られずに今一時の後には首を切られてしまふ、それは俺の



望む處で、今更、御坊に後世を弔つて頂かうとは思はぬが、然し、御坊、獄中は特に、此の老人に、一方ならず、御目をかけられた御芳志、老人、身にしみ〴〵と有難御禮を申上げまする。が、それについて、御坊、老人の身はこゝに死んでしまつても構はぬが、唯つた一つ、死なしてならない大きな秘密を胸に持つてゐる。で、今それを御坊に御願ひするから、御坊、老人が一生の御願として御聞とゞけを願ひ度い……
……」

さういつて老人が小坊主の耳に口を寄せるやうにして語り出したのが、今度の大秘密なんです。

「御坊」と老人が尚ほいふ事には、

「俺は東小路家にゆかりの者ぢや、御坊も御承知の八幡屋卯兵衛が殺されて間もなく、大和屋庄兵衛が、板倉殿を通じてひそかに東小路卿の袖にすがり、いろ〳〵と朝廷の御爲めに盡した事から、大和屋はいたく東小路卿の徳を慕ひ、或る日、ひそかに東小路卿を訊ねて、(私は何の罪もないが金があるばかりに、そして又異國と交易を





してゐたといふばかりに、天忠組なり、新選組なり、その外の方方から目をつけられてゐまする。私の命ももう長い事はありますまいが、私が多年集めた寶や金や、それをむざ〳〵と彼奴等の手に渡し度うは御座いませぬ。死に行く私には寶も金もいりませぬ。これを皆、貴下様に差上げますれば、何卒貴下様の御手で立派に使ひ生かして、天朝様の御役に立てゝ頂き度う御座います)といふ申出で、東小路卿も驚かれたが、大和屋が命にかけての頼みに、それを引受けられる事になり、金は十萬兩あまり、朝廷に納められて、夫々の向に――無論七卿の手にも渡つた事ではあつたが、その外に大和屋が異國と交易をしてゐた時手に入れた寶石、金剛石とやら夜光石とやらいふ外に樣々の珍らしい寶石類が金に積つて百萬兩といふ、それを東小路卿に供進された。東小路卿も一時は途方にくれられたが、それを或る場所に隠される事になり、大和屋とも相談の上、鋼鐵の箱に納めて、京の奥にひそかに埋められました。がその場所は謎の言葉に隠されて、それを此の老人に預けられました。といふのはその内に東小路卿の身邊も危くなられたからぢや……が預かつた老人の身にも公儀の眼が光り出したので、俺はその品をある場所にかくしました。隠して間もなく老人は捕はれの身となり、今日は最後といふことになつたのぢやが、御坊、御願ひぢやから、老人の身に代つてその寶を保管して下さるまいか。寶石を埋めた場所の謎を記したものは軸一本、風鐸三組、白玉一箇、根掛一聯とそれだけぢや、これを合せ見れば百萬兩の寶石を埋めた秘密の場所がわかる。これを、どうかして東小路家に傳はるやう、御傳へ願ひ度い。これが老人、最後の願ひぢや……」と老人は一乘寺の小坊主に秘密を傳へて、その夜遂に殺されてしまひましたのよ。で小坊主は、その後一乘寺の和尚になり、秘密の謎を秘めた品々を取り出して、東小路卿の家族を捜し出し、さて、それを傳へようといふ時に、前



に申上げたやうな始末になつてしまつたのよ。だけれども、知らぬ事とは知りながら、肝心の謎の言葉を傳へる寶物が古道具屋の手に渡つて、行衞が知れなくなつてしまつたんですもの、困るわ、……それが今度の事件を生むやうになつたのよ……』

『ぢやあ、行衞子爵も、小笠原も、この事は知つてるんだね』

『無論よ。何しろ百萬圓の寶石は素晴しいわよ。だから一生懸命に探してゐるんだわ……』

『フーム……』と品川は妖婦石波艶子の話を考へた。が、彼女の話だけの筋では、まだ彼には安心が出來なかつた。一通りの筋は立つてゐる。が、何處かに筋の通らない處がある。この物語の裡に、彼等、小笠原が、石波が命をかけて奪ひ合ふ裡に、まだ大きな秘密がなければならない。いや、あるやうに思へる。さうでなければ、東小路子爵が代々木で殺された時に「恐ろしい秘密だ、恐ろしい犯罪だ、この秘密さへ解れば、私の仇はとれる、敵は自滅する」と叫ぶ、筈がない。

何かある、秘密が……此の物語の影にかくされた第二段の大秘密と、恐ろしい犯罪があるに相違ない。これは？……と品川は考へ出した。

　その時、石波は手にしてゐた手巾をヒラリと床の上へ落した。彼女は無雑作にそれを拾ひ上げるべく身を曲げた。と同時に、チラッと上目使ひに品川の顔色を窺つた。品川は傍見をしながら、石波のゐる事すら忘れたやうにヂッと何やら思案してゐた。

　突嗟！　艶子の手は手巾を拾ふや否や、敷物にかゝるとグイッと力一杯、敷物を引張つた。

『アッ！』

と叫ぶ間もなく、不意に立つてゐる足元の敷物を引かれて、不意を喰つた品川隆太郎は足を空にバッタリ仰向に倒れた。石波の身體は飛鳥のやうにサッとはね上ると等しく入口に向つて飛んだ。

『ウヌッ！　逃げるかッ！』

美事に不意を突かれて倒れた品川はガバとはね起きて艶子を追ふ！　バタンと扉の閉る音、カチリと素早く鍵のかゝる音。入口の扉は外から閉められた。

『フン。逃げやがつたか、それにしても……』

残された二人の團員がゐる。それを叩いて秘密を掴んでやればいゝ。

　品川は安心して引き返して、女優佐々木百江の様子を見るべく、寝室の扉を開けた。

『アッ！』再び彼は叫んだ。

女優の姿が見えない。

見ると右側の窓が開いてゐる。彼は窓に走つて外を見た。

バタ／＼と窓の下から走り去つて行く怪しの人影。

『女優はさらはれた！』

瞬間に直覺した彼は窓からヒラリと裏庭に飛び降りた。そして怪しい男の姿を見失はじと一生懸命に走つた。

男は低い生垣を飛び越えた。續いて品川も生垣を飛び越えるや否や、

『ワッ！』

三度叫んだ彼は通路にバッタリのめつた。飛び越えた瞬間に地上へ引いてあつた數本の針金に足を取られたのだ。

『しまつた！　謀られたッ！』

と起き上らうとする處へバッと三人許り組みついて來た。

『糞ッ！』

寝ながら足を上げて一人を蹴倒した。と同時に右手から來たのを、グイッと手元に引いておいて、その力を利用して、相手を組み伏せながら、敵の上になつて起き上らうとした。が、下の奴が組みついた手を離さない。

　ふりほどいて飛び起きようとする手へ第三の男が組みついて來た。

『何ッ！　エイッ！』

強引にかけて振り飛ばすと同時にガン！

後頭部へ激しい一撃を喰はされた。

『ウームツ！』喰つてバツタリのめつて仕舞つた。

氣がボーツと遠くなる。手足を押へつけられるやうな感じがしたが、そのまゝ昏倒してしまつた。

黒い影が四人！ 闇の中で素早く品川隆太郎を擔ぎ上げて走つた。

やがて自動車の音がする。

自動車の音が遠ざかる頃、庭の片隅からボツと艶子の白い顔が浮び出した。

『チツー 女優をさらつて、品川まで攫んで行きやあがつた……が、今に見ろ！』

彼女はこそ〳〵と家の中へ入つて行つた……（つゞく）

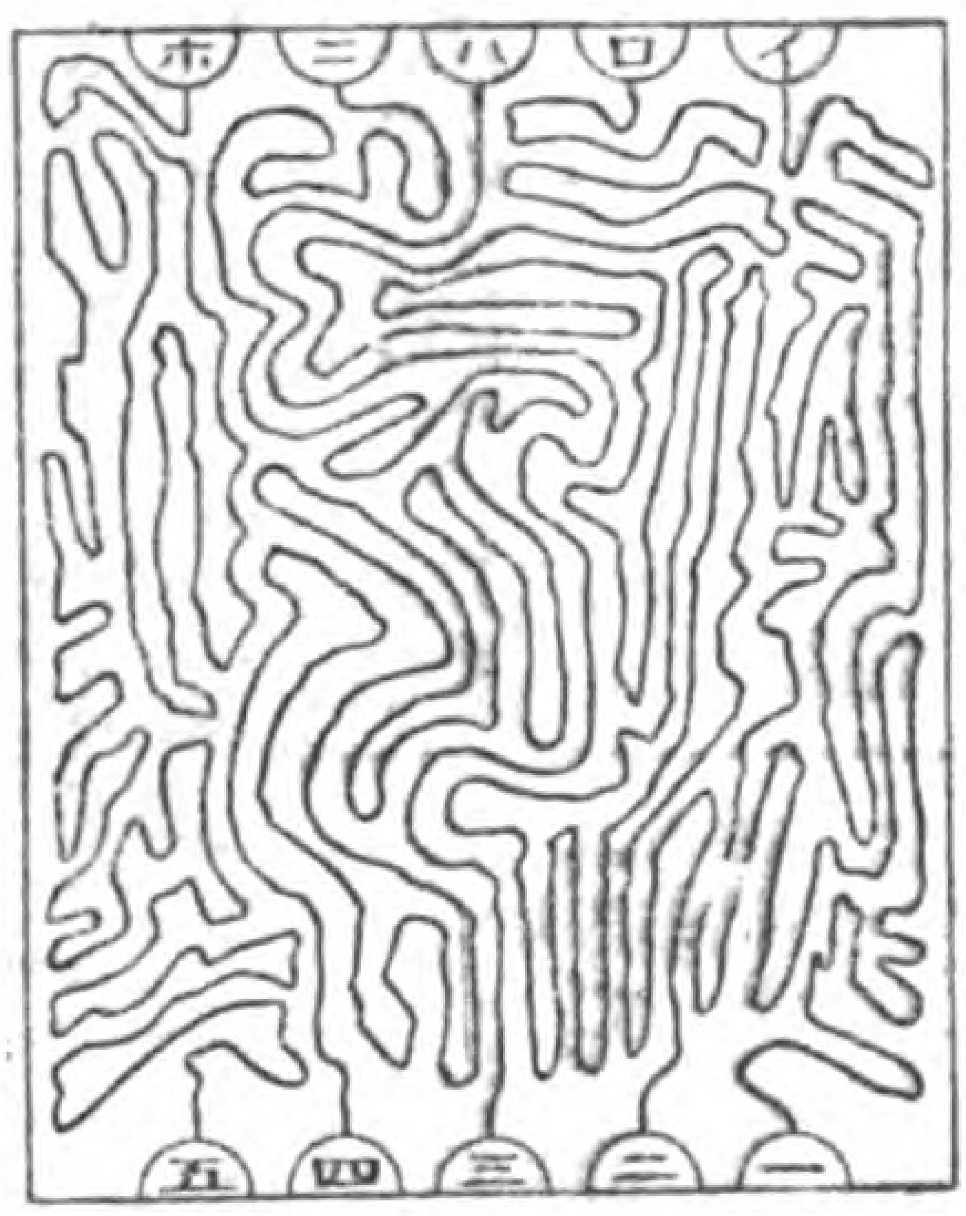
面白い家庭遊戯



◇どちらが切れるか

太い糸で石を縛り、それから上下に細い糸を結び、下方の糸を靜かに引くと下が切れ、急に引けば上の糸が切れる。友達に何ちらが切れるかを言はせて、當たらぬ様に手加減して糸を引張ると面白い。（佐伯光雄）

◇何處へ行く！



イ、ロ、ハ、ニ、ホを出發した五つの線は何處へ行くでせう。但し各線は決して交つてはゐません。（横森正明）

◇數字電報

郷里から『八八八六八八九五一』といふ變な電報が來ました。何の事だか分らないので仕方なく横町の物智な隱居の意見で取り敢へず次の様な返電を打ちました。『五六八一四八三四六九。一三一二三』

皆さん此二つの電報の意味が判りますか。

答（著電＝母病む早く來い。
返電＝今夜醫者さし向く、委細文）

（上野多門）



無名の勇士

田中總一郎
神保朋世 畫

稻葉伊豫守の本陣へ、見るからに逞ましい一人の士が捕はれて來た、

『何としたのぢや。』

伊豫守は、自分の面前へ連れて來られた捕人をいたはる樣に見た。

『──殿の御命をつけねらふ敵の忍びの者にござりまする。』

『予の命をねらふのか。──はゝゝゝ』

捕人は、高らかな伊豫守の哄笑をきいて、齒をくひしばつた顏をぐつとあげた。

『直ちに斬りすてまする。』

繩尻を持つてゐる士はさう云つて、引つ立てようとした。

捕人は、その時、わあツと、聲を上げて泣いた。

『待て、待て。──其方、何として泣くのぢや。命がをしいか。』

『ええいツ！うるさい。何で命が惜しからう。命惜しうて泣くのではない。命あらば、一太刀なりとも恨むべきに、斯くなり果てるのがくちをしいのぢや。』

『──おのれ。殿に向つてその雜言……』

『待て、待て。──よく申した。伊豫守も武士の情は知る。氏素性も聞かず、この場から、その方を逃がしてやる故、折があらば何時にても、この伊豫守に、恨みの太刀を向けよ。──繩をといてつかはせ。』

そのまま、伊豫守は奧へ入つてしまつた。

──それから、星霜八年經つた。

稻葉伊豫守は老いて病の床にあつた。

『──殿、殿の御命をつけねらふ怪しき者を捕へました。』

『さうか。──これへ召つれえ。』

捕人は、病室の庭先へひきすゑられた。

『お、その方はいつかの男ぢやなう。未だに、予の命をねらつてゐるのぢやな。』

捕人は、默然としてゐたが、又して、聲を上げて泣いた。

『今度こそは、命惜しうなつたなう。』

『命惜しくば、この心願、とくの昔にすててゐる。己息ある中に一太刀恨まんとしたるに、病重しと聞いて口惜しいのぢや。』

『天晴れ健氣な申樣ぢや。――よし。さらば今一度、助けとらせる。この伊豫守は、まだ仲々死なぬからなう。』

然し、捕人は、再び追放された。それから間もなく、伊豫守は、病革つて沒した。

『――いつかの刺客はどうしたらう。』

『二度までも、なき殿のお情をうけながら、口では大きなことを申してをつたが、あれはやつぱり、命惜しみの臆病士ぢやつたのぢやなう。』『さうだ、それに相違ない。』

二度の出來事を知る家中の者はそんなことを言ひ合つてゐた。

葬が濟んでから三日目のことだつた。

人影のたえた暮れ方、菩提所の眞新しい墓のあたりをうろうろしてゐる立派な士があつた。

彼は、伊豫守の墓を捜しあてると、暫らくの間は茫然と立ちつくしてゐた。

やがて、彼は墓前に、ぴつたりと跪いて丁寧に頭を垂れた。

彼は泣いてゐた。

『――某今日まで惜しからぬ命をながらへたるは、たとへ一太刀なりとも、君を恨み申さんと、この口より大言吐きたるためでござりまする。前後十年、某は、一身を忘れ、この心願を全うせんとつとめたるも仇となり、遂に、今日に至りました。君没せられると聞き、既に大事の去つたことを、今更ながら口をしく、亦、我と我身の不甲斐なさを、つく〴〵知り申した。今日に及び、尚、某、命を全うして生き長へれば、一度ならず二度までも、刑死にのぞんで泣きし某の泪は、やはり命をしき故と心なき人の嘲をうけんも口をしきことでござる。――某の心は、某のつけねらひし君こそ、一番よく知つて居られませう。二度まで御助命にあづかりしお禮には、かくの通りでござる。』

――覺悟定めた彼は、白無垢の襟おし廣ろげ、美事に、切腹して果てた。

この不思議な勇士は永遠に無名の人として埋れてゐる（完）





萬花地獄

吉川英治
伊藤彦造畫



牢脱けの名人

靜に二階へ上つて行つた文吉と平治が、そつと部屋のうちをのぞいて見ると、三日之助は肘枕で長々とそこに寢そべつて居た。

『もし。もし……親分』

二人が低聲で輕く肩をゆすぶると、三日之助はすぐさめて、大刀をかゝへたまゝムツクリと起き直りながら、

『お、平治に文吉か。して何うだつた、今日の樣子は？』

と、待ちかねてゐたやうな口吻だつた。

『今日も大學は、水野家から酒井、阿部、土屋なんて老中の屋敷を廻つて、そのしまひには大川の五明樓で水野の側用人と密談をして、御殿山へ歸つて行きました』

『ふーむ、それぢやおれの想像どほり、萬花多寶塔の黄金を山わけする約束か何かで、うまく水野出羽守を抱き入れて、天領お預りとなつてゐる御代崎一萬石の後釜に坐らうといふ大學の計畫なんだらう』

『その手廻しも、今日あたりの樣子では、だいぶ調子よく運ん

で居やしないかと思はれるんで』
『……とすれば猶ほの事だ。これから先は半日でも奴等の行動から目を離さないやうにしてゐてくれ。何しろ、九江の自由を大學に抑へられてゐるのだから、ぼんやりしてゐると、何日多寶塔の秘庫を開けられて、こつちが飛んだ馬鹿な目を見ないとも限らぬからな』
『ぢや明日からは、御殿山の方を主にして、充分見張りをつけておきませう』
『また何か變つた事の起つた場合は、すぐこの岩床の二階へ知らせを飛ばせてくれるやうに。おれは四五日の間、かうしてここに寢ころんで居る。……で、大學の方はそれで分つたが、小枝角太郎たちの噂は何も耳にはいらないか』
『それがです――』と、平治に代つて、こんどは文吉が膝を前にすゝめた。
『かうして流しの聲色屋に姿を變へて、深川の櫓下、幸安の家の近所、飛車兵衞とお妻のおやぢが住んでゐる三味線堀の近くなどを、隨分それとなく探つてみましたが、角太郎もお吟もそのほかの者も、一人も江戸に歸つて來てゐないのが不思議でございます。あつしの考へぢや、角太郎や飛車兵衞は、あのまま信州から歸らずに、まだ旅に居るのぢやないかと思ふんですが』
『さうかも知れない……』と三日之助は拱んで居た腕を解いてさう言つたが、
『然し、大學達が江戸表へ移つて來たのを角太郎が知らないといふ筈がない。それだのに、さつぱり姿を見せないといふのは、なる程、てめえのいふ通り、こいつは少し不審なわけだ』
と、彼の冷徹な眸が行燈の灯を見つめて、何かジッと考へこんだ。
その時、みしり……と梯子段のきしむ音が油斷のない二人の目を、じろりとうしろへ光らせた。
そこに、こつそりと足音を偸んで上つて來た床岩の顔が見えた。彼は、いやに聲を沈ませて、
『三日之助様、少しの間、靜にしてゐておくんなさい。町廻りが……』
と、指さした。
『なんだ?』
『今、何氣なく小窓に顔を出してみると、町廻りの提灯を持つた役人が、迂散くさい風をして、長屋の裏をうろついて行つたやうですから』
『ふん、また小役人の詮議だてか』
床岩が生唾をのんでふるへてゐるのにひきかへて、三日之助はかう言つて笑つた。
『だが併し、この家に迷惑をかけては氣の毒すぎる。平治も文吉も、話はこれで濟んだやうなものだから、隙を見て今夜は歸つてくれ』
『ぢやあ』

と二人は床岩に挨拶をして、ふところから草履を出した。

そして用意ぶかく、梯子の口から降りずに、二階の窓から物干へ出て、屋根づたひに姿を消さうとしたが、そこの雨戸を開けた途端に、

『御用――ッ』

耳を衝ツた聲と共に、鳴をひそめてゐた人影が、十手を兇めかせて暴風のやうに家の中へ躍り込んだ。

凄まじい音がした。

轉げ落ちるやうに階下へ降りた床岩は、店から飛び込んで來た町役人に抑へられて、何か意味のわからないやうな聲を揚てゐた。

ふッと、三日之助が灯を吹き消したので、二階は一瞬に闇だつた。彼は、少し片隅に身を屈ませて、刀の提げ緒をつかんだまゝ、少しも慌てる風がない。

『えい、うるせえやつだッ』

平治と文吉が、匕首を拔いて、二三人の捕手に傷を負はせたので、梯子を上りかけた者も、物干の上にむらがつた捕方も、暫くは中の闇に二の足を踏んで、たゞ、瀬踏みの十手をうごかして見せるのみだつた。

その間に、悠々と支度をして、三日之助は表の屋根へ足をふみ出してゐた。百足虫のやうに棘の立つた二三本の袖搦みは、何の役もなさず、彼の振る大刀の下に斬つて捨てられた。

屋上に立つて四方を見ると、土樋の袂から近くの露地口には、もうみツしりと町方の提灯が廻つて居て、所詮、逃げる隙間はないやうだつた。

裏手の廂の下には、捕方の喚く聲がうるさく十手や袖搦みをうごかしてゐる。が――三日之助は耳にも入らないやうな様子で、うしろに立つた平治に向つて、

『可哀さうに、床岩が繩にかけられたやうだから、お前が尾いて行つてやつてくれないか』

と言つた。

菖蒲平治は牢脱けの名人といはれた男だつた。嘗つて、深川の船蟲牢へ捕はれた吹矢の莊八を、その隣りの牢に於て、苦もなく救ひ出してやつたのもこの男だつた。

『よろしうございます。一緒に尾いて行つてやりますから、どうか御心配なく』

『頼むぜ』

言ひ殘すと共に、三日之助と文吉は、ヒラリと屋根づたひに走り出した。

それを見つけて、下の影がドッと雪崩れ出さうとした時、平治はわざとむらがるなかへ、自分からぽんと飛び降りて、三日之助の逃げ終るまで、たゞひとり匕首を振つて、目にあまる捕手を翻弄してゐた。

不思議な非人

一年あまり住む者がなく、空き屋敷になつて荒れてゐた御殿

山の紅門寮も、この秋になつてまた人氣のある灯がともり初めた。

生ふがまゝのびた袖門の秋草も刈られて、時折そこを出入りする侍を見かけるやうになつた。そればかりか、或る時は貴人の微行らしい塗駕がおとづれ、ある夜は、あの憂暗な奥の離亭に、酒宴の聲さへ聞くことがある。

司馬大學は、こつそり江戸表へ歸つて來てゐた。

一味の浪人をつれて、彼が江戸へ出て來たのには、何か深い目的があるらしい。彼は、緣故のある老中水野の紹介をたづさへては、この間うちから頻りと閣老や幕臣の權門をおとづれ、音物その他の手段をつくして、何かの策動をやつてゐた。

陣代の職を剝がれて、今では、一介の浪人にすぎない大學であるが、彼が何よりの强味とたのむところは、幕閣の權勢家老中出羽守と血緣の家すぢであることだつた。

邪智にたけてゐる彼は、以前から、その親戚の權勢家を利用することを忘れなかつたが、こんどの出府には、全力をあげて出羽守に取り入ることに努めた。そして遂には、御代﨑陣屋の萬花多寶塔の秘庫をひらけば、そこに百萬兩にも値する甲州黄金の竿金が埋藏されてあるといふ秘密までを打ち明けた。

幕府の御用金座を傾けてもその數字には及ぶまいと思はれる莫大な黄金の力にうごかされて、出羽守も緣類の者ではあるので、ひそかに大學と或る密約を結ぶに至つた。

その密約は、まつたくの密約であるので、後の御代﨑記録にも御粁城の秘書にも、どういふ内容であつたか知る手がかりが殘つてゐない。

たゞ花又三日之助の想像をもつて言はせれば、多寶塔の秘庫がひらかれた曉には、その中に埋藏されてある甲州金を出羽守と大學と二人で分配するといふ約束だつたらうといふ事になる。老中以上の野心もあつたといはれる出羽守である。權勢家は常に慾望家ときまつてゐる。或はさういふ密約だつたかも知れない。

その密約の内容は不明にされてゐるが、大學が持ち出したその時の交換條件はハツキリしてゐた。それは今、天領假政治の布かれてある御代﨑一萬石の後役を自分に振つてもらひたいといふことだつた。

彼の目的どほりにゆけば、婉曲なる駒木家の横領であるが、いつたん天領お預りといふ名目のもとに公收した領地であるから、出羽守もうなづいた。

で、有力な幕臣の間に、大學の暗中飛躍が初まつたのである。老中出羽守の默認を先にとつてしてゐる事なので、誰も阻めるものはなかつた。或る時期に、一片のお墨附に將軍家の御朱印がピタリと一つすわればそれでいゝ迄に、すべてが彼の思わくどほりに進行してゐた。

『人間の運といふものはかうしたものだらう。凶事におびやかされる人間はどこまで凶事に見舞はれる。惡であらうが何であらうが信じてすゝむ望みには吉事に吉事が重なつて來る』





心で北叟笑みをもらしながら、彼は御殿山の芝をぶら〳〵踏んでゐた。うしろには二人の浪人と、光江が俯向きがちに尾いてゐた。

『光江、お前もすこし浮いた顔を見せたらどうだ。いゝ氣持ではないか。品川の海が紺色に見える、白帆の數もかぞへられる、もうやがて海安寺の紅葉見の客で、この山も人が雜沓して來るだらう』

と大學がしきりと散策の氣分を移さうとしたが、光江は無口であつた。さうかと言つて、昔のやうに憂鬱な涙をうかめてはゐないが、冷然とした眸だつた。親しまない唇だつた。

それに、淺い櫻紅葉の下をチラホラ歩いてゐる雅人もある。赤い暖簾をかけた腰掛茶屋も幾軒か出てゐる。それらの人目にふれるのが光江の心を暗くした。かうして散策してゐる所を見れば、だれの目にも彼女は大學の妻としか見えない。また大學が彼女を連れあるく態度が妻といふあしらひである。

『私はもう歸らせていたゞきます』

彼女は耐へきれないでさう言つた。

『歸る？』

大學は鷹揚に足を止めて、

『まあ、もう少し歩いてはどうだ。あまり屋敷の奧にばかり籠つてゐるのはよくあるまい』

心の何處にそんな思ひやりを持つ人間か――と光江は訝いてやりたいやうな氣がした。

そこへ、邸から尋ねて來た久米段之進が、大學の姿を見て驅け寄つて來た。そして何かさうさゝやくと大學は笑顔をくづして、

『……ウム、御微行で？ してお使に見えたのは用人の田丸左膳樣か。よし〳〵、では自分は今すぐに引つ返すから、傳八郎と計らつて、萬事粗略のないやうにもてなして置いてくれ』

と答へて、段之進を歸すと、連れてゐる二人の浪人へ向つて、

『聞いたとほり、來客がお待ちの樣子、自分は邸へ參るから、其方たちはこゝに居て、彼女の……』と、光江のうしろ姿を目で指した。そして、言ひふくますやうに、

『よいか……暫く番をしてゐてくれ。そして、田丸樣との密談がすむまでは、なるべく此處に居た方がいゝ、彼女が邸に居らぬ方が都合がよいから』

獰猛さうな二人の浪人は、鐵製の人間のやうに、默つてうなづいて、默つて光江の側へ寄つた。

光江とその見張を殘しておいて、大學はスタ〳〵と紅門邸の見える牡丹畑の道を引つ返して行つた。

光江は振向きもしないで、靜に足をはこび出した。大學が自分の身近くから去つたと思ふと、袖をふく風までが、俄にさわさわと感じられた。

だがその歩みも、漫然とあてがないので、やがて側わきにたいてゐる浪人が言つた。

『光江樣、少しの間、そこに見える茶店にでもお休みになつて

はいかゞですか』

『……』

光江は、答へるかはりに、默つてかぶりを振つて見せた。

だが、そこの丸い山芝の丘をだら〳〵と降りた時、彼女は急に足を竦めて、今の茶店へ寄らなかつたことを後悔した。幾つもの葉山を寄せたやうな窪地に、一人の非人が酒菰を被つて落葉のなかに俯向いてゐたのである。髪と額とを包んでゐる煮しめたやうな手拭の蔭から、ジロリと白い眼が彼女に向つて射られた時、光江は思はず足を回して、通りすぎたばかりの茶店の軒下へ、逃げるやうに戻つてしまつた。

不意の通り魔

『お散歩ひでございますか』

茶店の女が、盆にのせて來た櫻湯をとつて、彼女はやつと輕い動悸がしづまつたやうな氣がした。

やはりあの非人だ。あの非人に違ひない。

これで幾度あの氣味のわるい姿を見るのだらう。あの非人の不思議なことには、ほかの者の目にはふれないで、自分だけに見えるやうな氣がする。

——さう思ひながら光江は、その非人の姿を見た場合を心のうちで思ひ出してみた。

草津峠から江戸表へ來る途中、上州の何やらいふ宿場の路傍で、籠の中からチラと見たのが最初であつた。それから、紅門家へ送りこまれてから、或る時、ふつとさし覗いた窓の下に居たこともあるし、風呂場の裏でもその姿を見かけてギョッとした夕方がある。

侍部屋の殘りの飯でも貰ひに來るのかと思つたが、あの用心のきびしい紅門家へそんな者を許して入れる筈がない上に、彼女が寢られぬ或る夜などは、床下に小さな物音をさせて、ことによると、自分の部屋の縁の下にでも寢てゐるのではないかと、慄然としたことさへあつた。

その非人にまた會つたのである。

『女中さん、櫻湯を熱くして、もう一つくださいませんか』

『はい、お熱いのがよろしうございますか』

また新しい花の香りを湯氣に立てゝ持つてきた。彼女は、せめて香りにでも、氣味のわるい非人の眼を忘れようとした。

そしてすぐに立上りながら、尾いてゐる二人の浪人へ吩咐けた。

『茶代を上げてください。私はもう家へ歸りますから』

『いや、まだお歸りは早うございます』

と兩方から袖をつかんで、

『もう暫くこの邊に居れといふ大學樣のお吩咐けです』

『なぜ家へ歸るのが早いと言ふのかえ』

『御來客があつて、日の暮るまでは取混んでをりますから』

彼女の番についてゐる鐵製の人間然たる浪人は、斷じて、光

江の意志の自由をゆるさない。

光江は悲しみに負けなかつた。さういふ束縛には馴れてゐる彼女だつた。默つて、海の方へ目をやつて居た。

『こゝにお坐り遊ばして、品川の入陽をごらんなさいませ。羽田の沖、仙臺樣のお下屋敷、深川の洲の方まで、絵のやうに見えまする』

何も知らない茶屋の女は無意味に、憂欝である奥方をあしらふやうに、毛氈を重ねたり菓子のお皿をすゝめたりした。

彼女の根氣のいゝ服從は、やがて番の浪人の方から、催促される程だつた。

『日が暮れました故、もう來客もお歸りであらう、そろ〳〵塒へお歸りなされてはいかゞです』

茶屋の女も、店を畳んで歸り支度をしてゐた。黄色い櫻の葉が、薄暮のなかに秋の音をさわがせてゐる。

そこから塒の方へ歩み出すとすぐに、光江の心はしきりと自分のうしろへ囚はれてしまつた。――なぜかといふに、また例の非人らしい影が、茶店のうしろに見えたのである。

が――御殿山の見晴らしを上つて、まばらな松の樹が闇を濃くしてゐる所で振顧つた時には、べつに尾いて來る人影も見えなかつた

牡丹畑の藪の向ふに、灯のともつてゐる障子が見えた。微行の客を迎へたせゐか、今夜はいつもの夜よりも明りのさしてゐる部屋が多い。

その紅門院の生垣へ、もう十數歩の近くまで來た時だつた。

『わーッ!』

光江は自分のすぐそばで、はツきりとした人間のうめきを聞いた。途端に、どーんと仰向けに仆れる影を見たかと思ふと、

『やつ……おのれッ』

と、一方の浪人が、刀の柄を鳴らしたやうだつた。併し、それは柄に手をやつただけのものである、抜きもあへず、彼は何者とも知れない白刃の持ち主にその肩先から肋骨を深く割りつけられてゐる――。

それッきり、森として、何の音もしなかつた。

光江は何をする術も知らない。驚くといふ時間もない。不意に、自分の左右に立つた血煙りが淡い水粒のやうに吹き散るのを凝と見てゐた。

――と、前の冷寂な夜にかへると、すぐにあたりの草叢でチチと虫の音がすだきはじめた。

その時になつて、光江は初めて、ぶるツと五體の凍るやうな恐怖をおぼえた。そして、六七尺まへの夕闇のなかに、ぼやツとしてみえる一箇の人影を凝視した。

『おつ?……』

『光江樣――』

しは嗄れた聲がさう言つた。明らかに自分の名を呼んだのである、先刻、御殿山の中腹で行つたあの非人が――。

謎の人の本體

ものに怯がない光江も、水を浴びたやうになつて、白い齒なみが脣の微かなふるへを噛みしめてゐた。無意識のうちに、手は帶際をさぐつたけれど、大學の用心から常に懐劍を取りあげられてあるので、身に構へる寸鐵もない。

「誰ぢや！　そなたは」

守るのはひとつ、たゞ彼女の威嚴である。駒木一鳳石の息女のもつ冷智端麗な美の威光である。

非人は返答をしなかつた。いや、してゐる間がなかつた。

「おゝ！」と、向ふの明りを見た。水野家から微行で使に來たとかいふ田丸左膳が、今そこを辭して歸るのであらう。紅門寮の門のうちに、灯と人影がゆらぎ出した。

その隙に、光江は彼を捨てゝ走りかけた。

だが、五六歩とは走りもやらせず、非人の影が飛鳥のやうに跳びついて、彼女の體へ重なつた。

聲を立てようとした途端に、光江は、自分の足が地上から掠はれて、風を切つてゆくのに目が眩みさうだつた。そして、何を叫ぶまもなく、やはらかい木の葉の上に、どさツと體を降ろされた。

そこは、紅門寮から遠くは、ちやうど、寮の裏崖の下にあたる森林のなかに違ひない。

光江をそこに降ろすと、非人は、着てゐる酒薦をのべて彼女をそこに坐らせた。そして、忽然と影を隠した。

一時の驚きは懐疑に變つてきた。不氣味なといふ先入主がひどく彼女を驚かしたけれど、今の樣子では敵意のある者ではないらしい。

（いつたい今の非人は何者であらう？……いやそれよりも、なんで自分をこんな所へ連れて來たのだらうか？）

彼女にはどうしてもこの疑惑が解けなかつた。

するとーーやがて靜に木の葉を踏んで來る音がする。今の非人がどこからか戻つて來たのであらう。

不思議にも光江の心は、前には見るさへ忌まれた非人の足音が、今は近づいて來るのが待たれた。そして頻りに何者だらうかと思つた。

「光江樣、さだめし只今は、お驚きを遊ばしたでございませう」

非人は、そこへ戻つて來ると、彼女の前にぴつたりと兩手をついて、

「心無き業ではございましたが、是非のない場合とお許しを」靜で、い

んぎんな態度である。
彼女の耳には、どうしても聞きおぼえのない聲だつた。佇し、兩手をついてゐる非人の顏を遠くからさしのぞいて、
『あつ……』
光江は、仆れんばかりに吃驚した。
今、彼がそこを去つて、一時姿を隱したのは、紅門癆のあとの樣子を見ておくためと、鍋墨や膏藥を貼りなすつて、見苦しく作つてある容貌を洗ひ落すためだつたのか、姿はそのまゝだが、今日まで幾度も見た、あの不氣味な非人の顏とはまるでちがつてゐる。
彼女は、うれしさのあまりやぶれはしまひかと、自分の心臟を抱きしめて言つた。
『そなたは、小枝角太郎ではありませんか。オ、角太郎です！角太郎ですおまへは』
『光江樣、よう御無事を守つておいでくださいました』
沁々と言つて、角太郎はじツと顏を上げた。
『この夏の初めでした。あの草津峠の上で、無念のお別れを申し上げたのは……』
『さうです、もうこの秋風――夢のやうに三月ばかり過ぎました』
『夢ではございますまい、お姬樣の身になれば、恐しい現實の苛責。……でも、よくぞさうして御忍耐くださいますゐ。あなた樣が身に代つて下さらねば、この角太郎はあの無緣小屋の前で、自滅するよりほかに途のなかつたところでございました』
『それもこれも、お父上の爲ですもの。駒木家の爲ですもの』
常には、心を石のやうな冷智にもつて、どんな苛責にも涙をみせまいとしてゐるだけに、光江は今、ふと、凍りつめてゐる心が温いものに觸れたやうに、ぽろ／＼とこぼれる涙をこらへ得ないで、
『角太郎、おまへこそよく無事でゐてくれました。うれしく思ひます』
雨の睫毛に袖口を當てた。
『今、かうしてゐるもあなた樣の爲だと存じてをります。元より、駒木家のおために、この角太郎の一命はなげうツてゐる覺悟ではございますが、あの時のお優しいお情を忘れてよいものではございませぬ。――で、實は』
時折、竹林をくぐりぬける風の戰ぎに氣をくばりながら、
『草津峠でお別れいたした時、信州路へ下るとみせて、自分だけは他の者と袖をわかち、あれから上州路へおいで遊ばしたお姬樣の駕について、この江戸表に參るまで、見えかくれにお慕ひ申してゐたのでございます』
『まるで容貌が變つてゐるので、それが角太郎とは、夢にも氣がつかずに居たが』
『工夫をして顏を變へ、水銀をのんで聲をつぶし、さま／＼に大學共の眼をくらましてをりましたこと故、お氣づきなさらぬは尤もであつたのです。――そして、江戸へ着いてからも、悲

えずあなた樣の御身邊を離れたことはありませぬ。何か、不安と思ふことのある夜は、犬のごとく、お部屋の床下に寢てをりました』

『ま、勿體ない……』

彼の手をとつて、光江はそこに泣き仆れながら、

『ゆるしてください。おまへのやうな立派な武士に、そんないやしい苦しみまでさせて……』

『なんの』

彼女の嗚咽をなだめようとして、角太郎は強ひて輕く笑ひながら、

『これほどの事が、何の艱苦といふに足りませうや。オヽ、それはさうと光江樣、今日こそぜひ、とつくりとお胸に入れていたゞかねばならぬことがあつて、それで、かういふ無理な機會を作つたのです。何しろゆるりと話しては居られませぬから』

『は、はい……』

と、光江もやつと涙をふいた。

『ほかではございませぬが、近いうちに、司馬大學めが、また必ずあなた樣に向つて、萬花多寶塔をひらく解開の鏡のありかを敎へろと、力をつくして、責め立てるに相違ございませぬ。――その理由は』

と、角太郎はそこでことばを切つて、また、紅門寮の方の樣子に耳を澄ましました。

竹林に微吟する者

光江が歸らない上に、二人の番の浪人の死骸も見つけたらうから、紅門寮では定めし騷いでゐるだらうが、いゝあんばいに、まだこの裏崖の竹林へ明りを振つて探しに來る樣子もなかつた。

『――大學めの策動が功を奏して、近いうちに、彼は御代崎一萬石の代官に出世して、甲府へ下ることとなりませう。そして、老中出羽守との默約を果す上には、何よりもその解開の鏡がいるのです。幕府よりお役付の命をうけて領地へ參つても、御朱印の下るのは二年後が掟、もし、それが手にはいらねば、彼の出世も一時のものとなります故、こんどこそは、なんとしてもあなた樣の口を開かせずには措かない手段をとりませう』

『安心してください、たとへどういふ責苦をうけても、私はそれを洩らしはしません』

『いや、光江樣』

と、角太郎は屹と膝をすゝめて、

『今夜、諜し合せておきたいのはそこ

です。手前に少々考へもござる故、もし今度大學が責めた節は、解開の鏡のある所を、打明けてやつていたゞきたいと存じます』

『えツ。大學にですか』

『その上のことは、この角太郎の一命にかけて、屹度わるいやうには計らひませぬ。自分のほかにも、あの飛車兵衛やお妻をはじめ、駒木家のお代を念じてゐる者が、それ〲信州路から御代崎へ參つて、拙者の知らせを待ちかねてをります』

『でも、多寶塔の石扉をあける、あの解開の秘術を大學に洩らすのは、仇に貢物をするやうなもの』

『一時のことでございます。一時の御無念をおしのび遊ばせ』

『そして、無縁小屋から移されたお父様がどこにゐるか、それをお前は探してをりませんか』

『御存知ないのでございますか。同じ屋の棟の下においで遊ばして』

『えつ、同じ棟に?』

『やはり、紅門獄へ運ばれて來ておいでなされます。これもこれも、吾々の目をくらまさうとする、大學めの小惡い智惠です』

『あゝさうですか……それを少しも私は知らなかつた』

『それ故、こんどはあなた様も、一時の御無念に囚はれずに、彼のいふがまゝに遊ばさぬと、大殿様の一命に、もしやのことがあるやも分りません。――なぜと申しますに、彼がこんど御代崎に下れば、前とは違つて領主同様な自由を持ちます。もし、いよ〲解開の鏡が手にはいらぬものと斷念すれば、老中の出羽守と肚をくんでする仕事、あの萬花多寶塔の九輪を仆し、青銅の瓦をめくり、七寶相輪の柱や棟木をすべて壞して、あまたの石工土工の力で、たとへ何年費すとも、多寶塔の地底を掘りさげて、埋藏の秘寶をめくり出さずに措かないのではないかと自分は想像してをります。――それ故、こんどこそは、あなた様にも策がいります。今までの御態度では、大殿様のお命も、光江様のお體も、まことに危殆にたへませぬ』

まごころの溢れたことばだつた。黙つて聞いてゐた光江は、やがて、感激にふるへる低い聲に力をこめて、

『よく分りました』

と言つた。

『では、御得心がなりましたか』

ことばの上では、理を押しても、角太郎はこの人の姿を見てゐると、ともすると熱いものが喉を切つて出さうでならなかつた。

『――お別れ申し上げます。もし、見つけられては大事でございますから。そして、手前も今宵かぎり、暫くおそばを離れますが、必ず、お心細く思し召すな。角太郎居りますとお思ひあそばしても、正義の上に神あることをお疑ひなさいますな』

『にい……』

双つの袂をかさねて、光江は啜り泣きの聲を抑へた。

『オヽ、誰か？』

うしろの方に、笹落葉をサラ〳〵と踏む跫音がしたので、角太郎はすばやく孟宗竹の根へ身を屈めて、刀の柄糸に手をあぶらをにぎりしめた。

一人の男を供につれて、靜にそこの暗がりを過る若衆があつた。人が通るべき道でないこの深い竹林のなかを、扇拍子をとりながら、かういふ詩を微吟して通つた——

萬花甲山にみだれ綠林うごく
誰かにぎる塔下百尺の秘
四隣人なきがごとし啾々秋の聲のみ
佳人いたづらに瘦せ劒砥に哭く

低い澄んだ聲だつた。朗々といふ程でないが吟調水のやうだつた。

ふと耳を澄まされた光江は、その詩の聲がやむと共に、半信半疑にのび上つて、

『お……あれは花又三日之助の聲ではないかしら？』

と、つぶやいた。

『なに、三日之助ッ？』

と、角太郎が縞目のやうに立つてゐる孟宗竹を縫つて馳け出してゆくと、まぎれのない人影だ。大きな振袖に琥珀平の袴、手にひらめいてゐる鐵扇は、彼の持ちなれてゐる紺地に銀の北斗星。

『待てッ。三日之助であらう』

角太郎が鋭く呼びかけたのと、ほとんど同時に、向うむきつと振向つて、投げ返すやうにかう言つた。

『紅門獄で灯がうごいたぞ！』

『あつ……』

驚いてうしろを見ると、提灯を振りかざした浪人たちが、階にのぞんだ裏庭の裸門を開けて、眞つ黒にそこへ馳け降りて來た。

（つゞく）

いよ〳〵興味の頂點に——

各連載ものと作者諸氏の意氣!!

『キングのつゞきものは何れも面白い！　實に素敵だ！　圖拔けてゐる！　近頃ます〳〵佳境に入つた！　とても堪らぬ！』

四方から起るこの聲は眞に嵐の如く、今や天下擧げて大熱狂、人氣の渦を卷き起して居ますが、この評判を聞く吾等同人の喜びは勿論のこと、各作者に至つては正に喜悅以上、その意氣込み更に凄まじく、筆尖一段の勢力を加へ來つたことは何人も感得せらるゝ所であります。

各篇共、次號は如何に驚嘆駭目すべき大場面が現出せられるであらうか？　編者たる吾等までその曉を豫想して胸躍るのを禁ずることが出來ません。大なる御期待を乞ふ所以！

大日本雄辯會講談社ニュース

本社十一月號 九大雜誌の大壯觀

國を擧げて祝ぎ奉る御大典を記念して本誌は創刊以來始めての臨時增刊號を、本社の他の八大雜誌は十一月號を記念號として、特別大附錄を添附することは前號既報の通りでありますが、實際出來て見ると、實に豫想以上の素晴らしい出來榮え、これなら誰方にも、『素敵だ、流石は講談社の雜誌だけある』と御滿足下さるに違ひありません。實際九大雜誌共、所謂百花撩亂、孰れ劣らぬ素晴らしさです。是非本誌同樣御愛讀下さいますやう願上げます。

滿天下歡呼の 本社二大全集

『まだ出ないか』『まだ出ないか』と、全國愛讀者諸君から一日千秋の思ひで待たれてゐた本社の『修養全集』及び『講談全集』の二大全集は、愈々去る一日の全國新聞紙上に一齊に發表された外、本誌及び八大雜誌の上でそれ〴〵詳細發表の運びになりました。

私共同人が過去數ケ月殆ど寢食を忘れて苦心慘憺した熱と力の結晶だけあつて、果然今や滿天下を通じて暴風の如き大歡迎を以て迎へられて居ります。恐らく此分で行けば、さしもの大部數を以てしても、到底全部の申込みには應じ切れないだらうと、全國書店では專ら評判されて居ります。願くは愛讀者各位にも、此際一日も早く御申込みになるやう特に御勸め申上げて置きます。

全國各方面で 大歡迎の『大日本史』

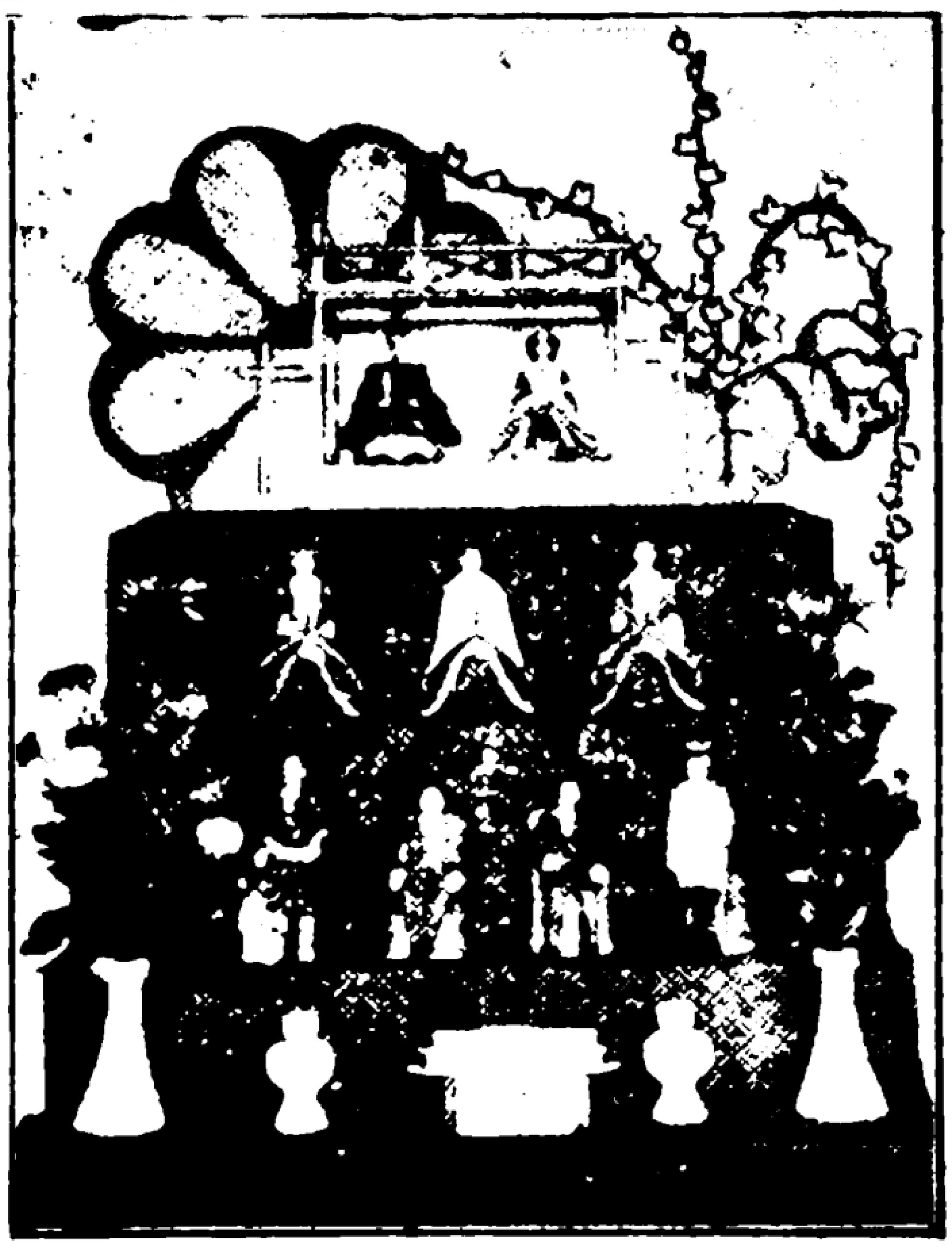
本社が御大典記念として、犧牲的大刊行を企てた『大日本史』は其の後全國各方面より洪水の如き大歡迎を受け、各官衙、學校、圖書館、會社、銀行其の他各種團體は勿論、各階級の篤學有志の方方よりの申込多數、殆ど豫定の倍數に上りました。

而も此の間、別掲の通り各方面の名士識者の諸先生より寄せられる讚賞激勵の言葉は殆んど無數に上り、本社々員一同望外の光榮に只管感激してゐる次第であります。これを見ても、眞の良書なら、假令內容が多少平易でないものでも、矢張り世の歡迎をうけるものであるといふことがわかり、國民として洵に同慶に堪へないものがあるのであり

ます。

愈々大好評の『明治大帝』（特別上製）

昨秋、奉仕的大出版を以て満天下を驚倒させた本社の『明治大帝』は、其後国民的聖典として愈々其の声価を高め、特に同書の特製が其高雅典麗な装幀と相俟つて、殆んど引張り凧の売行きを示して参りましたが、最近明治節を控へて、更に一段と売行きを増したので、残部も頗る僅少になつて居ります。



大好評の明治節お飾人形一揃

之れ即ち、国民が明治大帝を敬慕欽仰するの情が年と共に厚きを加へてゐる事実を雄辯に物語るもので、今更ながら大帝の御聖徳の広大無辺なるを感ぜずにはゐられません。

果然大問題となつた『英雄待望論』（一部 特価五円 送料二十四銭）

来るべき昭和維新への一大炬火たらしむべく、本社が普及的大出版を敢行した鶴見祐輔氏の『英雄待望論』は、発売早々飛ぶが如き売行きを呈し、単行本として近来にない大盛況を呈しました。

而も全篇著者の赤誠より迸り出た憂国の大熱辯は、其の名文と相俟つて、全国的に一大センセーションを起し、鶴見氏或は本社宛感激共鳴の手紙を寄せてくる向一々枚挙に遑もない有様、本社も同書がかくも甚大な影響を読者に与へたかと思ひますと、全く感激の外はありません。

正誤

前号本欄に於て、『英雄待望論』の定価を三十銭としてあるものが一部にありましたが、これは五十銭の誤りです。こゝに謹んで訂正致します。

第二回頒布 明治節お飾人形（申込殺到）

昨秋初めて発表した本社の明治節御飾人形は、其後も続々再頒布方希望して来る向きが頗る多いので、本社も大いに感激して、今回更に第二回頒布を発表しましたところ、全国愛読者各位より続々御申込みあり、在庫品も忽ち僅少になつて了ひました。

未だ御求めにならぬ向きは此際至急御申込み下さい。

（向詳細を御知りになりたき方はカタログを本社代理部へ御請求になれば無料贈呈いたします。）


ノンキナトーサン
麻生豊作
サップーケイナコッジャ
ヒトゴロシ
ドロボー
ギゴク
コレデ
シンブンハ
イッパイダヨ
ネ コレデ
ヤクショヤ
ケイサツガ
アルンダカラ
オカシイ
マッタクダ
ナッチャ
イネエ
オイ
マチネー
アリガネ
ミンナ
オイテ
ユケ
ドロボーカ
ヤレヤレ
ヒトゴロシカト
オモッテ
ビックリ
シタヨ


6
ジャ ドロボーハ コワク ネエーカ
コワイヨリ ナニヨリ キノドク ダヨ
7
モンナシダ？ フケイキナ ヤツラダ スコシハ ハジヲシレ ハジヲ
ヘードーモ アイスミ マセン イゴキヲ ツケマス
8
オドロイタ ドロボー カラ シカレタノハ ハジメテダ
ヤニナル ネ
9
オイ ダイショー ドコニユク
シャクダカラ オレモ ドロボーヲ ヤッテクル
10
ソーカ ジャ イッテキナ シカシ アマリ ヒドクナグッタリ ボラナイ テイドニ ヤッテキナ
11
ダイショーハ アラッポイカラ アイテニ ケガヲ サセナキャ イイガ


12
リャリャタイショードーシタイ？
ショテニガーントキヤガッタヨ
？
13
マーヨカッタヒドイケガデナクテドロボーナンテイイコトジャナイカラナ
ウン
14
ジャワイロヲトッテコーカ
アレハエライヒトデナキャクレナイヨ
15
ヤハリダマッテハタラクノガイチバンダゼ
ウシミタイニネ
16
トトーサンヤラレテル
17
オーイシッカリシロキヲタシカニ
ドーシテヤラレタ


18
モータクサン コレイジョーノマサレルト ドコデモネチモーヨ イヤモーケッコー ウウーィ
19
20
コンドコソ ホンモノダ
21
マッタ マッタ
?
コノケンカ オイラガ カッタ
?
22
マヌケメ フイルムガ ダイナシジャ ナイカ
ヘ?
23
カ カッツドーー
?

家庭セクション

食器の手入法

○スプーン、フォークの手入　石鹸を溶かした湯で洗ふのですが、洗つたら沈降炭酸石灰を塗つて乾かして柔かい布で磨きます。

○ナイフの手入注意　ナイフはコルクに磨砂をつけて磨くのですが、象牙や骨で作つた柄は水に濕すと赤黒くなりますから注意しなければなりません。さういふ汚點の出來た時には濕した木賊で次には椋の葉で、最後に角の粉で磨くのです。

○銅眞鍮製の器具　砥の粉か磨粉を種子油で煉つたものを布につけて磨きます。

○アルミニューム器　鍋その他のアルミニウム製食器具は始め先づ洗滌曹達の濃い溶液をつけて擦り水で洗つて乾いたら重曹で磨きます。

○釜その他の鐵器　中で糠を煮ればよろしい。

○鐵瓶の手入　火にかけて沸騰してゐる間に湯をつけた布で外側をぴた〱叩きます。

障子をはりますには



御障子をはり替へる時に向ひました。殊に雨にあたる障子には、糊の中に少量の焼明礬を入れて、それで張りますと、雨や風にあたつても破れたり、はがれたりする心配がありません。又此糊で張りました障子は、張りかへる時にも、紙が綺麗に放れますから、骨を洗ふ手數が省けます。

食物の榮養と藥效

○納豆　ヂアスターゼを含んでゐますから胃弱、消化不良の人の常食に適します。

○餅　滋養分が多く、煮て食べれば御飯よりも消化がよく、風邪を引き易い人などは時々食べると有効です。

○そば　胃腸病の人には不向ですが、糖尿病や脚氣患者には適しい食物です。

○大豆　蛋白質の外に脂肪に富んでゐますし、燐酸や石灰分も豊富ですから、穀類の中では最も肉食に近い食物とされてゐます。

○小豆　便通を促し、脚氣患者に有効です。消化はよくありませんから子供などに多量を與へるのは避けた方がよろしい。

○オートミル　燐を多量に含んでゐますから、鶏卵と共に食べれば神經衰弱患者に特効があります。



○麩　蛋白質が豊富、婦人や子供、病後の人に好適の食物です。殊に肺結核患者には熱を去る効があります。

○豆腐　鯛の六分ノ一、鶏卵の三分ノ一ほどの滋養價があり、薬効としては痔の毒を消します。

○甘藷　牛肉の約十分ノ一の代價で同じ熱量が得られます。但し痔の悪い人には不向です。

○馬鈴薯　消化が良いので大概の病人に與へて差支ないとされてゐます。又、肉類に附着してゐる黴を殺す薬効がありますから、牛豚肉に添へて食べる必要があります。

○里芋　非常に精分の強いものです。消化も良い方ですから時々食べる必要があります。

○大根卸　消化を助ける外に血行を盛んにしますから、冷え症とか

お茶の藥效いろ〳〵

お茶は昔から漢方醫によつて様々な方面に用ゐられてゐます。第一が中毒症の解毒藥です。蟹、蝦、菌類、腐肉類の中毒や、昇汞、阿片、モルヒネ、コカイン、ストリキニーネ、ニコチン等の中毒には、上等の煎茶十匁位を一合の水に入れて約五勺に煮つめた汁を、盃に一二杯呑むと、二三分のうちに胃中の毒物をスッカリ吐瀉してしまひます。

又、冬季のヒビ、アカギレには　お茶一つまみをよく嚙んで局部へ擦り込み、繃帯をして置けば二三回で治ります。赤ん坊の腋や股のタダレは、お茶の粉末を撒布して置けば大層效き目があります。目やにで眼瞼の開かない場合には、お茶の煎じ汁を微温程度にして、ガーゼに浸して靜に洗滌すれば、サッパリします。

風邪を引いた時に食べると効能があります。又、大根の葉の干したのを湯に入れて腰湯を使ひますと婦人病、痔疾、慢性リウマチスに効きます。

睡眠を促す食物

りんご、みかん、其の他酸味のある果物、海苔、甘藷、昆布、大根、人參、ねぎ類は、安眠によろしい。

安眠を妨げる食物　茶、コーヒーは勿論、牛乳、砂糖、味噌、豆腐、食鹽の過食、胡椒、からし等。

薄い毛と髪油

髪油を澤山つけますと毛を少く見せますから、柔かな毛の人は殊に御注意なさい。そして日本髪を結ふ時に、薄い毛の人は油を髪の表面からつけず、内側からつけますと、ずつと濃く見せることが出來ます。

實用　洒落問答

妻『御大典だからとて飲み過ぎては嫌ですよ。』
夫『盃々。』
妻『惡醉すると困りますからね。』
夫『その時は熟柿を食べるさ。』
妻『それこそ恥かきですわ。』
夫『ぢや、濃い番茶を二三杯飲むさ。』
妻『茶かしてはいけませんよ。貴方！』



國旗の掲揚

祝意を表はす時には、金の球の直下に旗紐を結付け、球と旗との間を空かさないやうにします。反對に哀悼の時には、二三寸ほど空かして旗紐を結付け、球を黒布で蔽ひます。

木炭の使ひ方

これからそろ〳〵炭火がほしくなります。炭についての知識も欲しくなります。

▲どんな炭がよいか
良い炭は破口に艶があり、質が固くて、壓力に堪へ、これを打てば金屬の様な音がします、から言ふ炭は火力強く且つ、火持がよくてまことに經濟です。

▲炭の使ひ分け
炭には、堅炭、中炭、雜炭などありますが、質によつて使ひ分けると、便利で、經濟です。

○例へば燒物をする時、雜炭では火力が弱く、火持も短いから、多量に使用しながら、出來上つたものはよくないのです。高價でも堅炭を使つた方が經濟です。

○火を起す場合は、堅炭は質が硬くて、緻密ですから、火のうつりが遲く、焚附の火力が衰へるとすぐに消えてしまひますから、この場合には價の安い雜炭の方が、よく目的を達することが出來ます。



寛永二年三月上浣、小野派一刀流の始祖小野治郎右衛門忠明の道場は、繼承試合の當日とあつて、數多ある門人達は、この一世一代の大勝負を見んものと、われも〳〵と詰めかけた。

『御總領の忠也殿が一刀齋先生の家系を繼がれた以上、御次男の忠常殿が小野家を繼がれたらばよささうなものだがな』

『いや、順序から云へばさうに違ひないが、そこが忠明先生の偉いところなんだ。あの甥御の孫兵衛殿の太刀筋と忠常殿の太刀筋と同格なところから、試合をさせて家督を決めようとせられる……誠に難有い御心がけだ』

『ウム、まあそれに違ひはないが、もし忠常殿が敗けでもされようものなら、お氣の毒だなあ』

道場の彼方の隅、此方の溜りでは、こんな囁きが交されてゐる。……

事實、いま彼等の云ふ如く、治郎右衛門忠明は、柳生家と共に天下劍道の双璧と謳はれる小野派一刀流の家名を繼ぐ者は、技倆卓絶、心魂の修業成つて、眞に正義の劍客であらねばならぬ、殊には將軍家の御手直し、所謂御流儀とまで云はれる一刀流に疵をつけるやうな者であつてはならない。かう始終心がけてゐたのである。

ところが、長男忠也には既に師伊藤一刀齋の家名を繼がせた以上、次男忠常を小野家の繼承に定めればよいのだが、然し甥の孫兵衛忠一が、忠常と同年で、併も劍技が伯仲してゐる。彼の雄渾に對する此の俊英、忠常泰山の如き重厚を以て勝るとするならば、孫兵衛また精悍なる慧敏を以て優れりとせねばならない。

『試合をさせよう、そして勝つた者を繼承者に定めよう』

から考へた忠明は、何の躊躇もなく忠常と孫兵衛とに繼承試合を命じたのであつた。

やがて、定めの時刻がくると、忠常と孫兵衛が、しづ〳〵場の東西から現はれた。既に師範座には忠明並に忠也が儼然と構

へ、門人達は場内狭きまでに居流れてゐる。

『忠常、忠一……』

呼びかけた治郎右衛門忠明は、師範座の前に跪いた二人を瞰下して、

『二人共日頃、錬磨の技を心ゆくまで揮つて見よ、よいか』

『ハッ……』

徐かに頭を下げた二人は、其まゝ尻下りに二三歩退いて左右に別れた。

意味深くして慘たる微笑……犇り向き合つた二人は、

『いざ！』『おう！』

聲と共に木太刀を颯と引いて飛び退るや、構へは同じ平星眼。場内忽ち水を打つた様な静寂に歸して、見戍る一同、咳の音一つ聞えない。

瞬、一瞬――嵐の前の靜けさ。――と、忠常の劍尖に微かな呼吸が起るよと見る間に、



『えーい！』

突如、火の如き氣合は、忠常の唇を衝いて迸走つた。

『應！』――受け返す孫兵衛の戰聲。

雨か、嵐か？ 兩々相譲らぬ熾烈の劍氣は、シーッと場内を壓してきた。

又しても息づまる様な沈黙の對峙――と、忠常は、孫兵衛の體に、聯と幽かな隙を見出した。よし！ この一擧だツ。心中かくと決するや、撓めきつてゐた木太刀は唸つた。

『やッ！』

揮りこんでゆくその猛襲！ あつ孫兵衛の小手が危い――と見えたとき、颯とばかり引つ外した孫兵衛、素迅くパッと飛び退つたが、この時遲く、追撃に移つた忠常の疾風！

『鬼ーッ！』——驚撃一閃、斷金の氣合！

飛龍と伸びた劍は、美事孫兵衛の横胴に薙ぎ込まれた。と、同時に、

『參りました！』

眞に悲愴の叫びである。孫兵衛は片膝を支くと、ガラリ、木太刀を床の上に置いた。

『それまでッ』

師範座から、いと冷嚴に響く治郎右衛門忠明の聲——然しその時が、何故か孫兵衛の動作に灼き着いてゐた。

試合は終つた。

小野派一刀流の二世は玆に忠常と決せられたのである。——が、不思議にも孫兵衛は、むしろ明るい顏をして中廊下を歩いてゐた。

『孫兵衛殿！』

『お待ち下され孫兵衛殿ッ』



孫兵衛贔屓の門人達が追ひ縋つてきた。

『お呼び……なされたか？』

ちらと、孫兵衛の顏が振り向いた。

『殘念でござる！　なぜなぜにあの一刀を躱されなかつたのでござるッ』

『平素のお身様にも似合しからぬ不覺でござりましたぞ！』

悲憤の餘りか、口々に云ひ寄るのを、徐かに制した孫兵衛は、

『不覺……？　いや不覺ではない。流石は忠常ぢや、あの迅雷の氣當と共に薙ぎつけて參つた鋭刀、小野派の精妙無想劍の極意、ありや何人にも躱せるものでない……出精せられい、出精せられい。あれが眼に止まらぬ樣では、尊公方の腕はまだ〳〵駄目ぢや、はゝゝゝゝゝッ……』

その笑聲のまだ消えぬうちであつた。孫兵衛の姿を見て趁ひ馳けて來た忠常が、物をも云はず、犇と孫兵衛の手を握ると、

『孫兵衛！』たゞ一語。奇怪や忠常の眼が霑んできた。

『お〻忠常、美事ぢやツた喃』

そして見返した孫兵衛の眼には、滿足の色が漲つてゐたのである——

いづくんぞ知らん孫兵衛忠一は、義を重んじて僅かに體へ崩れを作り、忠常に打込みの隙を與へたのであつた。忠常はそれを漸く悟つたのである。そして、相傳を讓つてくれた彼の高潔な心根の前には、自然に頭が下るのであつた。

さはれ繼承試合に破れたる孫兵衛忠一——彼は叔父忠明から新に伊藤姓を賜り、流祖一刀齋の別系として、後年水戸家に仕へたのである。

（終り）

精神修養を怠らぬ江木前法相

加藤高明伯の信任厚く、剃刀の如きすごい切れ味を示した前法相江木翼氏は、又千之翁の愛婿として、孝養いたらざる所ないさうである。氏の政敵で、政友會の元老たる小久保喜七氏が、『江木君は精神修養の爲め、寢る前には必ず大日本史を讀むことにしてゐる。どんな忙しい時でも、一行か二行讀んでからでなくては決して寢につかないさうだ。彼が片々たる才子でなく、眞に力量人格の兼ね備はつた人物であることは、此の一事を以てしてもわかる。』といはれたが、小久保氏が政敵を賞揚する襟度は云はずもがな、江木氏のこの逸事は實に奥ゆかしい。



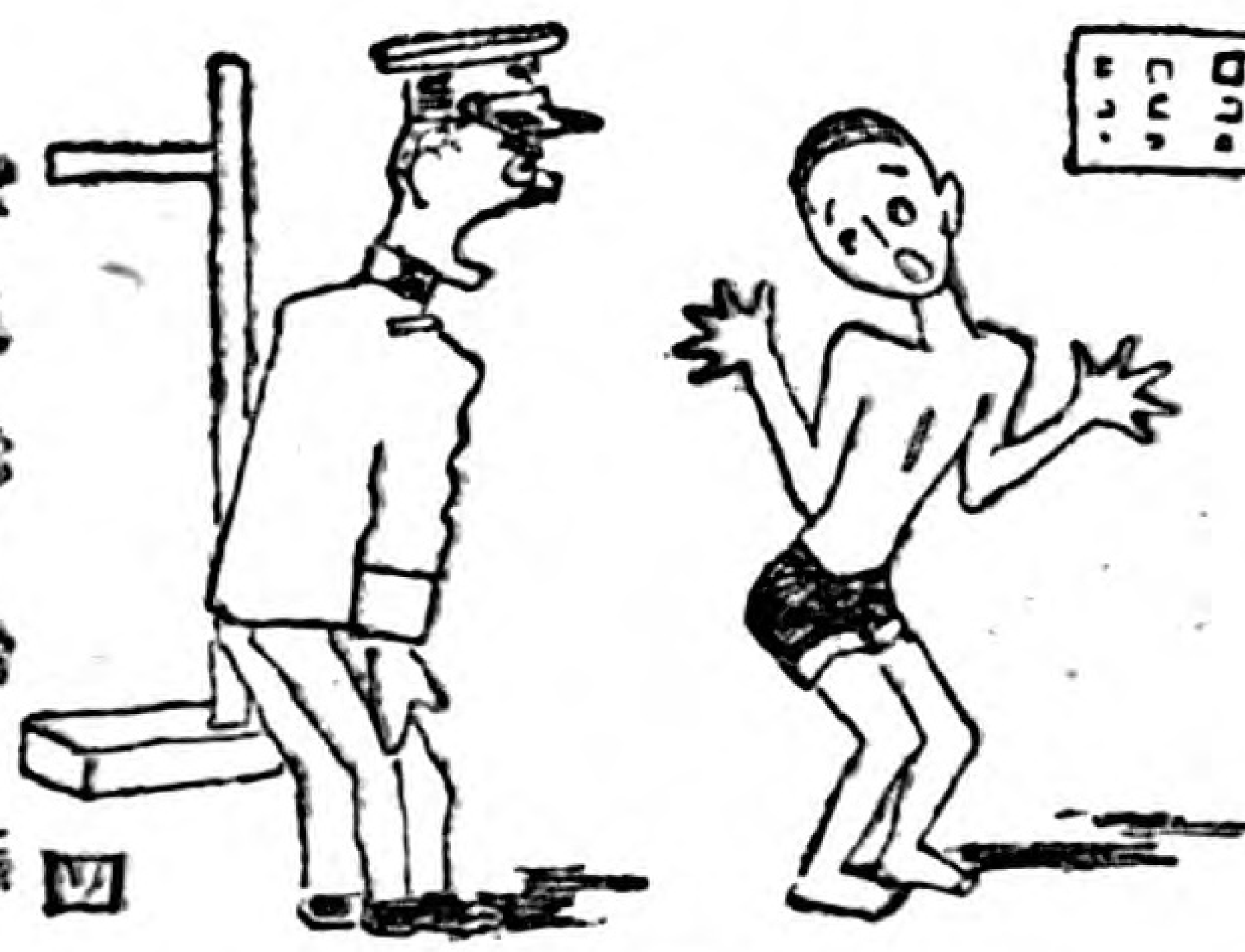
◎地口

○かんにんしなの〻善光寺
○きめうちやうらいやの若旦那
○きがもめの吉祥寺
○つれないの舌を出し
○だうりでかぼちやが唐茄子だ

喜劇 徴兵検査

福島箱生作

軍醫　身體に故障はないか。
甲山（左手を出して）中指が伸びません。
軍醫　指を順々に折つて伸ばして見ろ。
甲山（いはれた通りの事を二三度くり返す、やつぱり中指は伸びない）
軍醫（突然）氣をつけッ！
甲山（氣をつけの姿勢をする、中指が伸びる。）
軍醫　伸びるぢやないか、次ッ。
乙野　右の耳が少ししか聞えないんですが。
軍醫　左の耳をおさへろ。
乙野（左の耳を押へる、軍醫その耳に口を近づけ小さな聲で物をいふ）



軍醫（大きな聲で）聞えるか？
乙野　聞えません。
軍醫　さうか。（小さな聲で）行つてもよし。
乙野（行きかける）
軍醫　馬鹿ッ！
――（幕）――

手品 玉子の曲藝

まづフラスコ風の硝子の水徳利を持ち出し、その中へ火のついた紙片を投げ込みますと、紙片は一イ二ウ三イ四ウと數へてゐるうちに燃え盡してしまひます。その頃合ひを見計つて皮をむいた茹玉子で徳利の口へ栓をしますと、玉子はこはれもせずにスルスルとひとりでに徳利の中へ吸ひ込まれてしまひます。此の場合、徳利の口へ栓をする玉子は、雑作なく吸ひ込まれるやうな小さいものでは面白味がありませんから成るべく大きいのを選ぶことです。



早口くらべ

○この縁の下の釘引き抜きにくい
○長町の七曲り長い七曲り
○京の狂言師が京から今日來て狂言今日して京へ今日歸る
○美濃の蛇池に蛇が居るぢやげな
○蛙ピヨコ〳〵三ピヨコ〳〵、合せてピヨコ〳〵六ピヨコ〳〵。



『名案』　宍戸左行

アラ大變ッ雨がふつてきたワヨ。新調の絹地の上衣が濡れると困るわと早速ラシャ地のスカートを脱いでマント代りです。なんと名案でせう。

最短篇原稿募集

喜劇、笑話、手品、考へ物、遊戯、滑稽、早口等、極く短い面白い原稿を募る。用紙ハガキ。優秀篇は本欄へ發表して薄謝を進呈。宛名、東京駒込キング娯樂係。

新案智恵くらべ

一、或男が往來で自轉車に衝突されて怪我をした。『どこを怪我したんだ？』ときくと「國の名」二つで答へました。ハテどこを怪我したのでせうか。

二、果物の名を二つ集めると、上から讀んでも下から讀んでも同じやうなのがあります。何と何とを集めるとよいでせうか。

各種職業 洒落問答

『穀物屋の伜が放蕩するので今意見して來たところだ』『伜は何と云つた』『もうせんく（毛氈々々）と云つた』

○

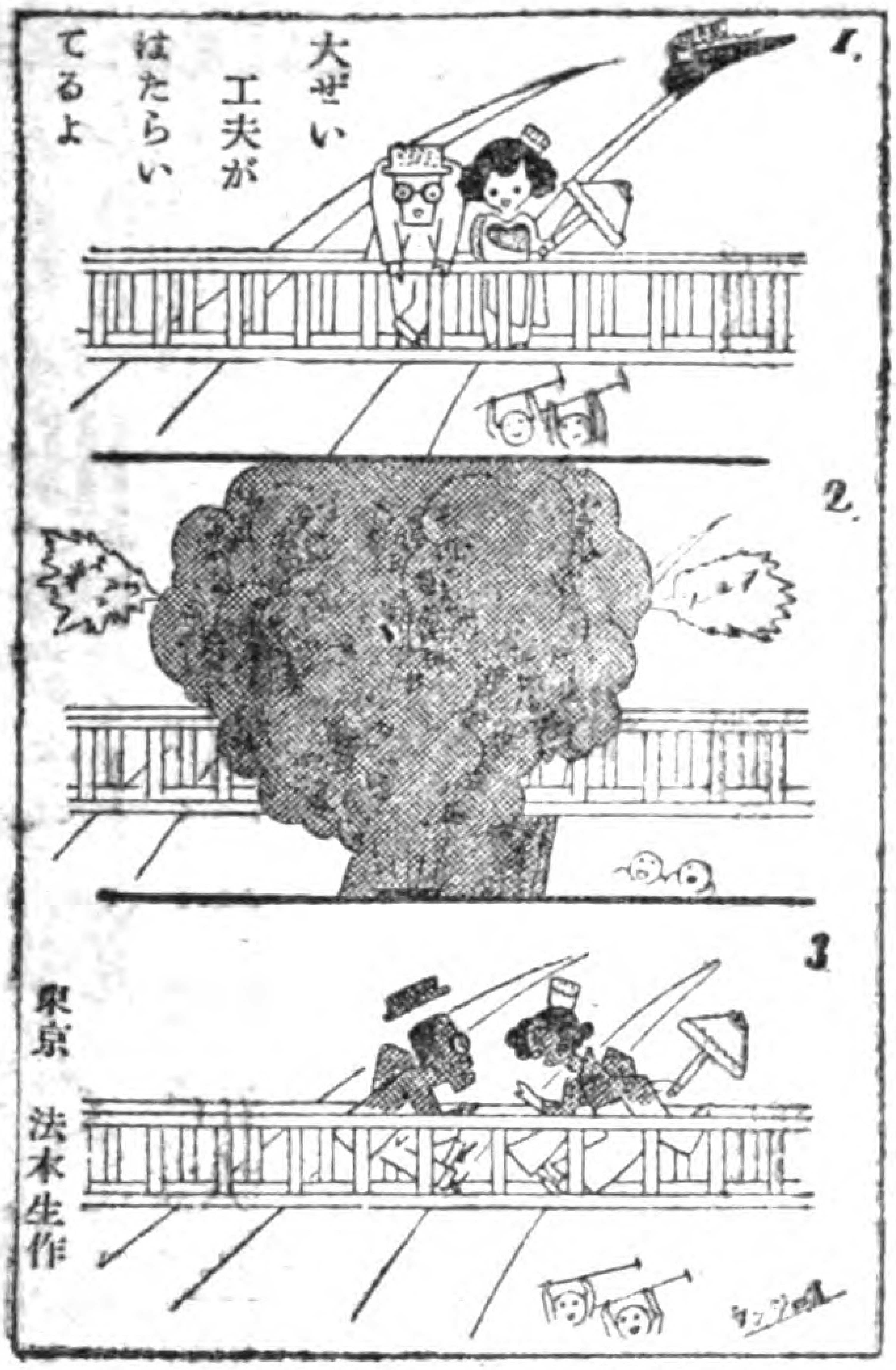
『君は蒲團まで質に入れたさうぢやないか』『餘儀ない（夜着ない）譯さ』

○

『撃劍道具はもう藏ひませうか』『御面倒（御面胴）でもお願ひします』

○

『あの温順しさうな鍛冶屋が喧嘩をしたさうだよ』『地金を出したのだな』



◎奇名珍名

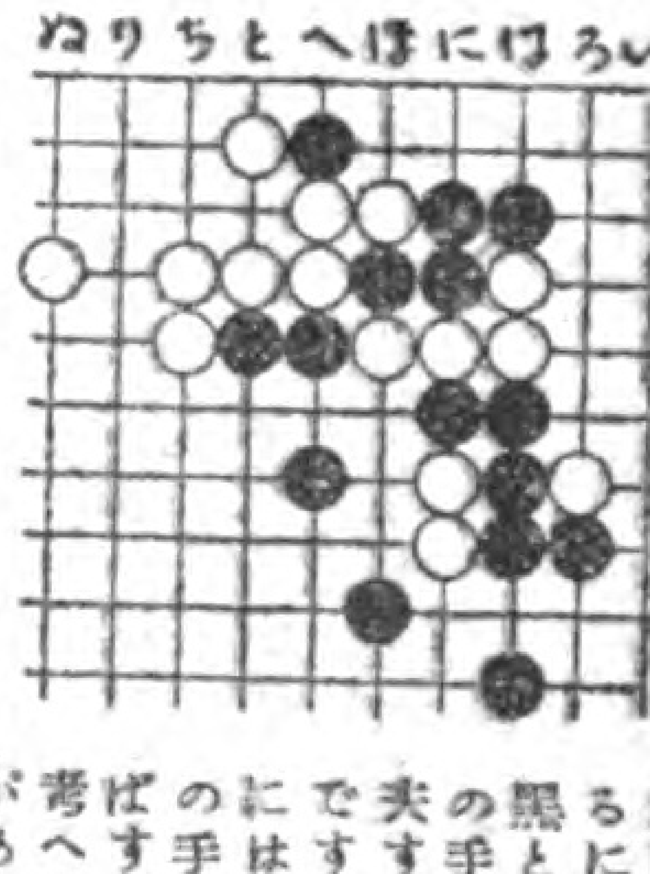
享和三年十月に、紀伊大納言の御尋ねに依つて、諸大名から調べて出した目錄の中から少し拔き書をしてみると、

松平政千代の家來に　谷谷谷谷
松平出羽守の家來に　佐佐佐佐
宗猪三郎の家來に　竹串傳角左衞門
小笠原左近將監の家來に　松餝目出度左衞門
酒井新十郎の家來に　一石八斗兵衞
毛利甲斐守の家來に　一二三四五六
松平修理の家來に　小助助助
松平備中守の家來に　平平平平

◎詰碁新題

五段 福田正義 出題

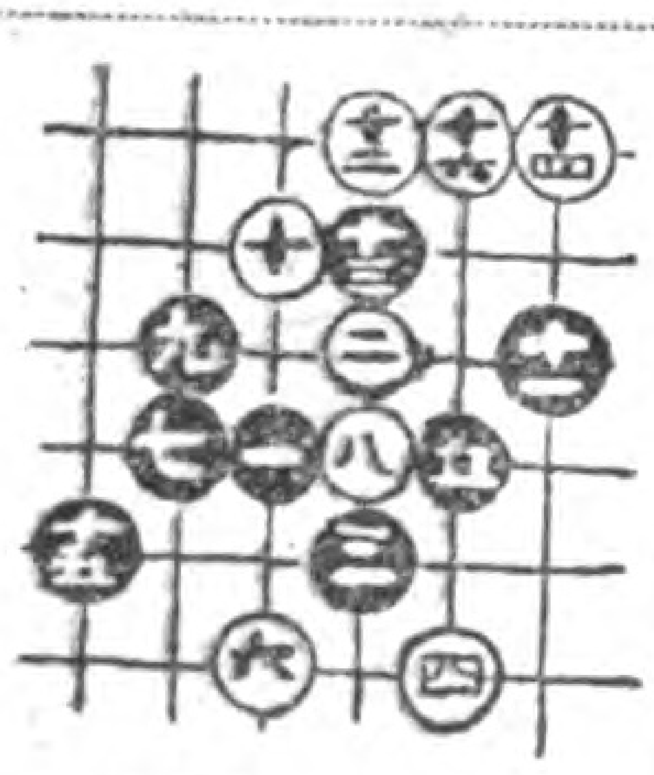
白先此結果如何



此白を活きるには隅の黒との攻合の手順を工夫することです。それにはまづ白の手數を延ばすことも考へる必要があります

◎聯珠新題

珠叟 清水吾石 出題



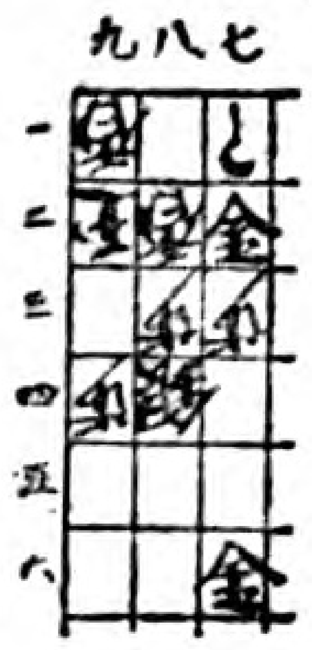
○此題は黒が（十五）と打つた三聯追手を白が（十六）と止めて三聯追手を作りました。そこで黒は（十七）から追手詰で勝つのですが其勝筋はどこに有りますかしら。

△此聯圖を見ぬうちに解答を得たお方は下名へ御解答をお投じ下さい聯珠の參考書を呈します。

下谷御徒町一ノ一七 清水吾石

◎將棋必至の研究

七段 溝呂木光治 出題



持駒
△攻め方 銀、銀、桂、桂
▲防ぎ方 金

本欄の解答は三一三頁にあり

世界に輝く新興日本

特別口繪明治大正昭和大繪卷解説

文學博士　中村孝也

天皇が關東に行幸あらせらるゝことは、史上嘗て前例のないことである。況んや、この地に都を奠めらるゝことにおいてをや。見よ、富士の秀嶺は粧を凝らして聖運の隆昌を祝福したてまつり、松吹く風は妙へなる天樂を傳へて、聖壽の無窮を讃へまつることを。海道の山河、怡然として悦ぶ。悦ぶもの豈たゞに山河のみならんや。

奠都

明治維新は、神武天皇建國創業の大精神を體揚して、日本帝國を更生せしめた。不世出の英主、御年若き明治天皇は、明治元年三月、紫宸殿にお出ましになり、公卿諸侯を率ゐて天神地祇を祀らせたまひ、親しく五條の御誓文を宣せられた。開國進取の方針は定まり、國民は踊躍して各自の羅針盤を正した。

明治天皇の宏謨は、東京奠都によつて、先づ、その礎を置かれたごとき觀がある。京都は千年の帝都であつた。けれども若き新日本の活動のためには、濶大なる關東平野の方が、より雄渾なる規模を有してゐる。こゝにおいて、この年の七月、天皇は江戸を改めて東京とせられ、八月、紫宸殿において即位の禮を擧げたまひ、十月、始めて東京に行幸あらせたまひ、もとの江戸城を皇居とお定めあそばされた。尋いで十二月、一旦、京都に還幸あらせられ、一條美子を立てゝ皇后となしたまひ、翌二年三月、再び東京に行幸せられ、それより永くこの都におとゞまりになつた。

憲法發布

五條の御誓文の第一は、「廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決スベシ」といふ御言葉であつた。即ち是れ立憲政體の基を定めたまへるものに外ならない。こゝにおいて政府は、聖旨を體して明治八年元老院を設けて立法の源を廣め、地方官會議を開いて民情の通達を圖り、以て公議を尊重する實を擧げ、同十四年、國會開設の詔を拜するに及び、同十七年、制度取調局を宮中に置き、伊藤博文を長官として、憲法その他の法令を起草せしめ、尋いで中央政府の官制を改め、また樞密院を置き、着々として諸般の準備を整へたのであつた。

既にして明治二十二年二月十一日は到つた。顧みれば二千五百四十九年の昔、神武天皇は、この月この日を以て、大和橿原宮に御即位あらせられて、萬世一系ゆるぎなき金甌無缺の國家の基礎を奠められたのであつた。その紀元節の當日において、明治天皇は、先づ賢所・皇靈殿を祭つて憲法制定のことを皇祖皇宗の神靈に告げたまひ、ついで皇后と共に正殿に臨ませられ、親王・大臣、その他の官民及び外國公使等を召して、大日本帝國憲法發布の式を擧げさせられた。帝國憲法は、七章・七十六條より成れる帝國根本の大法であるから、國民擧つて祝意を表し、歡呼の聲が四方に滿ち渡つた。

卷頭に掲げた圖は、明治天皇から內閣總理大臣黑田淸隆に、憲法をお授けになるところを謹寫しまゐらせたものである。

平壤攻擊

立憲國となつたことは、我が國民に、限りなき自信と、勇氣と、想望と、熱心とを與へた。その爲めに國力は、海外に發展して、おのづから淸國と衝突を惹起すべき形勢をつくつて來た。

淸國は、江戶時代の初め、明國に代つて興り、その勢を朝鮮にまで及ぼした國であるが、我が國とは國家としての交際を開くに及ばなかつた。その朝鮮は、屢〻我が國に使者を遣した國である故に、明治維新に當り、我が國は、その次第を朝鮮に告げ、尋いで淸國とも國交を開いたけれど、淸國の暴慢によつて、朝鮮も屢〻我が國に無禮を働いたことがあり、明治二十七年、朝鮮に內亂の起つたとき、淸國は頗る我が國を輕侮する態度を取つたので、同年八月、明治天皇は、つひに彼に向つて戰を宣したまふに至つた。この戰役において我が海陸の軍は、連戰連勝、翌二十八年、つひに彼をして、地を割き、償金を出さしめて、その局を結ぶこととなつた。戰爭の期間は十ケ月に亙つてゐる。その間、陸戰で名高いものに平壤の戰があつた。

平壤は朝鮮平安南道大同江に臨んだ市街である。陸軍中將野津道貫の率ゐる第五師團と、陸軍少將大島義昌の率ゐる混成旅團とが、その攻擊の任に當り、明治二十七年九月十三日より同十五日に亙つて息をもつかず攻めたてたところ、敵兵つひに力を失つて白旗を揭ぐるに至つた。よつて十六日早朝我が軍は威風堂々として入城し、城頭に高く日章旗を飜したのであつた。

日本海の海戰

日淸戰役に勝つて後、我が國の地位は躍進して、東洋平和の鍵を握るやうになつた。然るに露西亞帝國も亦、東亞細亞經綸の大策を進めて來たので、今度はおのづから、日露兩國衝突の形勢がつくられるやうになつた。

露西亞は自國の海岸に不凍港を有たない國であつた。それ故に、いつも南へ南へと憧れて居る。嘗ては黑海から地中海に出ようとして、英佛のために妨げられた。次に波斯灣に出ようとして英國に妨げられた。今や彼は黃海、日本海に出ようとして、旅順と浦鹽斯德とに艦隊を集め、朝鮮を併せて日本を抑へようとしたのであつた。

これは我にとつては死活問題であつた。國論は沸騰した。明治天皇は、明治三十七年二月、斷乎として、露西亞に對して戰を宣せられた。忠勇なる我が軍は海を渡つて遼東に入り、遼陽を取り、沙河に勝ち、旅順を陷れ、奉天の大會戰で敵の主力を擊破し、ついで我が聯合艦隊は、日本海の大海戰で敵の大艦隊を全滅させた。この海戰によつて戰局の大勢は定まり、勝利の榮冠は、日本帝國を花々しく飾つたのであつた。

日本海の海戰は、世界歷史あつて以來の大海戰であつた。これより先き、露西亞はバルチック艦隊の一部を割いて、新に太平洋第二艦隊及び第三艦隊を編成し、總司令官海軍中將ロヂエストウエンスキーが之を統率し、太平洋艦隊を援けるために、遙かに東洋に向つて航海をつゞけてをつた。この兩艦隊の總數は合せて三十八隻、明治三十八年五月二十七日、堂々として對馬海峽を過り、日本海に入つてウラジオストックに向はうとした。鎭海灣にかくれて之を待ち受けてをつた我が聯合艦隊司令長官東鄕平八郎は、大小四十餘隻の艦艇を指揮して之を邀へ擊ち、激戰數合、翌二十八日に至り、殆ど敵の全部を滅ぼし、負傷せる敵將ロヂエストウエンスキーを虜にし、之に代れる司令官海軍少將ネボガトフを降服させた。實に是れ壓倒的の大勝利であつた。

『敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直に出動、之を擊滅せんとす。この日、天氣晴朗なれども浪高し』

といふ第一電が、いかに國民の血を湧きたゝせたことよ。

『皇國の興廢此一戰に在り。各員一層奮勵努力せよ』

といふ信號が、いかに全艦隊の士氣を鼓舞したことよ。一言一句、永久に力强く我等の胸の裡に活躍するのを覺える。

青島攻擊

日露戰役の勝利によつて、我が國威は全世界に輝き、名實共に東洋平和の王者となつた。併し衰へゆく淸國は、多くの國々から領土を少しづつ奪はれても、抵抗することが出來ず、泣寢入の氣の毒な有樣であつた。青島は山東省膠州灣に臨める地點である。獨逸は嘗て小さな言ひがかりをつけて、無理無體に、この地を占領して堅固な要塞を築き、東洋經營の策源地となした。然るに大正三年の夏、歐羅巴の諸國の間に戰爭が始まり、獨逸・墺太利などと、露西亞・佛蘭西・英吉利などと互に敵味方に別れ、世界の各地で戰を交へた。この世界大戰に當り、我が國は、日英同盟の誼を重んじ、その年の八月、大正天皇は獨逸に對して戰を宣したまひ、十一月、先づ青島を陷れ、また我が海軍は、英吉利の海軍と相應じて、太平洋にある獨逸領の諸島を占領し、東洋及び南洋から、獨逸の勢力を完全に驅逐してしまつた。

青島要塞の攻擊は、大正三年十月三十一日（當時の天長節）に始まり、十一月七日に全く之を占領した。この攻圍戰は、海軍陸軍の共同作戰に加ふるに空軍の活躍を以てし、立體的の戰鬪が、最も壯烈を極めた。飛行機より投下した爆彈は、敵の艦船、砲臺、無線電信所、石油タンク等に向つて十分の威力を發揮し、戰局の展開に貢獻することが頗る大きかつた。卷頭の圖は、石油タンク爆發の光景の描寫である。

御外遊

世界大戰に參加して我が帝國の實力と、その雄渾なる道德的精神とは、益〻發揮せられ、我が國は全世界畏敬の標的となつた。この時に當り、皇太子裕仁親王殿下が、歐洲諸國を御巡遊あらせられたのは、眞に曠世の盛事であつた。

それは大正十年三月のことであつた。若き殿下の御乘船は、萬歲の聲に送られて、威風堂々横濱港を解纜あらせられた。そして全國民が、擧つて御旅程の平安をお祈り申上げてゐる間において、殿下には、親しく英・佛・白・蘭・伊等の帝王・大統領を歷訪あらせられて、盛大なる歡迎を受けたまひ、また最近の戰跡を御視察あつて、同年九月、芽出たく御歸朝あそばされた。

殿下の御旅行中、內外共に最も感銘の深かつたのは、英國君民の熱烈なる歡迎と、殿下の悠揚として迫らず、泰然として氣品高き御態度とであつた。卷頭の圖は、大正十年五月九日、殿下が英國皇帝陛下及び皇太子殿下と御同列にて、バキンガム宮殿に向はせたまふ鹵簿の壯麗なる有樣を描きまゐらせたものである。

御大典

裕仁親王殿下には、歐洲御巡遊より御歸朝あそばされて後、いやが上にも全國民の敬愛を御一身に集めさせられたが、御父帝におはします大正天皇の御不例により、大正十年十一月、攝政に任ぜられて、國務を御決裁あそばされ、尋いで大正十五年十二月、天皇の崩御あらせたまふに及び、御踐祚ありて、今上天皇陛下とならせられた。そして御諒闇の一年をお過しあそばされ、本年本月を以て京都に行幸ありて、御即位・大嘗祭の御大禮を擧げさせたまふのである。

御大禮の數多き儀式の中で、最も主とせられるのは即位禮と大嘗祭とでいらせられる。即位禮は十一月十日に行はせたまひ、東京宮城における皇靈殿・神殿に奉告の御儀と、京都皇宮內春興殿における賢所大前の御儀と、同紫宸殿の御儀とより成つてゐる。その中、紫宸殿の儀が最も晴れの盛儀でおはします。大嘗祭は、十一月十四日から十五日に亙る御儀式で、その中、深更に行はせられる大嘗宮の御儀が、神祕と莊嚴とを極めたる最も重い御儀でおはします。尋いで十一月十六日及び十七日に盛大なる饗宴の御催しがある。

それらの御儀式の終つて後、十一月二十日及び二十一日に神宮に親謁の御儀がある。二十日には外宮、二十一日には內宮に御親謁あそばされるのである。陛下の御服は黃櫨染、皇后陛下は御唐衣・五衣・裳の御裝ひ、皇族以下の供奉員を從へたまひ板垣御門外で御下乘、それより玉歩を運ばせたまふ。式部長官・宮內大臣前行しまゐらせる。侍從は御劍・御璽を奉じ、また極彩色の靈鳥を飾つた菅蓋を捧持して御後に候し、靈鳥の口にくはへてゐる御綱を左右に張り、御笏筥を奉ずる。侍從長以下侍從が供奉し、御延道を通御になつて、板垣南御門を入らせられるのである。

圖は、その時の御有樣を謹寫しまゐらせたものである。



知って置きたい家庭知識



漬物と健康

不消化物と言はれた漬物も、實は健康に非常に効果があるものです。漬物中の植物纖維は成程不消化物ですが、其ため腸の蠕動を强め、便通をよくしますし、野菜中のヂヤスターゼや、ビタミン等が分壞しないでそのまゝ殘るから、まことに結構な消化營養劑となります。其の上、漬けてゐる間に糠味噌や酒粕等から吸收する色々貴重な成分は、營養價や、嗜好價を增大します。



瘤と切傷

瘤が出來たら、二パーセントの硼酸水で冷やしマツサージをなさい。切傷は傷口を完全に消毒して直ぐ繃帶することです。オキシフルは手輕な消毒藥です。出血は傷口を五分間位强く押へてゐると止みます。深くて出血の夥しい傷は其太腿か、腕の傷より心臟に近い所を紐で固く縛つて血の勢を弱めてから處理します。血止には鹽化鐵がよい。



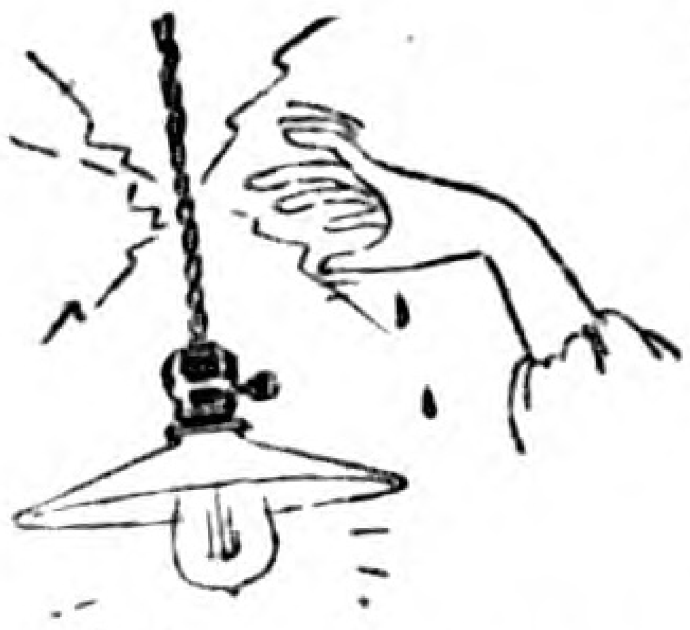
乳兒の泣聲

乳兒が泣くのは、飢を訴へる時だけではありません。泣く毎に授乳するのは、思慮ある母のやり方ではありません。いかにも底力のある聲で喰入る樣に泣くのは、飢の時ですから乳をやりなさい。退屈した時は、何か手でいたづらをし乍ら泣きます。疼痛のある時は居たたまらぬ



樣な火のつく樣な泣方をします。只『泣く兒に乳』と許り、泣く度に乳をやると、前の乳が消化しきれぬのに、又乳を受けて胃腸は弱り、消化不良の原因になります。

電氣と水氣



電氣は水に傳り易いから濡手で電燈のソケットを握るとピリピリと來ます。ですから電氣器具を取扱ふには手をよく乾かしなさい。コードやプラグ等もぬれてゐると漏電します。電氣器具は常に乾かして置きなさい。しかし不用意に濡れた時には二十分位電氣を通すと完全に乾きます。

蜂蜜の效能

砂糖は腸で其儘吸收されませんが蜂蜜は蜂が造つた時から葡萄糖と果糖との混合物で直接人體に吸收され、直ぐ酸化作用でエネルギーを出し體力を持續します。だから消化力のない重症患者に注射すると含水炭素の欠乏を補つて救急效果が擧げられます。それだけでなく、亦蜂蜜は極く緩和な下劑で腹痛もなく氣分よく通じをつけます。大人は二〇―三〇瓦飲み、又は浣腸料にします。小兒には營養をかねよい下劑です。



雜巾の御注意

大抵の人は、雜巾を刺すに全面一樣に刺しますが、雜巾は邊よりも眞中が一番損み易いから中央部程、緻密に刺しておくと倍以上も長持がします。雜巾がけはなる可く水がよろしいが其中へ糠を一握入れて雜巾を絞ると、糠の中の脂肪分の爲に、板敷でも柱でもよい艶が出ます。

キング原稿募集入選者披露

入選篇

賞金	題號	評點	作者	住所
五百圓	恐怖の輪（長篇）	九四・七	榎本俊二	東京市深川區鶴歩町二ノ二小山芳松方
百五拾圓	不滅の燃料（短篇）	九四・三	横江玄氏	名古屋市南區瑞穗町大辻二九
參百圓	罪に翳す影（長篇）	九四・〇	安武善廣	福岡市上祇園町一七
百圓	ケンブラット大學の大實驗（短篇）	九三・六	安部星明	弘前市外富田村借行社通り
貳百圓	鼓の怪（長篇）	九三・三	山口忠敏	北海道上川郡江丹別村上江丹別
百五拾圓	兵營内の殺人事件（中篇）	九三・〇	江島浪雄	東京市本所區向島請地町八五瀨戸方
六拾圓	鯉魚の怪（短篇）	九一・六	栗須東風	東京市小石川區原町一〇
五拾圓	惡盜夜話（短篇）	九一・三	松本芳夫	東京市小石川區久堅町四山崎方
四拾圓	頭の惡い男（短篇）	九〇・〇	山口洋堂	北海道上川郡江丹別村上江丹別
參拾圓	古墳の秘密（短篇）	九〇・〇	松下强耳	鳥取市西町二八〇
百圓	紅玉禍（中篇）	九〇・〇	山路武夫	東京市芝區三田豐岡町四八松田方

選外秀逸（薄謝贈呈）

題號	評點	作者
狙はれる男	八九・五	川尻一榮（德島）
博士の惱み	八九・三	石垣風人（松山）
生ける死人と拾得者	八八・四	飛松瑞穗（佐賀）
木槲道人の奇拔	八八・三	後藤克郎（愛知）
鵰片窟の惡鬼	八四・七	武下丈賀（千葉）
湖畔の殺人	八四・六	山寺濟助（茨城）
爛熟の宇宙	八四・〇	島田武夫（横須賀）
コマ公の驚き	八四・〇	出村雄秀（石川）

選後に

應募原稿（探偵、怪奇、冒險、科學小說）實に壹萬三千五百六十四篇の夥しき數に達し、その選に如何に苦心と時日を要したかは、前號に於て申上げた通りですが、しかしその殆ど悉くが、眞劍味のある且つ熱誠の溢るゝ作品であつたことは、私共選者にとり何よりの喜びで、ございました。

全く斯の如く眞摯な作品に對しては、その一字一句の末までも苟くしてはならぬといふ强い責任感から、數名の記者專らそれに當り、熟讀玩味、愼重審議、態度は飽くまでも公明正大、而も出來るだけ多くの入選者を得るやうにと努力したのであります。

S線にからむ秘話	八八・二	泉　淳二(岡山)
悲戀の毒藥	八八・〇	猪川　松治(鳥取)
妖魔は嗤ふ	八八・〇	沼澤　東衞(東京)
第三の復讐	八七・四	唐木　妖馬(福岡)
熊狩り	八七・三	前田　枯骨(北海道)
生と死の闘爭	八七・二	淡谷　芙蓉(東京)
アルモの大洞窟	八七・二	長谷川　正明(名古屋)
葬送行進曲	八六・八	酒井　嘉七郎(神戸)
奸計	八六・七	北川　東太郎(盛岡)
消え去つた少女	八六・三	下里　秋夫(名古屋)
癩患擬裝團	八六・二	衣川　驚治(小樽)
甚内橋の殺人	八六・二	田勢　秀雄(仙臺)
招く靈魂	八六・〇	香川　政市(福岡)
間道	八六・〇	右原　一好(熊本)
少年名探偵	八五・五	守川　正明(京都)
ある探偵小說	八五・五	山口　白陽(熊本)
怪事件突發	八五・四	富士　錦城(山口)
一滴の紫痕	八四・〇	末宗　貞人(大分)
逮捕する迄	八三・〇	和田　牧介(松山)
死出の罠	八二・七	菅原　西藏(茨城)
活殺自由劍	八二・五	桂比　呂史(函館)
深夜山中の怪女	八二・三	鵜沼　彥壽(福島)
密輸入團	八二・〇	奈賀野　翠夢(門司)
呪火	八二・〇	淺井　波留美(?)
怪光の彼方	八一・五	蕗谷　黎治(鳥取)
妖術師	八一・三	石川　進(仙臺)
忍込んで來た男	八一・二	池田　梨夜(兵庫)
夜半の奇聲	八一・〇	南雲　喜三郎(新潟)
謎の老人	八〇・〇	堀邊　政吉(福岡)
木臼の怪火	八〇・〇	西村　錦英(山口)
疎水の夕べ	八〇・〇	永江　猛(?)
巖窟の珍寶	八〇・〇	大坂谷　義篤(大阪)
神祕山人參	八〇・〇	鈴木　賢(熊本)

選外佳作

○呪の家　富久字(長野)○雪折れ竹　平野驍(兵庫)○ダイヤの價値　高木鹿雄(宮崎)○毒婦の戀　平川清靜(臺灣)○鼈甲の下駄　田中嘉一郎(兵庫)○犯人は誰　田中妙子(北海道)○丸山峠の怪美人　吉村結二(鳥取)○小說を書く皇帝　小野勘藏(高知)○異郷の好漢　中島勇(靜岡)○X・NOI　稻川寅治(神奈川)○價千圓の戀　權藤松雄(福岡)○吹矢の殺人　村山完一(東京)○蛇の復讐　鈴木毅一(千葉)○落城　葵丘太郎(岡山)○名探偵　玉村玉人(兵庫)○變化鬼女繪物語　稻田勇(京都)○偶像の怪異　宇多川榮子(東京)○惡滅壽生　庭山結信(新潟)○火を吐く達磨　金野細雨(宮城)○選擧運動費　久永いはほ(東京)○鰻の奇談　神垣直(廣島)○千葉笑ひ　大野月男(東京)○シャゴ〳〵馬　尾崎笑月(香川)○壁の彼方の戀人　高牧代助(東京)

○玉井勝則○神村菊一○伊藤濤翠○大野榮一○林一雄○小宮英次郎○布浦芳郎○高橋軍太郎○片岡伸○畠山茂吉○龜井盧無郎○伊藤章雄○市村嘉壽仁○上野寒考○松生一鶴○小林秀男○坂本正一○谷川影月○梅垣馬孫○西垣好雄○富崎一義○菊地慶二○玉深○江頭稔○松本弘○朝倉いさを

ところが殘念なことには、何等朱筆することなしにこの儘キング誌上に揭載し得ると思はれるものは、唯の一篇も見出すことの出來なかつたことでした。漸くにして十一篇を入選と定めたのですが、これとていよ〳〵揭載の場合は、各〻皆多少の手入れはしなければなりません。このことは入選者諸君に豫め御諒解を願つて置きたいのであります。

尙落選篇に對しては、何としても血の滲み出るやうなその御苦心と眞劍味とを思ふ時、尊いその勞に酬いざるべからずとの衷情から、特に今回に限り、最後の選にまで殘された入選篇以外の作四十一篇に對し薄謝を呈することにいたしました。尤もこの分で萬一修正改作の上誌上に揭載するといふやうな場合がありました節は、その都度別に適當の原稿料をお送り申上げることにいたしたいと思つて居ります。

終りに臨み、熱誠にも御投稿下すつた應募者諸君に對し、謹んで深甚なる感謝の意を表し、併せて今後とも一層御精進の程切に希望いたします。

(懸賞發表次頁にもあり)

實生活萬般に關する實際談

美篇○河合よね子（神奈川）○小川矢須枝（新潟）○横溝生（神奈川）○伊藤雄三（東京）○後藤喜一（神奈川）○高橋節雄（東京）○雨宮兵衞（山梨）○松本春吉（東京）○柿沼紅二郎（東京）○河本靜子（京都）○小川市藏（朝鮮）○林正二郎（大阪）○工藤進（熊本）

長篇○廣瀨芳郎（埼玉）○伊藤雄三（東京）○淺野一雄（熊本）○中西昭夫（新潟）○吉崎善造（神奈川）○三久保勢平（兵庫）○佐野武夫（神奈川）○田村久一（山口）○伊藤雄三（東京）○渡邊光雄（愛媛）○廣木たけ子（北海道）

可篇○高橋幸壽（鳥取）○田部井孫一（群馬）○島陰讓（岐阜）○田島明次（神奈川）○伊藤靜惠（愛媛）○平出雪枝（山口）○松村仁三郎（石川）○淺野銀月（神奈川）○河上政太郎（德島）○山口峰吉（三重）○川崎健次郎（新潟）○川崎一郎（靜岡）○靑木福松（新潟）○阿部猛（大分）○原田信一（滋賀）○塚本太造（東京）○中尾勝美（山口）○上關千浪（岩手）○上野多門（横濱）○増子寅松（茨城）○竹下悅太郎（兵庫）○關本國男（朝鮮）○若月元（新潟）○矢部清（福島）○山本絹（愛知）○靑山春吉（愛知）○信よし（長崎）○奧壽子（兵庫）○石井不美男（神奈川）○清原恭壽（兵庫）○平田正吉（富山）○山口漣花（三重）○佐藤正雪（岐阜）○佐藤義雄（岡山）○近藤三郎（愛知）○船本義次（大阪）○中西常治（兵庫）○福田孝子（大阪）○池貝とみ子（千葉）○松下ふじ繪（靜岡）○志多淸一郎（東京）○山田聽男（愛知）○大山晋吉（愛知）○伏見鶴子（兵庫）○山本健三（愛知）○中村淑子（東京）○宇城こはる（兵庫）○中里素行（神奈川）○鈴木周造（東京）○栗藏百合子（石川）○姫村花子（鳥取）○折田輝夫（東京）○鷲谷英山（福岡）○吉村陸三郎（和歌山）○川崎一郎（靜岡）○小林定美（東京）○川村伊三郎（東京）○伊藤敏子（北海道）○五十樓庄作（靜岡）○山田富美（廣島）○羽田野ふさ（東京）○前田正本（三重）

——以上Aの部——

美篇○上野多門（神奈川）○佐分利貞光（岡山）○土橋てる子（東京）○後藤房（愛知）○本庄松子（京都）○伊藤十五日（北海道）○たか子（長崎）○山路百合子（大分）○立花岩吉（岡山）○清原恭壽（兵庫）○野崎明（岡山）○高塚廣治（岡山）○安井豐（岡山）

長篇○高木鐵一（北海道）○大久保矢枝子（德島）○上野多門（神奈川）○松永鎌洞（愛知）○日本家庭料理研究會（東京）○小林定美（東京）○佐藤七次（兵庫）○濱名逸郎（群馬）○宮下貞（長野）○府金勇三（秋田）

可篇○木梨千代子（兵庫）○外山白濱（東京）○多鶴子（山口）○坂下京二（神奈川）○信よし（長崎）○奧村梅子（福島）○是枝武夫（鹿兒島）○黑江喜三郎（京都）○中川庄三（東京）○馬場茂治（神奈川）○丸橋葉柳（群馬）○高木鐵一（北海道）○大久保矢枝子（德島）○井上淸（京都）○竹下悅太郎（兵庫）○濱名逸郎（群馬）○堀内愛子（香川）○白仁不二子（福岡）○喜葉良（住所姓名御一報を乞ふ）○鹽見卓三（京都）○市川勇一（三重）○堀江達信（兵庫）○坂下京二（神奈川）○白土金治郎（千葉）○大島善政（東京）○鈴木秀夫（愛知）○長船熙（兵庫）西大隆（兵庫）○木内榮（靜岡）○中島義次（熊本）○駒崎繁利（福井）○奧智子（大阪）○栗田光一（靜岡）○増子寅松（茨城）○大橋松人（福島）○早川絹江（兵庫）○高橋武男（島根）○小林定美（東京）○池澤平一（福井）○上關千浪（岩手）○渡邊淸子（山口）○山下久治郎（千葉）○藤井眞人（大阪）○後藤房（愛知）○石川文子（東京）○古木隆（神奈川）○田窪寶子（愛媛）○たか子（長崎）○矢野まつゑ（三重）○細島敬三（栃木）○伊藤雄三（東京）○近藤萬治（愛知）○元島英造（靜岡）○鈴木白陽（神奈川）○野口京子（東京）○木内榮（靜岡）○越智豐太郎（愛媛）○山根定次郎（千葉）○森田幸子（高知）○奧田篤子（和歌山）——以上Bの部——

佛佐吉の話

廣瀬操吉

永田佐吉は美濃國羽栗郡竹鼻村の人である。天性温厚で、よく義理を辨へ、自分は儉約にして他人に施したから、人はみな佛佐吉、又は長者といつて讃め稱へた。

佐吉に一人の母があつた。佐吉がまだ長者にならぬ前、母は生計を助ける爲に、家に在て餅を商ひしてゐた。佐吉は常に母に向つて、餅を大きくすれば他の家の餅が賣れなくなつて氣の毒だから成るべく小さくするやうにと言つた。然しそれでも人々は佐吉の心を知つてゐるから、皆買ひに來てくれた。又佐吉綿を商ふにも秤といふものを用ひず、人に好きなほど取らせて少しも疑はなかつた。

それだから人々も佐吉の眞心に感じて、賣る時は多くやり、買ふ時は少く取るやうにしたから、家業は益々富み榮えて終ひには、何不自由のない身となつた。



或る時、佐吉は商用で近江へ行き、大金をもつて山道へ差かゝると、覆面した强盗が二三人現れて、金と衣服を置いて行けといふ。佐吉はその言ふがまゝに金と衣服を脱いで與へ、『己れはお前たちの言ふことを聞いてやつたから、お前たちも己れの言ふことを聞いて本道まで案内して貰ひたい』といふと、强盗共も理には勝てず、澁々大道まで佐吉を案内して行つた。そして別れる時になつて、賊が佐吉の住所を聞くから、『己れは美濃の佐吉だ』と答へると、强盗共は驚いて、『それでは鼻竹の長者樣でしたか、これは飛んだ御無禮を致しました』といつて奪取つた金品を殘らず返し、叩頭してコソ〳〵逃げ去つたといふ。

佐吉老年になつて其行狀領主に知られ、米數石を賜つて其善行を表彰された佐吉は寛正元年歳八十九で大往生を遂げた。



純愛正義の女校長

小野寺あいし女史血涙物語

教育公論主筆 金野細雨

大正十四年九月のことである。宮城縣登米郡上沼村上沼小學校の訓導小野寺あいし女史が、同じ村の櫻場小學校へ、校長として榮轉する事となつた。

縣下における最初の女校長である。

それと共に、櫻場を中心とする附近各字が聯合して、女史の排斥運動をおこした。

何だ女か——その輕侮感情に根ざした不快である。

『女などを校長として、こつちの學校へよこすとは、當局も怪しからぬ。』

『この地方を侮辱したものである。』

『來るやつも來るやつである。』

『そんなものは受けつけるな。』

『我々の子弟を女の校長などに任せておきたくない。』

これが輿論となつた。

が、女史はその任に堪へぬほどの、劣つた人物であつたらうか。

× × × ×

女史は明治三十九年に縣の女子師範學校を出て、最初に教鞭を執つたのは登米郡櫻岡小學校、次で仙臺市南材木町小學校に轉じた。

その前にやはり市の小學校に奉職の小野寺嘉藏氏に嫁いでゐたが、家庭の和樂は長くはなかつた。夫は物質方面の空想家で、教職よりは商賣を好んだ。ひま〳〵に肥料の仲買に手を出してゐて、三人の子供ができた頃には全く失敗してゐた。失敗。失望。自棄。よくある忌はしい徑路である。夫は次第に身を持崩して、家をよそに酒と女を漁りまはるやうになつた。

むろん教職もやめてしまつたので、女史は我が薄給で一家を維持してゆかねばならなかつた。窮乏の月日は長く續いた。

が、夫の蕩けた夢はさめなかつた。

晝は女史は教壇に立つ。その不在の間に夫は妻や子の衣類を入質して遊蕩に使ひはたしたりした。米屋の通帳を利用して、

五斗、三斗と白米を取寄せ、他に賣つて料理屋へ入浸つたりした。

その穴埋めはすべて女史の肩にかゝつてゐた。放蕩に荒んだ夫そのうちに子供が四人になつてからである。入院となつては費用は肉體の衰へたところへ肺患に襲はれた。見る見る殖えたがかさむ。女史の俸給で間に合ふはずはない。のは負債である。

しかし明治から大正へ十餘年の間、女史はこの生活苦と闘ひつゝも、職務にかけては一日も怠りはなかつた。熱心な研究と誠實な教授ぶりは、上司にも認められ、生徒父兄の評判も好かつた。

かうして大正七年。登米郡上沼村の上沼小學校に轉任となつた。

上沼は夫の故郷である。姑がゐて夫の療養にも都合がよかつた。負債を負ひ、病夫と四人の子女とを連れて上沼に移つた女史は、貧しさに變りはなかつたが、夫はもう長い間の亂行を悔悟し、姑も女史を深くたよりとしてゐたので、精神上には女史は久しぶりに安らかさを得てゐた。

が、一つには夫を恢復させたい。一つには負債を早く返したい。



女史はやはり奮闘を續けた。休日には山畑を耕し、なみの日にも未明、黄昏にはよく鍬鎌を執つてゐた。養蠶期には桑の葉の賃採りもした。

教壇の人は一面には手拭ひかぶりの女勞働者だつたが、その努力の結晶は數年の間に全く負債を返却した。

しかし此間にも教育者としては一校の新知識であつた。それ

は研究心が強かつたからである。生徒の取扱ひには慈愛と懇切が溢れてゐた。しかも最も多忙な教務係、會計係を兼任して、事務の捌きに紊れがなく、數年を通じて一度の缺勤遲刻すらなかつた。

もう一つ病夫の介抱といふ大きな勤めもあつた。

『どうしてあゝも優しく手も頭もまはるものか。どうしてあゝも身體が續くものか。』

村の人は然う云つてゐた。

大正九年。夫は愛に滿ちた妻の看護のうちに、感謝の涙を殘して墓となつたが、その夫婦生活の終りまで、夫に對する愚痴を、女史は一語も漏らしたことがなかつた。どれほどまめやかな心であつたか、いつも優しき妻だつたのである。

大正十三年二月。縣知事はこの犠牲美の女性を貞婦として表彰した。

貞婦であると共に、優秀な女訓導である小野寺あいし女史は、その精勵と手腕、功勞を認められて、大正十四年九月、櫻場小學校の校長を命じられたのである。

酬いらるべく酬いられたのだ。當然の昇進であつた。

が、櫻場を中心とする各字の人々が排斥運動を起した。

女史の過去に曇りはない。晶明、月の如き人格者であるが、たゞ女であるがゆゑに。女の校長を迎へることを恥辱とするがゆゑに。

× × × ×

女史の赴任と共に、排斥運動は露骨となつた。

この地方では從來、小學校長が青年團長を兼ねる例であつたが、櫻場附近各字の青年團員は、女史を團長に仰ぎたくなかつた。猛烈に反對した。

排斥の第一矢。

村民はよく學校に集合して、示威的の行動をした。不穩な放言をした。かうすれば女史が居たゝまれずに自決するであらうと思つたのであらう。

有志たちは郡役所に押しかけて新校長不信任の陳情をした。

排斥の二の矢。三の矢。

しかし女史はなすがまゝに任せてゐた。教職に精神を捧げてゐる女史は、この天職に對する強き自覺に立ち深き信念をもつてゐた。辭令によつて就任した身は、故なき排斥を受けたとて、狼狽てゝ輕き進退をしたくない。女史は侮辱と壓迫を忍んだ。

そのうちに例年の例の運動會の日が近づいた。

會の費用は各字の區長が斡旋して寄附する例になつてゐるので、女史はその準備の相談のために各區長を招待した。が、出席したのは唯一人である。

使を走らせて再度の案内をしたが、ほかの區長は顏を見せなかつた。排斥もこゝまで來ては深刻である。

相談は成立たぬ。寄附がなくては運動會の賞品も調へられぬが、學童たちはそれを樂みとしてゐるのである。

『では賞品は私が調へる事に致しませう』

女史は然うきめて相談會を中止した。貧しい收入を割いて可愛ゆき生徒たちに、運動興味を與へようと思つたのである。

これが傳はると、

『なに。生意氣な。』と一部の村民が怒りだした。彼等はその子弟の少年少女たちに向つて、

『お前たちは女の校長なんかの賞品をもらつて來てはきかないぞ。』いきまいて戒めた。

子供は正直である。學校へ來て話しあふ。おのづからに女史の耳に入つた。櫻場小學校の生徒は約三百人。

女史はある日、三百の學童を校庭に集めて、間もなく開かるべき運動會の賞品について、一つのお話をした。

『今度の運動會には寄附金が集まらぬから、賞品をつくる事が能きませぬ。それで私が代りに、少しでも作るつもりでしたが、あなたがたは、そんな品を貰つては、家へ歸つて叱られるさうです。ですから今度は賞品無しの運動會を致しませう。けれども是れは誰がわるいのでもありません。唯私のやうな者が校長になつてゐるからでございます。私のために皆さんは、去年のやうな運動會ができません——』



女史はしづかに諭した。

『皆さんには氣の毒に思ひますが、けれども賞品をあてにするのは、ほんとうの運動會ではありません。賞品などには目もかけずに、皆さんが揃つて勇ましく快く運動競技をするのが、尊い運動會でございますから、皆さんは其心もちで、今度の會は賞品は無くとも、どうぞ樂しくやつて下さいまし。』

樂しくと云つた時には、女史の頰にははら〳〵と涙がつたうた。

生徒たちは夫れを見のがさなかつた。うつむいて泣きじやくつた。おの〳〵の顏の感激が、純眞と信頼とに滿たされてゐた。

その會を彩るに缺くるものはあつても、希はくばその日の樂しみは圓かなれ。さう祈る女史と師と仰ぐ人への學童の捧ぐる

尊敬とが響きあふと共に、女史はたまらなくなつて嗚咽した。

その日おの〳〵の家に歸つた學童たちは、おの〳〵の家庭で夫れを語つた。

女なるが故に、呪ひの中に立つ女史の悲痛を、眞實を以て理解したのは、同じ女性である學童の姉や母であつた。祖母であつた。

各字を蔽うた排斥の裏から、正しき同情の流れが動きだした。これが表に出て來た。各字の婦人たちは寄り〳〵相談をして、女史のために楯として立つた。

その頃には女史の前任地下沼を中心とする人々の間に、女校長後援會が生れてゐた。

『櫻場側で嫌ふならば、こつちの學校と校長を交換をすればいゝ。』

この後援會は熱心であつた。具體的に運動した。が、登米郡視學阿部金三郎氏は、女史を信ずる一人であつた。理由なき排斥が、やがて女史の人格の光によつて解け去ることを信じて、校長交換などの彌縫策を斥けたが、期待ははづれなかつた。



小野寺あいし女史

閒もなく村長と、二三の有力者とが起つて、融和に奔走した。と共に女史の眞價も次第にわかつて來た。元來櫻場地方は郡内でも屈指の教育熱心の地方である。一時は反對したが、熱心なだけわかりも早かつた。

× ×

× ×

小野寺あいし女史は今も櫻場の校長である。赴任當時の反感は名殘りなく身邊を去つて、現在の女史は平和と信頼の中にゐる。閒餘に耕す女史の畑には、梨、櫻桃がしげつて、長女は既に女學校を終へ、長男は佐沼中學にゐる。（終）

こんなことは不衛生である

至誠病院長　吉岡彌生

色々な例が澤山ありますが、哺乳兒に、ゴムの「乳首」を含ませることなどは、極めて不衛生であると思ひます。子供の事ですから、その「乳首」を落して、それに汚い疊の塵埃、絨毯の上の黴菌等を附着させた儘、またそれを含んだりするのですから考へてもそれが如何に、不衛生であるか理解に難くないと思ひます。私共は先づ斯る點から衛生を實行すべきでせう。

モルトケ將軍（口繪參照）

澤田謙

ナポレオンのフランス軍は、喇叭を吹き樂隊を鳴らしながら、窓外を過ぎてゆく。この喧騒を耳にしつゝ、玻璃窓に映ゆる夕照を受けて、大學の講壇の上から、獨逸民族の光榮を高らかに唱へたのは、愛國の哲學者フイフイテでありました。

『勝てよ、然らずんば、死せよ』

彼の聲は五十年の間、獨逸人の耳朶に鳴り響いてゐた。

如何にして佛蘭西に復讐すべき乎。陸軍大改造の重責を負つて起つたのは、參謀總長モルトケ將軍であつた。

『我國の兵營はすなはち獨逸靑年の學校である』

彼は全國皆兵の制度を開らき、旺盛なる靑年を集めて、精鋭なる軍隊と化した。むしろ全國を化して一大兵營とした。そして堅唾を呑んで、時機を待つた。

時は來た。――一八七〇年、普佛の戰端は開かれ、獨逸軍の鐵蹄は、秋の木の葉を捲くやうに、佛蘭西領を蹂み躙つた。その總司令はモルトケ將軍であつた。

獨逸大帝國の二大柱石は、言ふまでもなく、宰相ビスマルクと、將軍モルトケである。が、この獨帝の股肱は、何時でも仲が惡かつた。

『モルトケは怪しからぬ。重大な作戰計畫に私を參與させない。あとで新聞で承知するやうな始末だ』

と、ビスマルクは怒つた。

『ビスマルクは、軍事上のことまで要らぬおせつかひをして、一切の計畫は、豫め自分に見せろなどといふ、不埒な奴だ』

と、モルトケは憤つた。

しかし獨逸帝國はこの二英傑の力でできた。

これは性格上の相違であつた。多血質で情熱的で意志の人であるビスマルクは、冷頭で寡默で思索的なモルトケとあはなかつた。

痩せこけた長身に、豹のやうな眼を繊せたモルトケ將軍は、一面において、貴族的な風趣を具へてゐた。彼は文學を好み、自ら「二友」といふ小說を著はした。音樂者モッツアルトの愛好者で、また外國の詩集を飜譯したりした。

一見すると、學者か村夫子といふやうな印象を與へる。とても砲烟彈雨をくゞつてきた勇將とは思へなかつた。

普佛戰後、獨帝は文武百官の記念帖を作らうと、その作製をランゲンブルグといふ寫眞師に命じた。その日寫眞師は、勇將モルトケの來臨を待ち受けてゐた。

そこへ飄然と姿を現はしたのは、一人の老紳士であつた。

『お氣の毒ですが、今日は撮影をいたしませぬ』

『え、何うして？』

『元帥モルトケ伯が、御來臨になりますので……』

『さうか、では大事ない。俺がモルトケぢや。』

さういふ物語も傳はつてゐる。私はモルトケ將軍の有する、かうした一面に非常な興味を持つてゐる。



○編輯だより

◇――本號の特輯として誇りたいものに左の三つがある。その一つは特別口繪として、卷頭に掲げたる『國威發揚、明治大正昭和大繪卷』である。畫壇の大家が特に揮毫された、本誌ならでは容易に得られぬもの、印刷また極彩色の高級美術オフセット。各位に十分の清覽を得たいものである。

◇――その二は「偉人傑士の少年時代」「大雄辯家ウエブスター」をはじめ、洋の東西、古今を問はず達人傑士十數人の少年時代を如實に描出したもの。恐らくこれに感激せぬ人はあるまい。

◇――『藝道の極致、驚嘆物語』これはその三である。えりすぐつた名人の名場面、最高潮の大場面、興味津々としてつきず、驚嘆感嘆これを久しうするものばかり、しかもその中には測り知るべからざる大教訓が含まれてゐる。近來出色の讀物と自信してゐる。

◇――引つゞいて『御大典記念、臨時增刊』の編輯。何しろキング創まつて以來の試みであり、昨年の『明治大帝』にも優した大部數刊行のこととて、編輯局の活動ぶりは、それこそ全く死物狂ひ、よいが上にもよい原稿は入れたいし、〆切日は目睫に迫るし、夜も日も足らず『一日が四十八時間あつたらいゝなあ』など悲鳴を上げる記者があるくらゐ。

◇――その努力は酬いられて、實に集りも集つた名篇傑作、今や編輯局机上山と積まれて、眞に壯觀とも偉觀ともいひ方がない。吾等一同、ただ歡喜と感激に打ちふるへてゐるのみ!

◇――而もこの『御大典記念臨時增刊は定價僅に三十錢といふ『敷島』二個にも足らぬ破格の犧牲的大廉價しかも、とても堪らぬ程面白い上に全篇悉く感激、感動、その上繪本位と來て居るから、もう見るからに『これは素敵だ!』との感を懷かせる。これこそ日本國民は必らず一人一册、是非見るべき名出版と堅い堅い信念を以て、玆に申し上ぐることが出來るのである。

一人一語 作家の作家評

『震災後、大衆作家と稱せられる人達が、雨後の筍のやうに頻出した。これは結構此上もないことだ。何れも力作を發表して、夫々の美しい獨自性を見せてゐるが、中でも本田美禪氏の老練さ、圓熟さには頭が自づと下つて來る。これを棋界でいふなら、本田氏は名人といふ格だな、キングではいい作家を持つたものだ』と三上於菟吉氏ある日、感歎これを久しうした後、それがお世辭や情實褒めでないことをはつきり云つて、最後にかうつけ加へた。『私的にも公的にも、僕は本田氏とは何の關係もあるわけぢやないがね。』



○山中峯太郎氏、一夜、記者と會談の折、『私は商賣柄、毎月の各雜誌の小説は大抵讀んでゐるが、最近非常に感にうたれたのは、佐々木邦氏の『新家庭双六』だ。どうです。あの諧謔振りの巧さ。而かもチヨツトも下品のところがなく、どこ迄も氣品の高い點、正に天下獨步の感ありですね。』と例の熱辯で賞めること〱

○讀者の聲

○キング十月號を手にした時のうれしさ。菊池寛先生の『東京行進曲』と吉川英治先生の『萬花地獄』を一番先きに讀んだ。小枝角太郎はこれからどんなに活躍するだらうと思ふと十一月號が待遠しくてならない。（大阪　大原駒吉）

○僕は年少ですけれどもキングの愛讀者です。來る御大典記念に一大臨時增刊を出すさうですね。僕は大いに喜びました。そして最後にキングの益々世界的ならんことを希望します（新潟　SK生）

○残暑きびしい初夏、汗にまみれて終日勞働をしつゞけた疲れた體で家に歸る夕、何時も我々農民達を慰めてくれるのは唯一册のキングのみだ（茨城　松田星花）

○キング十月號の表紙。あゝ何たる美なる哉。吾、稱讃の言葉盡く、これこそ内容充實と相まちて、實にキング中のキングなり。百五十人の吾がクラス、キング黨百三十餘人。（靜岡　南海一學生）

素敵な評判

湧立つ人氣

キング增刊

○キングは他に何もいふことはないが口繪に風景寫眞（一頁大）のないことだ、風景寫眞も入れて下さい。（愛知　柳原清彦）

○私は創刊號からキングにより教訓をうけてゐる一青年です。御恩は筆紙に盡せません。記者各位の御壯健を祈ります。（樺太　山下生）

○我等のキング！　私は永久にから叫びたいです。私の大好きな青春ももうお終ひですね。流石中村武羅夫先生ですね。東京行進曲も愈々本舞臺ですね、死よりも强しの綾子も氣の毒です。皆々キングはよい小説ばかりです。こゝに諸先生や記者様に厚く御禮を申し上げます（京都　中井三郎）

◇記者より――右の外數百通の熱心な愛讀者の通信を頂きましたが限りある紙面は全部それを載せられません。何卒あしからず。

お斷り

九月號誌上發表の最短篇原稿當選者中、編輯の都合により發表後れの方が八名ございました。玆にその芳名を揭げて、遲延を謝し、倂せて御諒承を願ひ上げます。尙賞金は追つてお送り申し上げます。

○和田一子（長野）○神山青葉（栃木）○渡邊信夫（宮城）○杉山幾一郎（岡山）○淺見敏野（埼玉）○福井悅雄（北海道）○野村時惠（兵庫）○伊藤雄三（東京）

○十月號所載『世を警むべき名士の寸言』の記事にて原邦造氏の肩書の中、川崎第百銀行頭取は誤りにつき玆に謹んで取消します。

醫者も患者も萬人が渴望せる

消炎性、鎭咳祛痰劑の大發見

◇…肺炎、流感の如き高熱に咳嗽の伴ふものも……肺結核、肺尖カタール、肋膜の如き輕くても永引く熱と咳嗽……熱はなくとも治療藥のない百日咳、喘息にも即效!!

且つて其の例を見ない驚異すべき藥劑であります。

近時曖昧なる賣藥をさも効く如く廣告の力で賣り出されて居るもの頗る多くありますので、素人でも一見して判別の出來る樣實驗大家の實驗例を明記し左に御參考に供します。

消炎性鎭咳祛痰劑の出現……消炎性鎭咳祛痰劑とは熱を取り咳嗽を止め痰を切ると云ふ意味であります。一つの藥劑で完全に熱を去り咳嗽を止め痰を切りしかも副作用のないと云ふ藥があつたならとの理想は、全世界の醫者も患者も萬人が望んで來た事實であります。殊に肺結核、肺尖カタール、肋膜、肺炎患者は人一倍痛切に、その必要を感じるのであります。ところが嬉しい事には此の理想が遂に實現したのであります。

しかもその新發見藥は、副作用絶無の單なる一藥草で飲めば胃腸を壯健にして、肺炎、流感、氣管支加答兒の如き四十度からの高熱に猛烈な咳嗽を伴ふものも他の下熱劑を用ひずして、僅か一日か二日で全治したり、肺結核、肺尖カタール、肋膜の頑固な熱と咳嗽が去るのみか服用二三日で食慾を增し、盗汗が止るといふ、又今日迄治療藥なく非常に死亡率の高い百日咳が四五日で全治したり、慢性の喘息(但し氣管支性喘息に限る)でさへ數日の服用で根治すると云ふ、世界の醫學界を通じて未だ

副作用多き在來の下熱劑は不用

醫學博士　岡部爾三郎先生談

私は先年大谷光瑞氏と共に南洋諸島を視察し、遂にジャワ島スラバヤ市に於て開業したのであります。その頃園藝家佐々木氏より、土人間で貴重な神藥として咳嗽喀痰ある場合内服し著効あると稱する「ダウンチリメン」草を分與せられたので、先づ自己の慢性氣管支加答兒に試みたところ、一週間にて著しく咳嗽喀痰を減ずるを認めた。次いで自己の家族及患者の種々呼吸器病に應用し非常な好成績を得た。

大正十三年歸國後本草の分析を九州大學と福岡化學研究所に乞ひし結果本品の有害成分を含まない事が知れた。仍て九州大學病院を始

め各病院各専門家に其の試用を願つたが、三年後の諸大家の所見は大體に於て私の夫れと一致する、本藥草は在來の鎭咳袪痰劑と違ひ下熱の作用強力にして、しかも何等胃腸を害せず肺炎、流感の如き高熱にも他の下熱劑を併用する事なく極めて短日にて奏効す。本品は百日咳、喘息（氣管支性）に内服と吸入を併用すれば著効がある。その他の呼吸器病例へば肺結核、肺尖カタール、肋膜等にも偉効あるが私は茲に自己の實驗例を詳述する事を遠慮する、夫れは私が本藥草を日本に紹介したる事と、私の信ずる所は第三者より見て、贔負目に評價し過ぎるとの批難を被る恐ある爲であります。

一、肺炎

四十例（四十人實驗す）

三日間ノ服藥デ全治セルモノ　四人
五日間ノ服藥デ全治セルモノ　十人
七日間ノ服藥デ全治セルモノ　十一人
九日間ノ服藥デ全治セルモノ　八人
十三日間ノ服藥デ全治セルモノ　四人
十八日間ノ服藥デ全治セルモノ　三人

之に依れば四十人中九日以内で全治者實に三十三人であります。實驗者は三十八度から四十度の高熱者です。用法は本草の煎じ汁の服用と吸入であります。

一、流感（高熱で咳嗽を伴ふ者）

八十二例（八十二人に實驗す）

二日間ノ服藥デ全治セルモノ　五十二人
四日間ノ服藥デ全治セルモノ　十八人
六日間ノ服藥デ全治セルモノ　十人
七日間ノ服藥デ全治セルモノ　二人

右は流行性感冒で咳嗽烈げしく咽頭が赤くはれ痛み體温三十八度上下の者でありますが、二日の服用で五十二人の全治とは嘘の様な事實です。肺炎とか流感の如き高熱の患者にても在來の解熱劑アスピリンとかアンチピリン、ピラミドン等を併用しない方が却つて成績良好です。

一、百日咳

二十四例（二十四人に實驗す）

四日間ノ服藥デ全治セルモノ　九人
七日間ノ服藥デ全治セルモノ　三人
九日間ノ服藥デ全治セルモノ　六人
十一日間ノ服藥デ全治セルモノ　三人
十五日間ノ服藥デ全治セルモノ　三人

之で見ると僅か七日以内の服用で五十%、五割）の全快です。永くて十五日とは全く専門大家を驚かしたのも無理からぬ事、百日咳には今日迄特効藥なく從つて死亡率多かりしが本劑の出現に依此の危險がなくなつた譯です。百日咳には内服と吸入が必要で御座います。

一、急性氣管支加答兒

七十七例（七十七人に實驗す）

二日間ノ服藥デ全治セルモノ　十八人
三日間ノ服藥デ全治セルモノ　二人
四日間ノ服藥デ全治セルモノ　二十三人
五日間ノ服藥デ全治セルモノ　五人
六日間ノ服藥デ全治セルモノ　十六人
八日間ノ服藥デ全治セルモノ　七人
十日間ノ服藥デ全治セルモノ　五人
十五日間ノ服藥デ全治セルモノ　三人

以上は三十八度上下の高熱に咳嗽を伴ふ急性氣管支加答兒であります。今日迄の特効藥でも中々治療困難なものですが、本草に依れば僅か七日以内で七十七人中六十四人迄全治致して居ります。

前記の病症以外に、肺結核、肋膜、肺尖カタール、喘息、ヂフテリー、喉頭結核、感冒等尚數百例の實驗例が御座いますが、誌面の都合で省略致します。殊に肺結核、肺尖カタール、肋膜等には、熱と咳嗽を去り、盗汗を止め食慾を増すの効果は、實驗者の等しく認めるところにて、患者の方から進んで本劑を要求する位でありますが、私は五人や十人が全治したからとて之を肺結核の特効劑と稱し發賣する事は出來ません、今専門大家にお願して試驗中でありますから、いづれ近く更めて御發表申上げます。

本劑は前述の如く絶對的鎭咳、袪痰、解熱の強力作用あるのみならず、之等の病症を未然に防ぐ特徴あれば、各家庭殊に小供のある御家庭の常備藥として御勸め致します。

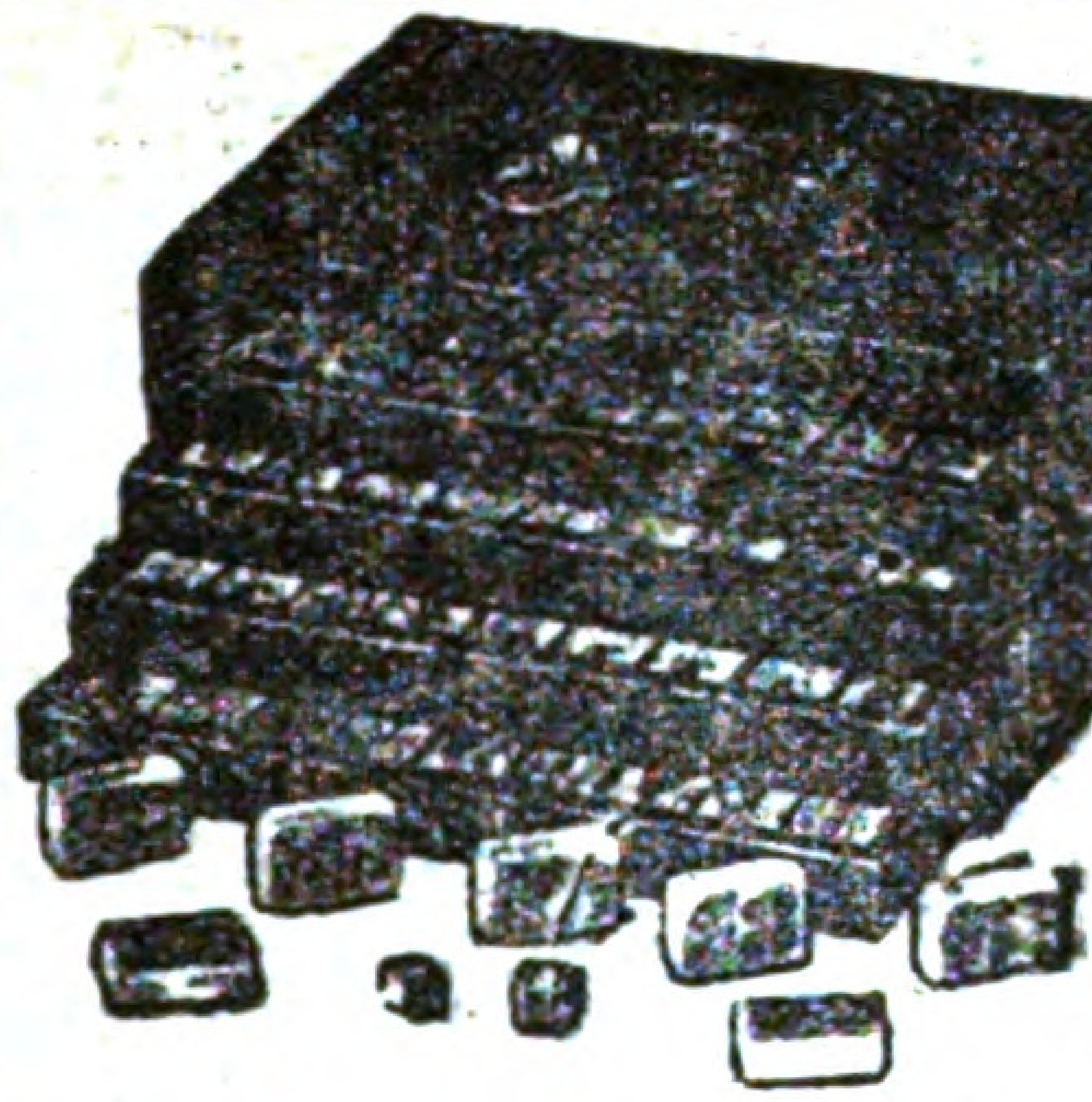
本劑は原藥草のまゝと、煎じる手數の不用の錠劑の二種類ですが、効力は皆同じです。左の記代理部で御取次ぎを願つて居ります。

藥價｛原藥草ノママ約一ヶ月分金貳圓也
　　｛錠劑、五日分、金壹圓也、拾五日分、貳圓八拾錢、三十日分、金五圓也、

送料ハイツレモ内地十二錢、領土四十五錢

東京市本鄕區駒込坂下町、大日本藥餅會聯社代理部（振替東京六六二九番）

本社代理部直輸入
世界的大流行の 支那遊戲 麻雀
◇新着支那製器具特賣



牛骨製厚肉上等極彩色の逸品　何れも上等容器計數器付

▼一號　特價　貳拾五圓
▼二號　特價　貳拾八圓
▼三號　特價　參拾圓
▼四號　特價　參拾五圓
▼五號　特價　四拾圓

荷造送料内地四十錢　領土九十錢

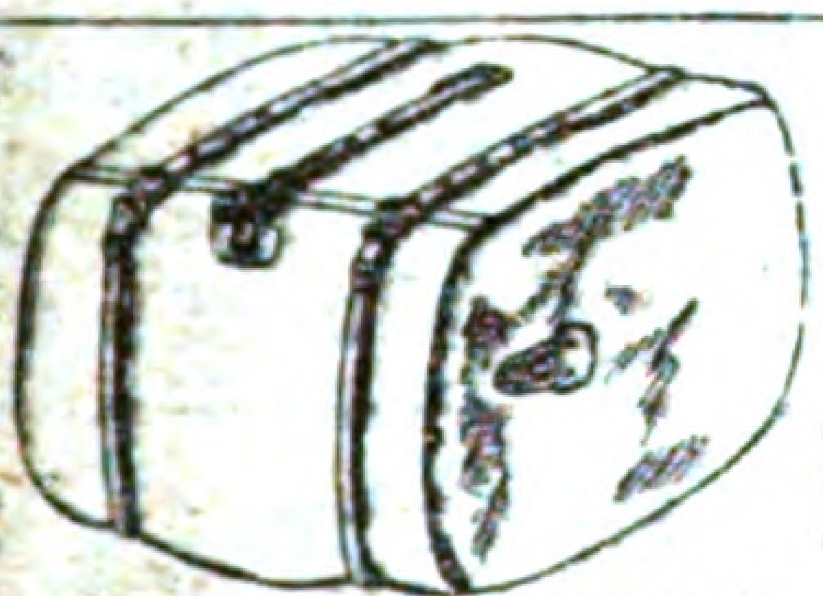
▽麻雀解說書　一圓　送料二錢

輕便自動マッチ
獨逸製「スプラ」



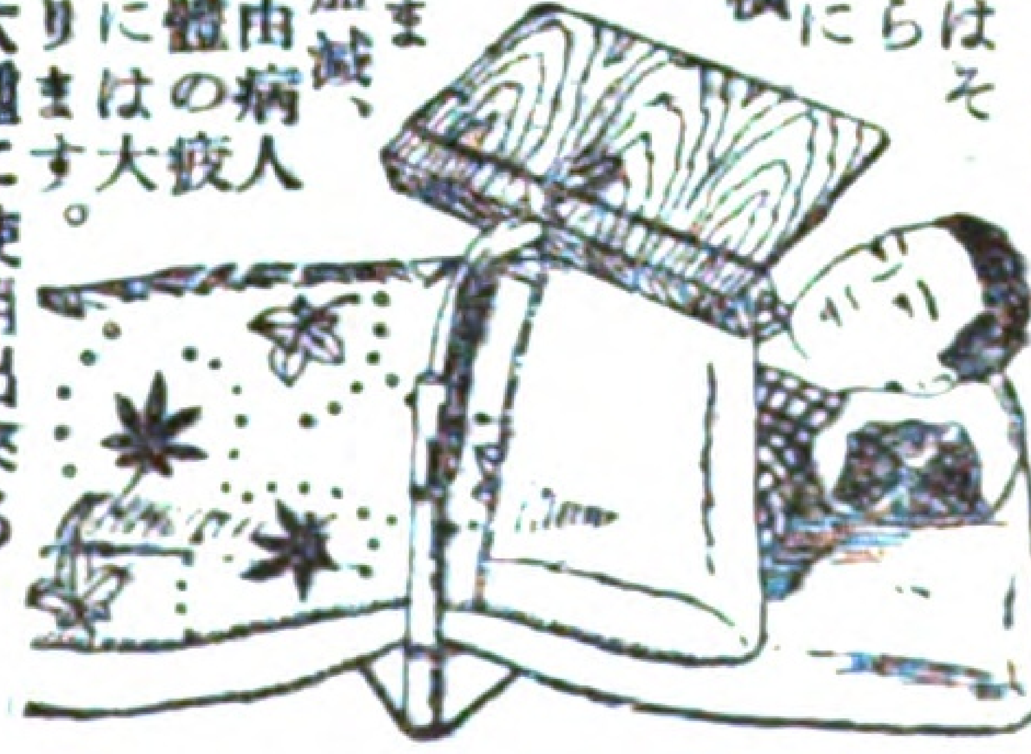
頭部の紐を強く引くと發火石によつて風雨中でも完全に點火する輕便マッチ、燃料はキハツ油ですが一回數滴注入して置けば四五日間は保つ。在來品と異り發火完全で永久使用に耐え得るのです。壹圓二拾錢（送料十二錢）發火石は別に五個一組拾五錢送料二錢。

旅行、移轉、保存に 便利な蒲團袋



夜具は旅行や移轉の際の運搬には勿論、保存にも大變厄介なものですが、この蒲團袋を用ひれば、その取扱ひは非常に樂であります。一枚以上五六枚まで一入で手輕に完全に包め、バンドで締めれば別に紐等を用ひずとも運搬至極便利で又何處へ放り出しても安心、厚地上等ズック製故完全に保護せられます。上製九圓五十錢、特製十一圓（特製は防水裝置につき）送料内地四十錢、領土六十錢）。

寢ながら讀書の出來るブックスタンド



雜誌、書籍はその大小に拘らず總てこれに用ひられ、横向きでも仰向きになつても、寢ながら樂々と書見が出來ます。角度の加減、回轉高低自由病人は勿論、身體の疲勞した場合には大層重寶であります。

◆一臺で六種に使用出來る◆寢讀二通り◆音樂演奏殊に尺八琴等の譜面臺となる◆卓上書見臺◆筆記用に便利◆書架となる◆氷のう吊

上製　三圓五拾錢
並製　三圓
三種用　二圓五拾錢
（送料内地三十錢臺樺滿鮮七十五錢）

埃よけ、虫よけ、濕氣よけ
新案特許 洋服保存器（簡便な洋服簞笥代用品）



强く丈夫な紙で圖の樣に作られてあります。内部へ洋服を吊り下げ、口を閉ぢれば外氣を完全に遮斷しますから絕對に蟲食ひなどの生ずることなく黴にもならず完全に保存することが出來得る重寶なものです。上製は入念の吊金具付き並製は中に木製洋服かけを添付

背廣用　上一圓八十錢　並一圓五十錢
外套用　上二圓七十錢　並二圓
（送料内地廿五錢領土六十錢）

我が國特有の面白い程よく捕れる 捕鳥用カスミ網

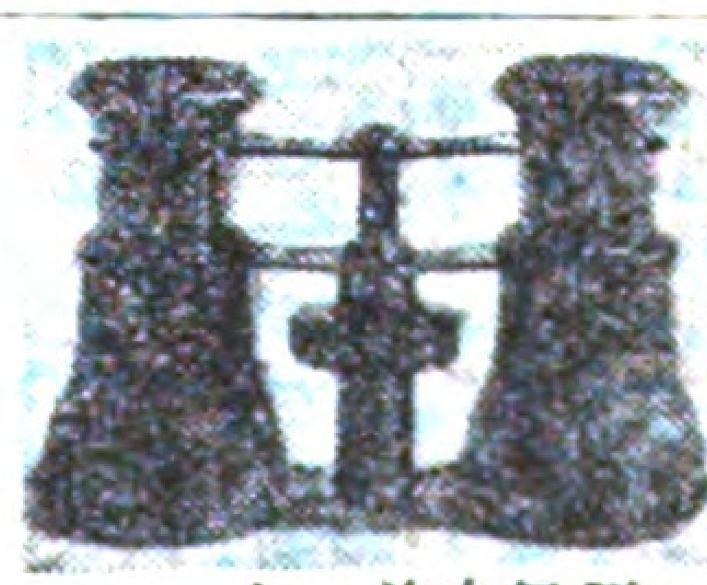


圖の樣に張つて置くだけで雀アヲジノジコ目白その他同類の小鳥が面白い程よく捕れる我が國特有の捕鳥具です。細い絹糸製でありますから取扱ひは極めて簡單鐵砲などの樣に面倒がないから都市の庭園内でも自由に使用する事が出來ますし疊めば六間網でもポケットに入れられるから便利です慶期も眞近ですからお早く御試し下さい。

長さ三間　五圓
長さ七間　九圓
送料内地十五錢　海外五拾錢

大日本雄辯會代理部
東京市本鄕區駒込坂下町
振替口座東京六六二九

優良 双眼鏡



レンズ優秀にして鮮明、十數圓の高級品にも劣らぬ能力があります。

並製（學生用）一圓八十錢
上製（實用品）四圓五十錢
送料内地二十錢　領土五十錢



神經衰弱　病弱老衰　不感症……
生殖不能等を根本的に治療する……
新若返り藥『精壯』の權威と効驗

東京漢藥研究會長　織田華光

若返り法秘訣記

人間にしても他の動物にあつても、身體發育維持のために、實に必要缺くべからざる要素に、ホルモン内分泌と云ふものがあります。之は體内樞要の部分男子の睾丸、女子の卵巢、男女兩性とも腦下垂體、松果腺、甲狀腺、胸腺、副腎、膵臓、胃粘腺、腎臓、脾臓、頸腺・子宮等と共にあるそれ〴〵のホルモン腺と云ふ腺から絶えず産出する内分泌液で、その作用は精神、肉體兩方面の發達を促し、消極的には體内の有害物を破壞し、積極的には身神の生育保健につくすもので、若しいづれかのホルモンが、僅かでも調和を亂したり、過不足を來したならばそれが即ち疾病を起す根源、原因となると申します。就中神經衰弱、生殖不能、老衰、記憶力減退とステリー等の眞の原因は、實に男女生殖ホルモン腺即ち睾丸、卵巢等のホルモン産出不完全や濫費消耗のためであります。

精壯の神秘的作用

されば今日迄困難とされた神經衰弱、生殖器障害、ヒステリーの如き難症も亦絶對不可能とされし老衰者を若返らす事も、生殖ホルモン腺の機能を旺盛にすれば譯なく解決出來ると申します。

此の學説が英國のスターリング氏に依つて發表されるや、世界の學者は爭つて此のホルモンの機能を盛にする藥劑の研究に着手し永らく研究されつゝあつたのでしたが、嬉しい事には昨年新發見された『精壯』は此の學説にことごとく一致する世界唯一の特効藥で、服用後直ちに體内各種のホルモン腺に作用しその榮養となり、それ等の機能を活潑にし内分泌を盛大ならしむるもので、『精壯』が如何なる偉力を有するか又如何なる人々に愛用されるかは已に本誌上にもしば〳〵發表した通りで「精壯は實に百藥の王だ」とまで各方面の方より誌上の稱讃を賜つて居る位で、その驚くべき効驗は自然に然も愉氣持よく、人體内に神秘に宿つて居る吾人の春身の淸き泉たる各種ホルモンの刺戟覺醒をば圓滿完全に絶えず湧きたゝしむるに偉効ある新高貴藥で之を服用する事に依り淸き美しき血液は不斷に高鳴り、幸福な人生が展開し心身共に立派な男子でありまた優しい女子で然も思ひ切つて働け愉快に暮せ豐かなる性の幸福を與へられ、容貌にも活氣を帶びて頭腦がよくなり血行が整つて皺襞もよらず一生をば常に青春の光の中に生きる事が出來得るのであります。

左樣な譯で不肖華光はこの光榮を深謝すると同時に更に一大確信の本に不幸な方を御救ひしたいと存じて居る次第であります。

斯界の權威　醫學博士　山田源喜先生發見

肋膜炎塗擦療法

塗布するだけで疼痛も漿液も目に見えて消散するプロゲノール

●油斷ならぬ病氣●

昔から肋膜炎は肺病の初期だとも云はれ、誠に油斷のならぬ難治の病とされて居ります。事實、一旦これに冒されると輕症だとても中々恢復が難しく又幸ひに一度は治癒した樣であつても再三再四、發病の憂目を見ることがあるのでこれは到底本腹の叶はぬ、不治の難病だなどと、懊惱、憂苦、悲嘆に暮れるは早計であります。

新發見の塗擦藥プロゲノール

然し、もう御安心下さい。病苦になやまされ憂ひに沈んで居られる、かうした方々の爲に斯界の權威者醫學博士山田源喜先生が獨逸伯林大學に於て研究發表せられ、殆ど百發百中の實績を擧げ、今や世界第一の肋膜炎療法であると嘆賞されてゐる「プロゲノール」をお知らせいたします。此の塗擦藥によれば肋膜炎は誠に治癒の容易なものであるといふことが出來るのでこの療法の見出されたことは世の肋膜炎患者にとつて天來の福音であり又これを知つた病者は既に全快への第一歩へ踏み出したも同樣でありませう。

●胸痛も漿液も目に見えて消散

此の塗擦藥プロゲノールによる療法は極めて簡單、只朝夕二回患側胸部に塗擦して置くだけで宜しいのです。これを用ひた人が一樣に驚かれるのは胸部の疼痛が非常に早く無くなる事です。

一度用ひれば分りますが、何しろ皮膚の浸透力が非常に早い藥故一度塗れば次回にはもうスッカリ乾いて藥氣がなくなつてゐる程です。從つて奏效は非常に迅速而も患部に直接效くのですから、目に見えて痛みは除かれ炎症がなくなると同時に、漸次咳嗽は止まり、熱が下降し、漿液はなくなるといふ有樣で、メキメキと良くなるのです。現に口も利けない程激痛のしたものが、これを塗擦した處間もなく拭ふやうに樂になつたといふ實例もある位で如何に著しい效果のものであるかゞ想像せられようと存じます。

プロゲノールとは、羅甸語で「肋膜炎必治」といふ意味ださうですが、その名に反かぬ偉效のあることは、生きた幾多の實例と、多數專門家の禮讃とによつて說明されて居ります。

●醫學士橋本了氏曰く

「山田博士の「プロゲノール」を多數の患者に試みて著しき效あるを認めた。殊に患者の主訴である胸痛を緩解せしめる作用の大なるに一驚を喫した程である。何等副作用を認めず治癒上好結果を收め得たことを深く喜ぶものである。世の多くの肋膜炎患者のために汎く本療法の行き渡らんことを切望す」と言はれ、

又植木秦二醫學士は『本劑は從來實驗せる如何なる藥劑よりも遙かに優れたるを確信す』と同樣嘆稱されて居ります。醫者にかゝつてゐる人も空氣療法を取つてゐる人も藥も療法もないと早合點して神佛の力に縋らんとしてゐる人も、重病の人も、現に僞肋膜炎に異常を感ずる人は早速「プロゲノール」をお試み下さい。必ず喜ぶべき好果あることを確信して切にお勸め致します。

塗擦藥「プロゲノール」は八日分三圓五十錢、十七日分六圓五十錢、五週間分十二圓、送料內地十五錢、領土五十錢。東京市本鄕區駒込坂下町四八大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）にて御取次して居ります。

見よ！驚くべきこの治驗を!!

效力注射以上と定評ある………

喘息エキス

◇◇……醫術の發達した現代に獨り惠れなかつた喘息患者にも洋々たる春の日は訪れた

五年十年と惱んだ慢性痼疾も夢の樣にケロリと鎭り發作前兆ある時用ふれば奇妙に豫防出來る

◇實驗者悉く驚嘆！感謝！

百餘本の注射も今は夢

千葉縣の渡邊某氏は書を寄せて、大正十三年中にアドリナリン注射をすること七十四本、十四年中に同四十本、十五年中に同百五本を要せしものが、同年十一月本劑を用ひ始めて以來、今日では全快した旨の御通知がありました。又始終臥して寢るを得なかつた、愛知縣小坂井町市川某氏はわざ〳〵來社されて本劑によつて今や全く喘息の征伏が出來たと證を述べられました。

且ては死を覺悟した

茨城縣片根某氏は從來如何なる方法も奏效せず、絶望の餘り、本劑を試みる最後のものとし、もしそれで效果のない時には死を覺悟せる旨深刻な書に接しましたが、幸ひに本社の[illegible]藥が效を奏し、今では酒を呑んでも發病せず全快同樣との感謝狀に接しました。

三十年來の喘息を全く征伏

廣島市安芸某氏は三十餘年間の慢性喘息で廣島市中の殆ど名醫、及び各大學醫科等で治

療を受けたが殆ど終熄せず閉口してをりました所本劑により昨冬より全然發作を見ないとの御手紙を頂きました。

其他最近頂きましただけでも、岡山・近藤氏、石川・吉林氏、山形・圓應寺殿、鹿兒島・長崎氏、群馬・長學寺殿、茨城・高野氏、神戸・關氏、茨城・日本少年指導會分院殿、門司・沖田氏、東京・曾根氏、北海道・石井氏、宮崎・和田氏、同・森山氏、兵庫・小野氏、等見て茲に掲げる暇もない位であります。

◇喘息エキスの異常の成績

右に掲げましたのは實にその一端に過ぎぬものでありまして、最近（本年八月中）本劑製造元に寄せられた愛用者からの御報告は、次の如く異常の好成績を擧げてをります。

報告者總數百三十一名中

▽喘息エキスにより著しき輕快者……二四
▽使用以來發作せずと云ふ者……一五
▽全治と報告ありし者……七
▽相當効果あり愛用すといふ者……七八
▽不變著しくは無効といふ者……七

合計百三十一人でありますが、喘息エキス數萬の愛用者を思へば更に〳〵、どれだけの全快者輕快者を出してゐるか分りませぬ。

喘息エキスの効く理由

前記のやうな好成績は、從來の喘息藥に徴すれば實に異數と云はねばなりませぬ。これは本劑が最も喘息の病理に適合してゐる實證に他なりませぬ。

由來喘息（氣管支喘息）は氣管支筋に於ける發作性の痙攣でありまして、素人が考へてゐるやうに決して痰咳の病ではないのであります。故に舊式の所謂たんせき喘息の藥の類では、いくら藥を浴びる程服んでも激烈な發作を鎮靜せしめる效力はないのであります。然るにこのエキスは直接喘息の本體たる氣管支筋の痙攣を鎮靜消失せしむる意味の高貴の新製劑でありますから、猛烈な發作が起つて息苦しくなつた場合この喘息エキスを一匙か二匙服みますと不思議や大抵は大風が凪いだ樣にケロリと治り、又發作の前兆ある時に服用すれば奇妙にその苦しみを避けて了ひます。

その效果は實に覿面服用後直に頓挫的に現れ同時に喘息の原因である處の氣管支痙攣に直接作用して之を鎮靜せしめますから所謂根本的治療を促進させる事になります。

喘息治療の秘訣

要するに喘息根治の秘訣は輕い中に治療することであつて少しでも發作の氣味があつたら一刻も早く猶豫せずこの喘息エキスを御用ひになり發作を押へ〳〵して行く内に何時か忘れる樣になり根治させることが出來ます。

『喘息エキス』三十回分貳圓五拾錢　六十回分四圓八拾錢　百回分七圓送料内地拾五錢領土五拾錢　東京市本郷區駒込坂下町四八講談社代理部（振替東京、六六二九番）で發賣。

満天下の愛讀者諸君へ

◇機は愈よ熟しました。キングの一大壯擧として各方面から異常の期待を受けてゐる臨時增刊は、日本出版界空前の大部數を以て近く發行されんとして居ます。

◇此の增刊こそは、御大典を記念するに最も相應はしき壯擧なる事業と信じ、世の爲め人の爲め萬代に傳ふべき金鑑たらしめんとして、内容には溢るゝばかりの精選した記事を盛り、一字一句の末に至る迄心血を打込んだものであります。

◇編輯全員の活動は實に涙ぐましきものがあります。不眠不休、晝夜の別なく東奔西走の奮闘に寝を得る者續出しましたが何れも『吾れ若し斃れなば吾が屍を越えて進め!』と悲壯の意氣を示し、あらゆる努力と犧牲の結晶になつたものが此の增刊であります。

◇しかも定價は僅か三十錢。一錢の利益はおろか、莫大の損失を覺悟しての大犧牲出版です。それもこれも皆天下のため、キングにして始めて出來得る事であるを思へばそゞろ欣快に堪へません。

◇更に編輯局では十二月號、新年號に夫々素晴らしい計畫を立てゝ活動中です。滿天下の諸君！何卒キングの微衷を御汲取りの上更に一層御聲援を熱願懇願いたします。

定價表（不月號）

冊數	國內及滿洲、支那	送料	外國（送料とも）
一冊	金五拾錢	參錢	金六拾八錢
四冊	金貳圓	不要	金貳圓六拾錢
八冊	金參圓九拾貳錢	不要	金五圓拾貳錢
十二冊	金五圓七拾六錢	不要	金七圓五拾六錢

特大號の場合は右定價の外で、其差額は右表の外に申受けます。但し前金にて數ヶ月分御拂込の分はその御預りの中より差引計算いたしますから、其都度御送金下さるには及びません。

謹告

○弊社の圖書雜誌の御註文は總て前金の事○振替貯金にて御送金は口座受手數料金壹錢御同送の事○郵券代用は必ず一割增の事○雜誌代前金相切れ候節は最終の雜誌帶付に「前金切」の印を捺し次の前金領收まで發送停止○前金は本誌到達を以て領收の事と御承知の事○外國行郵税は一冊拾八錢申受候○御注文書狀宛名は「大日本雄辯會講談社營業部」の事○○郵税不足又は未納の郵便物は受取不申候○弊社發行各雜誌廣告料は御照會次第詳細に御報知可申上候

昭和三年十一月三日印刷納本
昭和三年十一月一日發行（第四卷第十一號）

編輯人
發行人 長谷川卓郎
印刷人 高木島三
東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二
印刷所 株式會社秀英舍

發行所 東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇番
電話小石川（二二五・二二六・二二一七）（七〇八八・三五九六・五九八一）（二六〇一・五一一・（長）一五二〇）

元取次店 東京堂・東海堂・北隆館・大東館

Published monthly by the Dainippon Yubenkai Kodansha, Hongo, Tokyo, Japan.
Entered as second class matter at the P.O. at Los Angeles, Cal., U.S.A.